

帝都の鬼姉妹。 ふおつくすらいふ！外伝

百合道いおりん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

剣術を伝承する一家「鹿角家」に生まれた双子の姉妹、鹿角鈴音と鹿角花鈴。

幼きある日、妹の花鈴が鹿角家を継ぐことに決まって以来、姉の鈴音はただ妹のために道具となることを強いられながら生きてきた。

だがある日、突如として不穏な気配が鹿角家に近寄る――。

不自然に歪められた姉妹の日常が崩壊するとき、すべての常識は破壊され、人ならざる者たちとの闘いが始まる。

空野流星先生ことv t u b e r 橘瑠璃先生の原作「ふおつくすらいふ」の世界観から勝手に紡がせていただいた二次創作小説。

帝都の鬼姉妹。はじまります！

# 目次

人物紹介	1
1話 鹿角鈴音	6
2話 二人の日常	14
3話 崩壊	22
4話 抗いの果てに	31
5話 鹿角姉妹	36
6話 餓鬼	46
7話 八咫烏	55
8話 変人集団	63
9話 初仕事	72
10話 信頼	81
11話 カマキリと剣狂者	86
12話 糸引き	93
13話 異臭	98
14話 元凶	106
15話 不覚	115
16話 妖	126
17話 終わり始まり	133
幕間劇 誇り高き拳。	142
18話 平和な危機の訪れ	178
19話 ニューフェイスと新たな事件の香り	188
20話 絆の萌芽	199
21話 奇跡	210
幕間劇2 激闘 八咫総合事務所vsバーチャル夢魔。	229

4 4 話	悲劇	582
4 3 話	演劇	567
4 2 話	追走	559
4 1 話	巫女	544
4 0 話	便利屋	523
3 9 話	自由	510
3 8 話	過去と今。	495
3 7 話	人斬り	486
3 6 話	猛獣注意	476
3 5 話	裏仕事	467
3 4 話	昔話	456
3 3 話	文化祭、そして再会	443
3 2 話	蜘蛛	429
3 1 話	鹿角の大太刀	419
3 0 話	一時の平和	395
2 9 話	交錯	378
2 8 話	因縁	367
2 7 話	狂骨	339
2 6 話	少女と過去と海坊主	319
2 5 話	休暇	294
2 4 話	終結と黒幕	281
2 3 話	小さな不穏、新たな事件	264
2 2 話	鹿角家	250

## 人物紹介

1話からの登場人物

鹿角鈴音

本作の主人公。

女性 16歳 身長168cm 体重67kg Cカップ

肩くらいに伸ばした黒髪を小さくまとめている。瞳は焦げ茶色。

高校二年生。

古流剣術『鹿角流』を伝承する一家に生まれた双子の姉。

才能に溢れた妹が後継者に選ばれたことにより親から蔑ろにされているがそれが元で妹を恨むようなことはせず、むしろ陰から見守っている。

物静かだが強さに関する執着心は人一倍強く、才能の無さを練習量で補うべく日々過酷な鍛錬を行っている。

たとえどんな存在が相手でも一歩も退かずに立ち向かう強靱な精神力を持つ一方、それ故か命がけの戦いを楽しんでもしまう戦闘狂じみた一面がある。

趣味は鍛錬。

鹿角花鈴

主人公鈴音の双子の妹。

女性 16歳 身長166cm 体重57kg Dカップ

明るめの黒髪ショートヘア。瞳は赤みがかかった焦げ茶色。

高校二年生。

古流剣術『鹿角流』の継承者であり親から大切に育てられてきたが、内心では姉の鈴音を蔑ろにする親を嘲っており、いつか家を出て鈴音と共に暮らそうと決めている。

天性の才能を持ち、剣術にとどまらずあらゆる物事をそつなくこなす天才。

それ故か表向きは優等生らしく振舞っているが、内面は傲慢かつ自己中心的な性格であり周囲を小馬鹿にしている。

趣味はメイド喫茶でくつろぐこと。

## 8話以降の登場人物

八咫総合事務所メンバー。

### 狂骨

妖怪退治を行う組織である八咫鳥の一員。

性別不明 身長180cm 体重70kg

灰色がかつた長い白髪を一つに纏めている。瞳はライトイエロー。本来は実体を持たない妖怪であり、今の肉体は八咫鳥の化学班によって造られた人工的なものに憑依する形で手にしている。

周囲に気の利く優しい性格をした、チーム『八咫総合事務所』のリーダー。

しかし同時に天然気味でおおざっぱな性格をしており、戦闘の際には真剣にチームの指揮をとるが普段の生活は適当そのもの。

戦闘では主に対妖怪兵器である銃器『霊銃』を使用。

趣味は飲酒、お酒をこよなく愛し、事務所にいる際は大体酒を飲んでいるほど。

### 化け猫

八咫鳥の一員。

女性 身長148cm 体重45kg Fカップ

虎毛のショートボブ。瞳の色は群青色。

その名の通り猫が化けた妖怪であり、その頭には猫耳が生えている。

気が強く喧嘩っばやいが情に篤く、困った人間は放っておけない姉御肌な性格。

しかし面倒ごとは嫌いで自由気ままに行動する猫らしいマイペースな面を持ち合わせており、あらゆる娯楽が大好き。

花鈴とはことあるごとに喧嘩をしているが、マイペースな面で気が合うのかよく二人でテレビゲームをして遊んでおり関係は良好。

戦闘では対妖怪兵器である剣『大通し』を使用。

趣味はテレビゲームで、中でも『式神伝』に熱中している。

ヘビースモーカーで彼女が徹夜でゲームをすると灰皿に小さな山ができる。

#### 蠅螂坂

八咫鳥の一員。

女性 身長176cm 体重62kg Eカップ

長い黒髪をポニーテールに纏めている。瞳は虫の様な複眼になっており、深緑色。

かまいたちの仲間であり、八咫鳥によって保護された妖怪。

非常に寡黙な性格をしており常に無表情。

妖怪である名残の瞳の複眼は普段はサングラスで隠されており、そのせいで一層表情が読みにくいのが、表情に出すのが苦手なだけで感情自体は喜怒哀楽のはっきりした純朴な性格をしており、心優しい。

戦闘は妖力を用いた徒手空拳で行い、カマキリの動きを模した拳法を使用する。

趣味は料理で、暇があれば料理の仕込みや調理をしている。

自分の料理をたくさん食べてくれる鈴音のことを気に入っており、毎朝たっぷりの朝食と大量のお弁当を作っている。

※ここから先、ネタバレを含む19話以降の人物紹介あり

## 19話以降の人物紹介

黒崎ユリカ

更生活動として八咫総合事務所で仕事を行う新メンバー。

女性 23歳 身長152cm 体重47kg Gカップ

赤みがかつた長い癖ツ毛。瞳の色は小豆色。

生まれながらに妖怪や幽霊を視ることができると特殊な体質の持ち主であり、そのせいで友達ができないどころかいじめを受けたうえ、家族から見放された過去がある。

後にいじめが間接的な原因となって命を落としてしまうが、直後に



妖怪として覚醒し蘇った。

妖怪になつてからは死者の怨念を感じ取り、媒体になるような死者と関連する物を用意すれば疑似的に死者を蘇らせることができる特殊な力を手にする。

友人がいなかったせいかコミュニケーションが苦手な会話下手。

口が悪く、愛想も悪い。

ただ彼女なりに変わりたいという思いはあるらしく、八咫総合事務所の面々ともできれば仲良くしたいと思っている。

主に書類整理や事務仕事を一手に引き受けており、その仕事は八咫鳥の本部でも良い出来だと評価されている。

喫煙者であり、仕事のお供に煙草が欠かせない。

# 1話 鹿角鈴音

帝京歴784年。

ガイア2大都市の一つ、帝都。

多くの若者は、この地を目指す。時代の最先端、あらゆる技術、娯楽が集う場所。

これは帝都で巻き起こったある姉妹の物語。

帝都、秋奈町。

近代都市であるその町中にある小さな体育施設、十数人も人が入ってしまえば手狭になるその場所で

少女が二人、互いに向き合っていた。

その手には木刀が持たれ、その身には武道——いや、古流武術の稽古に使用される袴を着用している。

一人の少女はその木刀を天に立てるように上に向け、右の脇を締め、右の頬の辺りに柄がくるように構えている。

俗に八相と呼ばれる構えである。

八相構えに相對する少女は相手に切っ先を向け、真つすぐに刀を向ける構え。

剣道の基本的な構えでもある正眼であった。

八相の少女がゆっくりと、まるでガラスについた微かな水滴が、静かに表面を垂れていくようにじわりと距離を詰める。

正眼の少女は動かない。

まるで作り物のように静止したまま、動かない。

呼吸音すら聞こえない。

肺が動いてるようにすら感じられない。

八相の少女が間合いを詰める。

正眼の少女は不動で迎える。

恐ろしいまでの静かな空間であった。

もはや心臓の鼓動すら聞こえてくるのではないかとさえ思わせる静寂である。

そのやりとりが数分続いた。

もう足の爪半分動けば互いの間合いに入るところまで八相の少女が距離を詰める。

それでも正眼の少女は動かない。

そしてついに間合いに入る——八相の少女が足を浮かせ、木刀を振り下ろさんと動く。

その刹那、正眼に構えられた木刀の切っ先が微かに逸れた。

ほんの、ほんの微かな動きだった。

その動きで八相の少女の動きが止まった。

瞬きの出来事だった。

見ている者の目には感じられないほどの、相對した者同士にしかわからない機微。

その一瞬の機に正眼の少女が動いた。

まるで水面を滑るアメンボのように音もなく、距離を詰める。

八相の少女が木刀を合わせるように振り下ろすが、遅い。

正眼の少女の木刀が八相の少女の手首を捕えていた。

振り下ろされる手首に当たる寸前でぴたりと木刀が止まる。

遅い、といつてもはたから見れば二人が同時に動いたようにしか見えないほど微かだ。

しかしその微かな差が生と死を分ける。

ゆっくりと二人が離れた。

互いに床を滑るように距離をとり、構えなおす。

そしてまたしても同じように木刀を交差させた。

あらゆる構え、あらゆる角度から、延々と繰り返す。

そう、これは所謂型稽古と呼ばれるものである。

型の通りに動き、なぞるのみの稽古。

だがこの二人の型稽古はものによつては形骸化しつつある型稽古とは違う趣があった。

緊張感が並みのそれではない。

受太刀——一本とられる側の役割を担っている、先ほど八相に構えていた少女が本気で一本を狙っているのだ。

型の通りに動くがそれはそれとして流れのままに一本取らせようと  
する気はない。

その稽古をたっぷり1時間ほど二人でこなす。

互いの額には大きく汗がにじんでいた。

そうしたところで互いに木刀を下げ、床に座して右脇に木刀を置き  
ゆっくりと礼を行う。

ゆっくりと互いに頭を上げ、向き合った。

その少女二人の顔は同じ顔をしていた。

双子である。

しかし顔の造りは似ながらも纏う雰囲気は全くの別物であった。

「ありがとうございます」

先ほどまで受太刀を務めていた少女が言う。

肩程度まで伸びた黒髪を小さく後ろにまとめ、前髪を目元のあたり  
で切りそろえている。

そのせいで目元が見えづらく、さらに目の下には隈が浮かんでお  
り、陰鬱な雰囲気纏っている。

顔立ち自体は整っており、美人といってよいはずだが纏った雰囲気  
がそれを台無しにしている。

「相変わらずだな、鈴音<sup>すずね</sup>」

向かい合った少女が言う。

その言葉に陰鬱な少女——鈴音は小さく頭を下げる。

「面目ないです、花鈴<sup>かりん</sup>さん。」

「そう思うならもう少しまともに振れるようになんよ。」

ぶつきらばうに鈴音に向かって言う少女——花鈴には陰鬱な雰  
気と対照的な、明朗な雰囲気があった。

髪は短髪にさっぱりとまとめられており、いかにもスポーツ少女とい  
つたような風体である。

中性的な美人であった。

短い二人のやりとりであったが、姉妹…それも双子にしては異質な  
やりとりである。

明確な上下関係を感じるやりとりであった。

ゆつくりと二人が立ち上がる。

同時にガラリと借りている体育施設の扉が開け放たれた。

「花鈴！待たせたな！」

「父さん！」

坊主頭にスーツ姿の、体格の良い中年男性が勢いよく花鈴に声をかけた。

朗らかな笑いと共に花鈴の姿を見ると大きく頷く。

「今日も手は抜いていないようだな、関心関心！」

「父さんに追いつかなきゃいけないからね、頑張るよ！」

「言うじゃないか！こいつ！」

豪快に笑いながらくしゃくしゃと花鈴の頭をなでる。

くすぐったそうに笑いながら花鈴がそれを受けた。

「どうだ！飯でも食いに行くか？」

「だめだってー、母さんがごはん作って待つてるじゃん。」

「おー、そうだったな、じゃあおとなしく帰るか！母さんに叱られたらたまらん。」

そう言つて父親は花鈴に外に出るように促す。

その後方で、鈴音は一人、立っていた。

無言のまま二人を見送り、父が扉を閉めるまで不動のままだった。

その姿に、花鈴が一瞬目線を向ける。

ほんの少しその唇が歪んだ気がした。

鈴音は誰もいなくなった借り物の施設を掃除し、荷物をまとめて走って自宅まで帰る。

帰るまでの途中にある公園で筋力トレーニングを行う。

片足スクワット、ブランコを使った腹筋トレーニング、鉄棒の懸垂、荷物を重し代わりにしたブリッジ。

最低限これだけを行う。

身体を追い込んでから自宅までまた走り出す。

自宅に帰るころには真夜中である。

汗を流し、冷蔵庫に残された一人分の料理を温めて食い、皿を洗う。家族と食事をとる機会は滅多にない。

最後に自分用にあてがわれた小さな部屋で翌日の準備をした後、眠る。

それが鈴音の日常であった。

花鈴はとつくの前に自宅に帰り、家族と夕飯を食べて床に就いていた。

鈴音と花鈴は双子の姉妹である。

ここまで両者の間に扱いに差があるのはただ一つ、花鈴の剣の才がより優れていたから。

それだけである。

この家はそういう家であった。

まだ空が薄暗い時間、鈴音は目を覚ます。

さつさと制服——通っている高校のセーラー服にそでを通し、昨夜のうちに準備しておいたバッグを手にとる。

朝食は買い置きされていたバナナと牛乳を適当に流し込み、昼食用に昨日の夕食の残りをつつんだ大判のおにぎりを作ってラップに包み、バッグの中に放り込む。

そうしている間に花鈴が起きた気配を感じる時間になる、それを感じ取ると鈴音はさつさと家を出た。

花鈴とは同じ高校に通っているのだが一緒に登校はしなかった。

家を出るときにふと表札を見る。

鹿角、とそこには刻まれていた。

はるか昔、ご先祖が妖怪だか鬼だかを斬った時にいただいた名前だとか父が話していた古い記憶をふと鈴音は思い出した。

そんな古い言伝が伝わっている程度には一応歴史ある家だ。

最もそんな馬鹿らしい話の影響で冷や飯を食わされている身としては眉の一つもひそめたくなるものなのだが。

鹿角家は代々古流の剣術を継承してきた一族である。  
流派名は単純にして明快、鹿角流。

800年近く前の帝京戦争が起こった頃には既に存在しており、時代と共に変容しながら時に断絶の危機に陥りつつも現代まで継承され続けられてきた流派だ。

話に聞く京都ならいざ知らず、この帝都にてこんな技術を伝承する意味があるのか分からないし、断絶の危機があったのも頷ける。

昔は門弟がいたとか時には優秀な門弟が養子として後継に選ばれたという話もあったらしいが、今鹿角流を継承しているのは父と娘二人のみである。

哀れなほどに衰退の一途をたどっていた。

それでも仕来りとして伝承されるだけなら良いが、そのやり方も常識を逸していた。

幼いある日、鈴音は花鈴と二人呼び出され、父から淡々とうこう告げられた。

『今日、花鈴を鹿角家の継承者とすることに決めた。』

花鈴の剣術の才は鈴音に比べてずば抜けていた。

型を一度通せば身体に馴染ませ、初めて木刀を握ったその日に腕ではなく身体で振ることを覚えた。

鈴音にはそんな才はない。

型を覚えるのは長い時間を要し、木刀は力任せに振ることしかできなかった。

せいぜい長じていたことは生まれた時間が僅かに早かったことで姉になったことくらいであろうか。

花鈴が鹿角家を継ぐことが決まって以来、鈴音は徹底的に花鈴を後継者に相応しき存在にするための道具になった。

あらゆることを花鈴のために行った。

父が考案した稽古法の効果があるのか、体に負担はないか、花鈴が稽古を行う前にまず鈴音が実験台になる。

時には他流の技術を盗むために道場に放り込まれ、短い時間でそれなりの技術を身につけてくるよう言われたこともあった。

が、一番辛かったのはひたすらに妹に——花鈴に竹刀で打ち据えられた時であった。

建前としては模擬試合ということだったが、鈴音と花鈴では実力に天と地ほどの差があった。

そんな二人を向かい合わせたらどうなるかは火を見るよりも明らかである。

理由はわかる。

どうやら人というものは本能的に相手を傷つけることに嫌悪感を感ずるらしかった。

その嫌悪感を取っ払うにはどうするか。

慣れることである。

兵士が人に見立てた形の標的を撃つことで、徐々に人型のものを撃つことへの嫌悪を捨てていくように。

父は花鈴にそうしむけた。

吐き気すら感じさせる所業だ。

この時代に、こんな技術はもう必要ない。

必要ないのだ。

自らを振り返るようにそう思いながら鈴音は学校への道を歩く。

その時であった。

「!？」

何か殺気のような：不穏な何かを感じとり、周囲を見渡す。

殺気というと幻想的なものと捉えられるかもしれないが、殺気とい

うものは間違いなく存在する。

少なくとも鈴音はそう思っていた。

人というのは攻撃的な意思を見せるときに身体が変化を見せる。

それは明確に感じ取れるものではない、直感的に感じられるあいまいなものだが、外観以外にも体臭など目に見えない何かの間違いなく変化する。

それを鈴音は感じ取ったのだ。

今までもこういった経験はある。

一度叩きのめした不良が数日後に不意打ちを仕掛けてこようとし



たとき同じように不穏な気を感じた。

「誰だ？」

犬のように鼻をひくつかせながら周囲を見渡し、呟く。

しかしその時にはもう不穏な気配はしなかった。

「逃げたか…」

残念そうに小さく息を吐いて、鈴音は再度歩みを進める。

常に周囲を警戒することを忘れずに。

「気づくか…さすがはあの鈴鹿御前を討ったという鹿角の後継だ…」

少女を眺め、一人の男がどこか楽し気に呟く。

男は黒いフード付きのコートを身にまとい、目元が隠れるほど深くフードを被っていた。

かなり大柄な男である。

背も常人に比べて頭一つ高いがそれ以上に体の厚みが普通ではない。

常人が着れば大きくゆとりがあるはずのコートの肩口がはちきれんばかりに膨らんでおり、肩回りの筋肉の凹凸が服越しにでも判別できる。

その手には俗にダルマと呼ばれるウイスキーの酒瓶が握られていた。

丸く膨らんだ形をしているダルマの瓶を男の大きな手は驚掴みにしていた。

「酒呑殿、そちらに逝く前にせめてもの手向け…楽しき祭りになればよいが…」

瓶の蓋を開け、ちびりとウイスキーを喉に流し込み、ぎゅつと顔をすぼめる。

「美味しい。」

小さく酒瓶を空に掲げ、男はにっこりと笑った。

## 2話 二人の日常

鈴音はまだ一部の教員や守衛しか姿がないくらいの時間に学校に到着し、ちよつとした用事を済ませてから自分のクラスである2年の教室に向かう。

用事が済むころには大体始業が始まる前くらいになっていた。

ガラッと教室のドアを開けて鈴音が入ると、一瞬室内の空気がピンと張り詰める。

鈴音はクラスで恐がられていた。

寡黙な性格、陰鬱な雰囲気、不気味な空気。

それだけなら怖がられるというよりいじめられるかもしれないが、問題は鈴音の体格にある。

身長は160後半と女性にしては長身な部類に入り、更に日々の鍛錬によって鍛え上げられた身体は並の運動部員のそれではなかった。ごつごつと筋肉が盛り上がっているわけではないが、体が分厚いのである。

太いというより厚い、そんな身体であった。

席に座って数分もすると担任が来て始業が始まり、そのまま授業に入る。

適当にノートを取りながらいつも通りの授業を受け、昼休みに入った。

本来ならささっと昼食を食べ図書室でくつろぐのが日常だが、今日は少し別の用事がある。

バッグの中から朝に作ったおにぎりを掴み、教室を出てある場所に向かう。

その時だった。

「あ、鈴音…」

ぼつたりと隣のクラスの花鈴と鉢合わせた。

花鈴は複数人の友達やら取り巻きと一緒に皆で食事に行くところらしい。

中には同級生ではなく後輩の姿も見える。

鈴音とは対照的に花鈴はみなの人気者だ。

中性的な美人であり、身体つきもモデルのようにスラっとしていてまるで宝塚の舞台俳優の様である。

花鈴に憧れを抱く存在は男女問わず多く、その人望から大多数の人間に生徒会役員に推薦されるほどである。

生徒会といっても特に学校の実権を握っているとかそういうわけではないが、花鈴なら自分たちのために何かをしてくれるだろうという信頼からであった。

そして花鈴はその信頼に答えた。

花鈴の行動によっていくつかの不自由だった校則がいくつかが改訂され、購買の商品が増えるなど生徒会の役割というものを示して見せた。

同時に学校行事では率先して生徒のまとめ役として動き、部活同士のごたごたなども花鈴の仲介によって収まったことが多く、教師陣からも非常にありがたい存在であった。

クラスで孤立している鈴音とは正反対である。

(まあ、これくらいの距離間で良い…)

内心そう思いつつ、声をかけてきた花鈴に小さく会釈して先を進む。

そんな鈴音の姿に取り巻きの人間が怪訝な目を向けた。

“なんでこんな奴が花鈴と姉妹なのだ”

と心の声が思いつきり聞こえてくるようである。

もちろん花鈴がいる手前、清廉潔白清楚博愛な彼女の前でそんな悪口を言うようなヘマを取り巻きたちはしないが、態度から丸わかりである。

ささっとその場から離れて目的の場所へと向かう。

まず校舎を出て学校のはずれにある部室棟に向かい、その裏に回った。

そこには制服を着崩し、菓子パンやスナック菓子を広げながらげらと笑っている男の集団がいた。

どんな学校にでも存在する所謂不良たちである。

人目につかないこともあって昼休みのこの場所は彼らの溜まり場になっていた。

そこに入るだけで整髪料の匂いがぷんと鼻についた。スナック菓子の油の匂いも相まって少々辟易する。

「ども…」

ぬるっと彼らに近づきそう声をかけると、彼らはびくつと身体を震わせて鈴音の方を向いた。

「うわっ、お前かよ…鹿角姉…」

「あ、相変わらず幽霊みたいに来やがるなお前は…」

怯えた声色で男たちが言う。

鈴音は彼らと少し距離を置いて地べたに胡坐をかき、おにぎりのラップを外しながら彼らに顔を向けた。

「今日の朝、嫌な気配を感じただけ…」

ぱくりと大判のおにぎりを口にはおぼりながら聞く。

行儀は悪いが彼らにはそんな気遣いはいらなだろう、むしろ変に行儀をよくするほうがこの場においては不作法というもの。

問いかけられた彼らは全員で顔を見合わせ、一斉に首を振った。

「んなことするかよ！お前に喧嘩売るなんざ二度とするか！」

一人が声を張り上げる。

てつきり朝の嫌な気配は不良どもがよからぬことを企てているのかと思ったが、この感じではそうもないらしい。

「言っとくが鹿角妹にもなんもしてねえから…」

そう付け足される。

以前この不良たちを鈴音が叩きのめしたという理由は花鈴だ。

人気者になるということはその分嫌う者もいるということ。

特に真面目でリーダーシップをとる花鈴は不良のような存在からして疎ましいことこのうえないのだろう。

少しばかり怖い目にあってもらおうかと不良たちが画策していたのだが、それが表にでる前につぶしたのが鈴音だ。

鈴音でも相手にならない不良程度、花鈴なら片手であしらえるだろうが喧嘩となれば妙な噂が出回ったり面倒なことにはなるだろう。

そうなるなら日陰者の自分がやったほうが良い。

「まあでも、お前があれか？変な感じしたってんならマジだろ？まあ他の学校のダチにも聞いといてやるよ」

そういった男は鈴音に以前叩きのめされた後、復讐に不意打ちを狙ったことがあった。

結果として後ろから掴みかかった瞬間レバーに肘鉄、腕を取って関節を軽く痛めつけられ逆に背後に回られた後に優しく締め落とされかけたのだが。

その経験があつてか鈴音の殺気が分かるという感覚が嘘ではないことを身をもつて知っているのである。

「助かる、疑って悪かった」

「謝んなよ気色わりいな…」

菓子パンを頬張りながら不良が複雑な表情を浮かべる。

普通自分を叩きのめした相手など表面上は従っていても反感を抱くものなのだが、意外にも不良たちにそんな気配は今はない。

むしろ表面上は嫌っているのに内心ではどこか憧れを抱いてしまっているような、真逆の雰囲気があった。

話を終えると、鈴音が来るまでの喧騒はどこへやら不良たちは気まぐすそうに口を閉じている。

そんな彼らを気にする様子もなく鈴音はもくもくと大判のおにぎりを頬張っていた。

食い終われば立ち去る気であつたが、そんな鈴音を見て、ふと一人が開く。

「お前すげえ量食ってんな、それ全部筋肉にでもする気かよ」

「…そうか？」

新しいおにぎりのラップを開きながら、鈴音は首をかしげる。

その脇にはまだ開かれていない掌に余るサイズのおにぎりが三つほど置かれていた。

「腹八分なんだがな」

鈴音としては後一つは余裕で食べられるのだが、他の家の者が食べる分と冷や飯ぐらいの立場を鑑みて自重していた。

真顔で少し困ったように言う鈴音のその表情に、思わず一人が吹き出してしまった。

「ぶふっ、いやお前よお笑かすんじゃないやねえよ！」

「ねーわー…マジねーわー！」

つられたように他の面々も笑い出す。

鈴音としては笑いを取る気はなかったため少々困惑してしまった。

思わぬ展開に少し戸惑いながらも鈴音はおにぎりを食べ進める。

思えば誰かと食事をとるのは久しぶりであった。

存外、悪い気はしなかった。

私はある日私を奪われた。

あの日は父のいない場所でたくさん泣いた。

泣いて一人縋れるあの子に縋った。

あの子だけだった。

私にはあの子しかもういない。

あの子は泣かなかった。

何も言わなかった。

静かに私を見つめるだけ。

助けてよ。

私を助けてよ。

なんで助けてくれないの。

なんで何も言ってくれないの？

どうしてなの。

どうすればいいの？

あの日から私は止まっただまま。

誰かいつそ全部壊してくれればいいのに。

そしたらきつと私とあの子の人生がまた始まる。

鹿角花鈴は放課後の廊下を歩いていった。

行き先は生徒会室、今日もまた面倒なくならない集まりが始まる。いい顔をして優等生ぶっているだけでいいからまあ良いのだが、せめて仕事もせずにくつつちゃべったりしないですっさと終わらせてほしい。

「こんにちはー！」

生徒会室の扉を開け、にっこりと笑顔を浮かべながら挨拶する。

私の声にみんなが振り向いて口々に挨拶をかわす、適当に返事を返しながら私は自分の席の前に座った。

そして引き出しを開け、いつも入っているモノを確認し、笑みを浮かべる。

私は引き出しから入っていたモノ：USBメモリを取り出し、備品のPCに差し込む。

あ？コーヒーか紅茶か？後輩Aが声をかけてきたがどっちでもいいわそんなん。

周囲の会話を見る限りコーヒーが多いみたいなので合わせておく。適当に営業スマイルを浮かべながら中のデータを確認する。

今日私が作るはずだった次回の集会の資料がほとんど完璧な形で作られていた。

本当に便利だよあいつは、なんなんだ本当に。

このデータも多分朝早くに登校して作ったんだろう。

適当に資料を私っぽく手直ししながら適当に会話に参加し適当に愛想をふるまいコーヒーを飲む。

そして手直しが終わったところで資料を会長に手渡し、内容が承認されたことを確認すると私は生徒会の皆に申し訳なさそくに用事があるからとさよならを告げる。

あ？なんだ後輩A？いかないでお姉さまじゃねえんだよいつからてめえは私の妹になった、てめえに私の姉妹が務まる訳ねえだろカスが、それができるのはあいつくらいだ。

「ごめんね、お詫びは明日…二人きりでランチでいいかな？」

はい必殺スマイル、これで終わり、男女問わずぶっ飛ばすこのパーフェクトフェイスにかぎればこんなもんよ。

振り向いて昇降口に向かう私の背後から後輩Aが倒れる音がするが知ったこつちやねえ。

あの馬鹿さ加減は将来悪い男か女に引つ掛かる気しかしなくてウケる。

小走りに私は学校を抜けて外に出ると時計を確認した。

毎日の稽古までまだ時間はある。

最悪あいつとの型稽古さえしときや親父の目を騙すくらい身体は練り上げられる。

そうして私が足を向けた先は――

「おかえりなさいませ、お嬢様。」

メイド喫茶。

嗚呼、ここぞ我が家、私の家。

メイドの衣装はクラシカルな、所謂ヴィクトリアンメイドで揃えられていた。

内装も厳かな雰囲気であり、テーブルや椅子もまさか本物のブランド品ではあるまいがそれなりにらしく見えるものが用意されており、自然と心を昂らせる。

椅子に座るとすかさず私のお付きのメイドが注文を取りに来た。

「コーヒーをまずもらおうかな、それと今日のおススメを。」

私がお決まりの注文をすると、静かに一礼し、メイドがキツチンへ注文を伝えに行く。

良い、これだよこれ、最高だ。

無駄なことは言わない、ただ静かに役割をこなす。

いやね、わかるよ、可愛いフレンチメイドさんの愛想たっぷりな接客も萌え萌えきゅんも良いさ。

でも私は断然こちらを推すね。

万人受けしないことはわかるよ？

今日も店内を見回すとそれほど客が入っているわけでもない、しかし所謂いつメン：いつつもいんなこいつらと言いたくなる常連がい



る。

まあ私もその一人なのだから何も言えない、ここの雰囲気はなにものにも代えがたいのだ。

将来は金を稼いだら絶対にメイドを雇おう：いや、あいつにメイドさせてもいいかもな…。

空気に浸っているうちにメイドがコーヒーを持ってくる。

コーヒーを音を立てずにそっとテーブルの上に置き、フレッシュの入ったポットを手に私の方を向く。

「ご主人様、ミルクは少しでよろしかったでしょうか？」

「ああ、いつも通りな。」

やや尊大に私が答えると、メイドがそっとフレッシュを入れて混ぜてくれる。

クリーム色に染まったコーヒーを私の目の前に置くと、静かに礼をしてテーブルから離れる。

ああああ、良き！

いやコーヒーを混ぜてもらうのが正式な作法としてどうなのかとかは知らん！

ただ私がやってほしくてやってもらっている！

私はなるべく上品にコーヒーカップを口に運び、そっと一口含む。美味い。

世界一美味い。

コーヒーの味の良し悪しは知らないが、美味い。

このまま毎日のおススメケーキを食いながらとにかくこの空気に浸るのが癒しだ。

ここではメイド以外、誰も私に干渉しない。

本を読んでも、書室で書類仕事をするがごとく宿題をしても良い。これこそが人生、愛しきマイライフ！

### 3話 崩壊

花鈴が一時の人生を謳歌している裏で、鈴音は自宅に帰り稽古の準備をしていた。

稽古着を用意し、稽古に使用する木刀や居合刀の清掃、整備など一通りの仕事をこなす。

準備を終えるころには、だいたい走って稽古場に向かえばちょうど良い時間になっている。

そして家を出る前に、鈴音は日課として行っていることが一つあった。

それは和室の仏壇脇に備えられた一振りの刀、“姫斬り”と言う名で鹿角流と共に鹿角家に遺されてきた一振りの刀に礼を行うこと。

なにやらボロボロのお札によって嚴重に封をされた箱の中に保管されており、鈴音も一体どのような形をしているのか見たことはなかった。

しかし何か、自分でも理解できない不思議な魅力を感じていた鈴音はこの刀に一日一度、必ず礼をする。

そうするとどこか心がホツとするような感情が湧き上がってくるのだ。

まるで、もう遠い記憶である母に愛されている記憶。

花鈴が後継に決まって以来、母も父と同じく私を娘ではなく道具として扱っている。

そういう女だから、父は母と結婚したのだろう。

「くそ…。」

小さくそうこぼす。

自分がそのような記憶に感傷を抱くような人間だと思いたくなかった。

だがそれでも姫斬りへの礼をやめないのは、弱さだ。

私は、強くならねばならないのに。

今日も鈴音は一人、借り物の体育施設に来た。

ここで稽古をするようになってから、鈴音より花鈴が先に来ていることはなかった。

いつも通り管理人からカギを借り、扉を開けて一人稽古を始める。礼を行い、木刀を手に、ひたすら振る。

時には早く、時には一振りに十数分かけて、時には目に見えない相手に。

そうしていると、次第に意識が希薄になる。

まるで周囲の世界が消えてしまったかのように、景色が消える。

その時の鈴音の前に見える存在はただ一人。

花鈴。

狂ったように、妹に対して刀を振るう。

二人きりになった世界でひたすら、ただひたすら刀を振るう。

その度に鈴音は斬られる。

斬られるたびに死という意識が希薄になる。

死に慣れる。

死という恐怖が遠ざかる度、鈴音の刀は花鈴に迫る。

もつと。

もつとだ。

死ね。

死んでしまえ。

死んでしまえばいい。

本当か？

「くそっ!!!」

世界が再生される。

その瞬間身体がまるでへどろの塊になった様に動かなくなり、思わず地面に崩れ落ちそうになる。

先ほどまで何も意識していなかった呼吸が一気に荒くなり、息が吸えなくなる。

無理やり肺の中の空気を吐ききり、開いた僅かなスペースに空気を思い切り吸い込む。

正常に呼吸ができるようになるまで一分以上の時間を要した。

「……。」

頭が冷える。

私は死ねない。

死ぬわけにはいかない。

死んでしまつたら、どうなる。

きつと、きつとそうなれば――

弱音を振り切るように再び木刀を振るう。

そうしているうちにようやく花鈴が稽古場にやってきた。

花鈴は無言のままて袴姿に着替え、軽く何度か木刀を振ると鈴音の前に立つ。

「いつも通りな」

「はい」

花鈴が正眼に構える。

鈴音が八相に構える。

幼少期から幾度となく繰り返された基本の型稽古を今日もまた一時間ほで行う。

今日も鈴音の花鈴の動きを超えることはなかった。

これはあくまで型稽古であり、勝敗があらかじめ決まっている動きに何をと言われるかもしれないが

仮に受太刀が逆転したとしても自分が討ち取られてしまうことを

鈴音は理解していた。

八相に構える相手の手首を斬る型をすれば、手首を斬る前に自分の首に刃が届く。

首を断つ型をすれば、その前に手首を落とされる。

刀を巻き取り手首を斬る型ならば、逆に刀を弾き飛ばされ首に刃が突き刺さる。

届かなかった。

そして父が花鈴を迎えに来て、鈴音が掃除をしてカギを返す。

走って自宅に帰るまでにある公園でトレーニングを行い、帰って汗を流して飯を食い寝る。

いつも通りの変わらない日常。

この日常がいつまで続けられるのか、ふと鈴音は走りながら思った。

続くとすれば高校を卒業するまでの1年とちよつとであろうと考える。

高校自体情けというか、周囲への体面を考えて入学させてもらえただけで、大学まで面倒を見てもらえるとは思えなかった。

思えなかった。

花鈴が高校卒業と同時に免許皆伝として家を継ぎ、大学に行きながら剣術以外に必要な鹿角家を繋いでいく知識を

父から学んでいくのだろう。

そこにもう鈴音という道具は必要ないと判断されるだろう。

適当に家を放り出され、そこからは自力でどうにかするしかないだろうなど考える。

もう一切、鹿角家と関わることはできない。

花鈴との繋がりが切れる。

(考えても仕方ない、か…)

そこまで考えて未来を空想することは止める。

そもそも明日鈴音が鹿角家にいられるということすら現実ではないのだ。

とにかく今日もやるべきことをこなす。

そう思いながら公園に入ろうとした。

その時だった――

「ぐうっ!？」

頭が割れるような頭痛が鈴音を襲った。

思わず公園の入り口からあとずさり、顔をしかめる。

まさか脳内出血かなにかか!?

嫌な予感が身体を駆け巡るが、突如として頭痛が消える。

「なんなんだ…?」

思わずそう呟く。

今まで経験したことのない痛みだった。

吐き気や倦怠感はない。

指先も正常に動く。

軽くその場で飛んでも転ぶようにはないが、嫌な予感が消えないままだ。

もしかすると本能のようなものが公園に立ち寄ることを拒んでい  
るのかだろうか。

「仕方ない。」

家にはなるべく帰りたくないが、もしかすると身体の疲労や負担が  
想像以上に溜まっていて可能性がある。

それがサインとして頭痛という形で現れたかもしれない。

そう考え、いつもと違いまだ人通りの多い帰路を鈴音は走り出  
した。

「ただいまー!」

私、鹿角花鈴は大きくそう告げながら自宅の玄関を開けた。

「おかえりなさい、今日もお疲れ様」

お袋がそう言っただけで私と親父を出迎えにくる。

ほいほい、まったくお行儀のよい奥様ですこと、親父に言われるが  
まま娘一人見捨てた女らしいじゃないですか。

朗らかな娘の演技をしつつ、私はこの女の用意した飯を三人そろっ  
て食べる。

献立は親父好みの和食中心、めんつゆなんて使っていない手作りごはん。

馬鹿らしい。

んなことに手間かけるくらいならてめえが腹を痛めてひねり出した娘のために反抗の一つでもしてみろってんだ。

そう思いながら私は飯を食う。

まあ結局親父に表面上は反抗していないという点では私も同じか。後数年、安定して自立できる歳になるまでの我慢だ。

はつきり言つて腕つぶしでも剣でももう親父なんざ相手にならん。たまに親父と稽古するときは適当に手を抜いて相手してやっているが、こいつはそれすらも気づかない。

しかし経済的な事情としてはさすがに苦しいもんがある。

チツ、いつそこんな日常ぶつ壊れちまえば楽かもしんねえな。

そう思つた瞬間だった。

ピンポーン

もう夜も遅いというのに、玄関のチャイムが鳴り響く。

「誰だ、こんな時間に。」

親父が怪訝な顔をしてお袋に顔を向け、視線で見に行くように促す。

いやこんな時間の来客なら親父が行けや、どんな輩が来るか分かんねえぞ、知らんけど。

味噌汁をすすりながらお椀で顔をかくしつつ、眉をひそめる。

がちやりと玄関が開く音がした。

ベきゅつ。

聞きなれた音がした直後、聞いたことのない音がした。

「え？」

たしかに聞こえた。

なにか、こう、固いものがつぶれたような、変な音が。

その後にごすん、ごすん、と大きな足音が聞こえる。

明らかにお袋の足音ではない。

同時に嫌悪感のする生臭い異臭が鼻をついた。

そして足音の正体が私と親父の前に正体を現す。

「こんばんは。」

どでかい男だった。

黒いコートに身を包んだ、2メートルほどの長身の男。

その肌は赤銅色をしており、背丈に対して見劣りしないほど筋肉質な身体をしている。

そしてその剃り上げられたスキンヘッドの頭からは“2本の角”が生えていた。

「何者だ！」

親父が椅子を蹴り飛ばす様に立ち上がり、叫ぶ。

その言葉にコートの男は首を傾げた。

「む、今朝に挨拶は済ませた気であったのだがな、気づいていなかったのか？」

「何の話を——」

「あの子は気づいていたようであったが…お前さん、鈍いな。」

呆れかえったように男が言い、眉間に右手を当てようとしたところで何かに気づいたように手を止め、その手をコートで拭う。

その手にはべつとりと血がへばりついており、黒いコートに上塗りするようなどす黒い黒の手形をつけた。

おいおいおい、ふざけんよ、嘘だろ。

さっきの音っておい、何した音なんだよ、なあ。

何か、何か声を出そうとするけど声が出ない。

どうなってるんだよ、なんだよその角、おとぎ話の鬼さんが出てきたとでも？

「花鈴！逃げなさい！」

親父の言葉で我に返る。

気が付けば親父がコートの男——鬼さんに向かって拳を振るっていた。

「ちえい!!!」

一本拳、正拳ではなく親指を握りこみ中指の第二関節を突き出して放つ打ち方だ。



それを鬼さんの喉に向かって振るうが、手首をつかまれあつけなく止められてしまう。

しかし鬼さんは父の行動に困惑したように口を開く。

「お主、神域かむかいを出しませんが…本当は何も知らぬのか？鹿角の子孫が…」

鬼さんが訳の分からない神域という単語を口にする。

「つまらん」

「!?」

鬼さんの手刀が、親父を貫いていた。

血をまき散らして、親父が息絶える。

そして、次に鬼さんはこちらに顔を向け――

「ひっ!!」

拳が私の顔面の真横を突き抜ける。

反射だった。

声も出せなかった身体が勝手に拳を避けていた。

そのまま椅子から転げ落ちるように私は逃げる。

「ほうー!」

喜ばし気な鬼さんの声が響いた。

ふざけんな！ふざけんな！ふざけんな！

こんな形でぶつ壊れる日常なんざ私は望んでいない！

警察呼ぶか!?

いや呼んだところで到着するまで私が生き延びられるとは思えない。  
い。

死ぬ！

死んじゃう！

嫌だ！

助けて！

「すーちゃん!」

私は叫び声を上げながら鬼さんの蹴りを飛びのいて避ける。

とっさに出たのは姉、鈴音の名前。

幼いころ、まだ私と鈴音が姉妹だったところに呼んでいたあだ名。

すーちゃんならどうする？すーちゃんなら少しでも生き延びる方法を考える。

逃げなきや。

でも――

「逃がさん」

今のままだと逃げられそうもない、せめて武器を、武器…あつた、あつたじゃないか。

姫斬りとか言われてる保管されている日本刀。

あれだ、あれを使う、あれでこいつを斬り殺す。

殺す。

殺してやる。

あいつらはいなくなった、私の人生はこれから始まるんだ。

私は鬼さんの攻撃を避けながら、姫斬りが保管された和室へと逃げ込んだ。

## 4話 抗いの果てに

『すーちゃん!』

「花鈴!」

もう家の前まで到着する少し前、鈴音は突如遠い昔に聞いた、懐かしい声を聞いた気がした。

荷物を放り投げ、木刀を一本携えて自宅まで全力で走る。

間もなく、家の前に辿り着くと自宅から漂ってくる異臭に気づいた。

生臭い血の臭い。

ゾツとするような感覚が背筋を走り抜けた。

閉じられた玄関を蹴破るようになり、中に入る。

「っ!?!母さん…?」

一瞬鈴音にはそれが何か分からなかった。

見慣れたはずのモノであったそれは、母と同じ形をしながら存在するはずのものがなかった。

首から上がまるで握りつぶされたかのようになくなっていた。

辺りに元は母の頭であったのだろう、瑞々しいピンク色の肉片や白い破片が飛び散っていた。

あまりにも現実離れた光景に理解が追い付かない。

どうやったらこんな風に人が死ぬ?

大型の拳銃でも撃てばこうなるのか?

「花鈴…!」

考えている暇はない。

花鈴はどこだ、鈴音は自然と荒くなっていた呼吸を必死に落ち着かせながらまずリビングに入る。

誰もいない、あったのは——父の死体のみ。

「くそっ…」

思わず唇から声が漏れる。

どこだ、どこにいる!?

その時、ドン、と鈍い音が和室の方から響いた。

銃声のような破裂音ではなく、鈍器で壁を打ったような鈍い音。

聞いた時には駆け出していた。

廊下と和室を隔てる障子戸を蹴り飛ばしてぶち破り、鈴音が室内に突入する。

室内で確認されたのは黒いコートを着た大男と、男に壁際に追い詰められた花鈴の姿。

その姿を確認したとき、既に鈴音の身体は動いていた。

大男が鈴音に気づき振り向くよりも早く、袈裟懸けに振るわれた鈴音の木刀が男の後頭部を打っていた。

「すーちゃんー!」

花鈴の音が響くと同時に、ばきい!と乾いた音が鳴り響く。

木刀が折れていた。

掌に鉄柱を打ったような感触が伝わり、びりびりと痺れが腕に響く。

「ほう、ただの人にしてはやる。」

大男が感心したようにそう言った。

鈴音は返答をしない。

折れた木刀に動揺もしない。

流れるように半分ほどに折れた木刀の柄先を左手で握り、折れた分のリーチを補うようにしながら

片手で突きを男の口内に向かって放つ。

「!?!」

「ほうは…」

男はそれをあろうことか突き出された木刀の先端にかみつぎ、啞えることで防いだ。

それどころかくわえたまま首を振り、そのまま木刀を握んだ鈴音ごと振り回そうとする。

鈴音の身体が宙に浮いた。

鈴音の体重は60キロ以上ある。

それを啜えただけで保持し首の力だけで浮かせたのだ。

危険を感じ、とつさに鈴音は木刀を離して地面につま先が触れた瞬間その場に立たずに崩れ落ちるように後方に転がり、距離を取った。先ほどまで鈴音がいた場所を丸太のような男の足が振りぬかれる。下手に木刀から手を離さずにといたら間違ひなく当たっていた。

「…朝の変な殺気はお前か？」

無手のまま、両手をだらりと下げて自然体に立ち、構える。

「やはり気づいておったかお主は！」

ぷつと木刀を唾でも吐くように床に落とし、男が言った。

「目的は？」

「分からぬか？」

楽し気に笑いながら男が言い、構える。

半身になりながら右手足を前にしつつ腰を深く落とし、正中線を隠す様につま先と拳を置き左拳を鳩尾当たりの前に置く構え。

古流の武術やそれを源流にする格闘技に見られる構えだ。

相手の構えを分析しながら、鈴音は相手の目的について試算する。

しかし答えに辿り着く前に相手が動いた。

鈴音の顔面に向かって右拳の順突きが飛ぶ。

体捌きで半身を切り、拳に対し側面に回り込むように鈴音が避けるが、さらに右腕がしなるように動き裏拳へと変化する。

鈴音はボクシングのダッキング——おじぎするように頭を下げ回避する。

「くはは！」

楽しそうに男が笑う。

笑いながら不意に身体を沈め、床に手を着けながら地面を薙ぐように左足を振るう。

咄嗟に飛びのいた鈴音に対し、男は足を振るった勢いのまま回転、身体を伸びあがらせながら上段の後ろ回し蹴りへとつなげてきた。

鈴音の前髪を擦るほどの至近距離を男の踵が突き抜けていく。

身体を逸らせて鈴音が避けたのだ。

蹴り足を戻し、男が元の通り構える。

その目を真つすぐに見据えながら鈴音も構えを直した。

「目的…まさかとは思うが、姫斬りか？」

警戒を崩さず、鈴音が問う。

「その通り。」

「鬼が復讐に刀を奪いに来たとでも？」

「その通り。」

「どうやらその通りのようだ。」

全く馬鹿らしいが、今私は実際化け物染みた存在に襲われて家族を殺されている、これが現実だ。

御伽噺のようだが現実だ。

ならば抗うしかない。

「刀を渡すと言つても…？」

「見逃す気はない。」

「復讐だもんな。」

「人へのな。」

「人かよ。」

とんでもないスケールの話に巻き込まれているらしい。

会話をしながらにらみ合うように向かい合っていると、自嘲する様な笑みを男は——鬼を自称する男は口を開いた。

「ただお前は逃してもいいかもしれん。」

「む？」

「強くなったお前と殺りあうのは楽しそうだ。」

鬼さんがすーちゃんに再度拳を振るつた。

私——花鈴はそれを見ているしかできなかった。

さらにあの鬼さんの目的は姫斬り？

ふざけんな！

ふざけるな!!

この家はどこまで私を！すーちゃんを滅茶苦茶にするんだ！  
いらない

やっぱりいらない

すーちゃんさえいてくれればいい

すーちゃんだけが私を私でいさせてくれる

今日みたい

いつもみたいに

いつも

いつも

いつも

いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも

もいつもいつもいつも!!!!

いつだって私を見ていてくれた

そうだ

死ぬわけにはいかない

姫斬りだ。

あいつが取り戻したがっているということは、なにかしらの理由があるはず。

すーちゃんが引き付けている隙にあの刀を――

私はすくんで動かない足を引きずるようにして地面を這いずり、姫斬りが入っていると聞かれていた箱まで向かう。

必死に息を殺し、前に進む。

聞こえるのは鬼さんの拳と足が空気を薙ぐ音と、笑い声、不意に漏れるすーちゃんの声。

もうあと少し、ほんの数センチの距離が私には遥か遠くに見える。

届く、後もう少しで。

「さげぞ。」

暗い声が聞こえた。

その声に私が顔を上げると、鬼の手刀が眼前に迫っていた。そして

手刀が私に突き刺さる前に

すーちゃんの身体を鬼さんの腕が突き抜けていた。

## 5話 鹿角姉妹

「がっ、はぁ…!!!」

血が、鈴音の口から大量に溢れる。

鈴音は即座に花鈴を庇い、その身体を貫かれていた。

「か…り…!」

「す…ちゃん」

朦朧とした意識の中、妹の声を聞きながら鬼の腕を掴み、抵抗する。

無駄でもいい。

ほんの微かでも、花鈴が助かる確率が上がるなら、抗う。

その様を見て鬼は嘲り笑うどころか息を呑み、感嘆の眼差しで鈴音の瞳を見つめる。

「惜しい…。」

心底残念な声で鬼は言い、鈴音の身体から腕を引き抜いた。

地面に体が落下する。

もう、感覚がない。

身体のだ真ん中をぶち抜かれた。

それでも、意識が残っている限りは、動く。

この鬼はじょうにもろい。

じょうにうったえればかのうせいは

こえをだせ

なにか

いわなきや

いわないと

いう

い――



なにかがあたまにながれこむ  
きえていくいききの中でハッキリと  
何かが頭の中に流れ込んでくる。  
遠い、遠い記憶を掘り起こすような、そんな感覚。

『迎えに来たよ、小りん…』

大きな一振りの太刀を持った甲冑姿の血まみれの女性が、燃え盛る  
豪華な武家屋敷の一室に立っている。

その前にいるのは鮮やかな着物を身にまとう、頭から一本の角が生  
えた鬼の姫君。

小りんと呼ばれた姫は女性の声を聴くと目を見開き、涙を流して彼  
女に抱き着いた。

『でもごめん、貴女の母様は…私が…』

顔を歪ませながら言う彼女に小りんは首を振り、力いっぱい彼女を  
抱きしめた。

『ありがとう。』

彼女は決意を固め、太刀を持っていない腕で小りんを抱きしめ返し  
た。

『大丈夫、これからは私がいるから。』

強く、強く小りんを抱きしめる。

その背後でどたと大勢の人間が走る音が聞こえ、二人がいる部  
屋の中に甲冑を着た男と仗を持った術士たちがなだれ込んできた。

『ああ、みんな…彼女が私の言っていた小りんだ、彼女に抵抗の意思は  
ない。』

にこりと笑顔を浮かべて彼女は他の皆に伝える。

しかし彼らには不穏な雰囲気か漂っていた、特に甲冑の男はその身  
体から気を昂らせている。

『鹿角…まさか…。』

甲冑の男、鹿角と呼ばれた男が無言のまま太刀を抜き、彼女に斬りかかる。

下方から顎に向かって振りぬかれた太刀を、掬い取るよう受け流しながら彼女は弾いた。

彼女の方が既に刀を抜いていたために対応はできたが、確実に本気で殺しにかかってきた太刀筋であった。

鹿角は受け流された太刀を勢いそのまま上段に構え直し、振り下ろす。

それを彼女は真つ向から受け止め、鏢迫りの状態で肉薄する。

『約束のはずだ！鈴鹿御前は討つ…しかし小りんは討たぬと！』

怒鳴る彼女を鹿角は力づくで押し込み、そのまま押し斬ろうとするが彼女は押された力を利用して姿勢を低くすると

そのまま太刀の柄を跳ね上げ鹿角の顎を力チ上げた。

更に追撃で柄先を鹿角の顔面に叩きこむ。

ぐしゃつと鼻の軟骨がつぶれる感覚が手に伝わるとともに、鹿角がよろめく。

その腹に思い切り足裏で前蹴りを叩き込んだ。

甲冑の腹越しのためダメージはないが、思い切り相手を突き飛ばして距離を作ることにはできる。

このまま浮いた足で前に向かって踏み込み、距離が開いたところで下から喉元に向かって突きを――

彼女が本気で鹿角を殺す寸前、背後にいた小りに異変が起こった。

『小りん!?!』

鹿角に同行していた術士たちが全員で印を結び、小りの動きを封じていた。

小りんは鬼だ、封印するにしても相応の力と代償が必要なため、今すぐ動きどころか存在まで封じられることはないであろうが下準備は既に整ってしまった。

その事実には彼女は動揺した。

つい小りんを見てしまった。

目の前の鹿角から目を離してしまった。  
斬りあいの最中に手練れから目を離すような者には、相応の報いが訪れる。

鹿角に視線を戻した彼女の眼前には刃が迫っていた。  
反射的に彼女はそれを弾く。

しかし弾いたものの手ごたえはあまりにも軽かった。  
宙に舞うは、鹿角が投げた懐刀。

更に彼女の首元に迫るのは、鹿角の太刀の切っ先。  
貫かれた。

彼女の首を鹿角の太刀が貫いた。  
締めていた兜の緒が切れ顔が露になり、彼女は地面に倒れる。

小りんの悲鳴が響いた。  
屋敷の柱が震え、焼け落ちた一部が崩れるほどの絶叫。

その声に術士たちは怯んだ表情を見せるが、鹿角は表情を変えず自由を奪われた小りんに迫る。

『小りん…』  
声にならない彼女の声が、微かに響く。

彼女は立ち上がった。  
既に屍と化した身体で立ち上がった。

約束を果たすため、彼女は自分が屍だと気づきながらも動く。

小りんの前に立ち、鹿角に背を向けながら彼女を抱きしめるように庇った。

『い…っしょ…』

小りんにその言葉が届いたとき、甲冑の隙間を縫うように鹿角が太刀を彼女に突き刺し、刃が小りんの身体ごと貫かれる。

同時に、封印が始まった。

封印の代償に贅とされる命は彼女のもの。  
元から決まっていた計画であったのだろう。

鹿角と術士たちは彼女を贅に小りんを、鬼を封印する気であったのだ。  
だ。

小りんの慟哭が響く。

動きを封じられた小りんは物言わぬ彼女の屍を抱いてやることもできず、ひたすら哭いた。

次第に封印が進むと、小りんの肉体が吸い込まれるように鹿角が突き刺した太刀に向かって蠢き、纏わりついていく。

小りんは哭き続けた。

最後まで哭き続けた。

そして突き刺された太刀が柄から刀身の根本にかけて硬質な、しかし生々しい繊維質の赤い塊がまとわりついた異質な形状になり、

刀身の色が鬼の角のように乳白色に染まった頃に哭き声は止み、儀式は終了していた。

そこには後に姫斬りと呼ばれる太刀が一振り、空になった甲冑、そして甲冑の主である彼女が最期まで離さなかった一振りの太刀が遺されていた。

哭き声が響く。

あの日のように哭き声が

花鈴の哭き声が響いた。

その声に呼応するように、姫斬りが納られた箱が震える。

妖力を察知することができる鬼は即座に膨大な妖力があふれ出たことに気づき、笑みを浮かべた。

「目覚めたか…姫斬り!？」

納められた箱が碎け散り、封印が記された札が弾け飛ぶ。

中からは一振りの刀が浮かび上がり、禍々しい気を放っていた。

柄から刀身の根本まで、赤黒い筋肉のような繊維質のものに覆われた異質な形状。

鬼の角を思わせる乳白色の刀身に痣の様に刃紋が浮かび上がって

いる。

浮かび上がる姫斬りに鬼は思わず手を伸ばすが、それを拒むように赤黒い稲妻が奔り、鬼の腕を弾き飛ばした。

「む!?!」

腕を抑え、後ずさる鬼が驚きの表情を浮かべるが、すぐさま笑みを浮かべた。

「なるほど、選ばれなかったか。」

姫斬りがその言葉に答えるように刀身を向けた先は、花鈴であった。

涙を浮かべ、目を見開き、怒りに狂った表情で花鈴は姫斬りに手を伸ばす。

その刀身が磁石に吸い付く鉄の様に花鈴の身体に引き込まれ、刀身の半ばまで突き刺さった。

「殺す…。」

血を吐きながら花鈴はそう呟き、刀身を更に身体の中に押し込む。鰐元まで、すべての刀身が血で濡れるまで身体に姫斬りを押し込み、一気に引き抜いた。

乳白色の刀身に血管が通ったように筋が入り、黒ずんだ赤色から鮮血を思わせる紅蓮色に全体が染まる。

花鈴の身体にも変化が訪れた。

刀身が突き刺さった点から徐々に肌が赤みを帯び、目の前の鬼の肌と同じ赤銅色を超え、姫斬りと同じ紅蓮色に染まった。

そしてその額からは角が一本、肉をかき分けるように生えてきた。その姿はさながら御伽噺の鬼、そのものであった。

「みんな、みんな殺す。」

鬼と化した花鈴が、正眼に姫斬りを構える。

たいして鬼は息を整え、身体に気を巡らし、全身に妖気を纏い構えた。

「殺してみろ、俺を、そして——」

鬼が言葉を言い終える前に、花鈴が前に踏み込む。

両者の身体が瞬間交差した。

「血を…吸え。」

鬼の身体が、上半身と下半身、二つに綺麗に分かたれていた。鬼の血に濡れた姫斬りはさらに朱い輝きを増し、綺麗な血の色に染まっていた。

鈴音は死の淵に立ちながら、一部始終を見届けていた。

まるで見えない何かに意識をつなぎ留められていたかの様に、見届けた。

交差は一瞬であったが恐ろしい速度で幾度かのやりとりが行われていたことを鈴音は見ていた。

まず正眼から花鈴が突きを放ち、それを鬼が前に置いた右拳を突き出すことで逸らしながら左拳の中段突きを放った。

対する花鈴は姫斬りの柄先でその拳を叩き落す。

そこから姫斬りの柄を振り上げて柄先で鬼の顎をカチ上げた。

鬼の体勢がその一撃で崩れる。

そのまま流れで花鈴が上段に姫斬りを構え、その動きに対し鬼が眼前で腕を十字に交差させ防御の姿勢をとった。

しかし花鈴は上段構えからそのまま姫斬りを振り下ろさず、鬼の横をすり抜けるように体捌きを行いながら腕の角度を変え

胴体を真つ二つに切断した。

美しい流れだった。

荒々しき柄を使った動きと、流れるような体捌き。

剛柔一体の動きに感銘すら覚える。

死の間際だというのに鈴音は笑みを浮かべていた。

冥途の土産に良いものが見れたかもしれない。

悔いは山ほどあるが、花鈴は超常の力を得て生き残った、それならよい、それなら。

ゆっくりと花鈴がこちらに歩んでくる。

私の血も吸いたくなっただのか？

鈴音はふとそんなことを思い浮かべた。

そして花鈴は既に動かない鈴音の身体を抱き起し、じつと瞳を見つ

めてくる。

その目に鈴音は答えるように、力ない瞳を向けた。すると花鈴は突然舌を出した。

そして、その舌を姫斬りで厚みの半ばほどまで切り裂いた。

何を…している…？

花鈴の口元が真つ赤に染まる。

紅蓮の肌に違った朱色が混じった。

その口を――

(むっ!?ぐっ…むう!?む!!?)

花鈴の唇と、鈴音の唇が重なっていた。

そのまま鈴音の唇を邪魔だと言わんばかりに花鈴の舌はこじ開け、口内を蹂躪する。

(何が…起こっている!?)

血が、花鈴の血が大量に鈴音の口内に流し込まれる。

それが目的か!?

鈴音は血が流し込まれると同時に意識が覚醒していくことを感じていた。

同時に麻痺していた胸を貫かれた痛みが蘇り、焼けるような痛みが一気に襲い掛かってくる。

「むっ…ぐっ…ぐっ、があああ!」

激痛に声が出た。

なくなったはずの感覚が蘇り、失った部位が生み出されるというあり得ない感覚が身体を襲う。

それを抑えるように花鈴は鈴音の口を唇で塞いで舌を絡ませ、血液を送り込んだ。

数分間。

激痛に耐えたところで、驚くことに鈴音の傷は塞がっていた。

意識がはつきりと蘇り、つま先から指先まで、完全に感覚があった。体を起こそうとするが肉体が治ったというのに花鈴が…花鈴の唇

が鈴音の唇を塞いだままであった。がりっ。

鈴音は口内に差し込まれた花鈴の舌を軽く噛んだ。

そのとたんにバツと花鈴が鈴音から顔を離し、口を手で塞いで眉をひそめる。

「いったいやすーちゃん…私命の恩人だよ？」

「それに関しては…ありがとう。」

思わずそう鈴音は返してしまう。

そしてその口調を聞いて困ったように肩をすくめ、眉をひそめた。

昔の花鈴の口調だ…。

そう鈴音は思う。

まだ父から後継のことを告げられる前、幼かったころの口調そのままだ。

これが鈴音の知る花鈴である。

甘えん坊でスキンシップが激しく、私にべったりな妹。

「血を分けてくれたから助かったのはわかった。」

「うん！すごいでしょ！」

ほめてほめてと言わんばかりに血まみれの口元そのままに笑顔を浮かべ、花鈴は言った。

その頭を撫でてやりながらも鈴音は顔をしかめる。

「他にやり方はあったら？」

「ええ…だって昔はよくしたじゃん、キス。」

「十年以上前だろ…。」

鈴音は頭を抱えた。

そんな昔のことを持ち出されては敵わない。

「でも、これでやつと二人きりだね。」

「は？」

「あの男も女も死んだよ？だからやつと二人になれた!!」

満面の笑みを浮かべて花鈴は言った。

その顔に恐ろしいまでに悲しみはない。

曲がりなりにも、間違っていたかもしれないが、自分の親が死んだというのに。

「やめろ…」



「なにを？」

「父さんと母さんだぞ…」

「知らないよ、あいつらなんて。」

氷のような声色で、花鈴は言った。

「だってあいつらは私からすーちゃんを奪った、それから私のことなんて一切見なかった、あいつらがずっと見てたのは取り繕った偽物、一度だって私を見ようなんてしなかった、私は一度あいつらに殺されたのと同じだよ、見てくれてたのはすーちゃんだけ、すーちゃんだけが陰でずっと私を守ってくれた、それであいつらが死んで私とすーちゃんは蘇った、ハッピーエンド万々歳だよ。」

まくしたてるように花鈴は言う。

たしかにそうかもしれない、しかしそれでも鈴音は肉親への情を捨てることができるではできなかった。

言いようによつては父もこの家の伝統に呑まれた被害者だ、最期まで偽りの日常を過ごし、天災のように現れた怪物に殺される。

母だって、決して悪い人ではなかったはずだ。

いつも食った残り物の飯は、美味かった。

間違いなく愛情が、捨てたはずの愛情がそこにはあったと鈴音は信じている。

「やめよう、花鈴。」

「すーちゃ——」

「私がこれからはそばにいるから。」

鈴音はそつと花鈴を抱き寄せながら言った。

久々に抱きしめた花鈴の身体は遠い記憶が蘇るような、そんな気がする感触だった。

しばらくの間、鈴音と花鈴は姉妹としてのお互いが戻ったことを実感し、その感触に浸っていた。

## 6話 餓鬼

黒い高級車が、その外見に不釣り合いな普通の住宅街の中を走っている。

一見するとただの高級車にしか見えないが、内装は別。

特殊な儀礼を施された装甲を数種類、それを幾重にも張り合わせた造りをしており、フレームも組織によって対妖怪用に開発された特注品である。

更に車内には特別強力な勾玉が装備され、緊急時にはそれを使用し神域を作り出すことも可能だ。

車は恐るべき速度で住宅地を疾走しており、時折けたたましいタイヤ音を鳴らしながら余裕のないカーブを曲がっていく。

車内には運転手含め3人の人間——いや人の形をした存在がおり、それぞれ多少の差異はあれどみな一様に黒いスーツ姿に身を包んでいた。

運転手以外の2人は常軌を逸した運転に何も言わず、黙々と個人の装備を確認している。

ある者は剣の柄のような形状をしたものを手にし、ある者は己に向き合うように車内で禪を組んでいる。

「今回の相手、鬼というのは本当なの？」

剣の柄のようなものを手にしていた一人が言う。

くるりとした丸っこい瞳をした小柄な女性であり、パンツルックの着崩した黒いスーツを着ていた。

髪型は短いボブカット。

そしてその頭からはぴよこりと小さな猫の耳のような物体が生えており、どうやらそれは飾りではなく実際に身体から生えているものらしい。

「鬼と言っても感知された妖力は大したものではない、精々餓鬼に毛が生えた程度のものだ。」

運転手を務めている者が淡々とした口調で答える。

男性とも、女性とも、区別がはつきりつかない曖昧な外見をしているが、男性者のスーツをきつちりと身に着けており、手には革製であろう薄い手袋をしている。

白に染まった長い髪を後ろで一つに束ねており、一見して人らしからぬ、妖しげな雰囲気を漂わせている。

残った一人は会話に参加せず、一人禅を続けていた。

深いスリットが入った長い丈のスカートタイプのスーツ姿で、ポニーテールに黒い髪を纏めた長身の女性である。

一見普通の人間に見えるが、その目には夜だというのに真っ黒なサングラスがかけられており、彼女もまた普通ではない存在感を醸し出していた。

「あと一分で到着させる、準備はいいな？」

「大丈夫、大通しは問題はないよ。」

猫耳の女性は大通しと呼ばれた、剣の柄のようなものを懐にしまいながら答える。

「僕も…。」

ぼそりと、サングラスの女性が言い、大きく息を吐きながら禅を解いた。

「よし、みんな…今日も生きて帰るぞ。」

「すーちゃん、大丈夫？」

「ああ、問題ない。」

鈴音は花鈴に肩を借りながら立ち上がる。

先ほどまで死の淵にいたとは思えない自分の肉体に、鈴音は複雑な感情を覚える。

花鈴の姿は先ほどまでに鬼のような姿から、普段の人間であったころと同じ姿に戻っていた。

鬼との闘いが終わり、鈴音の肉体が修復されると手にしていた姫斬

りは赤い光の粒子となって霧散し、花鈴の身体を鞘とするように吸い込まれた。

同時に花鈴の姿は元の肉体へと戻っていたのだ。

これからどうすればよいのか、鈴音は自身に問いかける。

あまりにも日常離れた出来事、その後始末のことを考える段階になつて今更頭が痛くなつてきた。

先ほどまではただ無我夢中で、流れのままに目の前の出来事に対処していたが今はそうもいかない。

警察を呼んだとして、どう説明すればよいのだ。

あの鬼の死体の説明などどうすれば良い。

悩みながら鈴音が鬼の死体へと目をやる。

鬼の上下で真つ二つに分かれた肉体は和室の畳にどす黒い染みを作っていた、そして、鈴音はあることに気づく。

「お前…まだ生きて——!?!」

鬼はまだ、生きていた。

呼吸の気配を一切感じなかったため気づけなかったが、鬼の目が僅かに動いたのを鈴音は見た。

「おう…死にぞこ…なつた。」

力なく笑いながら鬼が言うが、その口はほとんど動いていない。

言葉を発するというより別の何か、空気とは違う何かの波長を読み取るような感覚だつた。

「これが聞こえるということとは…お前も…人では…なくなつたな。」

頭の中に響くように声が伝わる。

花鈴がすぐさま姫斬りを呼び出し、とどめを刺そうとするがそれを鈴音が制止する。

「待て、花鈴。」

「すーちゃん!?!どいて!?!そいつ殺せない!」

「そいつには聞くことがある。」

鬼から目を離さないように鈴音は花鈴に言った。

そして距離を取つたまま鬼に問いかける。

「あの姫斬りという刀は一体なんなんだ?」

直球な疑問を投げかける。

死の淵に立った時、脳内に映像の様に流れ出たあの光景。

その言葉に微かに鬼は意外そうな表情を見せる。

「む…本当に何も…知らぬのか？」

「先祖が鬼だか妖怪だかを斬ったという話は聞いていた、御伽噺としてな。」

「御伽噺扱いか…かつては妖殺しと呼ばれた鹿角家が…こうなっているとは…。」

「話してくれるのか？」

「負けたからな。」

臙げだった声から一転ハッキリと、自身が敗北したという事実を告げた。

そこがこの鬼にとっての線引きらしい。

鈴音はその単純な線引きは嫌いではなかった。

「姫斬りというのは…鬼の姫…鈴鹿御前を斬った刀だ…。」

「鈴鹿御前…」

先ほど脳内にて甲冑姿の女性が討ったと言っていた名前だった。

「人の間では…鈴鹿御前は人の元に…嫁いだと伝えられているが…実際は…違う。」

「たしかに、そんな伝説を聞いた覚えがある。」

「鈴鹿御前は…夫であった鬼…悪路王を人間に討たれ…その後…夫を討った人間に嫁いだ…復讐として。」

「復讐…？」

「人になびいたと思わせ…機会を待った…夫の仇討の…ため…うぐ…うう！」

言葉の途中で鬼が大きく血を吐き出した。

しかしその口を一度固く閉じ、鬼は言葉を続ける。

「人が、鬼に吞まれることを…。」

「吞まれる？」

「そうだ…」

鈴音が問いかけると、鬼は微かに視線を花鈴へ向け、そう答えた。

「人が…悪路王の様な…上位の鬼を斬って無事では済まない…徐々に侵されるように…鬼になる。」

鈴音は先ほどの花鈴の姿を思い起こし、その言葉に頷く。  
先ほど姫斬りからは膨大な…妖力と言えばよいだろうか、人ならざる力を圧縮した塊のような気を感じた。

花鈴はその力を、姫斬りそのものをその身に突き刺すことで受け止め、自らのものとしたのだろう。

言わば鬼と一体化したことに変わりはない。

その言葉を聞いた花鈴は怪訝そうに顔をしかめる。

「てことはなに？私もそのうち頭がおかしくなるとでも？」

「分からん…が…鬼に伝わる言伝ではそうだ…鈴鹿御前は狂った人間の伴侶を利用し大きな戦を起こした…。」

「肝心なところが分かんねえじゃん…。」

「花鈴…やめてやれ。」

花鈴の頭をなでてなだめつつ、鬼に言葉を続けるように促す。

「その鈴鹿御前を討ったのが…鹿角…お主たちの先祖…。」

「そして鈴鹿御前を斬ったのが姫斬りと？」

「そうだ…。」

おかしい。

鈴音は先ほど頭に浮かんだ光景との食い違いを感じた。

姫斬りが生まれたのは小りんと呼ばれた鬼の姫を封印した際であつた、

この鬼が嘘をついているようには感じ取れない、まだこの姫斬りの話には裏がありそうであつた。

「それで、お前は姫斬りを利用して…今の世の中で戦でも起こす気だったのか？」

「そうだ…力を…使い…主のたむけに…。」

「主…。」

「酒呑童子…今は亡き…俺の主…。」

盛大に口から血を吐きながら、鬼は力強く言い放った。

そして苦痛に歪めるように顔をしかめ、歯を食いしばり、そして一

筋の涙を流して口を開いた。

「狐もどきになった小娘共に殺された…俺は…何もできず…今まで生きて…結局…何も…」

「…。」

「…戯言だ…主も…俺も…ただ弱かっただけ…姫斬りも…曲りなりにも鬼である俺より…その女を…」

「そりゃね、お前…すーちゃんも殺せないくらい雑魚だったし。」

冷やかな目を向けて花鈴が言った。

その言葉に自嘲するように鬼が笑う、くくく、くくく、と涙を流しながら笑う。

その姿が見るに耐えず、鈴音は小さく首を振ってから口を開いた。

「お前、手加減していただろう…。」

「本気だった…お主が妖力を使えぬことが…わかっていたから…使わなかったのみ…。」

最後の花鈴と鬼の一瞬の交差は、人ならざる領域の闘いだった。

最初から鬼が妖力とやらを使っていれば、1秒もかからずに鈴音はひき肉になっていただろう。

それを手加減と言わずしてなんと言うか。

しかし鬼のその、意味のない尊厳が鈴音は嫌いではなかった。

この鬼は両親を殺した。

どんな事情があろうとも鈴音にとっては家族であった二人を殺した。

しかし目の前のこの鬼を、鈴音はどうしても嫌うことができなかった。

「楽しかったよ。」

「お主…。」

「私は忘れない、まだ人であるうちに鬼と…お前と殺しあつたことを。」

もう、鈴音は花鈴に与えられた血によって自身の身体が尋常の人間でなくなったことを察していた。

すなわち、人として最後に向き合った相手は、この鬼である。

「お前は…どうだった？」

「俺…？」

鬼は、もう光が閉ざされつつ眼で、それでもしつかりと鈴音を見た。その姿が、何故だろうか、どこか、鬼のただ一人の主を思い起こさせた。

走馬灯の様に、鬼の頭に遠い日の記憶が駆け巡る

鬼はかつて、餓鬼と呼ばれた存在であった。

周囲の餓鬼たちはこぞって人間の女を弄び、愉しむことを目的として生きていたが、後に鬼となったこの餓鬼は違った。

ある日偶然、遠目にみた最強の鬼、酒呑童子という存在。

最強というあまりにも純粹な強さの称号と、その名を冠するに相応しき佇まい。

一匹の餓鬼は、その姿を見て以来狂った。

痩せこけた身体は長い——人の一生を軽く超える年月を費やし、幾度も死線を越えたことで餓鬼ならざる存在へと変わった。

餓鬼は鬼となり、酒呑童子の近くにいることを許された。

それ以来、酒呑童子は元は餓鬼であったその鬼を気に入ったのか、よく共に酒を飲み交わしながら遊んでやった。

酒が回つてくると犬がじゃれあう様に喧嘩を行い、また酒を飲んで喧嘩をした。

餓鬼は同じ鬼になったとはいえ、酒呑童子とは力に雲泥の差がある。

人と子犬どころか、人と羽虫ほど力の差があるというのに酒呑童子は上手く力を抑えてその鬼と遊んだ。

『楽しいなあ。』

酒呑童子は幾度もじゃれあいながら、鬼に言った。

鬼にとつてなにも代えがたい言葉であった。

長い年月が経ち、死の淵に立たされている今でも、鬼は楽し気な酒呑童子の顔ははつきりと思い出せる。

その顔が、どこか鈴音と重なった。

「うん…うん…！」



血まみれの赤く染まった顔をほかさせるように、先ほどは一筋しか流していなかった涙を、ボロボロと子供の様に流しながら鬼は頷いた。

「楽しかったよ…俺も…。」

「…。」

「鈴音と…呼ばれていたな…。」

鬼の問いに、鈴音は相手に分かるようしつかりと頷いた。

「忘れん。」

最期に、そう言い遺して鬼は息絶えた。

武人だった。

鈴音は鬼に対して心の中で敬意を払う。

鈴音のその姿に少し辟易したように、花鈴がため息をつく。

「すーちゃんてき、そういうところあるよね。」

「え?。」

「私にあいつらは親だなんて言っときながらさ、親ぶつ殺した相手にその態度?。」

「それとこれとは別だ。」

「まーそういうところ嫌いじゃないんだけど、ちよつともやもやするんだよなあ。」

べー、と舌を出しながら花鈴が言う。

そして舌をしまうと鈴音の前に回り込み、首を傾げた。

「で、これからどーしよつかすーちゃん、私はすーちゃんといれるならどこでもいいけどさ。」

「分からない…が、とりあえず花鈴と一体になった姫斬りことを調べた方が良くと思う。」

「さっき言ってた狂うってやつ?心配性だなあー大丈夫だってそんなの。」

「ダメだ、当てはないが調べる。」

「当てねえ、まあそういうのってさ、何もしなくても当ての方から来るんじゃない?。」

花鈴の言葉に鈴音はハツとなった。

その通りだ、膨大な力を持つ姫斬りの存在を欲する存在は先ほどの鬼の様に存在するだろう、それを迎え撃つという手はある。

「他にはさ、案外人ならざる化け物と戦ってる組織があつたりとか——」

花鈴がそう言葉を続けた瞬間、ぞくりと身体を何か、薄い膜の様なものがすり抜ける感覚が二人を襲った。

それと同時に世界が静止する。

無意識に耳が聞いていた周囲の物音が消え、虫や小動物のような生き物の気配も消えた。

自分の心臓が波打つ鼓動の音さえ聞こえる様だった。

「——するかもとか思ったけど、これがさっきの鬼が言ってた神域つてやつ？」

「神域？」

「鬼がああ男…親父を殺すときに、神域も使えないのかーって呆れた、多分結界みたいなやつじゃない？」

「なるほど…たしかに言われてみればそんな感覚だ」

花鈴の直感じみたま言葉に鈴音は頷いた。

消えた物音、生き物の気配、妖力を持つもの以外を排除する結界と考えると腑に落ちた。

「さーて、すーちゃん鬼が出るか蛇が出るか？」

「…どちらも遠慮してほしい。」

鈴音の答えに花鈴が笑みを浮かべる。

そして宙を見ながら一瞬目を閉じ、周囲に気を巡らす。

鈴音は単純に五感を働かせ、周囲の気配を読み取った。

「三つ」

互いの声が被る。

この静止した世界でこちらに向かってくる気配は三つ、間違いないかった。

## 7話 八咫鳥

「動くな！」

私こと花鈴と、姉のすーちゃんが立っている和室にいきなり銃を構えた：男？女？わかんないけど黒スーツが突入してくるなりそうえらそうに言いやがった。

人の家に土足で踏み込んでくるくせにむかつくなあ、そう思いながら私はすーちゃんを庇うことを意識しながら立ち位置を変える。

黒スーツは鬼の死体が転がったこの光景を見て、なんだこりやって感じに眼を見開くとこっちに聞いてきた。

「君たちが、この鬼を？」

「あのさー人の家に土足で入っというてエラそうにしてんじやねえよ。」

「え、ああ…それは…すまない。」

私が思ったままのことを言うであろうことか相手は謝ってきた。

こいつ馬鹿だ。

私はそれを察した。

さすがにこの馬鹿の言葉が見過ごせなかったのか、姿を見せていなかった他の二つあつた気配もするーつとこの部屋に入りこんできた。

一体は馬鹿と同じ黒いスーツ姿の：猫耳はやしたちっせえ女。

もう一体は同じ黒…なんなのこいつらは黒スーツの会なの？しかも最後に入ってきた女、この夜中にグラサンかけてるのなんでだよ。

あれか？ちよつと触れにくい事情か!?ならごめん!!

心の中で私が謝ってる内に三体は私とすーちゃんを取り囲むみたいにして様子を伺っている。

「リーダー、馬鹿みたいなこと言っていないでこの状況どうにかしてよ。」

猫耳女が言った。

実際に馬鹿なのではという私のツツコミは面倒なことになりそうなので胸にしまっておく。

なんて優しいんだらう。

グラスアン女も何かツツコめよ…いや喋れよ！

あーめんどくせえ！

「で、黒スーツの会の皆さんは何用で？」

「あ、ああ…鬼の妖力を察知して派遣されてきた八咫鳥の者だ。」

「やたがらす？」

聞いたことある？とすーちゃんの方を向くけどすーちゃんは首を振った。

私の知らない有名な会社とかそんなのではないらしい、てか待てよ、鬼の力を感知して派遣されてきた――

「…まさか、人ならざるモノと戦う組織とでも？」

「え？それならさっき私が言った勘が当たったってことじゃん！」

流石は私、名探偵。

「でさー、その八咫鳥さんは私たちをどうしたいわけ？」

「君たちが被害者なら保護する気だが…。」

「じゃ、そうじゃなかったとしたらあ？」

私はいやらしく笑みを浮かべながら言う、すーちゃんが顔をしかめる。

「花鈴…控えろ。」

「はいはい、まあ大した連中じゃなさそうだし、適当に従ってもいいんじゃない？」

ちよつとぼかし遊んでやろうかと思っただけど、すーちゃんの言葉に仕方なく従うことにする。

でもその言葉に猫耳女はカチンと来たらしい。

あからさまにイライラした表情で私のことを睨んでくる。

「大した事ないい…？」

お、釣れた。

そうだよ、私からいかなくても相手からこさせればちよつとくらい遊んでもいいよね。

「身の程、身体で教えてやろうか？」

「花鈴!!」

猫耳を挑発する私にすーちゃんの櫛が飛んだけどもう遅い、猫耳は

やる気みたいだし。

猫耳はぐにやりぐにやりと肩を、いや肩というより肩甲骨を動かしながら胸の辺りまで腕を上げて構える。

「リーダー、こいつは私が無理やり取り押さえさせてもらうわね…。」

「止める化け猫!」

「ついでにちよつとくらい痛い目にも——」  
するつ、と。

化け猫と呼ばれた猫耳女が物音も立てずに私に向かって飛びかかってきた。

な—るほど、こりやネズミを食われるわと納得する速度と気配を感じさせない動き。

普通の人間ならなんにも反応できないだろう。

「あつてもらう!」

私の腹に向かって化け猫の拳が放たれた。

波の様に肩甲骨を動かし鞭のように腕をしならせた右の拳は、当たれば波の様に腹の中に衝撃が伝わる威力を秘めている。

まあ当たつたらの話だけど。

私は拳が当たる寸前に半身をきって、背後に受け流すみたいにその拳を避けた。

そのついでに——

「ほい」

私は半身をきりながら左手でとん、と軽く、化け猫の右腕を叩いた。

ほんの軽い力でたたいただけだが、思い切り前に向かって勢いをつけていた化け猫の拳はそのほんの小さな力でさらに前へと受け流され、微かに姿勢を崩させた。

そして崩れた姿勢の化け猫に向かって、私は喉を掴むように右手を突き出した。

「にやう!」

化け猫が声をあげる。

勢いがついてかつ崩れた姿勢のまま、首に思い切りブレーキがかかったように衝撃がかかると慣性で身体だけが前に動き、投げ出され

る。

このまま地面に叩きつけてやろう。

喉にかけて腕を更に前に突き出し、化け猫の身体が前に投げ出される勢いのままに地面に叩き落とそうとした。

「にゃん…とおー！」

化け猫はとつさに崩れた体勢のまま地面を蹴り、跳んだ。

ろくに力が入る体勢ではなかったはずだがなんとその場で後方へ宙返りを敢行し、その場で回転。

喉から私の右手を外しつつ地面に叩きつけられることを回避した。

「おおー！」

曲芸じみた人ならざる動きに私は思わず声を出す。

流石は猫、動きが軽やかだ。

一瞬互いに背を向けあう状態になり、さっとお互い距離をとってから向き直る。

「言うだけあるじゃにゃいか…。」

「おーい、にゃーにゃー猫言葉出てんぞ猫ちゃん」

「くっ、うるさい!!」

またしても化け猫は肩甲骨をくねらせながら波を作り、拳を振るってきた。

ボクシングのワンツースリーのように左の順突き、右の逆突き、左のフックが顔面に飛ぶ。

私は防御はせずにそれをすべて体捌きで避けた。

首を捻って順突きを、身体を捻って逆突きを、首を反らせてフックを避ける。

さらに化け猫はそこから四つめ、フォーとして右のアップーを顎に向かつて放ってきた。

それを半身をきって避けようとしたんだけど――

「ひゅー！」

下から突き上げられるアップーの軌道が不意に横から顎を狙うフックへと変化した。

ボクシングの可変するパンチとは質が違うパンチだった。

危うく騙されて顎を射貫かれるところだったけど、私は左腕で顎をカバーしてそれを防いでいた。

ガツン、と目の前の猫耳チビが放ったとは思えない、ガード越しでもクラつとくるような衝撃が左腕を痺れさせた。

流星は人外、まともに喰らってたら意識はなくなってたなこりや。

さつと距離をとって私は笑う。

「やるじゃん。」

「当たってれば今頃楽に眠れてたのに、可愛そうにね。」

「ついでにしばらく飯が食えなくなってたところだったっての。」

存外できる。

私は単純に妖力から大したことはないと判断していたけど、なかなか適当に遊んでいられる相手でもないようだ。

さつきは喉を掴むようにしてやったが、もし次同じことができる機会になれば、掴まずに指をめり込ませてやる。

そんなことを考えながら私は化け猫と向き合った。

化け猫も空気が変わったことを察したのか少しばかり表情を硬くして構え、また肩甲骨をくねらせる。

おそらくさつきの可変パンチも肩甲骨を瞬間的に動かして放ったのだろう。

そう推理しながら私はどう料理してやろうかと考えてたんだけど

「うーん。」

いつの間にか私の背後に立っていたすーちゃんが私の頭をはたいていた。

むむむ、私の背後をとるなんて流星はすーちゃん、強い。

感覚的にはさつきの化け猫に殴られたよりもすーちゃんにはたかれた方が精神的に痛かった。

「あーん、いいところなのに邪魔しないでよすーちゃん！」

「今のやりとりで敵意はないことは理解しました…非礼を詫びます。」

小さく目の前の化け猫に頭を下げてすーちゃんが言う。

化け猫はすーちゃんの姿勢に対して構えを解き、首を振った。

「あー、その…私もカツとなったし貴女が謝らなくていいのよ。」

「そーだそーだ、お前が謝れ！」

「にやんだと貴様あ…！」

またしても猫語を混ぜながら化け猫が言った。

どうやら感情が昂ると猫語がでるっぽい、ウケる。

まあたしかに敵意がないのは本当みたいだ、私は化け猫の懐の辺りに視線を向けながら頷く。

「ま、たしかに仕込んでる武器も使わなかったみたいだしー、一応殺す気じゃないことは分かった。」

「…お前、気づいてたのか？」

「見ればわかるっしょ、スーツの中にナイフかなんか隠してるってさ。」

化け猫の言葉に私はそう返す。

おそらくすーちゃんも気づいてた、殺す気なら変に私とじゃれあわずにさっきの可変パンチの要領で私を懐の何かでぶっ殺してるはずだ。

元から敵意の様なものは感じていなかったけど、私が妖力に慣れてないせいかな嫌な感じはしたし、ちよつと試しがてら遊ばせてもらったのだ。

「で、保護するって言葉信じてもいいけどさ、八咫鳥ってのはどういふところ？」

「リーダー、頼むわね。」

「あ、ああ…。」

さつきからリーダーと言われている、男女区別がいまいちつかない黒スーツが銃を懐にしまいながら説明を引き受ける。

「単純に言えば妖の類から人々を守っている組織だ。」

「…で？」

「…それだけだ。」

「それだけかよー！」

私が思わずツツコむ、すーちゃんも少し呆れた様子で目を細めていた。



そこに突如聞いたことない声がぼそりと響く。

「一応…公的な組織…。」

さつきから一言も話さなかったグラサン女がようやく口を開いていた。

お前…喋れたのか。

その言葉にすーちゃんが反応する。

「公的…国の直属の組織ということですか？」

「そ、そうです、決して怪しい組織ではありません！」

「リーダー、そんなこと言うて怪しく感じるからやめなさいよ…。」

「あんたらさ…コントすんのやめてくんない？」

私が思わずそう言った。

「申し訳ない…とにかく貴方たちと家族の方は私たちが保護させて—」

「あー、大丈夫、もう私たちだけだから。」

「もう？」

「アレにさつき殺された。」

親指で真つ二つになった鬼を指さして私は言った。

「ここ入ってくるまでに死体見なかった？」

「そうでしたか…心中お察し—」

「あー、そういうのいいからさ、面倒だし、気にしてないし。」

私の言葉にリーダーが戸惑いの表情を見せた。

まあそりゃ困惑するよねー、事情分かんないよ。

「とりあえずさー、立ち話もだるいし、その八咫鳥とやらに保護がてら連れてってくんない？」

「花鈴…もう少し態度を…」

「いーじゃん、実際説明も面倒だし、コーヒーくらい出してもらわなきゃやってらんないよ。」

「すみませんお三方…少し、複雑でして…たしかに場所を変えた方が—」

すーちゃんが私の代わりにそう言ってくれる、そしてそれにと言葉をつづけた。

「先に母と父…それに、彼も弔いたいのです。」

「彼つて、その鬼かにや!?!」

「はい。」

思わず声を上げた化け猫に、表情を変えずにすーちゃんが答える、すーちゃんマジクール。

「武人でした、彼は。」

「…君、そっちの子と同じで実は結構やばい奴にやの?」

親を殺したという鬼を称賛する様な言葉に、化け猫が失礼にも私を指差しながらすーちゃんに言う。

まあすーちゃんの頭のねじがどっか飛んでるのは認めざるをえないけどさ。

その光景を見てリーダーがポンと手を叩き、口を開く。

「分かりました、彼らを弔う手配は私たちも手伝いますし、いったん場所を変えましょうか。」

「助かります。」

すーちゃんが小さく頭を下げる。

どうやらようやく立ち話から解放されるみたいだけど、はたしてこれからどうなることやら。

それにこの三体――

リーダー、化け猫、グラサン。

まあまあコント集団みたいで面白いけど、なんとなく嫌な予感はまだ消えてなかった。

すーちゃんは気づいていない感じだし、妖力絡みでなにかあんのかなー。

そんなことを私が考えてるとリーダーが外に出るように私たちを促してくる。

どうやら車が用意してあるらしくて、そこに案内するみたいだ。

胸の中におさめられた姫斬り、その存在を確認するように私は胸に手を当て、促されるまま外へと向かった。

## 8話 変人集団

あの鬼の来襲から1週間。

鈴音は多忙な日々を過ごしていた。

母と父の葬儀に、保険云々や契約関係の名義に関する数多の会社とのやり取り、それに八咫鳥という組織に今回の事情の説明を行い今後に関する話し合いなど休まる時間がなかった。

鈴音と花鈴の身元に関しては八咫鳥が作った名義の人間を後見人としてくれることになった。

世間的に公にできないだけで妖怪のような存在の被害にあった人間は多く、そういった人間を援助するために組織的に管理されている名義らしい。

おかげでいろいろな契約関係の話が楽になったと鈴音は感謝している。

鈴音と花鈴にはもうお互い以外の親族はいなかった。

母の両親——母方の祖父母は早くに亡くなっており、父方の祖父母は行方知れずだった。

今回の葬儀で連絡をとろうとしたが父方の祖父母はまだ父が幼いころに離婚しており、祖母とはそれ以来連絡をとっておらず生死自体が不明。

祖父は父が鹿角家を継いだすぐ後に失踪したらしく、行方不明になっっている。

そんな日々を過ごし、久々にまともな睡眠時間をとった鈴音は簡素な布団から軽く肩をまわしながら起き上がり、周囲の景色を見た。

まだ見慣れないが、狭さとしては落ち着く小さな部屋。

置いてあるものは小さなキャリーケースと鈴音の制服であるセーラー服に学生バッグに木刀が一本。

全て鈴音の私物を家から持ってきたものだが必要とするものはあまりに少なかった。

服も寝間着が洗い替え用に数着と運動用兼私服のジャージがいく

つかに稽古用の袴くらいだった。

小さなキャリーケースが余るくらいの量であった。

ささつとセーラー服にそでを通し、あらかじめ中身が準備されたバッグを持つてその部屋を出る。

今日は諸々の事情で休んでいた学校へ一週間ぶりに登校する日だった。

部屋から出た先にはオフィス——と言えば聞こえはいいが、申し訳程度に応接用のテーブルと椅子が置かれた以外は雑多に私物が散らかされた広い空間が広がっており、そこには4人？の存在がいた。

そのうち2人はオフィスに置かれたテレビの前に座って虚ろな目でゲーム機を操作しており、鈴音が起きてきたことに気づくと画面に目を向けたまま口を開く。

「あーおはよ…すーちゃん…：そういや学校行くんだっけ…。」

「おー鈴音ちゃん…：おはよ…：早いわねえ…。」

「おはようございませう化け猫さん…：おはよう花鈴、何をしてる…？。」

2人——花鈴と化け猫がひたすらにゲームをしていた。

明らかに徹夜でゲームをしていた様子の子の二人の足元にはエナジードリンクの空き缶と空になったスナック菓子の袋がいくつつか、それに山盛りになった灰皿が一つ。

その姿に呆れながらオフィスの中に漂う煙草の臭いに鈴音は顔をしかめ、換気のために窓を開ける。

心地よい冷たい風がオフィスの中に入ってくると、その冷たい風を感じたのかもぞもぞとソファアの上で何か動く気配がした。

「あぁー鈴音さんか…：早起きだねえ…。」

「狂骨さん…：また呑んでたんですか…？。」

狂骨と呼ばれた、この八咫鳥3人のリーダーを務める白髪の中性的な存在が頭を押さえながら起き上がる。

普段はきつちり着ているスーツは派手に着崩され、ソファの脇に置かれたテーブルには500mlサイズのビールらしき空き缶がいくつも転がっていた。

着崩されたスーツから見える素肌には傷とは違う切れ込みのよう

な箇所がいくつも見受けられる。

散らかった空き缶を鈴音が片付けていると背後でぬーつと動く気配があった。

「おはよう…。」

「おはようございます、蠟螂坂さん…。」

朝からサングラス姿にきっちりスーツを着こなした女性を、鈴音は蠟螂坂と呼んだ。

しかし今朝はそのスーツの上からエプロンを着けており、その手には大盛りの朝食——特に朝から肉類が多い皿が持たれていた。

蠟螂坂は空き缶が片づけられたテーブルにすつとその皿を置き、隣に普段は狂骨が使っているのもあろうビールジョッキに並々の牛乳を注いで添えてくれた。

そして何を言うでもなく腕を組み、じつと鈴音と料理を見つめている。

鈴音はその視線に答えるようにテーブル前に座ると、静かに手を合わせて蠟螂坂に会釈した。

「…いただきます。」

こくり、と蠟螂坂が頷くと、鈴音は朝食を食べ始める。

その間も蠟螂坂はじつと鈴音を見ていた。

今日の献立はバターの匂いが香ばしいマフィンに山盛りのスクランブルエッグとポテトサラダ、そしてまだ油がしたたる肉厚のベーコンにウインナーがどっさり載せられていた。

鈴音としては大歓迎の量の朝食なのだが、じつとこちらを見てくる蠟螂坂の視線は少々気になる。

まずマフィンにかじりつくが、美味い。

おそらく市販品であろうが焼き加減とバターの塩梅でここまで変わるものかと感嘆する。

多少なりとも鈴音は料理はできるが、これには驚いた。

スクランブルエッグは半熟でさらにはチーズが入っており、適当に作るとパサつとした食感になりがちなスクランブルエッグがしつとりとしていて豊かな味わいになっている。

ポテトサラダも丁寧につぶされたジャガイモにしゃきつとした食感のきゅうりが良いアクセントになっていて、隠し味に入れたのだらうリンゴの甘みと酸味が舌の中に広がる一品。

添え物にするのはもったいないレベルだ。

そこで肉厚のベーコンにかぶりつく。

美味い。

旨い。

シンプルに美味。

焼き加減がこんがりと表面を焼きながらも焦げ付かせていない絶妙さ。

更にワインナーは恐ろしいことに手作りらしく、皮をパリッと噛んで中から広がる風味には様々なハーブやスパイスの風味があり、それが鼻まで突き抜けていく。

ハーブやスパイスという敬遠しがちな人間もいるがこのワインナーを食べると認識がかわりそうだと鈴音は思った。

そしてなみなみと注がれた牛乳が空になった頃、鈴音は大量の朝食をあっさり食べ終えていた。

「ごちそうさまでした。」

「…。」

「美味しかったです…とても。」

鈴音がそういうと螭螂坂は小さく拳を握ってガッツポーズをして、ささつと皿を片付けると昼食用の弁当を鈴音に差し出し、オフィスの裏にある台所へと消えていった。

鈴音は弁当が傾かぬようにバッグにしまい、洗面所に歯磨きに向かうとするとオフィスに声が響き渡る。

「にやあああああ!!! ペネトレイトとかいうクソカード使ってるじゃねえにやああああ!!!」

「うるっせえんだよ! 初心者相手にばんばん宝具カード使ってる馬鹿猫が!!!」

この調子だと花鈴は登校する気はなさそうだ。

鈴音も何度かプレイさせられたがいまいち面白さが理解できない

かったテレビゲームに夢中になる二人と温度差を感じつつ、歯を磨く。

花鈴は剣術一筋な鹿角家の雰囲気と仮面優等生を演じていたこともあってゲームに触れてこなかったが、いざ触れると夢中になっていたようだった。

しかし鹿角家のしがらみから解かれ自由になった花鈴の表情は明るく、鈴音としてもうれいところだった。

…学校までサボるくらいに夢中にはならないでほしかったが。

「では、行ってきます。」

「はい…頑張つてね…。」

「すーちゃんいつてらー!」

「いつてらっしやいにゃ!」

私物がとつ散らかったオフィスで暴れる化け猫と花鈴を尻目に鈴音はオフィスを出る。

オフィスがあるのはくたびれた雑居ビルの3階。

リズムよく階段を降り、郵便受け——鈴音が来るまで全く整理されていなかったが今では空になった中身を確認し、通学に向かう。

そこで鈴音は振り返り、雑居ビルの3階に申し訳程度に掲げられた看板を見た。

“八咫総合事務所”という一見何をやっているのか全くわからないう、連絡先も書かれていない簡素な看板を見て、小さく息をつく。

表向きは謎の事務所、裏では妖怪と戦う組織“八咫鳥”のメンバーたちがそろった妖怪退治専門の事務所。

先日の事件から花鈴と鈴音はその事務所に間借りさせてもらい生活をしていた。

学校に到着し、鈴音がクラスに入ると重苦しい雰囲気に教室が包まれた。

表向き、鹿角家で起こった惨劇は強盗による殺人事件として処理されている。

自宅にいた父と母が殺され、通報によってかけつけた警官によって犯人は取り押さえられたことになっていた。

先日の葬儀にも生徒代表として花鈴の所属する生徒会の会長が駆けつけてくれた。

まあその花鈴は面倒だからと出席を拒否したのだから。

今もまだ花鈴はシヨックから立ち直れていないと学校に説明して休ませている、現実には徹夜でゲームをしてサボっているだけなのだが。

こそこそと噂話が飛び交っているのが感覚が鋭敏な鈴音には聞こえていた。

曰く実は強盗を取り押さえたのは花鈴だとか、いや鈴音が強盗を半殺しにしたとかいう噂だった。

その内容にくだらないと眉をひそめる。

面と向かって騒ぎ立てる人間がいなければ申し込もうかと思いい、鈴音は授業の準備を始めた。

バッグの中からノートを取り出すと、蠟螂坂が包んでくれた弁当が見えた。

それを見て鈴音はふと事務所の八咫鳥のメンバーを思い出す。

まず彼らは人間ではない、妖怪の類の存在だ。

そんな彼らが八咫鳥という組織に所属している理由は、なんでも妖怪だったころ退治されかけたところを温情である人物に救ってもらったとか。

その人物が八咫鳥のトップであり、現天皇でもある安倍晴明あべはるあきだというのはさすがに驚いた。

国の直属だと聞いていたのでそれなりに権威がある存在がトップだとは思っていただけ、まさか天皇がトップだとは思わなかった。

『我々は晴明様に救われた恩を返すべく、こうして活動しているんだよ。』

リーダーである狂骨がそう説明してくれた。

花鈴はその言葉に少し顔をしかめていたが、妖怪にはそんな存在もいるということなのだろう。



しかし立場的には特殊な彼らは八咫鳥の本部から少し遠ざけられ、秋奈町の雑居ビルにちよつとした事務所をもらつてそこに住んでいる。

そこが八咫総合事務所だ。

彼らとしても妖怪同士でいる方が気楽らしく、妖怪退治をして八咫鳥から給料をもらいつつ気ままに生活をしているらしい。

個性的なお三方だった。

まずは化け猫。

その名の通り妖怪化した元猫であり、今は人の形を保って活動しているが頭には猫耳が生えている。

一応彼ら妖怪の名残を残すものは一般人から認識されないらしい、そもそも妖怪自体が姿を見せる意思を見せない限り見えないのだとか。

鈴音が知っていることは身長は150cmにも満たない小柄な体格で幼い顔つきをしているがヘビースモーカー。

白地に青い柄が入ったシンプルなデザインの煙草を愛飲しており、瞳は煙草の柄と同じ青色で綺麗な群青色にきらめいていた。

もっともその綺麗な瞳も徹夜明けの朝には淀んだ青に見えてしまうのだが…。

次に狂骨。

もとは恨みが募った白骨の見た目をしており、今でも肉体はもっていないのだとか。

今の肉体は八咫鳥の化学班によって製造された人工的な肉体であり、その肉体に狂骨が憑依する形で動いているらしい。

きつちりと普段着こなしたスーツの中身の肉体には関節部にいくつもの切れ込みが入り、稼働している。

肉体がいまいち男女区別ハッキリつかないのはそのせいで、本人も自分の性別に関しては分からないらしい。

一見真面目な性格をしているが生活はずぼらで天然気味、肉体は人工的なものだが不思議にも酒というものの酔いは感じるらしい。

本人曰くそういった人間らしい機能も搭載した化学班の技術の結

晶だといっていたが、テーブルに山積みにした空き缶を見て辟易している鈴音からするとそんな機能つけるなど言いたくなる。

最後に蠅螂坂。

曰くかまいたちと似た存在の妖怪らしく、八咫鳥によって保護されらしい。

なんでもかまいたちは今は数を減らしており、今では人間に害をなさぬよう伝承みたいに人の身を斬らず、悪戯にその行為をとどめるところで生かされているらしい。

妖怪も現実の生物の様に絶滅の危機に瀕するとは世知辛い話だと鈴音は思った。

本人の性格はいたって寡黙。

鈴音も物静かで寡黙と思われるがそれ以上であり、滅多に話さない。

ただ料理が好きらしく鈴音が多く食事を摂るタイプだと知ると毎回大量の料理を作ってくれるようになった。

感情がいまいちわからないが料理をほめると素直に喜ぶ、思ったよりも素直な性格なのではないかと鈴音は考えていた。

その目にはいつもサングラスがかけているが、その裏の目は人間の目ではなく虫の様な複眼になっており、それを隠している。

妖力のない人間からすると認識できないらしいが妖力を持つ八咫鳥の人間にはそのまま認識されるため、気遣いとしてつけているのだと。

その気遣いをもう少し口数を増やすことにあててくれれば鈴音としては楽であった。

「はあ…。」

思い出しただけでもあまりにも個性的なメンバーに小さくため息をもらす。

一応今は間借りしているだけでいずれ出ていくつもりだが、それまでは共同生活だ。

実家はまだ警察やそれに交じって八咫鳥の人間が出入りしており、立ち入り禁止の幕が立てられ保存されていて立ち入れない。

私があの変人？集団の中に入ってやっていけるだろうか。  
鈴音はそう思いながら始業の鐘が鳴る音を聞いていた。

「…なにやってるの鈴音ちゃん？」

「トレーニング…です…が？」

所用で事務所から離れていた化け猫を事務所で出迎えたのは、学校から帰宅した鈴音だった。

ジャージ姿でオフィスの隅…鈴音が片づけたのであろう空間で片手で逆立ちをしながら、腕立をしていた。

単純に考えて60キロ近い負荷が鈴音の片腕にはかかっているが、大量の汗をかきながら鈴音はそれをこなしている。

究極の自重腕トレーニングと言われる倒立片手腕立をまだ高校生の彼女がこなしているのだ。

「妖力…使ってにゃい…わよね…。」

「使い方…わかりま…せんから…。」

妖力と言われても鈴音には使い方が分からない。

花鈴は直感的に使えているようで、鈴音も人ならざる肉体になったことで妖力が身体に流れているはずだが、いまいちわからなかった。

それに鈴音にとってこのトレーニングは日課である。

「…。」

「どうか…しましたか…？」

「変人だにゃ…。」

「え？」

化け猫の言葉に、なぜとでも言いたげな鈴音の声が響く。

かくして八咫総合事務所は3人の変人集団から5人の変人集団へと姿を変えたのでした。

## 9話 初仕事

帝都の中央街、その町はずれの一角。

かつては一つのビルを中心に一見それとは分からない風俗店やいかがわしい飲み屋が密集していたが、今では見る影もなくさびれてしまった一角。

一時は夜であつても闇をかきけすように光り輝いていたビルも、今ではむしろ輝く町の光にかきけされる闇の様に光を失っていた。

その一角の廃ビルに、懐中電灯を持った一見して不良とわかる複数人の男女グループが入っていった。

おそらく度胸試しのとしてグループでここを訪れたのだろう。

場合によっては人気のないこの場でお楽しみという下心もあつたに違いない不良グループはどんどんとビルを進んでいく。

ビルには風俗店であつた名残らしき風呂やパネルが貼られていたであろう壁面、ほこりが大きく積もったシーツの山がありそんなものを見つげるたびにグループは下品な会話に花を咲かせ笑っていた。

入り口や通路にはもう使われていないであろう監視カメラが放置されっぱなしにされており、意外に綺麗だから外したら売れないかな、などというくだらない話をしながら一行は道を進む。

楽し気な笑い声が誰もいないビルに反響していた。

こだまのように彼らの声が無人のビルに響いた。

ザリ――

無人のはずの空間に、何かを引きずるような音が響く。

不良グループの顔色が一瞬変わった。

間違はなく、自分たち以外の何かがいることを彼らは察した。

それが動物かここをねぐらにしている浮浪者かはたまたビルの権利者か、それは分からないが彼らはそれに動揺し、いそいそと踵を返し始める。

彼らの根底には結局幽霊などいないという考えがあつたが、生きている人間がいる可能性に考えが至っていなかった。

ザリ――

彼らの目の前にそれは表れた。

派手なダブルのスーツを着込んだ、恰幅の良い男性。

ただの人間ならよかったが、違った。

かつてはブランドものの綺麗なスーツであったそれは血にまみれて引きちぎられたように一部が欠損しており、その切れ目に既に固まった血がへばりついていった。

その肌は青白く染まり、生气というものが感じられず、目は白く濁り切っていた。

明らかに生きているそれではない。

死体だ。

死体のはずである。

しかしそれは呼吸をしていた。

くぐもった声を、声というより獣が唸る音の様に息を吐きながら、もはやなにも映らないはずの濁った瞳で彼らを見つめていた。

悲鳴がビルに反響する。

男女問わずに彼らは悲鳴を上げ、死体が立っている反対方向へと走った。

そのうちの男一人が何かに躓いて転ぶ。

擦りむいた傷には目もくれずに必死に立ち上がろうとするが、立えない。

何故だ。

転んだ男は足元を見た。

ナニかが足を掴んでいた。

先ほどまでいなかった、いやなかったはずの死体が道に転がっており、そいつが足を掴んでいた。

必死に助けを求めるが仲間には既に先に逃げてしまい、男の目の前から姿を消していた。

男は泣き叫びながら本能的に掴まれた足を駄々っ子が暴れる様に蹴り飛ばし、もがくように立ち上がって逃げる。

男は仲間の姿を探すべく必死に走りながら周囲を探す。

そのとき、悲鳴がビルの通路を反響した。

悲鳴をたよりに男が通路を進み、曲がり角を曲がった先は、赤く染まっていた。

死体が仲間の一人にかみつき、喉から赤い血を噴水の様に吹き出している。

その光景が信じられず、男は呆けた様にそれを数秒見つめ、そして悲鳴を上げた。

同時に男の肩に何かが触れる感触と、腐ったような死臭が鼻を突いた。

首筋を、熱い感覚が覆う。

何か大事なものが零れ落ちる感覚と、世界から色が消え、白黒に染まる感覚。

身体力が抜け、後ろから覆いかぶさる十二かの呻き声。

手足の感覚がなくなると同時に首筋を再度熱い感覚が覆うと、男は意識を手放した。

その身体には大量の死体が食らいつき、肉を頬張っていた。

そしてそれを眺めるように監視カメラが、動いていないはずの監視カメラがチカチカと電源ランプを輝かせていた。

ジュージューと、肉が金網の上で焼ける音と香ばしい匂いが辺りに漂う。

大量に肉と野菜が盛られた皿がテーブルに置かれ、それらに囲われるように金網が設置されている。

周囲は賑やかな喧騒に囲まれ家族連れから学生サークルの様な面々、サラリーマンの集団などそれぞれ肉を楽しんでいた。

そこに馴染むように黒いスーツの3人とまだ学生であろう女子2人がテーブルを囲んでいる。

そのうちの一人が琥珀色の液体に満たされたジョッキを手に取り、んんつと喉を鳴らした。

「えー、この度は鹿角鈴音さん、鹿角花鈴さんが退魔士見習いとして八

咫総合事務所に入所されたことを祝——」

「あーリーダー、そういうのいいから乾杯はやくー！」

リーダー、狂骨が長々と言葉を続けるところを化け猫が遮る。

狂骨が続けようとした通り、今日は鈴音と花鈴が退魔士見習いとして3人の元で働くことが決定した祝いの席だ。

そのために5人はチェーン店の焼き肉屋に足を運んだのである。

「あー、では、かんぱーいー！」

「かんぱいにゃー！」

「かんぱーいー！」

「かんぱい」

「…乾杯」

微妙に個性の出る乾杯を交わし、それぞれのジョッキに注がれた飲み物を飲む。

鈴音はオレンジジュース、花鈴はコーラ、化け猫はカルピスサワー、螭螂坂はお茶を飲んでいる。

狂骨はビールを少し口の端からこぼしながら豪快に一気に飲み、飲み干すと同時に店員に声をかけていた。

八咫鳥の三人はいつも通りの黒スーツだが鈴音と花鈴は私服だった。

花鈴は白いTシャツにジーンズにスニーカー、手には革のバンドが巻かれた腕時計とシルバーのバンブル着けている。

シンプルなコーデだが高身長でモデル体型の花鈴が着るとしっかり決まっている。

鈴音は黒いブラウスに黒いロングスカートとヒモブーツを身に着けていた。

鈴音は私服をジャージしかもっていなかったが、花鈴に無理やり服屋に連れていかれて揃えたコーデである。

ブラウスもゆったりしたサイズのもので動きやすく、ロングスカートも動きにかなりゆとりがあるものをチョイスしたため鈴音もこれなら良いと購入したものだ。

そんな二人を狂骨は見ながら運ばれてきたジョッキを受け取り、一

口煽ってから口を開く。

「いやー、まさか君たちが退魔士になるなんて……とも言えないかな、もともとそういう家柄だったみたいだし。」

「鬼は鹿角家を妖殺しと言っていましたから、かつてはそれなりに知られていたようです。」

鈴音が狂骨の言葉に答える。

姫斬りが伝わっていたことや伝聞からそれは分かっていたが、八咫鳥にも鹿角家に関してほぼ情報がなかった。

妖怪の間ではそこそこの名が伝わっているのに公的な組織にほぼ名前が知られていないのは裏を感じるが、今はそこを考えても仕方ない。

「まあ私めっちゃ強いし、あいつらぶっ倒してお金もらえるなら最高じゃん？」

カルビを2，3枚一気に掴んで口に運びながら花鈴が言った。

鈴音も牛タンを一枚口に運びつつ、言葉を続ける。

「とはいえ、本当に見習いにしてもらえるとは思いませんでしたが。」  
「八咫鳥は人材を厳選している分、才能ある退魔士は大歓迎だからね、それも鬼を倒せるほどとなれば十分。」

「いえ、しかし姫斬りの力も謎のままですし——」

持ち主の花鈴自身も気にしていないが、姫斬りの力ははたして大丈夫なものなのかと鈴音は考えている。

力が暴走したりしたら、と懸念しているが、そんな鈴音を見て化け猫が口を開く。

「妖力も安定してるし、今すぐどうこうってことはないと思うわよ鈴音ちゃん。それより妖力を馴染ませて自分の異変とかそういうのに気付ける方が今は大事。」

安心させるようにそう言った。

退魔士になる、ということ妖力を使いこなすということ。

鈴音も一切感じられなかった妖力が退魔士になるための短期訓練によって感じ取ることができるようになった。

花鈴は訓練する必要もなく妖力を使いこなす術を天性の才能で身



に着けていたが、才能がない鈴音はそうもいかない。

だが本来ならもっと長期の訓練を要するはずなのだが鈴音は元々鹿角流の鍛錬によって肉体的には相当鍛え上げられており、妖力に關しても八咫総合事務所の面々が引くほどの集中力で身に着けた。

今では鈴音も大通しを扱えるほどに妖力を使うことができている。

訓練の日々を思い起こしながら鈴音が甘いたれを存分につけたホルモンを口に運びご飯を食べる。

そんな鈴音を見て化け猫が口を尖らせた。

「てか、私からすると鈴音ちゃんの方が心配なんだけど。」

「…何故ですか？」

まさか私の妖力こそ暴走の気配があるのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。

「鈴音ちゃんの修行のやり方よ…。」

「…マニュアル通り、禪を組んで心の中を探るようにしたのですが——」

「それを一日ぶつ通しで飲まず食わずやったのは誰かにやあ？」

「…ですがそこまでしないとできなかつたので。」

そう、鈴音に才能は全くなかつた。

靈劍という、自分の妖力——いや、靈力といったか。

それを放出することができるようになると自動的に劍の形に形成されるため、それを武器にする術を学んでいたのだが鈴音はそれに非常に時間をかけた。

場合によるが素質がある人間なら1時間も頑張ればきつかけがつかめるその修行を、驚異的な集中力を駆使して1日を費やすことでもうやく掴めたのだ。

しかしそれでも靈劍を形作ることではできなかつたものの、大通し——化け猫も愛用している八咫鳥の化学兵器であり、違った形で靈劍を具現化できる兵器。

それを発動させ扱えることはできるようになった。

同じ化学兵器であり狂骨が愛用している靈銃、靈力を弾丸として放つ兵器も半日近く射撃姿勢のまま集中し、初めて撃てるようになった。

程だ。

今でも扱いなれない銃器という形の霊銃を鈴音はまともに扱えないが、無心で扱える剣という形の大通しはすぐさま発動できるようになったため、晴れて見習いの身になったのである。

「鈴音は…すごい…。」

「ども…。」

蟬螂坂が賞賛の言葉を短く伝えてくれるが、鈴音からするとできないならでできるまで行うことが当たり前であるため、むしろ時間をかけてしまっていることを恥じていた。

「いや…身体だけは壊さないようにね、私と違って替えの利く身体じゃないんだから。」

ジョッキを空にしながらか骨が言う。

既にジョッキで三杯目、わずかに顔が赤らんでいる。

その顔はまさか身体が人工物とは思えないほど自然で、人間らしかった。

「…肝に銘じます。」

「だいじよぶだいじよぶ、すーちゃんの頑丈さはガチだから。」

花鈴がそう言いながらさらーっと隣にいた化け猫のカルピスサワーを拝借して口に運んでいた。

あまりにも自然で一瞬誰も気づかない、こういった人の隙をつくことが花鈴の天性の才能であった。

ほんの一瞬遅れてから気づいたのは鈴音一人だけである。

「花鈴、ほどほどにな。」

「あちやくやっぱすーちゃんは鋭いなあ。」

「へ？にゃああああ!?にゃにしてんだこら未成年!!!」

化け猫が思い切り花鈴にチョップをかまそうとするが、あっさりとそれを回避して花鈴がもう一口カルピスサワーを飲む。

二口飲んだところで花鈴は顔をしかめた。

「なにこのちよつと苦い感じ、まじい。」

「クソガキが飲むからだ馬鹿!」

化け猫が花鈴の持ったカルピスサワーをひったくるように奪い返

し、顔をしかめる。

「この妹にどういう教育してんだお姉ちゃんは！」

鈴音の方を向いて化け猫が声を上げる。

ハラミにたれをつけ、いつの間にか2杯目になった大盛りライスに載せながら食べていた鈴音は少し困ったように目を細める。

「すみません…今まで束縛されていた分自由にさせてあげたくて…。」

「それにしても甘々すぎるっての…。」

化け猫の言葉に鈴音は少しばかり反省する。

たしかに学校をサボらせたり今の飲酒を軽くしか咎めなかったり少々度が過ぎて甘かったかもしれない。

しかし、花鈴に甘えられるとどうも鈴音は弱かった。

「まあまあまあ若い子にはありがちなことじゃないのおく祝いの席だし寛大にい〜！」

「リーダー…もう5杯目ね。」

顔が真っ赤っかになった狂骨が場をなだめるように言い、その姿に呆れるように化け猫が言う。

「そんなに飲んで、急に仕事が来ても知らないわよ。」

「しよんなこと言わない〜とかそういうこと言ったら仕事っていうのは——」

テテテテテテレレン♪

テテテテテテレレン♪

「「「「…。」」」」」

そう言った瞬間リーダーの、狂骨のスマホが鳴り響いた。

無言がテーブルを包む。

赤かった狂骨の顔面が真っ青になり、化け猫はやってしまったとばかりに顔を曇らせた。

蠅螂坂も一見変わらない表情を微妙に歪ませており、鈴音も気まずそうに視線を逸らす。

その中で花鈴だけが笑いを必死にこらえていた。

「お電話行ってきます…きつと大丈夫だよ！」

狂骨はそういうが、狂骨が場を離れたとたんやばい！と鈴音、化け

猫、蠅螂坂が金網に残った肉をかきこみ、テーブルの肉を一気に焼き始める。

「ぷっ、くふふ…あんな…思い切りフラグ…くっ、ははははははは！」  
「笑ってねえでてめえも食えにやあああああ！！！！」

焼肉屋に化け猫の声が響き渡る。

その後、狂骨は顔を青ざめさせたまま席に帰ってきた。

鈴音、花鈴。

二人の初仕事が始まった。

## 10話 信頼

酔っている狂骨に代わり、蝟螂坂が運転する高級車に揺られながら八咫鳥の面々は事件現場へと向かっていた。

なんでも中央街の町はずれにある廃ビルで妖力の発生を確認、その後付近の監視カメラの映像から男女グループがそこに向かっていたことが発覚。

その廃ビルは過去に暴力団の抗争によって多数の死者を出していた曰く付きの物件であった。

それを知る住人たちは誰もその場に近寄らなかったが、世代が変わったことでそれを知る者も少なくなり、ついに今回の様に入り込む者が出てしまった。

「多分だけど、ああいう曰く付きの場所には妖怪の類が湧きやすい、そこに巻き込まれたんだろうね。」

酔い覚ましに窓を開けながら助手席に座っている狂骨が青い顔で言った。

曰く一気に現実を突きつけられて酔いがさめ、悪い酔いが身体に周ったのだと言っている。

鈴音はそれを見ながらなぜこんな酔う機能を付けたかと化学班を問い詰めたくなった。

「ま、生きてるとは思えないし、二人とも…嫌なもの見ると思うけど覚悟しておくのよ。」

後部座席で窓を開けながら煙草をふかし、紫煙にまみれた化け猫が言う。

「はいはい、嫌なもんはちよつと前にさんざん目の前で見たから今更びびんないって猫ちゃん。」

「こら花鈴…気遣いすみません、化け猫さん…。」

気にすんな、と化け猫が小さく手を振り窓から少し顔を出して煙を吐き出す。

「リーダー…作戦は…。」

機械の様にギアチェンジを行いスムーズにカーブを曲がりながら  
蟻螂坂が問う。

「作戦は…とりあえず5人で固まって動こうかとは思いますが現場次第  
だね、3人ならともかくこの人数で狭い通路で戦うと危ないし。」

「狭い通路…か。」

鈴音は考える。

狭い通路なら斬るよりも刺突を主に使うことになるだろうが、刺突  
は殺傷力は高くとも戦闘力を奪うことに関しては斬撃に比べて低い。

突きは相討ちになるから使用は控えるべきだという文が遺されて  
いる剣術流派もあり、はたして実戦で使うとどうなるのかと鈴音は思  
案して、やめた。

どうせ実際に刀を振るうなど初めての経験だ、あれこれ思案してい  
てもどうせ想定外の出来事が起こる。

自分がそういった死の恐怖に体が固まらないということはあの鬼  
が存分に教えてくれた。

そしてそれを楽しいと感じたことも。

鈴音にとつて不安なのは花鈴であった。

並外れた才能を持ちながらも花鈴は鬼の襲撃の際、鈴音に助けの声  
を上げるほど怯えきっていた。

いくら膨大な力があるうとも大丈夫であろうか、そう不安に思う鈴  
音が花鈴に視線を向けると、不服そうな表情を花鈴が返す。

「なーにすーちゃん？私が心配？」

「それは…うん、そうだ。」

正直に鈴音は言う。

花鈴に嘘は通じない。

それを聞いて花鈴は苦笑を浮かべた。

「大丈夫、もうあの時の私じゃない…。」

「花鈴…。」

「本当のこと言うとき、滅茶苦茶むかついてんだよ私は…。」

そつと胸に手をやりながら花鈴は言う。

「あれだけ持ち上げられといて、いざとなったら必死にすーちゃんに

助けを求めた私にさ…。」

「それが普通だ…。」

「でもすーちゃんは違ったじゃん。」

ぐいっと隣の鈴音に顔を近づけ、花鈴はその瞳をじっと見つめながら言う。

「あの鬼と、人の身体のままやりあつてさ…本当にさ、かつこよかつた。」

「夢中なだけだったよ。」

そう鈴音が言うと花鈴は呆れたように肩をすくめ、顔を離しシートにどっかかり座りなおした。

「…やめよつかすーちゃん、とりあえず私は大丈夫だから。」

「分かった、信じる。」

鈴音は花鈴の顔を見て大きく頷き、そして視線を前に戻した。

既に車は中央街のはずれ近くまで来ていた。

もう間もなく、二人の初仕事が始まろうとしていた。

「なんだこれ…どうなっている…?」

目的のビルに到着すると車内に装備された勾玉を使い狂骨が神域を発動させた。

そして同時にビルの内部に存在する妖力を探知すると戸惑いの声を上げる。

その様子を見た花鈴も妖力を探り、ひゅーと口笛を吹いた。

「ビル全部にもやみたいに妖力がかかってんねー、これ、ビル自体が妖怪とか?」

「いや、それよりも小さい妖力を持つ小物が大量に蠢いてる感じかじゃ。」

化け猫がそう推論を言う。

「こども妖力が分散していると、親玉を見つけてるのも困難だ…。」

狂骨が困惑したようにつぶやく。

曰く、例えば餓鬼の様な力の弱い妖怪は集団で動き、更にそれを親

玉として鬼のような強い存在が纏めていることが多いという。

しかしここまで数が多いことは狂骨も初めてだと言う。

「あまり戦力を分散させたくはないが、こうなつては仕方ない、探索幅を広げるために3人と2人の二手に別れよう。」

「じゃ、私とすーちゃんは分けてもらつていい？」

「花鈴…!？」

「見せたげるよ、私、すーちゃんがいなくてもできるつてこと。」

堂々と鈴音の目を見て言う花鈴に、鈴音が思わずたじろぐ。

その姿を見て狂骨が肩をすくめた。

「オーケー分かった、じゃあ花鈴ちゃんは私と化け猫、鈴音ちゃんは蠓螂坂と組んで突入してもらおう。」

「狂骨さん…。」

「大丈夫、花鈴ちゃんには私たちがついてる、そつちこそ蠓螂坂と二人、危険なことには変わりないんだ。大丈夫だね。」

じつと狂骨が鈴音を見つめる、その視線に迷いながらも、鈴音はしっかりと頷いた。

「分かりました、よろしくお願いします。」

「グッド、妖力による通信は訓練で習つたね、いざというときはそれで連絡を。」

とんとんと狂骨は自分の首筋辺りを叩いて言う。

声帯の辺りに手を当てて話し、当てた指を発生源にするように妖力で他者に言葉を伝える通信機の変わりの様な連絡手段。

他のグループがこのような手段を取って会話しているのか分からないが、鈴音はこの方法を三人から学んだ。

鈴音は試しに首筋に手を当て、狂骨に話しかける。

『これでよいですね?』

『OK!では行くかうか!』

頭の中に声が響くような独特の——以前に息が絶えかけた鬼が話しかけて来た時と似たような感覚を鈴音は覚えながら会話した。



5人がビルに突入した途端、ひどい死臭が鼻を突いた。  
新鮮な血なまぐさい臭いではなく、腐った肉が放置されたような悪臭だった。

その臭いに全員が顔をしかめる。

「この臭い…妖力がある者にしか感じないのかな？」

「そうでしょうね、少なくともこんな臭いがするならビルに入らずにすぐ帰るわよ。」

銃を構える狂骨が戦闘を歩き、その後ろに化け猫が着き、殿は蝸螂坂、殿との間に鹿角姉妹を挟むようにしながらビルを入ってすぐ、おそらく待合室であった広い空間を見回しながら会話をする。

「うーん、嫌な感じ。」

花鈴がボソツと呟いた。

たしかに嫌な雰囲気は一体に漂っていることを全員が感じている。

しかし花鈴は別の感覚を感じるかのようにそう呟いた。

少し進むと上に進む階段が二つ。

非常階段であろう階段と、普段使いに使われていたのでであろう階段。

「ここで二手に分かれよう、私たち3人は普通の階段、2人は非常階段を。」

「心得た…。」

狂骨の言葉に蝸螂坂が頷き、鈴音について来いと肩に手を置いて促して非常階段に歩みを進める。

その背を追う様に鈴音が後に続き、別れ際に花鈴に一言言葉を残した。

「信じてるから…。」

「私も。」

鈴音の言葉に短く花鈴が返す。

そうして彼らはそれぞれ別の階段を、警戒しながら上って行った。

## 11話 カマキリと剣狂者

鈴音は蟻螂坂の背後に着きながら周囲を警戒しつつ歩いていた。

このビルは7階建ての大きなビルであり、非常階段と思わしき狭い階段を上っていたが4階部分で階段が崩れ落ちており、一旦上に行くことをあきらめて再びビル内部に入ったのだ。

非常階段脇のさびれて動かなくなった開かない扉を無理やり蟻螂坂が蹴り破り、内部に入る。

その先にあったのは広い部屋だった。

過去は風俗ビルだったと聞いていたがそこは風俗店の名残はなく、机や椅子が撤去されたオフィスの様な広い空間だった。

しかしよく観察してみると壁面には弾痕のような跡があり、壁紙や雰囲気からことなく、暴力団の事務所の雰囲気を感じさせた。

実際にそんな事務所を見たことがないので鈴音には本当かはわからないが、過去に暴力団の抗争があったという話は聞いた。

おそらく風俗ビルの階の一つに事務所を構えていたのではないかと推理する。

鈴音はロングスカートを留めているベルトの左腰に差された大通しに触れ、身構えた。

大通しはその柄のような形状の両端から刃を放出させることができ、場合によっては分離させて使用することも可能だが、鈴音はただ一振りの打刀として片刃のみを放出させることを好んだ。

というより柄の前後に刃がある武器の使い方など、鈴音は習得していないというのが一番の理由である。

一方蟻螂坂は素手のまま、剣呑な雰囲気を漂わせているだけで何も準備していない。

しかし鈴音はこれが彼女のスタイルであることは知っていた。

素手、それが彼女の流派である。

「鈴音…。」

「はい…？」

「来る…。」

短く、蠍螂坂が言った。

途端にゾツと、妖力に疎い鈴音にも感じられるほどのハッキリとした妖力の気配が身体を通り抜けた。

ザリ――

何かを引きずるような音が、無人のオフィスに、いや、オフィスの半開きになった通路に通じている扉から聞こえた。

そしてその扉を押しよけるように、やつらは現れた。

「死体…？」

鈴音はやつらの姿を見るなりそういった。

動く屍、そう形容する以外に他はない存在が、そこに存在していた。やつらは扉をくぐった一体に続き、二体、三体と一気にオフィスになだれ込み、その濁った白い目で鈴音たちを感知してずりずりと腐った足を引きずりながら歩みよってくる。

そして一定の距離に近づくと吠えるようなうなり声を上げ、距離を一気に詰めるように2人に向かって掴みかかってきた。

「勢！」「嘖！」

掴みかかってきた一体の屍が、後ろにいた他の屍数体とまとめてオフィスの壁にむかつて突き飛ばされる。

そして他の一体が脳天から真つ二つに切り裂かれていた。

蠍螂坂と鈴音、それぞれに掴みかかった屍であった。

蠍螂坂はとん、と前に向かって右足を踏み出し、床に踏み込む綺麗な音を響かせながら右腕を突き出して、屍を突き飛ばしていた。

鈴音は屍が間合いに入った瞬間、抜刀術の様に存在しない大通しの鞘を左手にイメージしながら腰を引き、その刃を発現させながら上段から一気に振り下ろした。

抜刀術というと横から切りつけるものが主だが、上から真向に斬り下ろす型、逆に切り上げる型、逆手で脇差を抜く型なども多く存在する。

それを皮切りに、波の様に怒濤の数の屍たちがオフィスの扉から2

人に向かって押し寄せる。

蠍螂坂はスカートの深いスリットから足をあらわにさせるように深く腰を落として急所——正中線を庇う様に掌と膝を前に出していた。

以前鬼がやったような古流の武術を色濃く残す構え。

その肉体には全身に余すことなく妖力が満ちており、まるで陽炎が揺らめいているようであった。

鈴音は右肩に担ぐように刀を構え、右足を引き左足を前に出している。

八相の構えとは違い、天に突きたてるような構えではなく切っ先が斜め後ろを向くような構え。

対人相手であれば鈴音は使わない構えだ。

振りが大きくなることで隙が大きくなるため通常使わなかった。

しかしこの構えは構えた状態を維持しても疲労が少なく、継戦能力が高いことは大きな利点だ。

さらに斬撃の威力自体は振りが大きくなるものの強くなる。

霊剣を模した実体の無い大通しの斬撃に物理的な概念が通じるかは分からないが、鈴音は身体が動くままにそう構えていた。

人間相手なら手首を半ばまで、10センチに満たない幅を切り込めばそれだけで終わるが、目の前の屍相手にはそうはいかないだろうと鈴音は判断した。

蠍螂坂の前に三体、連なったように屍が襲い掛かる。

まず蠍螂坂は目の前の屍の顔面に右の裏拳を叩き込み、身体が右に流れる動きのままに腰を捻り左の逆突きを追い打ちで叩き込んだ。

ぐしゃつと骨がつぶれる音と共に腐った屍の顔面がへこみ、衝撃に大きく身体をのけぞらせる。

蠍螂坂はそこで右腕を鞭の様にしならせ、手の甲を屍に向けるように腕を捻りながら拳を独特の形に握り、思い切り振りぬいた。

その一撃でハンマーで横から殴り飛ばされたように屍の身体が吹き飛び、その肉体から妖力を霧散させながら地面に叩きつけられる。

どうやらこの屍たちは許容量を超える損傷を肉体に受けると妖力

を失って再び屍に還るようであった。

そして次の屍を相手に構える蠮螋坂の手、その指はまるで鳥のくちばしのように三本の指をそろえて突き出されており、手首をまげて鎌の様にしている。

その構えを見て鈴音には蠮螋坂が、まるで一匹の巨大なカマキリの様に見えた。

“形象拳!”

鈴音はカマキリを思わせるその構えをみてそう感じた。

形象拳とは動物や生き物を模した拳法であり、鈴音は話には聞いていたが実際に見るのは初めてであった。

強いて言うならカマキリ拳法といったところかと鈴音は思う。

更に迫る屍に対し蠮螋坂が——巨大なカマキリが動く。

陽炎の様に揺らぐ妖力がその輪郭を微かにぼかしているせいか、鈴音には蠮螋坂の姿がそう見えてしまった。

カマキリは屍がこちらに掴みかからんと突き出した右腕に対し、右鎌を引つ掛けるように使いながら勢いをいなくした。

そして裏拳の要領で左鎌を屍の顔面に振るう。

のけぞったところに、足裏を用いて屍の膝を横から蹴り砕いた。

支えを失った屍が、崩れ落ちる。

崩れ落ちた屍の顔面に、またしても鞭の様にカマキリが鎌を振りぬいた。

ごぎり、と頸椎が破壊される音を響かせ、屍がその身体から妖力を霧散させる。

三体目、連なつた最後の一体が両腕を突き出してカマキリに襲い掛かった。

カマキリは対して両鎌を使った。

屍の両腕に対し、その腕を鎌でとらえると小さく円を描くように鎌を回転させて跳ね飛ばし、がら空きになった屍の胴体に思い切り膝蹴りを叩き込む。

格闘技や武術の様に鳩尾や金的に叩き込む膝ではなく、胸骨の中心辺りを穿つような膝。

臓器にダメージを与えても無駄であろうとカマキリは考え、あえてその個所を狙ったのであろう。

上半身に衝撃を与えられ屍が大きく後退る。

空いた距離を利用し、カマキリが大きく踏み込みながら両鎌を掲げた。

まるで大きな相手にひるむことなく身体を大きく見せ、威嚇するカマキリの様であった。

「殺<sup>シヤア</sup>!!!」

カマキリが鎌を振り下ろす。

その瞬間、まるでかまいたち…真空波の衝撃で切り裂かれたように屍の身体が裂けた。

ばつてんを描くように十字に身体を四分割された屍の肉体から妖力が霧散する。

そしてまたカマキリは構えなおした、目の前の屍の群れに向かって。

「…凄い。」

思わず鈴音はそう呟いていた。

カマキリ——螳螂坂の技に関しては訓練期間中に幾度か目にしたが、実戦で目にしたのはこれがもちろん初めてである。

妖力を本気で使うところまでのものになるのかと鈴音は感嘆し、同時にまだまだ自分は修業が足りないことを実感した。

今日の実戦で、少しでも追いつく。

鈴音はそう決意し、目の前から屍に迫る対し、構えた。

左右から二体、ほぼ同時に襲い掛かってくる。

相手が間合いに入っても鈴音は動かない。

今の状態で片方の屍を普通に斬ればもう片方に襲われる、そう判断したのだ。

屍が二体そろって腕を伸ばす。

鈴音はその動きに対して大通しを担ぐように構えたまま、左側から襲い掛かってくる屍の右腕の下をくぐるように姿勢を低くして体捌きを行い、屍の側面に回り込む。

回り込んだ時には屍の右腕は身体から斬り離されていた。

鈴音は屍の腕をくぐった際、肩に担ぐようにした大通しの刃を屍の腕に沿わせ、腕の振りを使わず体捌きを利用した斬撃を放ったのだ。脇の下や腕の内側は人体の太い血管が走った急所でありながら、甲冑では保護されていない部分である。

古式の甲冑剣術に残されている技法であり、鹿角流にも同様の技術が残っているのだ。

この動きはその技術の応用である。

腕をなくした屍が、いつの間にもやら隣に動いていた鈴音につかみかろうとするがその足がもつれる。

腕をなくしたのだ。

重心が変化し、まともに立てる訳もない。

足をもつれさせる屍に、鈴音が大通しを振り下ろす。

さっと体を入れ替え、左斜め上から右下に、逆袈裟と言われている角度を一息に振りぬいた。

腐った血が辺り一面に飛び散り、生きた屍は本当に屍となって地面に倒れこむ。

そうか、と鈴音は無意識に自分が使った技の結果を見てほほ笑んだ。

滅多に笑みを浮かべない鈴音がほほ笑んだ。

腕を斬りとばせば身体の重心が崩れる、つまり――

鈴音は残された一体に対して大通しを振り下ろしたまま下段に構える。

残った一体が鈴音に向かって突き出してきた右腕を、下段からの切り上げで半ばほどから切断した。

その一撃で屍はつまずいたように重心を崩し、前に向かって倒れこみそうになる。

まるで鈴音に頭でも下げるように晒しだされた屍の後頭部が次の瞬間には肉体から切り離されていた。

そうか、こうすれば胴体を斬る間合いより遠くから、より安全な間合いから必殺の一刀に繋げることができるのか。

鈴音は笑っていた。

自分の技術が、才能がない自分が天才に追いつくために狂ったように身につけた技術がこうして使えることに、笑っていた。



## 12話 糸引き

『戦闘突入、敵は動く屍、正体不明。』

花鈴、狂骨、化け猫の三人チームに蠶螂坂の妖力による連絡が入る。昔は客室に使われていたのであろう、風呂の設置された一部屋を探索していた一向はその言葉に顔をしかめる。

「動く屍…てつきり餓鬼辺りかと思っていたが。」

聞いたことのない敵の正体に狂骨が首をかしげる。

「てかさ、妖怪も生き物なんでしょ？まだ見てないけど死体が動くなんてあんの？」

「普通はあり得ないわよ…だからびびくりしてるの。」

「流石に実際その相手を見てみないと分からないね。」

花鈴の言葉に化け猫と狂骨も困ったように目を細めた。

妖怪とはいっても実際に臓器や神経が存在するれっきとした生き物である。

常人には感知ができない故に一般的に認知されてはいないが本質的にはそうであった。

「てことはなに？誰かが人形みたいに死体を操ってるってことかな。」

「まあそう考えるのが自然だが…。」

何かこの怪異に関する手掛かりはないかと、狂骨が妖力の痕跡を探しつつ言う。

その時、ゾツとずる妖力が放たれる感覚が三人を襲った。

ヒヤリとした水滴が背筋を通るような感覚に三人が身構える。

ザリ――

足を引きずるような音が響く。

それと同時にずり、ずり、と何かが這いずるような、そんな音が聞こえた。

狂骨と化け猫が部屋から通路につながる扉に身体を向ける。

ただ花鈴だけはその場に立ったまま、何かを考えるように顎に手を当てている。

「うーん。」

「おい花鈴！なにしてんのあんた!？」

「多分そつちだけじゃなくて——」

化け猫の言葉に花鈴が天井を見上げながら呟く。

天井には換気に使われていたのだろう大型のダクトがあり、そこにもうけられた格子戸は衝撃を与えれば壊れそうな程朽ちていた。

ドン、と部屋の扉を突き破り、動く屍たちが部屋の中に雪崩れ込む。

同時に金属が破断する音と共にダクトの格子戸が落下し、その中からも屍たちが室内へと落下してきた。

「ほらね！」

花鈴が左手を鞘に見立てるように右手に添え、眼前に落下してくる屍に向かい抜刀術の様に横薙ぎに振るう。

次の瞬間には動く屍は動かぬ死体となり、地面に落下していた。

その右手にはいつの間にか発現していた姫斬りが握られている。

「挟撃か!？」

狂骨が声を上げながら目の前の屍に霊銃を発砲する。

その構えは真つすぐ銃器を前に突き出すような標準的な構えではなく、手と手を重ねるように銃を握り、両肘をまげて銃を眼前で構える近接戦に特化した構えをしていた。

霊銃の一撃で屍が吹き飛び、沈黙する。

餓鬼の様な下級の妖怪程度ならしつかり急所を狙えば一撃で粉碎するその威力は並ではなかった。

「やつぱり裏に糸引いてるやつがいるわね！」

化け猫も懐から大通しを抜き、鈴音とは違い柄の前後から両刃を発現させる。

そのまま化け猫は狂骨の射線を遮らぬように姿勢を低くすると腰のあたりに大通しを構え、屍の群れの中に突っ込んだ。

突っ込んだ群れの先頭にいた屍の腕をかいくぐり、瞬時に足——というより股関節の前後を入れ替えるように身体を反転させ、その力で屍の身体を半分にぶった斬る。

そして群れに背を向けるような姿勢になりながらも背後から掴み

かかってきた屍に馬が蹴る様に後ろ蹴りを放って蹴り飛ばす。

更に群れに向かって身体を向きなおしながら回転する動きで一体、更にまた身体を転回させながら一体、一体、一体と舞う様に円を描きながら屍の群れを斬り刻んでいく。

狂骨の動きも尋常ではなかった。

近接専用の独特の構えのまま、銃を持ったまま自分に迫る大量の群れを捌ききっている。

目の前の屍の頭に霊銃を撃ちこみ、即座に側面から突き出された別の屍の腕を頭を伏せて避けつつ肘を突き出し、強烈なエルボータックルで屍を転倒させる。

床に倒れた屍にとどめを刺さずにくぐさま反転し背後から新たに掴みかかる屍の腕を銃を持たない左手で捌きつつ脳天に一発。

さらに振り向かず右手を後ろに回し、倒れた屍に発砲し始末した。

今度は胴に向かってタックルの様に突っ込んできた屍の腕が腰に周る前に左手で襟をつかみ膝蹴り一閃。

その後頭部をハンマーで叩き割るように銃床でぶん殴り、力ずくで粉碎。

呼吸を止めた屍を盾にするように掴み上げると、前蹴りで前方に蹴り飛ばし怯んだ他の屍の脳天を複数、的確に撃ち抜いた。

数分後――

雪崩れ込んだ動く屍の群れは完全に沈黙し、床に折り重なるように倒れ伏していた。

「これで一旦全部っばい？」

花鈴はべつとりと姫斬りの刀身についた腐臭のする血に顔をしかめ、ぱっばと何度か血振るいをしてから己の肉体に姫斬りをしまった。

「そのようだね、しかしこの死体の正体は――!？」

狂骨が屍を調べようと膝をついた途端、妖力が霧散するように屍たちは消え去り、その場には戦闘によって荒らされた客室のみが残る。

「これ、妖力で作られたってことよね？本物の死体を操ってるわけ

じゃなくって。」

「そのようだね…これは。」

刃を収めた大通しを懐にしまいながら化け猫が言い、狂骨が頷く。「ふーん。」

話を聞きながら花鈴が先ほどまで感じていた嫌な気配を探るべく目を閉じる、しかし上手く妖力を感知できなかったのか別の気配を感じたのか。

思案する狂骨と化け猫を尻目に部屋から出て通路を見渡し、ある何かを発見すると納得したように頷いた。

「あー、やっぱりかあ。」

「やっぱりって、何よ花鈴?」

「監視カメラ、あれ動いてるわ。」

花鈴が通路の天井を指さしながら、室内にいる二人に声をかける。

その言葉に狂骨と化け猫は一瞬間を見合わせ、急いで通路に出ると花鈴の指さす方向にあった監視カメラを見る。

このビルが閉鎖された際に放置されたと思われるカメラはよく見れば電源ランプのようなものが点灯しており、動いていた。

「上手く挟撃されたのはこのためか!」

狂骨が霊銃を放ち、監視カメラを破壊する。

弾け飛んだ監視カメラにはコードが付けられておらず、バッテリー式のものでそれが個人で設置できるものだということを示していた。

寂れたビルの一室、カーテンもなくガラスは一部がひび割れ、壁紙や床板が使われていた当時の面影を残しながらも何もない殺風景な部屋。

その一室で床にクッションを置いて胡坐をかきながら、ノートパソコンを眺める女性が一人いた。

癖がありまともに手入されていない黒髪を乱雑に伸ばしており、瞳に昏い影を秘めているような女性は成人にはなっているだろうがどこか少女のような幼さが顔立ちに残っている。

おそらく化粧つきのなさや顔つきにまだ大人らしさがないことが原因であろう。

人によつてはまだ彼女を十代半ばに思うかもしれない。

服装もダルツとしたパーカーに着古されたスウェット姿であった。女性はノートパソコンの画面を眺めながら顔をしかめ、傍らに置かれていたコンビニ袋から度数の高めなチューハイを取り出すとプシュツと炭酸の弾ける音を響かせながらプルタブを開け、口に含む。さらにコンビニ袋をガサガサと探り中に冷たい缶の感触しかないことが分かるとさらに険しく顔を歪ませ、憂さ晴らしの様に袋を掴んで中身ごと部屋の隅に投げ捨てる。

「チツ、4階の二人はまだ気づいてないってのに…勘が良い奴が2階にいやがったか、てかなんだあの変な集団はよ。」

吐き捨てるように女性はそういうとさらにチューハイを口に含み、何かを確かめるようにスウェットのポケットをまさぐって中から黒ずんだ布切れを取り出す。

「まあいつか、タネはまだまだあるし、あいつらも殺して使つてやるよ…前のあいつらみたいに。」

くひひ、と女性が笑う。

笑いながら胡坐を解いてクッションを枕にしながら地べたに寝そべり、野球の観戦でもするかのように画面を眺めながら缶を口に運んだ。

寝ながら缶を傾けたため口から中身がいくらかこぼれ、床に染みを作るが女性は気にせず、パーカーのそでで口を拭うと再度笑った。

「まつ、あがいてもらった方が楽しいかな。」

### 13話 異臭

動く屍の群れを始末した鈴音と蠅螂坂は、霧の様に霧散した奴らの死体があつた個所を調べていた。

「…。」

「…。」

無言のまま、何か痕跡はないか調べる。

物静かな二人故に、ほとんど会話は無い。

ただ黙々と何か手掛かりはないか戦闘があつたオフィスを調べ、奴らが出てきた通路も調べる。

しかし強い妖力の気配も見当たらず、二人して首をかしげる。

そのとき、花鈴から通信が入った。

『あーあー、すーちゃん聞こえるー?』

「聞こえてるよ、どうしたんだ?」

首筋に手を当てながら鈴音が答える。

その声色から緊急事態ではないと判断し、慌てずに平然としたままで答えた。

『監視カメラが動いてた、なんか私らのこと見てるやつがいるっぽいね。』

「なに…!?!」

花鈴の言葉に少し目を見開き、小さく驚きの声を上げる。

蠅螂坂も少し驚いたのか、ばつと鈴音の方を向き少しずれたサングラスを整えている。

そしてお互いに会話をするように視線を交わすと頷き、鈴音は花鈴に通信を続ける。

「分かった、私たちもこのビルに監視してる奴がないか探してみる。」

『おっけー、私たちもそうするね。』

ぷつり、と感覚的に妖力の波が途切れたことを察し、鈴音は首筋から手を離す。

「…とこういうことらしいです。」

「承知…。」

蠅螂坂が鈴音の言葉に一言で答える。

鈴音は端的な会話は嫌いではないが、流石にここまで端的だと少々やり辛い。

少しづつ表情を読み取れるようになってきたが、まだまだすぐ察知できるというわけでもない。

「…。」

「…。」

無言のまま、通路を歩き、二人は他の部屋を回り始める。

元は物置であったのであろう部屋やトイレに使われていたであろう部屋。

その所々には古い血痕の様なものが隅に残されたままになっていたり、何かが置かれていたであろう跡を残す様に線上に黒ずんだ血の痕が残っていた。

血が清掃された痕跡はあるのだがそれも甘く、仕上げの清掃を行う前に清掃業者が立ち去ったように感じられる。

それはここで殺し合いがあったことを感じさせる、生々しいものであった。

「…。」

「…。」

無言でお互い誰かがいた痕跡はないか調べていたが、ふと鈴音が口を開いた。

「蠅螂坂さん…。」

「…。」

「さっきの屍、妖力で実体化してたみたいでしたけど、それって可能なんですか?」

鈴音の言葉に蠅螂坂が思案するようにサングラスに手を添える。

鈴音の疑問は霊剣の修行の際に聞いた言葉があった。

霊剣は強い霊力があれば、それこそ強大な妖怪程のものがなければ不可能だが、霊剣を実体化させることが可能だと聞いたのだ。

しかし先ほどの屍は霊力や妖力に属する力によって実体化しており、その肉体を斬った感触が鈴音の中に生々しく残っている。

だが蠟螂坂は妖力を全身にまとわせ、陽炎のように揺らぐほど妖力の扱いにたけている。

そんな彼女ならなにか心当たりのある手段はないかと考えたのだ。

「…なくは、ない。」

サングラスからそつと手を離し、蠟螂坂は答えた。

「たとえば…ほかの物を媒介にして…創り出す。」

「…代償に、相応のものを用意するということですか？」

「こくり、と蠟螂坂は頷き、つづけた。

「実体化した霊剣は…強大な力によって結果できるもの…媒介をもつて創られない…。」

おそらく鈴音の疑問を持った理由が分かったのであろう蠟螂坂はそう言った。

「姫斬りの様に…物体が変異する…そういったものはある。」

「つまり、あの屍はなんらかの実体がある媒体を妖力か霊力で変異させた可能性が？」

分かりやすいたとえをだした蠟螂坂の言葉に鈴音がそう問いかけると、蠟螂坂は頷いた。

考えてみれば鈴音の脳内に映し出された光景の中では、姫斬りの元になった刀は一見変異していない普通の刀のようであった。

それがあそこまで異質な刀に変化し、時には花鈴の身体に吸い込まれるように妖力の塊となって飛散し、吸い込まれる。

それを考えれば先ほどの屍が散華した妖力となって散華した理由も説明がついた。

妖力や霊力が実体化することもあればその逆、最終的に物体あるものが消えるということもある訳かと鈴音は解釈した。

「…あくまで推論。」

「はい、わかっています。」



蠍螂坂の言葉に鈴音が頷く。

推論ではあるがどこことなく正体がつかめた気がする。

おそらく何者かが監視カメラを使用し侵入してきた人間を見て、ビル内に設置しておいた媒介をもとにあの屍を創り出して襲わせたのだろう。

「…とにかくあの屍を倒しながら監視カメラを潰して、このビルにいるであろう何者かを追い詰めましょうか。」

「…ああ。」

蠍螂坂が鈴音の言葉に同意する。

そして鈴音は何かに気づいたように少し目を丸くさせ、蠍螂坂を見た。

「…。」

「…。」

そんな鈴音に蠍螂坂はどうしたのかと小さく首を傾げた。

鈴音はつい送ってしまったその視線に少し困ってしまったように視線を外し、小さく口を開いた。

「あの…蠍螂坂さんと長く話したの…初めてだなと。」

「…あ…うん…。」

思ってみれば、と蠍螂坂がそのことに気づき、ほんの少し動揺したよう目線を泳がせた。

そして鈴音と同じく困ったように視線をそらし、サングラスに触れた。

「変…だった…か？」

「いえ…そんなことは…。」

「…。」

「…。」

お互い目線を反らしながらどうしたものかと、思索するように沈黙が二人を包む。

それから逃れるように通路に出ながら、本来なら他の部屋をまわるところこのぎこちない空気のままではどうしたものかと足を止めた。

「その…蠍螂坂さん。」

小さく口を先に開いたのは鈴音であった。

「妖力の扱い…今度教えてください。」

「ああ…。」

「素手で、あそこまで強い力を発揮できるようになるんですね…。」

「いや…僕は…まだまだ…。」

鈴音が蠅螂坂に向き直りながら、指で鳥のくちばしのような、先ほど蠅螂坂が戦闘の際に作っていたカマキリの鎌を思わせる手を形作り言う。

蠅螂坂は自分を褒める言葉にほんの、ほんの微かに耳元を赤く染めながら、照れたように口をすぼめる。

「鈴音がコツを掴んだら…僕よりきつと…うまく使える。」

「私が…そんな…。」

「できる。」

少し、いつもの口調より力強く蠅螂坂が言う。

言いながらそつとサングラスを外し、その人ならざる複眼の目で鈴音を見つめる。

まるで心の内を晒すことを、己の言葉に嘘はないということその身で表現するかのよう示して見せた。

「鈴音なら、できる。」

「…信じます。」

鈴音は自分が信じられなかった。

己の才能がないことは誰よりも自分が一番知っている。

本当の天才がどういふ存在なのかということも知っている。

だが、蠅螂坂の言葉を信じることにした。

鈴音は鍛錬を所詮自己満足の産物で産物であり、価値のあるものだとは思っていなかった。

必要以上に身体を追い込み、壊れる寸前まで痛めつけるような、それで自分は努力しているのだと言い訳をするような鍛錬。

しかしそれを日常として続けた結果が今実を結んでいる。

蠅螂坂は鈴音の信じるという言葉に頷くと、サングラスをかけなおす。

二人の間にできた、小さな信頼。

それを互いの胸に抱きながら二人は明かりのないビルの中、歩みを進めた。

この階はある程度調べ終えた、もう次の階に行こうと階段にさしかかる。

その時であった。

「…？」

鈴音がくんと鼻をひくつかせるようにして立ち止まり、周囲に鋭い視線を向ける。

「…鈴音？」

「煙草の臭い…化け猫さんとは違う…。」

「何…？」

辺り一面に漂う血なまぐさい臭いに慣れた鈴音の鼻が、新たな異臭を鋭敏に感じ取った。

事務所で嫌というほど嗅いだ化け猫の煙草の臭い。

その臭いとは別の煙草による独特の臭いを嗅ぎ取った鈴音が階段の上を睨んだように見つめる。

「上…まだ臭いは辿れそうです…。」

蠅螂坂を見つめながら鈴音が言うと、蠅螂坂は無言でうなずいた。

ぽつりと、明かりのないビルの通路に赤い火が点る。

月明かりが差し込み淡い、青い光と静寂の中に擦過音が響きわたりハッキリとした赤色が青の中に灯った。

同時に紫煙が辺りを舞い、開けっ放しにされたビルの窓から吹き込む風によって散らされる。

「なんなんだよあいつら…。」

赤い火を——煙草を口にくわえながら先ほどまでノートパソコンを眺めていたくせつ毛の女性が通路を歩き、階段へ向かっていた。

その脇にはノートパソコンが抱えており、けだるげに煙草を口から外して煙を吐き出す。

「楽しませてくれるじゃんと思ったけどさあ、強すぎるでしょ…もつとさあ…ゆつくり来いよ。」

ぶつぶつと独り言を呟きながら女性は階段を上っていく。

その先にはもう上に上がる階段はない、屋上につながる階段。

階段を上るだけで軽く息を切らしながら、それに対しいらだちを隠さないように女性は顔をしかめた。

しかしその表情の中には強い不安が見受けられ、まるで自分で自分を慰めるかのように独り言をつづけた。

「大丈夫、大丈夫…まだ奥の手があるから私には…大丈夫…くひひ。」  
プツとくわえた火のついたままの煙草を床に吐き捨て、女性は屋上へつながる扉を開いた。

「しっつけえんだよ!!」

ビルの通路に花鈴の怒号が反響し、同時に股から頭上に向かって真つ二つに斬り開かれた屍の腐った血が辺りに飛び散る。

ビル2階の探索を終え、3階に突入した花鈴たちのチームにまたしても動く屍が襲い掛かっていた。

「二匹一匹はたいしたことないけど…こうも数が多いと面倒だね!」

狂骨は正面の屍の額を撃ち抜き、横から突き出された別の屍の腕を肘で弾き飛ばしつつ一歩踏み込んで肩による体当たりで体勢を崩させ、その隙に新たに掴みかかってくる屍を蹴り飛ばす。

次の瞬間にはずりりと光の筋が暗闇の中に走り、蹴り飛ばされた屍の首がなくなっていた。

化け猫が狂骨の動きに合わせて大通しを振るったのである。

「このままだと、先に上に行った二人と合流するのはいつになるのかしらね!」

「ほんとそれ…はい化け猫パス！」

「パスじゃにやいんだよお前！」

花鈴が後ろから迫っていた屍を後ろ蹴りで化け猫のいる方向に向かって蹴り飛ばし、化け猫も突然の指示に文句を言いつつ即座に息を合わせその頭を背後からスイカのようにたたつ斬った。

その時、不意に三人の頭に声が響いた。

『こちら鈴音、人の痕跡を確認、その跡を追います。』

「すーちゃん!？」

突然の通信に花鈴が驚きの声をあげ、その内容に狂骨が目を見開く。

「鈴音ちゃん!? 痕跡って!？」

『煙草の臭いを感じたのでそれを辿ります。今のところ4階…5階より上のようなので、追って連絡を。』

「分かった、悪いけどこっちはまだ時間がかかりそうだ！」

『了解。』

戦闘中であることを察した鈴音は最後に短く返事を残し、通信を切る。

「ということだみんな、こいつらを片付けたらすぐに上に向かおう。」

「了解！」

「りよーかい！」

狂骨の声に化け猫と花鈴が答え、同時に腐った血が壁に模様を作る。

三人がすべての屍を片付けたころには、通路はまるで赤絨毯のように血で染まっていた。

14話 元凶

幼いころから見えないはずのものが見えた。

それが私にとって当たり前前の世界。

皆はそんな私をうそつきだと言って、周りは誰も信じてくれなかった。

父も母も信じてはくれなかった、それどころか私がほんとを言うた  
びうそだと叱った。

信じてくれたのはおじいちゃんだけ。

おじいちゃんも本当は信じてなかったと思う。

だけどおばあちゃんも死んで寂しかったんだろうおじいちゃんは  
私にはよくしてくれた。

おじいちゃん、昔はいろいろあつたらしくてみんなに嫌われてたか  
ら。

だけど私にとってはただ一人の家族で、友達で、愛情をくれた人。  
今はどうなったかって？

死んだよ。

私は世界で独りぼっち。

死んでもおじいちゃんなら私の元に来てくれると思っただけど、来て  
くれなかった。

みんなに見えないものが見えるのに、本当に見たいものは見せてく  
れない。

違う。

おじいちゃんが来てくれないはずがない。

きつと私の力が弱いからだ。

弱いから見えないんだ。

きつとそうだ、きつと、きつと！きつと!!!

だからもつと、私の力を強くしなきゃ。

なんだっていい、なんでもしてやる。  
ちようどよい場所も見つけた。  
この世界が否定した私の力を、思い知らせてやるんだ。

「まだ上…この先は屋上…?」

煙草の臭いを辿り、鈴音と蠍螂坂が到着したのは屋上へ続く階段であつた。

そして屋上へ続く扉の前を見てみればそこにはまだ火が微かに残る吸い殻が一つ、ぽつんと落ちていた。

「鈴音…。」

「はい、この先にいるようですね。」

鈴音は一旦腰に差しなおしていた大通しを抜き、刃を発現させる。警戒をしながらまず蠍螂坂が吸い殻に近づき、何もなことを確かめるとそつとドアの付近を調べる。

見たところ罫の類は存在しないらしく、蠍螂坂は背後にいる鈴音の方を振り向き小さく指でOKマークを作った。

鈴音がそのサインに頷くと蠍螂坂はドアの前で構える。

スツと右の拳をドアに向かって突き着け、ドアから一寸——三センチほどの距離に置いた。

「…鈴音。」

「…はい?」

「私なりに教える…。」

突然の蠍螂坂の言葉に鈴音は一瞬戸惑う。

しかし戸惑いに気づかないのか蠍螂坂は言葉を続ける。

「僕なりだけど…妖力は…身体に…纏うというより…流す。」

そして深く腰を落とし、蠍螂坂が全身から妖力を放出させた。

その妖力はまたしても陽炎のように揺らいでいる。

本人が言う様に鎧のように身を纏うというよりも全身を流れる血液のように妖力が動いており、それが陽炎のように揺らめいて見えるようであった。

どうやら蠟螂坂は自分なりの妖力の使い方を指導しているようであった。

それを少し遅れて理解した鈴音は蠟螂坂の言葉に頷き黙って説明を聞く。

「使うところに…流れを作る…その流れのまま…妖力を…」

ゆるり、ゆるりと、妖力が流れる。

流れる先は右の拳。

小さく、蠟螂坂が前に踏み込んだ。

タン、とコンクリの床を踏む綺麗な音が響く。

大きく響く強烈な音ではなく、年代物の楽器の弦を弾いたような、深く、重厚な音色。

床の表面を踏むいうより深く沈むような音。

「勢!!」

蠟螂坂が普段の小さな声から想像もつかない声と共に口から気を吐き、ドアに向けられていた拳を突き出した。

ドアがなくなった。

実際にはなくなったのではなく吹き飛んだのだが、猛烈な勢いでドアが弾け飛んだせいでまるでドアがなくなってしまったかのように見えたのである。

「…わかった…?」

「少しは…。」

どこことなく、霊剣を生み出す際に霊力を放出する技術と似たような雰囲気を感じ取り、鈴音は頷いた。

しかし霊力を放出し、自然と心で掴んだ形に形成されるがままに保持する霊剣の技術とは違い、放出する際の力の経路を身体の動きと一致させることに重きを置いた、また別の技術であった。

どちらも根底は力を放出させるという技術だが、どこか精神的な、



心の光を探るといふ様な抽象的な技術よりも鈴音としてはイメージしやすい使い方に感じた。

鈴音はもう今までと常識外れの世界に足を踏み入れながら、どうしても常識的な理論に囚われる自分の頭の固さに辟易しながらも、少し成長の糸口を得た感覚を覚えた。

蠍螂坂がドアを突き破った先、屋上に妖力をたぎらせたまま足を踏み入れる。

鈴音も続いて屋上を見回した。

そこにあつたのは、赤に染まった光景。

青白い月明かりに照らされ、一見黒くみえるが間違いなく真っ赤であろう色が、屋上の地面を染めていた。

一面が赤ではないが、屋上の中央が赤く染まっているせいで全てが赤に染まっているかのような錯覚に陥る。

その赤の上には折り重なるようにまだ真新しい死体が放置されていた。

所々が噛み千切られたように肉が引きちぎられ、人体の形をしていながらも歪な、もはやモノと化した肉塊。

顔をしかめながら鈴音がその肉塊をよく見ると、まだ若い人間の死体のもようであった。

おそらくはここに侵入した不良グループであろう、人間たちのなれの果てである。

それだけではない。

よく見れば人形のモノだけではなく、猫や犬の古い遺骸のようなモノも混ざり合っている。

あらゆる形の、こと切れたモノがそこにはあつた。

その時、ペチ、ペチ、ペチ、と下手な拍手が響いた。

屋上に吹く風で掻き消えそうな弱弱い音を聞き取り、鈴音と蠍螂坂が音の方向に顔を向け身構える。

肉塊の後ろから、音の正体がぬそつと姿を現した。

癖ツ毛を風になびかせる、昏い瞳をした女であつた。

手には開かれたノートパソコンを持っており、ディスプレイの光に

照らされた女の顔は不気味な雰囲気を漂わせている。

そしてその乾いた唇を開き、歪んだ笑みを――悦び、虚勢、怯え、困惑、様々な感情が入り組んだ笑みを浮かべる。

「やっぱ、お前らが先に、来たんだあ…。」

たどたどしい口調で女が言う。

その言葉を聞いて蠮螋坂が眉をひそめた。

「お前が…元凶。」

「というか、お前らはなんなんだよマジで。警察じゃないよな？」

蠮螋坂の言葉に女は答えない。

逆に自分の疑問をぶつけてきた。

こういうタイプとはコミュニケーションを取っても無駄だと、蠮螋坂と鈴音は判断した。

小さくお互いに視線を向け、アイコンタクトを交わすと頷きく。

「君の様なのを止めるための組織の人間だ。」

八咫鳥という言葉を使わずに鈴音が言う、その言葉に女はあちやーとリアクションをしながら目線を泳がせる。

「はあ…そんなのいるとかマジかよ、私の、私だけが特別だと思ったのに…嘘だよそんなのふざけんな…。」

ぶつぶつと、独り言のように女が呟く。

そしてディスプレイの画面を見ると何か念じるように眉間に指を当てた。

その瞬間にゾツとするような妖力が女から流れ出た。

同時に蠮螋坂と鈴音の脳に声が響く。

『こちら狂骨！すまない今6階の階段に差し掛かったところでまた屍が出た！7階からも奴らが降りてきている！』

「…リーダー…!?!」

蠮螋坂が僅かに声を荒げ、そして女を見た。

鈴音も大きく顔をしかめて女を見る。

「誘ったのか、私たちを。」

あの煙草の臭いは自分たちを誘うための罠であったことを鈴音は理解した。

鈴音と蠟螂坂が階段を上った際に屍はでなかったが、それは下の階にいた三人を足止めするためにあえて残っていたようだ。

せめてカメラを潰しているか三人と先に合流していればと鈴音は後悔するが、もう遅い。

まず目の前の相手に集中するべく頭を切り替える。

女はいやらしい笑みを浮かべながら、もう見る必要はないとばかりにノートパソコンを閉じる。

「ひひひ…うまい具合にひっかかってくれた…。」

「…連行…される気は——」

「ないよ、お前ら、私を連れてってどうする気だ…どうせ碌なことにならないんだろわかるよ。」

女は虚ろな目で二人を見ずに早口でまくし立てるように口にし、またしても眉間に手をやった。

ぐじゅり

生々しい、湿った音がする。

粘着質な液体が立てるようなねばついた音と、やわらかい物体がつぶれ、混ざり合うときの柔らかい音。

肉塊が、蠢いていた。

ちぎれた肉片が互いを補う様に混ざりあい、こねあい、一体となり、一つの人型を形作っていく。

やがて折り重なった肉塊は二つの赤黒い人型となり、立ち上がった。

それは子供が作ったへたくそな泥人形の様な外見であった。

しかし生きた物体のように自立して動いている。

生命としてはあり得ない形をしながらもそれは動いている。

あまりにも歪な存在。

あつてはならない存在。

鈴音はそう感じた。

嫌悪感を感じる鈴音に反し、女は笑っていた。

「ひひひひ…こいつは少ない死体をもとに、ここで死んだ奴らの記憶から生み出したあいつらとは違うよ…。」

「あいつら…あの動く屍か…！」

「そう、これが私の力、私だけの力…。」

女は己が作ったのであろう、歪な生命を酔ったような目で眺めながら笑った。

鈴音は女の言葉に蠮螋坂の推理が大まかにあつていたことを理解する。

目の前の歪な生命の創造から察するに、あの屍はこの女が形作ったものではなくこのビルであつた抗争で命を落とした暴力団の残滓、怨念の様なもの。

それをもとに動物の遺骸や死体の一部を媒介に生み出して形作った、質量のある妖力の塊のようなものであつたのだろう。

へたくそな人型しかつくれぬこの女が、あんなに人間らしい物体を形作れるとは到底思えなかつた。

どうしてこの女がこのような力を持っているのか鈴音には分からない、しかしやることは一つ。

あの屍と目の前の人型——肉人形と呼べばよいだろうか、その本質が同じであれば、対処法も同じ。

二つの肉人形がそれぞれ、鈴音と蠮螋坂の前に立つ。

互いの目の前に立つ敵から視線をそらさず、二人は構えた。

「鈴音…。」

「分かっています、あの屍と原理が同じなら…。」

「殺せる…。」

蠮螋坂の身体から妖力があふれる。

先ほどの女から出たような冷たい妖力ではなく、熱がこもったような、熱い妖力。

本当に妖力に熱があるのか質があるのかは不明だが、感覚的に鈴音はそう感じた。

鈴音も大通しを構える。

選んだ構えは、下段。

鈴音は普段は天に切っ先を突きつける様に構えることが多いが、それとは逆。

天に逆らわず、受け入れる様に切つ先を地に向ける構え。

肩甲骨を落とし込み、無駄な力を抜き、立つ。

見るからに一筋縄にはいかない敵を目の前にして、思わず大きく鳴り響いてしまいそうな心臓の鼓動を抑えるようにあえて鈴音は下段を選んだ。

鈴音が普段好んで使用する八相やそれに類する様な構えは、無意識のうちに攻撃的な心理を働かせる。

人が棒を持って何かを殴ろうとすると本能的に右上から振り下ろすパターンがほとんどらしい。

剣術で言う袈裟斬りである。

すなわち袈裟斬りの動作は実戦でも本能的に放つことができる技といつてよい。

敵が持つ本物の刀を前にした際、その恐怖によって大方の人間はパニックに陥り型のような動きは行えないであろうが、袈裟斬りの動きは別だ。

遠い地の古き時代において実戦で名をはせたある剣術は、鍛錬の際に猿の鳴き声のように絶叫しながらひたすら袈裟斬りと逆袈裟を繰り返すと聞く。

おそらく声を上げることによって自分を鼓舞し、死に怯え固まった身体を無理やり動かして本能的に放つ袈裟斬りを命がけで叩き込むための鍛錬であったのだろう。

技術も何もないようで人間の本能に裏打ちされている、実際に刀刃を相手に戦った人間が生み出した恐ろしいほど論理的に組み立てられた剣術である。

しかし鈴音は違う。

驚くまでに鈴音は、心臓の昂ぶりが恐怖でないことを実感していた。

歓喜だ。

その昂ぶりを抑えるように鈴音は本能的に下段を選んだ。

怯えて動けぬなら、狂ったように叫び身体を動かした方が生き残れるであろう。

だが本来、無駄な昂ぶりは死を招く。  
死ということは、負けるということ。  
冷静に、目の前の肉人形を観察する。  
身の丈は三メートルを優に超え、鈴音の倍近い体格をしている。  
だが人型をしていた。  
その点に鈴音は微かに笑みを浮かべる。  
ヒトと同じ形なら、鹿角流が、人の剣術が、人を斬る技が使えるの  
だ。

## 15話 不覚

「あああああーめんどくせえええええ!!」

花鈴の怒号がまたも響き渡る。

花鈴は：それはみごとな、ジャイアントスイングを屍に放つていた。

「はやくすーちゃんのところにい：行かせろ!!!」

姫斬りはその手に無く、すでに身体にしまわれている。

両足をガツチリとホールドされ、振り回された屍は既に他の屍に幾度もぶつけられてボロボロになっており、最後は豪快に投げ飛ばされた。

投げ飛ばされた屍はボーリングのように他の屍を巻き込みながら壁に衝突、最後は壁に大きな赤い花を咲かせて散った。

「ちよ、花鈴ー危にやいつてのー!」

化け猫は花鈴の攻撃に巻き込まれて吹き飛ばされた屍を咄嗟に蹴りで弾き飛ばす。

「あんまりイライラすんじゃねえにや!!」

そして化け猫は後ろから近寄る屍の顔を振り向かずに裏拳でぶん殴り、さらに振り向きながら身体を回転させ強烈なローリングソバット：胴に向かって後ろ回し蹴りを放った。

鈍い、重い音が響き、屍が後ろに向かって吹き飛ぶ。

しかしその屍が吹き飛んだ先には狂骨がいた。

「ちよーイライラしてんのは君もじゃないかな化け猫!」

吹き飛んだ屍を狂骨は後ろから抱きかかえるようにキャッチ、そしてそのまま勢いに乗って豪快なジャーマンスープレックスを放った。

綺麗なブリッジが虹の様なアーチを描き、屍の脳天はコンクリ敷きの地面に叩きつけられたことで粉碎された。

三人は既に、武器を仕舞っていた。

霊力や妖力の消費を抑えるというのが一応の理由だが、単純に何度も足止めを喰らったことでタガが外れ、ストレス発散とばかりに豪快なプロレス技を見舞っているのである。

既に三人の元には蟠螂坂と鈴音が屋上で今回の元凶となった、一見人間の女性らしき存在と戦闘になつていてという通信は届いている。本来ならこのような雑魚は無視してでも屋上に向かいたいが、簡単に無視できる数ではなく、更に屋上にこの屍が入り込み大混戦になる可能性を考えるとここで始末しておかねばならない。

それもまた三人の苛立ちを加速させている。

更に連戦に次ぐ連戦で集中力にも乱れが見え始めていた。

花鈴は天性の見切りの才能も相まっていまだに無傷であるが微妙に息を乱しており、化け猫と狂骨の腕や足には服の上から屍に食いつかれた跡がいくつか見受けられる。

「ぜえ…ぜえ…これ、実は結構ピンチじゃないかや?」

「ふう…ふう…タバコの吸いすぎじゃねえの…もうへばつたのか化け猫?」

「ああん?んな訳にやいに決まってるでしょう!」

花鈴の挑発じみた言葉に化け猫が気力を取り戻したのか、大きく声を張り上げて気合を入れなおす。

そして迫る屍の突き出された腕を掴み、引き込むように引っ張りながら横に回り込み、屍の胴を抱きかかえるとバックドロップを放つた。

屍の頭を粉砕した化け猫が起き上がるまでに新たな屍が迫るが、その屍にすかさず花鈴が斧を振るうかのような強烈なリアットを叩き込み、首をへし折る。

見事な連携が決まっていた。

気性の荒さが似通っているのか、いがみ合うことも多いがお互いに息があうと驚くべき息の合い方を発揮する二人であった。

化け猫が跳ね起き、花鈴とお互いに背を預けあう様に立つ。

そんな様子の二人を見て、狂骨は肩をすくめた。

「息が合うのは良いけど、私は蚊帳の外みたいで寂しいなあ。」

唇を尖らせ、まるで焼きもちを焼く子供の様な声色で狂骨は言う。

しかしその腕には屍がガツチリとヘッドロックで捕らわれており、その頭を寺の鐘でも突くように思いつき壁面に叩きつけていた。



狂骨はスタンプのように壁にべつとりと赤い丸を印つけると、満足するように他の屍に向かって投げ捨てていた。

その顔には狂暴な笑みが浮かんでいる。

それは狂骨もまた、本来は妖怪という存在であることを裏付けるような笑みであった。

ビルの屋上。

血に濡れ、赤い絨毯が敷かれたように染まったその場所で、吹き付ける強い風の流れを切り裂くように暴れまわる異形の影が二つ。

人の形をしながら命としてあり得ない形をした、歪なヒトガタ、肉人形と形容された物体。

その異形の肉人形の周りを舞う様に動く影が二つ。

鈴音と、蠟螂坂である。

鈴音は三メートルは超えるであろう肉人形が振るう腕を、必要最小限の体捌きで避けつつ、肉人形の腕に沿わせるように大通しの刃を扱っていた。

肉人形が直線的に腕を振るえば斜めに体捌きを行いつつ刃を沿わせ、曲線的に振るえば即座に姿勢を低くして腕をかいくぐるように避けつつ斬り、両手をハンマーのように振るえば即座に懐に入りながら大通しを振るった。

一撃で肉人形をたたつ切るような力は鈴音にはない。

大通しを発現させるだけで精いっぱい鈴音にそんなことはできない。

そんなことは鈴音には関係はなかった。

ならば百でも二百でも千でも、肉人形に血を流させれば良い。

一方蠟螂坂は同じ古い武術の系統である動きを根底に置きながら、対照的に飛び跳ねるような動きを織り交ぜながら肉人形と対峙している。

純粹な妖怪としての人ならざる身体能力にくわえ妖力の扱いに長

ける蠓螂坂は真つ向から肉人形と渡り合っていた。

力任せに薙ぎ払う様に振るわれる肉人形の巨大な腕を最も威力の出るポイントで受ければさすがの蠓螂坂もひとたまりもないが、踏み込んで威力の出ない腕の根元に近い部分で受ければ別だ。

どつしりと腰を落とし、両手を使用してがっちり防御を固めたうえで肉人形の腕を受け止める。

肉人形は懐近くまで入り込んだ蠓螂坂に対し、自分の胸元に腕を巻き込むようなフックを放ったが、腕が振るわれた時には蠓螂坂の姿はなかった。

蠓螂坂の姿が消えたと思った時には肉人形がバランスを崩し、前に向かってつまずいたかのように体を泳がせる。

そして傾いた肉人形の身体に付いている頭——頭に相当するであろう突起のように膨れ上がった肉塊。

その肉塊が弾けた様に血をまき散らし、天を仰ぐように上に向かってかち上げられた。

先ほどまで肉人形の頭があった部分、そこには空を穿つように突き上げられた蠓螂坂の足が伸びていた。

蠓螂坂が片手で逆立ちをしながら、蹴りを放っていたのだ。ここまでに至る流れ。

まず蠓螂坂は肉人形の振るったフックに対し、即座に地面に手を着くほど姿勢を低くしてそれを避けながら身体を回転させ、地面に円を描くように足払いを放つ。

その足払いが肉人形が身体を泳がせた原因であった。

さらに蠓螂坂は低い姿勢を維持したまま後ろに手を着き、スツと足を地面から浮かせるとぐつと身体を曲げて一瞬溜めを作る。

そして一気に身体を伸ばし、全身を使って射出された砲弾の如く足を突き上げたのだ。

ゆるりと、音を立てずに蠓螂坂が再度両足で地面を踏みしめて立った。

腰を落とし、そしてカマキリのように胸の前で腕を畳み、妖力をたぎらせる。

蠟螂坂の周囲のみ空気の流れが変わったかのように気が揺らいだ。追い風が吹くように、蠟螂坂の髪が揺らぐ。

眼前にそびえる異形は、先ほどの蹴りによって後ろに身体を大きく傾けていた。

一步、大きく踏み込む。

畳んだ両腕を、獲物を高速で捕えるカマキリのように伸ばし、掌を開いて渾身の力を込めて肉人形にぶつける。

双掌打。

肉人形が後ろに向かって突き飛ばされた。

バランスを崩していたとはいえ、三メートルを越える肉人形が宙に浮き、飛んだのである。

肉人形は赤黒く染まったコンクリートの地面に瑞々しい新鮮な赤い斑点を散らし、地面に一度は背をつけながらも、のそりと立ち上がった。

しかし、立ち上がったところに蠟螂坂の強烈な跳び蹴りがその頭に突き刺さった。

またしても肉人形が後ろに向かって吹き飛ばされる。

だが肉人形は倒れながら駄々っ子のように腕を振り回す。

我武者羅な、狙った動きではなかったであろうが、偶然その腕がまだ空中にいて動けない蠟螂坂を打ち据えた。

「不覚……！」

巨大な質量という、暴力。

今度は蠟螂坂が玩具のように吹き飛び、コンクリートの地面を転がる。

咄嗟に受け身を——柔道の様な受け身ではなく、へそを見るように背中を丸め転がることで衝撃を逃す受け身を行い、すぐさま立ち上がる。

蠟螂坂はコンクリートの上を派手に転がったせいで全身に切り傷を追い、普段はピシッと着こなしているスーツもズタズタになっていた。

顔からサングラスが外れ、人ならざる複眼の目が露になる。

その目が怒りで大きくゆがむ。

「殺……」

ぼそりと、呟く。

その瞬間、景色が歪んだ。

全身から放たれる強烈な妖力によって、気が揺らぎ、歪む。構えた。

蠋螂坂が構えると、歪んだ気が糸を張ったように整い、周囲の景色が元に戻る。

同時に肉人形が立ち上がり、自分を痛めつけた報復とばかりに蠋螂坂に向かって疾走する。

蠋螂坂は動かない。

肉人形はそんなことはお構いなしに突進。

疾走した勢いそのままに右腕を振り上げ、頭上から蠋螂坂に向かって振り下ろす。

その腕が、蠋螂坂を叩きつぶした。

蠋螂坂の姿を打ち消す様に振りぬかれた腕はコンクリートの地面をへこませ、轟音と共に周囲に破片をまき散らした。

しかし、飛び散ったものは砕かれた破片のみ。

そこに血肉はない。

たしかに叩き潰されたはずの蠋螂坂の肉体、その残滓がない。

ただその空間は一瞬、ぐらりと景色が歪んだように動いた。

「空蟬……」

消えた蠋螂坂の音が響く。

蠋螂坂は肉人形の懐に入りこんでいた。

肉人形が叩いたものは、蠋螂坂が全身に張り付けた妖力のみをその場に残した抜け殻のような存在。

蠋螂坂はこの技のことを「空蟬」と称し、その名を呟いた。

蠋螂坂が踏み込む。

端、と固い音が鳴った。

心地よいほどに無駄のない音色。

しかし一步踏み込んだその足元にはくつきりと足跡が残り、ひび割



拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。拳。  
|

「嘘だ…私の力が…。」

自身の作った肉人形が壊されていく様を、癩ツ毛の女は茫然と眺めていた。

蠓螂坂と相対した肉人形は既に動くことなく地面に仰向けに倒れ、胴体であった部分をひき肉のように潰されている。

もはや死に絶え肉塊と化した物体を蠓螂坂が殴り続けているのだ。巖ゴシ、と肉を打つ音ではない固い音が響く。

蠓螂坂の拳がついに肉人形の胴を突き抜け、地面を打った音であった。

「殺あああああああああ!!!」  
吠えた。

その音で勝利を確信した蠟螂坂が獣のように吠える。  
女はその声に小便を漏らしそうになりながらへたりこむ。

昏い瞳は目の前の現実を受け入れられない虚ろな瞳に変化し、そして泣き出しそうに潤ませた。

嘘だ、嘘だ。

嫌だ、嫌だ。

ダメだ、ダメだ。

世界の全てが否定してきた私の力なのに。

それさえも否定するなんてダメだ。

やっぱり間違っている、こんな世界は間違っている。

女は狂ったように髪をかきむしり、歯を食いしばった。

その先に偶然、自分が作ったもう一つの命、力の象徴たる肉人形が見えた。

鈴音と相対している肉人形である。

鈴音はかの有名な牛若丸と弁慶のようにゆらり、ゆらりと肉人形の攻撃を避けながらその度に肉に線を引いたような跡をつける。

肉人形の巨体からすれば小さな傷だった。

しかしその傷は既に膨大な数が積み重なっている。

その腕はミキサーに入れた肉のようにズタズタに傷が刻まれ、動くたびにもう限界に近いことを示す様に血を流している。

女はその姿を見てついに泣き出した。

もう駄目だと、絶望した。

終わったと思った。

全てが終わったと。

その時、絶望が閃きを産んだ。

もしかしたら、もし世界が私を見捨てていないならという、一縷の望みから出た発想。

女は笑みを浮かべた。

虚ろな目を大きく見開いて、涙を流し、笑った。

そして立ち上がる。

向かう先は己が生み出した肉人形の、その元だった。

鈴音はもう幾度振るつたか覚えていない大通しを振るい続ける。その額には汗が浮かんでいるが、呼吸は一切乱れていない。一方の肉人形は汗こそ流さないものの滝のように血を流しており、動きに精彩がない。

もう限界が近いことは目に見えていた。勝てる。

勝ち筋が見えたことに鈴音は笑みを浮かべる。

だが油断はしない。

もしかしたら濡れた血のせいで足を滑らせるかもしれない。

飛び散った肉人形の血が目に入ったら。

だが、それがなんだというのだ。

鈴音はそんな不安さえも斬り捨てた。

なったら、なつた時だ。

止まらない。

それだけを決める。

肉人形が腕を振るう。

鈴音が向かい打つ。

止まらずにそれを――

「!?!」

刹那、鈴音は止まった。

止まらざるを得なかった。

目の前にあの女が、肉人形を創った女が、鈴音と肉人形の間に入り込んだ。

このまま大通しを振れば、この女を斬ってしまう。

鈴音は刃を振る手を止めた。

鈴音の意識が女に集中した。

肉人形から目を逸らした。



殺し合いの最中、相手から目を逸らした者には――

「あが…ツツツ!!」

相応の報いが訪れる。

「すーちゃん！お待たせ――」

屋上に辿り着いた花鈴が見た光景は、歪な肉の塊と、そいつの前にいる女と、血飛沫と共に宙を舞う鈴音の姿だった。

## 16話 妖

脳が灼ける。

花鈴は自分が感じた感覚をそう表現するしかなかった。宙を舞う鈴音の元に全力で走るが、間に合わない。

花鈴の目の前で鈴音が鈍い音を響かせながら地面に墜ちる。

受け身もまともにとれていない、明らかに意識が飛んでいる様子だった。

「すーちゃん!? すーちゃん!!?」

その身を抱き起こしながら花鈴が必死に呼びかけるが、返事は無い。

ただ力は弱いが呼吸はしており、口から血を吐き出していることはなかった。

折れた肋骨が肺や心臓のような臓器を傷つけるようなことにはなっていないようだが、それでも危険な状態に変わりはない。

ただ意識は飛んでいてもその右手はしっかりと大通しを掴んだまま離さず、しっかりと力を込めて握っていた。

「は…はは…すーちゃんらしいね…。」

その様子を見て鈴音らしいと、花鈴は力なく笑った。本当にかっこいい。

花鈴は軽く舌を噛んで自分の舌を傷つけた。

傷口から血があふれ、またたくまに口内を赤く染め、口の端から血が零れ落ちる。

初めてキスしたとき、こんな感じで噛まれちゃったつけど鈴音を眺めながら花鈴は顔を歪め、苦笑した。

同時にあの日の光景が花鈴の脳内に蘇る。

胸を朱に染め、力ない目を自分に向ける鈴音の姿を。

ドクン、と心臓が高鳴る。

鼓動はどんどんと速度を増し、全身に血が巡り、灼けた脳が燃える

ように熱を持つ。

「…ああ…わかってるよ。」

花鈴は己の胸を、かつて姫斬りがこの身を貫いた胸の辺りを押さえ、何かに答えるようにつぶやく。

花鈴は鈴音に二度目のキスをした。

あの時とは違ったまだ熱い、鈴音の体温の残った唇にそつと自分の唇を重ね、血を流し込む。

同時に鬼が、目覚める。

灼け続ける脳の熱が逃げ場を探す様に額を裂き、その熱が形となつたように一本の角が生えた。

その熱が伝播するように肌が灼け、朱色に染まる。

「ぎーて…。」

花鈴が唇を離す。

赤色が混じる糸を引いた唾液を花鈴がぬぐい、鈴音を地面に寝かせて立ち上がった。

「殺すか。」

癖ツ毛の女は自分の思い通りに事が進んだことに笑みを浮かべた。

世界は私を本当に見捨てていかなかったんだ、歓喜が女の胸に満ち溢れる。

あの女にとどめを刺すべく肉人形が動く。

しかし屋上に突如乾いた破裂音の様な音が響き、肉人形の身体の一部が弾け飛んだ。

「チツ…下のやつらが、来やがったか…。」

屋上に通じる扉の前に新たな影が三つ。

花鈴、狂骨、化け猫のチームが合流したのだ。

事態を把握した狂骨がまず霊銃を発砲、それに少し遅れて化け猫が疾風の如く駆け、肉人形に接敵する。

肉人形が虫を払う様に化け猫に腕を振るうが、化け猫はまさしく猫のように身軽にその腕を飛び越え懐に潜り込む。

さらに飛び込んだ勢いそのままに地面を転がり、肉人形の股の下を潜り抜けながら大通しを一閃。

一刀両断とはいかずとも深手を負わせ、肉人形が膝をつく。

膝をついた巨体に向かって奔る影がもう一つ。

一体の肉人形を片付けた蠍螂坂だ。

蠍螂坂は先ほどの二の舞にはならぬと走りこんだ勢いそのまま跳躍はせず、勢いを乗せた中段突きを打ちこむが、その打撃は軽く肉人形の身体を揺らせたのみ。

鈴音に深手を負わせてしまったことで心が乱れ、そのせいで妖力が不安定になり力を発揮しきれていないのだ。

「くうっ…!?!」

肉人形が立ち上がり、蠍螂坂に向かって腕を叩きつけた。

蠍螂坂は腕を交差させてそれを受け止めるが、その身体は宙に浮き吹き飛ばされる。

どうにか転ばぬように、たたらを踏みながら地面に踏みとどまるが、その動きは明らかに精彩を欠いている。

「蠍螂坂！あんたは下がってなさい！」

蠍螂坂に追撃が行かぬよう、肉人形の相手をしながら化け猫が叫ぶ。

「しかし……!」

「化け猫の言うとおりでよ、もう妖力も不安定だし、下がって。」

「…承知。」

化け猫を誤射せぬように位置取りを考えながら発砲する狂骨も化け猫に同意し、蠍螂坂はその言葉に従うことを伝える。

狂骨は化け猫のために牽制の銃撃を放つが、その銃撃もそれほど威力がない。

狂骨も消耗しており、集中力が衰えていることで靈力を綺麗に弾丸として形作ることができなくなっていた。

牽制としては問題はないが、決定的な一打にはなりえない程度の威

力だ。

「ぐにゃっ!?!」

肉人形の懐に潜り込んでいた化け猫が、体当たりによつて突き飛ばされる。

そこを狙つて肉人形が腕を振り回すが化け猫は突き飛ばされた勢いそのままバク転して回避。

狂骨の元まで飛び退る。

「チツ…結構頑丈ねあいつ…。」

「あの雑魚のせいで無駄に疲れてなければともかく、今の状況だね。」

「ま、弱音吐いてる場合じゃないわよねー!」

軽く二人が息を整えるが、容赦なく肉人形が襲い掛かってくる。

狂骨が迫る肉人形の足を的確に数発撃ち抜き、姿勢を崩す。

そこに化け猫が大通しを振るおうとするが――

「ひゃっ!?!」

赤い影が、稲妻のように化け猫の眼前を奔る。

ほぼ同時に肉人形の腕が両断されていた。

血しぶきをまき散らし、肉の塊が地面に墜ちる。

さらに稲妻が奔った。

赤い光の線を残像として宙に残し、肉人形から身体の一部が肉塊として切り離されていく。

最後に落雷の如く地面に一直線に光を残して、稲妻は消え去った。

そこに残るのは頭上から二つに両断された肉人形だったもの、そして鬼と化した花鈴であった。

ただただ茫然とその光景を眺めていた狂骨が、目を見開きながら口を開く。

「それが…姫斬りの力かい?」

「まーね、まだ思い通り使えないけど。」

やや恨めし気に姫斬りに視線を向け、花鈴が言う。

「本当、身勝手な奴に好かれちゃったよ…そのお陰で助かったんだけど。」

「そうだね、今はその力に感謝しないと…ありがとう花鈴ちゃん。」  
「ま、いいってこと、それより、まだ片付けなきやいけないものもあるしや。」

そう言っつて姫斬りがある方向に向けて突き出し、その先に視線を向ける。

その先には今回の元凶である、癖ツ毛の女がいた。

女は刀の切っ先を向けられると腰を抜かし、その場にへたりこむ。

「ああ、そうだね…とりあえず拘束用の神域を——」

狂骨がそういつた時には、花鈴が動いていた。

突きつけた姫斬りを上段に構え、一気に女に向かって踏み込み、そして、振り下ろした。

「…邪魔すんなよ、化け猫。」

「花鈴…なにやってんのかわかってるのあんた…!?!」

振り下ろされた刃を、寸でのところで化け猫が大通しで受け止める。

花鈴は片手で無造作に姫斬りを振るつたのみだが、それでも化け猫の体勢がぐらつくほどの圧倒的な圧力があつた。

「言つたでしょ、こういう奴らには専用の施設があつて…そこに収容するつて。」

「それでなに?使えると思つたら利用するの?あんたらみたいにな。」

「利用つて…ふざけるにや!」

力を込めて化け猫が姫斬りを弾き飛ばす。

「私らは清明様の温情でここで自由にさせてもらつてる…利用されてるなんて言うんじやねえにや!」

その言葉を聞き、花鈴は冷たい視線を化け猫に向けて見ていた。

花鈴の視線に対し真っ向から化け猫が睨み返す。

異常な緊張感が漂う中、そこに割つて入る声が響いた。

「なんなんだよう…なんなんだよお前ら…。」

癖ツ毛の女だった。

目の前で突如喧嘩を始めた二人に対し困惑するように頭を振りながら振り絞つたように言う。

「もういいだろ！殺すんだろ！どうせ死刑になるんだ！あんだけ殺したんだ！殺せよ！殺せ！」

自供するように人を殺したことを叫び、狂ったように頭をかきむしる。

その様子を見てさらに苛立った様子の化け猫が眉をひそめながら女に視線を向けた。

「はあ…殺さないわよ、だから安心しなさいって…。」

「嘘だ！やっぱりみんなみんな私が嫌いなんだ！この世界は私が邪魔なんだろ！お前らなんなんだよ！化け物ども！化け物まで使つて私が邪魔だから、この世界に必要ないから殺しに来たんだ！死神だ！殺せよ化け物！」

「うっせえ…こいつ。」

まくしたてるような早口に花鈴も眉をひそめた。

「あのさー、せっかく一度私が殺しそこねたんだからさ、ありがたく生きとけよ…。」

「何様だよ化け物が…！」

「三度目はねえかなー。」

気の抜けた花鈴の声が響く。

文字通り、気の抜けた声。

殺気もなにもない。

まるで友達に何気ない言葉を投げかけるような自然な言い方だった。

ずぶり、と女は右肩に違和感を感じた。

何かが身体の中に入り込む異物感、一瞬遅れて一気に異物が熱を帯びた様に肩が焼かれ、燃え上がるような痛みが広がった。

姫斬りの切っ先が軽く、女の肩に突き刺さっていた。

乳白色の刀身に、一筋の朱が流れ、同時にその血を吸った姫斬りが上気するように微かに赤くなった。

意識の隙間をつく動きに、反応できなかつた化け猫が一拍遅れてそれに気づく。

「花鈴!!!」

「殺してないよ、大丈夫でしょこれくらいさ、どうせ——」

花鈴は化け猫に視線を向けず、女を文字通り見下す様に見下ろしながら姫斬りを引き抜き、言葉が続ける。

「こいつも妖怪でしょ？」



## 17話 終わりと始まり

「よう…かい？私が…？」

女が茫然としたように言う。

そして肩から噴き出す鮮血に気づき、そこでようやく自分の受けた傷に気づいたかのように顔を歪ませた。

「あ、あああ…血…い…え？」

しかしその血はすぐさま止まり、傷が徐々にはあるが目に見えて塞がり始める。

それは彼女が既に人ではない存在になったことを示している証拠であった。

「ち、ちが…私は…私はそんな…いやあああああ!!！」

悲鳴を上げながら左手で顔を覆い、土下座するように額を地に擦りつけ、そのままがくがくと痙攣したように震えだす。

刀が刺さったというショックか、それとも痛みによって虚勢が剥がれたのか、分からないが尋常の様子ではなかった。

その様子に化け猫は戸惑い、何か声をかけようとするが何もできず、花鈴はただただ女を見下していた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…。」

呪詛のように女が謝罪を繰り返す。

遅れて三人の元にやってきた狂骨もその場面に戸惑い、視線を化け猫と花鈴の間を泳がせる。

「二人とも…これは…。」

「死にたがってたから、血を見せてやったらこの様。」

つまらなそうに花鈴が言った。

姫斬りも先ほどまでは上気したように微かに赤らんでいた刀身をすっかり元の乳白色に戻し、その姿はまるで不機嫌なように鈍く、青白くさえ見えた。

本来ならば拘束用の神域を発動させ、特殊な薬剤によって意識を断つたのち専門の施設に引き渡すのだが、さすがにこのような状態ではそうしてよいのか判断に困る。

「っ……っおお……え……ええええ。」

呪詛が途切れ、呻き声と同時に周囲に酸味が混じった臭気があふれた。

女が嘔吐した。

女は自分が吐きだしたモノを見ると何かに怯えるように顔を上げ、再度嘔吐した。

嘔吐しては吐きだしたモノに怯え、また吐き出す。

やがて胃液まで吐き出し、何も吐くことができなくなったところで女はようやくその呪縛から解かれ、その場から逃げるように尻を向けてはいずり、地面にうずくまった。

その姿にたまらず狂骨が声をかける。

「ね、ねえ……その君……。」

「……殺して……ください。」

尻を向けたまま、先ほどの様な狂乱した様子ではなく、落ち着いた声色で女が言った。

「自分で死ぬの……怖いから……殺してください。」

「え、ええ……。」

「こ、この女あ……。」

狂骨が再度困ったように眉をひそめ、化け猫がピクピクとこめかみの血管を浮き出させる。

「リーダー、こいつとつと眠らせようよ、私が花鈴の前にそいつ殺しちゃうかもしないわ。」

「やっぱ殺す?。」

「だから殺すにやっつってんだろ!!。」

一見矛盾する様なことを化け猫が花鈴に叫ぶ。

「そう……殺すなんて言わないで……花鈴。」

「すーちゃん!。」

化け猫の言葉に同調するように、鈴音の声が響いた。

鈴音は蝟螂坂に肩を借り、だらだらと汗を流しながらも表情を変えずに花鈴の元まで歩いてきた。

「大丈夫…じゃないよね、すーちゃん。」

「大丈夫だよ、お陰様で…。」

スツと、鈴音は自分以外の血で濡れ紅く染まった唇を拭う。

その唇はどこか妖しさがあり、その所作を見た花鈴は微かに頬を赤く染めた。

「もう…殺すなんてこと、花鈴はしないで。」

「すーちゃん…。」

「花鈴は、そんなことするような子じゃないから…。」

その言葉に、花鈴がびくつと反応する。

「そんな子じゃないって…私は私だよ、すーちゃん。」

「違う…だから、やめて…。」

滅多に表情を変えない鈴音が、苦しそうに、悲しそうに、目を細めながら言う。

その表情をみて花鈴は鈴音から視線を外し、自分の手に持った姫斬りを一瞥してから、観念したように姫斬りを体の中にしまい込んだ。

同時に花鈴の姿が鬼に変化した状態から普段と変わらない、花鈴の姿に戻る。

それを見た鈴音は安堵したように息を漏らし、頷いた。

「ありがとう、花鈴…ごめん。」

「…うん、すーちゃんも…心配させないで。」

「ああ…。」

「うん…みんなもごめん、頭冷やしてくる。」

花鈴はみなに背を向け、そう一言謝罪の言葉を残し、その場を去ろうとする。

そんな花鈴を一瞬化け猫が止めようとしたが、やめた。

無駄に声をかけないほうが良いと判断したのだろう。

蝟螂坂と狂骨も同じく止めない。

四人がその場に残された。

女はその場にならないうずくまり、亀のようにまるまったまま動か

ない。

「…この女、捕まえないん…ですか？」

「いや…その…この様子だから。」

「ああ…。」

その姿を見ながら鈴音は狂骨の言葉に頷く。

そして肩を借りていた蠟螂坂から身体を離し、そつと近寄り、パークのフード部分をひつつかんだ。

さらに力づくで地面から引つ張り起こし、顔と顔を突き合わせる。

「…なに？」

女が空虚な瞳で鈴音を見る。

見ると言っても視線は定まっておらず、焦点もあっていない。

その顔を、鈴音は思いつきりしばいた。

ビターン！と思いつきり掌が頬を打つ音が響きわたる。

凄いい音であった。

餅を思い切り地面に叩きつけたような、柔らかくも激しい音。

思わず受けた一発に女がキョトンとした顔を見ると、鈴音はパークから手を離し、地面に女を下した。

「ふえ…？」

「一発、これでおあい。」

「一発って…。」

思わず女が力なくではあるが笑う。

「それで…さっきの君と別人みたいだけど…何があったの。」

「…思い出したから…全部。」

うなだれながら女は言い、言葉をつづけた。

「多分私、もう死んでた。」

「死んでた…？」

「うん。」

鈴音の問いに女が答える。

女の言葉に首をかしげて鈴音は狂骨に視線を向けると、狂骨が頷

く。

「多分だけど、後天的に妖怪になったんだと思うよ…。」

「そうですねか…言われてみれば、私もそうですし。」

「私も元は多分だけど、普通の猫だったからね、同じよ。」

狂骨の言葉に鈴音が言われてみればと納得し、化け猫も頷く。

花鈴も姫斬りの力によって、鈴音もその血を分け与えられて人ならざる力を得た。

そんな彼女たちを見て女がため息を吐く。

「なんだ…同じようなの、いたんだ…もつと早く知ってたら…なあ。」

そう言っただけの世界にこもるように膝を抱える、そうして女はポツリポツリと話し始めた。

「私…昔から変なのが見えたんだ…。」

「変なの？えっと…あー君は…。」

「…ユリカ…黒崎ユリカ…。」

狂骨の言葉に女——ユリカは自分の名前を伝えた。

「幽霊とか、そういうの…まあそのせいでいじめられたし、親もまともにとりあってくれなかったけど。」

「親…か。」

鈴音がユリカの言葉に小さく呟くように言った。

「それでも、まあおじいちゃんが仲良くしてくれたんだけど、死んじゃってさ…しかも、余計な幽霊だのなんだの見えるのに、死んだおじいちゃんは見えないの。」

自嘲するようにユリカが言った。

「それでさ、きつと力が足りないんだって変な儀式とかにのめりこんだりますますいじめられて…親とも話さなくなっ…でも、それでよかったよ、あの頃は。」

そしてそこまで話したところでユリカは息をのみ、少し間を置いてから続ける。

「で、ある日さ…まあいつも通りいじめられてただけど、食わされたんだよ…。」

「食わされた？」

「たしか、毛虫。」

鈴音が首をかしげると、思い出したくない、わざと薄めた記憶を掘り起こしてユリカが答えた。

「もう、覚えてないけど、その日の夜にお腹を壊してき、多分熱もあつたんじやないかな…でも家にいたくないし、次の日無理やり学校に行つたんだけど…。」

どんどんとユリカの顔が青ざめていく、そして呼吸を荒くしながら言った。

「登校中に倒れたんだよ、そのまま上手く動けなくなつたところで吐いて、吐いて…息ができなくなった、ゲロにおぼれたんだよ私。」

先ほど自分の吐いたものに異常な恐怖感を示したのはそれかと狂骨はユリカの言葉に納得した。

「もう苦しきとかより、いじめてたやつを殺してやるって、死んだら殺してやるって、そんな風に思いながら気失って…起きたらこの力に気づいた。」

言いながら、ユリカは自分の掌を眺めた。

「最初は死んだ虫を動かせることに気づいて、そのうち小さい動物の死体を…それで、死体を混ぜこんだり、いろいろできるようになった。」

そこでユリカは目を見開き、怯えではなく興奮したように息を荒くする。

「この力はプレゼントだと思つたんだ、今までクソみたいな人生を送つたことに対してのプレゼント…こんな人生ぶつ壊せる、世界を変えられる力！」

そこまで言つてユリカは突然茫然としたように口を開いたまま止まり、目を閉じた。

「でもあんたらの言葉でわかつたよ、私はあの時ようかいってやつになつたんだ…死んでき…まあ、思い出したよ…全部。」

「全部…今まで話したこと、忘れてたのか？」

「うん…蓋したみたい…思い出したくなかつたのかな…でも、さつき変な刀で刺されて、思い出せた…なんでかわかんないけど。」

ぺたりと地面に座り込んだままユリカは言った。

「後は…ひたすら力を…この力を凄いいものにするんだって…それで生きてきた。」

「…そして見つけたのが…この場所？」

「うん、この場所は私の力を一番使える場所と思っただから…。」

その言葉に鈴音は納得した。

彼女の力が自身が死んだことに由来する力、黄泉返りに起因するとするならば、このような場所はとっておきの場所なのだろう。

「まあ…結局さ、こんなことになっちゃったけど…もう、どうしようもないし…。」

「…。」

「殺しちゃったよ、人…この場所が奪われるんじゃないかって思って、それと、人の死体が使えれば、たくさんの死体があればもつと強い力が手に入るって。」

「それで、死にたいと…？」

「うん…もうさ、取返しつかないし。」

「ふざけるなよ、お前。」

冷たい声色で、鈴音が答える。

「お前…それで花鈴——妹に手を汚させる気だったのか？」

「なんだよ…あいつ、別に…私のこと殺したがって——」

「花鈴はそんな子じゃない…。」

「だ、だって——」

「黙れよ…。」

先ほどまで、話を聞く姿勢を見せていた鈴音の声色が一気に変わり、冷酷とさえ受け取られそうな冷えた声で自分の言葉をユリカに突きつける。

その有無を言わせない迫力に何も言い返せないユリカは口を閉ざし、ダンゴムシのように膝を抱えた。

その様子を見て鈴音は少し考えるように視線を宙にやり、ゆっくり口を開く。

「本当に死にたいなら自分で死ねばいい、生きてがっているなら…素

直にそう言えればいい。」

「…!?!」

「どうなんだ…?」

鈴音の言葉に、ユリカが抱えていた膝を解き、戸惑う様に視線を泳がせ、表情を歪ませた。

「死にたくないよ…。」

「…。」

ぼろぼろと、涙を流して。

それでもしつかりとした口調で、ユリカは言った。

「生きたいよ…もう嫌だよ、あんなの…苦しくて、息、苦しいのに、助けてくれなくて…嫌だよ…。」

「…そうか。」

鈴音はその言葉を聞くと、背を向け、ユリカから視線を外して狂骨と化け猫に目を向けた。

「もう、大丈夫だと思えます…。」

「あの…ごめんね、鈴音ちゃん、こういうのは私たちの仕事なのに。」

「いえ、見習いでも…もう事務所の一員ですから…。」

「ふふ、そっか。」

鈴音の言葉に、狂骨が小さく笑みを浮かべる。

「きつと、鈴音ちゃんみたいな人間がいるおかげで、私たちも生きてるからさ。」

「…。」

「鈴音ちゃんが仲間になってくれてよかったよ。」

ポント、狂骨が肩を鈴音の叩く。

そして捕獲用の注射器を懐から取り出し、ユリカに近づいて、そして注射器をしまった。

注射器の代わりに彼女に差し出されたのは狂骨の手。

「君は、生きてもいいんだよ、私も同じ妖怪だから保証する。」

「えぐっ…はい…。」

ユリカは狂骨の手を取った。

長い、長い一夜。



鈴音と花鈴の初めての仕事が、ようやく終わった瞬間であった。

「なあ、美味かったか、さっきのは。」

少女は語りかける。

胸の内に語るように、胸を押さえて問いかける。

「…そうかよ、まあ、力をくれるなら私はこれくらいしてやるって。」

静寂が包む中、独り、語る。

胸の内に語り掛ける。

「あの三人のは…待ってくれって、私もわかってるからさ、あの三人は自分で気づいてないみたいだけど、けっこう重いもの持ってるの。」

何かの、声ではない何かの問いかけに答えるように、複雑そうに表情を歪めながら少女は言う。

「怒るだろうな…きつと、でも赦してくれるよね…きつと…。」

「ねえ、すーちゃん。」

## 幕間劇 誇り高き拳。

あの夜から三日経った。

鈴音は放課後、八咫総合事務所に設置されたパソコンの画面に向き合いながら、あの日の事件に思いを馳せていた。

怪我に関しては花鈴のおかげもあって事件の翌日にはほとんど快復していたため、鈴音は周囲から休んでもと言われたが平然と登校していた。

鈴音としては日常のリズムが狂う方がいまいち調子が悪くなる気がしていた。

黒崎ユリカは八咫烏に連行されたが、妖怪用の収容施設に収容されるのか人間として刑務所に収監されるのか、いまだにハッキリ処遇は決まっていないようであった。

分類としては妖怪になるのだが、精神的にはまだまだ人間の域にある彼女を妖怪として扱うのは困難であった。

かといって彼女の力は尋常のものではない。

その力に苦しめられた鈴音だからこそそれが理解できる。

「…ふう。」

鈴音は画面を眺めながらため息をひとつ吐いた。

画面には大量の文章の列が並び、先日の事件についての詳細が事細かにまとめられている。

鈴音は画面に向き合って作成しているものは事件についての報告書であった。

この報告書の内容によってもしかしたら黒崎ユリカの人生が分岐するかもしれない。

そう考えると正直気が進まない事務作業にも少しは力が入る。

鈴音が軽く伸びをしていると、背後から気配がした。

「あ…蠓螂坂さん。」

「…差し入れ。」

短くそう言う蠓螂坂の手にはお盆に載せられたコーヒートフレツシュが持たれており、それもパソコンが置かれたデスクの脇にそつと

置いてくれる。

蠅螂坂は元から鈴音には気を遣ってくれている方であったが、先日の事件で鈴音が怪我を負って以来より気遣いが増えた。

本来なら見習いの鈴音を護る立場であらねばならないのに、気が昂ったあまり鈴音に対する意識が希薄になっていたことをかなり気にしているらしい。

蠅螂坂はコーヒーを置くと鈴音の邪魔をしないようにスツと後ろに下がり、キッチンに戻っていった。

その姿を少し見送ってから出されたコーヒーに口をつける。旨い。

コーヒーの良し悪しが分かるような舌はないが旨い。

とりあえずフレツシユを入れずに飲んでみたが、なんとなくこのまま、ブラックのまままで飲みたくなる魅力のある味だった。

これで案外インスタントのコーヒーなのかもしれないが、それでも丁寧に淹れられていることは分かる。

蠅螂坂のやさしさが染みだ。

その一方で他の三人は…。

「にゃんとおおお!!!ここで乙女の祈りを発動!!!」

「やらせるかよ!!!誘惑の瞳だあああ!!!」

「ごがああああ…すぴー!!!」

花鈴と化け猫は相変わらずゲームをしては取っ組み合いの繰り返し、狂骨は酒を飲んで爆睡中。

鈴音も珍しく見たいテレビがあつたのだが、この仕事のこともあり譲っていたが、まさかここまで大騒ぎになるとは。

見たかったテレビ中継は録画でも構わないが、できれば生で見たかったため少々残念である。

内容は帝都女子ボクシングのライト級王座戦と前座試合がいくつか。

旧い顔見知りが出るため見ておきたかったのだ。

しかしいったいこんな調子で今までよく仕事ができていたなど鈴音は思った。

化け猫は細かい事務仕事が大嫌いで数分もすれば椅子から逃げ出し、狂骨は耐えきれず飲酒しながら仕事を行うため文も内容も無茶苦茶になる。

蟻螂坂は機械作業が苦手なようで、報告書を鈴音の代わりに書いてくれようとしたが、タイピングがポチポチと人差し指でゆっくりゆっくりしかできない様子であったためおとなしく引き下がってもらった。

「うがあああああ!!! てめええええ何ペネトレイトずっと隠し持ってやがったんだよおおおクソ猫!!!」

「お前が前にやったことだろうがあああああ!!! ふしやあああああああ!!!」

「発動! ドラゴンスーププレックス!!!」

「にや!?! やめろおおお!!!」

花鈴が化け猫の背後に回り込み、ゲームのまねごとのようにプロレス技をくりだした。

どんがらがつしゃーんとド派手な音と共に私物が舞い、その中にあつた酒瓶が爆睡していた狂骨の額にシュート!!

ゴツンと鈍い音が響きのつそりと狂骨が目を覚ます。

その顔は露骨に不機嫌に歪んでいた。

「きーみーたーちー…覚悟は良いかなあああ!!!」

「ゲツ…花鈴こりややば…おいこらにやにしてんだ!!」

「こうなりや一蓮托生だぞ化け猫…!!!」

すかさず花鈴は化け猫を羽交い絞めにしていた。

そして狂骨が容赦なく二人ごと襟をひつつかみ、大外刈りの要領で思い切り地面に投げ飛ばした。

「へぶう!!」

二人の断末魔?の声が響く。

嗚呼…今日も平和だなあ。

鈴音の飲む、放課後のコーヒーは苦かった。

翌日の早朝、鈴音は寝ぼけ眼を擦りながらもすぐさま体を起こす。鈴音は真夜中近くまでかけようやく完成させた報告書のデータを八咫鳥に送り、すぐさま眠りについた。

そして早くに起き、昨日できなかった分のトレーニングをこなすべく準備を始める。

着古したジャージにそでを通し、ランニングしつつ筋力トレーニングのために近所の公園に向かう。

朝はどのみち帰れば蟻螂坂のたんぱく質たっぷりの料理が待っている、そう考えるとトレーニングにも精が出た。

そう思いながら走っていると、時折同じようにランニングをしている人ともすれ違う。

名前も知らない顔見知りではあるが、軽く会釈を交わしながら鈴音は走った。

早朝の空気が気持ちよかった。

そうしていると見慣れない姿が走っているのが見えた。

「え……？」

小柄でやせ細った、餓えを感じさせるような身体。

ボロ衣を腰に巻いており、さらにその首には人間がランニング中にタオルをかけることを真似するようにボロ布を巻いていた。

そう、その姿は八咫鳥の資料で見た餓鬼そのものであった。

餓鬼は鈴音と何も言わずにすれ違い、通り過ぎる。

それはそうだ、本来なら彼らの姿は人には見えないのだから。

「…。」

鈴音はそつと踵を返し、距離を開けて餓鬼の後を追い始めた。

ペースはそれほど早くない、鈴音なら簡単に追い越してしまいそうなペース。

おかげで尾行は楽であった。

資料で餓鬼は人間のまねをして自販機で飲み物を購入したりする

事例もあると聞いたが、まさかトレーニングまでするのか？

餓鬼は人間に害をなすと聞いているため、警戒として尾行をしているがランニング自体は真面目に行っている様子だった。

餓鬼は既に顎を上げながら走っており、かなり辛そうな様子が見てとれるが、走るのをやめない。

ぜひー、ぜひーと荒い呼吸が距離を開けている鈴音にも聞こえてきそうだった。

そして餓鬼が辿り着いたのは“帝都拳闘倶楽部”と古い看板に銘打たれたボクシングジムであった。

帝都の中でも老舗に入るジムである。

何人もの帝都統一チャンピオンを世に送り出したジムだ。

鈴音も昔、短い期間ではあるが世話になったことがある。

花鈴が他流や格闘技の動きに対してどう対応するかを覚えるため、鈴音はいろんな道場やジムに短期間放り込まれた。

その中で拳闘を——ボクシングを習ったのがこのジムであった。

以前鹿角家を襲撃した鬼と戦った際、ボクシングの動きをしたのはそれが原因である。

ジムからは早朝だというのに、中から微かにきゅつきゅとボクシングシューズが擦れる音がする。

早いのに朝練をしているジム生がいるのだ。

餓鬼はそこで立ち止まると、窓から中を見るように背を伸ばし、覗き込んだ。

ぴよんぴよんと跳ねながら中を見て、そして見様見真似のシャドーボクシングを開始した。

へたくそな動きで、まともに格闘技を習っているような様子はない。

ただ真剣に真似をしている様子は伝わっていた。

餓鬼はしばらくまねごとを行い、また走り出した。

それを再度追いかけてしようとしたが、その時にはすでにもう帰路に入らないといけない時間になっていた。

『餓鬼だね、オツケー私の方から一報入れておくよ。』

「助かります、狂骨さん。」

放課後、鈴音は念のため狂骨に朝見た餓鬼のことを連絡していた。

そして帰路に朝に来た帝都拳闘倶楽部に立ち寄る。

「…またいるな、あいつ。」

朝と同じく餓鬼が練習を覗き見ていた。

その目線は真剣そのもので、一生懸命に手を振ってまねごとをしている。

ただどこか、その目線には残念そうな、なにか悲し気な表情があった。

そんな姿を立ち止まって眺めていると、不意に横から声がかかった。

「え…その、貴女…は？」

「ん？」

突如声をかけた主は、ガリーイな服装に身を包んでいる小柄だがしつかりとした身体つきの女性だった。

身長は160あるかないか、可愛らしい童顔の顔立ちでゆるっとした黒い髪をしている。

一見すればふわりとしたガリーイな服装が似合う様な女性だが、首や肩回りがガツチリと発達していた。

なによりその顔には擦り傷のような跡がいくつもあり、あちこちが赤らんでいた。

その表情は上機嫌かつ穏やかな様子であった。

そして鈴音はその顔に見覚えがある。

「…その様子だと、勝ったんですね、昨日。」

「なーに、見てくれなかったの鈴音ちゃん？」

「テレビ、使われてたもので…すみません芥<sup>あくた</sup>さん…しかしよく覚えてくれてましたね。」

芥<sup>あくた</sup>麗、帝都拳闘倶楽部のジム生であり、昨日行われたライト級王座戦

——の、前座試合であるフライ級順位戦に出場した女子ボクサーだった。

鈴音とは昔短い期間であったが一緒に汗を流した仲である。

「忘れられないわよ、あのころ私と同じくらい練習してるのなんて貴女くらいだったもの、しかも歳下で。」

「光栄です。」

その言葉に鈴音は軽く頭を下げる。

たしか一つ年上の17か18歳であったはずだ。

その年齢でありながら今ではプロボクサーとして帝都トップクラスの腕を誇る彼女に覚えてもらえていたのだ、光栄なことである。

「それで今日はどうしたの、もしかしてこっちの世界に来るとか？」

「いえ…まあ、その…つい気になって。」

流石に妖怪を追ってここに来たとは言えず、はぐらかすようにそう答える。

その答えに小さく首をかしげながらも気にしない様子で芥が口を開く。

「まあいいわ、顔を見せてくれるなんて嬉しいし、どうせならうちの子たちシゴいていく？」

「遠慮しておきますよ…芥さんに任せます。」

「こーら、それだとお姉さんが人をシゴきまくってるみたいじゃないの。」

「違うんですか？」

「違わない。」

芥の答えに思わず鈴音は苦笑した。

可愛らしい顔から想像もつかないストイックさである。

「まあ今日はこれから私の祝勝会だから、さすがにほどほどにするけどね。」

「おめでとうございます…帰ったら録画、見ますよ。」

ありがとう、と芥は答える。

そして鈴音を——鈴音の全身を改めて一瞥すると、目を細めた。

「…惜しいわね、やっぱり。」



「え？」

「どんな鍛え方してるのよ、貴女：身体は大丈夫なの？」

「今のところは…。」

「どうなんだか。」

芥は肉体を一瞥し、鈴音が尋常ではない鍛錬を今でも積み重ねていることをすぐに理解していた。

さらに芥は軽く左のボディブローを鈴音に向かって放った。

軽いとはいえ、プロボクサーのパンチだ。

素人のパンチとは質が違う、奥まで響くパンチだ。

パンツ、とコーンが弾けるような音がした時には芥の手は既に元の位置に戻っている。

鈴音は平然としていた、表向きは。

表情には一切出さないが、かなりの衝撃に思わず声を出しそうになる。

が、堪えた。

その様子を見て芥は残念そうにため息を吐く。

「：昨日勝ってちよつと天狗になりそうだったけど、これじゃ鼻を高くするのは無理ね。」

「私、ウエイト60以上ありますから…。」

芥の階級はフライ級、重くてもおおまかに51キロ未満の階級である。

減量があるため自然な体重はもちろんもつと重いが、それでも10キロ以上の差があるということだ。

「ここら、私これでもプロよ、慰めにならないわ。」

芥の目に、微かに火がともる。

芥が構えた。

ボクシングにおいて基本的な、左手足を前に、足は肩幅に、しかし前後は広く。

顎を挟むように手を構えながら脇をしっかりと締める。

鈴音が思わず身構える。

それを確認して芥は拳を振るった。

三度、鈴音と芥の間の景色が歪んだ。

こつん、と軽く芥の拳が鈴音の顎に当たり、止まる。

ジャブを二回から右のアッパー。

鈴音はジャブ一発目を身体に後ろに反らし、二発目を身体を前に捻って避けたが、捻ったところを予見するようにアッパーが飛んできた。

完全に狙われた一撃である。

思わず冷汗がたれた。

花鈴なら避けられただろうなと思わず鈴音は考えてしまった。

その結果を確認して芥は少し満足げに頷き、拳を引いた。

「…全く、趣味が悪いですよ芥さん。」

「えへへ、ちよつとくらい今の実力、分かってもらわないと。」

「分かってますよ、芥さんの強さはあの頃から。」

先ほどとは別人のように表情を変え、子供のように無邪気に笑う芥を前に鈴音は毒気を抜かれてしまう。

子供のころから変わらないなと鈴音は思った。

けれど、純粹に強くなりたいなんて感情は子供のままでなければ持てないのかもと思う。

「会えてよかったわ鈴音ちゃん、またおいでよ、鈴音ちゃんならいつでも歓迎だから。」

「こちらこそ…ありがとうございます。」

満足したように背を向ける芥に鈴音は頭を下げ、芥がジムの扉を閉めて中に入るまで見送った。

芥が扉を閉めざま、律義に頭を下げたままの鈴音に苦笑するとひらひらと手を振り、そして扉を閉じた。

そこでようやく鈴音が頭を上げる。

「さて…。」

少し目を離してしまっただがあの餓鬼は、と考えて餓鬼に視線を向ける。

餓鬼はぼーっとした、惚けたような視線をジムの扉に、芥が今締めたばかりの扉に向けていた。

そして左手を前に突き出し、右手を下からぶんと振った。

先ほど、芥が鈴音に繰り出したコンビネーションの真似事のようにだった。

その姿をジツと鈴音が見つめる。

何度か腕を振ったところで餓鬼が視線に気づき、驚きの表情を浮かべる。

そしてきよろきよろとあたりを見回すと、こそこそと、気づかれていないはずだと思いつつもその場から離れる動きを見せ、走り出した。

同時に鈴音も駆け出す。

餓鬼は嘘だろ!?!という視線を鈴音に一度向け、全力で走り出すが鈴音との間は一切広がらない。

むしろ全力で餓鬼が走っているのに鈴音にはゆとりがあるくらいである。

本来なら餓鬼にとっては人間の女性など弄ぶための存在であるようなもののだが、鈴音に関しては自分を感知できること、そしてただモノではない雰囲気を含み取って逃走を選んだらしい。

しかし餓鬼は女性相手なら退魔士であろうと襲い掛かる獰猛さを持ってしていると聞いたが、あの個体は違うようであった。

八咫総合事務所の妖怪たちの様に、妖怪にも個体差があるのだろうか和鈴音は考える。

餓鬼が息を切らし始めながらも逃げ込んだのはビルの間を縫う様に作られた路地裏であった。

そこまで逃げ込み、餓鬼は意を決したように振り向くと息を切らしながらへたくそなボクシングの構えをして鈴音に向かい合った。

「ぜえ、ぜえ：へへへ、ここなら直に仲間が：ぜえひい：来るんだ：逃げるとなら：今だぜ。」

餓鬼が言うが、鈴音は何も言わない。

しかし餓鬼の構えに応えるようにボクシングの構えをした。

餓鬼とは違い、様になっている構え。

しかしどこか、どこかボクシングの構えとは違う、異質な構えで

あつた。

鈴音の根底にあるのが鹿角流という古流武術だからである。どちらが優れているということはないが、鈴音の身体に古流の動きが沁みついてしまっているのだ。

ただ蝟螂坂やいっぞやの鬼の様に深く腰を落とすような構えではなく、自然に立つような姿勢で軽く膝を曲げている程度。

「こ、こんにやろ!!」

餓鬼が鈴音に殴りかかった。

先ほど芥がしたように、左ジャブを鈴音に向かって放つ。

しかしあまりにもお粗末なパンチであつた。

「がら空き。」

「ぐぎやッ!?!」

軽く頭を右に振って鈴音がジャブとも言えないようなパンチを避けざま餓鬼に左の掌底を叩き込んだ。

餓鬼がその一撃で呆気なく後ろに吹き飛び、ダウンした。

「が、げ…え…。」

「右のアッパーを打つ意識が強すぎて右半身ががら空きだ…それにジャブが弱すぎる…牽制にもならん。」

半ば昏倒している餓鬼に対して鈴音が言い、その傍らに向かって歩き出す。

「おま…ええ…。」

「すまんが少し寝てもらおう。」

鈴音は昏倒する餓鬼の喉に手をやり、人間でいう頸動脈があるあたりに指を沿わせた。

そこには人間と同じように脈があつた。

妖怪にも臓器があり、同じ生き物ということを感じさせる鼓動である。

鈴音が指に力を込めた。

すると10秒もかからない時間で餓鬼は気を失い、力なくうなだれる。

締め落とされたのだ。

そして鈴音はその身体を肩に担いだ。  
「さて…話を聞かせてもらおうか。」

鈴音が連れて行った先は普段トレーニングに使っている公園。

そのベンチに鈴音は腰掛け、隣にまだ意識のない餓鬼を無理やり座らせた。

そこまでしてようやく餓鬼は意識を取り戻した。

「うっげえ…顎がいて…うわ！女！」

鈴音は餓鬼が起きたことに気づくとスマホを取り出し、通話しているように見せかけながら餓鬼に向かって口を開いた。

鈴音なりの周囲に見えない存在に対して話しかけるための偽装である。

流石に見えない存在に平然と話しかける様なことは鈴音はしたくなかった。

「…お前、なんであのジムを覗いてた？」

「関係ないだろ！お前には！」

餓鬼がまたしても殴りかかろうとするが、腕を振りかぶったところで鈴音の裏拳が突き刺さった。

「い…いでえ…。」

「話せ。」

有無を言わさぬ口調に餓鬼は怯えた表情を見せ、裏拳で殴られた鼻っ柱を抑えながら餓鬼が口を開いた。

「…やりたかったんだよ、拳闘。」

「何故？」

「強くなんなきゃ…いけないから。」

ほそほそと餓鬼が言った。

続ける、と厳しい目線を鈴音を送り、話を続けさせる。

「…俺たちの間でよう、頭かしら気どりで強い奴がいるんだ、そいつと勝負させられるんだよ。」

頭、とは餓鬼の中でリーダー気取りのやつがいるということであろう。

「なんで？」

「俺はどんくさくてよ…人の女を狙うのも、金をひったくるのもできなくてさ…見世物として嘲られるんだ、役立たずはこうなるぞって。」

「それでボクシングを？」

「うん、2週間後に公開処刑されるんだ、頭は猶予をやるなんて言つてたけど、どうせ観客を集めるために時間が欲しいだけさ。」

鈴音に二度殴られた跡を痛そうにさすりながら餓鬼が答える。

「で、なんでボクシングを…いや、芥さんを見てた？」

鈴音の言葉に餓鬼がドキツとしたように体を跳ねさせ、目線を泳がせる。

なにかごまかそうと言葉を考えるが、鈴音の表情から嘘は通用しないと判断し、恥ずかしそうに目を逸らしながら話し出す。

「見たんだよ、芥って女の試合。」

「ほう？」

「帝都のでかい建物にあるでっかい画面あるだろ？あそこで流れてたんだ。」

その言葉に鈴音は納得する、おそらく昨日の試合が帝都の中央街にあるビルの巨大モニタに映されていたのだろう。

「しかし芥さんの試合はそんなにすごかったのか…。」

「お前見てねえのかよ！」

鈴音に向かって身を乗り出しながら餓鬼は興奮した口調で言う、その姿はまるで少年のようであった。

「こうやって…えつと…じゃぶ？でババつと殴ってそこからズバーつとこう…あっぱーだ！さっきお前にやったみたいに！」

「ほう…。」

先ほど芥が鈴音に向かってだしたコンビネーションと似たような感じであった。

「なんてえか…すっごく綺麗で…じゃなくてかっこよくてよ！一目でこう…ぐつときちまった!!」

芥は昨日の試合ではメインイベントではなかった、しかしここまですこの餓鬼を興奮させるとはよっほどの試合だったのであろう。

「それでよ…帝都拳闘倶楽部って名前が出てたから昨日の夜探してよ！昨日は流石に誰もいなかったから…今日の朝に行ってみたんだ！」

その目は少年の様にきらきらと輝いていた。

鈴音はその目にどこか面白さを感じてしまった。

気づいた時には思わず口が開いていた。

「強くしてやろうか？」

「へ？」

「私が、お前を。」

鈴音自身も思ってもいなかった言葉に、餓鬼はさらに戸惑ったような目を向ける。

「姉ちゃん、退魔士だろ…どうせ…なんでそんなこと。」

「私も分からん…ただ、面白そうだと思ってるな。」

鈴音は何も考えず、感情のままにそう言っていた。

「それに、お前をその頭に勝たせたら、私がお前らの頭になれる…面白くないか？」

その言葉にげげつと餓鬼が顔をしかめる。

「…姉ちゃん、今の頭より怖えよ、なんか。」

「もし私の案に乗るならコーチと呼べ。」

「…だあああ！わかったよコーチさん!!どうせならお前に乗ってやる!!!」

「お前え？」

「ひいつ…コーチい…。」

そうして鈴音と餓鬼の、2週間だけの修行の日々が始まった。

早朝、ほとんど誰もいない公園。

まだ陽が昇って間もない時間に鈴音と餓鬼はいた。

練習時間と場所を指定したのは鈴音、登校前と放課後、ここで餓鬼をシゴくことに決めたのだ。

鈴音は背にバッグを背負っており、そこから子供用のジャージを一着とニット帽にスニーカーを取り出すと餓鬼に向かって投げ渡した。

昨日餓鬼と別れた後に購入してきたものだ、ほかにもトレーニング用の品をいくつか用意している。

「まずこれを着ろ、帽子もな。」

「ななな、なんだよーこれ!？」

「昨日買ってきた、それで身体を隠せば姿を人にさらしても良いだろ。」

「なんでそんなこと…。」

「お前は私に透明人間と練習させるつもりか？四の五の言うな、着ろ。」

餓鬼は口答えするが鈴音の迫力に委縮し、おとなしくジャージを着始める。

適当にサイズを見繕ったため少しばかりぶかっとしていたが、袖と裾をまくり、スニーカーのひもを無理やり固めに締めさせた。

「コーチい…なんか落ち着かねえよ。」

「仕方ないだろう…では始めるぞ、2週間なら筋力トレーニングで成果を出すのは難しい、とにかく少しでも技術を叩き込む。」

鈴音はボクシングじみた我流の構えではなく、なるべく本来のボクシングらしい構えをしながらジャブを放った。

ジャブ。

ボクシングの前手で行うパンチ。

牽制のパンチ。

必殺のパンチを当てるための牽制に過ぎないパンチ。

否。

その認識では鈴音はいけないと考えていた。



「肘を脇から離さないイメージで、やや内角から挟りこむように…打つ！」

パンツと衣擦れの音が誰もいない公園に響いた。

だが鈴音が見せたジャブは大きく前に一歩踏み込みながら全身の体重を乗せて放つ、独特のものであった。

ボクシングというよりも、まるで剣術における片手突きのような…遠間から一気に突き込むような動きだった。

「コーチ…なんかボクシングと違うぜ…。」

「誰がボクシングを教えると言った、強くしてやると言っただろう。」「はあ!？」

「ボクシングの技術だけで強くさせられるほど私は強くない、が、他の技を混ぜれば別だ。」

鈴音が所謂普通の、ボクシングらしいジャブを放つ。

軽く前に踏み込みつつ肘から先を走らせるようなパンチ。

それから先ほど打った、大きく前に踏み込んで遠間から突き込むようなパンチを放つ。

間合いが大きく違っていた。

ジャブの方が動きが少なく隙も無ければ連打も効く。

だが威力と射程距離の長さという点に関しては、後者のパンチの方が大きく勝っていた。

「これは奇襲技だ、届くはずがないと思っている距離から放つ、だからこそ動きが大きくなるからそれを当てるために無駄を削ぐ。」

強い目で鈴音は納得がいかなさそうな餓鬼に言う。

この餓鬼がボクシングにこだわる気持ちは分かる。

憧れとはそういうものだ、だからこそと鈴音は続ける。

「ここからだ、まずはこれを当てる、そこからペースをつかんで相手の間合いに入ればボクシングの技術の出番だ。」

「分かったよ、コーチ…あんた…コーチの強さは知ってるからよ、やるぜ。」

鈴音の言葉によろやく納得したように餓鬼が頷いた。

そこからは徹底した技術指導が始まった。

鈴音がジャージと共に購入しておいた“OKUBO”とブランド名が銘打たれているパンチミットを装着する。

安価ながら値段以上の質があることに定評がある大久保財閥傘下のメーカー製だ。

餓鬼のパンチを受けながら鈴音の櫓が飛ぶ。

足運びが遅い！

ミットを見るな、私の顔を見て打て！

腕で打つな！肩を出して全身で打つんだ！

それが本気か!? 気合を入れる!!

何故さつきより弱いパンチを打つ!? 気を抜くな!!!

殺すぞ…。

早朝の公園に物騒な声が響く。

餓鬼は怯えながら必死でパンチを打ち続けた。

同じ動作を何度も何度も繰り返した。

もう練習が終わるというころには鈴音に対する恐怖と疲労でアドレナリンがあふれ出し、狂ったようにパンチを打っていた。

時間にしては1時間程度であったが、終わることには餓鬼は倒れそうな程に消耗していた。

「(っ)までだ。」

「ぜえぜえぜえひいひい…！」

餓鬼はぶっ倒れる寸前になりながら鈴音の言葉を聞いてその場へへたりこんだ。

新品のジャージの色が汗によつてずぶぬれになったように変わっていた。

その餓鬼に向かってバッグからコンビニエンスストアの袋を取り出すと放りなげ、ミットを仕舞うと中身が軽くなったバッグを背負った。

「朝食だ、中に昼のトレーニングメニューも入れておいた、放課後までに済ませておけ。」

「は、はあ?！」

餓鬼が袋の中をのぞくと、プロテインジュースとサラダチキンがい

くつかに袋入りのカット野菜、そして縄跳びとトレーニングメニューが書かれたメモがあった。

「やっていなかったら私は分かるからな、死にたくなければやれ。」

「や、やるよ！やりますよコーチ!!!」

餓鬼は身震いしながら答える。

それからの2週間は、餓鬼にとって地獄と天国が入り混じったような、そんな日々であった。

鈴音の練習は厳しいが、厳しい分強くなっているという実感はあった。

思わぬタイミングで、疲労の底にあつて動けない中、無理やり身体を動かした途端なにか歯車がかみ合ったように体が動く瞬間がある。

何度やってもできずに絶望した動きが、翌日の朝になると不思議とできてしまう瞬間がある。

徹底した反復練習と一瞬も気が抜けない極度の重圧の中行う練習は地獄にふさわしい厳しさだが、自分が強くなった実感があつた瞬間の快樂は天にも昇る気持ちであつた。

そんな日々はあつという間に過ぎていった。

そしてついに決戦の日が翌日に迫つたある日、鈴音は放課後の練習を軽く切り上げた。

「コーチ、今日はこれで終わりか？」

「ああ、明日のために今日は休め、もう私はこの期間に教えることは教えた。」

「け、けどよ！まだ！まだ——」

「ここで無理をしたらつぶれるぞ、本当なら朝から休んでもらいたかつたくらいだ。」

不安そうに声を荒げる餓鬼に諭すように言う。

「…今日は景気づけだ…飯でも食いに行くぞ。」

「は？マジか？でもコーチ俺は…」

「その恰好ならごまかしは効く…猫耳だって隠せるんだ、お前も顔くらいごまかせ。」

「な、な、な…無茶言うぜコーチ！」

「それに顔くらい誤魔化せないと、芥さんの前に顔も出せないだろう。」

「あ、ああああ芥さんの前に俺がななななななで!？」

「ただ、試合を見て憧れただけではないんだろ？」

「：コーチ：そいつあ機密事項だぜ：。」

「何が機密事項だ。」

鈴音がツツコミという名の鉄拳を振るうが、なんと餓鬼はその鉄拳を難なく掌で受け止める。

「コーチ：このツツコミやめてくれよ：手がいつてえんだ：。」

「一目惚れか：芥さんも罪な女だな：。」

「話聞けよ！ああそうだよ！あんだだけつええのに！すっげえ綺麗で！ビリビリつと来ちまったんだよ！」

「精々明日勝つてからも強くなるんだな：今のお前なら芥さんに触れもできないぞ。」

「いやそりゃ俺ごときがそんなことあできねえっていうか：：する気もねえっていうか：：こう：：すす好きなんだけど：：そういう気持ちじゃねえっていうか。」

頬を染めながらまごまごという姿は本当に人間の少年と遜色ないようだった。

妙に人らしいというか、人間臭いというか、どこか八咫総合事務所の三人を：いや、いつかのあの鬼を思い出すようだった。

もしかしたらあの鬼にもこんな時期があったのかもしれないな、と鈴音は今は亡き武人に想いを馳せる。

「まあいいじゃねえかこんな話、恥ずかしいぜ：：早く飯連れてつてくれよ：：！」

「ああ：：すぐそこだからな。」

「すぐそこって：：それ牛丼屋じゃねえか!？」

「文句あるか？」

「いーえ：：ありましえん：：。」

「というか：：牛丼食ったことあるのか。」

「コーチには言いたくねえやり方で：：。」

「ほう…気になるな。」

「ひい！頼むから聞かねえでくれよお！」

「分かったよ…まあ前祝いだ…トツピングは無制限にしてやる。」

「マジかよ！うっひよー！チーズに卵に…早く行こうぜコーチ！」

鈴音の一言で餓鬼は目を輝かせ、待ちきれないと走り出した。

その姿に苦笑し、鈴音は後を追った。

その後餓鬼は餓えた鬼という名の通り、特盛2杯にチーズと卵を2倍盛でトツピングした牛丼を平らげた。

鈴音も負けじと同じ量をたいらげ、更に並盛を追加で食い切り餓鬼の目を丸くさせた。

その日の鈴音の財布は…軽かった。

翌日、鈴音は真夜中事務所を抜け出した。

黒いブラウスにロングスカート、夜に溶け込むような服装。

その姿で事務所を出るとき、声がかかった。

「すーちゃん、何をしてるのかなあ？」

「花鈴…。」

「みんな勘づいてるよ、最近帰りも遅いし朝も早い、昨日は蠟螂坂のごはんを断って外でなんて怪しすぎ…。」

じろりと花鈴が目線を向ける。

嘘をついても無駄かと鈴音が事情を話そうかと思った瞬間、先に花鈴が口を開いた。

「どこの女なの…。」

「へ？」

「もしくは男!? すーちゃん!! 答えて!!」

「いやたしかに男? と会ってるけど——」

「はああ!? 殺す! 絶対に殺す!」

「いやその花鈴…待って…違うから…。」

「こんな時間に男に会うってじゃあ何!? 浮気者! すーちゃんの馬鹿!!」

「浮気って…分かった…話すから。」

鈴音は花鈴に全て事情を説明した。

その言葉に花鈴は唇を尖らせながらも頷いた。

「なんで隠してたの…私がそいつを殺しに行くとしても思った?」

「相手は餓鬼だ…本当なら私退治しなければいけない立場だからな…。」

「すーちゃん真面目過ぎ、てか、そういうの隠された方が私が怒るってわかるでしょ?」

「そうだな…すまなかつた…。」

「いーよ、私も逆にそういうのすーちゃんが隠すの知ってるし。」

ツンとした口調で花鈴が言うが、でも、と言葉をつづけた。

「すーちゃん、でも何か抱えることがあったら言っただけ、私はいつでもすーちゃんの味方になるよ。」

「花鈴、ありがとう…私も花鈴の味方だから。」

「知ってるよ! じゃあすーちゃん、いつてらっしやい!」

真夜中、帝都の闇の中。

光があれば闇ができる。

人は光に、人非ざる者は闇に。

ここは人の住む場所だと主張するように一日中光を灯す帝都だが、

それでも光がある限り闇は存在する。

中央街から離れた秋奈町の町はずれになるとそれは顕著だ。

一日中光り輝く中では人は眠ることはできない。

人にもまた闇が必要なのである。

そして人ならざる妖にも、光が必要であった。

綺麗な満月の夜だった。

月明かりと、微かに町の街灯や遠くに輝く夜景の光が入り込むその場所は既に人が入り込まなくなって久しい廃工場。

天井が抜け落ち、朽ちた資材が最早廃材となつて放置されたままになつているその場所に、闇が蠢いていた。

大量の餓鬼たちが廃材を椅子のようにして腰掛けたり、寝そべりながらどこかから盗んできたであろう野菜などをかじりつつ円を描くように集まつていた。

その視線の先にあるのは一匹の餓鬼。

餓鬼というには違和感がある、餓えて痩せ細つていてというより絞られた肉体といった表現が似合う身体。

痩せ型ではあるのだがひ弱な印象はない。

さらに身長も他の餓鬼に比べて頭一つ大きかった。

餓鬼の集団を束ねる頭格の餓鬼である。

その餓鬼は明らかに苛立った様子であった。

「あいつ…逃げやがったか…おら！さつきと探してこいって言うてんだらうが！」

「すみません！さつきまではいたんですが…。」

「てめえが代わりになりてえのか…？」

「ひい!!!」

どうやら決めた時間を越えてもあの餓鬼が、今日鬨り殺しにするはずであった餓鬼が来ないのだ。

来ないというより本来なら無理に連れて来るところ、あの餓鬼は自分の足でここまで先に来ておきながら、直前になつて逃げたのである。

もう頭格の餓鬼は他にどいつを殺すか値踏みを始める——その時

であった。

「頭かしらあ…すんません、小便にいつてまして。」

「てんめえ…チビ！死にてえのか！」

チビと呼ばれた餓鬼が、囲いをかき分けるように頭と呼ばれた餓鬼の前に現れた。

その餓鬼こそが今夜の贄であり、頭が待つていた相手であった。

声を荒げる頭に対してチビは冷静であった。

その身にはボクサーのガウンの様にジャージを羽織っており、袖は通していないが顔を隠す様にフードを被っていた。

表情は見えないが怯える様子を一切見せない声色が頭の怒りを加速させた。

「なんだその恰好はよ…脱ぎやがれ、相手してやる。」

「ちよつと待つてくださいいよ頭あ、まだみんな賭け金賭けてる最中じゃあないですか。」

横に視線をやれば、一匹の餓鬼がどこからか拾ってきた大きな帽子と小さなお椀を手に周囲から金を集めていた。

大きな帽子の中には大小様々な小銭が投げ入れられており、じやらじやらと音を立てているが、小さなお椀には何も入っていないかった。

「馬鹿、誰がてめえに賭けるか、ありや建前でてめえを殺した後にみんなで祝い飯を食うための金集めてんだよ。」

「そいつあ面白いですね、だったら俺のために大口の賭け金出してくる人が来るんで待つてくれませんか？」

「人お？てめえ何言つて——」

頭がチビの言葉に疑問符を浮かべた途端、餓鬼の集団がどよめく音が聞こえた。

「挑戦者に一万だ…忘れるなよ…わざわざ卸してきたんだからな。」

凜とした、女性の声が響く。

この場所において聞こえるはずがない声。

女は小さい何も入っていないお椀に一万円を突っ込んだ。

餓鬼の集団はいつの間にか人間がここに——そしてなぜ誰も気づかなかったのかと驚き、各々何事だと声を上げた。



しかし女は臆することなく餓鬼の集団の中に入り込むと当然の様にどつかりと廃材の上に座り込み、頭とチビがいる方向に視線を向けた。

頭はそれを見てチビに向かって怒りの声を上げる。

「あいつ退魔士か!?俺たちを売りやがったな!!!」

「違いますよ!ありやそんな可愛い代物じゃないです!中身は鬼ですよ!鬼!」

「何が鬼だ!裏切り者が!」

「はあ?なんで俺が裏切る必要があるんです?」

「なんで:だとお!」

「勝つ気だつて言ってるんですよ、俺は:。」

「てめええええええ!」

もう頭の怒りは爆発寸前であった。

その時、またしても凜とした女の声が響いた。

餓鬼たちのがやに紛れての中であつたが、チビにはその声ははっきりと聞こえた。

「誰が鬼だ::覚悟しておけよ::。」

ゾツとする様な声色にチビが震えあがる。

鬼と称された彼女こそ、チビのコーチである鈴音であつた。

「ひい!勘弁してくれよコーチ!死にたくねえ!」

「女あ::なんだお前は!」

「そいつが言っただろう、ただのコーチ::鬼コーチだ。」

「無駄なことを::こいつを殺した後はお前でたつぷり愉しんでやる、逃げるなよ::!」

「悪いが::戦う前に四の五の言う奴は好みじゃない::。」

言いながら鈴音は懐からスマホを取り出し、何やら操作するとチビと頭に視線を向けた。

その視線を感じ、チビはガウンめいたジャージを足元に脱ぎ捨てる。

同時に微かに餓鬼たちからどよめきの声が上がった。

その身体が、意外にもしつかりとした身体つきをしていたからであ

る。

頭に比べるとかなり見劣りするが、それでもたった2週間で変わったにしては驚くほどであった。

肉体にも艶があり、まるで輝いているようであった。

そして、構える。

ボクシングの構え。

憧れた、強さ、その象徴たる構え。

後ろ足のかかとを上げ、膝で小気味良くリズムを作りながら、そのリズムに乗ることを楽しむように笑った。

「そろそろ始めましょうや、頭あ！」

「いいだろう、殺してやる!!!」

その言葉と同時にカーンと甲高い金属音が響いた。

鈴音がスマホに入れておいたゴング音のサウンドを鳴らしたのである。

「があああ!!!」

頭がチビに向かって突っ込み右手を振り上げる。

それに対しチビは、なんと足元に先ほど脱ぎ捨てたジャージを足で掴み、頭に向かって放り投げた。

「ぬう!?!」

頭は咄嗟に左腕でそれを弾くが一瞬視界が塞がれた。

右手は振りかぶり、左手は今ジャージを弾くために外に払われた。

顔面が、がら空きになった。

「だああああああ!!!」

チビの咆哮と共に、ジャブが——いや、ジャブと言うには重過ぎる、全身で飛び込むようなパンチが頭の顔面にぶち当たった。

視界を封じ、思わぬ距離から放たれる予想外に重い一撃。

体格差を覆す、幾重にも策を巡らせた一撃だった。

「ぐえっ!」

頭が思わず声を苦し気な声を漏らす。

しかし頭はそれだけでは倒れず、強引に右の大ぶりなパンチを放つたが、チビは難なく身体を捻りつつ身体を屈めてそれを避け、さらに

捻った身体を戻す勢いを利用してわき腹に左アッパーを放った。そしてすぐさまウサギの様に跳ねてその場を離れた。

その姿を見て鈴音は微笑む。

珍しい鈴音の笑みであった。

「蝶のように舞い蜂のように刺す、とは言えないが…ウサギのように跳ねバツタみたい飛び込む、くらいはできてるかな。」

ぴよんぴよんと跳ねるようなチビの動きを見て鈴音はそう評した。しかし上出来である。

跳ねるチビに向かって頭が再度突っ込みまたしても右の振りかぶったパンチを放つ。

チビは前に向かって踏み込みながら難なくそれを避けつつカウンターの右ストレートを思い切り放った。

まともに当たった。

チビも自分の拳が壊れるのではないかと思うくらいの手ごたえを感じていた。

しかし頭の勢いは止まらない。

今の一撃で口の中を切ったのか、血を口の端から滴らせながらも倒れこむようにチビに向かって突っ込み、掴みかかった。

勢いのまま組み付いて押し倒そうとするが、頭はチビの身体に触れたとたん驚きの表情をかすかに浮かべる。

「てめえ——」

頭はチビの身体を掴めなかった。

ぬるぬると滑り、上手く組み付けないのである。

チビは全身に油を薄く塗っていた。

身体が艶めいて見えたのはそれが原因である。

実際に表面が油で艶めいているのだ、見えて当たり前である。

「でやあ!!!」

間近に迫った頭の顎にチビがアッパーを打ち込み、更に追撃に左肘を側頭部に叩き込んだ。

その一撃で距離が開いたところで勢いついたチビは逆に距離を詰め、首の後ろに手を回し頭突きをぶち込もうとする。

それを見て鈴音は思わず声を上げた。

「馬鹿ー！」

鈴音が声を上げた時には遅かった。

逆にチビが、カウンターの頭突きを喰らっていた。

頭突きというものはとても効果的な技だ。

しかし同時に自分がカウンターによってダメージを喰らう恐れもあるリスクのある技でもある。

チビはその一撃で、一瞬膝を崩しそうになるほどのダメージを受けた。

そこに容赦なく頭がパンチを打ち込む。

当たった。

体格差という、あまりにも非常な差。

チビはあつけなく後ろに向かってぶち飛ばされた。

「こ、この…チビがあ!!!」

息を荒くしながら頭が倒れたチビに対し追撃に向かおうとするが、その足元がややおぼつかない。

効いていたのだ、チビのパンチが。

頭がチビの元に辿り着くより先に、チビが顔面から血を流しながらも立ち上がった。

「へ…へ…痛え…痛え…！」

「なに笑ってんだあ！チビィ！」

チビは笑っていた。

その顔は、死線を前に笑う、鈴音とまるで瓜二つの様であった。

「痛いってのは…まだ意識があるってことだからよお!!!」

叫びながらチビは頭に向かって突っ込み、同時に口から何かを頭に向かって吹き出した。

チビが血と共に吹き出したのは折れた歯であった。

だがその程度ではもう頭も怯まない。

その目はしっかりとチビを見ていた。

もうその目は、弄び矜るための格下を見る目ではなかった。

明らかに自分と同じ格の相手を見る、敵を見る目が変わっていた。

チビに殴られながらも、強引に頭が殴り返す。  
チビはとっさにまともに殴られぬよう身体を反らす、それでも頭のパンチが当たった。  
ダメージを削いではいるが、体格差がここでも出ていた。  
そこからは足を止めながらの壮絶な殴り合いであった。  
両者の拳が動くたびに血が舞い、汗が飛び、咆哮が上がる。  
パンチを受けながらも技術でダメージを削ぎ、パンチの連打を打ち込むチビ。

連打を受けながらも一步も引かず渾身のパンチを打ち返す頭。  
熱狂が両者を包んでいた。

最早勝ち負けなど、観衆の餓鬼にも、どうでもよかった。  
ただただ今の光景に見入っていた。

叫んでいた。

心の猛りを叫ぶことでしか表現できないのだ。

「があああああ!!!」

「があああああ!!!」

歓声の中、両者の咆哮が響く。

同時にお互いの拳が交差し、チビのパンチが頬に、頭のパンチが額にぶち当たる。

咄嗟にチビは額で受けたもののその衝撃に後退したが、まともにパンチを受けた頭もまた同じであった。

両者の距離が開く。

チビは半分意識が飛びながらも、距離が開いた途端に前に向かって飛びこんでいた。

頭は、その動きを見て怯えた。

あの飛び込んでくる左パンチが来る、重い一撃が!

頭は反射的に身体を屈めて避けようとした。

しかし身体を屈めて逃げたその先にあったものは――

「あああああああ!!!」

チビのアップアッパーが、軽い左ジャブからつなげた渾身のアップアッパーが、頭の顎を力チ上げていた。

芥が——チビの憧れの、強さの象徴である芥麗が得意とするコンビネーション。

それはジャブの威力があつて、相手がそれを恐れるからこそ成立する、基本ができているからこそできる必殺コンビネーションであった。

鈴音はそれを強引に実現させるため、あえてボクシングのジャブとは違う、独特のパンチを授けたのである。

頭がその一撃で膝を折った。

折つてそのまま、膝立ちでぐらつき、最後は崩れ落ちた天井から覗く月を仰ぐように、仰向きに倒れた。

先ほどまで声を上げていた餓鬼たちが、その瞬間だけは、ぴたりと静まり返った。

目の前の光景を見て、チビは震えていた。

信じられないと、まだ焦点の定まらない目で、眺めながら、震えていた。

カンカンカーン——

静寂を割くように甲高い金属音が、鳴り響く。

鈴音が、ゴングを、試合終了のゴングを鳴らした音であつた。

「あ……あ……」

その音を聞いてチビは、震えた身体を抱きしめるように腕を抱え、そして天を見上げた。

そして天に輝く月に向かって、まるで天命に打ち勝った自分自身を称えるように拳を突き上げ——

「おおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

雄たけびを上げた。

その声に応えるように歓声が上がリ、拍手が波のように広がった。シャワーのように歓声を浴び、チビは周囲を見回した。

自分を育ててくれた、最高のコーチの姿を探した。

しかし、その姿は既になかった。

歡喜の表情から一転、まるで親とはぐれた幼い子供のように表情を歪ませ、必死に鈴音の姿を探した。

「コーチ!? コーチ?! おい!!! 出て来いよ鬼コーチ!!! おい!!!」

しかし鈴音の姿はどこにも無かった。

ここに音もなく現れた様に音もなく消えてしまった。

ただ、賭け金を入れていたお椀と帽子がいつの間にか消え、そこに残されたものは祝勝代と書かれた封筒が一つ。

中には1万円札が2枚入っていた。

たったそれだけが、彼女がここに存在していたという事実の、唯一の残り香だった。

「いらねえよお……。」

チビは泣いた、先ほどまでの歡喜は失せていた、ただただ今は——  
「いらねえよおおおお!!!」

哀しかった。

もうすでに陽が落ちてから時間が経ち、街灯の明かりが眩しく感じる夜。

その日に月明かりはなかった、新月の夜である。

芥麗が帝都拳闘倶楽部を出たのはその時間であった。

彼女はトッププロであり、遅くまで練習をこなすのは日課であり当然のことであった。

今日もぶつ倒れるような練習をこなしながらも、自分の足で歩いて帰っていた。

それは彼女なりの体調管理である。

もし帰れないレベルで身体が動かなければそれはオーバーワークだと芥は考えていた。

今日はしっかりと自分の足が地面を歩いているということに安心しつつ、街灯の元をたどるように帰路につく。

近道だからと明かりのない路地裏を抜けるような不用意な真似は芥はしなかった。

プロボクサーではあるが、不意打ちで刃物で襲われて、生き延びれるというような慢心は彼女にはなかった。

もしそんなことができるのであれば、ついひと月ほど前、不意に現れたあの懐かしき少女くらいであろう。

久々にあつた彼女は身体つきもさることながら、佇まいが尋常ではなかった。

思わずじやれあい得意地悪をしてしまったが、もし彼女と真剣勝負をしろと言われたら迷いなく辞退しようと思う。

そんな心構えが出来ていたからであろうか、芥は街灯を二つほど挟んだ道の先、街灯の隙間の暗がりになっている地点に少年が一人立っていることに気づいた。

少年はニット帽を目深く被っており顔がよく見えす、ダボつとしたジャージを袖と裾をまくって着ていた。

明らかに普通の少年ではなかった。

少年は芥の姿をニットの隙間から覗く瞳で確認すると、口を開く。

「芥麗さん、ですよね。」

「だったら…？」

芥は少し後ろに下がりながら、いつでも逃げられるように体勢を整えながらそう返す。

すぐに逃げなかったのはその少年が怪しいながらもあまりにも堂々と立っていたからか、その声が予想外に穏やかで落ち着いていたからか。

分からないが芥は少年の声に耳を傾けていた。

「ごめんなさい、俺、事情があつて、こんな形で話しかけてしまつて。」

「…。」

「でも一っだけ伝えたくて。」

少年は突然頭を深く下げた、帽子を頭に被つたままであつたが、深



く、見かけだけではない、誠意の感じるお辞儀だった。

「俺！芥さんのおかげで…強いつてかつこいいと思えた！おかげで本当に強くなれた!!」

「え…?」

姿の見えない、謎の少年から突然向けられた真つ向からの好意に、芥は思わず小さく声を出した。

「それと、あの鬼コー——この前に芥さんと会ってたあの女の人に伝えてください…。」

あの女？と芥が誰のことだろうかと思いつたりを探る。

会っている女性など芥には山ほどいる、だが、芥には何故か、鈴音の顔が脳裏に浮かぶ。

その時、少年から鼻をすすするような音が聞こえた。

泣いているのか？

芥が思った通り、少年は涙声で叫んだ。

「祝勝代！使つてねえから！今度は俺の奢りで牛丼だつて！全部のせだつて！」

そう言つて震える声を抑えるように息を飲み、少年は背を向けた。

「すいません…でもお願いします…。」

少年が走り去る。

その姿に芥は精いっぱい声を張り上げ、叫んだ。

「少年！うちのジムにとつと来い！誰でも歓迎してやる！」

少年は振り返らない、振り返らぬまま、街灯の下を通るたび、涙のしずくを煌かせながら走る。

「待つてるからなー!!!」

少年にとつてその言葉は、最高の贈り物であった。

「…あの馬鹿。」

鹿角鈴音はその光景を物陰から見ていた。

正直なところ、鈴音は餓鬼の本能からして、芥に襲い掛かるのでは

と危惧していた。

力を持つということとはそういうものだ。

暴力という最も恥ずべき力は、最も香しい魅力を持つ。力は、振るいたくなるものだ。

鈴音はそう考えていた。

故にこの場所に鈴音はいる。

これ以上彼らの界限に干渉するのも悪いと姿を消したが、それは全くの無責任であったと反省していた。

だがあれから秋奈町の周辺において餓鬼に関する事件の報告は聞いている。

八咫鳥本部に餓鬼に関する事件があれば必ず送ってくれと要請していたが、どれも秋奈町から遠く離れた場所での事件ばかりである。

それには安堵しながらも鈴音は油断していなかった。

もし鈴音なら安心したようなタイミングを狙う。

そう考えて一番危険な、チビが想いを寄せていた芥を陰から見守っていたが、結果はこれだ。

初見の印象通り、本当に子供の様な奴だった。

あのどこまでも強いものに憧れる、子供そのままの目。

今思えばその目は芥に似ていた。

だからきつと自分はあるのチビを強くしたのだろうと、鈴音は今更ながら納得した。

「…教えることは、同時に教えられることって言うのは…本当なんだな。」

そう言い、鈴音は物陰に消えていく。

もう芥を鈴音が守る必要はない。

「ありがとう。」

鈴音は誇り高き、自分にとって初めての弟子と言える存在に礼の言葉をこぼした。

報告書。

秋奈町での餓鬼との戦闘について。

真夜中の秋奈町を巡回中、餓鬼数匹と遭遇。

こちらの姿を視認した途端、リーダー格の餓鬼が他の餓鬼を逃すという行動を確認。

普通の餓鬼とは違う、こちらの力量を読み取った冷静な判断であり  
今後は警戒が必要。

おそらく盗難品であろう運動用の服まで身に付けていた。

リーダー格の餓鬼は逃亡するそぶりを見せず、挑発するような言葉をこちらに向けて発しつつ戦闘の意思を見せた。

一対一での戦闘に突入。

その餓鬼は霊銃の銃弾を2発かいくぐるようにこちらに接敵。

3発目の霊銃が左腕に命中したが、その餓鬼は止まらずに格闘戦に突入。

こちらにも手傷を負うが大通しにより胴を両断。

餓鬼の絶命を確認。

死後持ち物を確認したところ、ジャージのポケットから祝勝代と書かれた封筒を確認。

中身には1万円札が2枚。

被害者が出ている可能性が高く、秋奈町内での盗難事件および強盗事件との照合が急がれる。

以上。

猿女留美子。

「苦い…なあ…。」

「苦くて…涙が出る…。」

鈴音が飲む、放課後のコーヒ―は苦かった。

## 18話 平和な危機の訪れ

帝京歴784年、7月。

多くの事件が巻き起こった初夏から刻が経ち、湿り気のある空気が消え、梅雨が明けようとしている今日この頃。

八咫総合事務所は重苦しい雰囲気に含まれていた。

元からいたメンバーである妖怪たちと、もうすっかり事務所の雰囲気馴染んだ少女二人を含めた五人組。

その内の少女一人があるものを目の前にして他の四人に囲まれていた。

分かっているよ…。

少女は思う。

悪いのは全部自分だ。

仕事とか、鍛錬とか、嫌なことがあったとか、言い訳にはならない。全てはなるべくしてなった結果だ。

自分の不徳がなしたことである。

だが、そうわかっていても、信じたくないことはある。

「鈴音ちゃん…ごめんね私たちも悪いんだ。」

やめてください狂骨さん、自分がすべて悪いのです。

「そうよ…鈴音ちゃんは悪くないわ…貴女が…その…こんなだって知っていたらこんなことには…!」

化け猫さん、優しさは時にトゲとなるんですよ。

「…鈴音。」

静かに肩に手を置くのはやめてください蠟螂坂さん、胸が痛いです。

「すーちゃん…私が養うから…大丈夫だよ!!!」

やめろ!花鈴!やめてくれ!!!

少女——鹿角鈴音はあるものを目の前にしてうなだれていた。

目の前にあるものは、数学や物理等の理系関係の学期末テストの答

案。

名前の横に刻まれた数字は18、20、16と酷い点数が並んでいた。

そして数の横に無情に記された、追試の二文字。

鹿角鈴音、16歳。

追試デビューです。

「えー、お集りの皆さん、緊急事態です。」

八咫総合事務所の私物でござったがえしたオフィス、そこに4人のメンバーが集まっていた。

狂骨、化け猫、螭螂坂、そして花鈴である。

緊急事態とは鈴音の追試である。

なお鈴音本人は今この場にはいない。

学校にて追試対策のための勉強会に強制参加させられているのである。

「いやー、忘れてたわ、すーちゃんが割とお馬鹿だつて。」

「言えよ花鈴！それなら報告書とか事務仕事とか任せなかつたわよ！」

能天気と言う花鈴に化け猫のツツコミが飛ぶ。

そう、鈴音は割と勉強が得意ではなかつた。

雰囲気的にできそうなのがあるが、実際は滅茶苦茶苦手なのである。

今までの試験は元から少ない睡眠時間を削ってどうにか赤点は回避していたが、今は生活環境もいつぺんに代わり、更に仕事まで引き受けていたのだ。

そんな状況でまともな点数が取れるはずもなく。

「なまじ事務仕事ができるから油断してたよ…。」

「鈴音ちゃん文章は丁寧よね…。」

「すーちゃん…私の代わりに生徒会の文章とか打ってくれてたから…。」

「姉に何させてんのよ!」

「すーちゃん国語の点数は高いから!だいたい50点は固い!」

「それ高くにやいでしょぜったいいい!!!」

化け猫は頭を抱えた。

!!!

「待って、そういうあんたはどうなの花鈴!」

「いや…私ほだいたい90点以上は固いけど?」

「おいこるああああ!!それでにやんで雑用おしつけてんだ!!!」

化け猫がバシンと思いい切り花鈴の頭を叩いた。

普段なら避けるなりなんなりしている花鈴であったが、今回はかりは思うところがあつたのかそのツツコミを甘んじて受け入れた。

「いつてえ…とにかく!今はすーちゃんの追試対策しないと!」

「そうだね…追試は来週、とりあえず各々できることをやろう!」

狂骨は強い口調で言い放った。

「鈴音ちゃんに合格してもらわないと…また事務仕事を私がやる羽目になる!」

「おい、リーダー。」

続けられた狂骨の言葉に化け猫が冷たい声色を出す、その言葉に狂骨はギラリと目を光らせる。

「あのねえええ…化け猫、君も事務仕事手伝ってくればよかったんだよ!」

「うにや…あーその…。」

「もうやだよ私は!何回も何回も訂正の赤ペンが入った書類を直す作業は!」

「それは酒飲んで書類書いてるリーダーの自業自得じゃねえかにやあああ!」

「やりもしない君に言われたくはないねえええええ!!!」

「…じゃあ僕がや——」

「役立たずは下がって!!!」

言い争う化け猫と狂骨を前にして蠟螂坂が言葉を発するが、齒に衣



着せぬ戦力外通告に項垂れ、しゅんと引き下がってしまった。

二人の矛先が一旦蠓螂坂に向かったことで少し落ち着いたのか、ふーふーと息を荒くしながら言い争いを一旦休戦する。

「で、鈴音ちゃんのためににやにすんの…？ 私は学校の勉強とかさっぱりよ？」

「…私も。」

「…僕も。」

化け猫の言葉に狂骨と蠓螂坂が同意する。

彼らは妖怪なのだ、高校の専門的な勉強など教えるどころか習ってすらいない。

つまり、今の時点で勉強のサポートができるのは――

「じゃ、私しかないか…家庭教師花鈴頑張りまーす。」

「あー…じゃあ私は部屋片づけるわ…この部屋じゃ集中できないだろうし。」

化け猫がゲーム機や取っ散らかった書類に雑誌やら煙草の空き箱、雑貨類が一面に広がったオフィスを見渡して言う。

「僕は…コーヒー淹れたり…するよ。」

「蠓螂坂はいつも通りねー、で、あんたはどうするのさリーダー？」

「うーん、一応一つ考えがないこともない…ちよつと出かけてくるよ。」

「はあ？ サボる気じゃないでしょうね？」

「ふっ…私は真面目にサボるためなら努力はするよ！」

「威張るな！」

狂骨に一発化け猫のツツコミが入られる。

こうして急遽編成された鹿角鈴音追試緊急対策部隊は行動を開始したのであった。

「…どこだったかは…？」

強制参加の勉強会を終え、事務所に帰った鈴音が発した第一声はそれであった。

登校前までは足の踏み場を探す必要のあった事務所が、少なくとも歩くことには不自由しない程度に片付いている。

特に勉強に使えそうなテーブル周辺は念入りに片付けられており、しっかりと表面が拭かれた痕跡まである。

一瞬鈴音は自分が階を間違えてしまったのではないかと錯覚し、一度扉の外を確かめたくらいだ。

「おかえりーすーちゃん、じゃあ早速お勉強始めよつか?」

「ああ、ただいまかり…ん?」

聞きなれた花鈴の声に鈴音は自分が事務所に帰ってきたという実感がようやく沸いたが、その姿を見てぎよつとした。

「…なんでスーツ姿なんだ?」

「今日から追試まですーちゃんの…いや!鈴音さんの家庭教師担当になりました花鈴です!」

花鈴はおそらく蠟螂坂のスーツを借りたのであろう深いスリットの入ったスーツ姿であった。

まだスーツに着られている感が可愛らしいが鈴音にとって重要なのはそこではない。

「…待て、家庭教師?」

「それは鈴音さん、貴女が勉強するためですよ?」

「…勉強なら学校でしたぞ!」

「鈴音さんのお馬鹿が学校の勉強会程度でどうにかなるとでも!?!」  
「くっ…!」

何故か口調まで変えて家庭教師になりきる花鈴の言葉に鈴音は言葉が濁らせる。

「ほーら、みんな協力してくれるんだから、鈴音さんもトレーニングは少し我慢して頑張ろうねー!」

「…みんなって…ちよ、花鈴!」

反抗しながらも鈴音は無理やりテーブルの前に座らされ、勉強道具をバッグから出させられる。

そこに蠟螂坂がどこからともなく現れ、すかさず勉強のお供とコーヒーを持ってきてくれた。

「甘めの…コーヒーになります。」

「あ、あの…蠟螂坂さん…。」

「…お嬢様。」

「お嬢様!？」

思わず鈴音は大声を出してしまった。

何故なら蠟螂坂は普段の恰好からは想像がつかないメイド服に身を包んでいたからだ。

なんというか、古風? いや、古典的と言えばよいだろうか。

とにかく伝統的なメイド衣装に着替えていた。

「どうよすーちゃん! テンション上がらない!？」

「いや、その…。」

先ほどまでの家庭教師口調はどこにいったのだと、自信がテンションを上げて言う花鈴にどういえばよいのか分からず、鈴音は視線を泳がせる。

助けを求めるように蠟螂坂に視線をやるが、蠟螂坂は鈴音の視線に気づくと自身の服装を見やり、心配そうに首をかしげる。

「…似合って…ないかな…鈴音?」

「いや…似合ってはいますよ…蠟螂坂さん。」

「…ふん。」

似合っているというのは本心であった。

蠟螂坂は元々スーツが似合う美人なだけあってメイド服も気品があり様になっていた。

鈴音の言葉にどことなく得意気な、満足そうな声を蠟螂坂は漏らすとキッチンに帰っていく。

そうして花鈴に視線を戻すと花鈴が不満そうな視線で鈴音を見ていた。

「……。」

「…どうした、花鈴?」

「私は?」

「え？……あ、ああ、可愛いと思うぞ…スーツ姿。」

「えへへ…そっかあ、良かったあ。」

返答を待たずに言うべきことに気づいた鈴音の言葉に花鈴が満足そうに頬を緩ませる。

似合っているというより可愛いのだが、そこはややこしいことになりそうなので鈴音は黙っておく。

今の状況で機嫌を損ねてはどうなってしまいか分かったものではない。

「じゃあ始めますよ！鈴音さん！」

「ああ、わかったよ花鈴…。」

「私のことは先生と呼びなさい！」

「…せ、先生って…なんだこの既視感は…。」

「何か言った鈴音さん…？」

「なんでもないです…先生…。」

あきらめた様に鈴音は項垂れる。

こうして元鬼コーチは鬼教師の手によって今宵より従順な生徒になった。

ただ――

「じゃあ、花鈴先生…この数学の問題…教えてください。」

「花鈴先生…むふふ…これはこの式使えばいいよ。」

「…どうやって？」

「どうやってって、使えばいいんだけど。」

「え？」

「え？」

「水兵リーベー僕の船…七曲り…。」

「そこくらい覚えててよ鈴音さん!？」

「Cってなんだっけ…。」

「炭素!!学校の勉強会はなんだったの鈴音さん!？」

「そうだな…CO<sub>2</sub>で二酸化炭素だからな…。」

「うんうんそうだね! って小学生じゃないんだよすーちや…鈴音さん!!？」

「……。」

「すーちゃん?!?物理の問題文読んだだけでフリーズしないで!?!すーちゃん!!?返事してえええ!!!」

鈴音のお馬鹿さと花鈴の天才肌がかみ合わず、勉強は難航した。

その日は日付をまたぐギリギリまで勉強は続いた…。

狂骨は八咫総合事務所を出てからある施設を訪れていた。

そこで何かのリストの様なものに目を通し、目当ての存在を見つけるとなにやら領いてリストを閉じた。

そして施設の職員らしき人間に声をかけ、なにやら書類にパパッと記入を済ませる。

そうして満足げに狂骨は領くと、狂骨は施設を後にした。

「終わった…。」

鈴音にとって地獄の様な追試がようやく終わりを迎えた。

その場で採点されたが結果は合格。

花鈴による猛勉強含め、八咫総合事務所の手厚いサポートによってどうにか修羅場を乗り越えた鈴音は事務所のソファで寝ころんでいた。

「はーいお疲れ様すーちゃん。」

「ああ…ありがとう、花鈴…助かった。」

今事務所には二人以外の姿はない。

何やら所用で蠟螂坂と化け猫は狂骨に連れられて出かけてしまったのだ。

狂骨はともかく、蠟螂坂と化け猫には今回の追試のことで迷惑をか

けてしまった、帰ってくれば礼を言おうと鈴音は思う。

ただ狂骨もこの数日間はどこかに頻繁に出かけており、なにかしらのことはしてくれている様子であった。

今日二人を連れて出かけているのもそのことに関わっているのかもしれない。

「…誰もいないね、すーちゃん。」

「ん？ああ…静かだな。」

事務所に入る音は道路から聞こえてくる車の音と窓から入る風の音くらいだ。

「…ねーえすーちゃん？」

「ん？」

「ご褒美、欲しいなー、私。」

寝ころぶ鈴音の顔を覗き込むようにソファの横に膝立ちになりながら花鈴が言った。

「ご褒美って…？」

「チュー。」

「…だから、あんなのしてたのは子供の頃だろう…。」

「やーだ、今してほしい。」

「はあ…。」

徐々に顔を近づける花鈴に観念したように鈴音はため息を一つ一つと、花鈴を迎え入れた。

鈴音としても、正直嫌な気はしない行為だった。

ついでに、キスをいくつか繰り返した後。

そつと花鈴が突き出してきた舌を、鈴音は抵抗せずに受け入れた。

そうして数分経った。

トントントンと、扉に向こうから複数人が階段を上ってくる音が聞える。

短いながらの二人だけの時間がもうすぐ終わりを告げようとしている音であった。

そつと花鈴が互いの口から透明な架け橋を引かせつつ唇を離す。

「えへへ…好きだよすーちゃん。」

「私もだよ…。」

花鈴の頭をそつと鈴音が撫でる。

そうしたところで事務所の扉が開かれた。

「ただいまー!」

狂骨の大きな声が響く。

そのテンションは普段より高く、酔っているときの様であった。

車を使って出かけていたはずなのでまさか飲酒はしていないだろうが、何があったのかと視線を向ける。

その後ろには狂骨とは逆に不機嫌そうな表情の化け猫と、相変わらず無表情なように普段より緊張感を纏った面持ちの蝸螂坂、そして、なにやらもう一つの姿があった。

「今日よりウチで更生活動の一環に事務担当として働いてもらう新入りが入ります!」

狂骨の言葉に驚き、そして連れてこられた新入りの顔を見て鈴音はさらに驚きの表情を浮かべる。

隣にいた花鈴も似た表情をしていた。

その顔が知っている顔であったからである。

そいつは狂骨の後ろに隠れたまま鈴音と花鈴に視線を向けた後、すぐに視線を外してうつむきながら小さな声で自己紹介をした。

「…黒崎ユリカです…その…よろしく…。」

あまり手入さされていない癖ツ毛、陰鬱な雰囲気、成人しているだろうがそう見えづらい、若いというより幼さを感じさせる風貌。

1か月以上前に起こった廃ビルでの事件の黒幕であった女性、黒崎ユリカ。

それが新たな八咫総合事務所のメンバーであった。

## 19話 ニューフェイスと新たな事件の香り

何もない、ひたすらに空虚な日々だった。

妖怪でありながら人間を捨てられず。

人間でいられるような強さも持っていない。

中途半端なひ弱な存在。

死にたくないという弱さのおかげで生きることを決めたものの、はたして自分は生きているのか死んでいるのか、分からなくなるような日々。

一人ぼっちには慣れつこのはずであつたが、耳障りだとさえ思っていた周囲の人間の声が聞こえてこないだけでここまで孤独感を感じるとは思わなかった。

八咫鳥を経由して国家的に運営されている妖怪専用の収容施設、そこに私はいた。

神域と呼ばれる特殊な空間に幽閉されたように隔離されている私は更生活動の一環として時折職員が運んで来る書類の校正作業なんかをしながら日々を過ごす

職員のそばには常に銃や以前見たことがある刃が出てくる柄の様なものを携帯した巫女服姿の人間がおり、その姿がここがどういう場所であるかを示していた。

「はあ…。」

私は細かい書類仕事にうんざりしながら思わず人差し指と中指を重ね合わせてとんとんと叩き合わせる。

もう一月近く煙草を吸っていない。

せめてガムでもくれればいいのと思いつながら私は書類の校正を進める。

まるで酒でも飲んで書いたかのような酷い文章に赤ペンを入れながらあくびを一つ。

丁寧な文章より多少は校正のしがいはあるが、それでも退屈は退屈



だ。

そんな作業を終わらせた頃、普段はこないであろう時間に職員がやってきた。

「…何？」

時間外の訪問者に私はぶつきらぼうに問う。

職員は簡潔に用件を伝えてきた。

どうやら更生活動の一環に私を使いたい妖怪がいると。

そのための面接を行う時間を伝えてきた。

「物好きがいたんだ…。」

独房——そういつても差し支えないだろうこの部屋に設置された寝台に寝ころびながら私は呟く。

しかし多少は退屈も紛れるだろう。

どうせ私など使われるとは思わないが、退屈しのぎには良い。

そう思いながら私は眠りにつく。

やることがないせいで最近睡眠時間が増えた——

面接当日。

私は相も変わらず仰々しい装備の巫女に連れられ、小さな個室に連れられる。

少しでも変な動きをすればすぐさま私はへんてこな銃で穴あきチーズにされてしまうだろう。

簡素なパイプ椅子に腰かけ、私は待った。

約束の時間は過ぎているが相手の姿は表れない。

「…チツ。」

小さな舌打ちを思わずもらす。

そんな小さな舌打ちにすら巫女は反応し、こちらに視線を向けてくる。

仕事熱心なことだった。

そんなやりとりをしているうちに、ようやく相手が姿を見せる。

その姿を私は知っていた。

「あーごめんね遅れちゃって、久しぶり！」

「え…あつ…」

男女どちらとも見分けがつかない中性的な外見、年若い外見にそぐわない白く染まった長い髪、肌を隠す様にきっちり身につけられた黒いスーツ。

私が引き起こしたあの事件の時、出会ったあの人——いや、妖怪であつた。

とんだ物好きがいたとはおもつたがよりにもよつてこの妖怪が相手だとは思わず、上手く言葉が紡げない。

呆氣にとられた私をよそに妖怪はパイプ椅子に座るといきなり質問を投げかけてくる。

「君、パソコンでできる？」

「え…？」

「ここだと書類の校正とかしてるみたいだけど、パソコンで書類つくりのソフトとか使えるかな？」

「…人並みには。」

もう人ではないのに人並みとはこれいかにと自分で思いながらも返す。

そう答えた瞬間に妖怪は頷いた。

「オツケー、じゃあ採用で！日程決まったらうちのメンバーと迎えに来るから準備しといてねー！」

「え、あ…え…!?!」

ほとんど会話という会話をしていないにも関わらず、あまりにもあつけなく採用を決めると妖怪は席を立ち、面食らっている私を置いてさっさとこの部屋から出ていこうとする。

「ちよ…ま…!?!」

「んーどうしたの？」

「いや…その…」

聞きたいことは山ほどあつた。

他に聞きたいことはないのかとか。

他の仲間はどう思っているのかとか。

なんで書類作りができたらよいのかとか。そもそも貴方はどういう存在なのかとか。私でなきゃいけない事情があるのかとか。実は強制されてるんじゃないかとか。家族でも人質に取られてんのかとか。頭の中で疑問が疑問を呼び、パニックになる。

「なんで…?」

そうして出た一言は、単純な疑問だった。

かすれるような、か細いその声はどうかドアを開けて去ろうとする妖怪の耳に入ったらしく、妖怪はうーんと思えるように顎の下に指を当てる。

そしてにんまりと口角を上げて笑みを浮かべると口を開いた。

「実は…今緊急事態が起こってねえ…」

妖怪は一転神妙な表情に顔つきを変えると腕を組みながらそう言った。

「ウチの事務所…今度から君に来てもらう場所んだけど…そのメンバーが…さ…。」

「…。」

妖怪は物憂げな眼で部屋の天井を見上げながら言い、そして芝居がかった動作で眉間に指をあて首を振りながら言葉を続けた。

「誰も…事務仕事ができないんだ…。」

「…はあ?」

「君…アル中と猫と機械音痴に…書類が作れると思う?」

「…はあ!」

唐突な言葉に思わず私の語気が荒くなる。

妖怪はそんな私を一切気にすることなく、芝居がかった動作を繰り返しながら話しかけてくる。

「そんな中つい最近! ついに我が事務所にまともに書類作りができる子が入ってきてくれた…この喜びが君に分かるかい!」

「いや…しらないよ…。」

「だけど…そんな喜びも束の間…その子は思った以上にその…頭がよ

ろしくなかった！」

「少なくともアル中よりましじゃないの…。」

私の言葉に妖怪が見るからに凶星といったように胸を押さえる。

「そういうえば酔っ払いが書いたような書類を散々手直ししたがまさか、という思いが私の頭をよぎった。」

「んっ…んん！それでその子が追試受ける羽目になっちゃって、この先もこの子に書類仕事をさせてたらやばいと。」

「…で、私？」

「そう！うちの事務所のメンバー、人間臭い面子ばかりだし、新人二人もつい最近妖怪みたいな存在になったばかり！君も人間に近いからピッタリと思って！」

「…はあ…いや待てよ！」

少し納得がいきそうになったが、そう簡単にはいかないだろうと思わず私は席を立てて声を荒げそうになるが、途端そばにいた巫女に制止させられる。

私はおとなしく席に座りなおしながら小さく深呼吸してから問う。

「それでも私は…あれだけあんたの仲間を傷つけたんだぞ…。」

「…。」

「それで簡単に仲間になんてなれるはずねえじゃん…なんでなんだよ…。」

「そりやそうだろうね、でも、だからこそかな。」

「…だからこそ？」

「そう！だからこそ、君はウチに来て借りを返してもらわなきゃいけない！」

「なんて理由だよ…。」

私はその言葉に一気に力が抜ける。

そして私はだらりとパイプ椅子の背もたれに力なくもたれかかりながら妖怪の言葉に頷いた。

「分かったよ…それなら分かりやすいし、納得した。」

借りを返せと言う言葉はシンプルでわかりやすく、私にとっては納得にたる理由であった。

善意とか、好意でなんて言われたら一切信用できなかつたが、その言葉なら信用はできる。

「…あんだ…名前は？」

「狂骨。君は黒崎ユリカだよね？」

「そうだよ…よろしく、狂骨サン。」

「えー、というわけで、鈴音ちゃんの追試合格祝い及び黒崎ユリカさん歓迎会を始めます！カンパ〜！」

狂骨の声が馴染の焼き肉店の中で響いた。

しかし和気あいあいとした雰囲気の内や明るい狂骨の声に反して一同の表情は暗い。

テーブルは六人席で片側には鈴音と花鈴が隣り合わせで座り、その隣に狂骨が座っている。

そしてもう片側にはエリカを挟み込むように蠮螋坂と化け猫が座っていた。

蠮螋坂と化け猫の目には明らかに警戒心が宿っており、その二人に挟まれ針のむしろに包まれたユリカは表情には出さないもののかなり緊張している様子だった。

花鈴はユリカの真向かいに座りながら睨みを効かせており、剣呑な雰囲気周囲を包んでいる。

「花鈴…大丈夫だから、そういう目するの…やめよつか…。」

「…うん、わかった。」

「あー…蠮螋坂と化け猫もね…一応祝いの席だから…ここ…。」

「祝いねえ…そういうやあの事件の時もここで焼肉食つたわね、誰かさんのせいで大慌てで店出ることになっちゃったけど。」

以前は酒を入れていた化け猫も今日はソフトドリンクで済ませている。

いざというときを警戒してのことだろう。

しかし化け猫も厭味つたらしく言葉を並べた後で、少しばかり思うところがあつたのか小さく息をつくど、ぼんと手を叩いて鈴音に視線を向けた。

「ま・鈴音ちゃんの合格祝いでもあるし、じゃんじゃん食べていいのよ鈴音ちゃん！食べ放題外のメニューでもなんでも頼んじやいなさい!!」

「みなさん…すいません私のために色々…。」

「鈴音は…悪くない…よ。」

「そうそう、もとはといえれば仕事おしつけてた私たちの責任なんだからーほら食べて食べてー!」

「はい…いただきます。」

狂骨が場の雰囲気のせいで網の上で放置されかけていた、焦げ目のついた塩タンを山盛り皿にのせて鈴音に回してくる。

鈴音は小さく会釈をしながら皿を取り、特盛のライスと共に口の中に運び始める。

それを皮切りに各々が食事を始めた。

「かーりーん!それは私が育ててたカルビだったの!!」

「はあ!?名前書いとけよそれなら!!」

「書けるか!!」

「鈴音…ホルモン焼けた…。」

「んぐ…ふみまへん…いたらきまふ…。」

「店員さーん!生中追加で!!」

テーブルをはさんで肉を取り合う化け猫と花鈴。

既に特盛のライスをたいらげた鈴音にどんどん肉焼いてを渡す蠍螂坂。

そして狂骨は相変わらずビールをすさまじい勢いで消費していた。今日も車での来店だが帰りは蠍螂坂の運転になるのである。

ただユリカだけがどうしてよいのか分からず、ただただ座ってその光景を眺めていた。

いや、眺めてさえおらず、うつむいて一人、この五人の世界に入ら

ないように置物のように黙っていた。

目の前にはジョッキに入れられたハイボールが置かれているが手を着けていない。

狂骨から酒は飲めるかと聞かれ、飲めると言うと言と勝手に注文された代物だがはたして飲んでよいものかとそのままにしていた。

「…。」

そのユリカの様子を見ていた狂骨であったが、どう声をかけてよいかわからず口を出せないでいた。

まさかここまで剣呑な雰囲気になるとは狂骨も思っておらず、いささか樂觀視しすぎたと反省していた。

そんなユリカに声をかけたのは鈴音であった。

「…ユリカさん…。」

「ひっ…：…な…：…に？」

突然かけられた声に驚きながらユリカが言葉を返す。

鈴音は新たに運ばれてきた特盛のライスを口に運びつつ言葉を続ける。

「あの時…：ご自身のからだを盾にされたの…。」

「は…：はい…：。」

あの事件の時の話である。

ユリカは半ば自暴自棄になりながら自身の身体を盾にするようにして鈴音の前に立ち、結果として鈴音に強烈な一撃を与えることに成功した。

そのことをユリカは思い出し、何を言われるのかと身をすくめて鈴音の言葉を待つ。

「…見事でした。」

「は…？」

「あの時私が一人なら…：負けていました。」

まさかの賞賛の言葉にユリカは目を丸くする。

戸惑うユリカをよそに鈴音は言葉を続ける。

「もう…：負けません…：。」

「へ…？」

「次があるなら…斬ります。」

「…ひっ！」

続けられた鈴音の言葉にユリカは小さく悲鳴を漏らす、その様子を見て花鈴がくすくすと笑い始めた。

「すーちゃんいきなり何言ってるのさ、怖いよそれは。」

「事実だ…悔しかったからな。」

「すーちゃん的には褒めてるのかもしれないけど、それ脅してるようなもんだから！」

「そうか？…そうだな…。」

鈴音が己の発言を思い返し、その通りかと納得する。

その様子を見て花鈴がさらに笑い、狂骨も思わず笑みをこぼす。

「鈴音ちゃんは怖いよ、少なくともこのメンバーの中では一番敵に回したくないね私は。」

「…誉め言葉だと受け取っておきます。」

「鈴音は強い…私も…勝てるか分からない…。」

「買いかぶりすぎですよ…蠍螂坂さん。」

そうしてようやく多少は会話に花が咲き始めた。

ユリカは相変わらず話すことはほとんどなかったが、それでも多少は会話に参加し、少しばかりの肉も食べた。

最初の状況から考えれば十分だろうと狂骨は酔った頭で考える。

ただ化け猫だけは相変わらず不機嫌そうな表情で肉を食べていた。

猫、特に雌の猫は縄張り意識が強いと聞くが、もしかすると元は猫であった頃の名残が残っているのかもしれない。

突如テリトリーに侵入してきた部外者にいまだに心を許せない様子であった。

そうして今日は無事に食べ放題の終了時間を迎えることができた。一同は店を後にする。

「いやー食べたねえ、じゃあ蠍螂坂は運転頼むよ。」

「承知。」

狂骨の言葉にそれぞれ車に乗り込むが、化け猫だけは車に乗らなかった。



「あー私はいいわ、ちよつと歩いて帰る。」

「…そつか、じゃ、お疲れ様、先に待つてるよ。」

化け猫の言葉を狂骨はあえて何も言わずに受け入れた。

今日の雰囲気馴染めなかったことは狂骨からしても明らかだった、気疲れもあるだろうとその言葉に頷く。

かくして化け猫は一人、夜の街に消えていった。

「あゝ…呑みすぎた。」

早朝の町はずれ、まだ始発が出るか出ないかくらいの時間帯を化け猫は歩いていった。

昨日皆と別れた後、気分転換にと飲み屋をいくつかはしごして色々楽しんでいたらしいの間にか日付は変わり、日が昇っていた。

酒臭い息をごまかすように煙草ではなくガムを噛みながら、心地よい朝の空気を浴びて伸びをする。

時刻的に湿っぽさが薄れている冷たい夏の空気のおかげで幾分か二日酔いの頭痛もやわらいだ。

そうしながらまだ酔いの残る足で住宅街を歩いていると、小さな人影が一つ裏路地の方から出てきた。

「んー?」

それは一人の少女であった。

150センチに満たない化け猫よりも目線がさらに低い、おそらく小学生であろう子供。

おとなし気な顔立ちをしており黒く長い髪をなびかせており、おしとやかな印象を受けさせる少女だった。

少女は明らかに狼狽した様子で胸に手を当てており、顔面は蒼白であった。

ただ事ではない様子に思わず化け猫が一言声をかける。

「おーい、お嬢ちゃん。」

「ひっ!?!」

「まだ人通りも少ないんだから、こんな時間に外でない方がいいわよー。」

「は、はい……ごめんなさい……帰ります……。」

化け猫の言葉に少女は小走りで——いや、全力で駆け出して住宅街を帰っていった。

「うーん。」

不審な様子に化け猫は首をかしげる。

そして興味本位であの少女が出てきた裏路地を覗き込んだ。

そこは普通の裏路地であった。

特に何もなく、壁沿いに配管や換気扇のダクトやいくつかの室外機が設置されている程度、特に不審な様子はない、見る限りでは。

「なにもないわねえ、でも。」

ある臭いが化け猫の鼻を突いた。

新鮮な洗剤の臭い。

それも結構な量を使ったのか路地裏を覗いただけで臭いが伝わってくる。

「一体何があったのかしらね……多少は想像がつくけど……。」

化け猫は自分の酔いが一気にさめていくのが分かった。

## 20話 絆の萌芽

不審な少女を見かけた日の夕方、化け猫は事務所で一寝入りしてサツと汗を流した後、早朝に訪れた路地裏に来ていた。

路地裏の横にある家の屋根の上に腰かけ、スマートフォンを触りながらその場に張り込んでいる。

普通なら不審者として通報されてもおかしくはないが化け猫は妖怪だ、本来ならば人間からは意識されない存在である。

そんな彼女が誰にも見つからずに堂々と張り込みができることは不思議ではなかった。

スマートフォン画面にはSNSの画面が映っており、その中の情報を見て化け猫は顔をしかめる。

「やっぱり…ペット——飼猫が行方不明になってるって人がいるわね。」

秋奈町 ペット 犬 猫 のようなワードでSNSに検索をかけると、飼い猫が帰ってこないという投稿がいくつか見受けられた。

ほかの地方でもいくつかさういった類の情報はあるが、秋奈町だけで数件、しかも近い次期の6月や7月の投稿がある。

考えられることは一つ、何かしらの存在が猫たちをさらっている、いや、今朝のことを考えれば——

「…来た。」

スマートフォン画面を眺める視界の隅で路地裏を見ていると、待っていた存在が姿を現した。

朝にみかけた少女が何かを片手に路地裏に足を運んだのだ。

少女は路地裏の隅に何かを置くと必死に手を合わせながら何事かを呟いている。

化け猫は屋根から音もなく飛び降りると、彼女の前に姿を現した。

「貴女、何してるの?」

「ひっ?」

突然声をかけられた少女はとっさにその場を離れようとするが、その腕を化け猫が掴んだ。

「ごめんなさい！ごめんなさい！私は何もしてないです！ごめんなさい！」

「ちよー！なんか誤解されそうだからやめなさい！」

慌ててそう言う化け猫は彼女が路地裏の隅に置いた何かに視線を向けた。

それは猫用の缶詰であり、缶の天面、無地のアルミ部分にはマジックで文字が書かれていた。

“ごめんなさい ゆるして コロちゃん”

「…。」  
化け猫はその文字を見て顔をしかめた、そして意を決して少女に語り掛ける。

「…見たのね、貴女…！」

「…ッ!？」

「大丈夫よ、貴女は悪くないから、話して…。」

優しい声色だった。

貴女は悪くない、その言葉を聞いて少女は化け猫の方を向き、そして大粒の涙を流した。

「コロちゃんが…コロちゃんが…！」

涙声で少女が言う。

おそらくコロというのはこの子が関わりがあった猫の名前であろう。

「コロちゃんが…ここで…その、酷い目に遭ってたのね。」

酷い目と化け猫は言ったが、おそらく、コロちゃんはこの場で殺されていた。

そしてこの子はその現場を見ている。

朝に臭った洗剤の臭いはアルカリ性のものであった。

アルカリ性の洗剤はアスファルトの血を落とすことにも使われる。

その臭いが新鮮だったということは洗剤が使われて間もないということだ。

少女は化け猫の言葉にさらに涙を流しながら、嗚咽と共に朝見た光景を化け猫に話しはじめる。

「いつもこの場所でエサあげてたの…朝…人に見つかる怒られるから…そしたら女の人が…」

断片的にだが化け猫は事情を理解し始めた。

多分だが家で猫を飼えないこの子が何かしらの事情で出会った猫にエサをあげて可愛がっていたのだろう。

ただ野良猫にエサをやると周囲の人間に怒られる。

だから人気のない朝早くに家族の目を盗みながらこの場所に来てコロちゃんとやりにエサをあげていたのだ。

それが結果として最悪の場面に遭遇するに至ったのだ。

「コロちゃん…血がいっぱい出て…でも怖くて…そこに隠れてたの…ずつと…」

少女は室外機の方を指さした。

おそらく咄嗟に室外機の物陰に身を隠したのだろう。

子供ならあの小さい物陰にどうにか身を隠すことはできる。

「それで、あの時に私とまたま会ったのね…」

少女は無言でコクコクと頷く。

「私…怖くて…何もできなくて…」

「大丈夫、貴女は何も悪くないわよ…よく話してくれたわね。」

化け猫は優しい声色で彼女を慰める。

実際彼女は何も悪くない。

いや、あんな時間に一人で出歩くことは決して褒められたことではないが、それでも彼女は悪くないと化け猫は思う。

ここで彼女を悪いと言ってしまったっては、本当の悪者を少しでも肯定してしまうことになるからだ。

「今日はおとなしく帰りなさい、ここにもしばらくは来ない方が良いわ、特に朝は危ないから。」

「うん…ありがとうお姉ちゃん…」

少女は涙をぬぐい、化け猫の言葉に頷いた。

そして少し頭が冷静になったのか、化け猫に視線を向けて首をかし

げる。

「お姉ちゃんは…なんでまたここに来たの…。」

「そうねえ…まあ私はただの——」

化け猫は自分の頭に手を置き、その手をどかすと人前で隠していた猫耳を発現させた。

目の前の少女からすれば手品か何かで猫耳を出したようにしか見えないうだろう。

驚きの表情を見せる少女に化け猫はにこりと笑った。

「猫好きのお姉さんよ、通りすがりのね、だから猫とあらば見過ごせなかつただけよ。」

化け猫の言葉に少女が初めて小さく、化け猫に笑みを返す様に小さく笑った。

「このことは私がなんとかするから、安心して。」

「うん…わかった、お願いします猫好きのお姉ちゃん。」

ぺこりと少女は頭を下げて路地裏から離れていった。

これで彼女がもうこの場所に来ることはしばらくないであろう。

そのことに化け猫は安心しつつ、改めて現場を見て首を傾げた。

「なんとかする、といってもどうすればいいのかしらねえ…。」

現場には痕跡の様なものは何もなかった。

あの人通りのなさからして目撃者もいないだろうし、そもそも警察でも何も無いのに住人に聞き込みをするのも一苦労だろう。

何よりそういう面倒なことが化け猫は大嫌いであった。

悶々としながら化け猫は懐から煙草とライター、そして携帯灰皿を取り出し、啜えた煙草に火をつける。

ゆっくりと煙を吸い、吐き出した。

空中に浮かぶ紫煙を眺めていると、煙で揺らぐ景色とは逆に思考は透明感を増していく。

そうして一本煙草を吸い終え、吸い殻を携帯灰皿にねじ込んだところで一人、使えそうな人物が思い浮かんだ。

「気は進まないけど、仕方ねえにやあ…。」

煙草。

それを見て連想した一人を思い浮かべ、化け猫は事務所へ帰るべく駆け出した。

「ただいまー!」

八咫総合事務所の扉を開け、化け猫は大きな声で言った。

そうして事務所を見渡し目当ての存在をみつけると、ずかずかと大股で歩き、パソコンが設置されたデスクの横に立つ。

デスクに座っていたのはユリカであった。

ユリカは突然自分のそばまでやってきた化け猫に驚きの視線を向け、何も言えずにただ化け猫の反応を待つ。

他のメンバーもなにながあつたのかと二人を眺めていたが、やがて化け猫が口を開いた。

「リーダー、こいつ借りてくから。」

「へ?借りてくつてちよつ——」

狂骨が止める間もなく、化け猫はその小柄な体から想像もつかない力を発揮してユリカの首根っこをひつつかみ、無理やりデスクの椅子から引っこ抜いて肩に担いだ。

「え、あ…なに…!?!」

「事情は行きながら話す!んじゃ!」

事態についていけないユリカが怯えた声を出す但それを意に介さず化け猫はさつそうと事務所の扉を開けて行ってしまった。

事務所のメンバーはただただその光景を呆気にとられたように見つめることしかできなかった。

「事情は分かった…です…けど。」

「なーによ、悪かったって。」

ユリカは不機嫌そうに顔を歪めながら化け猫に言う。

事情はどうか理解した。

殺人現場ならぬ殺猫現場、そこから物理的な手掛かりは何も掴めなくとも、ユリカなら話は別だ。

その場に残った怨念の様な概念的な存在を読み取り、死体を操るだけにとどまらず、存在しないはずの死者を疑似的にとはいえ蘇らせる力まで持つユリカであればなにかしらの手掛かりをつかめるのではないかというのが化け猫の推測だ

「まあ…たしかにここに…残ってるツスけど…。」

「やっぱわかる?」

「分かるツスよ…殺されて間もないでしょ、ここ…。」

「んじや、頼むわ!」

ポン——というよりバシバシとユリカの背中を叩き、力を使う様に促す。

ユリカはいつてえ…と悪態をつきながら化け猫から距離を取り、口を尖らせた。

「頼むわつってもさ…私の力は万能なもんじやないし、手掛かり掴める保証しないよ…ですよ。」

取ってつけたような敬語を最後につけ、ユリカが話す、そしてもう一つ付け加えた。

「それに、怨念が籠ってる存在を起こすってことは——」

「危ないってことでしょ?大丈夫、腕つぶしには自信があるから。」

胸を張りながら化け猫が言う。

その態度にこの猫には何を言っても無駄だと理解したのかユリカが力を使うべく集中し始める。

すると夕方、あの少女がお供えとして置いた缶詰がゆっくりと、まるで気化するように粒子状になり、別の形を作り出す。

「へえ……すごいじゃん、あんた。」

「…この缶詰、ここで死んだ猫のための…なんていうか…思いみたいなのが籠ってた、だからできただけ。」

化け猫はこの力があればなんでも物質を別の物体に変えられるのかとも思ったが、どうやらそう簡単な話ではないらしい。

やがて粒子は猫型の形となり、新たなかりそのの肉体を与えられた



怨念の塊が生まれた。

形作られたものは、血に濡れた様に赤く染まった歪な猫。

その瞳は白く濁り、毛先から肉体の赤が溶け出す様に赤い液体が滴っている。

おそらく元はイエネコであったであろうが、その怨念の大きさを示す様に肉体は普通のイエネコよりも二回りは大きく、まるで中型犬のようであった。

赤く染まった血濡れの猫の顔に、切れ目が入ったかのように線が描かれる。

その線は切れ目のようにぱっくりと裂け、そこから目と同じく白く濁った牙が姿を覗かせた。

明らかに敵意を向ける赤猫を制御できないかとユリカが意識を集中させるが、その額から脂汗が垂れる。

「ツ…ダメ…これ…言うこと聞かない…！」

「オツケー、ま、仕方ないか。」

「多分私は狙わない…けど…あんたのことは…！」

「分かってるわよ、無理しなくていいわ。」

例の事件の時もユリカは自分が作り出した存在を操ってはいなかった。

生み出したそのまま、本能のままに暴れさせていただけである。

ただ自身を生み出した存在であるユリカを殺すと自分の存在が消えることを本能的に理解し、ユリカを攻撃することだけはないというだけだ。

より強い妖力や霊力があれば別かもしれないが、今のユリカの力ではこれが精いっぱいである。

化け猫は懐から大通しを抜く。

そして大通しを二つに分割させると互いに刃を発現させ、逆手に持って構えた。

化け猫は集団を相手にするならば両端から刃を発現させるようにして使用するが、一対一であれば逆手持ちの二刀流に構えるようにしていた。

さらにいつも通り、肩甲骨をぐにやり、ぐにやりと、まるで背中  
別の生き物があるかのよう動かす。

「おいで、成仏させてあげる。」

化け猫の言葉を皮切りにするように、赤染めの猫——赤猫が動い  
た。

狭い一本道の路地裏の中、一直線に赤猫が化け猫に向かって飛びか  
かる。

左右に逃げ場がない中、化け猫はとつさに横にある壁に向かって身  
体を捻りながら跳んだ。

そして壁に降り立つように足を着け、赤猫の頭上を駆け抜けるか  
のように壁を走る。

すれ違いざま、逆手に持った大通しの刃が煌いた。

鮮血が舞う。

化け猫はたしかに肉を裂く手ごたえを感じたが、壁から地面に降り  
立つとすぐさま背後を振り向く。

「速ッ…!?!」

振り向いた時には傷を全く意に介せず動く赤猫が近くまで迫っ  
ていた。

化け猫はまたしても飛びかかってくる赤猫に対し、牙を剥く口に向  
かって右手の大通しで斬りつけるように刃を振るった。

刃が口に食い込んで肉に埋もれるように止まったことで化け猫に  
その牙が届くことはなかったが、小柄な化け猫は勢いそのままに地面  
に押し倒される。

「こん…のー!」

化け猫は押し倒されながらも左手の大通しを喉元に向かって突き  
立てるが、赤猫は止まらない。

むしろ傷口からあふれでる血液を補うために化け猫に食らいつく  
べく、口元に食い込む刃をさらにその身に沈みこませ更に化け猫に迫  
る。

化け猫は牙が右腕に届く前に大通しから手を離し、左腕の喉元に突  
き立てた大通しで赤猫を押しとどめながら空いた右手で目に向かっ

て親指を突っ込んだ。

突っ込んだ親指を動物で言う眼窩に相当する肉の窪みに引っ掛けて無理やり身体を押しつけ、空いた隙間に足をこじ入れて力づくで赤猫を蹴りはがした。

蹴り飛ばした勢いのまま化け猫は後転して地面から起き上がる。

同じく赤猫も身体を起こした。

その口元からボトリと化け猫が手放した大通しの片割れがこぼれ落ちる。

更に切れ込みが入り醜悪な顔つきになった赤猫はさらに大口を開いて牙を剥き、血をばたばたと垂らしながら化け猫に向かって敵意をむき出しにする。

そして再度化け猫に向かって駆け出そうとした瞬間、何かが赤猫に向かって飛来した。

光の筋を残す様に輝きながら一直線に赤猫に向かっていったソレは新たな鮮血を飛び散らせる。

化け猫が残っていたもう片方の大通しを投げつけたのだ。

その一撃がほんの一瞬、微かな時間ではあるが化け猫に猶予を与えた。

ぐにやり、と化け猫の肩甲骨が動く。

波を作るように蠢くそれはやがて肩、肘、拳まで流れ込み、小波は大きな波となつて行き場を失った力の行き所を欲した。

そして目の前に、力の向かう先がやってくる。

「にゃおらあ!!!」

波が弾けた。

赤猫の顔面で炸裂した化け猫の拳はボクシングのパンチのように打つと同時に引かれることはなく、波の流れを赤猫の肉体に浸透させるように押し込んだ。

裂けた口元から血をまき散らし、折れてしまった何本かの牙を宙に浮かせながら赤猫は背後に向かってぶっ飛んだ。

渾身のカウンターパンチであった。

それでも赤猫はまだ動きを止めない、だがしかしその身体はもう限

界が近いのであろう。

先ほどまで痛みというものを感じないせいで肉体の損傷をなんら意に介さず動いていたが、今では立ち上がることも少しぎこちない様子であった。

勝機とみて化け猫が前に向かって踏み出――

「待つて…!!」

不意に制止の声が響いた。

化け猫が突然の声に反射的に動きを止める。

すると目の前の赤猫は牙をむいていた口元を閉じ、先ほどまでの敵意が嘘のように消え、まるで逃げようとするかのように化け猫を警戒しつつ後退り始めた。

「あんた…ユリカ、なにをしたの!?!」

化け猫は制止の声を上げた主――ユリカに問いかける。

ユリカは疲労した様子で息を荒くし、問いかけに答えた。

「やっど…ということ聞いた…。」

「なんですつて?」

「多分あの猫…身体が損傷したせいで、力が薄れた…。」

息を整えながらユリカは言葉を続ける。

「私、あの猫に逃げろって命令した…どこに逃げるかわからないけど…逃げた先が…手掛かりとかになる…かも…です…ね。」

「そういうこと…ね、やるじゃん、あんた。」

そう言うと化け猫は事務所から連れだしたときのようにユリカの首根っこを掴み――今度は担がずに背中におぶるように背負った。

「んじや、もうちよつと付き合ってもらうわよお!」

「…安全運転でお願いします。」

「保証はしない。」

化け猫の言葉と同時に赤猫が路地裏を抜け出し、猫特有の身軽さを駆使して素早く住宅街を抜けていく。

しかしこちらも元猫。

身の軽さなら負けてはいない。

化け猫はその自負の元に夜の街を飛ぶように駆け抜けた。

夜空に響くのは特等席に座らされたユリカの悲鳴。  
綺麗な星明かりに照らされる夜であった。

## 21話 奇跡

赤猫が逃げ延びた先。

それは秋奈町から他の街に向かうバイパス道路、その脇にある小さな山の裾であった。

そこは雑木林になっており、ところどころから虫の鳴き声や羽音が聞えてくる。

樹液の独特の香りや、湿り気のある空気に溶けるように樹木や苔の青臭く生きている植物の臭いが漂ってくる。

化け猫はその香りに嫌悪感を示すことはなかったが、自然になれていない様子のユリカは臭いに顔をしかめた。

「じとつとしてるし…虫…いや…。」

「我慢しなさいって、ここが目的の場所みたいだし。」

目の前を飛び交う羽虫を手で払いながら悪態をつくユリカに化け猫が言った。

二人が追う赤猫は生い茂る草木の葉に赤い印をつけるように血を付着させながら雑木林を進んでいく。

やがて少し拓けた、一本の木を中心に小さな円を描くように切り拓かれた痕跡の残る場所に辿り着く。

そして赤猫は中心にそびえる一本の木の根元に辿り着くと、その場に停止した。

「うえっ…。」

その場所、木の根元に視線をやったユリカが雑木林の臭いとはまた別の不快感を感じてかおをしかめる。

化け猫も鼻をひくつかせ、眉をひそめた。

「あそこ、埋まってるっぽい?」

「絶対埋まってる…滅茶苦茶…残ってる。」

ユリカの言う残っているというのはおそらく怨念、死した動物の憎悪であろうと化け猫は理解する。

化け猫も常人より強い嗅覚をもって死臭を感知した。

死臭というものは少しばかり穴を掘った程度で隠しきれぬもので

はないのだ。

つまりここを調べるか張り込むかすれば犯人に辿り着ける。

そう化け猫が考えたところでユリカに異変が表れた。

「うっ…やめっ…があ…！」

「ちよ…どうしたのよあんだ!？」

頭をおさえてユリカが苦しみだす、同時に木の根元のそばにいた赤猫の肉体がぐじゅり、ぐじゅりと音をたて、変化を始める。

「やばい…他の死体と…勝手に…！」

「チツ…手掛かりは見つかったけど、かわりに余計なもんまでついてきたか…いいわよ、やってやろうじゃにやいか…！」

巨大な怨念と呼応したことでユリカの制御を外れ、赤猫が土の中に横たわる他の死体と結合しはじめた。

土の中からも動くはずのなかった肉塊たちが、蘇ったかのように動き始め半ば腐敗した血肉を地上に晒す。

雑木林に漂う瑞々しい生きた香りとは対照的な、生臭い死の香りが一気に周囲にたちこめた。

化け猫がそうはさせまいと大通しを発現させて一気に赤猫に向かって踏み込む。

勢いを載せて赤猫に向かって大通しを振り下ろすが、遅かった。

赤猫は振り下ろされた大通しを口でくわえて受け止める。

化け猫は構わずそのまま力を籠めるが、くわえられた大通しは万力で固められたかのようにびくともしない。

その間にも赤猫はどんどん周囲の屍体と結合し、その身を猫を越えた巨大な獣へと変化させていく。

「くそっ!!」

化け猫はもう動かすことができない大通しをあきらめて分離させ、片側を切り離すことでその場から離れる。

赤猫——いや、もはや猫とは言えない獣、ネコ科の大型の肉食獣と化した怪物を前に、化け猫は冷汗を垂らした。

「ちよつと気晴らしに良いことしようとした結果がこれ？神様がいたら呪ってるわよ…。」

片割れとなった大通しを右手に持ち、逆手に構えながら化け猫が苦笑する。

同時に懐から勾玉が通された数珠を取り出し、神域を発動させた。「ユリカ、あんたは逃げなさい…あの怪物があんたを狙わなくても、巻き込まれない保証はない。」

「…ツ…わかった…ツス…い」

化け猫の言葉にユリカは苦虫を噛みつぶしたような渋い表情で答える。

そうして怨念の強烈な瘴気に当てられ痛みを訴える頭を押さえながらその場からのそのそと逃れる。

その姿を視界の端で見送り、改めて怪物に向き合った。

怪物が牙を剥く。

その牙は先ほどの猫の様な可愛らしい牙ではなく、己より巨大な動物の血肉を軽々と引き裂く、巨大な殺意の塊と化していた。

化け猫は笑った。

己も獣であった名残であるように残った八重歯を月明かりに煌かせ、あふれ出る怨念が生み出す殺意に対して不敵に笑う。

「ちよつと骨が折れそうだけど安心しなさい…。」

汗が垂れる。

額を流れ落ちる汗が口元に辿りつき、舌に触れる。

しよっぱい。

化け猫は思った。

感覚が鋭敏になっている。

風が吹く。

死臭が鼻を突く。

蚊とハエが首筋と足首に一匹づつ。

キリキリと音が鳴る。

カミキリムシが鳴らす音。

良い。

良い感覚だ。

「成仏させてあげる…い」



化け猫と、怪物。

先に動いたのは化け猫であった。

猫の様に足音を立てず、湿った草と土の上を駆ける。

真つすぐではない。

草食動物が肉食の獣から逃げるときのようにじぐざぐと左右に、緩急をつけて駆ける。

怪物も化け猫が脅威であることを理解しているのかむやみに突撃はせず、力を溜めるバネのように身を縮め機会を待つ。

化け猫が怪物の間合いに入る。

バネが弾けた。

怪物が溜めた力を爆発させて化け猫に向って飛び込み、振り上げた前足を袈裟懸けに振り下ろす。

化け猫が流れるように左——怪物の右側面に向かつて跳びその一撃を回避し、怪物の前足は地面を抉るのみにとどまった。

だが地面にはクワで耕したように深々と爪痕が残り、草と土が周囲に飛び散る。

「ひゅう…ッ！」

化け猫が大通しで怪物に斬りかかるが、怪物はその場から飛びのき、難なく距離を取って回避する。

ネコ科の動物の高い敏捷性はたとえば身体が大きくなろうとも健在であった。

怪物はすぐさま攻撃態勢に入り、今度は化け猫の足をすくう様に足元に狙いを定めて飛び込んでくる。

化け猫は咄嗟に跳んだ。

横でも、後ろでもなく、前に向かって。

跳び箱を飛ぶかのように怪物の頭上を越えてその背後に降り立つ。同時に身体を反転させ怪物の後ろ脚を大通しで斬り払った。

妖力で固く結合したその肉体を両断はできなかつたが、それでも深々と肉を抉り、ドス黒い血をまき散らす。

怪物が姿勢を崩した。

生きてはいないが肉体が動く原理は生きている動物と同じである。

両足を斬り払われ支えが弱くなればこうなることは必然であった。  
「しゃあ!!」

化け猫は怪物の背に飛び乗り、首筋に向かって逆手持ちの大通しを突き立てる。

怪物は背に乗った化け猫を振り落そうと暴れまわるが、化け猫は乗馬をするかのように巧みにバランスを取り、幾度も、幾度も、幾度も刃を突き刺す。

しかし弱まる気配を見せない怪物は縦横無尽に駆けまわり、暴れまわった。

「暴れん…にゃ!!」

化け猫が突き刺した大通しを支えにするようにして振り落とされぬように耐える、怪物は背中にいる化け猫に向かってかみつこうとするがその牙は虚しく届かない。

「この!!」

こちらに向かって顔を向ける怪物の目に、またしても化け猫が指を突っ込んだ。

中指を眼窩に引っ掛けて新たな支えとし、自由になった片手で支えにしていた大通しを引き抜き、脳天から顎に向かって思い切り突き刺す。

しかしそれ悪手であった。

怪物は激しく首を振りながら体を動かして暴れたことで首の動きと身体の動き、二つの異なった大きな力にさらされ、化け猫はバランスを崩した。

「やばっ…!?!」

化け猫はどうか深く刺さった大通しを引き抜くが、その瞬間に怪物から振り落とされた。

高所から落ちた猫のように化け猫はその身を地面に転がしてサツと起き上がるが、眼前に怪物の前足が迫っていた。

起き上がった勢いのまま後ろに飛び退り寸でのところでその一撃を回避する。

またしても怪物の一撃は空を切り、ただ地面を引き裂くのみに終

わった。

終わるはずだった。

「にゃツツ!!」

地面を裂いた一撃で飛び散った土。

その小さな塊一つが、不運にも化け猫の片目に入り込んだ。

思わず化け猫は目を閉じてしまった。

仕方ないのだ。

肉体を、脆弱な眼球を護るための、本能的な反射なのだ。

運が悪かったのだ。

鮮血が舞う。

腐った血肉の血ではない。

生きている、鮮やかな、生の血液。

化け猫の胸元から腹にかけて、赤い線が引かれた。

「あ…ぎ…ツツ!」

深々と化け猫の身を抉った怪物の爪は肉だけではなくその衝撃で胸骨にヒビを入れていた。

怪物が容赦なく追撃を行う。

怪物は化け猫に飛びかかり、小柄なその身体を簡単に押し倒すと大口を開いた。

その口から醜悪な臭気と同時に腐った血が飛び散り、化け猫の顔に零れ落ちる。

「臭えのよ…あんた…。」

ヒビが入った胸骨が呼吸するたびに強烈な痛みを訴える中、か細い声で化け猫がそう言い放つ。

その肩甲骨が、ぐにやり、ぐにやりと動いた。

怪物が化け猫の頭に食らいつかんとするが、化け猫は寝ながらそれを回避する。

瞬間的に肩甲骨を動かすことで地面を滑るように動き、頭の位置をずらしたのだ。

同時に大通しを怪物の首筋に突き立てる。

「この程度で私が死ぬかよ!!」

怪物が首に刺さった大通しを外そうともがき、前足を使って攻撃しようとするが、それによつて化け猫と怪物の間に隙間ができた。

化け猫は大通しから手を離し瞬時にその隙間を利用して怪物の下から逃れ、素手になった状態で構える。

ぐにやり、ぐにやりと肩甲骨が動いた。

怪物はその動きを感知すると警戒するように身を縮め、化け猫の周囲を回り始める。

肉体が覚えているのだ。

あの波の様な衝撃を伝えるカウンターパンチを喰らったことを。

三十秒――

怪物は化け猫の様子を伺ったところで、飛びついた。

一度姿勢を低くするように飛び込むが、怪物は足元を狙うと見せかけて、跳んだ。

恐ろしいことにこの怪物は化け猫の動きを学習し、足元を狙うと見せかけて跳ぶことで先ほどのように頭上を飛び越えられることを阻止しようとしたのである。

しかもその動きはフェイントにもなっていた。

だが化け猫にとつてそれは些細なことであった。

大通しを失った化け猫にとつて今はもう、この拳を間合いに入つた途端全力で打ち込む、それしかなかつたからである。

「にゃらあああああああ!!!」

波が怪物の眉間で弾ける。

!!!

化け猫の拳にもおそらく数百キロはあるであろう肉体が勢いを乗せてぶつかつてくる衝撃が来た。

だがその衝撃を化け猫は耐えた。

拳から足まで、衝撃のベクトルが伝わる流れを一本の線になるように固め、小さな足からは想像もできない強靱さで耐えた。

逆に宙に浮いた怪物の肉体には支えがない。

怪物の身体がぶっ飛ぶ。

見えない壁に突っ込んだところではない、まるで高速で走るトラックに衝突したかのように吹き飛んだ。

化け猫がスツと拳を腰に引き、残心をとる。

とつたところで思わず目を見開き腕をプラプラと振った。

「いってえ!!」

化け猫の拳はさすがに耐えきれずに手の甲の部分の骨、中手骨にひびが入っていた。

しかしこの衝撃をうけてヒビ程度で済むのはさすがは妖怪といつたべきか。

胸元の傷も既に血が止まり、微かにではあるが塞がり始めようとしている。

怪物の顔面は鋼鉄製のハンマーで叩き潰されたようにひしゃげ、歪な肉塊と化していた。

しかし怪物はそれでも立ち上がる。

その肉体はあらゆる生物の肉体の、生の残滓。

たかが頭一つ潰れた程度で動きを止めるはずもない。

「チツ…しぶてえにやあ…ツ!」

化け猫は首をコキコキと鳴らし、左手を腰に引くようにして構える。

もう右手はしばらく使えない、使えないこともないができれば使いたくはなかった。

その時であった――

「神域が…!?!」

先ほど発動させた神域を破り、何者かが侵入する気配を感じる。

それは稲妻の如く現れた。

雑木林の木立の隙間を縫う様に駆け抜け、怪物の血によって草木が赤く染まったこの小さな闘技場に降り立つ。

「独りでなに楽しそうなことしてんだよ化け猫お!」

「花鈴!!」

花鈴は無造作にその場に立ち、怪物に向かって煽るように手首を振って挑発する。

「あいつ…ユリカから事務所に連絡が来たんだとよき、お前がヤバそうだから来てくれって。」

それでちよつと外出してた自分に連絡が来て、他のメンバーより早くにここへ到着できたのだと花鈴が付け加える。

「ふん、別に独りでやれたわよこの程度。」

「私が言いたいのは、愉しみを独り占めすんなってことだよ。」

不意に表れた新たな敵に対し怪物が牙を——ひしゃげた口元の間から白い凶器をちらつかせ威嚇する。

花鈴は一切臆することなく、笑って見せた。

「こいつは食いでがありそう——」

花鈴が笑みを浮かべたとたん、怪物が一見無防備な花鈴に飛びかかった。

一閃。

月明かりに鈍い乳白色の光が反射する。

次の瞬間には飛びかかった怪物の腹から臓物をまき散らす様に大量の血が零れ落ちた。

花鈴は飛びかかった怪物の身体の下に潜り込むようにその場にしやがみ込み、腰を落とす動きに連動させ姫斬りを発現——いや、身体から抜いたのだ。

卓越した抜刀術であった。

「猫まつしぐら神妙剣…てね！」

敏捷さで人間を圧倒的に優る猫に人間は追いつけない。

ならばどう斬るかといえば答えは一つ、己から近寄らせるに限る。

血を帯びた姫斬りが赤く、妖しく輝いた。

まるで血肉を喰らっているかの如く生き生きと、生きているかのようになんかしく、物言わぬ歓喜の声をあげるように光った。

その一撃に怪物が身体をぐらつかせ、動きを鈍らせる。

化け猫の拳を犠牲にするほどの強打を与えたうえで、高い妖力を持つ姫斬りによって斬りつけられたからであろうか。

その隙を見逃さなかったのは化け猫だ。

「オラあ!!!」

化け猫が足を振り上げ、真下から怪物の頭を蹴り飛ばす。

怪物は頭をカチ上げられ、そのまま腹を向けるように体をのけぞら

せた。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

まだ姫斬りの傷跡が生々しく残る腹部に化け猫の渾身の連打が叩き込まれる。

左ミドル。

右肘。

左ボデイ。

右膝。

左バツクブロー。

右ミドル。

右ミドル。

左ハイ。

右肘。

左アツパー。

「オラア!!!」

アツパーで浮いた怪物の身体に向かって渾身の後ろ回し蹴りを化け猫が放つ。

怪物がぶつ飛んだ先にいたのは、花鈴だ。

花鈴は刃ではなく姫斬りの峰の方をぶつ飛んでくる怪物に向け、八相に——いや、違う。

これは、野球のバッティングの構えだ。

「秘剣ーピッチャー返し!!!」

カキーンという甲高い金属音ではなく、ぐちゃりと鈍い音をたてながら、怪物が宙を舞った。

止めは化け猫に譲るとばかりの、とんでもない峰打ちである。

とんでもないピッチャー返しに、化け猫が笑った。

「バッカ…私右手ぶつ壊れてんのよ…。」

そう言いながら化け猫は左の腰に左拳を沿え、肩甲骨をうねらせた。

「まあ…左手あつけどき!!!」

波を、怪物の腹に向かって叩き込む。

叩き込んだ拳を今度は真つすぐではなく、拳が衝突した途端肩甲骨を瞬間的に縦に可動させ、波を天に向かつて突き立てた。

その一撃で数百キロの巨体が、3メートルは垂直に跳ねあがる。怪物はそのまま地に墜ちるともはや動くことはなくなった。

そして妖力によつて不自然に結合された肉体を崩れさせ、徐々に妖力を霧散させながら消えていく。

化け猫はその光景をみて怪物が二度目の死を迎えられたことを理解し、神域を解除した。

「つつ…かれたあー!!!」

そして土に汚れる! ことも構わず、寝ころぶ。

飛び散った怪物の血が妖力となって消えていく中、草に滴る夜露が化け猫の額に落ちる。

ヒヤリとした心地よい感触に、思わず笑みがこぼれた。

「疲れたじゃねえって、無茶したな本当。」

「こうなるとは思わなかったのよ…いっつつつ!!」

胸元を押さえながら化け猫が痛みに顔を歪めた。

いくら妖怪の傷の治りが早いと言っても上位の妖怪でもなければ傷は瞬時に治るものではない。

しばらく化け猫が寝ころんでいるとガサガサと草木が揺れ、戦闘から離れていたユリカが姿を現した。

ユリカはまだ胸元に生々しい傷跡が残る化け猫を見て顔をしかめた。

「ひどい怪我…。」

「別にこの程度問題ないわよ。」

「…その姿で言っても説得力ない。」

「うっさい。」

ユリカの言葉を聞いて化け猫が無理して身体を起こす。

胸を伸ばすと傷に響くからか、猫背に身体を曲げながら胸元をさすった。

「流石に今日は帰ろうかしらね、できればここに張り込んでおきたかったけど。」



「あーユリカから聞いたわよ化け猫、お人よしねーあんだ…私は張り込みまで付き合わないからね。」

「別に付き合ってくれなんて言っていないし。」

花鈴の言葉に化け猫が舌を出しながら否定した。

明日からしばらく張り込みになるからどうするかと化け猫が考え始める。

その時、不意に音が響いた。

雑木林——道路に面する方から車が停車する音が聞こえた。

ドアが開閉する音が聞こえ、それからガサガサと草を分けて誰かがこちらに歩いてくる音。

「張り込み、する必要なくなったかもね。」

化け猫が呟く。

そして一人の人間が姿を現した。

人間の女性である。

利発そうな女性であった。

顔立ちも整っており、髪も綺麗に整えられた跡があり、後ろで一つに纏めて結んでいる。

身なりも綺麗でゆったりとした可愛らしいフリルのついたシャツとロングスカート身を包み、長袖カーディガンをしっかりと前ボタンを閉めて着ていた。

どう考えても雑木林に入ってくる格好ではない。

足元も飾り気のある縫い目の入ったパンプスである。

洒落た店の並んだ繁華街でも歩いている方が違和感のない姿であった。

ただその手には汚れた軍手がはめられており、厚手の布でくるまれた荷物を手にしていた。

その二つの要素が服装にたいして強い違和感を感じさせる。

女性は三人の姿を見て驚き、明らかに挙動不審な様子で目を泳がせる。

「な、なんなの貴女たちは!？」

「なんなのって、それ、こっちのセリフなんだけれど？」

化け猫が苦笑しながら言う。

胸元を朱に染め、ズタズタになった衣服をまとう姿に女性は理解が追いつかない様子で目を見開き、息を荒くしながら問う。

「なに？なんであなた血まみれなの？もしかして私と同じなの？」

「私と同じって何？訳の分からないこと言わないでよ。」

「訳が分からないのはそっちでしょ!!」

女性は声を荒げる、そして手に持っていた荷物を地面に投げ捨てる  
と、前までしっかりと閉じていたカーデイガンを開いた。

その胸元は赤く染まっていた。

白いシャツが血によって染まっているのだ。

その血は既に乾き、赤というより黒味を帯びてきているが湿り  
気が残っており、比較的新しいものだということが分かる。

女性に見る限り外傷はない。

それはその血が何か別の生物から出たという証左であった。

「ね、ほら、私も一緒だから、素直に話さないよ。」

目を見開き、瞳孔の開いた瞳で女性が言う。

同時に投げ捨てた荷物の布が解け、中に入っていたものが姿を見せ  
る。

赤黒い塊だった。

それはよくみれば血で染まった新聞紙であり、隙間からなにか、毛  
の様なものが見える。

新聞紙でくるまれた、小動物の死体であった。

「残念だけど私はあんたの仲間じゃない、むしろあんたを捕まえるた  
めにこんなになつたのよ。」

「は？私を捕まえる？なんで？なんでよ!!」

女性が吠える。

「なんでって…自分がしたこと考えればわかるでしょ!」

「違う！私は何も悪いことしてない!!してないのよおお!!」

狂ったように女性は叫んだ。

悪いことはしていないと彼女は言うが、このようにこそそと行動  
している時点で自分のしている行為が罪であると理解しているはず

だ。

それでも彼女は自分は悪くないと叫ぶ。

「こいつらが悪いのよー!」

女性は新聞紙でくるまれた死体を蹴り飛ばす。

新聞紙が剥がれ、中から出てきたものは子猫の死体であった。

化け猫は無残な死体を見て歯を食いしばる。

悲しみと、それ以上の怒り。

何かの拍子に爆発してしまいそうな怒りを無理やりこらえ、生唾を

飲み、小さな深呼吸をして口を開く。

「何が…悪い?」

「笑ったのよ!!!」

女性はそんな化け猫を意に介さずに言い放つ。

「こいつらー!いつも!いつも!私を見て笑ってるんだ!!だから殺した!!だって笑うのよ!馬鹿にして!!」

意味の分からない理由であった。

常人には理解できない言葉を発し、そして女性は急に笑い始めた。

これは笑いごとだと。

そんなに大事じゃないのよと。

何を怒っているのと。

笑う。

「殺してなんだっていうの?」

笑いごとにしようよと。

だって笑い事じゃないのよと。

「こいつらは私を笑ったんだ。」

笑う。

「死んで当然よ。」

囁う。

「だって、所詮は猫じゃない?」

化け猫はその笑い声を聴いて、表情をなくした。

もう目の前の女に対して感情をなくしていた。

何も思わない。

だってそうではないか。  
所詮人間だもの、あの女は。  
だったら——

「死んで当然よ、お前。」

化け猫は女性に飛びかかっていた。

まだひびの入る右手を痛みを忘れたかのように動かし、女性の首を  
掴んだ。

そのまま片腕で女性を地面に引きずり倒す。

「んげえツツ!!」

口から唾液を吐き出し、女性はもがく。

しかし化け猫の右手はびくともしない。

折る——

化け猫は思う。

こいつは生きていてよい者ではない。

ただ一つ、生に対する慈悲として、苦しませはしない。  
そう思った。

「やめてえええええええええええええええええ!!」

絶叫が雑木林に響く。

その声で数匹の虫が飛び立つ羽音が鳴り、小動物が草をかきわけ移  
動する音が聞えた。

突然の絶叫に化け猫は亡くした感情を取り戻した。

驚いて顔を上げ、右手から力を抜く。

「今の声……ユリカ!?!」

化け猫がユリカの方を向く。

ユリカは息を荒くし、齒を震わせながら小さく頷いた。

「ダメ……そいつ殺したら……私も……死ななきやいけない。」

「あんた……」

「だから……お願い……」

俯き、化け猫から目を逸らして、それでもハッキリとユリカが自分

の言葉を化け猫に伝える。

そう、ユリカも多くの命を奪った。

いくら事情があつたとはいえ命を奪つたという事実はどう取返しが無いものだ。

それでも生きること許されたのは、罪を償つたわけでもなんでもない。

ただ生きたいと願つた、それだけである。

もし化け猫がその女性を殺してしまえば、自分と同じく尊い命を奪つた存在を殺してしまえば、自分も同じく死ななければならぬ。だから殺さないでくれ。

そう願つたのだ。

「だつてさ化け猫、どうする？」

いつの間にか化け猫の真横にいた花鈴が問う。

花鈴も化け猫の行動にすぐさま動き、最悪の事態になる寸前で止めようとしていたのだ。

幸いなことに、その動きは無駄になつたのだが。

「…わかつた。」

化け猫は女性の首から手を離す。

女性は気絶していた。

首を絞められたことが原因ではなく、本気の殺意にさらされたせいで気を失つたらしい。

化け猫はその顔に唾を吐き、ふてくされるようにポケットに手を突っ込んだ。

それはもう手を出さないという、化け猫なりの暗示であつた。

そうして頭が多少冷えたのか、ユリカに歩み寄りながら口を開く。

「あんがとな…。」

化け猫の言葉に、ユリカはその場にへたりこんだ。

しかしその胸元の傷に視線を向けると、苦々しく口元をゆがめる。

「別に、私はなんも…てか…私の力で、化け猫…さん、結局酷いことになつちやつたし。」

「この程度気にしなくてよいわよ、元はと言えばわたしの勝手が原因

だし。」

「でも、でも…。」

「だあー!!!もう!!!いい加減になさい!!!」

化け猫が耐えきれずに声を荒げる。

「ユリカ! あんたのおかげで私は助かったの! その力のおかげで! だから胸を張れ馬鹿!!」

バシツ! とユリカの頭を叩いて化け猫が怒鳴る。

しかし語気とは逆に、その言葉は素直な、本当に素直な感謝に溢れていた。

やや不器用ながらも真つすぐにぶつけられた感謝の言葉と叱咤激励。

ユリカは叩かれた頭にどこか感慨深げに触れ、そして今度は顔を隠す様に俯いた。

「いってえ…。」

その声は微かに震えていた。

小さく、鼻をすする音が漏れる。

そしてその目から小さな、一粒の雫が零れ落ちた。

あふれ出る感情が心の器から零れ落ちるかのように、ユリカの瞳から涙があふれ出る。

涙が地面に沁みた。

するとその涙に呼応するかの様に一粒の光の粒子が、地面から浮かび上がる。

粒子は次々に地面から浮かび上がり、宙に浮かぶ。

それはまるで少し季節から外れた、蛍が飛んでいるようであった。

草木を飛び交う蛍のように、粒子は宙を舞う。

月明かりしかなかった辺りは一変、幻想的な光に包まれ、煌いた。

化け猫と花鈴、そしてこの光景を生み出したであろうユリカも信じられない目の前の光景に目を奪われていた。

やがて光は形となった。

それは猫の形をしていた。

様々な種類の、何匹もの、今回の事件で犠牲になったであろう猫た

ちが光となって現れたのだ。

やがて光の猫たちはそれぞれ動き始める。

同じ方向ではなく、違った方向に。

光の身体で草木を通り抜け、光の尾を引いて、駆け出した。

「ユリカ…あれ…は？」

化け猫が啞然とした顔で猫たちを見送って言う。

ユリカも信じられないと言った顔で、しかし、それでも胸に一つ抱いた確信を言葉にした。

「帰るんだって…みんな…なんか、わかった。」

猫たちが向かった先は、もう二度と帰れるはずがなかった家族の元。

伝えられなかった最期のさよなら。

奇跡によつて与えられた仮初の姿で、それを伝えるために。

それは怨念ではなく、感謝の心。

ユリカの力。

その力が怨念を形にするというものから一つ殻を破り、成長を果たした瞬間であった。

翌日、SNSを中心に秋奈町で小さな話題が生まれた。

帰ってこなかった猫が夜に姿を見せ、光となって消えていったという話題。

それも一人だけではなく何人もの飼い主——家族たちが、同時刻に起こったことを報告しあっていた。

そして警察によつて一人の女性が動物愛護管理法違反、つまり愛護動物を殺害したことで逮捕されたという話題も。

女性は人間関係のストレスが原因で精神を病み、猫が自分を笑って

いるように見えたから殺したと証言し罪を認めている。

家族たちはその現実には深く心を痛めながらも、あの奇跡によって心を救われ、悲しみを背負いながら生きていく。

そんな小さな一夜の奇跡はすぐさま他の話題によって消え去り、多くの人々の記憶から忘れ去られていった。

しかし、それを忘れない人たちがいる。

奇跡を目の当たりにした家族たちは、一生あの夜を忘れない。

黒崎ユリカは、間違いなくあの夜、何人もの人間の心を救った。

「ほい、これあの時のお礼ね！」

「…煙草のカートン…しかも私の吸ってるやつじゃないし…です。」

「プレゼントに細かいこと言わないの、てかその気持ち悪い敬語やめなさいよ、キモい。」

「キモいって…うっぎ。」

「にやあ…ん？ため口は許しても悪口はゆるさにやいわよ！」

「でたにやん語…キモ。」

「にやあああああん!!？」



## 幕間劇2 激闘 八咫総合事務所 VS バーチャル夢魔。

深夜の八咫総合事務所。

静かな夜であった。

狂骨は相変わらず泥酔したままソファで爆睡し、翌日に待つ二日酔いという地獄を今だけは忘れて穏やかな寝息をたてている。

蟻螂坂も翌日の仕込みを終えて布団に入っており、鈴音もトレーニングを終えて眠りに就いていた。

ユリカは八咫鳥によって管理された特殊な寮に住んでいるため、ここにはいない。

ただ、二人、花鈴と化け猫は違った。

皆から隠れるようにこそそこそと、なにやらパソコンの前に集まっている。

「化け猫、例のモノは？」

「これよこれ：夏のコミマ前に配布された体験版：抽選でゲットできるなんてラッキーだったわ。」

「みせてもらおうじゃないの、試作型のYOMの性能とやらを。」

化け猫が取り出したるは簡素なプラスチックケースに入れられた白塗りの無地のディスクで、黒マーカーで“式神伝・乱 試作型”と書かれていた。

式神伝とは現在熱狂的な人気を誇る対戦型アクションゲームであり、これはそのキャラクターを元に作られたファンメイドの作品である。

所謂二次創作の同人作品であった。

化け猫がディスクをパソコンに挿入し、インストールを始める。

十分も経たないうちにインストールは完了し、ゲームの起動画面が現れた。

「うおお……」

「これは…。」

二人が思わず声を漏らす。

起動画面のイラスト、多種多様な美少女が描かれたイラストが添えられた画面は、肌色率が高かった。

イラストのクオリティも高い。

もちろん公式イラストレーターである敷島秋美のものとは比べものにならないが、それでも同人作品としてはかなりレベルが高い。

そしてなにより――

「えつろ。」

二人の声が重なった。

そう、この作品、エロいのだ。

一応全年齢向けなのだがギリギリのきわどいラインを狙っている恋愛アドベンチャーゲームだ。

原作ではありえない、式神伝の女性と一部男性キャラクターの乱れたお姿を堪能できる作品である。

乱、とはそういう意味を込めてつけられた言葉であった。

二人がゲームを始める。

操作するのは化け猫であった。

「にゃふふふ…まずは燐ちゃんから攻略するわよ。」

「やっぱあんたはそうよね、私はどうしよつかなあ。」

「まあまあ私がゆつくり堪能させてもらうから、その間にじっくりと考えておきにゃ…さ――」

ゲームを開始した途端、化け猫が急に言葉を途切れさせる。

花鈴が何があつたのかと不思議そうに画面を覗き込むと、そこに表れたのはプログラムらしきアルファベットや記号の羅列。

それは瞬く間に画面全体を埋め尽くし、大量のウィンドウが開かれては消えを繰り返していった。

「にゃ…にゃによこれ…ウィルス…!?!」

「うっそでしょ…なによこれ…。」

困惑した表情で画面を眺めていた二人であつたが、ウィンドウの数は徐々に少なくなり、消えていく。

そうして最後のウィンドウが消えたたん、画面に急に一人？の女性が現れた。

妖艶な、露出の多い黒いボンテージ風の衣装を身にまとった女性であった。

むつちりとした肉感のある肢体に、突き出た豊満な胸と尻。

艶やかな長い黒髪は胸先にまでたれており、自然と胸に視線が行ってしまふ恐ろしい効果を生み出していた。

「え…にやに、これ…？」

「いや…わかんない…。」

茫然とする化け猫をよそに、不意に二人とは違う声が事務所に響いた。

『うふふ、どうもこんばんは…あらあ、女の子なのね、それも上玉の。』

二人がぎよつとする。

その音声はパソコンから響いていた。

つまりパソコンが喋っているのだ。

「にや、にゃんなのよお前は…!？」

『私は夢魔よ、信じられないかもしれないけど、貴女たちみたいなエッチなものがお好きな方々の精を活力にして生きている妖怪。』

夢魔という夢の中に忍び込み、精を奪い取ってそれを糧に生きる存在だと伝承されている妖怪だ。

妖怪の中には枕返しや獺のように眠りや夢に関わる存在がいる。

枕返しは眠っている間にその名の通り枕をひっくり返し、体の位置を入れ替えると言われている。

獺は悪夢を食べると言われている妖怪だ。

どうやら彼女もそういった妖怪の一種らしい。

「妖怪…パソコンの中に…!？」

『そうよ…って、あら、妖怪ってことにはびっくりしないのね貴女たち。』

「画面越しには分かんないかもしれないけど、私たちも同族だから。」

『あらあら、お二人も妖怪なの、偶然ね。』

朗らかに妖艶な女性——夢魔は笑う。

思わずその雰囲気にもまれそうになるが、二人は首を振って正気を取り戻す。

「いやいやいやそうじゃなくて…！なんでゲームの中に…!？」

『私もそもそも実体の無い夢に入る存在なのよ、それである日思いついたの、無暗に目標を探すより、エッチなことが好きな人のところに自然に行ければって。』

「それで…このゲームに憑依した…!？」

なんと妖怪がバーチャルな存在になってしまおうとは驚きである。

いつの日にか妖怪がバーチャルな配信活動なんてする時代が来るかもしれない。

『そうよ、お姉さん頭良いと思わない?』

「いや待って待って待って、それならもつと適切なものがあるだろ、アダルトなゲームとか。」

花鈴がそうツツコむ。

それに対し夢魔は真面目な表情に顔を切り替えた。

『…それにはね、一つ事情があるの。』

「事情?」

『私は…相手は幼い方が好みなの…!』

「はあ?」

二人がポカーンと口を開ける。

構わずに夢魔は言葉を続けた。

『アダルトな作品だと行く先はだいたい大人でしょ!?でも全年齢向けのこの作品なら…若い子の元に行ける可能性がある!』

「にや…にやんてえ理由なの…ひっでえ。」

化け猫が呆れたように言う、花鈴もその発言に苦い顔をしていたが、ふと思いついたように手を叩く。

「てか待って、元のゲームは?私の式神伝・乱はどうしたおい?」

「いや花鈴のじゃなくて私の…ってそうよ、返しなさいよあんた…!」

『そうねえ…どうしちやおうかしらあ?』

「花鈴、なんか変なDVDとか持ってない?インストールしたらどうなるか試してみましよう。」

「そういや蠟螂坂が変な番組録画してたわー、”職人の流儀 板前見習いの過酷な一日”だっけ。」

「いいじゃない、この女には一日中寿司握ってもらいましょ。」

『待って待って待って！お願い止めて!!』

二人の言葉に必死に夢魔が懇願する。

『ふ、ふふ：貴女たちがゲームを取り戻すには一つ、私のゲームをクリアすること。』

気を取り直し、夢魔がそう条件を提示する。

そうして画面に表示されたのは”夢魔ちゃんクエスト ときめき冒険譚！”という文字と、アナログな感じのドット絵によるグラフィックであった。

その画面を見て二人は絶句する。

「うわあ…。」

「ネーミングが古臭い。」

化け猫がドン引きし、花鈴がバツサリと切り捨てる。

二人のリアクションにぴくぴくとこめかみに血管を浮かび上げながらも、夢魔は言葉を続ける。

『こ、このゲームはいろんな誘惑を勇者、つまりプレイヤーの貴女たちが乗り越えて魔王を倒すゲームよ、さあプレイしてみなさい!』

「ふーん、けどたかがドット絵じゃにやいの、そんなものに負ける訳ないじゃにやーい。」

「そうそう、センスの古ーいあんたには分からないかもしれないけど、今時のグラフィックに慣れてる私らにドット絵って。」

馬鹿にしたように二人が笑う、たかが古臭いドット絵ではないかとあざ笑う。

だがその言葉には夢魔は怒りはしなかった。

それどころかどこか自信に満ちたような不敵な笑いを浮かべている。

『ふふふ、じゃあプレイしてみなさい…そして思い知るが良いわ…貴女たちが古臭いと言ったドット絵、それは私の——夢魔の力をもって真価を發揮する。』

夢魔が笑う。

まるでこの先の未来が分かっているかのように笑う。

『グラフィックのリアルさが、ゲームの決定的な魅力でないことを教えてあげる…!』

「化け猫おおおおお!!帰って来なさい化け猫おおおおお!!!化け猫おおおおお!!!」

真夜中の八咫総合事務所に花鈴の悲痛な声が響き渡る。

その声に事務所の面々は一気に目を覚ました。

「どうした花鈴!!」

「敵襲…!?!」

まずは鈴音が大通しを片手に部屋のドアを蹴り飛ばしてオフィスにあらわれ、同時に蠅螂坂が寝室のドアを蹴り飛ばして姿を見せる。

狂骨も何事かとまだ酔いの残ったまま身体を起こし、懐の靈銃に手を伸ばした。

「ちよつとちよつと…なにがあつたのさ…。」

「化け猫が…化け猫が…。」

パソコンが置かれたデスクの横に立っている花鈴が茫然とした表情で言う。

化け猫はパソコンの前に座っていた。

眠ったように目を閉じ、椅子にぐったりと背を預けている。

いや、眠っているようだというより、本当に眠っている様子であった。

鈴音は不思議そうに眠っている化け猫に近づく。

化け猫は幸せそうな、それはそれは幸せそうな表情を浮かべて眠りについていった。

口元はデレデレと緩んでおり、よだれまで垂らしている。

よく耳をすませば寝言まで言っていた。

「にゃふ…ふふふ…ハーレムう…ここが…極楽…」

「ぼ、化け猫さん…?」

戸惑う鈴音が花鈴に説明を求めるように視線を送ると、花鈴は無言でパソコンの画面を指さした。

鈴音、蠅螂坂、狂骨がその動きによって全員が画面を覗き込む。

「な、なに…これ?」

「…奇怪…!」

「うわ、うわわわわ!なにこれ!」

画面の中に、化け猫が映っていた。

画面の中の化け猫は美少女に囲まれている、それも猫耳を装着しかなり際どい水着のような衣服に身を包んだ女の子たちに。

それはそれは幸せそうに、今眠っている現実の化け猫と同じように表情を緩ませながら酒池肉林とばかりに女の子たちを堪能していた。

「花鈴…何があった?」

「その…かくかくしかじか…で、夢魔のゲームをしてただけど。」

「まるまるうまうま…そんなことが…でもゲームをプレイしてどうしてこんなことに。」

「それがさあ、イベントで魔物に誘拐された女の子たちを救い出すっていうのがあって、その後女の子たちがお礼に勇者をもてなすシーンが出たの。そしたら画面を見てた化け猫が眠ったみたいになって、画面に化け猫が…」

戸惑いながら花鈴がそう説明する。

すると画面に別のウィンドウが開き、夢魔が姿を現した。

『それに関しては私が説明するわ。』

「あ!すーちゃんこいつ!こいつが今説明した夢魔!」

「ほう…急所が丸見えの格好だな、不安になる。」

『…こ、この格好をそんな目で見られるのは初めてだわ。』

鈴音の予想外の言葉に夢魔が戸惑いながら言い、そして説明を始めた。

『この子はね…想像しちゃったの…。』

「…想像?」

『そう…ドット絵の力、それは想像力。』

夢魔が笑う、思い通りにことが運んだと笑いながら言う。

『美しいグラフィック、それは素晴らしいわ、しかしそれは想像の余地がなくなってしまうという欠点を孕んでいる。』

オーバーに眉間に手を当て、悩まし気な動きで夢魔が続けた。

『ドット絵であるからこそ!想像できる自分好みの世界!ドット絵の情報をもとに頭の中で自分好みに改変されたキャラクター!私はドット絵の可能性に目を付けた!』

「まさか…。」

夢魔の言葉に何か気づいたのか、花鈴が冷汗を垂らす。

『そうよ、頭の中で自分好みの光景——シチュと言えばよいかしら、それを想像した途端、私が夢の世界へと誘う…!!』

「うーん、ちよつと待って、今二人の話を聞いてただけどき…つまりこれは…化け猫の理想のシチュエーション?」

『YES…この子は女の子たちにもてなされたシーン…それを自分好みの女の子たちに頭の中で改変して想像したのよ。』

その言葉と同時に夢魔の映ったウィンドウは消え、代わりに化け猫の映った画面がデカデカと映し出された。

『化け猫様あ…今夜は私のところに…。』

『ダメよ、化け猫様は今日は私と一緒!』

『にやはははは!私は二人でも何人でも一向にかまわないわよ!にヤツははははは!!』

「うわあ…化け猫ってこういう趣味だったんだ。」

「…化け猫。」

狂骨が少し引いた口調で言い、蠟螂坂が見てはいられないと顔を伏せる。

画面の中の化け猫の行動はどんどんとエスカレートしていき、最初はただ雰囲気を楽しんでいた様子からボディタッチが増えていき、発言も過激に、そして——

『じゃあそろそろお楽しみのベッド——』



「アウトおおおお!!!」

花鈴がこれ以上は化け猫の尊厳のためにもマズいと電源ボタンを押し、強制的にパソコンを終了させた。

そうすると夢から覚めた様に、いや、実際に夢から目が覚めた化け猫が跳び起きる。

「あれ…女の子は…てか私にやにをして…?!」

化け猫は混乱した様子で周囲を見渡し、自分が何をしてたのか少しづつ思い出し、どんどんと青ざめていく。

「え、ちよ、なんで、私にやにがあつたの…え?」

「化け猫さん…私はどんな貴女も尊敬してますから。」

優しく肩に手を置き、鈴音が言う。

その言葉に、化け猫の顔からさらに血の気が引いた。

「で、こうなってるの化け猫は?」

時間は経ち、時刻は真夜中から朝に移って八咫総合事務所に出勤してきたユリカがそう言った。

その目の前には泥酔した様子の子の化け猫がいた。

胸元に半分ほど中身が入った一升瓶を抱き、足元には空になった空き缶と空き瓶が何本も転がっていた。

ウイスキーに日本酒にチューハイ、その種類には統一性がなく、ただただ飲みたいから飲んだという様子である。

このように泥酔しているのは当然、自分の欲望を思いっきり晒されてしまったからだ。

「にやによおおお!!!いいいじやにやいのおおおお!!!」

「いやマジウケるわ、これ、面白すぎない。」

「こらこらやめてあげなって、ユリカちゃん。」

にやにやと笑いながら化け猫を眺めているユリカを狂骨が嗜める。

「それでユリカちゃん、例の夢魔に乗っ取られたパソコン、ちよつと見て欲しいんだけど。」

「いや、別に私パソコンのプログラムとか詳しくないんだけど。」  
「いやいやいや、それでも一番詳しいからさー、頼むよ。」

まるで年配の会社員がとりあえず若いからというだけでパソコン周りの仕事を押し付けるように、狂骨が言う。

ユリカは少しばかり辟易としながらもパソコン前に座り、電源を入れる。

すると操作するまでもなく勝手に画面が動き、プログラムが流れると件の夢魔が画面に現れた。

『あらあらあら〜さっきの猫耳ハーレムちゃんとは別の子が来たのね。』

「なにこいつ、痴女?」

『まあエツチなお姉さんなのは否定しないわ。』

「…キモ。」

露骨に嫌悪感を丸出しにしてユリカが吐き捨てる。

流石にその言葉には傷ついたのか、少しばかり笑顔を歪ませた。

『ま、まあ良いわ、貴女が次のプレイヤー?』

「は?んな訳ないし…とつととアンインストールすつから。」

『あらあら、そんなことできると思ってるの〜私はこのパソコンともはや一体なの、そんなことさせないわ。』

「ウツザー! ……チツ、ほんとに削除できないし!」

ユリカはカチカチと何度も削除の動作を繰り返すが一切パソコンはそれを受け付けない。

『ちなみにパソコンを物理的に壊しても良いのよ〜その時は憑依を解くだけだし、もうあの猫耳ちゃんの欲望は美味しくいただいたから最悪それでも。』

「ウツザ!!! てか仕事のデータあつから壊せないし。」

『さあさあ、貴女もこちらの世界に來なさい!』

「そうにやユリカ! 人のこと笑いやがってよおお!! お前もやれええええ!!!」

「や、やめろこのエロ猫! 離せ!!!」

化け猫は酒臭い息をまき散らしながら力づくでマウスを操作させ、

夢魔ちゃんクエストを起動させようとする。

「分かった！やるから！」

化け猫の圧に屈し、ユリカがゲームを起動させた。

「まっ、私がそんな変なこと考える訳ないし、お前と花鈴じゃないんだから、エロ女共。」

化け猫に向かって嘲笑を向けるユリカであったが、化け猫はにたにたとした笑みを返す。

「そう言ってられるのも今の内だにや…そのムツツリ剥いでやる…。」  
「おい化け猫…なんかあの夢魔みたいなこと言ってるぞ…まあ私もムカつくしあいつがムツツリ女であってほしいけど。」

エロ女共、と言われてしまった二人がそろって言う。

そうしてユリカはプレイを開始した。

『げっへへへ、良くみたら上玉じゃないですかこの女。』

『おいおい売り物だぜ、手出しするんじゃないぞ。』

勇者ユリカは盗賊集団に騙されて捕まってしまい、拘束された状態で牢に入れられていた。

武器は全て取り上げられてしまい、打つ手がない。

こんなことで冒険は終わってしまうのか、しかも魔物ではない人間の手で。

勇者ユリカはその事実絶望する。

人間は人間の手で自ら滅びに歩み寄ってしまったのだ。

しかし突如、牢屋の外が騒がしくなる。

『お前！何を…グワーツ!!!』

『てめえ俺たちを裏切るのか!!』

盗賊たちが叫ぶ声が聞こえる。

そして剣戟の音がいくつか響くと、傷だらけの少女が目の前に現れた。

それは盗賊の仲間であつたはずの女盗賊であつた。  
『迎えに来てやったぜ、勇者サマ。』

何故…と目線で疑問を投げかけると、女盗賊は牢のカギを開けて拘束された勇者ユリカに近づき、ぐつと顔を寄せる。

『勘違いすんなよ、私は別に人間と魔王とかどうでもいいし、正義の味方じゃない、ただ——』

勇者ユリカは高速されたまま、身動きが取れない。

その状態で女盗賊はソツと勇者ユリカの身体に手を伸ばし、愛でるように撫でながら耳元に唇を近寄せる。

『好みの女は盗んででも私のモノにする…それだけだ。』

そして女盗賊は勇者ユリカの衣服に手をかけ——

「ああああああああああ!!!」

夢から覚めたユリカの叫びが事務所にこだまする。

同時に化け猫と花鈴の爆笑が響き、他の三人はいたたまれなさそうに目線を逸らしていた。

「にゃっはははははははは!!!結構エロいシチュ ज्याにゃいのユリカちゃああああん!!」

「あははははは!もつと見たかったけど武士の情けで電源切つてあげたことに感謝するのね!!」

「うるさいエロ女共!!もうやだああ…。」

ゲームのプレイ内容としては、イベントの選択肢をしくじったことで、勇者が盗賊に捕まってしまった。

その時に盗賊の仲間であつたはずの女盗賊が仲間を裏切つて勇者を助けに来る。

そんな内容が流れた途端にユリカは意識を失い、画面の中にユリカが映し出されたのだ。

「よくそれで私のことエロ猫なんて言えたわね!」

「あーむずがゆい!!なんか乙女感バリバリで!!!」

先ほど散々な言われようだった二人は全力でユリカをからかった。  
「黙れ!! こうなったら花鈴!! お前もやれ!!」

ユリカが叫ぶ。

叫びながら化け猫の胸元から一升瓶をひったくり、そのまま一気に喉に流し込んだ。

化け猫はその様子を自分と重ね合わせながら、花鈴の肩に手を乗せた。

「そうにや…花鈴、こうなったらあんたも一蓮托生よ、エロ女!」

「いいわよエロ猫…まあ私がサクツとクリアしてやろうじゃないの!」

勇者花鈴が、魔王の配下であり幾度も勇者パーティーの前に立ちはだかった黒騎士を打ち倒す。

黒騎士の兜が弾き飛ばされ、現れた顔——それは勇者花鈴と瓜二つであった。

『もしかして…あんた…』

『そう…私は生き別れの貴女の姉よ…花鈴。』

『どうして…私の前からいなくなったの…すーちゃん!?』

『力こそ全て——魔王のその思想の方が、私にとって居心地が良かった…それだけだ。』

『ふうん…そっか…でも負けちゃったよね…すーちゃん。』

『ああ…殺せ…それが敗者の運命だ…』

『違うよ、すーちゃん…』

勇者花鈴が雷の魔法を放つ。

その雷は黒騎士の鎧のみを破壊し、黒騎士はインナー姿になった。

『敗者はね…殺すだけじゃなくて、好きにしていんだよ勝者が…』

勇者花鈴は勇者とは到底呼べぬ悪人じみた笑いを顔に浮かべ、横たわる黒騎士——いや、姉に向かって歩み寄る。

『いなくなった時間の分た——つぷりと私の愛を——』

「なんでこんなシチュがあるんだよおおおおお!!!」

化け猫が電源を落とそうとしたところでゲームのウィンドウが自動で消え、それによって目覚めた花鈴が絶叫した。

その言葉に應えるように画面に夢魔が現れる。

『いや、敵が肉親でしたって燃える展開だし…それが妄想が行き過ぎでこうなるなんて…これは危ないって思わずゲーム消しちゃった。』

「殺す！」

「待て…花鈴…やめろ！」

思わず姫斬りを抜こうとする花鈴を必死に鈴音が止める。

今回ばかりは化け猫とユリカもからかうことはできず、気まずそうに視線を泳がせる。

「いやー…お姉ちゃん子だとは思ってたけど、にやはは…。」

「ガチ…か…。」

「えーえーそうですよ！いいもん！すーちゃんもわたしのこと好きだもん！ねー!!？」

「はあ…もちろん私も好きだよ…花鈴。」

「えへへへへへ！すーちゃん好きい!!」

シヨツクのせいかわ幼児退行したように幼げな口調になる花鈴を鈴音は宥める。

しばらく花鈴にかかりきりになりそうな鈴音を見て狂骨はため息を吐いた。

「次は鈴音ちゃんに任せようと思ってたけど…私がやるしかないか…。」

「大丈夫なのリーダー、不安なんだけど…。」

「正直不安しかないけど、私がやるしかないじゃない？」

「あの…僕は…。」

「機械音痴は下がって。」

蟻螂坂が二人同時に叩きつけられた戦力外通告にいじけた様に部屋の隅に座り込む。

そんな蟻螂坂を捨て置き、狂骨はパソコンの前に座った。

「さーて、勇者狂骨の冒険を始めようか！」

はじまりの村、その酒場。

旅立ちのために仲間を集まるべく行ってみてはと言われたその場所、勇者狂骨は酒を飲んでた。

『もう…今日は旅立ちの日じゃない、飲んでていいの？』

酒場のママが見かねて言うが、勇者狂骨は酒を飲むことをやめない。

酒場には二人以外誰もいなかった。

徐々に進む魔王の侵略によってどんどんと過疎化が進み、その余波はこの村にまで及んでいた。

『だってさ、ここで飲めるの最後かもしれないし…後悔の無いように飲んでるのさ。』

『…そんなこと言うんだったらもうお酒出さないわよ。』

『もう勘弁してよ、帰ってくるから！もう一杯！』

『仕方ないわね…。』

小さな酒樽のようなジョッキに並々と琥珀色のビールが注がれる。

それを一息で飲み干して、勇者狂骨はジツとママの左手、その薬指を見つめた。

『…どうしたの？』

『まだ指輪、付けたままなんだ…。』

『そうよ…それが…どうかした？』

『忘れられないの…旦那さんのこと？』

『…そうね。』

『ママさんを置いて…この村を捨てたあの男を?』

『やめて!』

ママが叫ぶ。

勇者狂骨は動じない。

『私がこの酒場を捨てたくないってワガママを言っただけ…あの人は悪くないわ。』

『それでも、ママさんを捨てたんだよ、あの男は…。』

『やめて…どうしたの貴方…一体…。』

『飲む以外にも、私には一つ心残りがあつてさ。』

勇者狂骨は席から立ち上がるとカウンターをひよいと飛び越え、ママに迫る。

『…いけないわ…そんな…何歳離れてると思ってるの。』

『ずっと昔から好きだったんだ…ママさんのこと。』

『…戻ってきてくれる…わよね。』

『当たり前だよ…。』

そうして勇者狂骨はママの衣服に手をかけ――

「まず冒険を始めろおおおおおおお!!!」

化け猫が怒声と共にパソコンの電源を落とし、狂骨の頭を思いっきりぶっ叩いた。

狂骨は目を覚ますと目をパチクリさせ、がっかりしたように肩を落とす。

「いいところだったのに!なんてことするんだよ!!」

他のプレイしたメンバーとは対照的に一切恥ずかしがることなく狂骨は言つてのけた。

「いやクリアする気あつたのリーダー!?!」

「マジで…引くわ…酔い覚めるわ…。」

化け猫とユリカはあまりに早い、冒険すら始まらない狂骨のゲームオーバーにドン引きしていた。



「あつたよ！ただ言われた通り酒場に行ったら勝手にあんな…。」

「普通はあの酒場には仲間がいるのに消えてんのよ！リーダーの妄想が行き過ぎてて！」

「いや…行きつけのバーのことと思い出しちゃって…そのママさんと旦那さんは別れてないんだけど、最近倦怠期気味らしくて——」

「生々しいんだよ！」

バシーンと狂骨の頭を化け猫が引っぱいた。

二人が漫才を繰り広げている隙に、パソコンの前に座る影が一つ。

「僕の…出番！」

「蠅螂坂?!」

機械音痴の蠅螂坂がパソコンの電源を付けようとポチポチといろんなスイッチを押しまくる。

そして偶然押した電源スイッチによってパソコンは起動、そこからは夢魔の手によって自動で画面が開かれた。

その様子を化け猫と狂骨が不安な目で見つめているが、何故か蠅螂坂は自信満々な様子でキーボードに手をかけた。

「僕が…世界を救う…。」

「すーっ…すーっ…。」

「いや普通に寝るんじゃないわよ蠅螂坂!!」

「……ツ!？」

化け猫が思い切り蠅螂坂を引っぱたく。

蠅螂坂は普通に眠っていた。

昨晚真夜中にたたき起こされたせいで残っていた眠気が、あまりにも操作が遅いことによつて徐々に増していき、普通に爆睡していた。

化け猫のおかげで目を覚ましたが、その目はまだ半分閉じていた。

「…続…き。」

「もういいから…蠅螂坂…やめよう。」

狂骨の憐みを込めた優しい言葉に、蠅螂坂はスツと目を閉じる。

そのまま夢の中へと誘われていった。

その後見た蠍螂坂の夢。

誰にも覗かれることのなかったその夢の内容、それは八咫総合事務所のメンバー全員が蠍螂坂の料理に舌鼓を打つ、そんな夢だった。

蠍螂坂にとってはそれが何よりの幸せだった。

『あらららら、まさかこんなことになっちゃうなんてね〜おかげでお腹いっぱいよ私。』

夢魔が満足そうに画面の中で笑みを浮かべる。

化け猫、ユリカ、花鈴、狂骨の欲望という名の精力をいただき、ご満悦であった。

しかしただエサにされた四人——いや、狂骨を除く三人はその言葉に苛立ちを浮かべる。

「こいつ…どうにかして痛い目に遭わないかしら…。」

「同感、マジでウゼえ…。」

「じゃあ最後の希望…すーちゃん！頼んだ！」

「残ったのは私だけか…うーん…ゲームは分からないんだが…。」

「大丈夫だよすーちゃん！とりあえずやってみてよ！私の仇討のために！」

「仕方ない…やってみる。」

『うふふふ、貴女はどんなシチュが好みなのか楽しみね〜。』

夢魔は余裕そうな表情で鈴音のプレイ開始を見守っていた。

鈴音は一応キーボードのタイプにはそこそこ慣れているだけあり、ゲームには不慣れながらも化け猫と花鈴にアドバイスを受けながらスムーズに操作を進める。

そうして仲間を集めるべく最初の酒場にやってきた。

狂骨の想像の酒場とは違い、戦士や僧侶、武闘家など、様々な仲間たちがそこにいた。

「これに…話しかけるのか？」

「そうだよーちゃん、結構仲間って重要だから、よく考えてね。」

「そうそう、変なパーティー組んじゃうと苦労しちゃうのよね。」

「よく考える…か。」

鈴音はそうして画面を凝視する。

途端、鈴音がうとうとと、まどろみ始めた。

「え!? すーちゃんここで!?!」

「うっそー! にやんでなの!?!」

急な事態にうろたえる二人であったが、それは二人だけではなかった。

『な、なによ…これ…この想像力…そして欲望は…!!!?』

夢魔も何か予想外の事態が起こったのか、画面の中に現れると困惑した声を上げ、苦しそうに頭を押さえている。

そして夢魔を押しつけるように鈴音の映ったウインドウが画面に表示された。

そこには勇者ではない、現実にいる鹿角鈴音本人としか思えない姿で鈴音が映っていた。

「え…なに…これ?」

ユリカも今までと全く違うパターンの出来事に困惑する。

そんな皆をよそに画面の中で物語は進行を始めた。

勇者鈴音…いや、鹿角鈴音は画面の中で戦士、僧侶、武闘家と向かい合っていた。

それぞれ屈強な身体つきをしており、油断ない表情で鈴音に目をやる。

『仲間になるといつても、自分より弱い奴の仲間にはならねえ…。』

三人を代表するように戦士が言った。

その言葉を待っていたとでもいう様に鈴音が腰の刀に手をかける。

『つまり…勝てば良いということだろう。』

その顔には笑みが浮かんでいた。

現実の眠っている鈴音の顔にも、同じく笑みが浮かんでいる。

「え、これ…にやに…?」

画面の中では鈴音と戦士が剣を抜き、一切の躊躇がない戦いが始

まった。

今までであった性的な展開など一切感じられない、闘争一色に染まった展開。

「これは…まさか…!？」

「何か分かったの花鈴!？」

「すーちゃんは私がいけないとき、良く独りで型稽古をしてたの…いなはずの相手をイメージして。」

「つまり…イメージ力…型稽古で鍛えられた想像力が強すぎるせいで、あの夢魔の力が勝手に引き寄せられた？」

「仮説だけどね、それになにより…すーちゃんは戦うことが大好きだから。」

『そ、そんな…ありえな…い…わ…私の力は…エツチな欲望にしか…。』

花鈴の仮説を聞いた夢魔が画面にころうじて小さなウィンドウを表示させ、苦しそうに表情を歪めながら言う。

今の夢魔は自分が喰らうことのできない欲望を解消させるために力を利用されている状態だ。

それまでは力を使ってもそれ以上の精の収穫があつたが今は違う。

『ち、力が…無理やり引つ張られ…しかも夢が…その子と繋がってるせいで…離れられな——きやあああああああ!!!!』

夢魔は悲鳴を上げた。

その悲鳴もプツンと画面のウィンドウが消え、途切れてしまう。

画面の中ではひたすら、ひたすらに鈴音が戦い続けていた。

戦士たちを力づくで仲間に従え、盗賊を壊滅させ、幾度も魔物との激戦を繰り広げ、黒騎士を退け、魔王を倒し、世界を救った。

それは戦いの物語でしかなかった。

本来ならゲームにあつた日常を描くような部分は全てカット。

花鈴がプレイしたときの様な黒騎士の正体の様なシーンもすべてカット。

戦いのみをダイジェストで映したような、怒涛の戦闘シーンの連続。

魔王を倒した瞬間、画面が暗転する。

そして流れたのはエンドクレジットであった。

「ん…んん…あれ、私…夢に入っていたのか…？」

同時に鈴音が目を覚ます。

その顔はつやつやと輝いており、珍しく微笑みを——満足げな表情を浮かべていた。

晴れ晴れとした、まるで熟睡したうえで陽の光を浴び、早起きした時のような顔。

「楽しかった…。」

満足気に鈴音が言う。

そして対照的な、やつれたか細い声が、パソコンのスピーカーから微かに流れる。

『やつと…解放…され…た。』

その言葉と同時にクレジットに浮かぶ”THANK YOU FOR  
OR PLAYING”の文字。

そして夢魔は憑依していたパソコンから完全に消え去った。

「にやはは…痛い目に遭えばいいとおもったけど…。」

「まあ、自業自得だし。」

「やつぱ凄いや…すーちゃんは…。」

## 22話 鹿角家

帝京歴784年 7月末。

高校が夏休みに入り、時間に余裕ができたある日、鈴音は久方ぶりに鹿角家を訪れていた。

鈴音は自分の中で鹿角家がもはや帰る場所ではなく、訪れる場所という認識になっていることに少しばかり違和感を感じる。

たった数ヶ月ではあるが、八咫総合事務所はすっかり鈴音にとっての帰る場所となっていた。

そんな中、鹿角家を訪れた理由は一つ。

何か姫斬りに関する古い文書や記録がないか探すためだ。

花鈴はそういった過去には興味がないらしく、同行はしていない。

鈴音は一人で姫斬りが納められていた和室から順に家の中を捜索するが、特に何も見つけることはできなかった。

念のために和室の天井裏や軒下に何かないかと思いつき込んだものの何も無い。

妖力や霊力を感知できるようになった今なら何か収穫があるかも考えたが、成果はなかった。

「むう……。」

八咫鳥にも鹿角家に関する記述はほとんどない。

まるで故意に消されたかのように記録が抹消されていることに鈴音は何かきな臭さを感じながらも、現状どうすることもできなかった。

しかし何もなかった、と分かったことも一つの成果と言えば成果だ。

そう思いなおし鈴音は鹿角家から出ることを決める。

そして玄関を開けて外に出た。

その時だった。

「あんた、鹿角の子かい？」

不意に年老いた女性の声が鈴音に向かって投げかけられる。

玄関前、インターホンの前に一人の老婆がいた。

老婆はジーンズに黒地に派手な金色の花柄がはいったシャツという、年齢と不相応な若々しい恰好をしていた。

髪は白髪交じりの黒髪を後ろで一つにまとめていた。

首元や指に派手なシルバーのアクセサリを身に着けており、老婆が動くたびに太陽の光が反射してきらきらと煌いた。

片手には風呂敷でくるまれた荷物を持っている。

どうやらチャイムを鳴らそうとしていたところ、たまたま鈴音が出てきたらしい。

「鹿角の子…はい…一応、鹿角です。」

少しばかり言葉を濁らせながら鈴音が言う。

その言葉に老婆は小さく首をかしげながらも、ちよほどよかったと頷いた。

「じゃ、坊<sup>ぼん</sup>…あー、あんたの父ちゃんはいるかい？」

「父…ですか…。」

「そうだよ、ツツジのババアが来たと言えば分かるから、ちよいと呼んできておくれ。」

「…父は、もういません。」

「いません…？」

「死にました。」

鈴音は短く事実を述べる。

父の死亡を知らないということとは旧い知り合いであろうか。

老婆——ツツジのババアは鈴音の言葉に目を丸くすると、哀し気に目を伏せ、頭を掻いた。

「そうかい…まさか親より先に死ぬとはねえ…。」

「親…まさか…貴女は…？」

「あー、私はあんたの祖母ちゃんじゃないよ、あんたの祖母ちゃんは…  
こいさ。」

ツツジは手に持っていた風呂敷でくるまれている荷物を手に掲げながら言う。

「私は祖母ちゃんの…友達だよ、今日は骨を還しに来た。」

鈴音はツツジを家に招き入れた。

とりあえず居間に通し、茶を淹れる。

客人に茶を淹れることには慣れていた。

そういつた雑用も鈴音のこの家での仕事であつたからだ

「粗茶ですが。」

「子供がそんなかしこぶんじゃないよ、ったく。」

決まり文句を言う鈴音に対し、ツツジは笑いながら茶を口に運ぶ。動作の一つ一つが若々しかった。

見た目はそれほど老いているようには見えないが、祖母の友人ということならおそらく70歳近いくらいの年齢であろう。

服装の若々しさもあるとはいえとてもそうは見えなかった。

背筋もしっかりと伸びており、歩き方一つとっても若い。

袖から伸びる腕も老婆とは思えないくらいしつかりとした、張りのある筋肉がついていた。

ツツジがしげしげと自分を眺める鈴音の視線に気づく。

「あんだ、名前は？」

「私は…鈴音です、ツツジさん。」

「鈴音か、あの坊ぼんにしちや綺麗な名前を付けたもんだ。」

ツツジはしみじみとした様子で言うと、茶が入った湯呑に視線を落として何かを飲み込むように茶を口に運ぶ。

「…ツツジさんは、祖母の友人と聞きましたか？」

「おう、ちよつと事情があつてあんだの祖母ちゃんが祖父さんと別れた後、一緒にいたんだよ。」

「それで…訃報を伝えに？」

「時間はかかっちゃまったけどね、こつちとは連絡を絶つてたから大変だったけど記憶を頼りに戻つてこれた。」



そこでお前さんがいた、とツツジが鈴音を指差す。

「ま、あんたを見りや一目で分かったよ、こりや鹿角の子だつてな。」

「…何故?」

「鹿角流、やってんだろ、見れば分かるよ。」

「やはり、分かりますか…。」

「そりやあね。」

ツツジはくすりと笑いながら茶を飲み干すと、煙草を胸ポケットから取り出した。

ページユの下地に濃紺の文字で名前が刻まれたクラシックな雰囲気  
の紙巻きたばこだ。

「…灰皿は?」

「…ないです。」

「そうかい、爺は吸ってたんだけどね…。」

ツツジは残念そうに言いながら煙草を仕舞った。

「…その言い方だと、やっぱり爺ももういないのかい?」

「祖父も自分が生まれたころにはもう失踪していました。」

「そっちは覚悟してたけどね、みんな先に逝っちまったかな。」

「…覚悟してた?」

ツツジの言葉に鈴音が疑問を抱く。

「ま、事情があんのさ、いろいろとね。」

「事情ですか…。」

また事情か、と鈴音は眉をひそめた。

それに気づいたのかツツジが少しばかり困ったように苦笑いを浮かべる。

「すまんが、今の鹿角家には関係ない話さね…。」

「今の鹿角家には、ですか。」

「そうだよ。」

「つまり、妖怪絡み、ですか。」

鈴音がそう言葉を発した。

その言葉にツツジの表情が変わる。

緩い老婆の顔からピリツとした鋭い目つきの顔——歴戦の猛者を

思わせる表情に変化する。

「何言ってるんだい、あんた…。」

「もう巻き込まれてますよ、私も。」

鈴音はツツジの目を真つすぐに見据えながら言った。

「父も、母も、それで死にました。」

「なんてこった…。」

ツツジは拳を強く握り、顔をしかめる。

そして先ほど仕舞った煙草を再度取り出すと、今度はためらいなく火をつけた。

「悪いが無理にでも吸わせてもらおうよ。」

「構いませんよ、事情、話してもらえるなら。」

「いいよ、妖怪のことわかってるなら、話してもいい。」

ツツジはゆっくりと煙草を一本、心の中を整理するように吸うと、茶を飲み干した湯呑の中に煙草をねじ込んだ。

そして大きく一つため息をつく、腕を組み、ようやく口を開く。

「この鹿角家は、一時期——あんたの祖父さんの世代まである組織と密接に関わってた。」

「ある組織…八咫鳥、ですか？」

「そう…じゃないがね、まあその前身になったような組織さ。」

言われてみればそうかと鈴音は頷く。

八咫鳥が結成されたのはそう古い話ではない、現天皇である安倍晴明が結成したことが始まりだ。

たしか現天皇はまだ30歳を越えたかどうかだったはずである。

「退魔士には退魔士なりのつながりがあつてね、それを束ねる集まりみたいなのがあつたんだよ。」

そうツツジが解説する。

「ただ、鹿角家は一時期から妖怪退治は行っていないんだよ、ほとんどね。」

「…鹿角家は妖殺しと呼ばれていたと、ある妖怪の口から聞きました  
が。」

「そんなもん遠い昔の話さ、ま、ご先祖はそりやもう暴れまわってたら

しいがね、しかしそのツケが来たらしい。」

「ツケ？」

「相手を考えずにあれこれ喧嘩売りまくったらしいのさ、妖怪とあれば容赦なく、敵味方関係なくね。」

ツツジが説明しながら呆れた様に肩をすくめる。

「結果、干されちまったのさ。」

「組織の中で妖怪退治を行わせてもらえなくなったと…。」

「そう、といってもこれは私も聞いた話でね、私が鹿角家を知った時点でもうそうだったよ。」

「…そして、代わりに行っていたというのはまさか。」

「人殺し、だよ。」

「やっぱりそうですか。」

鈴音は何か納得したようにうなづく。

その言葉にツツジが首をかしげる。

「なんだい、何か心当たりがあるような言い方して。」

「鹿角流の技術体系ですよ。」

鈴音がそう答える。

「鹿角流、その技術はほとんどが人を斬るための型になっていきます、普通に考えれば当たり前ですが、今となってはそうは思いません。」

「なるほどねえ…それで勘付いたか。」

鹿角流には対妖怪に練られたような不自然な型や技術は鈴音が知る限りではなかった。

ほとんどが対剣術による技術で占められている。

今まで鈴音が妖怪相手に使ってきた技術はあくまで人を斬るための技術の応用だ。

「つまり鹿角家は組織の汚れ仕事を担う暗部となることで、退魔士の世界に関わることを許されていた？」

「そうみたいだね。」

「…なぜあなたはそれを？」

「私も退魔士だったからだよ、元、だけどね。」

ツツジは2本目の煙草に火を付けながら答えた。

「組織の中でも鹿角家はタブーな存在だった、八咫鳥にもほとんど記録は残っていないんじゃないかね？」

「その通りですよ…それを何故貴女が知って…？」

「この爺とは長い付き合いだったからね、所謂幼馴染ってやつだったのさ。」

懐かしむようにツツジが言う。

「だから事情は知ってた、外には洩らさなかったがね。」

「…それが祖父の失踪、それに貴女が祖母と一緒にいたということに繋がるんですか？」

「ああ、鹿角家はそのせいで恨みを買いすぎた、人からも、妖怪からも。」

ツツジは一度大きくたばこの煙を吐き、続けた。

「特に妖怪は長生きだ、人の家がいくつも世代を超えるような時間も奴らにとっちゃ些細な時間に過ぎない。」

「…長い時を経た怨恨、ですか。」

鈴音にとつては聞捨てならない話である。

結果として鈴音もそれによつて家族を失う羽目になった。

鹿角家だけに対する恨みではなかったが。

「だから爺はそれを断ち切るために、退魔士の世界から離れることを決意したのさ。」

「…縁を切ったと？」

「ああ、そのためにあなたの祖母さんと別れて、いざというときのために信頼できる私をそばに置いて遠い地に離れさせた。」

「…そばにいれば、巻き込まれるから。」

「いつ鹿角家への恨みが身内に牙をむくか分からないからね。」

「…しかし、無茶な話です。」

鈴音はそう考えた。

いくらなんでも無理な話だ。

退魔士の世界から離れたところで恨みは変わらない。

たしかに事情を知らないなら捨て置くような妖怪も存在するかもしれないが、そんな楽観的な考えはできないだろう。

「そうさね、私も正直そう思った。」

「だったら…。」

「一人、爺の協力者が現れた。」

そこでツツジは一拍間を置くと2本目の煙草を湯呑にねじ込み、小さく息をつく。

「当時は12代天皇候補だった、現天皇、安倍晴明だよ。」

「…。」

「今は八咫鳥なんて組織しちやいるが、そんなもん作るにはそれなりの裏の仕事を必要だったろうね。」

「祖父が裏の仕事を担うことを代償に、組織的に鹿角家を保護させようとした…?」

「ああ、八咫鳥という組織自体は立派なもんだよ、もうその世界を離れた私にも伝わるくらい活躍は聞いている。」

だが、とツツジは顔をしかめた。

「結果として爺が守ろうとした息子は死に、孫のあなたは退魔士の世界に巻き込まれ、本人は失踪か、きな臭いね。」

「:祖父が失踪したのは私が生まれる前です、まだ天皇は年齢を高く見積もっても10代前半だったと思いますが、それほどまでに影響力が?」

「あつたよ、どんな事情があつたのか妹君の天照様が12代目選ばれたが、あのガキは間違いなく12代目だと言われてたんだ。」

何か苛立ったようにツツジは言った。

そこで一息つくくと、3本目のたばこに火を付けながら鈴音に視線を向ける。

「それで、あんたは何があつたんだい?」

「私、ですか?」

「どうしてこっちの:妖怪絡みの世界に関わった?」

「:分かりました、話します。」

鈴音はツツジにすべてを話した。

突如現れた鬼のこと、妹が姫斬りという刀に選ばれたこと、その後八咫鳥に保護されていること。

全てを話し終えたころにはツツジが5本目の煙草を湯呑にねじこ  
んでいた。

「そんなことがあったのかい…。」

「今日も姫斬りに関する情報がないか家探しをしてたんです。」

「そこに私が来たって訳かい、なるほどねえ。」

ツツジは思案するように天井を見上げ、記憶を探ったのちに鈴音に  
向き直る。

「だったら私から一つ、話せることがある。」

「本当ですか…!?!」

「姫斬りに関しては私も知らないがね、ずっと封印されてたんだ、た  
だ、もう一本の刀に関してなら話は別だ。」

「もう一本…?」

「ああ、鹿角家にはもう一本の刀が伝わっていたんだよ、爺が使ってい  
たんだがね。」

「まさか…。」

突然の言葉に鈴音が驚きの声をあげ、記憶を探った。

少なくとも自分はそのような話は聞いたことがない。

しかし、刀というなら一つ、心当たりがあった。

あの日、花鈴が姫斬りに見初められる直前、脳裏に浮かび上がった  
謎の映像。

女武者と鹿角と呼ばれた男武者の戦いに、姫斬りが生まれた経緯。

その末に女武者が最後まで手放さずにいた一振りの太刀。

「それは、大振りな太刀ではないですか…古い造りの。」

「む、どうしてそれが分かるんだい?」

「…姫斬りが教えてくれたんですよ、その刀の存在を。」

「信じられん話だね…だが、そうなるとなおさら爺の行方を調べない  
といけないねえ。」

「その刀は確実に姫斬りと関わっています、捨て置けません。」

「…分かった、私も協力しよう、何か分かれば連絡する。」

そうしてツツジと鈴音は連絡先を交換した。

「しばらくはこの秋奈町にとどまるから、何かあれば連絡しな。」

「ありがとうございます、そちらこそ、何かあればすぐに。」  
「ははっ、若造に心配されるほど腕はなまっちゃいないよ。」

「…やはり、なにか剣術を？」

「新陰流だよ、爺とはよく喧嘩したもんさ。」

「なら…是非いつか手合わせを…。」

「ほう、それは私も望むところだ！」

鈴音の言葉にツツジは豪快に笑いながら答えた。

どうやらツツジも相当な好き者らしいことを鈴音は理解し、胸が高鳴る。

それからはひたすら、陽が落ちるまで剣術に関する話を話し込んだ。

時折椅子から立ち上がり、角度がどうか、体捌きがどうか、構えはどうかとか。

話題は尽きないまま、延々と話し続けた。

「名残惜しいが、そろそろお暇するよ。」

窓の外の赤く染まった景色を見てツツジが言った。

その言葉に少しばかり残念そうに鈴音がうつむく。

ツツジはそんな鈴音に対して、まるで孫に向けるようにやさし気な眼差しを向けるとそつと頭を撫でた。

「そんな顔すんじゃないよ、別に何かなくてもいい、暇になったら連絡しな。」

「…すみません。」

「ばーか謝んじゃないよー！」

にかつとツツジは笑うと、ぺしつと優しく鈴音の頭を叩いた。

その暖かみある言葉に、鈴音が微かに笑みを浮かべた。

思わず自分の顔に浮かんだ笑みに、鈴音自身が驚く。

戦いの中以外で笑みを浮かべたのは久々であった。

「花鈴…ちよつと外に出れるか？」

「いいよ！えへへ、すーちゃんからお出かけ誘ってくれるなんて初めてかも！」

鹿角家から八咫総合事務所に帰宅した鈴音はそう花鈴に声をかける。

珍しい鈴音からの誘いの言葉に花鈴はすぐさま肯定の言葉を返すと、意気揚々と身支度を済ませた。

二人で事務所を出て、夜道を歩きます。

大きな通りをはずれ、人通りの少ない日の落ちた住宅街を特に目的無く歩く。

そうして少しばかり八咫総合事務所から離れたところで、花鈴が口を開いた。

「で、いきなりどうしたのすーちゃん？」

「いや、ちよつと二人きりで話したいことがあつてな…。」

「二人きりで…そんなすーちゃん…今更告白なんて恥ずかしいよお…。」

「…ごめん、そういう話じゃない。」

一人類を赤らめる花鈴に対し気まずそうに鈴音が謝ると、花鈴は表情一転、すぐさま悪戯っぽい笑みを浮かべて鈴音の腕に組みついた。

「分かつてるよ、ジョーダンジョーダン！」

「つたく…ちよつと今日、ある人に会つてな…。」

鈴音はそう言つて、ツツジという老婆にあつたこと、そして新たに知った鹿角家の秘密に關してのことを伝えた。

花鈴は静かに話を聞いていたが、そこまで興味なさげに相槌を打つばかりで、特に大きな反応をすることもなかった。

「…驚かないんだな、花鈴。」

「ま、そんな感じかなつて予想はしてたし、驚かないよ。」

「そうか、やつぱりすごいな花鈴は。」

「そうでしょ、えへへ、もつと褒めて！」

鈴音は甘えてくる花鈴の頭を撫でる。

花鈴はさらに甘えるように鈴音に身を寄せ、肩に頭を載せるようにしながらそつと口を開いた。



「…大丈夫だよ、すーちゃん。」

「花鈴？」

「何があってもすーちゃんは私が守るから、絶対に死なせない。」

「…ありがとう。」

「ずっと、ずっとすーちゃんだけが私を守ってくれてたんだもん、当たり前だよ。」

「…。」

「あのクソみたいな鹿角家の生活に、クソみたいな学校生活…大嫌いだったけどすーちゃんは少しでも私が自由になれるようにしてくれてたもん。」

「逆だよ、私はそれしかできなかった…。」

「それだけで私は良かったよ、それだけでもしてくれる人なんていなかったし。」

「…。」

「それにあの夜だってそう。」

あの夜、とは鬼が鹿角家を襲撃し、鈴音が危うく命を落とす寸前だった日のことであろう。

鈴音は花鈴をかばったせいで鬼に肉体を貫かれ、死に瀕した。

死ななかつたのは花鈴の己の血を分け与えたキスによって、鈴音の肉体が人ではなくなったからだ。

そのことに鈴音自身は一切の後悔はない。

だが花鈴にとっては違う。

「今度は、私が守る番。」

改めて決意を固めるように、花鈴が言う。

そして同時に鈴音に向けて自分の唇を突き出した。

その様子に鈴音は少しばかり呆れた様に、しかし同時に優しい微笑みを浮かべた。

今日は久々に良く笑った日だな。

そんなことをふと思う。

「まったく…かっこいいこと言う割に、甘えんぼだな花鈴は。」

「それとこれとは別！」

「はいはい…。」

鈴音はあきらめた様に突き出された花鈴の唇に自身の唇を軽く重ねる。

どこに人目があるか分からない外だというのに、まさか花鈴にここまで甘くなってしまうとは鈴音自身も思わなかった。

少し前なら間違いなく断っていただろう。

自分がどんと変わっていくことと、その変化の心地よさに浸りながら、鈴音は少しばかり長く花鈴と口づけを交わした。

『清明様、過去の関係者と観察対象Sが接触した模様です。』

『そう、思ったより早かったかな。』

『どういたしますか？』

『君は何もしなくていいよ、猿女留美子、あくまで君の一番の任務は坂本雪の護衛だ、片手間に報告してくれるだけでありがたいよ。』

『…了解。』

『あの刀の力は興味深い…下手に介入するよりも、そのままにしておけば自然と力が目覚める日が来るはずさ。』

『…。』

『楽しみだね、その時にあの刀と彼がどうなるか…。』

## 23話 小さな不穩、新たな事件

鈴音は木刀を八相に構えていた。

切っ先を天に突き立てるようにほとんど真つすぐ、身体は自然体に、力を抜いて。

筋肉ではなく骨で支えるように立つ。

まるで天と地を繋ぐ一本の柱のように鈴音は立っていた。

相對するは歳の離れた老婆、ツツジ。

ツツジは正眼の構えで鈴音に相對していた。

しかし、所謂他流の正眼の構えとは違う点があった。

正眼の構えはその字の通り、目の前に真つすぐと相手に切っ先を向けて構える形になる。

しかしツツジの正眼は切っ先を相手に向けながらも木刀を斜めに構えていた。

本来なら刀によって守られるような形になる左手が露になっているようにさえ見える。

これが新陰流の正眼——青岸と呼ばれる構えである。

左手に隙があるのは誘いであった。

新陰流は主に後の先、現代的に言うならカウンターをとる型に特化した流派である。

それ故の構えであった。

しかし青岸の構えは体力の消耗が比較的早い構えである。

両手にかかる負荷が大きいため構えを維持するのが難しいのだ。

鈴音も以前のビルの戦いでは集団相手に戦う際、腕への負担が少ない八相を崩した構えを用いている。

鈴音は動かない。

間合いのギリギリでツツジの体力の消耗を待つ。

それは鈴音が本気であるからだ。

不用意な動きをわずかでも見せれば一本を取る。  
そういう覚悟である。

ツツジも動かない。

青岸の構えのまま、誘いもせず、剣道のように切っ先を揺らすこともなく、待つ。

しかしその時不意に、ツツジの口元になやりと笑みが浮かんだ。

まるで口には出さないが「こういう細かいやりとりはつまらないねえ」とでもいう様に、笑った。

する、つとツツジが一步前に踏み込んだ。

ただ歩くように自然に。

力みも何もなく。

友人に対して手を挙げて挨拶をするときのように何のよどみもなく。

ただ手に持たれたその木刀の切っ先は、鈴音の胸に向かって突きこまれていた。

「…ツ！」

鈴音が突きに対し身体を斜めに捌いて正中線をずらしつつ、ツツジの左手に向かって八相から袈裟懸けに一刀を繰り出す。

しかし、鈴音の木刀がツツジの腕に触れる寸前、ツツジの腕が消えた。

ツツジが突くと見せかけた腕を引き、鈴音の打ち込みを外したのである。

新陰流、手引きの太刀。

ツツジが引いた腕を小さな円を描くように回し、鈴音の手に向かって木刀を打ち込んだ。

鈴音がその打ち込みに対し咄嗟に手首を返して木刀を跳ね上げ、弾くことができたのは元よりツツジの腕に当てる寸前で止める意識があつたからか。

誘われた！

鈴音はその段階になってようやく自分が誘いに乗ってしまったことを意識した。

意識したと言ってもそれは頭の中の一角にほんの少しばかり、濁流のように溢れかえる思考の中のわずかなうちにすぎない。

そんなものを今深く意識したところで意味はない。

カン、と乾いた音が響く。

鈴音が切り上げから上段に木刀を構えなおし、振り下ろした打ち込みをツツジが木刀の鑄を用いて受け流した。

鑄とは日本刀の小高く盛り上がった部分のことだ。

日本刀はこの部分を用いて防御を主に行う。

鑄を削るといふ言葉があるが、それはこのことが語源になっているのだ。

両者の間合いが狭まる。

鈴音が次に選んだ手段は体当たりであった。

受け流された木刀を引き戻さずに踏み込んだ勢いのままに半歩踏み込み、肩から体当たりを放って体勢を崩しにかかる。

ツツジは体当たりを後ろに退いて避け左上から斜め下に、鈴音の肩のあたりを狙って逆袈裟に木刀を打ち込んだ。

「はぁぁツツツ!!」

鈴音の気合が響く。

体当たりの体勢から瞬間的に股関節の前後を入れ替えるように体を返した鈴音は、渾身の力を籠めてツツジの木刀に向かって切り上げを放った。

その一撃によってツツジの腕から木刀が離れることはなかった。

しかしツツジが持っていた木刀は信じられないことにその一撃によって半ばからひしゃげ、くの字に曲がってしまった。

鈴音の木刀は大きな傷跡を残しながらもどうにか原型を保っている。

鈴音が切り上げから霞の構えに木刀を構えなおすと、ツツジがも折れた木刀を青岸に構える。

お互いに距離が開いた。

そうなったところでツツジは構えていた折れた木刀を降ろす。

それを見て鈴音も霞に構えていた木刀を降ろし、互いに礼をおこ

なった。

礼を終え、再びお互いの目をみたところでツツジが明るい笑みを浮かべる。

「あつはつはつはーでたらめだねえあんた、これじゃあこのババアの立つ瀬がないじゃないか！」

「そんなことは…。」

「謙遜すんじゃないよーしかし真つ二つに折れなくてよかった、折れた先がどつか飛んでたら大変なことになってたかもしれないからね！」

豪快に笑いながらツツジは周囲を見渡した。

周辺にあるのはジャングルジムやシーソーなどの遊具と、二人の手合わせを前に遊びの手を止め目を丸くしている子供たちが数人。

そう、ここは普通の公園であった。

普段鈴音がトレーニングに使用している公園である。

ツツジから鈴音に時間の都合がついたから軽く手合わせでもどうだい、と連絡があり、それに飛びついた鈴音が自由に動ける場所として選んだのがこの公園であった。

「後ろに下がりながら打ち込んだから刃筋が乱れてたかね、まあ見事なもんだ。」

「恐縮です。」

「鹿角流、久々にやりあつたが楽しめたよ。」

ひよい、とツツジが投げてよこした折れた木刀を鈴音がキャッチする。

「こちらこそ…新陰流の太刀、勉強させてもらいました。」

「それならババアも身体張った甲斐があつたもんだ、じゃあそろそろ私は行くよ。」

「はい、今日はありがとうございました…。」

「おうー！」

ツツジはそう元気に返事をしたところで、鈴音の少しばかりの表情のゆがみの様なものに気づいた。

普段通りの仏頂面の中に、少しばかり何か言いたげなものがあることに気づいたのだ。

「…あの刀、それと八咫鳥については今旧い知り合いを回って話をきいてるところだよ、ただ今のところ有益な情報はないね。」

「そう…ですか。」

「まあこうやって嗅ぎまわってればそのうち向こうから接触してくるかもしれないし、気長にいきましょうじゃないか。」

ツツジは肩を落とす鈴音に笑いかける。

「すみません…気を遣わせてしまつて。」

「気にしなさんな、今日は私も楽しかったよ、またな。」

そう言つてツツジは公園を後にする。

その姿を見送つてから、鈴音も公園を離れ八咫総合事務所へ帰る道を進みはじめた。

八咫総合事務所にはいつも通りのメンバーがそろつていた。

夏休みだからと何かゲームを買つては一日中二人で協力プレイをしている化け猫と花鈴。

ユリカは出勤して事務所の経理関係の仕事から報告書の作成、それにくわえて本部から送られてくる一部の事務仕事までこなしている。

ユリカの仕事ぶりは丁寧だと評判が良いらしい。

本人は本部の仕事まで押し付けられることに文句を言いながらも頼られること自体は気分が良いらしく、淡々と仕事をしていた。

それにたいして一切仕事をする姿を見なくなったのは狂骨である。

一応本部での定期的な報告会議などには出席しているらしいが、はたしてまともに会議に参加しているか怪しい。

今も昼間から事務所のソファに寝転がりつつ、鈴音もコンビニで目にしたことがあるような黒いラベルが貼られたウイスキーを瓶を傾けて飲んでいる。

そんな狂骨の今日の肴は蝋螂坂特製のオニオンソースがたっぷりかかったローストビーフ。



お手製故に厚切りに切られたローストビーフを豪快に口に運びながら、化け猫と花鈴がゲームをプレイする様子を眺めていた。

蠍螂坂は今日もキッチンにこもって料理をしている。

ちらりと中を覗いてみればエビの下ごしらえをしていた。

そばにはトマトにいくつかのハーブ類とパスタが用意されていた。

どうやらエビを使ったトマトソースのパスタを作っているらしい、味を想像するだけで思わずよだれが出そうになる。

「うーん…。」

変わらないいつもの日常、そこでふと鈴音は考えた。

考えてみれば八咫鳥のことならメンバーに聞くのが一番手っ取り早いではないか。

「あの…蠍螂坂さん？」

「…？」

ちょうどエビの下ごしらえがひと段落付いたところを見計らって

鈴音は蠍螂坂に声をかけた。

「気になったんですが、蠍螂坂さんはなんで八咫鳥に…？」

「僕が…ああ…。」

鈴音の疑問に蠍螂坂は思案するが、少し困った様に首を傾げる。

「覚えて…ない…。」

「そうなんですか？」

「蠍螂坂——僕の種族は陰陽師に狩られて数が少なくなつて、保護されたんだと思う。」

「そうですか…いきなりすみません、少し気になつて。」

「…気にしないで。」

そう言つて蠍螂坂は調理に戻つた。

次は化け猫に聞いてみようかと、鈴音はゲームをプレイ中の化け猫に近づく。

ちょうどゲームが一段落着いたところであつたらしく、化け猫が鈴音の方を振り向く。

「あら、どしたの鈴音ちゃん？」

「いえ、ちよつと気になつたんですが…化け猫さんはなんで八咫鳥に

入ったのかと思ひまして。」

「私が？うーん…。」

化け猫は煙草に火を付けながら、蟻螂坂と同じように首を傾げた。

「気が付いたら、いたわね。」

「…気が付いたら？」

「聞いた話だと暴れまわってたところを捕獲されて…そのまま八咫鳥に所属させてもらった感じみたい。」

「そうなん…ですか。」

「うん、まあここ居心地よいし、そのままいる感じよね。」

そう答えて化け猫はゲームに戻っていった。

蟻螂坂も化け猫も覚えていないという。

最後に残るは狂骨だ。

「あの…狂骨さん…。」

「ん？どしたの鈴音ちゃん？」

「狂骨さんはなぜ八咫鳥に入ったのか、少し気になって…。」

「あく私は…なんだっけ、気づいたらこの身体を晴明様が用意してくれてて、そこから自然にかな。」

「そう…ですか、いきなりすみません。」

「いいよいいよ、私飲んでるだけだから。」

「…ほどほどにしてくださいね、片付け大変なんで。」

「あっはははは…ごめんなさい。」

鈴音の言葉に少しばかりしゅんとした狂骨であったが、すぐさまウイスキーの瓶を傾け始めた。

つまり、三人とも八咫鳥に所属した経緯に関してはまともに記憶がないということになる。

鈴音は先日ツツジから聞いた過去の話を思い出していた。

八咫鳥設立の際に、祖父が裏の仕事を引き受けていたという可能性が非常に高いこと。

どんどんと八咫鳥という組織に関しての不信感が募ってくる。

しかしだからといって今の鈴音のどうすることもできない。

とりあえずこのことをツツジに報告し、今は任務をこなしながら八

咫鳥という組織について探るしかないだろうか。

鈴音がそう思った頃合いにちょうど蠟螂坂が昼食が出来たことを皆に伝えた。

それを聞いてソファに寝ころんでいた狂骨が起き上がり、化け猫と花鈴はゲームを中断、ユリカも仕事の手をいったん止めた。

今日の献立はどうやらエビとトマトの冷製パスタの様だ。

それぞれの分が盛られた皿の中、一つだけ三人前は盛られた大きな皿が一つ。

鈴音は何も言わず大皿に盛られたパスタが置かれた席に座る。

今はしばしの間、この料理に舌鼓を打つとしよう。

「…ぐちそうさまでした。」

鈴音はおおよそ三人前の冷製パスタを二皿おかわりしてようやく満足した。

既に他のメンバーは食事を終えており、それぞれの定位置に戻っている。

さて、これからどうしようかと鈴音が考え始めたところだった。

テテテテテテレレン♪

テテテテテテレレン♪

誰かの携帯がなり始めた。

各々が自分の携帯かと確認をするが、誰もが自分ではないと首をかしげる、一人を除いて。

「ぐおおおお…すびー…。」

狂骨が酔いも相まって爆睡しており、よく耳をすませば着信音はその胸元から鳴り響いていた。

どうやら懐に携帯を仕舞っているらしい。

「…。」

仕方なく鈴音が寝ている狂骨の携帯をとろうとするが、そこで着信音が止む。

そして代わりに別の着信音が鳴り響いた。

「どうやらそれはユリカの携帯らしい。」

「…はい、黒崎です…ああ、狂骨さんなら寝てます、いつも通り…はい、はい…他のメンバーに伝えます。」

ため息をつきながら狂骨の代わりに電話の対応をしたユリカが携帯を仕舞うと、メンバー皆の方を向いた。

「任務かもしれないって…秋奈町で負傷した妖怪が出て犯人は不明、今は他のチームが対応してる。」

「へえー、面白そうじゃん…でも人間じゃなくて妖怪が襲われたの？」  
花鈴が首をかしげながらユリカの方を見る。

「うん、最初に見つかったのはカマイタチ、他も垢舐めにぬりかべみたいな基本人に危害を加えない妖怪がやられてたって。」

「カマイタチ…が…!?」

蠅螂坂がユリカの言葉に反応する。

似た種族の妖怪として放っておけない言葉であったのだろう。

「一応、八咫鳥の施設に送って治療は受けてるらしい…。」

「そう…か…。」

ユリカの言葉に少しばかり蠅螂坂は少しばかり安堵したようだ。

しかしそれでもそわそわと落ち着かない様子で、鈴音が食べた後の食器を妙に念入りに洗いながら視線を右往左往させている。

その様子を見た化け猫が煙草に火を付けながら小さく頭を掻いた。

「…蠅螂坂、心配ならちよつと様子見に行ってきたさいよ。」

「でも…。」

「私は水ぶっかけてでもリーダー起こしとくし、一応車の運転はできるから…ユリカ、ここに連絡回ってくるってことは現場って近いんでしょっ。」

「最初の現場は近くの商店街、蠅螂坂なら生身でもすぐ到着できると思う。」

「だってさ蠅螂坂、まあなんにもならないかもしれないけど行ってきな。」

「…恩に着る。」

蠅螂坂はそう言うや否や事務所を飛び出していった。

そしてその後続く様に花鈴もゲーム機のコントローラーを置いて立ち上がる。

「私も面白そうだし行ってくるわ化け猫、すーちゃんは どうする？」

「…私も行くよ、蠅螂坂さんにはお世話になってるし。」

「決まり！じゃあ化け猫後は任せた！」

「あーはいはい！じゃあ行ってきたさい！さーて…どうしてやろうかこの馬鹿リーダーを…。」

事務所の扉を開けて出ていく二人を化け猫は見送ると、さつそく台所へ行き普段は蠅螂坂が調理に使っている大きなボウルを手にする。その様子を視界の端で見ながらユリカがそつとため息をついた。

鈴音と花鈴は蠅螂坂に追いつくことなく商店街に到着した。

花鈴ならともかく、鈴音はまだ蠅螂坂ほど身体を強化できる妖力を身に着けていない。

持ち前のスタミナを駆使して常人よりは圧倒的に早く移動はできるが蠅螂坂には及ばなかった。

そして商店街の入り口を見してみると何やら人だかりが見える。

そばにはパトカーまで来ており、なにやら大きな騒ぎがあったことは明白だった。

人垣の奥をよく見てみると、どうやら入り口にあった大きな看板が落下したらしい。

救急車が来ていないことから人が人は幸いにもいないようであったが、先ほど聞いた事件と関連がありそうだった。

「うっひゃー、派手に看板ぶっ壊れてんねこれ。」

「事件の犯人のせいなのかもしれないな…。」

そうして人垣の中に蠅螂坂の姿はないかと探していたところ、不意

に二人に向かって声がかけられた。

『…姉ちゃんたち、この声が聞こえるかい…?』

「む…!？」

「この声、妖怪っぽいね。」

驚く鈴音に対し、花鈴が周囲を見回しながら言う。

二人が声に対して反応をすると、ひょこんと小さな影が二人の前に現れた。

短い手足に細長い胴と長いしっぽ。

一見するとただのイタチのように見えるが、その身体には妖力が感じられた。

「カマイタチ…!？」

『そうだよ、事件なんだからまさと考えたが、姉ちゃんたちも退魔士か。』

「へえ〜資料で見たことあったけど本当にイタチそっくりなんだな。」

しげしげとカマイタチの姿を眺めながら花鈴が言う。

鈴音も興味深い視線を投げかけながらも質問に答えた。

「ああ、一応退魔士だ…見習いだが。」

『そうか、さつきも別の退魔士の姉ちゃんが来たから声かけたんだよ。』

「もしかして…サングラスかけてたか…?」

『おう、変な色眼鏡かけた姉ちゃんだ…あんたらに声かけたのもお願いがあったんだ。』

「お願い…?」

『ああ…。』

カマイタチは二人にたいして頭を下げるように体を伏せると、言葉を続けた。

『頼む、仲間を止めてやってくれ…!』

「仲間って…まで、それって事件の犯人のことか…?」

『なんだ、知らなかったのか?』

「その口ぶりだとき、今回の犯人ってカマイタチってわけ?」

『その通り、あの看板潰したのも、今退魔士に追われているのも俺…カマ

イタチの仲間だ。』

「…どうしてそんなことを…。」

聞いた話だとカマイタチは生息数を減らし、保護されている身だったはず。

その代償に危害を加えるような悪戯はやめていたはずであったが、それを反故にしたということになる。

『分からねえ、ただちよつと前に、あいつら度が過ぎて一回退魔士連中に捕まったはずなんだ。』

「ふむ…。」

『それから帰ってきたんだが、それ以来様子がおかしくてよ…。』

カマイタチは困惑したように首を振りながら話を続けた。

『なんか気が荒くなっちまったと言うか、ただでさえ度が過ぎてたのに更に過激な悪戯するようになってしまったって…俺も止めたんだが聞く耳もたなくてよ。』

「ふーん、それで今回みたいなことになったんだ。」

『ああ、このままだとカマイタチ自体がまた狩られるようになってしま…それにあいつらも退魔士連中に何されるか…。』

『だから止めてくれと…まで、あいつら…?』

そこで鈴音は一つ気づく。

「犯人は複数いるのか…!?!」

『ああ、それにあいつら悪戯しまくったせいで妖力自体も俺なんかよ相当強くなってる…いくら退魔士だっていつてもあぶねえんだ…!』

「善処はするけどさあ、あんまり期待しないでよ、あくまでこつちが怪我しないのが最優先だし。」

『分かってる…無理言つてすまねえ…でも…。』

「…それで、仲間が逃げた先に心当たりはあるのか…?」

『ある、ちよつと離れた高い建物の屋上に管と機械がたくさんあって、仲間はそこに隠れて過ごしてた。』

高い建物、とはビルのことであろう。

そして管とは配管のことだろうか、たしかにビルの屋上には大きな空調やボイラー設備が配置されていることが多い。

「わかった…それは蠅螂坂さん…さつき来た退魔士には伝えたのか？」

『おう、話を聞いたらすぐに向かってくれたよ…そっちの仲間まで巻き込んで済まない。』

「こつちも仕事だ…気にするな、教えてくれてありがとう。」  
「じゃあ行こつかすーちや——って危なッ!？」

不意に花鈴が声を上げ、急に地面にいたカマイタチの首根っこをひつつかみながら見事な側転宙返りを繰り出し、その場から飛びのいた。

次の瞬間、カマイタチがいた場所の地面がすさまじい衝撃音と共に抉れ、アスファルトが飛び散った。

突然の出来事に驚きながらも鈴音が周囲を見回すと、ソレはいた。

「あれが…カマイタチ…だと？」

『ありや…たしかにカマイタチだ…けど…そんな…!?!』

「あーらら、でかくなっちやって。」

花鈴がカマイタチを地面に離しながらにやりと笑みを浮かべる。

今自分たちを攻撃した存在。

それはカマイタチでありながら鈴音たちのそばにいるカマイタチとは明らかに違う存在であった。

その体軀は小動物のそれではなく、成人男性ほどまで巨大化している。

手足の爪は熊のようにカギ状に曲がって鋭く発達している。

短いはずの手足は人間の手足のように長く、筋肉質に発達している。

巨大なイタチ——大鼬おおいたちとでも呼べばよいだろうか。

大鼬は二人と一匹の前に降り立つと牙を剥くように笑った。

『外しちまったか…勘が良いなお前…。』

仲間を狙ったことになんの罪悪感を抱く様子もなく大鼬は笑う。

その姿を見てカマイタチは表情を歪めながら叫んだ。

『お前…なんでこんなこと！』

『なんでこんなことだあ？そりやこれが俺たちカマイタチの本来の力』



だからよ…もう陰陽師や退魔士なんて恐れる必要なんてねえ…！」  
『そんなわけあるか！いいからやめてくれ！』

『黙れ！』

大鼬は叫び声と共に妖力を籠めて、発達した腕を振るう。

同時に周囲の空気が一気に引き込まれるように風が巻き起こり、目に見えないすさまじい何かが腕から放たれた。

それは目に見えないながらも周囲の空気や先ほど飛び散ったアスファルトの破片をまき散らし、一直線に花鈴に向かって突き進む。

「これがカマイタチの正体って訳ね！」

花鈴が笑みを浮かべながら姫斬りを身体から抜き放ち、目の前に向かって妖力を込めた抜き打ち一閃。

すると目に見えない何かは破裂音を響かせ、周囲に衝撃をまき散らしながら散華した。

突如鳴り響く破裂音に周囲の人々がざわめく声が聞こえる。

「妖力を使った真空波ってところかな、まあ目に見えなくてもあんなに派手に風起こしてたら丸見えだけど。」

「流石だな花鈴…神域、出さぞ！」

鈴音は懐から大通しを、そして神域を発動させる勾玉を通した数珠を取り出し、神域を発動させる。

その瞬間、先ほどまで聞こえていた人々の声は綺麗にかききえ、花鈴と鈴音、そしてカマイタチと大鼬のみがその場に残された。

「すーちゃん、思えば一緒に戦うのって初？」

「そうだな…蠟螂坂さんが心配だ、とつとと終わらせよう。」

『とつとと終わらせるだあ…ふざけるな！』

大鼬が吠えるが、二人は一切動じることなく、互いの武器を構える。花鈴は姫斬りを普段の様な正眼ではなく鏢をこめかみの横に置き、

切っ先を相手に向けるような霞構えに構える。

鈴音は普段通り大通しを八相に構えた。

「花鈴のおかげで真空波の対処法は分かった…妖力をぶつけて散華させる。」

「それで大丈夫っぽいよ、行こうかすーちゃん！」

花鈴が霞構えのまま大鼬に向かって突っ込み、少し遅れて鈴音も前に向かって走る。

『死ねえええええ!!』

大鼬が二人に向かって両腕を振るい、それぞれに真空波を放つ。

花鈴は霞の構えのまま僅かに体捌きを用いて斜めに身体を動かしつつ、姫斬りの刀身をほんの少し後ろに引き、真空波を斬ることなく後ろに受け流した。

鈴音は真っ向から大通しを袈裟に振るい、真空波を断ち切る。

動きが少ない分花鈴の方が先に大鼬に接敵する。

大鼬は焦りの表情を浮かべながら再度両腕を振るい、今度は真空波を二つとも花鈴に向けて放った。

首を狙った真空波が飛び、少し遅れて足元を狙った真空波が飛ぶ。

花鈴はほぼ立ち止まることなく、それどころか真空波に向かって飛びこむように前に向かって跳んだ。

上下段二つの真空波。

その隙間を身体を捻つてぐりぬけ、大鼬に向かって進む速度を落とすことなくその眼前に迫る。

『ひいー!』

「何が退魔士を恐れる必要がないってえ!!?」

花鈴が嗜虐的な笑みを浮かべながら大鼬に斬りかかる。

霞の構えから大鼬の左腕を狙って姫斬りを振り下ろした。

大鼬は慌てて後ろに向かって飛び退るが、花鈴が振り下ろし姫斬りは切っ先が地面を向くことはなく、途中でぴたりと制止すると、跳ねあがった。

跳ねあがった切っ先は突きとなり、大鼬の右腕の付け根に突き刺さった。

『がああッ!!?』

鮮血が舞う。

それとほぼ同時に、やや遅れていた鈴音が大鼬に接敵した。

鈴音は大通しの刃を反転させ、峰を大鼬に向けて構えると八相から渾身の袈裟斬りを放った。

「嘖ッッ!!!」

大通しが大鼬の左腕に食い込む。

鈴音は、間違いなく刃を向けていなかった。

しかし峰を用いた鈴音の渾身の一撃は大鼬の左腕の付け根の辺りに打ち込まれると、筋肉越しにその骨を砕き、あらぬ方向に腕を曲げさせる。

そのせいであたかも大鼬の肉体に大通しが食い込んだかのように見えたのだ。

「よつとー」

そこで花鈴が大鼬に突き刺さった姫斬りを捻りこんだ。

姫斬りの切っ先は大鼬の腕の付け根の骨の部分まで到達し、さらに捻ったことで周囲の靭帯を切り裂く。

靭帯を破壊されたことで大鼬は右腕を動かせなくなり、力の入らない腕をだらりとぶら下げながら後退する。

力の入らなくなった両腕を信じられないという様に交互に見つめ、先ほどの攻撃的な表情はどこえやら、怯え切った表情で鈴音と花鈴を見る。

『や、やめろ…お前ら俺たちを保護しなきゃいけないんだろ…だから。』

「安心しろって、だから殺しはしないよ。」

「止めてほしいと…あのカマイタチからも言われたからな。」

鈴音は大通しの刃を収めて懐にしまい込み、花鈴も姫斬りを自分の身体に収める。

しかし二人は怯えて後退る大鼬に向かって歩みを進めた。

花鈴は先ほどと同じく嗜虐的な笑みを浮かべ、鈴音はつまらなそうな落胆したような表情で大鼬を見つめていた。

『お、お前ら、何を――』

「まあ、下手したら死ぬかもしれないけど。」

「恨むなよ…。」

二人は言葉を放つと同時に前に向かって踏み込む。

「せえええやあぁッッッ!!」

花鈴のサイドキックが大鼬の顔面を、鈴音の掌底突きが大鼬の腹を、それぞれ打ち抜いていた。

ぐちゃっ、とおおよそ普通の打撃を放ったときには出ない音を響かせ大鼬は数メートル吹き飛び、石ころのように地面を転がると壁に衝突。

そこまでしてようやく吹き飛んだ大鼬の勢いは止まり、鼻と口から血を吐き出しながら倒れ伏した。

「…。」

「…。」

花鈴と鈴音はぴくぴくと痙攣までしている大鼬を見てお互い顔を見合わせる、やりすぎてしまったか、と肩をすくめる。

「まあ、妖怪だし、大丈夫だよねすーちゃん？」

「神域で捕まえる手間が省けた…と思おう。」

そう言っ互いに掌を合わせ、ハイタッチをする。

その一部始終を物陰から見守っていたカマイタチは震えあがっていた。

『お…おっかねえ…。』

見習いとは思えない強さの二人を目にして、間違えてもあの退魔士には悪戯をしないよう広めることをカマイタチは深く心に決めた。

## 24話 終結と黒幕

蠍螂坂はビルの屋上を渡り歩いて、いや、跳んでいた。

時には工事用の足場や窓の棧などの凹凸までも駆使し、目当ての屋上を探す。

その途中、不意に蠍螂坂の携帯が鳴り響いた。

「…!?!」

蠍螂坂は蜘蛛のように窓の棧に手をかけて身体を支え携帯を手にする。

相手は鈴音であった。

「…もしもし。」

『よかった、出てくれた蠍螂坂さん…。』

「…どうしたの?」

『私も遅れて商店街に着いたんです、そしたら残っていた一匹に襲われました。』

「…え…!?!」

鈴音はそこで今自分が置かれた状況を蠍螂坂に説明する。

カマイタチとの会話、異形の大鼬となったカマイタチとの戦闘。

『花鈴と一緒にだったので問題なく倒せましたが、カマイタチの話ではあと二匹いるみたいです…お気をつけて。』

「分か…った。」

蠍螂坂は通話を切り、顔をしかめる。

半ば同族の存在が被害に遭ったと聞いていてもたってもいられず出てきてしまったが、思わず仲間まで巻き込んでしまった。

別に今任務にあたっているほかのチームから救援を呼ばれたわけでも、なんでもない。

単なるワガママである。

「…未熟。」

独り言がこぼれる。

最初は同族を傷つけた犯人捜しの力になればと思ったが、まさか

その犯人まで同族だとは思わなかった。

今から蠮螋坂は同族を傷つける可能性がある。

しかし、もし他のチームが件のカマイタチを殺してしまうようなことになれば蠮螋坂はどうしようもない後悔をしていただろう。

生きてさえいれば自分のように人のために働き、素敵な仲間に出会うこともできる。

できることならば蠮螋坂は身をもってそれを伝えたかった。

改めて決意を胸に秘めながら、窓をから窓へと飛び移り、ビルの屋上へ上がってはそれらしき痕跡がないかを探した。

その時、不穏な気配を蠮螋坂は察知した。

「…神域!？」

神域を発動させた気配を感知し、周囲を見渡す。

見える範囲の中で一つ、条件に当てはまりそうな配管と機械だらけの大きなビルの屋上があった。

蠮螋坂は跳ぶ。

願うことなら相手を止められることを祈って。

秋奈町の商店街近くのビル、その屋上。

上下に縦横無尽に張り巡らされた配管とあちらこちらに配置された壁の様な機械に四苦八苦しながら、二人の八咫鳥のメンバーが背中合わせで立っていた。

一人は巫女服に身を包み、霊剣を手にした中肉中背の人間の少女。

もう一人は黒いスーツに身を包み、頭から犬の様な耳を生やした、

一見小柄な少女に見える存在であった。

巫女服の少女は追っていた大鼯の真空波によるものだろうか、巫女

服には引き裂かれたような跡とほつれがいくつか見られ、顔や手のあちこちに切り傷があった。

「あのカマイタチ…思ってた以上に強いです、雷獣…助けを呼ぶ必要があるかもしれません。」

「大丈夫、あの一匹だけなら私たちだけでどうにかなりますよ、巫女。」  
犬の様な耳を生やした少女は雷獣と呼ばれ、巫女服の少女は姿そのまま巫女と呼ばれた。

巫女は霊剣を正眼に構えていた。

雷獣は素手のまま両拳を顔の前あたりに上げ、軽く前の足を上げて後ろ足にやや重心を載せて構える。

互いに周囲を警戒する中、不意に空気が動く感覚を二人の皮膚がとらえた。

「巫女！」

「分かっていますー！」

雷獣と巫女がその場から飛び退く。

二人が飛び退いた場所を真空波が通り抜けていった。

機械の物陰から突如飛び出してきた大鼬が真空波を放ったのだ。

『へへー避けたところで——』

真空波を二人は無傷で回避する。

しかしその真空波が向かった先はボイラーに繋がる配管であった。

「キャッ!？」

「巫女!!」

真空波が配管に切れ目を入れたことで一気に蒸気が吹き出し、それは近くにいた巫女に襲い掛かった。

思わず巫女が目を閉じてその場から離れる。

その隙を狙って大鼬が再度真空波を放とうとする。

『隙ありー!』

「くう!!」

雷獣が咄嗟に巫女の前に向かって駆ける。

真空波が巫女に届く寸前、雷獣が庇う様に巫女の前に立ち、妖力を纏った拳を眼前に向かって振るう。

その拳には雷獣という名前の通り、妖力と共に雷が纏いついていた。

破裂音と共に雷が弾ける音が鳴り響き、真空波が散華する。

「すみません、雷獣！」

「気にしないで巫女、それより来ますよ！」

流れをつかんだとみた大鼬が二人の前に降り立ち、両腕を振るって至近距離からの真空波を二人に放った。

雷獣は真空波をくぐるように前に向かって前転して避け、大鼬に近づく。

巫女はまだ視界が少しぼやけるのか咄嗟に霊剣を盾にして受け止めた。

目の前で真空波が弾けた衝撃で巫女の傷がさらにいくつか増える。

大鼬はさらに追撃の真空波を放とうとするが、雷獣が大鼬の前に立つ。

「させません！」

雷獣が雷の纏った右ミドルキックを放つ。

大鼬は真空波を放とうと妖力を籠めていた左腕を防御に使い、雷を受け止めた。

『チッ!!!邪魔なんだよ!!!』

大鼬が雷獣に向け、鋭いカギ爪が生えた右腕を振るう。

雷獣は身体を大きく反らせてそれを避けつつ後退った。

距離が開いたところに大鼬が真空波を出そうとするが、そうはさせじと霊剣を構えた巫女が大鼬に飛びかかる。

「はああッ!!」

『クソ!!』

二対一。

数の有利を武器にどうにか流れを取り戻した巫女と雷獣は一気に大鼬を攻め立てる。

「そこお!!」

「ていい!!」

『ぬがっ!?!』



至近距離で放たれた真空波を巫女が霊剣で切り裂き、そのタイミン  
グを狙って雷獣が大鼬の腹にミドルキックを放った。

雷を纏った一撃をまともに受け、たまらず大鼬が後退って膝をつい  
た。

「勝機です巫女！攻め立てましょう！」

「ええ、行きますよ——!?!」

雷獣が前に向かって踏み込み、それに続こうとした瞬間、巫女は思  
わず足を止めた。

ある感覚が、頬を撫でたのだ。

空気が一気に何かに引き込まれる感覚。

それは前から後ろへと向かって引つ張られていき、巫女の髪をなび  
かせた。

「いけませんー！らいじゅ——きやああああ!!」

「ツツ!!? 巫女!!!」

突如背後から、前にいる大鼬は放てないはずの真空波が雷獣に向  
かって放たれた。

巫女は雷獣の背中を庇う様にその身を盾にする。

いきなりのことで、霊剣を盾にする余裕もなかった。

真空波は巫女服を引き裂き、その背中を抉って血肉を飛び散らせ  
た。

腰から少し上の辺りに、切れ味の鈍い刃物の刃を無理やり潜り込  
めたような歪な傷が刻まれる。

「巫女!? 巫女!!!」

「油断…しました…もう一匹…。」

『へへへ…ここまで誘い込んだのは…戦いやすいつてだけじゃねえん  
だぜ…。』

蹴りを受けて膝をついていた大鼬が笑みを浮かべながら立ち上  
がる。

『さて…やってくれた分…返させてもらおうか…!』

「くっ…!!」

雷獣は巫女をその場に寝かせ、庇う様に前に立つが絶望的な状況に

悲痛な表情を浮かべる。

目の前に物陰に潜伏していたもう一匹の大鼬まで姿を現した。

先ほどから打って変わって一対二。

しかも巫女を守り切らねばならない。

やはり応援を呼ぶべきだったと後悔したが、今そんなことを考えてもどうしようもない。

しかしそんなどうしようもない後悔が幾度も頭を巡るほど、雷獣は今の状況を打破する手立てが浮かばなかった。

だがその時、突如として神域が揺らぐ感覚が周囲に流れ込んだ。

「なんだ…!?!」

『へへ…ならいいこと教えてやる…俺達には仲間がもうひと——』

「殺<sup>シキヤア</sup>ああ!!!」

『りい!!!?』

突如!として神域を破って入り込んだ黒い影は配管の上を風のように駆け抜け、雷獣の目の前にいる大鼬に強烈な跳び蹴りを放った。

大鼬は配管に叩きつけられ、折れ曲がった配管の隙間から漏れ出た高温の蒸気をあびせられその場でのたうちまわる。

『ぐおおおおおおお!!?』

『きよ、兄弟!?!』

苦しむ大鼬にもう一匹の大鼬がたまらず声をかけてそばに駆けよる。

「あ…貴女は…?」

「八咫総合事務所…蠟螂坂…。」

突如降り立った黒い影、蠟螂坂はサングラスをかけなおしながらそう伝える。

「ここは…僕が引き受ける…。」

「で、でも…!」

「邪魔…。」

先ほど蒸気を浴びた大鼬が立ち上がるのを視界に収めながら蠟螂

坂が短く事実を突きつける。

大鼬は一部が火傷によつてただれてしまい、顔の一部まで及んだ火傷をおさえながら蠍螂坂に殺気のこもった視線を向ける。

『て、てめえ…殺す！』

顔に火傷を負つた大鼬——火傷顔が真空波を蠍螂坂に向けて放つたが、蠍螂坂は妖力を籠めた掌打で難なく弾き飛ばす。

「僕の心配より…その娘の心配…」

余裕を持った様子で、しかし目の前の敵から視線を外さず蠍螂坂は雷獣に言う。

雷獣は迷いの表情を見せながらも重傷を負つた巫女を見て、蠍螂坂の言葉に従うことを決めた。

「ツツ…はい…すみません…！」

雷獣が巫女を担いでその場から離脱を始める。

『させるか！』

『おうよ兄弟！』

離脱する雷獣に向けて火傷顔と大鼬がそれぞれ真空波を放つたが、それを蠍螂坂が見逃すはずがない。

蠍螂坂は真空波の前にその身を置くと妖力を籠めた双掌打を宙に向かって放つ。

その一撃によつて真空波は掻き消えてしまった。

そして普段通り腰を落とし、前の拳を鼻先に、後ろの拳を鳩尾の前にそれぞれ置き、重厚な雰囲気身をまとつて構える。

しかし表情にはどこかもの哀し気な、サングラスの裏にある複眼の瞳に、暗いものがあるように感じられる。

「…。」

『なんだよ…お前え!!!』

「…止めたかった…こうなる前に。」

『ああん!?!』

蠍螂坂が一人呟くように言う。

「でも…もう止められない…。」

先ほどの傷ついた巫女を見た蠍螂坂の脳裏に、想像したくもない光

景が思い浮かぶ。

もし傷ついたらのが鈴音だったら、花鈴だったら、狂骨だったら、化け猫だったら、ユリカだったら。

考えたくもない光景が脳裏に浮かび、蠅螂坂の表情が悲から怒へと変わっていく。

「僕は…君たちを…」

一人呟く蠅螂坂に対し、大鼬が真空波を放つとその後にくよくように火傷顔が駆け出す。

「許せない…!!!」

蠅螂坂が後ろ脚を前に送りながら膝蹴りを放ち、真空波を散華させる。

そのまま膝蹴りに出した足を降ろさず、駆け寄ってきた火傷顔に蹴りを放った。

火傷顔は蹴りによって後ろに弾き飛ばされるが、ただでは止まらず蠅螂坂に真空波を放った。

蠅螂坂は足を降ろしながら拳で突きを放って真空波を打ち消し、火傷顔に向かって一気に踏み込む。

火傷顔がカギ爪を振るって近寄せまいとするが蠅螂坂の踏み込みの速度は火傷顔の想像を超えていた。

「覇ッ!!!」

端、と踏み込みと同時に音が響く。

綺麗な音であった。

なんの淀みなく地面を踏む、無駄のない音色。

芸術的ときえ感じるような響きを生みながらも、その踏み込みはビルの屋上を軽く震わせる程の力を秘めていた。

中段の肘打ちが槍のように火傷顔の腹に突き刺さる。

『ぐえふああ?』

口から唾液と胃の中身をまき散らしながら火傷顔が吹っ飛ぶ。

『兄弟!? くっそお!!』

火傷顔を庇う様に大鼬が真空波を二発放ちながら接近してくる。首に向かって一つ、腹に向かって一つ。

蠍螂坂は手首から先を拳ではなく指を三本突き出し、鳥のくちばしのようにする握りに構えなおし、カマキリの鎌を作った。

そして鎌を上段から下段に、刀を振り下ろす様に一気に振り落とすと一度に二つの真空波を打ち消して見せる。

真空波に続いて接近してきた大鼬が首に向かって薙ぎ払う様にカギ爪を振るってきたが、蠍螂坂は地面に膝をつくように姿勢を低くし、得意の足払いを放った。

大鼬は前足を打ち払われバランスを崩す。

蠍螂坂は足払いの勢いそのまま身体を回転させ、強烈な後ろ回し蹴りを大鼬の首筋に叩き込んだ。

『ぬぎゃっ!?!』

大鼬は身体をふらつかせながら地面に尻もちを着いてダウンする。

そして蠍螂坂は視界の隅で火傷顔が立ち上がるうとしていているところを捉えていた。

蠍螂坂が駆ける。

真空波を出させる前に蠍螂坂は立ち上がったばかりの火傷顔の懐に潜り込み、ダメージの残っているはずの腹に中段突きを放つ。

『ぎひっ……この!!』

蠍螂坂に向かって火傷顔が右腕を振るった。

蠍螂坂は軽く腰を落としながら斜め前に体捌きを行いつつ左手で右腕を弾く。

そして右手で鎌を作り、火傷顔の右腕に引っ掛けるようにして捕えながら前に踏み込み、左の肘を顔面に突き込んだ。

『グぎえッ!?!』

牙がいくつか叩き折れた感触が蠍螂坂の肘に伝わる。

強烈な衝撃を受けて火傷顔は一瞬意識が飛んだように白目をむき、口から折れた牙を吐き出した。

しかし蠍螂坂の攻撃は終わらない。

右手で捕えていた右腕を制したまま、左手で腕の付け根を掴み、固定する。

そして固定された右腕の肘に、容赦ない膝蹴りをぶち込んだ。

ぶちり、と音がする。

くの字に曲がったトリの手羽先を反対側にむかって折り曲げた時の音。

それを何倍にもしたような鈍い音を、蠍螂坂は耳にしていた。

『ぎゃあああああ!!』

火傷顔の悲鳴が響く。

その悲鳴を聞いて大鼬が起き上がった時には、すでに火傷顔の右腕は普段とは真逆に折れ曲がっていた。

大鼬は兄弟分を助けるべく真空波を放とうとするが、その腕がぴたりと止まる。

蠍螂坂が火傷顔の後ろに回り込み、首根っこを掴んで盾にしていた。

非情ともいえる手段を取った蠍螂坂の瞳には、とてつもない、まだ収まらない怒りの炎が爛々と煌いているようだった。

蠍螂坂が盾を手にしたまま淡々と歩みを進める。

その姿に大鼬はたまらず戦意を喪失し、そのばにへたりこんだ。

『悪かった！俺が悪かった！もうおとなしく捕まる！だからもう何もしないでくれ!!』

蠍螂坂は歩みを進める。

『悪かった！悪かったって!』

歩みを進める。

『ごめんなさい！ごめんなさい!!』

歩みを進める。

『許して…ゆるして…。』

盾を投げ捨てる。

『死にたく…ない…いやだ!』

拳を構える。

『いやだあああああ!!!!!!』

拳が放たれ——

「蠍螂坂さん!!」

不意に、屋上のドアを破る音が聞こえ、蠓螂坂を呼ぶ声が響いた。その声によつて蠓螂坂は拳を止め、ドアの方を振り向く。

「すず…ね…。」

「はあ…はあ…間に合つた。」

息を切らせながら鈴音が言う。

どうやら階段を使つて屋上まで駆け上がってきたらしい。

少し遅れて花鈴も屋上に姿を見せた。

「つつかれたあ…つて、もう終わつてるじゃん！」

花鈴が屋上の様子を見て声を上げる。

ボロ雑巾のように投げ捨てられ火傷に侵された一匹と完全に戦意を喪失した一匹。

花鈴のその言葉に我に返つたように蠓螂坂は息を吐き、頷く。

「ああ…終わった…よ。」

「流石蠓螂坂さん…ですね…助け…要らなかつた…。」

「いや…お陰で…助かつた。」

蠓螂坂が拳を降ろす。

同時に死の危機に瀕した緊張が一気に解けたからか、大鼬はその場で気絶し、倒れこんでしまった。

「ありがとう…鈴音、花鈴。」

八咫鳥のある研究施設。

そこに一人の巫女が運び込まれた。

任務の最中に背中に深手を負い、一命をとりとめたものの脊椎の一部を損傷。

下半身に麻痺が残ってしまい、彼女は車椅子での生活を余儀なくされてしまった。

今は麻酔で眠った状態で搬送用の寝台に寝かされ、施設の中を移動している。

その傍らに居るのは、一人の妖怪。

犬の耳の様なものを頭から生やした彼女は懸命に巫女を治してくれと、ある人物に頼み込んでいる。

腰まで伸ばした黒い髪を束ねた、中肉中背の美青年。

彼は柔和な笑みを浮かべながら妖怪の肩に手を置く。

「大丈夫、彼女のごことは私に任せなさい。」

その言葉に妖怪はまるで神をあがめるかのように青年の前にひれ伏した。

「ただ、少しばかり特殊な治療を施すんだ、だから——」

青年の柔和な笑みの中に、微かな狂気が浮かび上がる。

「少しばかり彼女が変わってしまったっても仕方ない、分かってるよね？」

妖怪はひれ伏したまま、青年の言葉を受け入れる。

以下の彼女によって、青年は神に等しい。

そんな神の言葉を受け入れないなんておかしいではないか。

すべてを青年に任せた妖怪は、施設のラボへ搬送される巫女を見送る。

巫女が搬入されたラボ。

青年はまるで新しい玩具を手にした子供のように純粋な、恐ろしいまでに嬉々とした表情を浮かべた。

「ふふふ…あのカマイタチ、少しばかり私の手を加えて野に戻したが…予想以上の材料を持って帰ってくれた。」

研究素材となる垢舐めにぬりかべの様な妖怪、重傷を負った八咫鳥の巫女、そして報告ではその身を変異させたというカマイタチ。

そのカマイタチはこの施設に搬入されてくる手はずになっている。



彼らの変異した肉体、その一部をこの巫女に移植したらどうなるか。

下手をすればこの巫女は還らぬだろう。

上手くいったとしても肉体が妖力によって変異することは確実。

しかしそれがどうだというのだ。

これは神へ近づくための道程の一部。

そのためならば何も惜しい存在ではない。

「では、始めようか。」

青年——安部晴明は巫女の傷口を見て笑みを浮かべる。

妖怪の脊髄を人間に移植するという狂気の所業を前に、晴明はにこやかな笑みを浮かべていた。

## 25話 休暇

晴れた空、白い砂浜、青い海。

照りつける日光が白い砂浜を反射し、思わず目をつむりそうになつてしまふ。

潮の香りに満ちた風が心地よく頬をなでて通り過ぎてゆく。

海水浴をするには最高の環境であった。

秋奈町から遠く離れた、帝都の海沿いの町。

周囲は多くの海水浴客でにぎわっており、家族連れから学生の集まりらしき集団、地元民らしきクラブな恰好の人間まで様々だ。

もしここでビールを片手に塩辛いソースにまみれた焼きそばなんて食べられたら夢の様であろう。

「ぜえぜえぜえ…今のは私のが早かったでしょ化け猫…！」

「いやー！私の方が早かったわね花鈴!!」

見れば花鈴と化け猫が無邪気にも水泳対決をして遊んでいる。

花鈴は赤いシンプルなビキニの水着姿、化け猫はマリンスブルーのパレオ付きのビキニ姿だ。

健康的で非常によろしいと思う。

ああいう元気な姿を見ると自分も爽やかに汗を流してその後にビールを思い切り飲みたくなってくる。

「…なにあれ、暑苦し。」

その姿を少しばかり冷めた様子でユリカが眺めている。

ユリカは露出の比較的少ない白地に花柄が描かれたワンピースタイプの水着に身を包み、スマホ片手にパラソルの下でチェアに座っている。

傍らには飲み物を置けるテーブルがあり、上にはジョッキが置かれ中にはトロピカルフルーツジュースが注がれていた。

許されるのなら自分もあの隣に並んで座り、のんびりとカクテルで

も傾けたい気分である。

生のライムが絞られたジントニツクなんて最高じゃないだろうか。

「…イシダイ…丸焼き…か…どうしよう…。」

蠅螂坂は何やら魚を片手に、車から炭火焼き用の道具を取り出して準備をしている。

蠅螂坂は明るい緑色をしたチャイナ風の水着だ。

高身長でスタイルの良い彼女が着るとエレガントな雰囲気醸し出している。

その手に持たれたのは大きな魚が一匹と、小さな魚が数匹。

どれにもモリらしきもので突かれたのだろう穴が空いており、おそらく蠅螂坂はこれらを自分で突いてきたのであろう。

よくもまああんな水着姿で漁が出来たものだ、流石は妖怪といったところだろうか。

しかし炭火焼きでそれらを調理するのは危ない、絶対にビール、いやとにかくお酒が欲しくなる。

「せいッ!!」

不意に砂浜の一角で歓声が上がった。

その中央に立っているのは鈴音。

鈴音はスポーティーな黒いノースリーブと短パンのラッシュユガード姿だ。

耳を澄ましてみれば“すげえ!もう何人抜きだ!”“この浜の大関がやられたぞー!”なんていう声が聞こえてくる。

鈴音はたまたま開催されていたビーチ相撲の取り組みに参加しているようだ。

どうやら男女問わずに叩きのめしているらしく、非常に盛り上がっている声が聞こえる。

あー!あの盛り上がりにまぎってさー!ビールでも飲んだら最高だろうなー!

「おいバイトお!!焼きそば二つだ!!超特急でな!!」

「はーい!!まかされて!!」

そんなみんなを眺めながら私、狂骨はひたすらに焼きそばを作つて

いた。

華やかな水着姿とは程遠い薄汚れた長袖シャツとズボンを、この肉体が人工的なものだと思えない程度にまくりつつ身に着けている。

焼きそばだけじゃない、合間を見てカレーを混ぜ、ラーメンの具を用意しておき、バックヤードからラムネやビールを運ぶ。

海の家バイトを必死にこなしていた。

「なんで私だけこんなことに……」

氷水が張られた大きな水桶の中に、いずれ誰かの手に渡るであろうビールを恨めし気な目で眺めつつ入れていく。

狂骨だけがこのようなことをしているのにはしっかりと理由があった。

時は数日前にさかのぼる。

八咫総合事務所のメンバーは事務所のオフィスで普段通り、思い思いの日常を過ごしていた。

しかし狂骨のみがリーダー同士の会議があるとの理由で出かけており、姿はない。

その隙を見て鈴音はテーブル周りの酒瓶やごみの片づけをしていたが、狂骨は昼過ぎにはもう事務所に帰ってきた。

「ただいまー！みんなに朗報だよー！」

明るい声色がオフィスに響いた。

その手には何やら茶封筒が握られており、表情には満面の笑みが浮かんでいる。

「どしたのよリーダー、良いお酒でももらったの？」

「いや違うよ化け猫!? そうじゃなくて——」

「じゃあ、飲み比べの招待券とか？」

「あの、花鈴ちゃんそうじゃなくて……」

「ついに酒造会社にも転職するの、寂しくなるじゃん。」

「いや違うよユリカちゃん!？」

「良い洋酒なら…使わせてほしい…。」

「蠍螂坂!?君まで!？」

「まあ…皆さん、そこまでにしましょう…。」

鈴音が皆を諫める。

その姿にまるで天使でも見るかのような目線を狂骨は送るが、鈴音は冷ややかな目で狂骨を見つめ返す。

「それで、どんなお酒の話題なんですか？」

「違おううう!!私はお酒以外にも喜ぶことあるからああ!!！」

そう言つて狂骨は茶封筒の封を勢いよく破くと、中身をテーブルにさらけ出した。

「にやによこれ…えーつと」大久保リゾート招待券”…つてめっちゃいいリゾートホテルじゃない!？」

「そうだよ!海沿いにある大久保リゾートの無料招待券さ!」

「なにになに!?!海にただで遊びに行けるの!？」

化け猫と花鈴が目を煌かせて封筒の中身、リゾート施設への招待券を眺める。

それを見て狂骨は得意げに笑つて見せた。

「いやいやいや、最近八咫総合事務所は活躍してるし…この程度のもののもぎ取つてくれるわけよ。」

「最近の活躍…ですか。」

鈴音がその言葉に少しばかり首を捻る。

たしかにユリカが引き起こしたビルの一件の解決にくわえ、化け猫が解決したペットの殺害事件と蠍螂坂が活躍したカマイタチの暴走事件。

ここ数ヶ月で3つも事件を解決してはいるが、後の二つは正式な任務ではない事柄であった。

疑問符を浮かべる鈴音に狂骨が答える。

「ふふふ、化け猫が人間に貢献したのは間違いないし、蠍螂坂に至っては救援が遅れていたらメンバーが死んでいてもおかしくなかったからね、清明さまがそこを汲んでくださつて特別休暇として与えてくれ

「たんだよ。」

「清明様が…ですか…。」

鈴音は少しばかり顔をしかめる。

このところ八咫鳥に関しては、ツツジの話に加え、少しばかり不穏な気配を感じている。

それを統括する清明の招待というところがすこしばかり嫌な予感がした。

鈴音は今回は少しばかり気を抜けそうにないことを覚悟する。

その表情を狂骨はまだ鈴音が納得がいかないように思っていると感じたのか、言葉を続けた。

「まあたしかに勝手にやった行動だけども、一番大事なのは人を護ることだから、結果オーライってことだよ。」

「そうそう、そんなに固くならなくていいじゃんすーちゃん！」

「ああ、いや…そうですね、すみません。」

変に水を差すわけにもいかないかと鈴音は引き下がる。

しかしもう一人、招待券の内容を眺めて顔をしかめる者がいた。

「あれ…これ…。」

ユリカが招待券の内容を見て首をかしげている。

「…なあ狂骨さん、これなんだけど。」

「んー、どうかした？」

「よく見たら、宿泊費が無料なだけで中の施設とか使おうと思ったらお金要るやつじゃん。」

「え？」

狂骨が慌てて内容を確認する。

たしかによく見れば宿泊費が無料になると言うだけで、中の施設に関しては有料での使用になると書かれていた。

「ま、まあそこは経費で落として…。」

「福利厚生で落とせるかなあ…この事務所、接待用とか理由つけて高い酒経費で落したりしてたでしょ…目つけられてんだよね。」

「なんだって…。」

「てか、この招待券持ってきてくれたのは良いけど狂骨さん、最近仕事

してないよね。」

「ぎくう!？」

狂骨がユリカの言葉に痛いところを突かれたと目を見張り、目線を泳がせた。

「ほ、ほら…今日みたいに会議に出席とか…。」

「本部からの連絡で半分くらいは寝てるって聞いてるけど、次から私に出席してくんないかって言われてるし。」

ユリカがスマホをちらつかせながら言うと、まさかの言葉に狂骨は顔を青ざめさせた。

「わ、私そんな話は一言も…。」

そこで化け猫が追撃をかける。

「リーダーそれどころかさあ、鈴音ちゃんの追試沙汰巻き起こしたり、前のカマイタチ事件でも爆睡してたり、最近は迷惑ばっかかけてない?」

「す、鈴音ちゃんの件に関しては化け猫も同罪だろう!? 私だけが悪くない!!」

「だまらっしやい!他にも余罪があんのもリーダーには!!!」

圧に押され、狂骨が思わず後退る。

「な、なんだよ二人して…どうする気だ!？」

追い詰められた狂骨を化け猫とユリカがにたにたとした笑みを受けべながら見つめる。

そしてユリカはスマホを操作しながらなにやら化け猫と少し話をすると、ある画面を突きつけた。

「今調べただけどき、この海辺、大久保リゾート以外にも一般人向けの旅館とかもあるんだって。」

「つーまーりー、セレブ向けじゃない一般向けの海の家とかも普通にあるのよリーダー。」

お金の話題から、海の家の話。

狂骨は嫌な予感に背筋を震わせる。

「嫌だ!私は働かないぞそんなところで!!」

「うるさい!みんなの交通費くらいは稼いできにやさい!!」

「一日働いても交通費くらいにしかないじゃないか!!私は嫌だ!!  
それくらいポケットマネーで——あつ。」

そこまで言つて狂骨の顔がさらに青ざめた。

「あの…ユリカちゃん…いやユリカ様。」

「なんですか?」

「これ…経費で落ちないですか?」

狂骨が出したのは、八咫総合事務所宛に綴られた領収書。

そこには六桁になる料金が書かれており、有名な酒造メーカーの名前が書かれていた。

「いやーその…美味しかったです。」

間もなく狂骨にユリカの雷が落ちたことは言うまでもない。

そんなこともあり、狂骨は罰として一日海の家でバイトをさせられることになった。

用意されたリゾートの招待券は二泊三日の内容であり、そのうち一日をバイトに費やされることとなった。

因みに宿泊以外の施設の利用料金は福利厚生費ということどころか経費で賄えるようユリカが交渉した。

その点も含めて狂骨はすっかりユリカに頭が上がらなくなっている。

海の家は天気が良いこともあり大盛況で、狂骨もあちらこちらに大忙しであった。

「なに、がんばってんじゃん。」

そんな様子を見物に来たのか、ユリカが小銭を片手に海の家を訪れる。

「おかげさまで大忙しだよ!注文は!」

「ビール一本、冷えてるやつ。」

「んぐううううう!はい!400円!!!」



「えー、まけてよ。」

「まけないよ!!!」

べー、と舌を出す狂骨を見てユリカは満足そうに笑みを浮かべる。そして受け取った缶ビールをその場で開け、照りつける日差しの中それは美味しそうに傾けながら去っていった。

「くううううう!!!」

その後ろ姿を恨めし気な目を向けながら見送ったところで、店主から声がかかった。

「おい、姉ちゃん！昼時も済んだし休憩してきな！」

「いいの!? やったー!!」

狂骨は性別が判別しにくいが一応女性扱いを受けていた。

普段のきつちりした黒スーツ姿と違うせいか、中性的な美人といった風に受け取られている。

そこには美人の方がウケがよさそうだという店主の願望も入っているのかもしれないが。

「ただし飲むんじゃねえぞ…。」

「は、はは…わかってますよ。」

釘を刺す店主の言葉に狂骨は肩を落としながらも小銭をレジに放り込み、ビールの代わりに気を紛らわせるためラムネを手にとった。財布の中身が乏しい狂骨にとってはこれも少しばかり辛い出費である。

それも自業自得であったが。

「ンツンツ…くうく染みる！」

ラムネを開けて喉に流し込む。

疲れた体に甘みと炭酸の爽快感が染みわたり、元気が出てきた。

ラムネを片手に砂浜を歩く。

まずは自分たちの荷物が置かれたパラソル近くに足を運んだ。

パラソルの下で優雅に缶ビールを傾けるユリカが狂骨に視線を向ける。

「なに、サボり？」

「違うって！休憩！」

「そう、じゃあある意味タイミングよかったかもね。」

ユリカがそう言つて指を差す。

その先では蠋螂坂が炭火を使つて突き立ての魚を料理していた。魚の種類に関しては詳しくないが、丸焼きにした大きめの魚にニンニクの香り漂うアクアパツアやアヒージョ、染みでた出汁の香りがたまらない煮つけの匂い。

蠋螂坂も新鮮な素材を前に気合が入っているらしく、真剣な目で火加減を見ていた。

夏の炎天下の中だというのに、その熱気がたまらなく食欲をかきたたせてくる。

休憩中に調理が終わることを祈りつつ、邪魔をしないようにその場を立ち去つた。

砂浜をまた歩いていると突然目の前の砂が大きく跳ねあがつた。

「うわ!？」

思わず狂骨が顔を覆い、顔に張り付いた砂を払って目の前を見ると見知つた顔が二人いた。

「にやつはははは!!ビーチフラッグ対決は私の勝ちね!身軽さで私に勝てる訳ないわよ!!」

「むっかつく!!遠泳では私に負けたくせにこのニコチン女!!」

「にやんとでもいいにやさい!!にやはははあ!!」

花鈴と化け猫が今度はビーチフラッグで対決していたらしく、そこに狂骨が巻き込まれかけたらしい。

「ちよ!?!危ないよ二人とも!!」

「あーごめんごめんリーダー、てかなに、サボリ?」

「休憩中だよ!」

「へえー、まあサボりならビール持つてるだろうから本当か。」

「判断基準はそこなの!？」

あんまりな言われように狂骨は頭を抱えた。

恐ろしいまでに自分に対する周りの評価が低くなっていることに今更ながら自覚したのである。

「まあいいんじゃないの、今からすーちゃんの大一番始まるみたいだ

し、見に行ってみたら？」

「あくビーチ相撲やつてるみたいだね鈴音ちゃん、花鈴ちゃんは見に行かないの？」

「ははは、だってすーちゃんが負けるわけないし、万が一負けたら私が仇取りに行くけど。」

相も変わらずの姉に対する信頼感であった。

しかし鈴音の取り組みを観戦するのは面白そうだと、狂骨は人だかりのある方に足を向ける。

人だかりの数は結構なもので、特に地元民が盛り上がっているようであった。

「まさか飛び入りの…しかも姉ちゃんがここまで強いなんてな。」

「けどよ、さすがに横綱には勝てねえだろ。」

「しかしあの姉ちゃん普通じゃねえぞ…ひよつとしたら…。」

地元民らしき集団からそんな声が聞こえてくる。

人垣によって造られた円、その中央に堂々と鈴音は立っていた。

普段に比べて身体のラインがしつかり浮かび上がっている鈴音の肉体は他の鍛えているらしき人間と比べても際立っていた。

単純に筋肉の量で言えば鈴音より多い人間は周囲に少なくはない。

しかし筋肉のつき方が身体に深くまとわりつくように、分厚くついている印象を受ける。

それはたとえるならば日本刀の様な肉体と言えよいであろうか。

粘りのある心金を幾度も鍛え、丹念に職人が皮金を包み込んで造りこみ、一つの芸術とさえ認められるあの造形を生み出す。

鈴音の肉体はまさにそういったものであった。

そして鈴音の前にこの浜の横綱が現れる。

相手は大柄な男であった。

海パンの上に柄シャツを羽織り、首には金のチェーンネックレスを付けている。

背は百八十センチ、体重はおそらく八十五、六キロほどだろう。

ただ筋肉だけでできた重さというわけではなく、腹回りにはでっぷりと脂肪がのっている。

一時期まで鍛えていた身体の上に不摂生な生活で脂肪がたまった、そんな身体つきだ。

しかしその肉体から発せられる圧力は強い。

普通の人間が道端でこの男とすれ違うと、間違いなく道の隅に寄って目を逸らすか、人によつては道を変えるかもしれない。

堅気の人間とはいいがたい威圧感があった。

鈴音は一切臆さない。

正面から男を見据え、無言で仕切りの姿勢を取った。

その度胸に男は好感を覚えたらしい。

「すげえ度胸してるな姉ちゃん、お手柔らかに頼むぜ。」

「どうも……。」

鈴音は男の言葉に短く返す。

その中には少しばかりの失望の様な感情が含まれていた。

この男も、本気ではないなということを理解する。

どうせこの場で鈴音に負けても女相手だから手加減した、遊んでやったと言いつくすのだろうか。

そんな考えが鈴音の闘志に火をつける。

狂骨はその様子を見て苦い顔をしていた。

「あー…あの男…負けたね。」

勝負はあつという間であつた。

取り組みが始まると男は鈴音の首に向かって右手を伸ばす。

男の右手が鈴音の首にかかったところで、鈴音は首を曲げて右手を抑つつ左手で肘を押し上げ、関節を極めた。

突如肘に走る痛みにより男が反射的に腕を捻って逃れるところを鈴音は前に向かって踏み込み、逃れる動きに合わせて腕を捻り上げた。

脇固めと呼ばれる、鹿角流固有のものではない基本的な関節技である。

男はあつさりと膝をついてしまった。

無理に立ったまましていると、肩の関節が外れてしまう。

痛みから逃れるために反射的に膝をついてしまったのだ。

あまりにもあつさりとした決着に、一瞬人垣を築いていた見物客た

ちもほかーんと口を開けていたが、ここではちぱちと拍手が鳴った。狂骨が一人、拍手を送ったのである。

それを機に大きな歓声が上がった。

「うおおー！すげえぞ姉ちゃん！」

「横綱が敗れたー！」

鈴音は人垣の中に狂骨がいたことに気づき、小さく会釈する。

狂骨も小さく手を挙げて返すが、そこで鈴音に敗れた男が立ち上がった。

「は、はは…いいじゃねえか姉ちゃん、もう一回やらねえか。」

男の顔には笑みが浮かんでいる、が、その目は笑っていない。

どうやら人前で膝をついたことが相当プライドを傷つけられたらしく、今度ばかりは手加減しないと再戦を持ち掛けてくる。

「…いいですよ、私は。」

「おう、ちよつとばかり手加減してしまったよ、あははは。」

「気にしないでください、私もなんで。」

鈴音は表情を変えぬままそう言つてのけると、再度仕切りの姿勢を取る。

男は鈴音の言葉に眉を大きくひくつかせ、目を見開きながら仕切りの姿勢をとった。

明らかに、キレている。

対して鈴音の表情は冷静そのものだった。

だがまたしてもあっけなく勝負はついた。

なんと男は鈴音に対し容赦なく右の張り手を放ってきた。

ビーチ相撲において、張り手は禁じ手である。

鈴音は突然の反則行為にもかかわらず、軽く張り手を身体を反らせて避ける。

男はさらに勢いに任せて左の張り手を放った

しかし男は次の瞬間に膝をつき、まるで宙を泳ぐように腕をばたつかせ頭から砂浜の上に倒れていた。

「え…？」

「あれ…なんで？」

その様子を見物客が茫然とした表情で見つめている。

狂骨は人垣の外からかろうじて一部始終を捉えていた。

鈴音は右の張り手を避けた後、左の張り手に対して張り手——というより左の掌底を下から男の顎に叩き込んでいた。

「怖いなあ……。」

狂骨が思わずそう呟いた。

そこで周囲の人間はようやく事態を飲み込んだらしい。

人垣の中から倒れた男に向かって何人もの柄シャツを羽織った若い男たちが駆け寄り、数人がかりで気絶した男を担ぎ起こす。

倒れている男同様に、堅気ではない雰囲気である。

地元の暴力団かそれに類する集団であろうことは明白であった。

その羽織ったシャツの下に何が隠されているかは言うまでもないだろう。

そして男たち数人が鈴音に対して詰め寄り、にらみつけた。

「お前、何したか分かってんのか？」

「…先に仕掛けられたから返した。」

「返したじゃねえんだよ！」

男たちが睨みを利かせて鈴音に近寄る。

鈴音は男たちから最低限の間合いを取るために数歩後ろに下がりがながらも、変わらず平然とした様子で受け答えをしていた。

その態度がさらに癩に障ったのだろう、男たちの怒りを増している。

「そういうことじゃねえんだよ！ 兄貴に恥かかせやがって、ただで帰れると思ってるのか!？」

「…でっ。」

「はあ!？」

「やるならやってもいいよ。」

だらりと腕をたらし、無造作に立った鈴音が言う。

その姿は一見隙だらけでありながら、とてつもない威圧感があった。

隙だらけの顔面に拳を放ったら、たちまちその腕をからめとられ壊

されるか、逆にこちらの顔面に拳が叩き込まれる。

そんなイメージが脳裏に浮かんでしまう。

鈴音に詰め寄る男たちはその不気味さに威圧され、思わず一步引いてしまった。

しかしここまでできては引き下がるものも引き下がれない。

「…。」

「…!?!」

男たちが一步下がったところで鈴音が逆に一步距離を詰めた。

まるで誘い込むように前に一步。

男たちが互いに目配せを行い、同時に襲い掛かるように目で合図を送ろうとした、その時だった。

「はーい!!やめやめ!やめ!!」

不意に、人垣の中から一人、鈴音と男たちの間に割って入るように声が響いた。

声の主はパンパンと手を叩きながら人垣の中から現れ、鈴音向かって目線を送る。

「鈴音ちゃん、そこまでにしとこうね、ここで喧嘩おっぱじめちゃうと後が大変だよ。」

「狂骨さん…。」

割って入った声の主、狂骨が明るい声を出して鈴音に声をかける。

そして男たちにも視線を向けると、頭を掻きながらぺこぺこ小さく頭を下げた。

「いや〜ごめんなさいね、この子やんちゃなところあるんで、ここは大目に見てもらえると助かります。」

「え、あ…なんだ…お前…!?!」

「保護者みたいなものですよ。」

男たちの問いに、ニコニコと笑みを浮かべながら狂骨が答える

その軽い雰囲気と笑顔に毒気を抜かれてしまった男たちは、突然の事態に困惑しながらも引き下がり切れない様子であった。

「い、いやお前!あ…そ…とにかく〜こつちもただでは引き下がれねえんだよ!」

「ただって言われても私財布の中に後500円くらいしかないんですけどうしようも…。」

「はあ!?小学生かお前は!？」

「…小学生らしく肩もみとかで許してくれないですかね?」

「許せるか!？」

漫才の様なやりとりを繰り返すが、周囲の人間は凍り付いた様子で狂骨と男たちのやりとりを見守っている。

当たり前だ、つい先ほどまで喧嘩寸前のつぴきならない雰囲気には包まれていたのである。

それが不意に軽い雰囲気変わったところで精神が追い付かないのだ。

だがそんな雰囲気の中、くすくすと笑いをこらえるような声が聞えた。

男たちは声を聞き逃さなかったのか、すぐに周囲に目を向け、睨みを利かす。

「今笑ったのはどいつだ!お前かあ!？」

男たちが手あたり次第に周囲に因縁をつけ始めた。

標的になった人間たちが必死に首を振る中、一人の女が人垣の間から現れる。

その姿を見たたん、男たちの血の気が引いた。

「あたしだよ、笑ったのは。」

くすくすと笑いながら、女が答える。

身長は百七十センチを軽く超える長身で、下地が黄色の派手な柄ビキニにこれまた派手な赤い柄シャツを羽織ったまだ年若い女。

顔にはいかつめのサングラスがかけられており、首には趣味の悪い金のネックレスがかけられている。

髪はウェーブがかかったロングヘアをこれまた派手な金色に染めていた。

とにかく派手な女だった。

「あ…姐さん…!」

「ここまでにしときな、これ以上恥かいたらたまんないよあたしは。」



男たちは女を姐さんと呼んだ。

どうやらこの姐さんは男たちより上の地位に立つものらしい。

姐さんは砂浜の上に綺麗な足跡を残しながら鈴音に向かって歩みを進め、その前に立つ。

「…何か？」

鈴音が少しばかり目線を上にあげて姐さんに問う。

姐さんにはこやかな笑みを浮かべ、そっと右手を差し出した。

「いやいやすまなかつたね、あの勝負は君の勝ちだよ、あたしが見届け人だ。」

穏やかな口調であった。

余裕のある笑みも、嘘の笑みではない。

しかし鈴音には見えていた、サングラスで隠されたその瞳の奥に獐猛さの様なものが爛々ときらめいていることに。

そんな面白い気配を感じ取りながらも、鈴音は変に手を出そうとはしなかった。

そして差し出された姐さんの右手に視線を向け、眉をひそめながらも小さく息を吐き、ぎゅつとその手を握り返した。

「…ッー」

握った途端、鈴音の膝から力が抜けがくと姿勢を崩した。

腕越しに重心を崩されたことを理解したときには、鈴音の身体は宙に浮いていた。

姿勢を崩されたところに腕をくの字に曲げるように関節を決められ、投げ飛ばされたのである。

ぼすつ、と音をたてて鈴音は砂浜の上に転がった。

砂浜の上であつたため鈴音の身体にダメージはない、もとより姐さんもダメージを与えようと思つて投げたわけではないようだった。

「…合気術…か。」

砂浜から立ち上がり、鈴音は呟いた。

今鈴音が受けた技は高等な合気術の技である。

合気術の妙技は腕を接点にした崩しにある。

相手を崩した瞬間、力が入らない状態の時に関節を極め、相手が反

射的に自分から投げられるように仕向ける技が多い。

鈴音も姿勢を崩された状態で肩関節を極められたことで相手に導かれるまま身体を動かし、投げられたのだ。

先ほどまで無敵を誇った少女が姐さんにあっさりとは投げられたことで周囲の人間が驚きの表情を浮かべ、柄の悪い男たちの目には喜ばし気な表情が浮かぶ。

「ごめんね、こうでもしないと面子ってのが立たないから。」  
「…分かってます。」

姐さんが立ち上がった鈴音にこそつとささやいた。

鈴音もそれを承知で頷く。

鈴音も何かあるとわかっていてわざと誘われるように右手を握りかえたのだ。

今回、鈴音が重心を崩されたトリック——いや、技術は以下のようなになる。

まず姐さんは差し出した右手を鈴音が掴む瞬間にほんの少し前に動かした。

その動かした手を追う様に鈴音が肩を少し引いて掴むと、姐さんは鈴音の動きに合わせて腕を少し捻り肩を押し上げて身体を浮かせる。

身体を浮かせたところで姐さんは右手を引いて鈴音の身体を引きこんで重心を崩し、膝から力を抜かせた。

これらの動作が一瞬で淀みなく行われたのである。

姐さんは男たちを率いて砂浜から引き上げるよう促す。

そして去り際に狂骨に対しても小さく礼を述べた。

「あんたも助かったよ、おかげであいつらを宥める面倒がなくなつた。」

「いや、こつちこそ助かりましたよ。」

「ふふ、もうここはあたしらのもんじやないからね、喧嘩沙汰起こすと大変なんだ。」

姐さんは最後に少しばかりさみしそうな口調でそう付け加えると、その場から去っていった。

男たちを率いるその背中ではまさに女傑といった印象で、立派な箔が

ついていた。

狂骨はその背を見送った後、鈴音の方に向き直る。

「もく鈴音ちゃん、見ててひやひやしたんだから気を付けなよ。」

「すみません、狂骨さん……。」

「まあいいや、そろそろ蠟螂坂が料理終わってるくらいだろうし、一旦戻ったほうが良いよ。」

「それはたしかに……戻ったほうが良いですね。」

「でしよく私も休憩時間が終わるまでに食べよう……って……。」

狂骨はそこまで言っただけで目の前に広がる海よりも青く、顔を青ざめさせた。

そして腕時計を確認し、とつくに空になったラムネの瓶を思わず手から落とす。

「……狂骨さん、これは捨てておきますから……。」

「はい……戻ります……バイト……。」

「うーみーはひろいーなーおおきーなー……。」

狂骨は一人、夕焼けで朱に染まる海を眺めながら缶ビールを飲んでいった。

ようやく海の家バイトを終え、皆が待っていてくれるはずだったパラソルの元に帰るとそこにはすでに誰もいなかった。

どうやら既に撤収してホテルに帰ったらしく、狂骨はパラソルが置かれていたであろう砂浜に残った跡をしばらく眺めた後、ふてくされるように砂浜を歩いていった。

すでに仕事着からいつもの黒スーツ姿に戻っている。

いくら夕暮れとはいえまだ暑さの残る夏には不似合いな格好であったが、狂骨にとってはこのスーツが体にすっかり馴染んでしまっ

ていた。

「ちくしょー…私が何をしたっていうんだ…何をしたって…」

一人さみしく呟くが、何をしたと言っても狂骨自身心当たりが多すぎて悲しくなってくる。

そんな行き場のない悲しみさえも包み込んでくれるような広大な海を眺めながら狂骨はまた砂浜を歩きだした。

しばらくすると砂浜は終わりを迎え、岩場に辿り着く。

波が岩にぶつかり、飛沫が飛ぶ様子やちよこちよこ動くヤドカリをしばらく無言で眺めていたところで不意に虚しさが募り、狂骨は缶ビールを煽った。

そして視界を岩場に戻すと、一人の少女が岩場にいることに気づく。

歳は中学生くらいであろうか。

おそらくは地元民であろう、褐色に焼けた肌に白いシャツと短パン姿という活動的な姿で、黒い髪を飾り気のないヘアゴムで二つ結びにしている。

ただ足にはいたビーチサンダルは他の服飾に比べて少し趣が違った。

少しばかり厚底で鼻緒の部分はレザーでできており、高級感漂うおしやれなものであった。

海沿いではなく街中で履いても違和感のないようなサンダルである。

活動的な見た目とは裏腹にその少女の表情はおとなし気で、どこか暗い雰囲気を漂わせていた。

少女は一人のはずであったが、海を——いや、海にいる何かを眺めるように視線を向け、時折手を振ったりもしている。

今の海には船が出ておらず、誰かが泳いでいるような訳ではない。まるで少女は目に見えない何かに対し手を振っているようであった。

「…。」

狂骨は少女の視線の先を眺めると、岩場の上に足を運び、濡れない

よう気を付けながらそつと少女の背後まで歩いた。

そして少女の背中越しに海に向かって視線を向ける。

すると突如ぼちやんと大きな音と共に海面が弾け、大きな飛沫が岩場に向かって上がる。

「きゃー!」

少女が突然の水しぶきに顔を覆い、思わず後ろに向かって倒れそうになるが、それを咄嗟に狂骨が支えた。

「うおつととと! 危ない!」

「え!? あ…誰…!?」

いきなり現れた狂骨に対し、少女が目丸くする。

狂骨は少女の背中から手を離すと軽く頭を下げた。

「あー、ごめんなさい、通りすがりの観光客です。」

「は…はあ…。」

「いやー何かいるのかなって気になって後ろからつい覗いちちゃってさ、邪魔しちゃったならごめんね。」

「いや…その…なんでもないの…：気にしないでください…：えつと…。」

少女は狂骨を見て、小さく眉を顰める。

おそらく狂骨が男性か、女性か分からず、お兄さんともお姉さんとも言えずに困っているのだ。

狂骨はそんな様子に小さく笑みを浮かべながら助け舟を出す。

「私の名前は狂骨、ちよつと変な名前だけどよかったら覚えといて。」

「狂骨…さん、ですか…：すみません…：私…：助けてもらったのに。」

「いいよいいよ…こっちこそびつくりさせてごめんね!」

気にしないでと慌てて手を振りながら狂骨が頭を下げる。

そして少女から海に向かって視線を変えた。

「いやーいい景色だね、ここ、お気に入りなの?」

「はい…：そうですね…。」

「潮風が気持ちいいなあ…：ちよつと髪がべとつくけど。」

狂骨がさらりと風に揺れる髪をなでながら言うと、少女は小さく苦笑した。

それから数分、会話をするでもなく二人で海を眺める。

お互い何を話せばよいのかわからず、かといつて離れるのも悪い気がすると黙り込んでしまったのだ。

気まずい沈黙の中、海鳥が鳴く声と波が岩を打つ音が響く。

しかし沈黙は不意に第三者によって破られた。

「いたいた！美船——」

「!? 守姉!!」

少女に向かって声を上げ、手を振りながら一人の女性が岩場を上つて歩いてくる。

その女性に狂骨は見覚えがあった。

「あーきつきのー!」

「あら、きつきの…えつとお姉さんでいいのよね?」

守姉と呼ばれた女性、それは砂浜で男たちを取り仕切っていた姐さんで女性であった。

今は水着ではなく、鮮やかな赤地に微かに濃い赤のストライプが入ったスラックスに艶やかな光沢のある黒いカッターシャツ姿。

金の髪に、黒いシャツ、赤いスラックスと水着の時に負けないくらい派手である。

その手にはなにやら袋が一つ持たれていた。

「守姉、狂骨さんと知り合いなの…?」

「狂骨って…ああ、貴女の名前なの、ちよつとお昼に顔見知りになったのよ。」

少女——美船と守に呼ばれた少女の問いかけに、守がそう答える。

「そうそう、だから今見掛けてびっくりしたんだ。」

「それで、狂骨はなんで美船と話してたんだい?」

「あははは、いやー一人でぶらついてたらかわいい子がいたから、つい声かけちゃって。」

「か、かわいい…!?!」

「それはお目が高いけど、残念ながらうちのかわいい美船は渡せないわね。」

「守姉!!」

「あらら残念、じゃあ潔くあきらめるよ。」

気さくに話しかける狂骨の会話に、守がノってくれた。

そして守は顔を真っ赤にさせる美船に目を向ける。

「あー…美船、そろそろ家に帰りなさい、お母さん待ってるみたいだから。」

「え…いや…いいよ、まだここにいるから。」

守の言葉に美船が表情を曇らせる。

守はその様子に困ったような表情を見せながらも言葉を続けた。

「今日、誕生日でしょ…お祝いしてくれるって言ってたから、帰ってあげなさい。」

「嘘だよ…そんな。」

「嘘じゃないって、だから帰ってあげな…」

「…。」

まだ納得がいかない様子の美船に、手に持っていた袋を差し出す。

「はいこれ、誕生日プレゼント。」

「守姉…！」

「ただし！これ開けるのは家に帰ってから！わかった？」

美船が表情を輝かせるが、続く言葉に眉をひそめる。

しかし贈り物を確認したいという気持ちが勝ったのか、しぶしぶと言った感じでうなずいた。

「分かった、帰るよ。」

「よし！明日は私がお祝いしてあげるから、またね美船。」

「うん、ありがとう守姉…、狂骨さんも、この町楽しんでいてね。」

美船は去り際、会話に置いて行かれていた狂骨にそう声をかけながら、歩きなれたのであろう岩場をすいすいと移動して砂浜に降りる。

その姿を見送りながら、守が狂骨に向かって声をかけた。

「ごめんね、なんか変なところに巻き込んで。」

「いやいや気にしないでよ、こっちこそお邪魔みたいで悪かったね。」

やや大げさに肩をすくめる狂骨に守が笑みを浮かべる。

そして海沿いの道路に視線を向けた。

海沿いの道路には今夜狂骨も利用する大きなリゾートホテルと、地

元民が経営しているであろうよく言えば趣のある、悪く言えば古い民宿や旅館が並んでいた。

「貴女…狂骨はどこに泊まるの、今夜。」

「…答え辛いけど、あそこのリゾートホテルだよ、タダ券もらってきたんだ。」

「やっぱりそうか…。」

守は狂骨の言葉にさみし気な笑みを浮かべる。

「…よかったらだけど、食事くらいはホテルの中じゃなくて町の飯屋で食べて行ってよ、美味しさは保証するから。」

「割引してくれるなら喜んでいくよ、懐がさみしいもんで。」

「そりゃ難しいね、でもホテルの料理よりは安く済むだろうさ、万が一にぼったくられたら私の名前だしてくれたらいいし。」

「守さん…でよかったよね、ありがとう覚えとくよ。」

狂骨の言葉に今度は守が大きく肩をすくめて言う。

守の言葉に笑って狂骨は礼を言いながら、小さく息を着いた。

「昼間、もうこの砂浜は自分たちだけのものじゃないって言ってたけど、あのリゾートのせい？」

「…まあね、言いたかないけどあのリゾートが出来てから喧嘩沙汰でも起こそうものなら一発で警備員が飛んできてとっちめられるよ。」

「前までそうじゃなかった？」

「砂浜で喧嘩なんて日常茶飯事だったよ、それくらいで地元の警察がしゃしゃりでてくることなんてなかったさ、よっぽど度が過ぎなきやね。」

どこか寂し気な視線を砂浜に向け、守は言った。

「それが当たり前なんだけどね、あたしらみたいな連中は住み辛くなったけど観光客自体は増えたし。」

ただ、と付け加えて守は言葉を続ける。

「最近の観光客はみんなあのリゾート目的で来るからね、この時期何年か前までは観光客で町の飲み屋はごった返してたんだけど、そんなこともなくなっちゃよ。」

「それは大変だね…って、それぼったくるような店があるのが問題



じゃない！」

「まあその通りなんだけどね。」

狂骨のツツコミに守はやんちゃな笑みを浮かべながら頷いた。

その様子に少しばかり怪訝な表情を浮かべながら狂骨が小さく息を着いた。

「…ま、気が向いたら地元のお店も覗いてみるよ、ただ私の連れ、ぼられたら君の名前出す前に手が出るような連中だからそこも覚えておいて。」

「それはそれは嬉しいね、私らとしてはそんな客の方が好みだよ、昔はそんなやつらばっか来たもんだ。」

狂骨の言葉に楽し気に守が笑う。

「いやー懐かしいよ、昔はその民宿に毎年どつかの空手やってるやつらが合宿に来ててさ。」

「それで…？」

「毎年うちの若い奴らと大喧嘩。」

「酷いねそれ！」

「そんなやつらばっかだったんだよ、それでも不思議と町は活気づいてた、なんでだろうね…。」

「…そりゃあ、まあ、分からないけど。」

狂骨は守の話を聞き、少し考えるように腕を組んでから答えた。

「ここ、そんな人たちにとっては大切な居場所だったんじゃないかな。」

「…。」

「聞いた話ここは荒っぽくて乱暴な町だったみたいだけど、そういう場所を必要とする人たちが間違いないんだよ。」

「そっか…。」

「一夏のたった数日だけ、ここの荒っぽさを楽しんで暴力とは無縁の日常に帰る、そして来年もまたこの場所を訪れる、そんな人がいたのかなって…。」

私なりの考えだけどね、と狂骨は最後に付け加えた。

狂骨の言葉に守は少し納得がいったのか、満足げに頷きながら小さ

く笑みを浮かべる。

「ありがとう狂骨、ごめんねなんか。」

「いいよ、所詮私は明後日にはここにいない旅行者なんだから、それにお話してきて楽しかったし。」

「ならよかった…じゃあお詫びにと…。」

守はポケットから携帯を取り出し、なにやら画面を操作し始める。

「よければ連絡先教えてよ、あたしの口利きできる店教えとく、ちよつとサービスしとくように言つとくから。」

「ほんと!!いやー助かるよ!!」

守の言葉に狂骨は飛びつき、素早く携帯を取り出すと連絡先を交換。

それから間もなく数件の食事処の情報が携帯のメッセージ欄に届いた。

「ありがとう！なにかあったらまた連絡するよ。」

「ああ、じゃああたしは行くよ、この町楽しんでいってね。」

手を振り、守は岩場から去っていった。

狂骨はその姿を見送りつつ、どこか寂し気な民宿にも視線を向ける。

民宿前の駐車場はガラガラだった。

本来ならこの時期車がたくさん止まっていたのであろう。

どうしようもない世知辛さを感じながら、狂骨はすっかりぬるくなつた缶ビールの残りを一気に飲み干す。

「…まっず。」

苦い顔をしながら、狂骨は一人呟いた。

## 26話 少女と過去と海坊主

「うつつつつつま!!」

海沿いのリゾートホテルから少し離れた、町にある食事処の一つ。狂骨はそこで新鮮な魚介類が存分に使われた料理に舌鼓を打っていた。

古い外見の店だが、あわびやウニのような高級食材まで懐にやさしい値段で提供されている。

内装も年季の入った木製のカウンターやテーブルに、誰のかわからない有名人のサイン。

いつ貼られたものかわからない色あせたビールのポスターがまたまらなかつた。

カウンターの向こうに並べられた酒瓶の中に交じってよくわからない置物が置かれたりもしている。

ボトルシップにミニチュアの大漁旗、漁船のプラモデルに、タコの様なつるつとした頭をした謎の生物の置物があつた。

そんな風に趣ある内装を楽しむ狂骨の前に置かれたのは、立派なスズキの塩焼き。

淡泊な白身魚だが旬なだけあつて脂がのつておりかなり旨い。

さっぱりした身を味わつたあと、辛口の冷えた日本酒をのどに流し込む幸せがたまらなかつた。

塩がしっかりと効いているのは汗をかく漁師のためだろうか。

一日中海の家の仕事をこなして汗をかけた狂骨にはその塩味がまた沁みる。

焼き加減もさすがは海に近い食事処なだけあり、完璧といつていい。

「まったくみんなも来ればよかつたのに。」

一人狂骨が愚痴をこぼす。

そう、狂骨は一人で食事に出ていた。

狂骨がリゾートホテルの一室に帰った時、すでに他のメンバーはリゾートの高級料理に目を奪われていて狂骨の誘いにのることはなかった。

化け猫と花鈴はそのまま高級な料理に興味津々、蝟螂坂はリゾートで提供される料理の調理法を盗むことに気合を入れていた。

ユリカはわざわざ外に出るのが面倒だからと断り、鈴音は食べ放題のビュッフェがあると聞くとまるで狩人のように目を光らせた。

鈴音の反応を見て、狂骨は鈴音一人にあのホテルの食材が食いつくされるのではないかと思ってしまう。

しかし今の狂骨の前にはホテルの料理にも劣らないはずのごちそうがどんどんと並んでいく。

カワハギの刺身、素揚げにされたキス、サザエのつぼ焼き、アワビの酒蒸し。

あらゆる夏が旬の食材に圧倒されながらも、お箸と酒が一向に止まらない。

全てを平らげた時には狂骨の顔はすっかりと赤くなり、お腹は膨れ上がっていた。

満足げに腹をさする狂骨に、店員のおばちゃんが気を利かせて熱い茶を淹れて持ってきてくれる。

狂骨は笑顔を浮かべながら茶の入った湯飲みを受け取り、ほっと一息ついた。

「ああ、美味しかった！」

「そりゃよかったよ、あんた美味そうに食べてくれるもんだからこっちも出し甲斐があるってもんだ。」

「紹介されて来たけど、来てよかったです。」

「あら、誰の紹介だい？」

「守さんですよ、ここに住んでる。」

「あー、まーちゃんの！」

おばちゃんが声を上げた。

古い馴染みがある様子に狂骨が反応する

「守さん、付き合い長いんですか。」

「あの子が生まれたところから知ってるよ、昔はそれはもう荒れててねえ、大変な子だったのよ。」

「へえ〜そんな風には見えない…ってことはないですね、納得です。」  
「まあそう思うわよね。」

狂骨の反応に思わずおばちゃんが笑いながら同意する。

この感じだと少しばかり話を引き出せそうかな、と狂骨は酔った頭で思った。

昼にいろいろと事情を聞いたせいで、少しばかり彼女に興味を抱いていた。

「守さんってどういう人なんですか？」

「まあこのあたりの顔役よ、お勉強できるから色々相談にもものってるみたいね、分かってるかもしれないけどあのホテルができてからこの辺り大変だから。」

悩まし気におばちゃんが言う。

たしかにこの食事処もこれだけ美味しい料理が格安で出てくるというのに、狂骨のほかに常連らしき地元客がちらほら見える程度。

おそらくどこの食事処もそんな感じなのだろう。

「へえ〜守さんって頭いいんですか？」

「あの子何があったか中学生の頃に突然お勉強始めて、そのままタダで高校入って大学まで行っちゃったのよ…あれはびつくりしたわね。」

「それはすごいですね…うちにもお馬鹿…あんまり頭のよろしくない子がいるので勉強教えてあげて欲しいです。」

「え、あんた子持ちなの!?!」

「いやいやいやちよつと預かってるだけですよ！それでもなんていうか、こっちの筋に入ったんですね。」

狂骨がすつと頬に線を引くように指を動かす。

俗にいうその筋の者を示すジエスチャーだった。

「まーちゃんはねえ、私らみたいな人のこと考えてそっちの道に足入れたんだよ。」

「つていとうと？」

「ちようどここにあのホテルが建つてなつてから、この辺りも一氣に取り締まりが厳しくなつてねえ、どんどんやつてけないお店が増えたのよ。」

「その話は守さんからも少し聞きましたよ、昔はなんていうか：おおらかだったみたいですね！」

「そうそう、おかげであの人らも収入が減つて、どんどんみかじめだのなんだの金をとつてくるようになってき、そこに来てくれたのがまーちゃんだ。」

「ふーむ：：そこで守さんがこの辺りを持ち直させたつて感じですか？」

「ああ、あの人らだつて金をとる相手がいなくちゃどうしようもないだろ、だからつて理由つけて少しでも金をとらないようにしてくれたり売り上げが上がるよう相談に乗つたり、おかげで助かつてるよ。」

「流石にそういうのをなしにはできないんですね。」

「ここらは昔つからその筋の人らが強いとこだからどうしてもねえ：つてだめね、こんな話遠くから来たお客さんにするもんじゃなかつたわ。」

「氣にしないでくださいよ、聞いたのは私だし：：そうだなあ、もう一杯飲んだら変なことは忘れちゃうかも。」

「あつははは、面白いねえ、まーちゃんの友達なら一杯くらいまけといたげるわよ。」

そう言つておばちゃんはカウンターへ向かい、酒棚を眺めてどれを一杯奢ろうかと思案を始める。

狂骨はできるだけ良い酒が飲みたいななどと思ひながらも、聞いた話の内容を思い返していた。

なんとなくだが、守が急に勉強を始めたのはあの美船と呼ばれた少女が関わっているような気がする。

そして狂骨が実は興味を抱いているのは守だけではなく、あの美船もであった。

美船が誰もいないはずの海を眺めていたことと、その視線の先に

あつた、いや、いたもの。

それが気になつているのである。

考えているうちにおばちゃんが コップ一杯の冷酒を入れて運んでくれていた。

それを狂骨はありがたく受け取る。

そのとき、入り口のドアが開いて地元民らしき男が入ってきた。

男はなにやら少し興奮した様子であり、おばちゃんの姿を見るや否や声をかける。

「おばちゃん聞いたかい!? 沖合の方で船が沈んでるって!」

「ええ! なんだってそりや! 誰が乗ってたんだ!」

突然の知らせにおばちゃんが驚いた表情を見せ、狂骨も会話の内容に聞き耳を立てる。

「それが分からねえんだよ、漁師連中はみんな海に出てねえし、もしかして密漁船じゃねえかって。」

「なんてこつた! 今頃大騒ぎだろうね。」

「もう警察に救急車に大騒ぎだよ! いったい誰がやらかしたんだあんなこと!。」

男は頭を抱えながら席に座り、とりあえずとビールを注文している。

その様子を視界の隅に収めながら狂骨は一気に冷酒を煽ると、おばちゃんにお勘定をお願いした。

「ごめんねおばちゃん、ちよつと心配だから宿の方に戻るよ。」

「いいよいいよ早く帰ってやんな、いっぱいたべてくれてありがとうね!」

金額は狂骨が今日稼いだバイト代で十分賄えるほどだった。

しかしたっぷりと飲んだはずの酒は、既にその効力を失い始めている。

心地よかつたはずの酔いがまだアルコールを入れて間もないはずであるのに、すでに疎ましくさえ感じてしまっていた。

店を出て磯の香りが漂う夜風を浴びながら、狂骨は速足で海岸へ向かつて足を動かした。

海岸は人でごったかえしていた。

飲み屋に来た男が言っていた通り救急隊員らしき姿に警官にカメラマンに記者らしき人間、そこに野次馬が集まって大騒ぎになっている。

警官が必死に抑えている野次馬の視線の先には、すでに沈んでしまったであろう船の先端部分が歪なオブジェのように海の上に浮かんでいる。

その様子を見ながら狂骨は自分の気配をさっと消し去った。

狂骨は妖怪である。

本来なら妖力を感知しない人間には見えない姿であるところ、あえてその身をさらしているのだ。

狂骨はその力を用いてあっさりと言官の目を盗み砂浜に足を踏み入れ、岩場に向かって歩みを進めた。

それは夕暮れ時に少女、美船がいた場所。

狂骨がここを訪れた理由、それは海難事故と聞いて嫌な予感を、妖怪の気配を感じたからだ。

夕暮れに狂骨はある妖怪の姿をここで目にしている。

美船が誰もいないはずの海に向かって手を振っていた先にいたもの、それは海坊主と呼ばれる妖怪であった。

海坊主と言えば海難事故を引き起こすことでも有名な妖怪だ。

彼女はそんな妖怪と仲が良さげであり、狂骨が彼女に興味を持ったのもそれが原因であった。

狂骨は岩場から海を見回すが、そこには妖力の気配はない。

無駄足だったかと狂骨は顔をしかめるが、海を眺めているとなんやら大きな何かが波に乗って岩場に流れて来た。

狂骨が夜目を効かせて流れてきたものを見つめる。

「…あれは?」



それは人だった。

おそらく沈んだ船の残骸であろう大きな板の様なものにまるで誰かに乗せられたかのように寝かされた女の子。

さらに目を凝らしてみれば、それは狂骨の知っている顔であった。

「美船ちゃん……！」

夕暮れに出会った少女、美船であった。

狂骨は海の中に飛び込み、流されてきた彼女を引き上げて抱きかかえ、海岸沿いにいる救急隊員の元に向かって走る。

美船は気を失ってはいるが呼吸自体はしており、素人目で見た限りでは命に別状はないがそれでも油断はできない。

すでに姿を隠すことは止めていた。

救急隊員は封鎖されているはずの方向から突如現れた狂骨に驚くが、その腕に抱きかかえられた美船の姿を見ると血相を変えて近寄ってくる。

「き、君！その子は！」

「この子その岩場に流されてた！お願いします！」

「分かった、後はこっちで任せてくれ。」

救急隊員は迅速な対応で美船を引き取り、慎重に扱いながらも素早く今の状態をチェックしていく。

その様子を見て狂骨はほっと一息を着いたが、その肩を不意に誰かが掴んだ。

「お前！どうやって向こうに入り込んだ！」

「お、お巡りさん！いやその……！」

「すまないが少し話を聞かせてもらおう必要があるそうだ。」

「ちよ、待って！てかそれ手錠!?本物!?私何もしてない!!助けてー!!!」  
必死の叫びもむなしく、狂骨の手には手錠がかけられてしまった。

「お世話になりました…おまわりさん。」

「おう…人助けは立派だが、もう酔っぱらってあんなマネするなよ…死んでもおかしくないんだから。」

「肝に銘じます…。」

船の沈没事故が起こった夜の翌朝、狂骨は警察署の前にいた。

一晩中待ち時間を挟みながら事情聴取に取り調べ、身分確認を行われ、大変な目に遭った。

どうにか身分証明と食事処のおばちゃんのアリバイ証言で自分が船の事故になんら関わりがないことを証明し、あの場にいたのは酔って封鎖を潜り抜けたからだと言明したことでお咎めのみで済んだ。

酔って海に入ったうえ、人命救助まで行ったことがどれだけ危険かと散々説教を受けた狂骨はぐったりとしている。

立地柄海に関する事故を起こす人間が多く見るが故の愛の説教であることは理解しながらも、実際に受けてみると想像以上に体力を消耗する。

酔った身であればなおさらだ。

「うえ…スーツが磯臭い…ホテルに一度帰りたけれど…美船ちゃんも気になるからなあ。」

海に入ったせいで海水まみれになったスーツの臭いをかぎ、狂骨は顔をしかめた。

狂骨は事件に関わりがあるのではないかという疑いが晴れた後、警官との会話の中で美船が運ばれた病院の名前を聞き出していた。

警察署からそう離れていないうえホテルに帰るまでの道筋の近くにあるため、寄って帰ろうと思ったのである。

狂骨はスーツのズボンから携帯を取り出すが、起動させようとしてもうんともすんともいわない。

海水に濡れてしまったせいで完全に壊れてしまっていた。

美船の件で守に連絡を取りたいが、簡単にはいかないらしい。

八咫総合事務所の面々とも連絡が取れていないままだ。

まあ八咫総合事務所の面々は狂骨が帰らなかったところで朝まで飲んでいただけだろうと何も思わないだろうが。

そう考えるとホテルに先に戻らなくてもよい気がしてきた。

「とりあえず美船ちゃんのところ顔出すかあ…。」

そうして狂骨は病院へと足へ運ぶことを決めた。

病院は昨夜の事件の影響もあってかざわついている雰囲気があった。

ひっきりなしに看護師さんが目の前を行ったり来たりを繰り返し、警察関係者らしき人間の姿もそこかしこに見える。

狂骨はなるべく邪魔にならぬように動きながら受付へと向かい、事情を説明して美船が入院した病室を訪ねようとする。

そうして受付の看護師に声をかけたところで病院の入り口から誰かが一気に駆け寄ってくる、激しい足音が響いてきた。

「すみません病院内は走らないで——」

「どいて!!」

看護師の嗜める声を一喝してこちらに向かってくる人間は狂骨にとつて見知った姿であった。

ウェーブのかかった金髪のロングヘアに百七十センチを超える長身の女性。

守であった。

だがその服装は普段の派手な服装ではなく、シャツに短パンにサンダル履きというほとんど寝間着のまま慌てて出てきたという姿であった。

「美船の——昨晚運び込まれた岬美船の病室は!」

守は息を切らせながら美船のフルネームであろう名前を出して受付に問う。

「え、あ…その貴女は…。」

「浜村守!!名前聞いてない!!?病室は!!?」

「あー…105号室です、すぐにご案内いたしま——」

受付から答えを聞くや否や案内も待たずに守は病室へと向かう。

隣にいた狂骨にも一切気づいていない様子で目もくれずに守は美船の待つ105号室へと向かった。

その後を狂骨は追う。

105号室の前には警察関係者らしき人間が事情を聴くために集まっていたが、守は彼らを半ば突き飛ばす様におしよけて病室へと入って行った。

狂骨もしれっとした顔でその後につき、病室の中に入る。

美船は上半身を起こした状態で寝台に寝ており、医者付き添いの元、事情聴取を受けていた。

その表情は暗い。

当たり前だ、事情は分からないが海に流されるような事態に遭ったのである。

しかしその表情はショックを受けているというより、茫然自失と言えよいか、空虚な表情をしていた。

「美船！」

「あ…守姉…。」

だが守の姿を見たたん、美船の瞳に微かに光が灯ったように見えた。

守は美船の顔を見るとホツとしたように表情をやわらげ、寝台の横に膝まづくと美船の存在をたしかめるように頬をなで、それからぎゅつと抱きしめた。

「よかった…よかった…。」

「ごめんね…心配かけて。」

「何があったの美船！海に流されてたって…！」

「それは…。」

美船は守の言葉に目線を落とす。

そのまま美船は話さない。

沈黙が病室を包む中、一つ咳払いが響いた。

「ん、ん…浜村守さんですね。」

「ああ、そうだけど。」

沈黙を破って口を開いたのは事情聴取をしていた警察関係者だった。

守は美船をだきしめたまま視線も向けずに答える。

「岬美船さんが、目を覚ましてからまず話したのがあなたの連絡先だったんです…お母様はこの時間連絡がつかないと。」

「…それで？」

「その…美船さんなんですが、なぜあのようなことになったのか、覚えていないと言っています。」

「…そうなの美船…!？」

警官の言葉に守は美船から手を離すと、その目をジッと見ながら問いかける。

美船は向けられた守の視線から逃げるように顔を伏せると、こくりと頷いた。

その反応は明らかに何かを隠している様子であった。

「浜村守さん、あなたも少し事情聴取をうけていただきたい、彼女がこういった事件に遭うような心当たりがないか確かめたいのですが。」

「…話すことは何もないよ、すまないがこれから仕事なんだ。」

「え、ちよつと?!浜村さん!？」

美船の表情を見たとき、守の表情が穏やかなものから剣呑な雰囲気を変ったものに変わる。

そして警官の話を突っぱねると立ち上がり、病室から足早に出ていってしまった。

警官が茫然としたまま病室の出入り口を眺めている隙に狂骨もささっと病室から出ていき、守の後を追いつき、背中から声をかける。

「あの…守さん、おはようございます。」

守は狂骨に声に反応し、歩みを止めないままちらりと後ろを向いた。

まさか狂骨がいるとは思わなかったのだろう、少し目を見張りながら首をかしげる。

「あんだ…なんでいるの?。」

「昨日、岩場に流されてきたあの子を見つけたのが私だったんだよ、お

かげで朝まで警察署だった。」

「そうだったのか…ありがとう、でもなんであんたが？」

少しばかり疑いを含んだようなまなざしが狂骨に向く。

警官と同じく事件の関係者ではないかと疑われているようだった。

「いや、昨日はお陰様で美味しくお酒が飲めてさ、酔っぱらって砂浜に忍び込んだら流れてくる美船ちゃんを見つけたんだよ。」

「…ああ、たしかにちよつと酒が臭うね、あんた。」

警官をごまかしたときと同じような話をする、一応は納得したように守は頷く。

「まあサツが見逃したってんなら、関わりはないってことか。」

「アリバイもばっちり、船が沈んでた頃に私はお酒飲んでたからね、おばちゃんが証言してくれて助かったよ。」

「でも、それだけで事件に関わりがないって断言はできないだろ？」

「一応身分証明とかしたんだよちゃんと！信じてよ！」

「それにしちやあ随分と首を突っ込んでくるじゃないか。」

「そつちこそ、随分と疑ってくるみたいだけど、私についてなにか心当たりでも？」

「ないね、だがこれだけは分かる。」

会話を交わしながらも常に速足で歩いていた守が不意に歩みを止めて狂骨の方を向く。

その表情は病室を出た時と同じ、張り詰めたような剣呑が雰囲気宿ったままだ。

「お前らは堅気じゃない。」

「…心外なことを言うね。」

「昨日砂浜で相撲とってたあの子も、あんたも普通じゃない。」

「筋者相手にビビらなかつたからって？それは短慮が過ぎるんじゃない？」

「あたしがどんだけ荒れた連中の相手してきたと思ってるんだ、ただのクソ度胸のある一般人とは思えないね。」

「…。」

「言えないだろ、狂骨、あんたが何者なんだって胸を張ってさ。」

真つすぐに、恐ろしいほどに真つすぐに守は狂骨を見据えていった。

狂骨もその視線から目を外さない。

外さないが答えられない。

それがある種の答えにもなっていた。

誤魔化しの言葉ならばいくらでも並べられる、それでも狂骨が何も言わなかったのはこの真つすぐな瞳にごまかしは無駄だと感じたのか。

それともその真つすぐさに敬意を表したのか。

分からない、分からないが狂骨は答えることができなかった。

それが答えだ。

「やっぱり、話せないんだね。」

「うん、話せないよ、君が言ったとおりだ。」

「ふっ、そうか…。」

狂骨の答えに少し守は安心したように微笑んだ。

そして踵を返し、狂骨に背を向ける。

背を向けながら、背中越しに狂骨に語り掛けた。

「ここで嘘をついてくれなくてよかったよ、狂骨、あんたは普通の人間じゃないが悪い奴ではなさそうだ。」

「疑いが晴れたなら良かったよ、それで、私をなんだと思ってたの？」

「まだ言えない、それをこれから確かめに行く。」

「…それ、やばいことする気じゃないの？」

「やばいだろうね、でも、美船が巻き込まれたなら止まれない。」

「そっか…じゃあ私が何しようにも止められそうにないね。」

「分かってるじゃないか。」

そう言っ守は会話を終わらせるように歩きだす。

その行く先がどこかはわからない、しかし彼女が歩く先にあるのは間違いなく筋者のなかでも深い闇に覆われた場所だ。

「…ねえ！」

狂骨はその背に語り掛ける。

歩みを止めない、止められないその背に語り掛ける。

「私がもし、正義の味方だつて言ったら、信じる？」

不意に狂骨から飛び出した言葉に守は少し肩を震わせた。

どうやら笑っているらしい。

そうして歩みを止めないまま振り向くと楽し気な笑みを浮かべて答えた。

「信じてやるよ！正義の味方さん！ただ…」

守は大きなため息を着いて前を向いた。

「たとえそうでも、あたしは正義の味方に守られる資格はないね。」

守と会話を交わした後、狂骨はホテルに戻っていた。

朝帰りに磯臭い香りを漂わせて帰ってきた狂骨に皆が何事があったのかとざわめく。

「リーダー、何があつたのよあんだ。」

「ちよつと人命救助してたんだよ、ごめんだけど、私は今日は寝かせてもらうね。」

「人命救助つて…リーダー、あんたまさか昨日の事故に関わつてんじゃないでしようね。」

「まあ直接的には関係ないよ、直接的にはね。」

「間接的には関係あるつて言ってるようなもんじゃにやいのそれ!!」

化け猫の言葉に狂骨はとぼけたような顔で肩をすくめると逃げるようにシャワールームへと駆け込んだ。

海水まみれのスーツをようやく脱ぎ捨て、潮にまみれた髪と身体を洗い流す。

心地よい温水の水滴が身体を打ち付ける中、狂骨は守との会話を思い出していた。

「正義の味方…か…。」

一人、呟く。

「柄にもないこと言っちゃったな、私。」

狂骨は人を護る、そのために八咫鳥に所属し、活動している。



しかし自分でもなぜここにいるのか、分からない。  
分からないがまるで何かに導かれるようにここに立っている。  
はたしてそんな自分は正義の味方なのだろうか。  
分からない。

分からないことだらけだ、自分は。

「…いけないな！弱気になってちゃー！」

ぱしん！と自分の頬を叩いて一喝する。

頼りはないが自分は八咫総合事務所のリーダーなのだ。

たとえ酒浸りで部下に雷を落とされ呆れられる仕事のしない自分でも、リーダーなのだ。

そんな自分が弱気になってはいけないと、強く拳を握って思う。

とにかく、守と美船、あの二人に関しては放っておけない。

美船がヤバイ事件に巻き込まれたこと、守がその事件に一步踏み込もうとしていることは明白だった。

今後どう動くか考えながらバスロブに身を包み、シャワールームから出るとそこには待ち構えた様に鈴音がいた。

「おわー！鈴音ちゃん!？」

「…狂骨さん。」

鈴音が真つすぐに狂骨の目を見据える。

「荒事なら歓迎です、何かあれば言ってください…。」

「…うん、ありがとう。」

礼を言つて狂骨がベッドルームに足を踏み入れると、メンバー全員の視線が突き刺さった。

「リーダー、どうせ馬鹿やる気なんでしょ、付き合つてやるからなんかあつたら話さない。」

「どうせ海も閉鎖されちゃったし暇してっからさ。」

「リーダー…僕も…手は空いてる。」

「みんな…。」

化け猫、花鈴、蠟螂坂がやる気満々だと狂骨に告げる。

そんな武闘派連中を見ながらユリカはため息を着いた。

「はあ…荒くれどもめ…私は荒事は勘弁。」

「へえ、荒事じゃなけりや付き合うんだユリカ。」

「チツ…別に、私も暇だし付き合つてやるだけだから。」

「あはは！ありがとねユリカちゃん、助かるよ。」

悪態を言いながらもユリカも巻き込まれることに文句はないようだ。

そんな皆を見て狂骨は両手を握りしめて歓喜の表情を浮かべる。

「いや〜！やっぱ私つて慕われてるんだなあ！」

「調子にのるにゃ！」

その頭を思い切り化け猫が引っぱたいた。

痛いよ〜と言いながらも狂骨の顔に嬉しそうな笑顔が張り付いたままだった。

狂骨は睡眠をとった後、夕暮れになった頃合いを見計らつて岩場を訪れていた。

美船が昨日海を眺めていた場所。

そこに立っていると目当ての存在がやってきてくれた。

「待ってたよ、海坊主。」

『…君は…妖怪みたいだね、あの子とは違って。』

妖力を察知した狂骨が海に向かって語り掛けると、海の中からまるでイルカのようなつるりとした頭につぶらな瞳をした存在が現れる。

一見すると海に棲む哺乳類のようだが、その身体には人間のように手足が生えており、妖怪であることは明白であった。

その身体も三メートルはあるかという巨体である。

海坊主に属する妖怪の一種であった。

一口に海坊主と言っても様々な姿をした者がいるが、この海坊主は哺乳類に近い姿をしているようだ。

『あの子を引き上げてくれたのを見たよ、君がいてくれて助かった。』

「あらま…妖力は感じてなかったんだけどなあ、悔しいね。」

『沖合から僕は見てたから、仕方ないよ。』

大げさに肩を落とす狂骨を海坊主が慰める。

慰めの言葉にありがとうと礼を言いながら、狂骨は岩場に座り込んだ。  
だ。

『君は…何者なんだい?』

「名前は狂骨、私は八咫鳥…退魔士だよ、妖怪だけどね。」

『そうか…僕を退治しに来たんだね。』

海坊主は覚悟を決めた様にそう言いだした。

しかし逃げるようなそぶりはなく、なにか退治されることを受け入れていた様な雰囲気があった。

「やっぱり、昨夜の事件は君が?」

『うん、僕が沈めたよ、あの船を。』

『どうして?』

狂骨の口調は穏やかなものだった。

妖怪退治をしにきた退魔士とは思えない口調に、海坊主が首をかしげる。

『君は…僕を退治しに来たんじゃないのかい?』

「その通り、私がまず聞きたいのは君が何故事件を起こしたか、そして――」

小さく間をおいて狂骨が海坊主に話す。

「美船とはどういう関係なの?」

『あの子は…。』

海坊主が言葉を濁らせる。

しかし意を決したように口を開いた。

『あの子のお父さんを、僕は殺したんだ。』

「君が…!?!」

『うん、もう10年以上前だよ。』

そうして海坊主は美船との過去を話し始めた。

『僕が夜に泳いでたら、いちやいけないはずの船を見つけたんだ。』  
「いちやいけないはずの船…?」

『うん、いけないことをしてる船があったんだ。』

「うーん、もしかして密漁ってやつ？」

『たしかそんなこと人間は言ってた気がする。』

海坊主は狂骨の言葉に心当たりがあったのか頷いた。

「それで、君は海坊主らしくその船を沈めた？」

海坊主と言えば巨体を用いて船を沈めることで有名な存在だ。

最早持つて生まれた習性のようなものである、本能に近い。

『そうだよ、手あたり次第人間の船を沈めたら退治されるけど、いけない船なら沈めても退治されない。』

狂骨は海坊主の言葉を聞いて頷いた。

おそらくこの地域の海坊主たちはそうして人間と共存してきたのだろう。

実際に人間の世界でも妖怪にかこつけて危険な行為を戒めたり、抑止するような伝承が伝わっていることが多い。

だが今回のように実際に妖怪が関わっているということもあるということだ。

そういえば昨日訪れた食事処にタコみたいな頭をした生き物の置物があったが、もしかしたらあれは海坊主かもしれないなかった。

調べればこの町に古い伝承として海坊主の話が残っているかもしれない。

「それで沈めた船が美船ちゃんのお父さんの船…だったの？」

『うん、しかもその船には美船ちゃんも乗ってたんだ。』

「え!？」

『後で聞いたんだけど、お母さんがでかけてて、誰も美船ちゃんの面倒を見る人がいなかったから仕方なく船に乗せたって。』

「うーん、たしかに密漁船を出すからって預ける訳にもいかないか…っていやいやいや、嘘ついてでも誰かに預けるでしょ!」

『聞いたんだけど、預ける予定だった人が約束破ったんだって。』

「そういうことかあ…ってまあいつか、実際に美船ちゃんは船に乗ってたんだし…。」

変なところでツツコミをいれてしまったと狂骨は咳払いを一つし

て、話を仕切りなおす。

「それで君はどうしたの？」

『人間の子供が乗ってるなんて思わなくて、あの子だけは必死で助けたんだ…。』

「それからあの子と仲良くなったの？」

『うん、最初僕は謝りに行ったんだ、もしたら友達になつてくれたらいいよって。』

「てことは10年来の付き合いなのか…。」

狂骨は意外な付き合いの流さに驚く。

「君と美船ちゃんのこととは分かったよ海坊主、それで、昨日の夜は何があったの？」

『…昨日の夜、久しぶりにいけない船を見たんだ。』

海坊主は語り始める。

『でも僕は美船ちゃんのことがあったから、まず船の上をみたんだよ。』

「…。」

『したらそこに大人の人間が何人もいたんだ、でも、それだけじゃなかった…。』

「まさか…。」

『美船ちゃんがいたんだ、大人の人間に髪の毛引つ張られて、船の上を歩かされて…普通じゃなかった…!』

海坊主は思い出すことも嫌だという様に声を震わせ話す。

『僕、夢中で船にぶつかって、船を沈めた…溺れた美船ちゃんだけは助けて、砂浜に向かって流したんだ。』

「そこを私が助けたってことか…しかし、穏やかな話じゃないね…それは。」

話を聞く限り、どうやら美船は誘拐されていたようにしか感じない。

だが美船はそのことを覚えていないとして警察に証言していなかった。

明らかに彼女は今回の事件について覚えているはず、それでも話さ

ないということは誰かを庇っているのか。

これ以上は分からない、海坊主から引き出した情報を武器に本人から引き出すしかないだろうか。

「話は分かったよ、ありがとう海坊主。」

『…僕を、退治しないの?』

「たしかに君は許されないことをしたけど、それならきつと私も同類だ、それに女の子を助けた正義の味方に口出しはできないよ。」

『…僕は正義の味方なんかじゃないよ。』

「それでも思わないと人間と一緒に生きてけないって!とりあえず君のことは保留で!しばらくおとなしくしといた方が良くかもね。」

『ありがとう…何かあったら必ず助けるから。』

「ははっ、頼りにしてるよ。」

最後にそう言って狂骨は海坊主に手を振り、別れを告げた。

海坊主は水しぶきを上げて海に潜っていく。

かかりそうになる飛沫を狂骨は慌てて避け、これからやることを考えた。

しばらく考えたのち、どうにか守と接触しようと決める。

朝に病院でした会話からして、守は今回の事件が誘拐事件であることを察していたように感じる。

彼女はそのことを確かめるべく動くことに決めたようだった。

「あー、てことは筋者が関わってそうだなあ…嫌だ嫌だ…。」

狂骨はため息を吐いた。

しかしその顔には楽し気な笑みが浮かんでいた。

「ウチのメンバーが喜ぶことになりそうだね…。」

## 27話 狂骨

夕暮れ時からすっかり日が沈み、月明かりが海面に反射する時間。守と連絡を取ろうにも、携帯が壊れてしまったせいで連絡が出来ない狂骨は昨夜も訪れた食事処を訪れていた。

とりあえず身近な人間から探ってみるかと考えたのである。

「なんか、人通り少ないなあ。」

昨夜に比べて明らかに人通りが少なかった。

昨夜は地元民がそこらの店に入る姿や仕事帰りに立ち寄っている姿が見えたが、今夜はその姿が全然見えない。

不穏な空気を感じながら狂骨が食事処の中に入ると、おばちゃんがどこか浮かない表情で笑みを浮かべた。

「あらあなた、今日も来てくれたのかい。」

「うん、でも今日はお酒飲む気分じゃないから、ご飯ものだけお願い。」  
「分かったよ…でも、今夜はご飯食べたらさっさと帰った方が良い、悪いことは言わないからさ。」

カウンターの裏で料理の準備をしながらおばちゃんがそう忠告してくる。

狂骨はカウンターに座りながら落ち着いた様子で肘をついた。

「…人通り少ないけど、何かあった？」

「分かんないよ、ただ今日はどたばた若い衆が駆けまわってるから。」

「それだけ…？」

「…それだけだよ。」

おばちゃんは何かを隠す様に会話を打ち切ると、手慣なれた様子ながらも少しぎこちない手つきで魚の切り身を切り始める。

守の連絡先を聞けたらと思ったが、この様子では聞けそうもなかった。

とりあえずご飯だけ頂いてほかの手段を探すことを狂骨は決める。

そして狂骨の前に出されたのはたっぷりの刺身がのった海鮮丼であった。

かなり美味しそうだ。

昨日の夜、締めめに食べなかったことを後悔するほどだ。

ご飯と共にたれのかかった刺身を口に運ぶと、たまらない幸せを感じる。

そうして半分ほど平らげたころだった。

ガシャン！と、激しい音を立てて乱暴に入り口の戸が開かれた。

狂骨とおばちゃんが入り口に目線を向けると、堅気ではない若い男の集団が中に入ってくる。

よく見ればその中には昨日砂浜で見かけたような姿がちらほら見える。

その中でもリーダー格の男が前に出てきた。

「あ……」

リーダー格の顔を見て思わず狂骨は小さく声を出す。

それは昨日鈴音にビーチ相撲で敗れた横綱だった。

横綱は狂骨に目もくれずにおばちゃんに向かって歩みを進めると、おばちゃんを睨みつける。

「な、なんなんだいあんたら……」

「ババア、ここに浜村のアマが来なかったか？」

浜村——という守のことであろう。

彼女のフルネームは浜村守だったはずだ。

「アマってあんた……あの子になんて口きいてんだい!？」

「知るか！あいつはもう組の人間じゃねえ……いいから来なかったか言いやがれ！」

「来たよ……でも今夜は出歩くなって忠告に来てすぐ帰ったさ！それだけだよ！あんたらも帰んな！」

「ほお、来たのかここに、じゃあやっぱここも探さねえとな……!？」

横綱は下種な笑みを浮かべると、後ろにいた若衆に向かってあごをしゃくり、家探しをするように促した。

若衆はそれを合図にずけずけと店内に入っていく。

「あんたらやめなさい！警察呼ぶわよ！」

「ああん？黙れババア……余計なことするとどうなるか分かってんのか



？」

狂骨はじつと座りながらどうしたものかと箸を止めていたが、横綱がそんな狂骨に目を付けた。

横綱はにたにたと笑いながら狂骨の肩に手を置き、そしておぼちゃんに視線を向ける。

「たとえば大事なお客さんが…。」

横綱はまだ中の残っているどんぶりを奪い取ると、狂骨の頭からそれをかぶせた。

「こうなっちゃうかもねえ！」

狂骨の頭上からぼとぼと残っていたごはんは刺身がこぼれ、タレがつうーと顎に向かって垂れていく。

狂骨は垂れてきたタレを無言で舌で舐めると、面倒くさそうに頭に被されたどんぶりを外した。

「あんたお客さんになんてことすんだ!？」

「うるせえ！間違えても通報なんてするなよババア、今度はてめえが痛い目に遭うぞ！」

「ひっ!？」

横綱がカウンター越しにおぼちゃんの胸倉をつかもうと手を伸ばした。

が、その手は届かなかった。

横綱の手首を狂骨が掴んで止めたからである。

「て、てめ…なんだ…!？」

「私に手を出したのは百歩譲って、食べ物粗末にしたのは一万歩譲って許してもさ…。」

狂骨はまるで横綱の手首を握り潰してしまうのではないかというくらい力を籠めた。

「あがああああ!？」

人間離れた力に横綱が悲鳴を上げる。

「おぼちゃんに手をだすのはダメでしょ!!！」

狂骨が思い切り横綱の顔をぶん殴った。

一撃で体格の良い横綱がぶつとばされ、壁に叩きつけられる。

がらがらと音をたて壁にかけられていたメニユールの書かれた木札が揺れ、いくつかが落下し横綱の頭に落下する。

横綱は一撃で気絶していた。

「あ、兄貴!」

「お…お前なにすんだコラア!」

家探しを始めていた若衆がこの事態に一気に狂骨の元へ集まってくる。

そのうちの一人が背後から狂骨の肩に手をかけるが、狂骨は振り向くまでもなく裏拳一閃。

手の甲で鼻がつぶれた感触を感じ、人が倒れた音を聞くとゆっくりと振り向いた。

「なにすんだはこつちのセリフなんだけど…まあいいや、最近暴れてなかったし、久々に暴れさせてもらおっかなあ〜。」

狂骨は軽く首を曲げて音を鳴らし、準備運動のように肩をまわす。

若衆は狂骨のあまりにも余裕がある様子に少しばかり気圧されそうになるが、数の有利があることを思い出し一斉に襲い掛かった。

「死ねえええ!!」

一番間近にいた男が右手を振りかぶって殴りかかってくるが、がら空きの顔面に向かって思い切り前蹴りを叩き込んだ。

靴底の跡が残るほどに強烈な蹴りを受け、男がぶっ飛ばされる。

後ろに続こうとしていた集団にもたれかかるように蹴り飛ばされた男を、思わず他の若衆が受け止めた。

そこに向かって狂骨が駆ける。

軽く助走をつけて勢いをのせた状態で跳躍、両膝を胸に抱えるように曲げ、一塊になった集団目がけて思い切り足を伸ばした。

「いよつとお!!」

強烈なドロップキックが炸裂していた。

まるで爆弾でも爆発したかのような威力であった。

体格の良い男たちがボウリングのピンのようにあっけなく吹き飛ばされ、周囲に転がっていく。

ある者は壁に、ある者はテーブルに、ある者はカウンターに頭から

突っ込むようにぶつかって止まり、そのまま動かなくなった。

あまりの光景に残った若衆たちが後退る。

狂骨は地面から起き上がるとにっこりと笑みを浮かべながら全員に目を向けた。

「さーて、楽しませてもらおっか。」

「うぎゃああああ!!」

食事処のドアを突き破り、若衆の一人が道路に転がった。

壊れたドアの木材と散らばったガラスの破片を革靴で踏みならしながら、ゆっくりと狂骨が歩く。

地面に転がった若衆は気を失ってはおらず、ふらつきながらも立ち上がり狂骨から逃げようとしたが、その首根つこを狂骨が掴んだ。

そして地面に向かって力づくで引きずり倒すと胸倉をつかんで無理やり身体を起こさせる。

「な…なんだ…お前…?」

「名乗るほどのもんじやないよ、とりあえず、なんでこんなことをしたか教えてくれない?」

「だ、誰が言う——へぶっ!!」

口答えしようとした途端、狂骨が顔面を気絶しない程度に殴り飛ばした。

「教えてくれるよね!」

「わ、分かった…はなふ!はなふから!」

口から折れた歯の欠片を吹き出しながら、必死に頷いて狂骨の言葉に従う。

「あいつが…姐さんが急に組長を半殺しにしやがったんだ…」

「へえ…」

「親を半殺しにするなんて普通じゃねえ、あいつは絶縁受けて、今組から追われてる。」

「それで、ここにはいないみたいだけど、他に心当たりは?」

「…。」

「心当たりは?」

「ひい!?びよ、病院だ!!昨日入院したあのガキ!!いざとなればあいつを使えば浜村は…:姐さんは黙るからって!」

「そうか…:それは最低の考えだね…:」

守ではなく美船の方を先に訪ねるべきであったかと狂骨は小さく舌打ちする。

そして不意に壊れてしまった食事処のドアに視線を向けると、若衆の懐をまさぐり始めた。

「な、何を!」

「いやー、ドアの修理代、もらつとこうと思つて。」

「ふざけんな!」

「おー、あつたあつた!」

狂骨は財布を見つけると、胸倉をつかんでいた手を離して立ち上がる。

若衆が解放されたとほつと一息ついたところ、顔面に向かって思い切り蹴りが飛んだ。

若衆はその一撃で完全に気絶する。

狂骨はそんなことには目もくれずに再び食事処の中に入ると、カウスターに奪つた財布を投げ込んだ。

おばちゃんは目の前の光景を信じられないという風に眺め、唾然としながら狂骨の方を向く。

「あんた…:強いんだねえ。」

「それなりにね、おばちゃんごちそうさま!」

一言おばちゃんに声をかけ、狂骨は店の外に出る。

向かうは病院だと思つたところで、周囲を見回すとそこかしこの道路から続々とガラの悪い集団が集まつてきていた。

「時間がないってのにく仕方ない、ここはウチのランボー者共に…:つて!私携帯壊れてんじゃん!」

この場を八咫総合事務所の面々に任せようと考えたが、そこで携帯が壊れていることを思い出す。

「えーつとえーつと…電話借りてホテルに繋いでもらって…つてそんなことしてる暇ないしくああ！もう！」

やけくそだと狂骨が喧嘩に備えて身構える。

だがそこで予想外の声とガラスが割れ飛ぶ音が聞えた。

「誰に喧嘩売ってると思ってるのかにやあ!!このクソチンピラがあ!!」

「化け猫?！」

狂骨がいた食事処から数件挟んだ先にあるレトロな喫茶店。

そのドアを突き破って男が一人地面を転がると、その後を追う様に化け猫が喫茶店の中から現れ、倒れる男に容赦なく蹴りを入れていく。

そこらの筋者よりよっぽど恐ろしい剣幕で化け猫はブチギレていた。

「おいやめろ女！やめねえと——うごはあ!？」

倒れている男に執拗に蹴りを入れる化け猫を止めようと別の男が店から出てくるが、その頭に向かって容赦なく椅子が叩き落された。

椅子の一撃で倒れた男の背中を踏みつけ、店の明かりに背中を照らされながら口に煙草をくわえたユリカが姿を現す。

「あー最悪、これじゃ私まで荒くれ共みたいじゃん。」

椅子を担いで煙草をくわえ、悪態をつく様子は明らかに堅気ではない。

どうやらユリカも順調に八咫総合事務所の面々に毒されているようだ。

言葉とは真逆のえげつない行動に狂骨が顔をひきつらせていると、今度は別の店のドアがぶち破られた。

「破ア!!」

「か…蠟螂坂…。」

蠟螂坂が体当たりで男を数人纏めて吹き飛ばしていた。

その手に持たれているのは職人技によって綺麗に切り分けられた色とりどりの刺身たち。

刺身はまるで綺麗に咲いた花びらのように盛りつけられたまま一

切崩れておらず、非常にシユールな光景であった。

「食事の邪魔…。」

どうやら狂骨と同じく食事途中に邪魔をされたらしく、妖怪相手以外にはめつたに怒りを見せない螳螂坂がキレていた。

やもすれば背中から威嚇するカマキリの姿が浮かび上がっているかのようにさえ見える。

間違えても相手を殺したりしないでくれよと狂骨が祈っていると、また別の店のドアが破壊される音が響く。

「また!?!というかみんなドア壊しすぎだよ!?!」

自分も食事処のドアを破壊したことは棚に上げ、狂骨が叫ぶ。

音がした先には案の定、鈴音と花鈴がおり、そして地面を転がる男がいた。

男は地面を這いながらプラプラと力なく揺れる自分の手首を眺め、泣きそうな表情を浮かべている。

おそらくどちらかに手首を外されてしまったのだろう。

「あ…あが…俺の…手首…!?!」

「お前…何すーちゃんとのディナータイム邪魔してんの、死にたいんだよね?」

「私の…私の焼き魚とつぼ焼きと刺身…味噌汁とご飯…煮つけと酒蒸し…海鮮丼とラーメンを返せ…!」

二人もまたほかの面々と同じくブチギレていた。

食い物の恨みは恐ろしいと思いつつも、思わぬところで皆に助けられたことに感謝しつつ、他の面々が起こしている喧嘩の間を見て狂骨は病院へと走った。

爛々と月が煌き、街灯が明るく道を照らす夜。

浜村守はその光から隠れるように裏路地を通り、時には私有地の軒下や民家の庭をも通り抜けて病院へとたどり着いていた。

病院にはすでに組の若い衆の姿があり、入り口に数人の見張りや車

の中で待機しているのが大勢。

この様子だと病院内にも何人いるか分かったものではない。

「どうする…う？」

闇の中、守は一人呟いた。

正面突破をするわけにはいかない、最悪の場合、美船が危機にさらされる。

どうにかして中に入り込めないかと考え、病院の見取り図を頭の中に浮かべたところで美船の病室の番号を思い出した。

美船が入院しているのは105号室、つまり一階だ。

あまりやりたくない手段だが、一階から窓を突き破って侵入するという手が使える。

病院の窓など割ろうものならすぐに警備会社の人間が飛んでくるだろうがそれでもかまわなかった、美船をこの手にまた抱きしめることができた後なら問題はない。

「美船…今行くからね…！」

守はそう誓いながら周囲を警戒しつつ、病院の裏手に回り込む。

若衆が騒ぎ立てる様子もない。

そうして守はあっさりと105号室の外まで辿り着く。

そして窓を破ろうとした、その時だった。

不意にヒヤリと、冷たい金属が背後から頭に触れる感覚がした。

「おっと、動くなよ姐さん。」

「…内藤か、随分なことするじゃないか。」

不覚だった。

守は目的地にたどり着いたせいで気が抜けたところをあっさり銃を突きつけられてしまった。

銃を突きつけた男、守に内藤と呼ばれた男は表面上は余裕そうな表情を浮かべつつも、額には冷汗が浮かんでいた。

「そりゃ、姐さん相手にするなら銃の一挺くらい使うでしょうよ。」

「ビビってんなら見逃してくれてもいいんだよ？」

「抜かせよ…あんたはここで終わりだ、手上げな。」

守は一旦おとなしく手を上げる。

もちろんこのまま終わる気は毛頭ない。

内藤が仲間を呼ぼうとする瞬間でも何でもよい、隙を見つけ次第反撃に出る気であった。

その機会を疑っていた、その時だった。

「む、むぐお!？」

背後から急に、くぐもった声が聞えたかと思うと、何者かが地面に倒れるであろう音がする。

「ふいー…危機一髪ってところ？」

「その声…狂骨…!？」

守は聞いたことのある声に驚きつつも声を抑え、振り向く。

中性的な見た目に長い一つ結びにした白髪、闇に溶け込むようにしつかりと着こなした黒スーツ姿。

見間違えるはずがない、それは間違いなく狂骨だった。

「助かったよ…でもここまで首突っ込んでくるなんてね。」

「正義の味方っていったじやないか、正面は無理そうだし、そこから入る気だったんでしょ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら狂骨は105号室の窓を指さす。

「ご名答と守は頷くと窓に手をかけ、肘を軽くガラスにコツコツと当てると一気に振りぬいた。

ガシャーン、と大きな音が響き一発で窓が叩き割られる。

同時に遠くの方から警報機が鳴り響く音が聞えるが、守はおかまひなしに窓を乗りこえて病室に入った。

「きゃっ！な、なに…って、守姉!？」

「美船！よかった…ちゃんと無事で…!」

守は病室にいた美船の無事を確かめるときゆつと力強く抱きしめる。

美船は何かあったのかと困惑した様子でいながらも、どこか守が来てくれたことに安心した様子だった。

「美船…私はもう全部わかってるから、警察に言って全部話そう…?」

「話すって…ま、守姉…私は何も覚えてないんだって…。」

「嘘言わないで…何年の付き合いだと思ってるの、美船が嘘ついてた



ら分かるって…。」

「…。」

守が真つすぐに美船の目を見据えて言うが、美船は守からすぐさま目を逸らす。

「よつと、取込み中ごめんね、私もいるよー!」

「きよ、狂骨さんまで…!?!」

目を逸らしていた美船が、守と同じく窓を乗り越えて病室に入ってくる狂骨に驚きの声をあげる。

「えーつと…実は、私も知ってるんだよね、美船ちゃんがどんな目に遭ったか。」

「な、なんで…?」

「あなた…どこの筋からその情報を!?!」

「海にいる美船ちゃんの秘密の友達…だよ。」

「あ、あの子が…って、狂骨さん貴女も見えるの!?!」

「見えるというか…実は同族というか…。」

美船の言葉に対し狂骨は答えづらそうに視線を泳がせる。

守は二人の話が理解できず眉をひそめるが、無理に聞き出す必要はないかと判断すると再度美船に向き直る。

「美船…ごめんなさい、貴女を船で連れ去ろうとしたの…ウチの組なの…。」

「…うん…分かってたよ、なんとなく…。」

美船は守の言葉に対し嘘をつくことをやめ、頷いた。

やはり美船は全てを覚えていた、しかしそれを隠していた理由はまだ不明であり、狂骨は首を傾げた。

「美船ちゃんはなんでそれ、隠してたの?」

「…。」

狂骨の問いに美船は声を詰まらせる。

その様子を見て、守が代わりに口を開いた。

「…この子を売ったのが、母親だからだ。」

「売った…ってことはやっぱり人身売買か…。」

「そう、身代金目的の誘拐なんかじゃない、危うく美船は海の外に売ら

れるところだったんだ…。」

「つまり、美船ちゃんはお母さんを庇うために嘘をついてたと…。」

狂骨は美船に向かって視線を送ると、美船はそつと、視線を落としながら頷いた。

納得したように狂骨は頷き、今度は守に視線を向ける。

「で、その取引に絡んでたのが守さんのいた組ってこと?」

「…そうだよ、あたしにばれたら確実に警察にタレこむから、秘密裏に進んでた。」

「原因はやっぱり、リゾート建設で取り締まりが厳しくなつて稼ぎができなくなつたから?」

「そうだよ…海の外にとっかかりを作つて稼ぎにする予定だったらしい。」

細かいことは分からないけどね、と守が付け加えながら言った。

「まあ、こうして美船も確保できたし、あとは警察に行くだけ…。」

「オツケー、でも…つい長話してる間に、警察より先に厄介なのが来たみたいだね。」

狂骨がそう言うのと、病院の廊下からドタバタと荒っぽい足音が聞えてきた。

病院内の異変を察知したのだろう、組の若衆たちが一気に病院へとなだれ込んできたのだろう。

「チツ…先に警備会社の連中かサツに来てもらいたかったよ。」

「ど、どうするの守姉…!?!」

「このままじゃ口封じに殺されるだろうね…守にあいつらが手を出さなかつたのは私への抑止力になるからだし。」

「そうだろうね、守さんが警察にタレこんだら美船ちゃん殺すとても脅されたんじゃないの?」

「正解だよ、でもこうなつたら私とまとめて口封じだろうね。」

「普通に考えたら最悪の状況だよね。」

狂骨はそう言いながらもやりと笑みを、それは楽しそうな浮かべて見せた。

言葉とは裏腹に楽し気な狂骨を見ると、守も笑みを浮かべた。

最初は呆れた様に。  
そして苦々しく。  
最後は楽し気に。  
笑った。

「たしかに、最悪で最高だね、こりや。」

「ま、守姉…狂骨さん？」

この状況にもかかわらず、笑う二人に美船が戸惑いの声をあげる。そんな彼女を尻目に狂骨はこきこきと首を鳴らし、守は手首を曲げながら肩をまわしている。

「君は二人で窓から逃げてもいいんだよ？守さん？」

「どうせこの部屋に私がいなくてわかると狂骨のことは相手しないだろうさ、それなら二人で正面突破した方が良い。」

「オツケー、美船ちゃんは後ろにいてね、もし窓から誰か来るようなら大声上げてよ。」

「わ、分かり…ました…。」

ぽかんとしながら狂骨に美船が返事を返すと同時に、病室の扉が激しい音を立てて開かれた。

扉の外にいたのは、柄物や原色の派手な色のシャツを身にまとった男たち。

男たちは病室を一目見渡すと大きな声を上げた。

「や、やっぱりいやがったな浜村あ！」

先頭にいた男がすぐさま守に向かって殴りかかる。

右の拳が守の顔面に当たる——その瞬間、守は瞬時に半身を切り、まるですり抜けるかのように拳を避けた。

当たると思った拳が当たらない。

拳骨にくるはずの衝撃が来ない。

空振ぶらなかったはずの拳が空ぶったせいで男はつんのめるように体勢を崩した。

「ばあーか。」

体勢を崩した瞬間、守が男の顎に向かって掌底を突き上げた。

すると男は見えない鉄の棒に顎が引っ掛かったかのようにその場

で後ろに向かつて倒れ、後頭部を地面に叩きつけられた。

呆気なく、一撃で男が気絶する。

「ちくしょう！死ねや！」

その光景に怯えを見せながらも一人が腰の後ろに手を伸ばし、おそろくベルトに挟んでいたナイフを抜いた。

抜いた勢いそのまま、男は守の顔に向かつて思い切りナイフを突き出す。

守の頬を、ナイフが掠った。

否、守がナイフを頬が掠るほどギリギリの距離を保って避けたのだ。

避けると同時に、踏み込む。

踏み込みながら守は肘を男の鼻っ柱に突き刺した。

鼻骨が歪み、軟骨がつぶれ、砕けた前歯の破片が口から飛び散る。

しかし守は止まらない。

そのままナイフを持つ男の腕に巻きつけるように腕を絡め、肩の関節を極めると体重を落とし、一瞬で肩関節を外した。

それは関節技というよりまるで打撃技の様に素早い早業であった。

めちやり、と肉の繊維が引き裂かれる音が鳴る。

可動域を超えた関節の動きに耐え切れなくなった靭帯が引きちぎられたのだ。

病室に、男の悲鳴が響く。

男はナイフを手から落とし床の上で悶え苦しんでいたが、守が顔面に蹴りを入れるとすぐにおとなしくなった。

固い床を利用した後頭部への一撃、人体で一番堅い肘という凶器を利用したカウンターから電光石火の関節技。

見事な業であった。

しかし狭い病室なら数の有利で押し込めると思ったのだろうか、男たちはさらに病室へと入り込もうとしてくる。

だがここにいるのは守だけではない。

「おおうっと、病院で走らないでくださいーい！」

男たちが病室に入ってこようとした途端、狂骨が思い切り病室のド

アを閉じた。

閉じた、というより扉で殴り飛ばしたとでもいえるだろうか。

「うげえ!」

ドアと壁に挟まれ、最初に病室に入ろうとした男が呻き声をあげる。

だが狂骨は一度だけでなく、男が挟まれたまま二度、三度とドアの開閉を繰り返す。

そして四度目にドアを閉めた時に男が意識を飛ばしたと分かる。ドアを開け、思い切り前蹴りで蹴り飛ばした。

ドアの前にいた他の男たちが逃げるように後ろに下がる。

当然だ、今の彼らにとつてドアはもはやなんでも喰らう怪物の口の様なものだ。

次にドアをくぐった途端、同じ目に遭う。

男たちが怯んだとみるや否や、狂骨が勢いよく病室から飛び出た。

「そおいや!!」

「ぐふえ!」

狂骨は適当に近くにいた肥満気味な男一人の胸倉を掴み、頭突きを叩き込む。

そして頭突きで怯んだ隙に胸倉を掴んだまま腕を引つ掴むと、力まかせに背負い投げのように背中に担いだ。

肥満気味な男の体重はおそらく九十キロ近くあるだろうが、狂骨は軽々とその巨体を担ぎあげると、他の男たちにパスでもするかのよう  
に投げ飛ばす。

「う、うわああああ!!」

「助け——ふぎゆあ!!」

九十キロの肉の塊を投げつけられた男たちはその重量を受け止められるはずもなく、あつけなく押しつぶされる。

潰された男たちはその場で呻いて倒れているが、肥満気味な男だけは鼻血を垂らしながらもどうにか立ち上がる。

「お、お前…何者だ…?」

目の前にいる狂骨に向かって問いかける。

しかしその答えは背後から帰ってきた。

「教えてやろうか？」

「ッ!？」

暴れる狂骨に意識が向いている間に守は病室から抜け出していった。更にいつの間にか男の背後に回り込んでおり、思い切り肘を振りかぶる。

「正義の味方だとさー！」

後頭部に肘を思い切り叩き込むと、男があっけなく前のめりに倒れていく。

これで病室の前にいた一団は一通り片付いたが、まだ入り口の方からバタバタと他の組員が走ってくる音がする。

狂骨は音のする方に視線を向けながら、何やら照れくさそうに笑っていた。

「いや〜いざ言われると照れるね、正義の味方って言われるの。」

「なーに照れてんだか、自分で言ったんじゃないかあんだ。」

「いやー、そうだけどさあ、こうなんかむずむずする感じ？」

「はいはい：じゃあもうひと頑張り頼むよ、正義の味方さん。」

「はーい、任されて！」

張りきった声で狂骨が答える、その瞬間に病室から大声が響いた。

「ま、守姉!!窓から!!！」

「え、やば!？」

「美船!!！」

病室に目を向けると、男が一人窓をよじ登って来ていた。

しかもその手には拳銃が握られている。

先ほど内藤と呼ばれた男が持っていた銃をうっかり回収し忘れていたせいだった。

銃を持っている男が窓枠に膝を着き、銃を構えようとする。

だが急な危機に瀕しても狂骨と美船の無駄にうろたえず、すぐに行動に入った。

美船は病院の中に地面を転がりながら入り、先ほど男が持っていたナイフを拾いながら体を起こすと、同時に手にしたナイフを窓にいる

男目掛けて投げつけた。

刃物を投げつけられ、男が慌ててその身を伏せて避ける。

しかしそのおかげで隙が出来た。

「てりやあああ!!」

狂骨が窓にいる男目掛けて突っ込む。

そして銃口が向くよりも早く男に接敵すると銃身を掴み、銃の動きを封じたうえで思い切り殴り飛ばした。

男が銃から手を離し、窓の外に叩き落されて地面に力なく落下する。

狂骨は慣れた動きで銃を手にとるとマガジンを抜き取り、薬室に入っていた銃弾を抜くとスライド部分を外して分解、最後にスライドを地面におとして踏みつぶした。

流星に金属製のスライドは割れはしなかったが明らかに形が歪み、もう元に戻せないことは一目見て分かるくらいに変形していた。

「あつぶなかつた〜」

「やけに使い慣れてるわね、あんた…。」

「ま、まあそれは企業秘密で…。」

銃を慣れた様子で使う狂骨に守がじとつとした目を向けるが、狂骨は目を逸らす。

しかしこのまま病室に美船をいさせてはまずいと、二人が美船に外に出るように促し、皆で外に出る。

「よっし、じゃあここから入ってこれないように…でりやー!」

外に出たところで狂骨は105号室のドアに目を向けると、閉じたところでドアをぶん殴った。

つぶされない程度に殴られたドアは大きくゆがんでしまい、開閉が出来なくなってしまう。

「うっそ…。」

その姿を見て美船は茫然としているが、狂骨は明るく笑っている。

「これで安心、前だけ見て全員ぶっ倒そう!」

「強引だねえ狂骨、でも嫌いじゃないわやっぱこういうの。」

軽快に守が笑って見せる。

そうしているうちにまた新たな一団が皆の前に立ちふさがった。  
狂骨と、守が、構える。

新たな一団がこちらに向かってきても、二人の顔から笑みは消えなかった。

「よっし……これで最後かな。」

狂骨は病院前の駐車場にいた最後の一人を止まっていた車のボンネットに叩きつけ、その意識を断つ。

105号室から駐車場にかけて、まさに死屍累々と言った感じで人が横たわっていた。

ある者は力なく横たわり、あるものは呻き声をあげ、ある者は異様に曲がった自分の手足を押さえて苦しんでいる。

「助かったよ狂骨、私ひとりじゃここまでやれずに逃げ回ってるところだった。」

「気にしないでよ、だって正義の味方だし！」

「はいはい、ありがとう。」

狂骨の言葉に守が苦笑する。

その守の手には、美船の手がしつかりと握られていた。

美船は目の前でえんえんと荒っぽい光景を見せられたせいでさすがに疲れているような姿を見せるが、けがはなかった。

「なんか……すごいもの見ちゃった……」

「あはは……さすがに刺激が強すぎたかな……」

「あんた正義の味方の癖にやること荒っぽいのよね、美船に悪い影響が出ないか心配だわ。」

「いやいやいや、守さんの方が絶対悪い影響与えそうだから！」

思わず狂骨がツツコミを入れてみると、遠方からサイレンの音が聞えてきた。

その音を聞いて三人の緊張が僅かに解ける。

おそらく通報を受けた警官が駆けつけてきてくれたのだろう。



まあこのまま保護もとい連行されてタダで帰れるとは思っていないが、それでも美船の安全はたしかだろう。

安心したように皆の表情が緩んだ。

サイレンの音は徐々に大きくなり、病院の前までパトカーが一台やってきた。

三人は待つてましたとばかりに道に出ると、狂骨がパトカーに向かって手を振った。

「あれー、一台しか来ないんだ…三人で乗るの狭そうだなあ。」

まるでタクシーでも呼んでいるかのように狂骨が言った。

狂骨の言葉を聞いて、守もパトカーに視線を向ける。

そして暗がりのなか目を凝らしてパトカーを見ていると、パトカーが街灯の下を走り運転席を照らした途端、守が表情を変え声を上げた。

「ツツツ!!?!狂骨逃げて!!!」

「え、どうしたの守さ——」

叫び声と共に守が美船を駐車場に向かって突き飛ばす、そして狂骨がつい守に視線を向けてしまった瞬間だった。

狂骨と守にむかってパトカーが突っ込んだ。

狂骨は猛スピードで真正面からパトカーに轢かれて吹き飛び、守は避けようとするも太ももの辺りを思い切り跳ね飛ばされ、地面に倒れこむ。

吹き飛んだ狂骨の身体は地面に落ちても勢いは止まらず、アスファルトの地面でスーツをズタズタに傷つけながら転がり、動かなくなつた。

「ぎよ…狂骨…うが!?!」

守は地面から起き上がろうとしたが、太ももに走る激痛のせいで立つことが出来ず、再度その場に倒れてしまった。

折れている。

守は確信した。

右足の太ももの骨が折れている。

守の右足は折れ曲がりさえしてはいなかったが少しでも何かに触

れると激痛が走り、吐き気さえ襲い掛かってきた。

「ま、守姉!!!守姉!!!」

美船だけは守が咄嗟に突き飛ばしたおかげで擦り傷程度で済んだ。美船が無事だったことを確認すると守は微かに表情を緩めるが、パトカーのドアが開く音を聞くと歯を食いしばって眉を吊り上げ、怒りの表情を浮かべた。

そして激痛が走る右足を無理やり動かして立ち上がろうとする。

またしても倒れそうになるが咄嗟に美船が守を支えたおかげで、美船は立つことができた。

パトカーのドアから出てきたのは警官ではなかった。

派手な柄シャツに、趣味の悪い豪華な金のアクセサリを身に着けた男たち。

「なんだあんたら…いつの間に警官に転職したんだい？」

「いやー、ちよつと足が必要になってちいーつと借りたんだわ…そしてたらあんたらが飛び出してきて、困るなあ。」

男たちはたにたと下卑た笑みを浮かべながら、自力で立つことさえできない守を眺める。

おそらく、パトカー相手なら守たちが油断するだろうと、無理やり奪ってきたのだろう。

こんな警察に真っ向から喧嘩を売るような真似をして無事で済むはずがない、文字通りの最終手段だ。

しかし人身売買の事実が公になることと、今回の騒動を一部の組員の独断という形でトカゲのしつぽのように切り離し、いくらかの金をばらまくことを天秤にとり、後者を選んだのだ。

「しかしこれでお前らも終わりだ、でも俺らはやさしくいからよ、せめて仲良く海に沈めてやるから安心しな。」

「私がそんなことさせるかよ…。」

守が怒りで目を見開き、美船の肩から手を外して無理やり歩こうとするが、一歩前に踏み出そうとしただけで呆気なく地面に膝を着いてしまう。

まるで男たちに対してひざまずくように膝を着く守を見て男たち

は笑うと、そのうちの一人が守の顔に思い切り蹴りを叩き込んだ。

「ぐあッ?」

「守姉!!!」

咄嗟に腕で顔を庇ったものの、固い革靴で思い切り顔面を蹴られたため守があっけなく地面に仰向けに横たわる。

意識こと失いさえしなかったが視界が歪み、鼻から生ぬるいなにかが零れ落ちる感触が顎に向かって伝わる。

起き上がろうとするが、地面が揺れるせいで全く起き上がることができない。

守は虫のように地面を這った。

這いながら立ち上がろうと地面をもがくが、そのたびに地面が反転し、歪み、起き上がり、沈むせいでどうにもできない。

それでも守は立とうとする、立たねばならないと、何かがそうさせる。

不意に守の身体に何かが覆いかぶさった。

突然何かが身体に触れる感触にびくりと守が身体をこわばらせたが、どこか安心する感触に、こわばりはすぐさま解けていく。

その感触によって、守は朦朧とした意識が一気に明瞭になった。

「み…みふ、ね。」

美船が守を庇うために、その身体に盾のように覆いかぶさっていた。

震えた歯が打ち鳴らされる音が守にまで聞こえてくる。

心臓は早鐘のように鼓動を早め、身体はがちがちに強張っている。

それでも、守を庇おうとする腕には力が籠められていた。

「だ…め…逃げて…。」

「い…嫌…。」

懸命に美船が腕に力を籠める。

その姿を見て男たちは苦笑いを浮かべて肩をすくめると、笑みを浮かべたまま容赦なく美船の横腹を蹴り飛ばした。

「うぎゅ…ッ!!!」

「み…ふねえ!!!」

それだけで呆気なく力を籠めた美船の腕は解け、地面を転がった。しかし転がりながらも横腹をおさえ、美船が立とうとする。だが非情にも男たちはそんな美船に対して足を振り上げ、またしても蹴り飛ばそうとする。

その光景を見て、守は立った。

折れた足の激痛も、歪む景色も、体にまどわりつく吐き気も、すべてが怒りによつてかきけされ、立った。

立った、が走れない、歩けない。

地面に倒れこみながらも、守は美船の元に向かおうとする。しかし間に合わない。

男たちの振り上げた足が、美船に向かって落とされる。

その瞬間、男たちが宙を舞った。

比喩ではなく、文字通り、見えない何かによつて掴み上げられたかのように身体が宙に浮き、振り回される。

男たちは突然の超常現象に呆気にとられていたが、自分が置かれた状況に気づくと大声を上げ手足を振り回して暴れだした。

「な、なんだこれ!!」

「なんだ…なんかが、なんかが俺の身体に触ってる!!!?」

「た、助けて!助けてくれ!!!」

男たちは暴れていたが、その手足が何かに押さえつけられるかのように動きを止めた。

ありえない形で服のしわができあがり、ぎちゅぎちゅと関節の軋む音が響く。

まるでそれは、見えない巨大な掌に掴まれているようであった。

「なに…これ…」

守は啞然とした様子でその光景を眺めていた。

しかし美船は違った。

美船はまるで見えない何かが見えているかのように男たちではなくはるか頭上を見上げている。

ぎちゅ、ぶつん、ぐきや、と音が響いた。

男たちの肋骨が折れ、肩が外れ、骨のひしゃげる音。

「ぶく、ぶく……ぶく……あ……あ！」

ごぶりと男たちが口から血を吐き出し、白目を剥くと口から蟹のよ  
うに泡を吹く。

鮮血に染まった水泡がぶくぶくと口の端から噴き出て頬を流れ、見  
えないなにかを伝いながら地面に滴り落ちる。

「だ、だめ……死んじやう……！」

美船が男たちを掴む見えない何かに近づき、頭上に向かって必死に  
呼びかける。

だが美船の訴えもむなしく、男たちは意識を失ってから解放され  
ることはなく、締め付ける力は増していき――

ぶちゅ。

音がした。

どう形容していい音が分からなかった。

もしかしたら血肉がパンパンにつまった麻袋に穴を突いたらこん  
な音がするのかな、と、想像するくらい。

当たり前だ。

人がつぶれ、内臓が口からはみ出た音など、どう形容したらいいの  
だ。

身体をつぶされ、男たち――いや、肉塊とかした物体がようやく見  
えない何かから解放され、地面に落下する。

肉塊から噴き出た血が大量に滴り、見えないなにかのシルエットが  
おぼろげながらも姿を現す。

それは間違いなく巨大な掌であった。

五指に分かれ、それぞれに血が滴り、人の手のシルエットを見せる。  
だがそれはとどころに隙間が空き、細かった。

そう、人間の骨がそのまま形になったような姿だった。

そして、骨の手はゆっくりと動き出すと、今度は守に向かって掌を  
向けた。

「嘘だ……ろ……。」

掌が近づいてくる、が、守はろくに動くことができない。

またしても地面を這って逃げようとするが、ゆっくりと動く手は

徐々に速度を上げ、守に迫る。

だが、守は少し安堵した。

狙われたのが自分でよかった。

自分にできることは、少しでもこの謎の怪物から時間をかけて殺されること。

その間に美船が逃げられるかもしれない。

だから、這う。

少しでも、1分、1秒、秒に満たない時間でも、稼ぐ。

背中越しにもう何かが迫ってきている気配を感じる。

そうだ、こい、こつちに。

這う。

這う。

這う。

背中に何かが触れる感触を感じる。

ああ、終わったんだと、そう、守は思った。

「守姉！逃げて——きゃああああ！！！！」

「美船？！」

美船の声が響くと同時に悲鳴が鳴り、守が背後を振り向く。

そこには守を庇って代わりに謎の腕に捕まった美船がいた。

謎の腕はギリギリと美船を締め上げ、力が強まる度に悲鳴がどんどんと弱まり、かすれた呼吸音へと変わっていく。

「あ……あも……り……ねえ……」

「美船！美船！！」

「に……げ……」

「だめ……！美船を離せえ！！」

守は必死に立ち上がると見えない腕に縋りつくかのようにしがみつか、あつけなく弾き飛ばされる。

地面に倒れると折れたふとももに激痛が走り、息が詰まる。

腹膜がせりあがって肺を圧迫し、息ができないせいで胃液が逆流し、酸っぱいものがど元までこみ上げてくる。

それでも、口から黄色い胃液を吐き出しながら、痛みを気合でこら

えて立ち上がり、腕に向かって縋りつく。

腕に滴る血に黄色い胃液が混じり、奇妙な色になってまじりあつた。

すると、突然謎の手が美船を締め上げる力が少し緩んだ。

美船のか細い呼吸が徐々に大きくなっていく

同時に守は見えなかったはずのものが、自分が見えているようになっていくことに気づいた。

目の前に、血染めの骨がいた。

骨である。

巨大な人骨とした形容できない存在。

巨大な人骨はその手で美船を握りしめており、頭上を見上げれば眼球のない窪みの部分を美船に向けていた。

まるでないはずの目で見つめるように。

さらに顎がぎりぎりとならんだ音を立てて稼働すると、声が聞こえてきた。

『ねえ…。』

それは声というより、脳に直接響くような、不思議な感覚であった。

『どうして君は、逃げずにこの女を守ろうとするの？』

『なんでって…。』

『教えてよ。』

美船が言葉を詰まらせると、ぎゅつと骨の手が力を籠める。

苦しさに美船が小さく呻き声をあげるが、覚悟を決めたかのように口を開いた。

『好き…。だから。』

『美船…。』

『うそだ…。』

美船の答えに、骨の怪物が静かに、しかし怒りを込めた様に言う。『そんな理由で、命を捨てられるなんて、うそだよ。』

『嘘じゃ…。ねえ!!』

美船の言葉に奮起した守が、転ぶように体を前に泳がせながらも、骨の手をぶん殴った。

そのまま骨の手にもたれかかりながら何度も、何度も、殴り続ける。肉塊から噴き出した血で染まった守の拳。

何度も固い骨を殴った拳はたちまち肉塊の血ではなく守自身の血で染まっていく。

それを一切意に介さず、守は殴り続けた。

「美船はなあー私のせいで昔死にかけたんだよ!!」

殴る。

「私がお守をサボったせいで、美船は昔海で溺れて死にかけたんだ!」

殴る。

「そんな私にも美船は何も言わなかった!全部許してくれた!」

殴る。

殴る。

殴る。

「だから私はなあ!一生かけてでも美船を幸せにしてやるんだよ!」

殴る。

殴る。

殴る。

殴る。

殴る。

殴る。

殴る。

「てめえなんか…分かるかよ!!!」

もう、守の拳は、とつくに砕けていた。

拳骨はつぶれ、小指はひしゃげ、拳が歪んでいる。

それでも守は殴り続けた。

「…守姉は…ずっと私のそばに…いてくれた…。」

美船が、細い手足を必死に動かし、骨の手から逃れようともがく。

「お父さんが悪いことしてるのはしってた、お母さんがそれを見てみぬふりしてるのも、そのせいで私はみんなから嫌われてた…。」

美船がもがけばもがくほど、骨は握る力を強める。

それでも美船はもがいた。



拳が壊れても殴り続ける守と感覚を、痛みを共有するように。

「人間の友達なんて…好きだなんて…愛してるって言える人なんてもう守姉だけなの!!!」

叫んだ。

血を吐きそうな勢いで、叫んだ。

「守姉がいらないなんて…絶対に私は嫌…死んでも…嫌なの!!!」

声が響く。

するとその声の響きにかき消されたかのようにふっ、と、骨の怪物の姿が消えた。

突然の出来事に美船はうまく着地できず、地面に横たわるように落下した。

守も支えになつていた手がなくなったせいでその場に転んでしまふ。

お互いに寄り添いあうように地面に倒れた二人は互いが目の前にいるとわかると、お互いの無事を確かめるように抱きしめあった。

「美船…無事!？」

「守姉…大丈夫だけど、私より守姉が!」

「私は大丈夫…よかった…美船が無事なら…!」

二人は安堵しきつた様子で声を掛け合う。

そんな姿を眺めるように、一つの人影があった。

その人影はいかにも人ならざる雰囲気を感じていた。

背が高く、痩せた女であった。

その髪はまるで色素がないかのように白く透き通り、肌も白を越して蒼く見えてしまうほどに薄い白色をしていた。

身にまとっている衣服も、死に装束である

顔立ちも人形のように美しく、その美しさがまた人ならざる雰囲気を助長させている。

ただ、その顔に煌く瞳だけは別だった。

まるで紅玉のように鮮やかな赤。

その赤だけがまるで彼女が生きている証であるかのように、生き生きと煌いていた。

『…むかつくなあ。』

そつとその人影は、二人を眺めて呟いた。

『私には、いなかっただのに…。』

そしてその哀し気に呟くと、姿を消す。

まるで最初から何もいなかっただかのように。

その姿が消えたとたん、道路の方からなにやら何かが動く音が微かに響いてきた。

ぎしぎしと何かが軋むような音を響かせながら、そいつは現れた。

ズタボロになった黒いスーツ。

綺麗な直毛の白髪は乱れ放題で、ところどころに血と思しき赤い液体がこびりついている。

身体が動くたびにぎしぎしと、まるで油を差していない機械が無理やり動かされているかのような音が響く。

「あいつらあああ!!許さないぞ私は!!温厚な狂骨さんもブチキレだよあれは!!!」

ズタボロになった狂骨が怒りの形相を浮かべながら意識を取り戻していた。

そして怒りの形相で駐車場を眺め、その惨劇の様相を見るとぽかーんと口を空け、困惑の表情を浮かべる。

「……………なに、これ?」

## 28話 因縁

時は八咫総合事務所の面々が海水浴に向かう前日にさかのぼる。

鈴音は“黒猫”というカフェでツツジと会っていた。

内装を見る限りでは老舗という雰囲気か漂っている良いカフェで、店内には常連らしき客の姿がちらほらみえる。

鈴音とツツジが座っている席の近くでも、なにやら大学生らしき四人組がこみま？とやらについて話し合っていた。

“こみま”といえば花鈴と化け猫の会話の中でたまに聞いたことがあったな、と鈴音がちらりと学生たちに視線を向けると、そのうちの一人と目が合った。

綺麗な銀髪をぱつっんに切りそろえ、黒い衣服を身にまとったかなりの美人。

彩度の高い黄色の瞳がどことなく狂骨と似ていた。

「…。」

ほんのわずかな時間、視線が交差する。

だが銀髪の女性は隣にいた長い黒髪を束ねた女性に“どしたの留美子？”と声をかけられるとすぐに視線を外す。

鈴音も少し不躰なことをしてしまつたと反省し、視線を戻すと目の前に置かれたコーヒーを一口飲んだ。

中々美味しい。

適当にアーモンドコーヒーとやらを頼んでみたが、普段飲むベシツクなコーヒーと香りが違って味わい深い。

店の雰囲気も程よく常連がいる空間は心地よく、今度一人でも訪れてみようと思つた。

ツツジは店を気に入つた様子で鈴音をみて小さく笑みを浮かべる。

「どうだい、いい店だろ？」

「はい、気に入りました。」

「そりやよかった、で、話って何だい？」

ツツジは鈴音に向かつて小さく首をかしげる。

そう、今日ツツジと会いたいと申し出たのは鈴音である。

そしてツツジが会話のために選んだ店がここだった。

「はい…実は、事務所の皆と海に行くことになりました。」

「ほう、そりやよかったじゃないか、ゆっくり羽伸ばしてきな。」

「ただ、その招待券をくれたのが安倍晴明なんです…。」

「…何か、裏があるかもしれない？」

「はい、考えすぎかもしれません。念のため。」

「…分かった、私の方も気を付けておくよ。」

ツツジは苦い顔をしながらコーヒーを口に運ぶ。

そして一息つくると鈴音に視線を向けた。

「…そう考えるってことは、最近何かあったのかい？」

「はい…最近カマイタチが暴走する事件があったんですが、一度八咫鳥に保護されていたと聞きました。」

「ほう…そりやあのクソガキが関わってそんな臭いがするねえ。」

クソガキ、とはおそらく安倍晴明のことであろう。

ガイア広しと言えども、あの人をクソガキ呼ばわりするのはツツジくらいだろうなと鈴音は小さく肩をすくめた。

「とはいえ、私の方もまだあのクソガキについてちや全然情報はあつまってないんだがね。」

「以前昔馴染みに話を聞くとおっしやてましたが、それも？」

「ああ、皆口を閉ざしてる…」

頭を掻きながら不服そうな口調でツツジが言う。

そして煙草が入った胸ポケットをまさぐるが、灰皿のないテーブルを一瞥するとため息を吐きながら椅子にもたれかかる。

「しかし、そうなつてくると鈴音、あんたの仲間は信頼できるのかい？」

「…。」

ツツジの言葉に、コーヒーカップを握る鈴音の力が強まる。

「…どうなんだい？」

「分かりませんが、それが素直な言葉です。」

小さく息を吐き、答える。

分からない、当然だ。

そもそもこの一件、まだ不確かなことが多すぎる。

失踪した祖父の行方、鹿角家に受け継がれてきたもう一本の太刀、安倍晴明の目的。

それに八咫総合事務所の面々も、過去の記憶が残っていない。

彼女たちになにかしら晴明の手が加わっている可能性は低くはない。

故にわからない。

だが、同時に言えることが鈴音にあった。

「でも、私にとっては、もう皆は家族みたいなものなんです。」

「…。」

「私は、皆を信じます。それだけです。」

「分かった、肚決めてるなら十分だ、私は何も言わないよ。」

真つすぐな言葉に、ツツジが微笑む。

その後、互いにコーヒーを飲み終えるまで、無言で刻を過ごした。

近くの席からは相も変わらず学生たちの賑やかな話声が聞こえてくる。

その声もどこか、普通の日常らしく二人にとっては心地よかった。

空気に浸るようにつくりとコーヒーを飲み終えた二人は会計を終え、入り口で小さく別れの言葉を交わす。

そして互いに背を向けようとしたところで、鈴音が不意に口を開いた。

「あの、ツツジさん。」

「ん？」

「良かったら今度、父や、祖父…おじいちゃんやおばあちゃんのこと、教えてください。」

「どしたんだい、いきなり？」

「私は花鈴…妹以外の家族のこと、何も知りませんから。」  
「…。」

「それだけです。」

相も変わらすの無表情のまま、鈴音が言う。

しかしその表情の中には一抹の寂しさの様な、微かな憂いの様なものが見えた。

その表情を見るとツツジは目線を落とし、小さく頷くと鈴音に近づき、突然その頭をわしやわしやと乱暴に撫ではじめた。

いきなりの出来事に鈴音は目を丸くする。

「つ、ツツジさん？」

「つたく！あんたはいい子だねえ！そんなもんいくらでも話してやるよ！」

ツツジはしばらく頭を撫でた後、ポンと鈴音の肩を叩いて離れる。

そして少しばかり照れくさそうに笑みを浮かべ、表情を隠す様に背を向ける。

「まあ、あれだよ、私は鈴音のことはまあ…勝手に孫みたいに思ってるから。」

「ツツジさん…。」

「…その、まあ…話してやるよ、いろいろな。」

「…ありがとうございます。」

そうして二人は別れた。

その翌日、鈴音は八咫総合事務所の面々と共に秋奈町を離れる。

一人町に残ったツツジは、普段通り過去の知り合いの足跡を辿りつつ、情報収集に勤しんでいた。

鈴音が町を経ってから二日。

海沿いの町である事件に八咫総合事務所のメンバーが巻き込まれていたその日の夜、ツツジは帝都の繁華街を一人歩いていた。

いくつかの居酒屋を梯子し、ややふらついたような足取りで人ごみをかき分けながら通りを歩く。

そのまま大きな通りを離れ、トタン小屋の様な飲み屋が並ぶ小路を

くぐり、やがて誰もいない薄暗い裏路地に辿り着いた。

ツツジがその場に足を踏み入れると放置されたごみにたかっていたネズミが一気に動き、物陰や排水溝に逃げ込む。

同時に、ふらつきながら歩いてきたツツジの足がびたりととまり、酔いに揺れているようだった身体が真つすぐに伸びる。

そして胸元にあつた煙草、ベージュの下地に濃紺の文字が刻まれたものを一本口にくわえると、火を点けた。

「どうだい、遊ぶにはよい場所だろうか？」

一人、ツツジが呟く。

まるで誰かに問いかけるように。

ツツジの声に応えるように、影が二つ、現れる。

一体はツツジの後方から、もう一体は建物の屋上から飛び降りてツツジの前に立つ。

背後にいたのは一人の巫女服に身を包んだ少女。

だがその頭からはイタチの耳の様なものが生えており、強いながらもどこか不安定な、揺らぐような妖力を纏っていた。

もう一人は黒いスーツに身を包んだ少女で、頭からは犬の様な耳が生えている。

犬耳の少女がそつと口を開く。

「気づいていましたか。」

「そりゃあね、酔ったふりにかかってくれてババアは嬉しいよ。」

「このところ、我々を探っている様子ですが…何が目的です？」

眼を鋭く細め、犬耳の少女が問う。

その言葉にツツジは嬉しそうな笑みを浮かべた。

「我々ね、とうとうそつちから出向いてくれたわけだ、八咫鳥の嬢ちゃん。」

「…晴明様に仇なす気であれば、相応の手段を取らねばなりません。」  
「仇をなすかはあのガキ次第だよ、色々聞かなきゃいかんことがあります。」

「貴様…晴明様になんという口を…！」

犬耳の少女の顔が憤怒に歪む。

同時に、風が突如としてその場に吹いた。

ツツジの頬を前から後ろに撫でるように、くくった髪が浮き上がるほどに強い風が流れる。

「むっ!？」

ツツジは不穏な気配と妖力が強まりを察知し、とっさにその場から飛び退いた。

寸前までツツジがいた場所を土埃やごみを吹き飛ばしながら強烈な空気の圧の様なものが通り過ぎていく。

それは真空波であった。

カマイタチが放つような、見えない真空の刃。

ツツジが背後に目を向けると、霊剣を発現させた巫女の姿が目に入る。

巫女はスツと正眼に霊剣を構えながら、冷めた感情のない瞳をツツジに向ける。

「…晴明様を愚弄するのですか？でしたら私は貴女を許しません。」

「巫女！落ち着いてください！」

「落ち着くのは貴女です雷獣、やはりこの方は晴明様に仇なす逆賊です、直ちに処分しなければ。」

犬耳の少女、巫女に雷獣と呼ばれた少女が突如としてツツジに攻撃を加えた行為を嗜めるが、巫女は聞く耳を持たない。

その様子にツツジは呆れた様に肩をすくめ、煙草をくわえたまま口の端から紫煙を吐き出す。

「なんだい、仲間割れは勘弁しておくれよ。」

「減らず口を叩く暇はありませんよ。」

巫女が正眼に構えた霊剣を振り上げ、上段から振り下ろす。

同時にカマイタチの刃がツツジに向かって放たれた。

だがツツジは霊剣を出すまでもなくカマイタチの軌道を読み、軽く横に跳んで避ける。

「ほう、カマイタチかい、懐かしいね…昔を思い出す。」

思わずツツジは呟いた。

カマイタチは保護されるようになってから久しいが、過去は身近な



人間に害のある妖怪として大量に陰陽師に狩られてきた。

故に古いカマイタチは人間に怨恨を持つものもおり、それらとツツジは相對したことがあった。

長い人生の中、数多の妖怪との闘いを潜り抜けてきたその経験値は並のものではない。

カマイタチを牽制にするように巫女が靈劍を八相に構えツツジに向かつて駆け出す。

巫女はツツジが劍の間合いに入ると八相に構えた靈劍をそのまま袈裟懸けに振り下ろすと見せ、急に姿勢を低くすると足に向かつて横薙ぎに靈劍を振る。

脛斬り、一部の劍術流派では多用される技術である。

競技劍道においては反則であるため見受けられないが、競技薙刀においては決まり手の一つとして認められており、脛斬りを得意とする流派には薙刀術を併伝とするものがある。

顔や上半身を危険にさらし防御がおろそかになる、相手の戦闘力を奪うことはできるが致命打にはならないなど、リスクも多々あるが有効な攻撃手段である。

だがツツジはその場から退いて避けようとせず、逆に一步前に踏み込んで靴裏で巫女の腕を蹴り、脛斬りの動作を止めた。

「甘いねえ。」

呆気なく攻撃を止められた巫女の表情に微かに驚きが浮かぶ。

だが巫女はすぐさま腕を引き、上段に靈劍を構えなおして真っ向からツツジに斬りかかったが、またしてもそこでツツジが前に向かつて踏み込む。

ツツジは先ほど脛斬りを止めた時点で既に劍の間合いを踏み超えていた。

巫女が靈劍を振り下ろすよりも早くツツジは懐に入り込むと、まず靈劍を持つ巫女の腕に向かつて左の前腕を跳ね上げるようにぶつけて制す。

ツツジは踏み込んだ勢いを利用して右の拳を巫女の顔面目掛けて打ち込むが、寸でのところで巫女がツツジの拳を首を捻って避ける。

だが突き抜けたツツジの拳はそのまま戻らず、巫女の奥襟を掴んだ。

そのうえで口に啣えていた煙草を不意に巫女の顔目掛けてプツ、と吹き付けた。

一瞬、ほんの一瞬巫女の意識が吹き付けられた煙草に向かつてしまふ。

その隙をついてツツジが左の貫き手を巫女のわき腹に叩き込む。

「あ……があ!?!」

肋骨の隙間を穿ち、内臓を直接抉りぬくような強烈な貫き手の一撃。

巫女がその苦しみに思わず身体をくの字に曲げ、顔を歪ませて嗚咽の声を漏らす。

さらにツツジは掴んでいた奥襟を引っ張りながら巫女の顔面に容赦なく右の膝蹴りを叩き込んだ。

巫女が一瞬白目を剥き、意識を飛ばす。

顔面に膝蹴りとは、それほどまでに必殺の一撃となりうるのだ。

ツツジがさらにそこでもう一発膝蹴りを叩き込もうとしたが、そこに一つの影が割り込んでくる。

「巫女を離せ!!」

雷獣が雷を纏わせたミドルキックをツツジに向かって放つ。

ツツジはさっと巫女から離れてミドルキックを避けると、雷獣に向かって身構えた。

「ちよつと遅かったねえ、相方はあれだよ。」

「黙れ!」

巫女は地面に片膝を着いてはいるがまだ意識が朦朧とした様子であり、膝蹴りによって噴き出た鼻血が地面に落ちる様子を焦点が合わない目で見つめている。

雷獣が左ジャブ、右ストレートとワンツーパンチを放つ。

ツツジは軽く首を振って二つの拳を避けるが、雷獣はツツジが避けたところを狙って右のハイキックを放つ。

だがツツジはハイキックが届くより早く雷獣の軸足を軽く足で払

うと、それだけで簡単に雷獣はバランスを崩して転んでしまう。

「なっ…くそっ!!」

雷獣は転びながらも咄嗟に地面に手を着き、身体を転回させながら後ろ回し蹴りを放つが無理やりの体勢で放たれた蹴りなど当たるものではない。

しかし雷を纏い、青い稲光が弧を描きながら放たれる蹴りはツツジの接近を防ぐことはできた。

ツツジは軽く身体を引いて避けるが、その雷に小さく口笛を鳴らす。

「こりゃ、組討ちは使えそうにないか。」

「減らず口を…!」

雷獣が立ち上がり、蹴りは簡単に使うのは危ないとみたのかボクシングのように拳を構え、パンチのコンビネーションを繰り返そうとする。

雷を纏った拳を武器に、左の拳を上げてフェイントを見せてから右のストレートを放とうとした。

しかしフェイントを挟んだせいでわずかに初動が遅れた。

ツツジはそのフェイントを軽く見切っており、初動が遅れた隙を突いて雷獣の拳が届くより早く右の上段回し蹴りを放った。

攻撃姿勢に入っていた雷獣がその蹴りを避けられるはずもなく、ツツジの上段蹴りがまともに雷獣のこめかみを捉える。

さらにその蹴りは足の甲ではなく靴の爪先を利用した蹴りであり、力が小さな一点に集中した一撃になっていた。

「…ツツ!」

「蹴りつてのはこう使うもんだ。」

雷獣の体勢が揺らぐ。

膝が折れ、身体が揺らぎ、ぶれる視界の中懸命に倒れまいと食いしばって耐えるが、その姿は隙だらけであった。

「精進しな。」

ツツジの掌底が、雷獣の顎を撃ち抜く。

すると雷獣の身体から糸が切れた人形のように力が抜け、地面に膝

を着くとそのままうつぶせに倒れ伏した。

「ち…らいじゅ…うー」

倒れる雷獣を見た巫女がまだ意識が朦朧とするなか立ち上がるが、まだ霊剣をまともに構えられないほどにダメージが残っているらしい。

正眼に構えようとする霊剣の切っ先はふらふらと揺れており、身体  
の軸も大きくぶれている。

「あんたら今日のところは帰んな、私がただのババアじゃねえってわ  
かっただろう？」

「く…そ…い…」

ツツジは言いながら地面に落ちたまままだ火の残っている煙草を  
踏み、火を消した。

つまりツツジは煙草一本を吸い終えるまでにこの二人を倒したと  
いうことになる。

実力差があることは明白であった。

だがその時だった。

「!!？」

ツツジは背に、するりと冷たい何かが、滑るように這う感触を感じ  
た。

氷のつぶてが背をすりと撫でていったような、冷えと同時に強烈  
な熱ささえ感じる、そんな感触。

ツツジはまるで急な物音に驚いた猫の様に飛び跳ねてその場から  
逃れた。

先ほどまで浮かんでいた余裕のある表情は消え失せ、急に溢れるよ  
うに噴き出た冷汗を浮かべながら苦虫を噛み潰したように歯を食い  
しばる。

そのツツジの背には何の変化もなかった。

ただ殺気を当てられた、それだけである。

もしその気であったならお前を斬ることが出来ていたという、明確  
な殺意。

その殺気を鋭敏に感じ取ったツツジが、背中を斬られる感触を鮮明

に感じ取ってしまったのだ。

殺気に気づいたツツジの視線の先に、一人の男がいた。

背の高い、一見ひよろりとした細身の老人であった。

老人は夏の夜だというのに黒い、光沢のない漆黒のスーツを上下に身を包み、その下には薄いタートルネックの黒いインナーを着ている。

靴も革靴だというのに故意に消されたかのように光沢がない黒で染まっていた。

だがその肌は対照的に絹のように白く、年老いているというのに不思議と艶やかな美しさがある。

顔立ちも整っているが、特に目を惹くのは白い肌の中に煌く赤みがかかった焦げ茶色の瞳。

髪は微かに白髪が混じった癖のある長い黒髪を首元で無造作に束ねていた。

ツツジはその姿に嫌というほど見覚えがあった。

最後に出会ったのは二十年程前だが、ツツジにとってその顔は決して忘れられる存在ではなかった。

「久しぶりに顔突き合わせたのに、とんだご挨拶じゃないか……  
鈴宗。」

老人の名は、かつのすずむね鹿角鈴宗。

失踪した鈴音と花鈴の祖父であった。

## 29話 交錯

ツツジと、鹿角鈴宗が互いに向き合う。

鈴宗は視線をツツジから外さぬまま、巫女に向かって掌を向けるとゆつくり口を開いた。

「君たちは、下がちなさい。」

「…しかし!!」

「言い方が悪かったか…失せろ。」

「ッ!」

鈴宗の言葉に巫女が反論しようとするが、有無を言わさぬ圧を籠めた鈴宗の言葉に巫女が身体を硬直させる。

その姿は知らぬ間に肉食獣の檻に迷い込んだ小動物の様であった。獅子を前にした野ウサギが、獅子の機嫌を損ねてしまえばどうなるか。

結果は火を見るよりも明らかだ。

巫女は硬直した身体と、突如として湧き上がる恐怖の震えを必死に抑え込むように荒く呼吸を繰り返しながら、気を失った雷獣の元に向かう。

雷獣を抱え、巫女がその場を離れるまで、ツツジと鈴宗は無言で互いを見つめあっていた。

そして二人がその場から姿を消すと、鈴宗が再びゆつくりと口を開く。

「未熟と言えど、あの二人は八咫鳥の構成員…その二人を霊剣さえ出さずにあしらうとは、流石だ…。」

「…。」

「…と言いたいところだが。」

微かに、鈴宗の眉がひそめられ、表情に陰しさが浮かぶ。

「衰えたな、ツツジ。」

「はっ…言ってくれるね。」

「昔のお前なら、殺気を当てるまでもなく気づいていた。」

落胆を籠めた言葉を鈴宗はツツジに向かって放つが、ツツジはその言葉に微かに微笑んで見せた。

その笑みはまるで言葉に籠った負の思念をするりと受け流してしまふような、緩やかな笑みだった。

穏やかさに、一抹の憐みを含んだような、哀しい笑み。

「そりや違うね、私が衰えたんじゃない…てめえが変わっちまったんだ、鈴宗。」

「…。」

「何人殺した？」

微笑みを浮かべたまま、ツツジは鈴宗にそう問いかけた。

その言葉に鈴宗の気が微かに揺らぐ。

ほんのわずかにだが、ツツジの言葉によって鈴宗の呼吸が乱れを見せたのだ。

「数を数えるのは…どうに止めた…。」

「そうかい…。」

「…変わったのは俺か？」

「ああ。」

ツツジはそう断言する。

「昔のてめえは、人を殺すときに少しくらいの心の乱れはあつたよ…今はそれが無え。」

「…。」

「慣れすぎたな…。」

「そう…かもな。」

鈴宗が呟くようにそう言うと、沈黙が二人を包んだ。

二人だけが立つ路地に、ゆるやかな風が吹く。

鈴宗からツツジに向かって。

夏の熱気を孕んだ風が吹く。

互いに、間合いには入っていない。

いや、入らないどころか間合いよりもさらに数歩、遠い場所にいる。それが互いに分かる。

不思議と分かってしまう。

呼吸か、足の置き場か、表情か、会話か、臭いか、分らない。

それでもまだ間合いとは遠い場所にいる。

それだけは不思議と理解できた。

ツツジの顔には自然と笑みが浮かんでいた。

鈴宗の顔からも険しさが薄れ、無表情ながらも不思議と穏やかさが浮かんでいるようだった。

「昔より、少し遠くなつたかい？」

「ああ…。」

「あの頃はもう二センチは近かった。」

「遠いな…。」

「ああ、遠い。」

互いの間合いの距離が、二十年前より二センチ離れていた。

二センチ。

長さにして親指の半分程の、わずかな距離。

だがその二センチが二人にとってはたまらなく遠い距離だった。

「懐かしいな、この感覚。」

「おう。」

鈴宗の言葉に、ツツジが頷く。

「ダメだな。」

「何がだい？」

「今日はお前を止めに来たんだ、ツツジ。」

「そうだったのかい…。」

「何故、八咫鳥を…安倍晴明を探ろうとする？」

「…。」

「お前も分かっているはずだ、奴は俺やお前個人の力が及ぶ存在ではない。」

「けっ、ムカつくこと言いやがる…だが、私の目的はあのクソガキじゃねえ、お前だよ鈴宗。」

顔をしかめながらツツジが吐き捨てるように話し、鈴宗が眉をひそ



める。

「俺を…？」

「“姫斬り”…鹿角の家にあった刀、覚えてんだろ？」

「…そういうことか。」

「ああ、てめえのかわいい孫娘とあたしはメル友なんだよ。」

にやりと少し得意げに笑うツツジを見て鈴宗は顔をしかめる。

「…俺も、話は聞いた、奴——清明からな。」

「じゃあ…てめえは何も思わなかったのかい…？」

「…。」

「いくらなんでもおかしいだろ、お前…せっかく退魔士の世界から遠ざけた家族全員、結局こっちの世界に巻き込まれてやがる。」

ツツジの顔から笑みが消える。

同時に目線が鋭く、鈴宗の顔を真つすぐに捉えた。

鈴宗のその目線に真つ向から向き合い、答えた。

「…奴の思惑が関わっているとは、分かっている。」

「…。」

「だが、今の俺にはどうすることもできない。」

真つすぐに、あまりにも真つすぐにツツジに向き合いながら鈴宗は答えた。

清明の思惑が関わっていることは明白だと。

彼が間接的に息子とその妻の殺害に関わり、孫娘をこちらの世界に巻き込んだことも。

そして鹿角家に秘められた妖刀、姫斬りが目覚めたことも。

全てを理解しながらも鈴宗はどうすることもできなかった。

それが答えだった。

「奴が俺を必要とした理由、それは安倍清明が天皇として…いや、奴個人の目的を果たすうえで必要となった八咫鳥という組織を作るためのコマだった。」

「それも、今となつちや必要はない…つまりお前はもうあいつから必要とはされてないということか。」

「ああ…それでも、俺を殺すには奴も相応のコマを犠牲にする必要が

ある：俺は半ば生かされているんだよ：奴にな。」

鈴宗の顔が強くゆがむ。

その肌にはひび割れのように深く強いしわがはしり、静かながらも屈辱による怒りが溢れ出す。

「それに：唯一残った肉親も、今は八咫鳥に入っている：尚更どうすることもできん。」

「唯一、かい。」

「ああ：もう、唯一だろうツツジ？」

鈴宗の問いに、ツツジが口を歪ませた。

その表情でツツジの答えを察した鈴宗の表情から、怒りが消えた。力の入っていたしわが薄くなり、微かに目が細まる。

その表情が示すものは、悲哀。

「逝ったか：花音<sup>かのん</sup>が。」

「少し前に、な。」

鈴宗の言葉に、ツツジが答える。

花音とは、鹿角花音。

鈴宗の妻であり、鈴音と花鈴の祖母にあたる女性の名であった。

「お前が一人戻ってきたと聞いて、分かつてはいたんだ。」

「当たり前だ、私が花音から離れるものかよ。」

「最期にお前が：ツツジがいたなら花音も本望だったろう。」

「馬鹿言うんじゃないよ。」

まっすぐに、鈴宗を見据えたツツジが言う。

その真つすぐとした目線から、鈴宗がほんの微かな時間、秒にも満たない絲の合間、目を逸らした。

「…。」

「今、詰められたなあ：二センチ。」

物憂げな表情を見せながらツツジが言った。

二センチ。

過去に比べツツジと鈴宗の間にできた、僅かながらも大きい間合いの差。

「分かっている。」

鈴宗が頷く。

間違いない鈴宗はツツジの言葉に動揺し、隙を晒した。

「何故、詰めなかった。」

「花音をダシに、お前をぶちのめそうだなんでできないよ。」

「：花音は、最期まで俺を待っていたか。」

「当然だろう、バカが。」

「：そうか。」

ツツジの言葉を聞き、鈴宗が大きく息を吐いた。

呼吸を晒す。

間合いの外でなければ決してしない行為である。

そうして鈴宗は身体の色を抜くと、ゆっくり口を開く。

「一つ、話しておく。」

「おう?」

「俺には一つ、奴に——清明に仇名す可能性を持っている。」

「：なんだって?」

「姫斬りの目覚めと同時に、俺の刀も妙な気を放ち始めた。」

「お前の刀——あの大太刀か!」

「ああ：銘もなく、鹿角の大太刀」と呼ばれていたがな。」

そう話しながら、鈴宗は静かに腰を落とした。

その動きを見てツツジも半ば無意識に腰を落としていた。

唐突な動きに疑問を挟むまでもなく、自然と身体が動いたのである。

これはもはや本能の様に沁みついた動きであった。

「あの大太刀が何かは俺も分からん：だが、唯一残された可能性はあの大太刀の力だ。」

「：なら一つ私もお前に言えることがある。」

「ぬう?」

「あの刀は、鈴鹿御前を討った人間の中の一人が持っていたモノさ。」  
「なに：：?」

「私も確信は持てん、ただ、あんたの孫娘は姫斬りに過去の記憶みたいなもんを見せられたらしくてね：あの太刀の話したらそう教えて

くれたよ。」

「…。」

「あのクソガキへの反撃の狼煙になるかもしれないねえ…。」

楽し気にツツジが笑う。

そして笑いながら腰を落とした鈴宗に対し、両手を腰の辺りまで上げて構えた。

鈴宗も、眼前に掌を上げて構える。

右掌を腰の辺りまで、頬の横に左掌を添える様に置いた。

「…いきなり構えるたあ、どういうことだい？」

「俺は、一応お前を止めに来たと言っただろう、それなりのことはせんと言いつけが立たん。」

「へえ…。」

「後三分だ。」

「三分？」

「それまでには八咫鳥の増援か監視者が来るだろう、三分…俺とお前がやりあえばいい訳が立つくらいには手傷は負う、そこで終わりだ。」

「そうだねえ…ただ心配事があるなら一つ。」

ゆらり、と大気が揺れた。

ツツジの肉体から霊力が溢れ出す。  
まるで大河をせき止めていた岩をのかしたかのように、激流の様な勢いで。

大気どころか地さえ揺らぐのではないかと錯覚するほどの、霊力の流れ。

「あたしは衰えてなんかいいえってことさ。」

もう七十に近い、ツツジの肉体。

肉体は衰えた。

七十とは思えないほどに逞しく、力強い肉体だが、それでも若き頃に比べれば衰えた。

だが、霊力は別であった。

激流のような霊力の流れに晒されながら、鈴宗は苦笑する。

初めて、鈴宗が笑った。

苦々しくも、恥じるように、楽しそうに、笑った。

「そのようだな…先ほどの言葉は取り消そう、霊力は衰えるどころか増しているとはな…。」

そう言いながらも、鈴宗は涼しい顔でその場で構えている。

ツツジの霊力に対し、河に置かれた一つの石の様に、流れを受け流している。

霊力がぶつかることなく、受け流されているのだ。

「はあ…こりやいけないねえ…本気でやらねえといけないみたいだ。」

動と静。

綺麗に二つに分かたれた力の流れを感じ、ツツジが笑う。

互いに、武器を持つてはいない。

素手だ。

素手であるのだが。

まるで真剣を使った立ち合いの様な緊張感が、二人の間に満ち始める。

そして、互いに距離を詰めた。

一センチづつ。

合わせて二センチ。

互いの間合いを。

越えた。

擦過音。

衣と、衣が、擦れる音。

無音の路地裏に、それだけが四度響いた。

音が消えると同時にツツジと鈴宗の身体の位置が入れ替わる。

文字通り、瞬く間の出来事であった。

ツツジが正拳を二つと金的への鉄槌が一つ放ち、鈴宗がそれをすべて捌いたのだ。

左右の正拳を右肘と掌で撫でるように軌道を変えて避け、鉄槌をツツジの背後に回り込むように体捌きを用いて避ける。

鈴宗が背後にまわりこみつつ左の掌底をツツジの顔面に放つが、ツツジは首を傾け肩口を掌底に擦らせるようにギリギリの距離を保つて避けた。

二人はそのまま身体を交差させ、距離をとって向き直る。

「当たんねえか、今のでよ。」

「捉えられたと思っただがな…。」

眩くように、二人が言う。

「二次は——」

言葉が重なった。

同時に、ツツジが鈴宗に向かって踏み込む。

左正拳を突き出す——

「くお…い」

とみせかけ、放たれた左の前蹴りを鈴宗が首を振って避けた。

避けたが微かに鈴宗の左頬に赤い線が引かれる。

掠った。

まっさらな紙に赤いクレヨンを浅く擦ったかのように、鈴宗の白い肌に線が浮かんだ。

鈴宗が反撃の右拳をツツジの顎に向かって飛ばすが、ツツジは身体を僅かに沈めつつ下方から拳の甲を使って鈴宗の二の腕を打ち払い軌道を逸らす。

さらに意識が腕に行つた瞬間を狙い、ツツジは鈴宗の足の甲を踏みつけた。

足の甲を踏み動きを封じつつ、右の正拳突きを鈴宗の腹に向かって放つ。

後退して避けることが出来ぬ鈴宗は左の突きをカウンターとして放った。

しかしツツジは思い切り肩を上げて顎をカバーしつつ、肘が上を向くほど腕を捻ることで鈴宗の拳を弾きその腹に拳を叩き込んだ。

鈴宗の手は僅かにツツジの顔を擦り、ツツジの拳は鈴宗の肋骨の上に突き刺さる。

「ぐ…うッ—!!」

鈴宗がくぐもった声を上げる。

明らかにツツジの拳が効いたことは理解できる、しかしツツジはそこですぐに追撃をしなかった。

いや、できなかった。

鈴宗の手が掠った程度だったはずがツツジが僅かに怯み、動きを止めたのだ。

ツツジが一瞬遅れて追撃の左拳を鈴宗のわき腹目掛けて放つが、鈴宗はその拳を肘を使って弾き、そこから腕を伸ばしてツツジの顔面を狙う。

その手は握られておらず、指先が伸ばされていた。

「チいッ!」

ツツジが後退して鈴宗の反撃を避ける。

鈴宗の指先が、ツツジの目の先一寸まで突き出されていた。

そのまま互いに一拍間をとる。

鈴宗は左の肋骨を庇うように左肘を構え、ツツジは右目を庇う様に拳を顔の横まで上げた。

ツツジの右の目じりから微かに血が流れている。

鈴宗は先ほど左の突きがツツジの顔を擦った際、咄嗟に親指を立てツツジの目を擦っていたのだ。

下手をすれば親指が額に当たり痛めるか、最悪の場合骨折をする。

しかし鈴宗はリスクを負いながらも目を狙い、結果としてツツジの追撃を防いだ。

ツツジの視界が半分、赤く染まる。

血脂が膜の様に眼球の表面に張り付き、不快感を感じさせ視界を悪くする。

一拍置き、今度は鈴宗が先に動く。

右のジャブを二つ、一つは拳で顎に、もう一つは指先を伸ばして目に向かって。

拳の間合いで二発目のジャブを見切ると目を打たれる。

ツツジは一発目を身体を反らし、二発目を寸でのところで間合いの差に気づき首を傾げ指先を避けるが、微かに重心が揺らぐ。

その隙を狙い鈴宗が右足を上げた。

右の蹴りが来る、とツツジが左腕を上げるが鈴宗の蹴りは前蹴りでも横蹴りでも回し蹴りでもなく、踵を引つ掛けるようにツツジの右側面に放たれた。

掛け蹴り。

ツツジは右腕を上げていたおかげで蹴りをカバーすることはできたが、軽く状態が揺らぐ。

視界が悪いせいで反応が遅れた。

揺らいだところに鈴宗が蹴り足を前に降ろして踏み込み、右腕を伸ばしてツツジの奥襟を掴み、膝蹴りを放つ。

ツツジは膝を肘を畳んで防御し、やや体勢を崩しながらも鈴宗の左肋骨を狙おうと右拳を放つ。

しかし、そこで鈴宗の身体が目の前から消えた。

右手で奥襟を掴まれているはずなのに、不意に目の前から姿が消える。

消えた次の瞬間、ツツジは地面に向かって仰向けに倒されていた。カニばさみ。

鈴宗は奥襟を掴みながら飛び、左右の足で挟み込みようにツツジの足を刈りつつ太ももを押し、地面に倒した。

ツツジはとつさに背中を丸めて後頭部を打たぬように庇う。

しかしその間にも鈴宗は動いていた。

カニばさみで使った両足をツツジの左足に絡め、太ももをロックしたまま足首を固め、ツツジの左ひざを捻ろうとする。

ヒールホールド。

ヒール——踵という名称でありながら、膝を破壊する足関節技だ。

自身の両足を絡めて相手の股関節と太ももを固め、更に脇で踵を固定しつつ身体を捻り、回転する力に弱い膝を破壊する。

格闘技の中でも禁止になっていることが多い危険な技だ。

パキリ、とツツジの左の膝が微かに悲鳴を上げる。

このままさらに捻られれば完全に膝が破壊されるが、ツツジは回転に合わせるように自身も身体を捻り、足を引き抜こうとするが上手く



行かない。

それは靴だ。

裸足の格闘技であれば足首を引き抜けたかもしれないが、靴を履いているせいで引つ掛かりができ容易に引き抜けなくなっている。

ツツジは雷獣との戦闘では靴の爪先を上手く利用したが今は逆に靴を履いていることを利用されていた。

「くむぁッ!!」

ツツジはまだ鈴宗の動きに合わせて身体を捻ってはいるが、膝への負担が高まる。

しかし鈴宗もツツジをすぐに極めきるには至らなかった。

鈴宗が動きを変える。

脇に抱えていた足首を離し、身体を回転させ膝を逆方向に曲て関節を極める膝十字固めに移行しようとした。

だが足首を解いた途端、待ちかねていたかのようにツツジの自由な右足が動いた。

「ぐ……!」

鈴宗が微かに声を上げる。

先ほどツツジが拳を放った左の肋骨。

そこをツツジが爪先で蹴ったのだ。

鈴宗が怯んだ隙にツツジは足を引き抜き、転げながら距離をとって立ち上がる。

「けッ…あぶねえあぶねえ…危うく松葉杖だ。」

ツツジは軽く左足で地面を踏み、膝の調子を確かめつつにやりと笑った。

鈴宗は不服そうに顔をしかめながら立ち上がり、やはり肘で肋骨を庇う様に構える。

「本気で極めにかかったんだがな…。」

「馬鹿、私がああの程度で終わるかよ。」

「その通りだ、悪いな。」

そう言いつつ、またしても鈴宗が先に動いた。

右の拳を一瞬動かし、それをフェイントにツツジの先ほど痛めたは

ずの左膝目掛けて蹴りを放った。

だがツツジはその先を行く。

左膝を狙われることを読んでいたツツジはフェイントにかからず右足の裏で鈴宗の脛を蹴り、動きを制した。

さらにそこから鈴宗の脛を滑らせるように足を降ろし、足首を踏みつけるようにして痛めつけた。

そのまま左右の正拳を鈴宗の顔面目掛けて放つ。

鈴宗は右足を上げながら後退しつつ、右手でツツジの左右の突きをいなす。

そして左の突きをツツジの顔面目掛けて放つが、ツツジは前に踏み込みながら右肘突き上げてその突きを跳ね飛ばした。

鈴宗は懐に入り込もうとするツツジに右膝を繰り出すが、なんとツツジは跳ね上がる鈴宗の右足の腿に右拳を叩きつけ、強引に膝を止めた。

ツツジが鈴宗の懐に入り込む。

「そらツツ!!!」

「ぐぬ——ツ！」

右肘を鳩尾に。

左拳を肝臓に。

鈴宗が距離をとろうと下がったため綺麗に入ることは無かったが、それでも二発、ツツジが鈴宗を捉えた。

そこから右の掌底を顎に突き上げ、鉄槌で金的を、左肘で顎を狙い、姿勢を低くして右肘を肋骨に。

鈴宗はその全てをどうにか防いだ。

しかし防ぎはしたが反撃に転ずることはできず、両腕で上半身を覆うことが精いっぱいだった。

その隙をツツジは逃さない。

ツツジは打撃技から一転、鈴宗の右足を捕り、強引に抱え上げて自ら倒れこむように前に向かって地面に叩きつけた。

「げふぁッ!!」

地面に背中から叩きつけられ、鈴宗が口から大きく空気を吐き出

す。

アスファルトの地面に、二人分の体重を預けて落とされたのである。

鈴宗はとつきに身体を丸めつつ、半ば自分で飛ぶようにして上手くツツジの体重を逃しつつ倒れたために意識はあったが、まともに倒されていけば意識が飛ぶか、肩甲骨が折れてもおかしくなかった。

ツツジは先ほどのお返しとばかりに鈴宗の右足に両足を絡め、左わきで鈴宗の右足首を抱え込む。

ヒールホールドを極めにかかるがダメージを最小限に抑えた鈴宗の反応は素早かった。

関節が極まる前に鈴宗は革靴の踵を利用し、ツツジの顔面——ではなく、足首を抱えている肩口の辺りを思い切り蹴り飛ばした。

するとツツジの腕の力が一瞬抜けてしまい、その隙に鈴宗はあつさりと右足を引き抜き、立ち上がった。

「チッー」

舌打ちをしながらツツジが立ち上げる。

肩口の辺りには所謂ツボがあり、そこを蹴られてしまうと腕の力が一瞬抜けてしまうのだ。

この逃げ方はある程度形になってしまうと難しいが、まだかかりが浅い時なら非常に有効な逃げ方である。

「無理に足を狙わなければよかったものを…変わらないなその負けず嫌いは。」

少し呆れた様に鈴宗が言う。

ツツジはすぐに関節を極めにかからずとも、寝技で優位なポジションをとりつつじっくり追い詰めることもできた。

しかしそれでもすぐに足関節を狙いに行つたのは、先ほど鈴宗にヒールホールドを狙われたせいであった。

呆れた表情を見せる鈴宗に、ツツジは顔をしかめながらも笑みを浮かべる。

「うるせえなあ…負けず嫌いはお互い様だろうが、いい歳こいてガチで喧嘩しちまってんじゃねえか。」

「…それもそうか。」

「ああ、馬鹿同士かしくぶるんじやねえよ。」

「そうだな…。」

「…もうそろそろいい時間だな。」

「ああ。」

三分。

最初に言っていた時間を過ぎようとしていた。

まだ周囲に別の気配を感じはしない。

しかしいつ不意に何者かが現れてもおかしくはない。

「次で距離取ったら終わりだねえ鈴宗。」

「ああ、残念だな。」

「いつか決着はつけてやる、互いにことを成し遂げたらね。」

「望むところだ、次は真剣でな。」

「…。」

「…。」

右拳を脇に構え、ツツジがじわじわと距離を詰める。

あえて左の肋骨を空け、鈴宗が頬の横に拳を沿える。

誘いだった。

ツツジが左の肋骨を撃ちぬくか、それより速く鈴宗がツツジを撃ちぬくか。

二人の身体が交差した。

鈴宗一人が立ち尽くす路地裏、そこにふわりと人影が一つ舞い降りる。

闇に溶け込むような黒いスーツに銀髪をなびかせた少女であった。

少女は猫の様に足音を立てずに鈴宗の背後に近寄り、静かに口を開いた。

「逃げた——いや、逃したの…?」

「…手傷は負わせた、しばらくはあいつも俺たちにちよつかいはかけないだろう。」

銀髪の少女の問いには答えず、鈴宗はただそう伝えた。

その言葉に少女は特に問い詰めるようなこともなく、小さく息をついて何も言わない。

「分かった、それならいい。」

「ああ、来てもらって悪いが…もう一人にしてくれと助かる。」

「…そう。」

少女は鈴宗の言葉にさして興味もなさげに答え、背を向けると僅かに肩を落とす、背中越しに鈴宗に声をかけた。

「救護班、必要なら呼ぶけど。」

「…いらん。」

吐き捨てるように鈴宗が少女に答えると、少女はそのまま闇に溶け込むように音もなく姿を消した。

それを感じ取ると、鈴宗は大きくせき込む。

「げふッ…くッ…あ…!」

そのせき込む口元からは微かに血が流れている。

そして顔から吹き出す脂汗を拭いながら左の肋骨を抑えた。

「隠しきれるものではないか…。」

肋骨が三本、完全に折れていた。

幸いにも肋骨が内臓に刺さるようなことにはなっていないが、触ると浅く拳の形に肋骨が陥没し歪んでいることが分かる。

「まあいい…：相応の代償はいただいたからな。」

「チツ…：あのクソジジイ…：やりやがった。」

大通りに近い路地の裏。

そこまで逃げつつもツツジは自分の右肘を見て悪態をつく。

ツツジの右肘は毒々しい紫色に染まり、力なく垂れ下がっていた。

鈴宗が肋骨を犠牲にツツジの腕を折ったのである。

わざと空けられた鈴宗の肋骨目掛けて拳を放ち、それが当たりはしたものの鈴宗はなんと肋骨を砕かれながらもツツジの右腕を抱え、無理やりへし折ったのだ。

「まあいい、あのジジイも肋骨ブチ折ってやったんだ…：前線には出れねえだろう。」

痛みで荒くなる呼吸をどうにか抑えながら一人呟くように言う。

「精々その間にあの太刀とやらの力を目覚めさせてくればいいがねえ…：鈴宗よ。」

### 30話 一時の平和

帝京歴784年8月中旬。

秋奈町の駅前。

コンビニエンスストアにマンションが立ち並び、いくつかの食事処やカフェ、娯楽施設が近くに建っている平凡な駅前。

繁華街の様に発展しているわけではないが程よい喧騒が聞こえる賑やかさに不便には思わない程度の施設の数々。

どこかのどかさが残るその風景の中、明らかにのどかではない風貌をした五人組がいた。

一人は黒一色のシャツにロングスカート姿でごついブーツを履き、シャツから覗く腕が一見ただけでも分かる程度に力強く、常に鋭い眼光を崩さない少女。

一人はTシャツにジーンズというかなりシンプルな格好ながら、それだけでもモデルの様に姿が決まっており、俳優のように華があふれる少女。

一人は黒いパンツスーツを着崩し、服装がスーツでなければ少女の様な外見ながらも携帯灰皿を片手に煙草を口に咥え、けだるそうにたずむ女性。

一人は夏だというのに黒いスカートスーツをぴっちり着こなし、サングラスをかけ無表情で立つ姿はどこかの諜報員ではないのかと思えてしまう女性。

一人は薄手のパーカーを羽織りサンダルにジャージ姿というラフな格好で癖のある髪を無造作に伸ばし、瞳にどこか昏さを持つ女性。

駅前を行き交う人々が周囲の光景とは明らかに不釣り合いな彼女たちをちらりと見てはすぐに目を逸らし、そそくさと早足で去っていく。

彼女たちはどことなく居心地の悪さを感じながらもその場に立つ。彼女たちがここにいる理由は一つ、ある人物?を待っているから

だ。

「…花鈴、今何時？」

「もうとつくに約束の電車は通り過ぎてる時間だよ化け猫。」

モデルの様な少女である花鈴が、煙草をくわえた女性である化け猫の質問に答える。

化け猫の持つ携帯灰皿は既にパンパンになっており、それだけで結構な時間を待たされていることが分かった。

「…私、酒飲んで寝過ぎしてるに昼ごはん代賭ける。」

「いいじゃにやいのユリカ、私は…酔ってそもそも電車を間違えたに賭ける。」

昏い瞳の少女、ユリカの言葉に化け猫がそう乗った。

「んじや私は駅前で飲んでたら時間を忘れてたに賭ける、すーちゃんは？」

「え…私も賭けるのか…じゃあ、お酒を買って電車賃が足りなかったとか…。」

その話題になにやら面白そうだと花鈴も乗っかり、眼光鋭い少女――鈴音にどうするかと問いかけた。

鈴音もとりあえず話にのっかり隣にいたサングラス姿の女性、蠅螂坂に視線を向ける。

「…飲みすぎて…道端で倒れてる…に。」

蠅螂坂はぼそぼそとつぶやくようにそう答えた。

それからしばらくは五人で会話をしながら目的の相手を待っていたが、それでも相手は来ない。

相手は携帯電話を故障させたせいで連絡手段がなく、帰る電車のおまかな時間を伝えたのも公衆電話からだった。

そのせいで彼女たちは当てもなく待ちぼうけをくらっているのである。

コンビニエンスストアで軽食を買い、喫煙者である化け猫とユリカが喫煙所の前に常駐し始め、花鈴は日陰に入って携帯ゲームを持ち出し、鈴音と蠅螂坂が武術に関する会話を始める。

「ユリカ、暇だし適当に思いついた番号の煙草買わない？」



「やだよ私メンソ嫌いだし…いくら暇だからってさあ…。」

「八相のスーパーアーマーで鎧通し当ててコンボでゲージ回収、白虎覚醒でキャンセルかけて——うわ、これバランス壊れんじゃない。」

「蠅螂坂さん…この型の動きはどう使えば…?」

「私は肘につなげるけど…たとえば後ろに回り込んで——」

思い思いに時間を過ごしているが、それでも限界はやってくる。

ユリカと化け猫は煙草が一箱なくなつて。

花鈴はゲームの画面に汗が数滴垂れてしまったことにいらついで。

鈴音と蠅螂坂は思わず会話に熱が入り始め実演に及んでしまったところで。

「…帰らにゃい?」

「帰る。」

「帰る!!」

「え…ああ…帰ろうか。」

「帰る…。」

全員相手を待つことなくあっさり帰ってしまった。

そして皆が相手に会うのはそれからさらに数時間後、八咫探偵事務所のおフィスであった。

「ひぐ…えつぐ…みんななんで帰ったのさ! 私大変だったのに!」

長く空に居座る夏の太陽がようやく落ちようとする頃、八咫総合事務所扉が開かれた。

そこにいたのは新調された黒いスーツを少し着崩し、美しい銀の長髪と綺麗に整った顔立ちを台無しにしながら目に涙を浮かべる人物だった。

「あーおかえりリーダー、えらく遅かったじゃにゃいの。」

「なんだよ化け猫その反応は! 一週間ぶりの狂骨さんだよ! 喜んで

いいじゃん!!」

八咫総合事務所のリーダー、狂骨は涙目で皆に訴えかけるが全員反応は薄い。

そう、皆が狂骨と顔を合わせるのは一週間ぶりであった。

八咫総合事務所の面々が海水浴に出かけた海沿いの町、狂骨はそこで起こったある事件に巻き込まれてしまった。

盛大な警察沙汰に発展し、謎の妖怪による死者まで出てしまった今回の事件の後始末に狂骨は拘束され、ようやく解放されたのが今日の朝。

そんな事情が込みでも皆が狂骨を邪険に扱う理由は明白、狂骨の帰りが大幅に遅れたことに加えまだ中身が少し残る一升瓶を手を持っていたからだ。

「だからって何時間待たせる気だったのよリーダー…。」

「あーそうだ！なんでこんなに帰るの遅れたのさ狂骨!？」

口をとがらせる狂骨に対し、花鈴がそう問う。

それは待ち合わせ時に狂骨が遅れた理由で昼食を賭けるという遊びをしていたからだ。

花鈴にそう問われると、涙目だった狂骨の顔から涙が引っ込み、そして何か気まずそうに目線を泳がせながらぼそぼそと口を開く。

「えっとその…みんなにまず電話しました…。」

「それで?」

花鈴が先をせつつく。

「…わざと電車の時間を遅く伝えてお店でお酒を飲みました。」

「結局それで電車逃したんでしょ!私の勝ち!」

「違うよ!いやたしかに逃したけどそれだけじゃな———というか勝ちって何!?!私で賭けてたの!?!」

「え…それだけじゃないって…何それ…。」

花鈴が私の勝ちだと声を上げるが、狂骨はそれだけではないと否定する。

その言葉にユリカが思わず顔をしかめた。

「その…酔ってたから路線間違えちゃって…。」

「リーダーそれマジ!?私の勝ちじゃにやいの!!」

「間違えて降りた駅で落ち着こうとお酒買ったら秋奈町までの電車賃が足りなくなつて…。」

「あの…落ち着こうと思つてお酒つて——あ、私も当たつた。」

化け猫と鈴音が狂骨の言葉に予想が当たつたことを口にする。

しかしそれでもまだ狂骨の言葉は止まらない。

「仕方ないからなるべく近くの駅まで行こうしたら今度は寝過ぎしちゃつて秋奈町に着いて…でも降りられなくて戻つてえ…。」

「情けな…いや、秋奈町まで来たら電話してくればよかつたのに。」

「切符ギリギリまで買ったから財布に十円もなかつたんだよユリカちゃん!!」

「てか寝過ぎしたんなら私も当たりだわ。」

「ユリカちゃんまで賭けてたの!?酷い!!」

「てか賭けを始めたの私だし。」

「うわああああん!!みんな嫌いだあ!!!」

思わず狂骨が叫び声を上げるが、ハツと何か思い出したかのように顔を上げ、何か期待するように蠍螂坂の方を見た。

視線を向けられた蠍螂坂は無言でこくりと頷く。

その頷きに狂骨はパアつと顔を輝かせた。

「リーダー…。」

「蠍螂坂…君は賭けなんてしてな——」

「帰り道で…行き倒れたり…しなかつた…!?!」

「もうやだああああ!!やっぱりみんな嫌いだあああ!!!」

「僕だけ…当たらなかつた…か…。」

叫ぶ狂骨を見ながら蠍螂坂がしゅんと肩を落としてしよぼくれる。

だがそこで狂骨が俯きながらぼそりと呟いた。

「…まあ帰る途中公園で寝ちやつたんだけどね。」

「おーい、聞こえてるよ狂骨。」

その呟きを聞き逃さなかつた花鈴がじとりとした目を向けながら言う。

すると肩を落としていた蠍螂坂がバツと顔を上げ、拳を強く握つ

た。

「当たった…ッ！」

「これで全員正解じゃにやいのー！」

全員賭けが当たるといふ思いもよらなかった展開に皆がはしやぎ、狂骨はその言葉にもはや茫然としながら乾いた笑みを浮かべる。

「はは…ははは…皆当たるなんてすごいねー…私のことよくわかってるねえ…愛されてるなあ私…。」

「あ、あの…狂骨さん…。」

乾ききつた表情を浮かべる狂骨はついに一升瓶を両腕に抱きしめると事務所の隅に独りうずくまった。

流石に気の毒に思った鈴音が声をかけるが、狂骨はぷいっと顔をそむける。

「いいもんだ…私にはお酒があるもん…みんな嫌いだあ…。」

「そ…その…。」

「ぷいッ…。」

分かりやすく拗ねる狂骨を見ながら鈴音はあたふたとしているが、他のメンバーは相手をしない。

それも仕方はない。

たしかに一つや二つの失敗を重ねて電車に遅れた程度なら十分に間に合うほど五人は待ったのだ。

いくらなんでも五つも失敗を重ねるともう呆れるしかない。

とはいえ狂骨は皆の態度に本気で拗ねてしまった様子であり、隅でうずくまりながらぶつぶつと愚痴を吐き始めた。

「だってえ…一週間ずつと警察にいて…お酒も飲めなくて…八咫鳥の人たちは来るし…お酒飲めなくて…。」

「あの…お酒飲めなくてが二度…。」

困惑する鈴音が思わずツツコミを入れるが、狂骨は構わない。

「私がパトカーに轢かれて気絶してる間に変な妖怪が出て暴れたってえ…聞かれても私気絶してたもん…知らないもん！」

「へ、へえ…そんなことがあったんですね…。」

「そんなことばっかずつと聞かれるし！他の時間も延々見張られてる

し！隠れてお酒を飲もうとしても警察署にお酒なんてないし！！」

「飲もうとはしたんですね…。」

「当たり前だよお！！それでようやく解放されたんだよ！！そりゃ飲むじゃん！飲むよね！うわああああん！！」

狂骨は皆の目もはばかり泣きじゃくり、丸まりながら子供の様に地面を転がっていいじけている。

鈴音も細かい事情は聴けてはいないが、少なくとも狂骨が人助けのために必死で頑張ったということは理解している。

その結果として謎の妖怪の出現にくわえ、一週間拘束されたというのは納得いかないだろう。

たしかに良いことをしたのに報われないというのは辛いことだが、いくらなんでもこの醜態は如何なものかと鈴音は思わず眉間に手をやる。

かといって放置も具合が悪い。

「じゃあ…その…狂骨さんは…どうしたいんですか…？」

「…遊びたい。」

「え？」

「皆だけ海で遊んで…私だけ遊んでないもん。」

狂骨はふてくされながらも鈴音の言葉にそう答えた。

実際狂骨は海で一切遊んでいない。

初日はバイトに明け暮れ、二日目は砂浜が封鎖されたうえに巻き込まれた事件解決のため奔走していた。

ここまで拗ねているのもどうやら自分だけ仲間外れにされて遊べなかったことが根深く関わっているらしい。

「あの…狂骨さんこう言ってますけど…。」

「うーん、まあたしかに可愛いそうだし…私は遊びに行くんにやら付き合っ方がいいわよ。」

化け猫が渋々ながらも遊びならばと賛同した。

その言葉を聞いてほかのメンバーも頷き始める。

「私も遊びに行くってくらいなら…まあ…。」

「別に予定もないし、すーちゃんが行くなら付き合うよ私も。」

「僕も…夕飯の仕込みは明日使えば良い…し。」

「ほ、ほら狂骨さん、みんなこう言ってくれてますから…。」

鈴音がその声をかけると狂骨の耳がピクリと動いた。

「本当に…？」

「はい…皆そういつてくれます…。」

「私の行きたいとこに連れてつてくれる…？」

「…ああ…大丈夫…だと。」

鈴音は狂骨の言葉に困ったように皆を見回すと、仕方なさそうに全員が大丈夫だと身振りで伝える。

すると狂骨はまだうずくまったままぼそりと行きたい場所を呟いた。

「——バクラ。」

「え？」

「キャバクラ行きたい。」

秋奈町から離れた帝都では有名な繁華街。

そこにある俗にキャバクラと言われるクラブに八咫総合事務所の面々はいた。

煌びやかなライトに高級感の漂うブラウンのソファと綺麗なガラス張りのテーブル。

全体的に内装はシックな雰囲気纏められており、一見夜の遊び場らしくないように感じる。

しかしところどころに上手くライトの光を反射するようにガラス製のインテリアが設置されていたり、上品さを保ちつつ豪華な雰囲気を醸し出す演出がなされている。

そういった部分を見るとまさしく大人の遊び場らしいと言えた。

「ここが…キャバクラなの…か。」

「ふーん、ドラマとかで見てもつとピンクな感じかと思つてたけど、こういうところもあるんだ。」

初めて見る大人の遊び場の雰囲気新鮮さを感じながら鈴音と花鈴は周囲を見回す。

本来なら十八歳に達していない鈴音と花鈴が入場することは不可能であるのだが、二人が背も高く大人びて見えることと、そもそも見た目が幼い化け猫が堂々と喫煙しながら入店しているせいかな入り入店できてしまった。

周囲を見てみれば楽しく騒ぎはしているものの節度を保つて楽しんでる様子であり、年齢層も高めに感じられた。

ただ、そんなこの店の大人たちが皆大人らしく遊ぶかと言えば決してそうではない。

「あっはははははは！もう最高！この解放感！あはははははッ!!」

少し前まで事務所でふてくされていた者とはたして同一人物なのか疑わしいほど明るい狂骨の音がホールに響き渡る。

六人は大きなテーブル二つをソファで囲んだ席に通され、既に狂骨と化け猫はキャストの女性と楽しげに声を上げながら談笑している。

「にゃっははははは君可愛いじゃにゃ…んんッ…可愛いわねえ、今夜何時までなの？お姉さんアフター誘っちゃおうかなあ。」

化け猫はぐびぐびとグラスからカクテルを煽りながら猫言葉を抑えつつ盛り上がった。

その顔は既に真っ赤になっており、狂骨の言葉で来たとは思えないほどに楽しんでいた。

「あ…私甘いお酒でお願いします…え…えへへ…。」

ユリカにもキャストの女性が付き、落ち着かない様子ながらも普通に会話をできている様子だった。

会話下手なユリカに対して会話をしつかりしつ、楽しい雰囲気を作るといふのは流石はプロだなと鈴音は感心する。

「…おススメのフードとか出前…ある？」

ただ蠟螂坂はマイペースにキャストの女性にお気に入り料理に

ついで尋ねていた。

おそらくこういった場所でどのような食事が気に入られるか純粹に興味があるのだろう、どこまでもマイペースな姿に鈴音は安心感すら覚える。

そうして鈴音と花鈴以外にはキャストがついているが、まだ二人の元にはついていない。

急な六人の来客ということでキャストの準備が追いつかず、もう一人準備中ということだった。

慣れない雰囲気には鈴音は少し落ち着かないが、花鈴はいたって平然とした様子でソファに腰かけている。

「花鈴…よく落ち着いていられるな…。」

「いやーせっつかくだからさ、楽しんだ方が勝ちじゃないこういうの?」

「たしかに…そうだな…。」

「もしすーちゃんが一人でここに来たっていうなら私も気が気じゃないけど、今日は一緒だし、変なことにはならないでしょ!」

「…何かの事情で一人で来ても変なことにはならないと思うぞ…花鈴。」

「いやー!すーちゃんにその気がなくても相手がその気になる可能性がとつても高い!」

「そんなことありえないよ…。」

自信満々な花鈴に対し、少し呆れながら鈴音が言う。

鈴音は花鈴が自分を評価してくれるのは嬉しいが、いささか過剰に評価しすぎだと困惑していた。

だがそれが表情に出していたのか、花鈴は鈴音の顔を覗き込みながらにこつと笑って見せる。

「まず、すーちゃんはとつても優しいです。」

「え…?」

突然の花鈴の言葉に、鈴音は少し戸惑いながら首をかしげる。

「今日だって、すーちゃんがいなかったら狂骨はまだ床にころがつていじけてたね、絶対。」

「…狂骨さんには、お世話になってるから。」



なにか言い訳をするように鈴音はそう言うが、花鈴は鈴音に対し距離をつめながら続ける。

「で、優しい癖に自分には厳しい。」

「…厳しいって…私は別に厳しくないよ。」

「そういうところなんだよねえ、すーちゃんはさ。」

鈴音の言葉を聞くと花鈴は小さく肩をすくめ、さっと身体を離してソファにもたれかかる。

「凄く優しいのに自分には厳しくて頑固な頑張り屋さん、そこに気づいちちゃったら」私が支えてあげなきゃ！」ってなると思うんだよねえ。」

「…花鈴も、そうなのか？」

「私は違うよ、私にはすーちゃんしかいない。」

「花鈴…。」

「それだけだよ、すーちゃん。」

「でも、今は——」

「ここまでにしよつか、こんな場所でする話じゃなくなっちゃった。」鈴音の言葉を遮るようにそう言って花鈴が会話を切り上げる。

たしかに、キャバクラの待ち時間でするような内容の話ではなくなってしまうた。

しかし鈴音は花鈴が発した言葉に不安を感じていた。

花鈴にとって鈴音は今でも唯一の存在だと言う。

だが、自分を押しとどめていた頃ならいざ知らず、今の花鈴はとも自由に日常を謳歌しているように見えた。

八咫総合事務所の面々とも、楽しく日常を過ごしているはずだった。

少なくとも鈴音にとって八咫総合事務所の皆は花鈴と同じく、もう家族同然の存在だった。

それは今まで鈴音に家族と呼べるものが存在しなかったからかもしれない。

花鈴という存在以外は空っぽになってしまった、鈴音の心に存在する空席に腰かけさせてしまったからかもしれない。

でも、花鈴にとっては違うのだとしたら。

不意に鈴音の心に不安のもやがかかっている。

「なあ花鈴。」

「…どしたのすーちゃん？」

「今の生活、楽しい…よな？」

少し不安げな表情のまま、鈴音は花鈴に問う。

その表情を見て花鈴はほんの少し困ったようにまゆをひそめながらも、鈴音に微笑み返した。

「大丈夫だよすーちゃん、楽しんでるから今の生活は。」

「なら…いいよ、変なこと聞いて悪かった。」

花鈴の言葉を聞いて鈴音の心のもやが少しばかり晴れた。

まだどこか不安は残る、しかし花鈴の言葉に嘘はない。

それは分かる。

産まれてからずっと同じ時を過ごしていた、花鈴相手だから分かる。

そんな存在は鈴音にとっても花鈴だけだ。

そう思い、鈴音は心を落ち着ける。

「しかし…結構時間がかかっているな。」

「そうだねー、うちの面子、顔はいいから誰出せばいいか困ってんじゃない？」

「たしかに…。」

花鈴の言葉に鈴音は納得する。

八咫総合事務所の面々は全員美人揃いだ。

特に花鈴はモデルの様に華がある。

姉の鼻肩目かもしれないが鈴音は本気でそう思っていた。

「綺麗さなら花鈴には誰も勝てないだろうな。」

「…すーちゃん、真顔でそう言われるとさすがに恥ずかしいんだけど。」

鈴音の誉め言葉に花鈴が顔を赤くしながら口を尖らせる。

華やかさでは花鈴には勝てない。

ならば競わずに持ち味を活かすキャストを選ぶしかないだろう。

そんなことを思っているとようやく二人の元にキャストの女性がやってきた。

女性はまだ少しぎこちない様子で二人の元まで歩いてくると、深くお辞儀をする。

「お、お待たせしました！ヒナですよろしくお願いいたします——す。」  
「ん？」

ヒナ、そう二人に向かって挨拶をした女性は、頭を上げて二人を見ると一瞬だけ驚いたように目を見張った。

鈴音は何があつたのかと首を傾げるが、花鈴は気にしない様子でにっこりと微笑んでいる。

「お、お隣失礼します。」

「ああ…どうぞ。」

ヒナはそう言つて鈴音の横にゆつくりと腰かける。

まだ言葉使いにぎこちなさが残り、みるからにまだこの仕事に慣れていない様子だった。

見た目も他のキャストに比べるとまだまだ幼い雰囲気漂う。少し濃いめに化粧をしているが、顔立ち自体が幼く見えた。

髪は緩やかにウェーブを描く髪を綺麗に編み込んで後ろで纏めているが、どこか大人っぽさを無理に演出しているように見える。

タイトで肩の出たイエローのドレスを身に着けているが、まだ少し着られている感が強い。

ただその初々しさによる独特の可愛らしさはある。

そこはモデルの様に華のある花鈴にはない魅力かもしれない。可憐な例えるならば道端にこっそりと生える綺麗なたんぽぽのような可愛らしさかもしれない。

ふと日常の中で気づく暖かみのような、そういった魅力を醸し出す女性だった。

ヒナ、という雛から幼さを連想させるような名前も似合っている。

「あ、あの…ドリンクはいかがいたしますか？」

「ドリンク…申し訳ないが未成年なので…オレンジジュースで。」

「じゃ、私はコーラで。」

「…そうですね、ではオレンジジュースとコーラで。」

ヒナは鈴音の言葉に頷くとボーイを呼んで注文を告げるが、鈴音はヒナの言葉に首を傾げた。

“そうですね”とヒナは言った。

たしかに鈴音と花鈴は未成年どころか本来ならこの店に入れない年齢だ。

とはいえ元から未成年であることが分かっていたようにヒナが言葉が発したことが不思議であったのだ。

花鈴の方をちらりと見れば、なぜかにやにやと面白そうに笑っていた。

そうしてヒナはボーイに注文をしたところでボーイからこそりと何かを言われると、慌てて二人に向き直った。

「すみません！私もなにかドリンクいただいてもよろしいでしょうか！」

二人に向かって小さく頭を下げる。

「え…あ、ああ…。」

「すーちゃん、お店の子が飲むお酒とか、お客さんが出してあげたらお金になるんだよ。」

首をかしげる鈴音の肩を花鈴が小さく叩き、そう耳打ちする。

「そうなのか…よく知ってたな花鈴。」

「…アレ見れば分かるよ、すーちゃん。」

そういつて花鈴は親指でぐいぐいとある方向を差す。

何かと悪い鈴音が顔を向けると――

「お姉さんがシャンパンもう一本入れたげるからあくアフター行こうよお〜！」

酔っぱらった化け猫がそんなことを言いながらキャストの女性に詰め寄っていた。

キャストの女性は化け猫のアフターという言葉に対し、曖昧にはぐらかす様に受け答えしながら、巧みに酔っ払いの化け猫がお酒を注文するように誘導している。

それを見て鈴音も納得した。

おそらくシステムとして客がお酒代を出せば出すほど店の売り上げになるのは当然だが、その分キャストの女性にもお金が入るのだから。

化け猫が言っているアフターというのが分からないが、どうやらキャストの女性はそれをエサに巧みに化け猫に酒を頼ませているようだ。

「…あの人が頼んでるシャンパンって何円くらいするんですか？」

「お安いものでしたら二万円ほどでご利用させていただきますが、その…私は——」

「お酒飲めないんじゃないの、貴女も？」

好奇心から鈴音がヒナに値段を聞くと、ヒナが答えの後に何かを付け加えようとした。

だがその前に花鈴がそう問いかけをする。

ヒナは花鈴にそう言われると驚いた、というより何かにおびえるように身体を小さく跳ねさせ、頷く。

「そ、そうなんです、まだ未成年で…よくお分かりになりましたね。」

「いやーヒナさんだっけ、貴女も私らがお酒を飲めないって分かってたっぽいじゃない、同じだよ。」

「…見た目がお若そうでしたので…つい…お気を悪くしたなら申し訳ございません。」

「いんやー、別に気にしてないから大丈夫だよ。」

何か含みを籠めて話しているような花鈴の言葉に、鈴音はヒナが微笑かに顔を青くしているように見えた。

もしかして花鈴とこのヒナというキャストの女性は知り合いなのだろうか。

少なくとも鈴音には見覚えがないように感じられたが。

「じゃあ…手ごろなドリンクを頼んでもらって結構ですよ…ヒナさん。」

「ありがとうございます…ではフルーツジュースをいただかせてもらいます。」

鈴音の言葉にヒナがそう答え、ボーイに注文する。

そしてボーイが席の横から去ったところで、花鈴が不意に口を開いた。

「で、すーちゃんは気づいた？」

「え……？」

鈴音は突如として花鈴から発された疑問に首をかしげる。

「ああ……もしかしてヒナさんと花鈴は知り合いなのかとは……。」

「まーね、そうでしょ、先輩？」

花鈴がヒナのことを「先輩」と、そう呼んだ。

するとヒナの顔が化粧越しに分かるほど一気に真っ青に染まる。

「彼女、うちの学校の一つ上だから。」

「……は？」

鈴音は目を丸くした。

鈴音と花鈴は高校生の十六歳。

まだ誕生日を迎えていない高校二年生。

つまり彼女は、まだ高校生三年生ということになる。

花鈴は少し気を利かせて学校の一つ上という表現をしたのはそれが原因だろう。

高校三年生なら年齢としては十八歳でもおかしくないが、学生の身でこういう仕事に身を置くのはどうなのだろうか。

「……お願い、誰にも……その。」

ヒナは周りの声にかき消されそうな程小さな声で、鈴音と花鈴にそう訴えかけてくる。

その態度からしてバレたら不味いということは明らかだ。

そもそも仮に問題がなかったとしてもキャバクラで働いているということ自体、よく思わない人間も多いだろう。

「どうもしませんよ……別に。」

ただ鈴音は特にどうとも思わなかった。

そもそも鈴音は同じ学校の先輩らしき彼女のことを何も知らない。何かしら彼女にも事情はあるのだろうか、他所の事情に興味もなかった。

「私は貴女のこと知りませんし、普段会っても気づきませんよ多分。」

「そ、そう…なのね。」

知らないと言いつと、なぜか少し落ち込んだようにヒナが肩を落とす。

知られてない方が都合が良いのではないか？と鈴音が不思議そうに眉をひそめると、花鈴がまたそつと肩を叩いて耳打ちしてきた。

「すーちゃん…その人、うちの生徒会長…！」

「え…!？」

花鈴の言葉に鈴音が小さく驚きの声を上げ、改めてヒナに向き直る。

そして鈴音は再度じつくりとヒナの顔を見るが——言われて初めておぼろげながら見覚えはあるような気はした。

しかし生徒会長となれば鈴音にとつてはただの先輩ではない。

生徒会と言えば花鈴が所属しているのだ。

きつと花鈴が世話になっていないはずだと鈴音は意識を改め、慌てて小さくお辞儀をする。

「そ…その…失礼しました…花鈴がお世話になってます。」

「い、いえいえそんな！花鈴さんにはこちらがお世話になってるくらいで…いつも資料の作成とか頑張ってくださいってるんです。」

「し、資料の作成…ですか。」

ヒナの言葉に鈴音は思わず顔を引きつらせる。

花鈴が生徒会に提出した資料はほとんど鈴音が作ったものであり、最終的に花鈴が少し手直ししたものであるからだ。

元は日常全てを仮面優等生として過ごしていた花鈴が少しでも自由な時間を作れるよう、鈴音がやっていた作業である。

鈴音のリアクションを見て花鈴は後ろで必死に笑いをこらえていた。

「その…きつきも言いましたけど、私はどうもしませんから。」

「ほ、本当ですか…貴女あの鈴音さんですよね…!？」

「…えっ？」

何か含みを持たせる言い方をしたヒナに鈴音が反応すると、ヒナは慌てて口を塞ぐ。

花鈴は校内で人気が高く、皆から慕われている有名人だ。だが鈴音は特に自分が有名人になるような存在ではないと思っ  
ている。

成績は下から数えた方が当然早く、友人もいなければ部活にも入っ  
ていない。

生徒会長だから生徒のことに詳しいのだろうか。

すると花鈴が二人のやりとりを聞いて笑いをこらえてつつ、ヒナに  
目を向けた。

「くくくツ…先輩、あの鈴音さんってどういう意味ですか？」

「それは…あ、あの…。」

「あの…？」

「学校の番長だって…。」

「は？」

ヒナの言葉に鈴音が目を見開く。

「私が…番長…？」

「う、噂でその…そう聞いてて、私！違うならごめんなさい！」

「違いますよ…！」

「でも不良の人たちとつるんでるって聞いたけど…。」

「あれはあっちから勝手に絡んできたから相手してたんです…私は番  
長でも不良でもないですよ…！」

「こんな場所にも来てるのに…!？」

「貴女がここにいるみたいに私にも事情があるんです…！」

あらぬ誤解に鈴音はこそそと話しながらも思わず語気を大きく  
して否定し、ヒナの言葉に眉間に手を当てて肩を落とす。

「…それで、私が不良だから脅しでもすると思っただんですか？」

「そ、その…。」

「…思っただんですよね？」

「…はい。」

言い淀むヒナに対し、鈴音は二度問いを繰り返して正直に話させ  
た。

「私だって同じ場所にいるわけですし…言いふらすわけじゃないじゃない



ですか。」

「まあ不良と生徒会長のどっちがキャバクラにいそうかというところ、不良だもんね。」

「そうそう…って花鈴…!？」

「だーかーら、私とすーちゃんが言いふらす訳ないってことだよ、ね？」

「そもそも私は不良じゃない…。」

「ごめんごめんすーちゃん！分かってるからごめんって！」

やはり心外だと鈴音が顔をしかめ、むすつと口をへの字に曲げる。

その様子を見て花鈴はそこまで気にしているのかと慌てて謝りながら鈴音の顔を覗き込む。

「許してよすーちゃん！」

「別に怒ってない…。」

「ほんと？」

「本当だよ…。」

「すーちゃん不良じゃないもんね。」

「当然だ。」

「授業ちゃんとでてるもんね。」

「サボったこともない。」

「不良と仲良くもないし。」

「仲良くない。」

「煙草も吸わないしお酒も飲まない。」

「その通りだ。」

「喧嘩もしないよね！」

「ああ、喧嘩もしない——」

そこで鈴音は言い淀んでしまった。

花鈴はしてやったりとばかりに笑顔を浮かべている。

「け、喧嘩もしない…!」

「ええ、本当にすーちゃん？私の記憶では一週間くらい前に思い切り暴れた気がするんだけど？」

花鈴の言う通りであった。

一週間前、海水浴に出かけたあの日。

花鈴と鈴音はその筋の人間に食事を邪魔され、キレた二人は大立ち回りを繰り広げた。

結局は相手が相手だったこともあり、周囲の証言もあつて正当防衛で片が付いて狂骨の様に拘束はされなかったが、それでも喧嘩は喧嘩であつた。

「あれは正当防衛だ…それに花鈴も一緒に暴れただろう…!？」

「あの時のすーちゃん怖かったなあ、これは海鮮丼の分！これは味噌汁の分！これは焼き魚の分！って…。」

「そんなことは言っていない…はずだ！」

たしかに鈴音はあの時食事を台無しにされ怒り心頭であつたが、さすがにそんなことを言つた覚えはなかった。

そんな風に会話を繰り広げていると、鈴音の隣からくすくすと笑い声が聞こえる。

声のする方を見てみれば、ヒナが必死に声を抑えながらも笑つていた。

「ご、ごめんなさい…つい。」

「いいですよ…でも私、本当に不良じゃないですから…。」

「…はい、今の会話を聞いて悪い人じゃないって分かりました、誤解してて申し訳なかつたです。」

申し訳なさそうに頭を下げるヒナを見て、鈴音もようやくホツと一息つく。

すると誤解が解けたところを見計らつてひよいと花鈴が鈴音の隣から身を乗り出し、ヒナに顔を向けた。

「で、先輩はわざわざなんでここでバイトしてんの？」

「花鈴…あまり詮索しない方が…。」

「ええー、気になるじゃん、それにそういうの隠してると息が詰まるし。」

「…いいですよ、ここに働いているの知られた時点でもう隠すようなこともないですし。」

「いいんですか、ヒナさん？」

「はい、鈴音さん…貴女を誤解していたお詫びもかねて話します。」

ヒナはそういうと少し胸に手を当て、ゆっくりと深呼吸してから話し始めた。

「簡単な理由です、まず父の経営していた会社が倒産して…お金に余裕がなくなりました…それだけならまだよかったです。」

話しながらヒナは大きく肩を落とし、少し俯いて言葉を続ける。

「あろうことか父が失踪してしまっただんです…。」

「それは…気の毒に…。」

「家も差し押さえられて…親戚を回ったんですが誰も受け入れてくれなくて…。」

「ひつでえ話だけどき、生活するだけなら別にこんなところで仕事しなくていいだろうし…ってことはまさか借金とか?」

「いえ、借金は私たち家族が返済する必要はないので大丈夫でした…ただ、大学に行くためのお金が必要で。」

「そういうことでしたか…。」

ヒナの言葉に鈴音と花鈴が納得したように頷く。

「私、どうしても大学に行きたくて…それまではここで頑張ろうと思ってます。」

「応援しますよ、頑張ってください…なにか相談があるなら話くらいは聞けますから。」

「そ、そんな…それに鹿角さんたちの家も…その…大変なんじゃ…。」

鈴音と花鈴がヒナの言葉にふと思いついたように顔を上げ、互いに顔を見合わせる。

考えてみれば鈴音と花鈴もほんの数か月前に両親を失い、今までの生活が一転する目に遭ったのだ。

もうそれも遠い昔の記憶の様に感じられてしまっていた。

花鈴は思わず苦笑を漏らし、鈴音は何か感慨深く目を伏せ、そしてヒナの方を向いた。

「私たちは大丈夫ですよヒナさん。」

「今はまあ、あいつらが代わりって感じだから。」

花鈴が親指を立て、ある方向を指さす。

その先では――

「にやはははは！王様ゲエエエエム！！4番は王様におっぱい揉ませろお！！」

「化け猫お〜！4番はこの狂骨さんなんですけどお！！」

「にやあああ！なにもねえ！ぺったんこおお！！」

「化け猫お…面白くない番号言ってるじゃないってええ…！」

「にやあん？にやらユリカが4番引いてりやよかつたんじやにやいのかにやあああ！！」

「この出前の巻き寿司…美味しい…！！」

今、鈴音にとつては家族同然の四人がとても、それはもうとても楽しそうに騒ぎまくっていた。

鈴音は思わずその光景を見て小さく笑みをこぼした。

花鈴が鈴音の笑みを見て、驚き目を丸くする。

花鈴でも滅多に見ることのできない鈴音の笑みだった。

「とても…楽しいですから、今の生活。」

「強い妖気を感じて来てはみました…逃げられましたか…。」

繁華街の人通りが少ない小路の一角。

その場に巫女服を着た少女と黒いスーツ姿の少女がしゃがみこみ、周囲を調べていた。

巫女服の少女の頭にはイタチの様な耳が、黒いスーツの少女の頭には犬の様な耳が生えている。

濃い妖気こそ残っているが、不思議なことに被害者の痕跡はない。妖気がある場に残留する場合は人を襲い、食事をした場合のことが多い。

ため不安であったが幸いにもそれは杞憂であった。

「しかし、何故…わざわざ痕跡を残すなど、意味が分かりませんよ巫女。」

「そうですが、痕跡は妖力以外何ありません…今の私たちにはもう少し周囲を調べることくらいしかできませんね、雷獣。」

二人は八咫鳥の構成員である雷獣と巫女であった。

巡回中に濃い妖力を感じ、現場を見つけたのだが残念なことに妖怪の姿を見つけることはできなかった。

しかし犠牲者が出なかったことに二人はホッと一息ついている。

今感じられるのは現場に残る濃い妖力の残滓のみ。

他に妖力は感じられない。

「まだ夏休み中ですし、今夜はしばらく巡回を続けましょうか…いいですね雷獣。」

「そうですね、朝が苦手な巫女を起こす必要もないですし、付き合いますよ。」

「ら、雷獣…言う様になりましたね…。」

苦い顔をしながら巫女が肩を落とす。

そのまま幾度か言葉を交わし、彼女たちはビルの壁面を飛び、街灯の頭を越えて夜の闇に紛れ空へと消えていった。

その場に音もなくソレはいた。

物音を経てずに地面を這い、小さな物陰に潜り込むように隠れつつ動く。

その身体には妖力を秘めていた。

しかしその妖力はあまりにも小さかった。

強い力を持つ妖怪の残滓にさえかき消されるように小さく、儂い。

それでもそれは確かに生きて、動いていた。

蜘蛛だ。

それは蜘蛛であった。

人の掌より大きく、分厚い身体の蜘蛛。

帝都の中でも秋奈町ではまず見かけない大きさをしている。

それでも夜の街角に身を隠すことは容易な大きさだ。

蜘蛛は雷獣と巫女の二人が去ったことを本能的に察知するとやが

て物陰から抜け出て、地を這いながら街の暗闇へ消えていった。

### 31話 鹿角の大太刀

冷たい空気が張り詰め、暗闇に包まれた板張りの広間に、一人の老人が座していた。

背筋が伸び、綺麗に足がたたまれた綺麗な正座姿である。

服装は着古された黒い袴姿である。

一見して和装に身を包んだ老人がただ座っているように見えるが、一般的な正座と異なる点があった。

両足の膝が触れ合うことなく、拳二つ分ほど離れていることだ。

これは有事の際に素早く立ち上がるためである。

つまりこれはただ正座をしているわけではない。

礼儀として正座の形を残しながらも、素早い動作を想定した形。

武道の正座である。

その証拠に、老人の傍ら——右脇には大きな太刀が一振り鞘を前、柄を後ろ側に向けて横たわっている。

刀を右脇に置き柄を後ろにするのは相手に敵意がないことを示す作法だ。

居合は左腰に差した刀を用いることを前提にした技術のため、刀を抜かないことを示しているのである。

その姿勢のまま老人は半眼になり、目の前にいないはずの敵を想定する。

一足一刀——一步踏み出せば刀の間合いに入る距離からわずかに外。

相手が誰であろうと間合いに入れるような度胸は、この老人にはない。

敵はにこやかな笑みを浮かべながらその場に腰を落とし、左腰に差した刀を鞘ごと抜いて老人と同じく右脇に置こうとする。

そして刀に手をかけたその瞬間、鯉口を切つて瞬時に刀を抜き老人に斬りかかろうとする。

しかし遠い。

老人に致命傷を与えるには一步前に踏み出すだけではわずかに足りない。

その距離が生死を分ける。

老人は瞬時に膝を立て右脇に置いた太刀を掴み、身体をひねりつつ後ろに向って転がり、敵の振るう刀を避けた。

マット運動の様に身体をまっすぐにしたまま後転はしない、そうすると相手の刀が当たってしまうからだ。

老人は身体を起こしながら両手で太刀を頭上に掲げる。

敵は居合抜きの一刀を外すや否や両手で刀を振り上げ、頭上から振り下ろしてくる。

その刀身を鞘で受け止める。

そして鞘を持った手を滑った敵の刀で切られぬように留意しつつ、反撃のために太刀を抜刀し――

「……ダメか。」

老人が一人呟く声が、広間に響いた。

その手の中にある太刀は抜かれぬまま、鞘と鍔がぴったりと合わさったまま動いていない。

老人は眉をひそめ、手慣れた様子で大太刀を袴の帯に差し、息をつく。

老人の名は鹿角鈴宗。

家族を妖が関わる世界から遠ざけるべく姿を消し、現天皇である安倍晴明の駒として暗躍していた猛者である。

かつては封印された姫斬りと共に鹿角家に伝わっていた大太刀を用いていたが、数か月前よりその大太刀が妙な妖気を発し始めた。

それと同時に鈴宗はこの大太刀を抜くことができなくなった。

長年この大太刀を用いてきた鈴宗にとっても初めての出来事である。

理由として考えられるのは一つ、封印されていた姫斬りが目覚めたということだ。

姫斬りはかつて強力な鬼である鈴鹿御前を討ち果たし、その後手に



したものが狂ったために封印されていたという逸話を持つ妖刀。

その妖刀が目覚めたと同時に抜けなくなった大太刀。

この大太刀が一体姫斬りとどのような関係を持っているのか、鈴宗には分からない。

だが知らなければならぬことは確かだ。

それは未だに顔さえ見たことのない孫が姫斬りを抜いたということ、そしてその姫斬りを安倍晴明が観察しているということ。

鈴宗には安倍晴明の目的は分からない。

八咫鳥という組織の設立、その前進ともいえる退魔士組織ウタイの排除、退魔の活動において回収された妖怪を用いた実験の数々。

そして安倍晴明に対して都合よく巻き起こったテロ、殺人事件、権力者の死去。

彼は世界を手中に収めようとしているのが目的なのか、安直に思い浮かぶのはそんな目的だ。

しかし鈴宗はそうは思わない。

あの怪物——晴明はその程度で満足する器とは思えなかった。

彼の目的は分からないが、もし姫斬りの力が利用されるとするならば鈴宗にとって益のあることになるとは考えられない。

故に鈴宗の持つ大太刀をどうにかしなければならぬが、現状ただひたすらに抜刀を試みるしかなかった。

無心になれば抜けるものかと、意識が夢と現の境界に溶けるまで座り、無意識に幾千幾万と繰り返してきた型を実行するまでには至ったが、意味がなかった。

思わず溜息を一つ吐く。

一つ息をつき、再度型稽古に集中しようとした、その瞬間だった――

「ぬ……!？」

突如として現れた何者かの気配を感じ、反射的に大太刀の柄に手をかけ、振り向く。

そこに立っていたのは、女性であった。

暗闇の中、淡くぼやけたように不鮮明な立ち姿。

闇の中でなお目立つ光沢のない漆黒の黒髪。

髪は顔を半ば覆い隠すように長く、その隙間から青白い死人のような肌が微かに覗いている。

その身にまとうは白一色の死に装束。

なんと古典的な姿の幽霊であろうか。

ただその佇まいに異質なものが一つ見受けられる。

黒髪の隙間から突き抜けるように生えた二本の角。

帝都と京都の境界を越え、さらに海をまたいだ先にある地方では死霊を鬼と呼ぶ文化があるとは聞く。

しかし目の前にいる霊は帝都で一般的に鬼と呼ばれる妖怪、そうとしか思えなかった。

その証拠に周囲の霊力と妖力が、鈴宗の肉体に流れる霊力も含めて木枯らしに風が飲まれるように引き込まれようとしていた。

鬼の霊が、ゆるりと動く。

間合いは一足一刀からまだ遠い。

「――」

鬼の霊が、頭上に両手を掲げる。

同時に現れるのは、霊剣。

その形を見て鈴宗は微かに目を見開いた。

「大太刀、だと。」

それは鈴宗が手にする大太刀と似た――いや、瓜二つとっていい形をしていた。

鬼の霊が霊剣を構える。

頭上に刀を掲げ、天上に向ってほぼまっすぐに刀を構える形。

上段の構え。

剣道の上段は手首の動きを柔軟にするべく剣先を斜めに構えるが、まっすぐに剣を立てる構えをしていた。

新陰流において雷刀と呼ばれる構えに近い。

正眼の構えそのままに両手を振り上げたような構え。

その構えのなんと圧力のある事か。

女性の体格は小柄だ。

背丈は百五十センチ半ば程度。

百八十センチ半ばの鈴宗との身長差は三十センチ。

それでも鈴宗の方が思わず気おされそうになりそうな圧があった。

その圧を身に受けた鈴宗は自然と、本能の様に柄にかけた右手を動かす、抜刀していた。

不可思議であった。

あれほど抜くことができなかつた大太刀がまるで自らその身を晒すかのように鞘から抜けた。

鈴宗が大太刀を正眼に構える。

圧を受け流すように切っ先を鬼の霊に突き付けた。

例えるなら急流の中にそびえたつ岩。

いかな激流を受けようとも揺るがずにその場に立ち、分かれ目を作る岩。

互いの間に静寂が満ちる。

心臓の鼓動どころか血液の流れる音さえも聞こえてきそうな、静寂。

呼吸音すら聞こえない。

死霊は当然ながら、生きている鈴宗からも呼吸の音が聞こえない。

呼吸を悟られると容易に隙を突かれる、故に隠す。

間合いは手が長い分鈴宗の方が遠い。

遠いが、攻められない。

相手も鈴宗の間合いが自身より遠いことは理解しているであろう。

静かに、ただ刻のみが過ぎていく。

まだ間合いは遠い。

すると間合いそのまま、鬼の霊が微かに動いた。

剣先がゆつくりと後ろに倒れる。

まっすぐに天井を向いていた切っ先が徐々に、徐々に後ろへと向いていく。

時計の秒針が動くように一定の速度で淀みなく。

鈴宗の目がほんの一瞬、その動きを目で追ってしまい――

間合いの外にいたはずの鬼の霊が、間合いの内に入り込んでいた。

どう間合いを飛び越えた!?

鈴宗がそう考えたのはこの戦いが終わってからであった。

思考が頭をよぎる隙間すらない、刹那の一刀。

鈴宗がその一刀に反応できたのは夢現の狭間にて剣を振るえるほどまでに積み重ねた業の厚み。

鬼の霊が上段からまっすぐに振り下ろす太刀に対し、鈴宗が微かに遅れて太刀を上げ、太刀の刃同士を合わせる様に振り下ろす。

一刀流において切り落とし、新陰流において合し撃ちと呼ばれる技法。

遅れて刀を同じ軌道に振り下ろすことで相手の刀を弾き飛ばしつつ斬る技術である。

刀は板状の形をしているわけではなく小高く膨らんだ鎬と呼ばれる部分があり、その部分を用いて相手の刀を弾けるように設計されている。

鹿角流では”わづら朧”と呼ぶ技だ。

勝機は朧月の様に掠れて、捉えがたく、それでもたしかに存在する。故に朧。

わずかに遅れて振り下ろされる鈴宗の太刀が鬼の霊の太刀と交差した。

互いの太刀の鎬が交差し、交わり、一体となり、やがて流れる様に一方の太刀が弾け飛ぶ。

そして――

鬼の霊の太刀が、鈴宗の頭上に打ち下ろされた。

「俺…は…。」

鹿角鈴宗は座していた。

鬼の霊と相対し、斬られた。

そう理解した途端、夢から醒めたかの様に視界が切り替わった。

あれは夢か、気づかぬうちに眠っていたか。

違う。

違う。

本능が告げる。

あれは夢ではないと警告するように心臓は早鐘を打ち、脳が訴える。

ならあれはいったい何だったのか。

呼吸を一つ。

二つ。

三つ。

心臓が落ち着きを取り戻していく。

四つ。

五つ。

ようやく心臓の鼓動が正常に近い状態まで戻った。

そして腰に差していた大太刀に手をかけ、ゆっくりと抜刀を試みる。

やはり、抜けない。

あの鬼に勝てたとき、再びこの大太刀を抜くことができるのだろうか。

分からない。

だがやはりこの大太刀には何かが潜んでいる。

無名の鬼ではない、何かしらの名を持つ強力な鬼がいる。

先ほどの鬼の霊との攻防。

おそらく、上段に構えた刀を動かして鈴宗の目を誘い、意識を向けた途端に後ろ足を前に寄せていたのだと思われる。

後ろ足を前に寄せた分だけ間合いが縮まり、鈴宗は知らぬ間に間合いを越えられていたのだろう。

ただ刀を動かしたただけでは鈴宗の意識が向くことはない。その動きがあまりにも淀みなく等速であったせいで初動に気づかず、まるで刀が瞬間移動したかのような錯覚を覚えてしまい意識がいつてしまったのだ。

完敗だ。

勝機を外され、勝負の動き全てを組み立てられていた。なんとという見事な技か。

思い出すだけで恐怖と歓喜が胸の中で溢れ、混ざり合い、溶け、膨らみ、ややもすれば狂気となつて身体に満ち溢れそうになる。

年甲斐もなく心が昂ぶる。

立ち合いというものは良い。

鈴宗は左の腹——肋骨を触りながら想う。

少し前に旧友、ツツジとの立ち合いで碎かれた部分だ。

今は完治しているがまだ痛みを思い出せる程に新鮮な傷跡。

互いに素手で殺さないように加減はしたが、気を抜けば死んでもおかしくない勝負であった。

鈴宗は肋骨を碎かれながらもツツジの肘を折りそこで勝負を預けあう形にしたが、より深く拳が突き刺さっていれば折れた肋骨が臓腑に刺さっていた可能性もある。

あの夜は久方ぶりに満足できた。

一つ息を吐いて鈴宗は立ち上がる。

まだ強くなろうとする思いが心に満ちていることに安心しつつ、広間を歩き、扉の近くに近寄ると部屋の電気をつけた。

暗闇が一気に消え、明るい光が満ち溢れる。

窓が一切ない板張りの広間。

窓がないことには理由がある、ここが八咫鳥の訓練施設であるからだ。

退魔を生業とする組織、八咫鳥は警察と連携しているが公には存在しない組織である。

その性質上外部から隔離された訓練施設が存在し、ここもその一つだ。

稽古を終え、掃除をして帰ろうと扉に手をかける。

掃除道具は近くの用具室に設置されている、そのため部屋を出たのだが、同時に鈴宗の顔が渋く歪んだ。

「…何故ここいつがここにいるんだ。」

「くー…すうー…むにや…らいじゆう…そのジャーキーは…犬の…」

稽古部屋の扉の脇、そこには巫女装束に身を包んだ少女が一人、座り込んだまま眠っていた。

その頭にはなんらかの小動物のものであろう耳が生え、

呑気に寝言を交えながら眠る姿に緊張感は微塵もない、その証拠に鈴宗がすぐ近くにいてというのに起きるそぶりが一切見受けられなかった。

「おい、起きろ。」

「ひゃっ——あ…おはようございます師匠！」

「誰が師匠だ…。」

声をかけてようやく目を覚ました巫女の言葉に鈴宗は溜息をつく。

以前彼女は安倍晴明について調べる老婆——鈴宗の旧友であるツツジを尾行した際に人気のないところまで誘い出された挙句、パートナーである妖怪と二人で襲い掛かったものの素手で打ちのめされてしまった。

そこに鈴宗が割って入ったのだが、それ以来勝手に師匠扱いされ付きまとわれている。

「…ここが八咫鳥の施設だからといって気を抜くな、そのうえ眠るなどもつてのほかだ。」

「う…すみませんでした、師匠。」

「まあいい、今から掃除をるところだったが…せつかくだ軽く稽古をつけてやろう。」

「いいのですか！」

「勘違いするな、任務で死なれると寝覚めが悪いから付き合っただけだ。」

「はい!!」

巫女は元気よく声を張り上げ、立ち上がる。

そして稽古部屋に入って数時間後、板張りの床に這いつくばりながら彼女はこう呟いた。

『任務…より…辛…い。』



### 32話 蜘蛛

帝京歴784年9月上旬。

夏休みも終わりを告げ、鈴音と花鈴は再び高校へと通う日々が始まっていた。

昼より幾分かマシとはいえまだまだ気温が高い朝の登校路。

横を元気に走り抜けて行く小学生の背中を見送り、のんびりと歩く老齡のサラリーマンの背を追い越しながら、鈴音は登校路を歩く。

鈴音の生活は以前からあまり変わらない。

前と同じく早朝に起きて鍛錬をし、シャワーを浴びて朝食を食べ学校に向かう。

変わった点は二つ。

昼食を自分で詰める必要が無くなったこと、そして一人で登校しなくなったことだ。

「ふああ〜…眠い!」

鈴音の隣で花鈴が伸びをしながら声を上げ、危うく閉じてしまいうな目を擦る。

「花鈴：昨日も夜更かししてたのか?」

「だってえ…化け猫のやつが負け認めなかったのが悪いんだもん!」

「もう夏休みは終わったんだから…控えめにしなさい。」

「やだ!」

「やだじゃない。」

「やだあ〜!」

花鈴が鈴音の左腕にしがみつき、頬を擦らせながら駄々をこねる。

鈴音はその頭を仕方なさそうに撫でながら宥める。

これが今の二人にとって当たり前の日常になっていた。

そのまま花鈴がべったりと身体を密着させたまま同じ制服を身に着ける生徒の間を通り、校門をくぐって、教室の前で別れる。

数か月前、事件の後に二人で登校し始めた頃は、互いに無関心な様

子だった二人が急に仲睦まじそうに登校したことで大いに騒ぎになった。

しかしそれも今ではすっかり皆慣れ親しんでおり、いつも通りだと言った風に二人の様子眺めている。

その視線はあまりのべたつき様に呆れていたり、花鈴のファンから鈴音に対する嫉妬の目であったり、よく分からないが尊い？と言われている様子だ。

今日もいつも通り校門をくぐる。

鈴音が余裕のある時間を守って家を出るため、急ぐ必要なく教室へと向かう。

だが今日はそこで不意に二人に声がかかった。

「お、おはようございますお二人とも！」

「えっ……あ、おはようございます、会長。」

「おはよう先輩。」

生徒会長——キャバクラで偶然に出会ってしまった先輩、ヒナが二人に挨拶をしたのだった。

どうやら校門近くで二人を待っていたらしく、ヒナはぱたぱたと小走りで二人の隣にやってくる。

鈴音は化粧をしていないヒナの顔をしっかりと見るのは初めてであったため、気づくのに遅れてしまった。

素のヒナの顔は、素直に可愛いと言える愛嬌のある顔であった。

おっとりとしたたれ目に柔らかそうな肌と、素のままでもウエーブのかかったロングヘア。

背は化け猫ほどではないが低めで、メイクでよくあそこまで大人っぽく演出できるものだと不思議になるほどだった。

「改めて二人には挨拶しておこうと思って……驚かせてごめんね、あの時は。」

「私こそ生徒会長だと知らずに……すみませんでした。」

「いいですよそんな気にしなくても！花鈴さんの方がよっぽど会長らしいことしてますから！」

「まあそれほど……あるね！」

「こら…花鈴。」

「だって本当のことだもーん！」

褒めて褒めてと言わんばかりにアピールする花鈴の頭を鈴音は黙って撫でる。

たしかに花鈴は普通は雑用や行事のまとめ役が主な生徒会でありながら、校則の改定や購買の充実化などで結果を出し、積極的に活動をしていた。

あくまで優等生の仮面を被っていた故の行動だったが、今でも自分の欲望のままにはあるが積極的に活動しているらしい。

「うくん、もうちょい私が権力握れば」 式神伝 校内最強トーナメント」 出来そうなんだけどなあ。」

「そんなこと考えてたのか花鈴…。」

「開催できれば校内のオタク共を私の前に跪かせることができるのに。」

「そういう考えはやめなさい…！」

流石の鈴音も花鈴の言葉に顔をしかめ、撫でていた手を止め軽く頭を叩く。

「…花鈴はこういう子なので、会長になったらむしろ心配です。」

「ははは…でもやっぱり活動的な方が目立ちますし、良いですよ…私はそんな勇氣ありませんから。」

「でも、生徒会長をされてるじゃないですか…それだけでも勇氣はあると思いますよ。」

「それもちよつと理由があるというか…。」

鈴音の言葉にヒナは少し気恥しそうに言う。

ひなの反応を見て、花鈴がにたりと笑みを浮かべる。

そして小指を一本伸ばしてヒナの前に差し出した。

「あー、会長のコレ？」

「か、花鈴さん言わないでくださいよー！」

「…コレ？」

顔を真っ赤にするヒナを見て、鈴音は不思議そうにヒナの小指に目をやり、首をかしげる。

特に何の変哲もない指だ。

細くて凹凸の少ないかわいらしい指である。

そんな鈴音の様子を見て花鈴がそっと耳打ちした。

「すーちゃん、小指は彼女さん…恋人の暗喩…!」

「彼女さん…ああ、そういうことか。」

ようやく理解した鈴音が頷く。

「どうやら彼女が生徒会長を務めた理由としてその彼女のことがあるらしい。」

「…いや、それがどう関係あるんだ?」

不思議そうに首を傾げる鈴音を見て花鈴が何故か小さく肩を落とし、溜息をつく。

「相手が問題なんだよ、この学校の風紀委員長でケッコー有名な人だけど、すーちゃんは知らないよね。」

「知らないな。」

「じゃあ分かりやすく説明すると昔の私を気に入ってたけど今の私と仲が悪い人、だいたい分かる?」

「…ま、おおよそは。」

花鈴の言葉に微かに眉をひそめながら頷く。

優等生の仮面を被っていた花鈴を気に入っていたが、今の自由奔放な花鈴が嫌いとなればおおよその性格の検討はつく。

「それでも会長の恋人ってことは悪い人ではないんだろう、あまり変なこと言わない方がいい。」

「いやだね!あの高慢ちきで人を見下さないと気が済まない感じ、クツソむかつくんだよ!」

「花鈴…すみません会長。」

「だ、大丈夫ですよ、花鈴さんがあの人と馬が合わないのは知ってますから…。」

「そう言いながらも困ったように眉を八の字に下げながらヒナが笑う。」

「どうしたものかと鈴音が顎に手をやると、後ろから人が此方に向かってくる気配を感じた。」

誰だろうかと鈴音が振り向くと、女生徒が一人歩いてくる。鈴音はすぐさまに相手の背丈や歩き方、目線から女生徒がどのような人物か分析した。

意識してやっていることではない、無意識にしてしまう癖のようなものだ。

背は百七十五センチ前後、女性にしてはかなり高い。

歩き方にぶれがなく体幹がしっかりしており、なにかしらの競技——いや、格闘技をやっているようであった。

目線はまっすぐと前に向けており、振り向いた鈴音と目が合ってもぶれることがない。

髪は長く艶やかで烏の濡れ羽色という表現が当てはまる美しい黒。

顔立ちも整っており、人形のような美しさがある。

しかしどこか愛嬌がない。

愛嬌に満ちてかわいらしい顔立ちをしているヒナとは対照的に感じる。

女生徒はまっすぐに鈴音たちのもとに歩いてくるとゆっくりと口を開いた。

「おや、珍しい組み合わせだが、一体何事かな？」

挨拶もなしに鈴音たちに声をかける。

花鈴が女生徒の顔を見るとみるからに嫌そうに顔をしかめ、ヒナは微かに表情を和らげた。

鈍い鈴音にも二人の表情を見れば察しは着く。

彼女が話していた風紀委員長なのだろう。

「何？あたしが会長と話すのにもわざわざあんたの許可がいるわけ？  
久保寺さん？」

花鈴がトゲのある口調で風紀委員長——久保寺につっかかる。

久保寺は花鈴に返事することなく鈴音と花鈴を一瞥すると、ヒナに目を向ける。

「ヒナ、この二人はどうしたんだ？何かあったなら私が話をしよう。」

久保寺は会長をヒナと呼んだ。

ヒナという名前は会長の源氏名というだけでなく、名前にも含ま

れている言葉らしい。

「大丈夫です久保寺さん、少し前に仲良くなつたので話していただけですよ。」

「この二人とヒナが？」

じろり、と鋭い目線が鈴音と花鈴に向けられる。

二人ともその程度でひるむことはないが、鈴音はどうしたものかと考える。

なにやら悪い虫がついたと誤解されているようだが、素直にヒナとキャバクラで会いましたとは言えない。

その様子を見た花鈴が面倒くさそうに眉をひそめ、話し出す。

「会長が自転車が壊れて困ってる時にすーちゃんが通りがかって家まで運んだんだよ、今はそのお礼を言われてただけ、OK?」

花鈴が適当に出会った経緯をでっちあげる。

「そうか、私に言ってくれば良かったのに、ヒナ。」

「お、お忙しいかと思つて。」

「何を言うんだ、他ならない恋人の君のためなら私は駆けつけるよ。」

久保寺の言葉に思わず鈴音は目線をそらし、花鈴は辟易した様子で顔をしかめる。

映画のように芝居がかつたセリフに二人は苦い表情を浮かべるが、ヒナはその言葉が嬉しかったのか顔を赤らめている。

鈴音には理解できない感情だった。

「君たち、ヒナが世話になつたようだね、感謝するよ。」

「それが感謝してる態度かつての…。」

「やめなさい花鈴…体力には自信がありますから、勝手にお節介を焼かせてもらつただけです。」

ヒナの横に立ち一応の感謝を述べる久保寺に花鈴が毒を吐き、それを鈴音が諫めながら返事を返す。

花鈴の態度に対し久保寺はニヒルな笑みを浮かべ、肩をすくめる。

「恋人が問題児二人に絡まれているんだ、心配するのも当然だろう?」

「待った! すーちゃんはともかく私は別に問題児じゃないっしょ?」

「かーりーん…!」

鈴音が鋭い視線を向けるが、花鈴はわざとらしく目を合わさない。その様子にあきれたように久保寺が苦笑した。

「期末で追試になった赤点番長と、人が変わったみたいに傍若無人になった花鈴くん、変わらず問題児だと思うが？」

「あ…赤点…番長…。」

初めて耳にする屈辱の言葉に鈴音は思わず頭がくらくらしてしまった、まさかそんな風に噂されていたとは思わなかった。

肩を落とす鈴音に対し花鈴は小さく笑いを堪えている。

そんな様子を見かねてかヒナが割って入り助け船を出した。

「久保寺さん、その…私を助けてくれたんですからあまり…。」

「そうだね、悪かったよヒナ。姉の方は鈴音くんではよかったかな？君が悪い人間じゃないことは覚えておくよ。」

「…ついでに赤点番長という呼び名は忘れてもらえれば幸いです。」

「ははは、では忘れてあげよう。じゃあ行こうか、ヒナ。」

「はい、ではお二人とも、失礼させていただきます。」

久保寺がそう促すとヒナは軽く一礼し、二人で並んで校舎に入っていく。

鈴音は半ば呆然としたまま二人を見送っていたが、花鈴はまだ笑いを堪えていた。

「赤点番長つて…ひつど…くくく。」

「…もういい、次は絶対に赤点はとらんからな！」

「ちよっ、待ってよすーちゃん！笑ってごめんって!!」

花鈴の腕を振り払いながら鈴音は拗ねたように唇を尖らせて校舎に向かい、その後を慌てて花鈴が追いかける。

平和な朝だった。

同日深夜。

少女が独り、住宅街の夜道を歩く。

身を隠すようにサマーコートを纏い、盛るように巻かれた髪を夜風になびかせていた。

顔立ちは幼いが、濃い化粧が施されている。

少女の名前は森崎日向子。もりさきひなこ

生徒会長のヒナ、その人である。

街灯に沿った道ではあるが、もう深夜だ。

ほとんどの家の窓からは明かりが消え、数えられる程度しか明かりのついた部屋は見つからない。

時折響く車の音に対し、ふらつく足で道路の端に身体を寄せながら歩く。

軽く酒に酔っているようだった。

千鳥足とまではいかないが、足取りがおぼつかない。

そうしてたどり着いたのはマンションだった。

マンションといってもアパートとそう変わらない、大衆向けのものだ。

部屋はどうか1LDKの体裁を守っているような小さなものがある。

「ただいま。」

ヒナは玄関をくぐり、静かにそう言う。

同居している母がいるはずだが、返事はなかった。

ヒナがりビングに足を踏み入れると母は何かに怯える様に布団を深くかぶり、眠っていた。

テーブルの上には飲み散らかされたチューハイの空き缶とまだ中身が残ったスナック菓子がいくつか。

それに出前をとったのだろう、チェーン店の名前が入った空き箱が



放置されていた。

「母さん…高いから出前はやめてって言ってるのに…。」

ヒナは眠っている母を見てそう呟きながらテーブルの上をサツと片付ける。

ゴミを袋にまとめて台所に向かうと、そこにはほとんど手の付けられていないヒナが作った料理があった。

安い鶏むね肉ともやし、ピーマン、人参を合わせた炒め物だ。

それを見てもヒナはもう何も思わない。

いつも通りの光景だ。

近ごろの母は娘の料理を口にせず、何かしらの出来合いものやジャンクフードを買って食べている。

前までの母ならこんなことはなかった、全ては父の会社が倒産し、失踪してしまったあの日から狂ってしまった。

手つかずの料理は明日のお弁当に多めに詰めよう、ヒナはそう決め、一応自分用にあてがわれた一室に向かう。

狭い部屋の中、どうにか置かれた衣装タンスにサマーコートをかける。

コートの下には煽情的で体のラインが浮き出る、派手な光沢に彩られた丈の短いドレスを身に着けていた。

俗にキャバクラと呼ばれる店のキャストが身に着けているものである。

ドレスを脱ぎ、洗濯用のネットに入れて洗濯機の横に置くと洗面所に行き化粧を落とす。

化粧を落とした顔が洗面所の鏡に映ると、ヒナの顔が歪んだ。

化粧に覆い隠されていたが顔は青白く、酒を飲んだせいで頬の周りだけが微かに赤みがかっている。

ヒナは未成年だ、しかし酒を飲んだのはもう初めてではない。

キャバクラでの工作中、雰囲気をしらけさせないためにどうしても飲まなければいけない状況に陥ったのだ。

店も、他のキャストも、気を遣ってくれはした。

しかし一晩で結構な金額を使う上客が相手になると店としても強

く出ることは無理だ。

目の前で数十万という金が泡の様に消えていく前で、ヒナはただただ流れに従うしかなかった。

罪悪感や嫌悪感、どうしようもない怒りが胸の中で混ざり、逃げ場がない感情は泥の様に溜まっていく。

開き直れば楽になれるかもしれない。

だがヒナにはそれができなかった。

この仕事も入学費と新生活のためにお金が溜まれば終わりだ、そう思っただけで耐えている。

問題はそれがお金が予想より溜まっていないことだ。

母親は一切働いておらず、急に生活環境が変わったショックのせいか家では墮落しきっており、口座から数万づつ知らぬ間にお金を引き落とされていることも度々だ。

そもそもヒナに今の仕事を紹介したのも母である。

どうしても目指していた大学に行きたいと、そこだけは譲らないヒナに対し、ならばここで稼いで来いと母が言ったのだ。

今のヒナの心の支えは恋人である久保寺純であった。

彼女はヒナにとっては憧れだ。

人によっては傲慢ともとれるかもしれないが常に自信にあふれ、堂々としている姿はヒナが持ちえないものだ。

まるで演劇の様に芝居がかった言葉を臆面もなくヒナに向けて発し、愛してくれている。

化粧を落とした顔を洗い、改めて鏡を見て気を引き締める。

久保寺のことを想って少しは元気が出た。

シャワーを浴び、気分を入れ替えてパジャマに着替える。

そしてゴミが溜まっていたことを思い出し、今のうちに出しておこうと台所に向かう。

最近はお前の空き箱でゴミが溜まりがちなので、翌朝出し忘れてしまおうと狭い台所がさらに狭くなってしまおう。

膨らんだゴミ袋を手を玄関を出てマンションのゴミ捨て場に向かい、カラス避けのネットをどけてゴミを捨てる。

その時、不意に何かが足に触れる感触がした。

「痛ッ……！」

急に足に痛みが走る。

反射的にその場から飛びのき、足元を見ればそこに一匹の蜘蛛がいた。

「な……なに……大き……い！」

ヒナが驚いたのはそのサイズだ。

手のひらほどの大きさをしており、普段道端でみかける蜘蛛よりかなり大きい。

蜘蛛はヒナが視線を向けるとすぐにその場から動き、積もったゴミの影に隠れるように逃げ出した。

「大丈夫かな、毒とかない……よね。」

少なくともこの地域に毒蜘蛛がいるだなんてヒナは聞いたことがない。

逆に噂ではゴキブリなんかを食べる大きな蜘蛛がいると聞いたことはあるため、もしかしたらその種類かもしれない。

きつとそうなのだろうとヒナは自分に言い聞かせる。

街灯の下で噛まれたであろうくぶしの当たりを見るが、腫れたり赤くなっている様子はない。

そのことに安堵しつつ、ヒナはマンションの自宅へと帰っていった。

街灯の光を避ける様に、蜘蛛は物陰を走る。

影と影を繋ぐように動き人知れず走る。

動きは素早い。

先ほど食事をしたばかりで元気がある。

小さな体には十分な量の生気を吸い取った蜘蛛はどこか楽し気に見える動きで壁を登り、やがて繁華街の中で放置された空き部屋たどり着いた。

みすぼらしいビルの中にあり、扉には賃貸募集中と張り紙がされているがもう色あせており、長く誰も借りていないことがわかる。

蜘蛛は動くことがない換気扇の隙間を身をよじるようにくぐり抜け、室内へと入る。

中にはテーブルや椅子のようなものは一切なく、全て持ち出されていた。

床にはほこりが積もり、ところどころに小動物のフンが転がっている。

ここまでは普通の空き部屋にある光景だが、異質な存在があった。

ネズミや蝙蝠——フンの主であろう小動物たちの死体があちこちに転がっていた。

全てに目に見える外傷はなく、干からびたように乾いた状態で力尽きている。

蜘蛛はそれらを避ける様に床を走り、壁を登り、天井を這う。

そして目的地へとたどり着いた。

『おかえりなさい…。』

誰もいないはずの部屋に、か細い声が響く。

天井に、ソレはいた。

巨大な蜘蛛だ。

腹だけで1メートルを越える巨大な——いや、蜘蛛、そして腹の先には蜘蛛の頭ではなく、人間の女性の上半身に見えるモノが生えていた。

妖怪である。

女郎蜘蛛と呼ばれる妖怪の一種であろう。

だがその肌はひび割れ、生気がなく、弱い。

発せられる妖力も微かなもので、どうにか死なずに済んでいるといった雰囲気だ。

彼女は天井の隅に繭の様な巣を作って潜んでおり、帰ってきた蜘蛛

——自ら産んだ子蜘蛛を迎え入れる。

『ああ…良い獲物を見つけてきてくれたのね…ありがとう…。』

我が子の生気に満ちた身体を撫で、愛しく抱きしめ、そして——

『さようなら。』

牙を、突き立てた。

我が子が小さな身体に蓄えた人間の生気を、喰らう。

子蜘蛛はパニックになり脚をばたつかせて暴れるが、逃れられない。

蜘蛛は突き立てた牙で獲物の内臓を溶かし、吸い取ることで食事を  
する。

この女郎蜘蛛も同じように牙で生気を吸い取って糧としていた。

やがて子蜘蛛は力尽きて動きを止め、しばらく脚を痙攣させていた  
がそれもなくなった。

残ったものは生気を吸い取られ、乾ききった死体のみ。

女郎蜘蛛は食べつくした死体をしばらく愛おしそうに撫で、舐め、  
涙を流し、捨てた。

他に喰らわれた小動物と同じように、ゴミの様に床に転がる。

『ごめんねえ…ごめんねえ…ごめんねえ…。』

呪詛の様に、声が響く。

『ごめんねえ…ごめんねえ…ごめんねえ…。』

呪詛の様に、声が響く。

『ごめんねえ…ごめんねえ…ごめんねえ…。』

呪詛の様に、声が響く。

幾度も、幾度も呪詛が響く。

呪詛が響くたびに、女郎蜘蛛のひび割れた肌が微かに塞がり、微かな赤みが生まれて生気が増していく。

『貴女の代わりにたーくさん、食べてあげるからねえ。』

### 33話 文化祭、そして再会

帝京歴784年9月下旬。

鹿角鈴音は教室の席に座りながら、周囲を飛び交うやかましい声中に身を置いていた。

黒板には”文化祭”という文字がでかど書かれており、クラスメイト達はそれについて激しく声を荒げている。

やれ屋台をやろう、いや劇がしたい、お化け屋敷がいい、休憩所で楽しみたいと様々な意見が耳に流れ込んできた。

どうやら文化祭で何をやるかについて意見が割れているらしく、まったく意見が纏まっていないようだ。

鈴音は特に要望もなく、力仕事になれば手伝おうと思いつつのんびりとクラスの喧騒に身を任している。

こういったやかましきは嫌いではない。

以前までは無駄な時間を過ごしていることと不機嫌になることもあったが、今は家族のいる事務所を思い出すからか穏やかな気持ちでいられた。

しかしそれにしても議論——いや、議論とは呼べないただ好きに言葉を発しているだけの今の状況だと、決まるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

花鈴も文化祭に近いこともあって生徒会の集まりに参加するため、一緒に帰れそうもない。

後5分もしたら帰らせてもらおうかと鈴音が考え始めた、その時だった。

『ぐぎゅう〜』

大きく声が交わされる教室の中でも聞こえるほど、大きな腹の虫が声を上げた。

突然聞こえた腹の音に皆が驚き一瞬沈黙する中、ぽつりと小さな声が教室に響く。

「すまない…続けてくれ。」

腹の虫の主は鈴音であった。

議論に水を差したことに對し申し訳なきように鈴音が言うと、クラス全体がシーンと静まり返り、皆が顔を青くする。

鈴音はクラスの皆——いや、学校のほとんどの生徒から不良を締め上げる番長と勘違いされている。

そんな鈴音を長々と待たせた挙句に恥をかかせてしまったと、怯えているのだ。

もちろん鈴音自身は気にしていないどころか言葉通りクラスの皆に悪いことをしたと思っっているのだが、そんなことが伝わるはずもない。

賑やかだったクラスは一転して沈黙に包まれ、お通夜の様な雰囲気になつてしまう。

特に皆をまとめるはずのクラス委員らしき男子生徒は、黒板の前に立ちながらがちがちと齒を震わせていた。

しかしなにか覚悟を決めたのか必死に笑顔を作りながら鈴音に對し声をかけた。

「あ、あああああのか、鹿角…さん！」

「え…なんだ？」

今にも失神しそうな形相で話しかけてくるクラス委員に流石の鈴音も少し困惑しながら返事をする。

「ひゃっ、ひゃの！鹿角様ツ…はあ、どうるればよいと思ひましゆかあ!？」

「え…？」

「ぜぜぜひ鹿角様の意見を伺いたくううう!!」

「とは言われてもな…。」

急に意見を求められて鈴音が困つたように眉をひそめると、クラス委員はより一層がちがちと齒を鳴らし始めた。

鈴音は何も議論に参加していないのだから意見を出すのは当然かと思ひ、考えているだけなのだ。だが端から見れば不機嫌になつたようしか見えなない。

表情の作り方さえも不器用な人間、それが鹿角鈴音であった。



そんな鈴音が小さな脳みそを懸命に動かして導き出した結論、それは――

「全部できないのか？」

「はい…？」

「いや、もうみんな好きにやりたいことやればいいんじゃないか…嫌なことやっても楽しくないだろ。」

あまりにも単純すぎる意見であった。

文化祭と言えば皆で一致団結し、チームワークで一人ではできない大きな規模のものを作り上げることが鉄板である。

それに反する様な鈴音の意見であったが、クラスメイト達はその言葉について真剣に考え始めた。

何しろ学校を統べる番長、鈴音の意見である。

しかし最初は無碍にしたら何をされるか分からないという恐怖からであったが、なんと鈴音の言葉によって次第に意見が纏まり始めた。

「タイムテーブルを作ってやればいけそうじゃないかな。」

「屋台やりたい人らは何人いるの？」

「お化け屋敷が厳しいな…代わりにホラー映像でも作るか。」

「あ！私は劇やりたかったけど映像作るなら役者したい！」

「映像流すならいつそポップコーンでも売るか!？」

先ほどまで衝突しあっていた意見が互いに妥協点を探しつつ、どうにか皆の希望を叶えられないかと議論するものへと変わったのだ。

「なんだ、意外と全部やれそうじゃないか。」

言ってみるもんだと鈴音が一人頷いていると、おどおどとおびえながらもクラス委員が鈴音の席まで近寄ってきた。

「あ、あの…鹿角さん、おかげで助かりました…ありがとうございます。」

「思い付きを言ってみただけだ、気にしないでくれ。」

そう言いながら鈴音は席を立つ。

「すまないが日課がある、お先に失礼させてもらうよ。」

「い、いえいえいえ！ここまでお付き合いさせて本当にすみませ

「んでした!!」

「だから気にするな、それじゃ——」

「ちゃんと鹿角さんの時間も確保しておきますので!!」

「ああ、わかっ——は?」

クラス委員の言葉に適当に相槌を打っていた鈴音は思わずに目を見開いた。

「いや、私は——」

「鹿角さんがやりたいことできるように時間は作っておきます!!では気を付けてお帰りください!!」

「ま、待っ……」

鈴音に特にやりたいことはない、訂正しようとしてもクラス委員は皆をまとめる為にもう黒板の前へと戻っていた。

そのままその場の雰囲気の水を差すこともできず、鈴音はおとなしく教室を後にするしかなかった。

「ぐっ……う……どうすれ……ばッ!」

鈴音は八咫総合事務所のオフィスで、文化祭のことで頭を悩ませていた。

スマートフォン画面を開き、どうしたものかと頭を悩ませる。

「……おい、鈴音ちゃん。」

同じく事務所のオフィスにいた狂骨がそんな鈴音に声をかける。

「なん……ですっ……か狂骨……さん!」

「いやその、何してるの。」

「少しッ……調べもの……を!」

「いやいやいや!それ調べものする姿勢じゃないよね!!」

鈴音は左手の指を地面に突き立てながら逆立ちし、腕立てをしながら右手でスマートフォンを操作していた。

会話している間にも鈴音は一定のペースで腕を動かし、腕立てを続

けている。

相変わらずあり得ない筋力であった。

「というかどうしたの急に、調べものなんてさ。」

「学園祭が…近く！…って…出し物…をどうしようか、と！」

「出し物？学園祭って聞いたことあるけどそんなことするんだ、面白そうだね。」

狂骨が首を傾げる。

狂骨は妖怪だ、人間の学校生活を送ったことはなく学園祭がどういったものか知らないため、興味津々といった表情だ。

「普通はツ…劇や、出店を！やる…みたいですが…自分たち、はツ！」

「ふんふん…って話してるんだから腕立てやめようよ！」

力を籠めるたびにいちいち言葉がつかかかる鈴音に対し狂骨がツツコミを入れる。

鈴音もこれは失礼だと思ったのかゆっくりと足を降ろし、静かに両足で立った。

「いや、その…クラス全員の意見が合わなさ過ぎて、時間を分けてそれぞれ好きなことをやることにしたんです。」

「なにそれなにそれ！面白そうじゃない！どんなのやるの!？」

「本当に色々で…料理の試食会をしたり短い劇をしたり漫才したり…するみたいです。」

「へえー、ソレで色々調べてたんだあ。」

狂骨が頷く。

別に今の筋トレ姿だけで十分見る価値がある気はしたが、そこは一旦置いておいた。

「出し物で調べるとダンスや物真似、一発芸なんて出てきましたが…私にはとてもできないですし。」

「えー、でも鈴音ちゃん剣術できるんだし、何か斬ったらいいんじゃないの？椅子とか机とか。」

「いや学校のものなんて斬れないですよ…それに真剣なんて今は持つてません。」

「そこは大通しでずばあー！つと！」

「できるわけないでしょう……！」

大通しは八咫鳥の文字通り秘密兵器だ、そんなものを衆目に晒すなんてもつてのほかだが狂骨はつまらなそうに唇を尖らせる。

近ごろはユリカに事務仕事を任せきりなせいで元から緩い性格がさらに緩くなっているように鈴音は感じた。

そんなユリカは今日もオフィスでパソコンの前に座り、淡々と事務作業をこなしている。

外は日が沈みかけているというのに仕事が終わらないらしい。

灰皿にはすでにタバコの山ができ、溢れてしまったのか吸い殻の何かを空になったエナジードリンクの缶に突っ込んでいる。

鈴音はユリカにもアドバイスをもらおうかと思いい視線を向けたが、仕事中だからと遠慮をし声をかけないようにした。

だが視線を向けたのに気づかれたのか、ユリカはキーボードから手を放し、マウスの横に置かれたタバコの箱を手にながら鈴音の方を向いた。

「鈴音、私にアドバイスは期待しないでよ、高校とか保健室登校だったし。」

「あ……。」

鈴音は不味かったと顔を曇らせた。

ユリカは靈感が原因で周囲からイジメられ、一度命を失う事態にまでなっている。

皮肉にもイジメの原因になった霊感体質により妖怪染みた存在となつて蘇つたが、今でも心に深い傷を負っているはずだ。

「…別に、気にしないでよ…昔の話だし、今は普通に働けてるだけでも奇跡みたいなもんだから。」

「すいません……。」

「だからいいって…まあ、あれよ、その…自分が凄いと思つてないことでも案外驚かれたり、役に立つもんだから。」

「そう、ですか。」

「そんだけ、頑張りなよ。」

そう言つてユリカはタバコに火をつけ、100円ライターをポケット

トにしまい再びキーボードに手を置いた。

鈴音はユリカのアドバイスに小さく頭を下げて返し、その様子を見て狂骨はうんうんと頷いている。

「いいこと言うねえユリカちゃん、自分には気づかない特技があったりするもんだよ。」

「…狂骨サンは特技とかいいから仕事してくんない？」

「あー、えー…ほら！適材適所ってあるから！私は現場で輝くタイプだし!？」

「本部に連絡いれてもいいんだけど、速攻リーダー首になると思うし。」

「ユリカ様！コーヒーでもお淹れいたしましょうか？」

狂骨が慌ててソファから立ち上がり、ミルク多め砂糖抜きというユリカの注文を聞くや否やキッチンへと小走りで向かう。

それでも仕事が変わったりはしないのだなと鈴音が呆れていると、事務所の玄関から騒がしい声が聞こえてきた。

「だーかーら！メイド服はクラシックなメイド服一択だつての！」

「にゃくに言ってるんだか花鈴、メイド喫茶といえばフリフリ可愛いメイド服に決まってるでしょうが!？」

「それ化け猫が見たいだけじゃん!？」

「そりやそうよイカれたJKしか周りにいないんだからまともなJKのフリフリメイド服見せろ!？」

「…イカれててすみませんね、化け猫さん。」

声を荒げながら玄関を開け、事務所に入ってきたのは化け猫と花鈴だ。

化け猫の言葉に鈴音がじろりと鋭い目線を向けると、化け猫は申し訳なさそうに身体を縮こませ目線を泳がせる。

「にゃツ…その…にゃははは…ごめんなさい鈴音ちゃん。」

「それで、一体何を話してたんです?？」

「あー、すーちゃん、私のクラスが文化祭でメイド喫茶やるってのは知ってる?？」

「いや、知らなかったが…それに化け猫さんがどう関わるんだ。」

「化け猫は客で来る気満々らしくてさ、私の意見も聞けにやー！つて衣装選びに着いて来たのよ。」

「その衣装選びで喧嘩してたのか…メイド服なんてみんな同じじゃないのか？」

鈴音が首を傾げると、花鈴と化け猫、二人の目がギラリと光輝いた。「全然違うよすーちゃん！メイド服といえば主人の傍に身を置くにふさわしい、上品な長いスカートとシンプルなエプロン姿、これよ！」  
「いやいやいやメイド服といえぱっぱり短いスカートでかわいいフリフリの飾りがたくさんついたアイドルみたいなのに決まってんでしょー！」

「はあー!?そんなん邪道なんですけど!?」

「にやにおう!?クラシカルだなんて言ってるけど古臭いだけじゃないの!?!」

「…屋上行こうぜ、久々にキレちゃったよ。」

「私のセリフよそれ、どてっぱらぶち抜いてやるわ花鈴。」

「はいはいはい、花鈴も化け猫さんもそこまでに。」

二人の熱意には感心するが、熱くなりすぎているところに呆れながら鈴音が間に入る。

「…というかクラスの子にだって好みがあるだろうし、その…上品なのと可愛いのと?一つつつ選んでどっちか着てもらえればいいだろう。」

「でもーそれだと統一感がなくなっちゃうし…。」

「そうしなさい花鈴、楽しい文化祭なのに準備で喧嘩したら元も子もないだろう?会長にも迷惑がかかる。」

「はあく分かったよすーちゃん、そうする…それはそれとして、化け猫は屋上な。」

「おうよ、かかってくるにやさしい!」

「だあくかあーら、喧嘩は終わり!」

まだ喧嘩を続けようとする二人を鈴音がキツく睨みつけると流石に二人は矛を収め、渋々と言った様子でいつも通りゲーム機の方に向かった。

どうやら無駄な論争はゲームで決着を着ける気らしく、何やらぶつくさと言いながらテレビの前に二人で座り込んだ。

その様子にホツとしながらも鈴音は自分はどうしようかと考える。

鈴音には二人にとってゲームのような趣味は無く、身体を鍛えることしか頭がない。

その時、鈴音の学生カバンから音が鳴り響いた。

携帯の着信音である。

鈴音は慌ててカバンに入れっぱなしだった携帯を手に取り、相手の名前を見ると微かに目を見開いた。

「せいっ!!」

鈴音の左上段回し蹴りが真つすぐに飛ぶ。

回し蹴りというと名前の通り弧を描いて放たれる印象があるが、鈴音の蹴りは斜め下から一直線に最短距離で振りぬかれる蹴りだった。

その蹴りを右腕でしっかりと受け止める相手は老練の対魔師ツツジ。

先ほど鈴音が連絡を受けた相手はツツジであった。

彼女は鈴宗との戦いによって右肘を骨折したこともあり、鈴音と会うこともなく雲隠れしていたのだが骨折が治ったことで久方ぶりに連絡を取ったのだ。

そして今はもう人のいない夕暮れの公園でツツジのリハビリを兼ねた素手格闘の稽古を行っているところである。

「いつてえ…が——」

ツツジは鈴音の蹴りを受け止めたことで右腕が完治したことを実感しつつ前に踏み込み、鈴音の軸足に対して蹴りを放とうとした。

しかし鈴音がまだ左足が宙に浮いた状態で軸足を回し、カウンターの右正拳を放ったためツツジは軸足を蹴れずに頭を下げて正拳を回

避。

互いに距離をとって向き合う。

「おいおい、怪我してた右腕を蹴り飛ばすなんざ、趣味が悪いねえ。」  
「だってツツジさん…右腕狙おうとしたら嬉しそうにしてみましたから。」

「バレてたか。」

「はい。」

手心のない鈴音の蹴りであったが、ツツジはその手心のなさを喜んでいるようであった。

ツツジが中段、鳩尾ほどの高さに両拳を上げ深く腰を落として構える。

鈴音は掌を緩く開いて上段、頬の当たりまで上げて軽く腰を落として構える。

間合いは二メートルほど離れており、一見して攻撃が届くような距離ではなさそうに見えた。

しかし、ツツジの身体がつるりと地面を滑る様にまつすぐ前に動き、瞬く間に間合いを詰めていた。

初動が見えなかった。

地面を蹴って動くのではなく、腰を落とした状態で身体を支える前足を上げ、支えをなくした身体が前に動くことを初動とし一気に踏み込んだのだ。

ツツジは身体が動く勢いを拳に乗せ正拳突きを三つ、鼻っ柱、顎、鳩尾に放つ。

鈴音は右掌でまず一発目の拳を流して避け、二発目は左肘で弾き飛ばす、最後の鳩尾の一撃も右肘を落として防御し、その場から僅かな体捌き以外ほぼ動くことなく三連撃を凌ぎきった。

鈴音が左掌底をツツジの顎に向かって放ち反撃に転ずる。

ツツジが頭を下げ掌底を避けるが、下げた頭に向って鈴音の右膝が飛んだ。

咄嗟にツツジが両腕で顔面をカバーし防ぐものの、鈴音のパワーによって両腕の防御ごとツツジの頭が跳ね上がる。



跳ね上がった頭に鈴音が右肘を振るい、顎に直撃する寸前でぴたりと止める。

鈴音の肘が止まってからほんのわずかに遅れてツツジが後ろに飛び退るが、鈴音が止める気がなければ顎にキレイに肘が入っていたことは明白であった。

そのまま鈴音は攻撃を止め、距離をとりつつ互いに構えあう。

「…かぁーっ！年取ったねあたしも、二十にもならない娘に一本とられるたぁ！」

「鍛えてますから、死んでも後悔しない程度には。」

悔しがりながらも嬉しそうに笑うツツジに鈴音がそう答える。

答えながら鈴音が前に踏み込んだ。

対するツツジはゆっくりと拳を落としたまま、鈴音を迎え入れる様に立つ。

ツツジが最も稽古に多くの時間を割いた武術は後の先、所謂カウンターを主体とする剣術新陰流。

相手の攻撃を迎え入れて飲み込んでこそ真価を発揮する。

鈴音が真つすぐに踏み込み左掌底を顔面に——と見せて不意に頭を下げた、掌底をフェイントに足に組み付きに——否。

「しいっ!!」

組み付くと見せかけて右腕を大きく振り、視界の外から右の掌底をツツジの顎めがけて放つ。

二重にしかけたフェイント、掌底を餌に組み付くと見せ上下に大きく動き、視界の外から打撃を放つ。

しかしツツジはそれを軽く下がって避けた。

鈴音が甘かったと顔をしかめる。

たしかにフェイントを交えた連携は上手く繋ぐことができた、が、冷静に下がられてしまうとフェイントが意味をなさない。

仮に左の掌底を打っていても、組み付きに行っても、避けられるかいなされていた。

ツツジは鈴音の動きに対して下がる、ただそうすればよかったのである。

しかし言うに易しやるに難し。

実際にそうできるものではない。

鈴音が上体を起こしながら右に身体を振り、斜めに体捌きを行いつつ左の掌底を突き出した。

ツツジは鈴音の動きに合わせて軽く左足を引き上体を反らせて掌底を避けつつ右の正拳を鈴音の脇腹に叩き込んだ。

「ツく…!!」

鈴音が微かに苦し気な声を上げる。

筋肉の薄い、肋骨付近を狙われた。

いかな鈴音とてカウンターで筋肉の薄い部分を狙われればダメージを受ける。

さらにツツジは左の鉤打ち——簡単に言えば左フックだ——を鈴音の顔面に放つ。

鈴音は左肩を上げつつ右掌で顔面をカバーし、顎を引いて左鉤打ちの衝撃に備える。

しかし——

「残念、こつちが本命だねえ。」

こつん、と鈴音の後頭部に何かが軽く触れる感触。

ツツジの右拳であった。

ツツジは左の鉤打ちをフェイントにし、右の鉤打ちによって後頭部を狙っていたのだ。

そして鈴音はその連携にあっさり引っかかってしまったのである。

「…勉強になりました。」

鈴音が防御の備えを解いて少しばかり悔し気に言う。

対照的にツツジは得意げに、そして少し安堵したように表情を緩める。

「ふい、さすがに一本取られたままじゃたまらないからね、面目躍如ってとこだ。」

言いながらツツジは右腕を軽く回し、異常がないことを確かめる。

そして快調快調、と頷いて鈴音に笑いかけた。

「どうだいこのまま一杯飲んでいかないか、コーヒーでよけりやね？」

### 34話 昔話

#### 喫茶『黒猫』

レトロで古くこの店が建てられた時からそのままであろう意匠の扉を鈴音とツツジが開き、店内に入る。

木造で年季が入っていることは一目瞭然だが掃除は行き届いており、古くなった木材独特の匂いが良い雰囲気醸し出している。

外からは小さく見えるが中はそこそこ広い。

大きな四人掛けのテーブル席が三つと二人掛けのテーブルが二つ。あとはカウンターにいくつかの席が用意されていた。

ただそれら席に座りコーヒーを飲む客は一人もいなかった。

二人が店内に入るとカウンターの椅子に座って携帯機器を操作していた店長——マスターが顔を上げ、少し慌てた様子で席を立った。

「あー、いらっしやい、お好きな席に…って、あんたか婆さん。」

「ああん？客連れてきてやったんだから感謝しな。」

ツツジの顔を見るとマスターは砕けた口調で対応し、ツツジも同じ調子で答える。

「どうやら見知った仲の様だ。」

一度鈴音もツツジとここに訪れているが、その時はツツジがマスターと親しくしている様子はなかった。

あれから仲良くなったのだろうか？と鈴音は疑問に思いながらツツジに促されてカウンターに座る。

「…ちよいとあつてマスターとは仲良くなったのさ、あたしはコーヒーのビール割りで。」

「そんなもんねえよ…ここは普通のコーヒー屋だ。」

「ちえっ、そんなんだから隣の茶店に客取られちまうんだよ。」

鈴音の心に浮かんだ疑問に答える様にツツジは言い、さらによくわからない注文をマスターに要求する。

マスターも呆れた様子ながらもツツジのこういった性格には慣れているらしい。

しかしコーヒートのビール割とは…と鈴音が首を傾げているとツツジがジロリと目線を向けた。

「あるんだよそういうカクテルが、結構美味いんだぞ。」

「いやカクテルって…お酒じゃないですか。」

「コーヒー入ってんだからあってもいいじゃねえか。」

年甲斐もなく唇を尖らせ子供のようなことを言うツツジに、マスターが溜息をつきながら肩をすくめる。

「いいわけねえって婆さん、で、君は何を飲む？」

「あ…じゃあ…普通のブレンドコーヒーをお願いします。」

鈴音が小さく頭を下げて注文するとマスターが頷き、豆の準備を始めた。

淀みない動作で豆をミルで挽き始めるマスターを眺めていると、ツツジが口を開く。

「…久々にジジイに会ったよ。」

「ジジイ？」

「あんたの爺さんだよ、会えるとは思ってたが、土産までもらっちゃまうとは思わなかったがね。」

そう言いながらツツジが折ったという右肘を鈴音に向けて突き出す。

「腕を折られたというのは、祖父がツツジさんの腕をということでしたか。」

「ああ、代わりにこっちも肋骨は折ってやったがね。」

「けけけ、と楽しんで笑いながらツツジが言う。」

その言葉に鈴音もどこか納得したというか、安心したようにうなずいた。

「そうですか…やはり祖父も強いんですね。」

「怖くなったかい？」

「いや、楽しみです…私がその…こっちにいるということは祖父と相手することはないかもしれませんが。」

「そうだね、ま、私みたいなのと付き合っても八咫鳥にいりやあジジイが鈴音とやりあうこたあねえだろうよ。」

「…いいんですか、その名前を出しても。」

「いいんだよ、この店だったら。」

ツツジは黙々とコーヒーを淹れているマスターにちらりと視線を向け、笑う。

「どうやらこの店も鈴音が身を置く退魔師の世界と関りがあるらしい。」

「…一応ジジイから面白い話は聞けた、話してた鹿角の大太刀が妙な気配を見せるようになったんだよ。」

「それが花鈴が姫斬りを目覚めさせたことと関係がある、と?」

「そこまでは分からんが、可能性は高いだろうね。あとはあのジジイ次第さ、私も八咫鳥の連中が会いに来るくらい目を付けられてるし、しばらくは大人しくしとくよ。」

「分かりました、最近のカマイタチの時の様に妙な任務もないですし、私も吉報を待ちます。」

「それでいい、若いもんは頭空っぽにして暴れてるくらいでいいんだよ…なんかジメつたい話になっちゃったね。」

ツツジがぐぐつと背伸びをしてみず体を解し、一息ついたところで鈴音に顔を向ける。

「あー、そうだ、いい機会だし話しておこうかね、ジジイのこと。」

その言葉に鈴音は小さく目を見開く。

家族の話は鈴音が以前に聞いてみたいとツツジに話していたことだ。是非、と鈴音が頷くと同時にコーヒーを淹れたカップが二つ、それぞれの前に置かれた。

絶妙なタイミングだった。

偶然か故意かは分からない、しかしコーヒーは淹れたての香ばしい匂いをたてており、決して淹れてから時間の置いて出されたものではない。

これが計算されていたとしたらまさしく熟練の業である。

ツツジはコーヒーの香りに満足げに笑みを浮かべ、そつとカップを口に運ぶ。

鈴音も做うようにカップから一口コーヒーを含んだ。

透き通るような苦みが口を満たし、不思議と心が落ち着いていく。

その心地よさに身を任せながらツツジはカップを置くと、ゆつくりと語り始めた。

帝京歴730年代――

今よりも少し不便で、今よりも少しおおらかだった時代。

その街の夜に暗闇はなかった。

原色のネオンが夜の街を派手に彩り、明滅を繰り返しその存在をアピールする看板が月の明るさを忘れさせるほどに輝いている。

居酒屋、バー、キャバレー、スナック、クラブ。

そのような店が大通りに立ち並び、少し脇の通りに入ればひっそりと隠れる様におでん屋の屋台の提灯が輝いている。

どこまでも光に包まれる不思議な夜。

道行く人々はみな顔を赤くしながら表情を緩ませており、その緩みに狙いを定める煽情的な格好をした男女があちらこちらに立っていた。

闇を跳ね返すように光り輝く街に吞まれるように人々も夜を忘れて活き活きと活動し、騒ぎ、踊り、飲み、時には狂っていた。

しかしそんな中で一人、特別人目を引く少女が大通りを歩いていた。

夜の街を独り歩く少女というだけで人目は引く、しかしまず目を引くのはその服装だった。

少女は上半身に素肌の上から革のライダーズジャケットを身に着けたのみであり、下着も肌着も身に付けていない。

それでいて窮屈そうな胸は谷間がさらけ出される程にジツパーを下げており、一応は胸元がこれ以上開かぬようにシルバーのチェーンを通して留められている。

指には髑髏や蜘蛛、ヤギの頭を象ったシルバーの指輪がいくつも嵌められ、首にはツツジの花をモチーフにしたネックレスが巻かれている。

下半身には太ももの付け根近くまで大胆に切り落としたデニムのホットパンツを履き、靴は黒いショートブーツ。

男女問わずその胸元、あるいは足に視線を向けてしまう。

そして少女の顔を確認し、ほとんどの人間がすぐに目を逸らした。決してその顔が期待外れであったわけではない。

むしろ少女の顔立ちは十分に整っていた。

毛先が背中の中ほど届くほど長い黒髪には癖が一切なく、輪郭に無駄な脂肪は一切ない。

やや褐色に近い肌の色は健康的な印象を持たせ、鼻はするりと綺麗に伸びており、綺麗な桜色の唇は褐色の肌によってより美しさを引き立てられている。

だが、問題は目だった。

どれだけ美しい存在であろうとも、その目に凜猛な光が見えたとしたら人はどう思うか。

獣だ。

少女を見て人々は思った。

獣が歩いている。

人の形をした獣が。

もう人がほとんど失った野生の勘、その残滓が彼女に触れてはいけないと告げている。

間違いなくそれは少女の姿をしているだけの、何かに飢えた獣であつた。

その服装を見て抱いた艶やかな印象も、その瞳が全てを打ち消して



しまう。

それほどまでに強烈な目をしていた。

だが、そんな彼女の目に気づかない人間もいる。

「なになに君、一人でどうしたの？寂しくない？」

「俺たちなら朝まで暇してるよ〜？」

軽薄な笑みを浮かべた青年が四人、少女に声をかけた。

青年たちは手慣れた様子で少女の前に二人、斜め後ろに二人が陣取る。

取り囲むように場所をとり、少女を逃さないためだ。

手慣れた様子である。

青年たちはいずれも体格が良く、おそらくは運動部に所属している大学生であろう集団だった。

普通の少女ならこんな青年に囲まれてしまえばどうしようもないであろう。

いや、少女に限らず普通の男性であってもこのような状況に追い込まれてしまえばどうすることもできない。

おろおろと周囲に助けを求める様に目を泳がせ、誰も助けてくれぬことを悟るとただ相手の言うことに従うしかない。

だがこの少女は普通ではなかった。

屈強な青年に囲まれたにも関わらず少女は眉一つ動かさない。

それを青年たちは怯えて声も出せないとても勘違いしたのでろうか、左斜め後ろにいた青年は少女の肩に手を回し、あろうことか少女の胸に手を伸ばした。

「…おい。」

そうなって初めて少女が声を出した。

目の前にいる青年に視線を向け、先ほどまで一切表情を変えなかった少女が笑みを浮かべる。

青年はその時になってようやく、目の前にいる少女が普通ではないことに気づいた。

少女が笑う。

桜色の唇が開き、ネオンの光を反射した白い歯がまるで刃物の様に

煌めく。

獣が、牙を剥いた。

「あたしの乳は高えぜ。」

少女の肩に手を回していた青年の頭が、後ろに向って弾け飛んだ。「はっ。」

少女の右斜め後ろにいた青年が、倒れていく青年を思わず目で追っってしまう。

そして倒れていく青年が地面に背を着けるまでの時間の中に、今度は右斜め後ろにいた青年の膝がガクンと下がり、ほぼ同時に顔面が破壊されていた。

「げぶう!？」

口から白い欠片——砕かれた歯の破片を吹き出しながら青年が地面へと倒れ伏す。

突然の事態に目の前にいた青年二人は動くことができなかった。

何をやったかすら理解が追い付かなかった。

それほどまでに少女の動きは迅く、正確で、容赦がなく、なにより自然だった。

まるで呼吸の様に自然に後ろにいた青年二人を倒したのだ。

少女はまず肩に手を回していた青年に向って左足を振り上げ、肩越しに人中——鼻と唇の間にある急所をブーツのつま先で蹴り飛ばした。

バレリーナや体操選手並みの柔軟性がないとできない技術である、青年からすれば蹴り足が見えてすらいなかったであろう。

そして蹴り足を地面に降りるや否や右斜め後ろにいた青年の膝を踏みつける様に蹴り潰し、膝が落ちた瞬間に肘を顔面に突き刺したのだった。

「てめッ——」

青年二人が少女が何をしたかに気づき声を上げたときに、もう少女は二人を片付けるために動いていた。

少女は左に向って回り込み、青年二人と自分の並びが一直線になるように動く。

複数人を相手にする時の基本だ。

「ありやあッー！」

少女の腹に向かって目の前の青年が足を蹴り上げる。だが少女は蹴りが当たる寸前に軽く斜めに向かって足を運ぶだけでそれを避ける。

さらに青年の蹴り足が伸びきったタイミングに合わせて、軽く右手で踵をすくい上げた。

撫でたように柔らかい動きであったが、ただそれだけで青年は大きくバランスを崩し、危うく転びそうになつて手を泳がせた。

そしてがら空きになつた頭に向つて、少女の踵が振り落とされた。踵落とし。

ブーツの踵を鉄槌の様に振り下ろしたその一撃に青年が意識を失うことは当然であつた。

残るは一人。

ただ一人残された青年は目の前の光景に信じられないと震えながらも、歯を食いしばつて両手を上げて構えた。

「どうやら少しばかりボクシングの心得があるらしい。」

「へえー、拳闘かい。」

少女はボクシングを拳闘と、古い呼び名で口にしながら相手をおちよくるように両手を上げ、ボクシングの様に構えて見せた。

その動きに相手の青年はカツとなった。

少女に向つて踏み込み思い切りワンツーパンチを放とうとするが、そのパンチは少女が挑発によつて誘つた動きである。

ワン。

左のジャブが、上体を反らして避けようとした少女の顔——いや、鼻に浅く当たつた。

当たつたと言つても伸びきつた拳の先端が触れただけである。

それでも当たりはしたのだ。

青年はその事実顺势いづき、思い切り拳を振りかぶり渾身の右ストレートを繰り出す。

ッー——

みちゆり

その音は、どう形容してよいものか。

ただ文字で表すならばそういう音になる。

青年の渾身のパンチは少女に対し威力を発揮できる最高のタイミングで当たっていた。

しかし、当たった個所が問題であった。

「あつ…ああ!? ああーツツツ!!!」

青年の悲鳴が響く。

青年の拳は少女の肘に当たり、骨が折れて手の甲から突き出ていた。

もちろん狙って肘に当てた訳ではない。

拳の軌道とタイミングを見切った少女が肘をカウンターで叩きつけ、砕いたのだ。

先ほどの音は折れた骨が肉を裂いて露になる音であった。

少女は自分の手を見て悲鳴を上げる青年にたいしつまらなそうに眉をひそめると、歩くように自然なリズムで右足を上げた。

「ほいさ。」

滑らかな弧を描く上段蹴りが青年の顎に向って放たれ、プツンと糸を切る様に青年の意識を断ち切った。

青年は膝を折り、その場にうずくまるように倒れ、そのまま動かなくなる。

かくして四人の青年たちは全員意識を失い、アスファルトの上に倒れ伏すこととなった。

その光景を見て少女は顔をしかめる。

「うーん…流石に片乳揉まれただけにしちやあやりすぎたか。」

そんな言葉を発した段階になって周囲に一気に野次馬が押し寄せてきた。

あまりにも短時間で少女が四人を片付けてしまったため、野次馬が寄り付く時間さえなかったのである。

その野次馬たちも少女が目線を向けると、目を向けた先に割れ目が見えた。

今やった所業を考えると当然である。

警察が来ないうちにさっさと立ち去ろうと少女が野次馬の割れ目の間を小走りに通り抜けるが、その先に一人の男が立っていた。

男は野次馬たちと違い少女が目を向けてもその場から動くことなく、まっすぐに少女の目を見つめ返す。

「げっ……」

少女は男を見ると苦虫を噛み潰したような顔をした。

男は一見して細身で背の高い、長身瘦躯の男だった。

黒いTシャツの上から黒いジャケットを羽織り、綿でできた黒いズボンと鈍く光沢を放つ黒い革靴を履いていた。

癖のついた男にしてはやや長い髪と、猛禽類の様に鋭い目は服装と同じように黒い。

ただその肌と唇は黒い服装とは対照的に透き通るように色素が薄い。

ネオンに照らされる肌は血管が透けるのではないかと思うほどに白く、唇は薄く塗った頬紅の様な淡い色合いをしていた。

顔立ちは非常に整っており、薄い肌も相まってまるでアンティークの人形がそのまま動いているかのような印象を思わせる。

ただ男の顔にはどこかまだ大人とは言い切れない幼さの名残が残っていた。

高い背とどこか人間離れた容姿が大人びて見えるだけで、よく見ればまだ少年と言ってよい年齢であるように思えた。

「…何をくだらんことをしている。」

呆れたような声で男——いや、少年が少女に向って言う。

少女は面倒そうに肩をすくめながらため息を吐く。

「掛け試しだよ掛け試し、いいだろ別に？」

「黙れ、あんな遊びを掛け試しだなどと言うな。」

掛け試し、とは簡単に言えば野試合のことである。

ある地方では互いに実力があると分かっていることを前提で腕試しに試合を挑む文化があり、それを掛け試しと呼ぶ。

つまるところ喧嘩ではあるのだが、あくまで両者が認め合った中で

行うものだ。

間違つても少女がやったように治安の悪い場所を独り練り歩き、絡んできた輩を暇つぶしの様に壊して遊ぶようなものとはワケが違う。

「うっせえなあ、いいじゃねえかよ鈴宗。」

「いいわけあるか…こんなくだらん遊びは二度とやるな、ツツジ。」

少年の名は鹿角鈴宗。

少女の名は山辺ツツジ。

これは今よりも少し不便で、今よりも少しおおらかだった時代。その時代を生きた少年と少女のちよつとした昔話である。

### 35話 裏仕事

鈴宗とツツジは人目から逃れる様に大通りから離れ、雑多な屋台が並ぶ細い通りを提灯と店の明かりに照らされながら歩いていった。

ツツジは砂糖と醤油が焼けるこうばしい焼き鳥の匂いや、鶏ガラの出汁が効いたラーメンのスープの香りに鼻孔をくすぐられ、どこか一軒立ち寄りたいたい気分になるが鈴宗は黙々と通りを歩き続ける。

仕方なしにその隣を歩きながらツツジは鈴宗に声をかけた。

「で、お前はこんなところで何してたんだ、鈴宗よお？」

ツツジがライダースのポケットからタバコを取り出し、シルバーのオイルライターで火を点けながら問う。

緑色のパッケージに金色の蝙蝠が描かれた銘柄のものであった。

「俺は仕事だ、まさかお前に会うとは思わなかったがな。」

鈴宗もズボンの尻ポケットからタバコを取り出し、ツツジとは違ってマッチで火を点けながら答えた。

こちらは白いパッケージに青い弓矢が描かれたシンプルなデザインの銘柄である。

山辺ツツジと鹿角鈴宗。

この二人は所謂幼馴染である。

互いに退魔師の家系に生まれ、歳が近かったこともあり自然とそういった関係になった。

幼い頃から人を脅かす妖怪に立ち向かい、陰ながら平和を維持するための修練を重ねてきた二人であったが、とある事情によりまず同じ仕事——任務を行うことはまずない。

鈴宗の仕事が特殊であったからだ。

そのことをツツジは重々に承知している。

故に鈴宗が仕事をするという話を聞いて爛々と目を輝かせた。

「マジ!?!」

「ついてくるなよ…と云つても、もう遅いか。」

「おうよ!あたしから逃げ切れると思うなよ?」

「ただし、邪魔はするな…それが条件だ。」

上機嫌になるツツジを見た鈴宗はダダをこねられる前に同行することを承諾し、最後に一言付け加える。

その言葉にツツジはにんまりと笑みを浮かべた。

「それ、お前が殺されるって時にも邪魔しちやいけねえのかい?」

「当然——」

パン。

鈴宗が答える途中、突如として大気が弾ける音が鳴り響いた。

突如としてツツジが鈴宗の顔面に裏拳を放ったのである。

ただ鈴宗は一切動じることなく裏拳を掌で受け止め、ツツジは放った拳越しに鈴宗を睨みつける。

ツツジはくわえていたタバコを地面に落としながら歪んだ笑みを浮かべた。

「当然だあ?あたしはそうなったら手を出さず、てめえのプライドなんか知ったこっちゃねえ。」

拳を引きながら、ツツジはそう言った。

「おつと間違えるなよ、お前の心配してんじやねえんだ。」

「…分かってる。」

吐き捨てるように鈴宗は言う。

その言葉を聞いたツツジは目線を外し、そして互いに目を合わさぬまま道を歩き続けた。

しばらく歩いた先にたどり着いたのは大通りから少し離れたところにある小さなビルだった。

ビルの入り口には小さな看板が備え付けられており、そこには『(有) 霊法会』という文字が書かれていた。

どうやら目的の場所はここらしい。

「なんだこの胡散臭え会社は。」

「…去年できた会社だ、お前が思う通り表向きはお札やら御神水やら



を売ってる胡散臭い会社だ。」

「でもよ、お前が仕事に来たってこたあ…。」

「ああ、本物だこいつら。」

楽し気に笑みを浮かべるツツジの問いに、無表情のまま鈴宗が頷いた。

ビルの扉を開け、階段を上った先にあるオフィスの扉に鈴宗は手をかけるとノックもなしに開いた。

扉の先には普通の会社とそう変わらないようなオフィスが広がっていた。

作業机が置かれ、壁際には書類がまとめられたファイルが並ぶ書庫がいくつか並んでいる。

社名が入った段ボール箱もあちらこちらに置かれており、奥には扉が一つ、あとは背広姿の社員が三人いた。

男性が二人に女性が一人。

その内の男性一人、眼鏡をかけた男が急な来客である鈴宗に対し訝し気な目を向けながらも対応を始めた。

「あの、どちら様でしょうか？」

「社長に用がある、どこにいるんだ？」

「いやあの、要件を——」

「鹿角が来たと伝えてくれ。」

「は、はあ…。」

眼鏡の男は首を傾げながらも奥の扉へと向かい、扉を小さく開けて中に向って声をかけると話がついたのかすぐに戻ってきた。

「鹿角様、社長がお会いすることです、どうぞおはいり下さい。」

眼鏡の男はオフィスへと鈴宗とツツジを招き入れ、その先に社長がいるであろう奥の扉まで案内する。

招かれるままに二人が扉をくぐった先には先ほどのオフィスとは異なり、いかにも、な雰囲気漂う空間になっていた。

壁には掛け軸やお札が貼られ、書類が入っているであろう棚の上には狐や龍、虎の様に強い力を持つと呼ばれる生き物の像や数珠が飾られている。

棚や机に壁紙も帝都風ではなく京都風の意匠が施されているものが選ばれていた。

あまりにも胡散臭い空間だ。

似非の霊媒師がとりあえずそれらしいものを並べてそれらしく演出したようにしか見えない。

もし京都の首都でこんなものを見せようものなら”えらい素敵な部屋やねえ、ウチには真似できまへんわ”と嘲笑されて相手にされないであろう。

「へえー…。」

部屋を見まわしながら鈴宗の後ろにいるツツジがいくつかの意匠を見て声を漏らす。

鈴宗も声には出さないが室内の様子を一通り確認し、そのうえで社長である人物に話しかけた。

「突然来てすまない、俺が鹿角だ。」

「いえいえ、相手がああ鹿角の人間ならばお会いしない訳にはいかないでしょう。」

霊法社の社長はまだ年齢が三十代前半であろう、中肉中背の男性であった。

服装は背広姿であった社員たちとは違い白い着物に紫色の袴を履いた、例えば神主のような神職を連想させる服装をしている。

顔立ちはさして特徴的ば部分はなく、よく言えば親しみやすい、悪く言えば無個性な顔をしていた。

だが鈴宗をにこやかに迎えるその口ぶりと笑みに隙が無い。

「後ろの女性も鹿角の？」

「単なる同業者だ、気にしないでくれ。」

「そうでしたか、で、本日は何故急に来られたのですか？」

「分かっているだろう、普段お前らがやっていることについてだ…。」

鈴宗の言葉に対し、社長は大きな笑みを浮かべた。

「はて、我々はただ妖怪退治を生業にさせていただいているだけです  
が、それが何か？」

「そうだな、それ自体は問題がない、俺たちとて退魔師だからな。」

社長の言葉に鈴宗が答える。

そう、この会社は胡散臭い見た目を隠れ蓑にしているだけの、本物の霊力を持った人間により経営されている会社だった。

ツツジや鈴宗が所属している大きな退魔師組織に属してはいない、個人の退魔師ということになる。

「…だが、お前らはやりすぎた。」

「……ほお？」

鈴宗がそう言うと、社長の顔が一瞬ぴしりと石のように固まった。

「全部調べはついている、付喪神によるポルターガイスト被害の鎮圧、土地開発で住処を追われ暴れていた河童の退治、こういった事例なら俺たちが関与はしない…。」

「…。」

「だがその後、人間に危害を加えていなかった付近の付喪神や同属の河童も皆殺しにしたな？」

「ええ、しましたよ。」

社長が笑みを崩さぬままに頷く。

その答えに後ろにいたツツジがピュウと口笛を吹き、鈴宗は話を続けた。

「他にも保護対象のカマイタチを数体殺し、猫又や垢なめ、ぬりかべのような攻撃的ではない妖怪を多数殺傷…間違いないか？」

「はい、それがなにか？」

社長は笑顔を崩さず、いや、より笑みを強くしながら楽し気に肯定し、鈴宗に逆に問いかけた。

「あれは妖怪ですよ、人にとって存在してはいけないものです。」

「違う、彼らもまた生物で人と共存するべきものだ。」

「何故ですか？」

「お前…。」

「いらないんですよ、これから人間の科学技術は発達し奴らは生活の中から排除されていくでしょう、共存？その果てになにがありますか？」

「…。」

「奴らと共存したところ繁栄などありません。」妖殺し”と呼ばれた鹿角の人間なら理解してくれると思いましたが…。」

「馬鹿が…。」

鈴宗は吐き捨てる様に言う。

「貴様の望むその先にあるのは滅びだ、貴様が殺していい気になって  
いる妖怪とは比べ物にならない存在がいくらいると思ってる。」

「それがどうしました？古臭い信仰にまみれた京都ならいざ知らず、  
ここ帝都では奴らの勢いも衰えています、勝てるんですよ人間は!!」  
「馬鹿な妄言を——」

「はいはいはい、いつまでくつちゃべってんだよお前らはよお！」

問答を続ける鈴宗と社長を眺めていたツツジが苛立ちを隠さぬ声  
をあげた。

そして呆れたように肩をすくめ、びしっと社長に向かって人差し指  
を立てた。

「ようは…いつをぶっ潰して” 私は雑魚でございました、貴方様の言  
う通りでございます” って言わせりゃいいんだろうが、無駄な話して  
んじやねえよ。」

「ツツジ…茶々を入れるんじゃない。」

「いやあ、元気なお嬢さんですね…しかし残念だ” 妖殺しの鹿角”  
でしたら諸手を上げて歓迎したというのに——」

社長がスツと目線を上げ、落ち込んだように俯く。

” 人斬り鹿角” が来たなら仕方ないですね。」

宙に一つ、黒い影が飛んだ。

影は銃弾のような勢いで真つすぐに空気を貫き、ツツジの顔面目掛  
けて走った。

「おおー」

ツツジは軽く首を傾け、顔面に向つてきた影を避けた。

黒い影はそのまま宙を走り、壁へと突き刺さった。

それにわずかに遅れて影が二つ、鈴宗の顔面と腹に向つて飛んだ。

鈴宗は影の一つをツツジと同じように首を動かして避け、腹に向つ  
てきた一つは影が宙にあるうちに左手で掴み、止めて見せた。

その手に握られたものは先が尖った棒状の黒い金属。  
棒手裏剣と呼ばれる手裏剣の一種であった。

「きええええええええええ!!!」

室内に甲高い猿のような叫び声が響く。

社長が両手を上段に構え、机を乗り越え踏み台にしながらか鈴宗に向って飛び掛かる。

突如二人に向って飛来した黒い影、手裏剣を投げたのは社長だ。

荒事になることを察した途端、着物の袖口に仕込んでいた手裏剣を不意打ちに投げ、その隙を狙おうとしたのであろう。

上段に構えた両手から靈力によって形作られる光の刃、靈剣が発現した。

だが鈴宗は飛び掛かってきた社長に対し、掴み取った棒手裏剣を右肩目掛けて投げ返した。

「くッ!?!」

社長は咄嗟に靈剣で右肩を庇い、手裏剣を弾き飛ばす。

その動きにより出鼻をくじかれ社長の初手が遅れた。

飛び掛かりながら一拍子に鈴宗を斬るつもりが、半ば着地しながら斬るような二拍子の動きになってしまう。

動きに二つも拍子があれば、鈴宗にとつてその動きを見切ることは容易い。

振り下ろされる靈剣に対し、斜めに踏み込みながら刀身を肩で撫でる様に身体を回転させ、軌道を逸らしながら回避。

同時に振り向きざま足を振り上げ、社長の頭部に強烈な後ろ回し蹴りを叩き込んだ。

「ぐぶうッ!?!」

社長はカウンターの蹴りを喰らい、地面をごろごろと派手に転がっていく。

そのまま壁際まで転がると装飾品が飾られている棚にぶつかり、がちやがちやと陶器や金属がぶつかる音を響かせた。

社長は棚にぶつかって数秒、そのまま気絶したかの様に動かなかったが、鈴宗は動く素振りを見せない。

そのことに社長は気づくとまるで何事もなかったかのように動きだし、すくつと立ち上がった。

「やれやれ：不意打ちで後ろのお嬢さんを狙ったうえで貴方を狙えば、少なくとも体勢を崩すことはできると思っただけですがねえ。」

「あの程度の不意打ちで死んでくれる奴ならここに連れて来ん：そして今度は死んだふりか。」

「バレてましたか。」

「バレバレだ、後ろの壁に貼られた札を含めてな。」

鈴宗の言葉に微かに社長に動揺が奔った。

社長は不意打ちが失敗した後に二つの策を講じていた。

まずは気絶したフリまたはしても不意打ちを狙う手。

派手に地面を転がったのは鈴宗の蹴りがまともに当たったからではなく、半分は自ら飛んで転がることで威力を殺したためだ。

そして次に狙っていたのが部屋に飾り付けられた胡散臭い意匠を使うこと。

それらはほとんどがそれらしき雰囲気を作ったようにみせかけたものだが、何の効果もないお札に紛れて霊力の込められた呪符がいくつか貼られていたのだ。

ツツジが部屋に入った際に室内を見て、いくつかの意匠に注目し声を漏らしたのはそのせいである。

もちろん鈴宗も室内をそれとなく確認した際に気づいていた。

仕組んでいた罠に気づかれていたことに社長が微かに口を固く結び、動揺した素振りを見せる。

しかしその表情にはどこかまだ余裕があることをツツジと鈴宗は感じ取っていた。

ツツジはチラツと閉じられた社長室の扉に視線を向け、呆れたように溜息をつく。

「あー、あのさあ社長さん：あんまそういう顔しない方がいいぜ。」

「……。」

ツツジの言葉に社長は返事をしなかった。

無駄に言葉を交わしては自分の意図を読まれて危険だと察したの

であろう。

しかしまた微かに社長の唇が力み、形を変える。

ツツジの言葉に動揺しているのだ。

「鈴宗、おこぼれくらい喰ってもいいよな？」

ツツジが扉の前にスツと移動し、右掌を胸の高さまで上げて軽く構えながら問いかける。

「…好きにしろ。」

「おッ——けえい!!」

鈴宗が返答するとほぼ同時にツツジが右足を大きく前に踏み出し、身体全体をぶつけるような勢いで前進しながら掌底突きを扉に叩き込む。

扉の固定具が弾け、枠から外れて大きく吹き飛ぶと社員の一人にぶつかり、下敷きにしてしまった。

「ぬぎゃッ!!」

「おうおう、仕事サボって盗み聞きでもしてたのかい？」

ツツジが部屋から出ながらそう言い放つ。

その前に立つのは下敷きになっている社員以外の二人。

下敷きになったのは先ほど鈴宗を案内した眼鏡の社員、残る二人は恰幅の良い男性とスレンダーな女性の二人であった。

男性は手に印が細かく刻まれた布をバンテージの様に巻き、女性は集中力を高めながら左腰に手を当てて構えていた。

ツツジは社長の表情からまだ挽回の手段があることを察し、扉の前に他の社員がいる気配を察知してあの社員たちが退魔師でありいざとなれば助太刀しようとして企んでいるのではと推理したのだ。

その推理通り残る三人も退魔師であったようである。

「んじゃ、鈴宗、あたしを待たせんよ？」

「お前こそ、俺を待たせるなよツツジ。」

ツツジと鈴宗が互いの標的に向き合いつつ、言葉を交わす。

鈴宗と靈法会の社長。

ツツジと靈法会の社員三人。

ネオンの明かりが遠く光る夜、退魔師同士の戦いが始まった。

### 36話 猛獣注意

ツツジと相対している社員は構えながらも動けない状態であった。ツツジが吹き飛ばしたドアの下敷きになっている眼鏡の社員は受けた衝撃で意識が揺らいでいるのか、動きが緩慢でまだドアの下から這い出していない。

立って構えている男女二人も豪快に室内から出てきたうえ、荒事に慣れ切った様子 of ツツジに気圧され、攻撃に機会を見計らいながら動けない。

霊剣と拳で攻撃を加えるにしても、少し間合いが遠い。

そんな二人を前にツツジは何やら考える様に顎に手を当て、そして倒れたドアの下から這い出そうとしている男を指さして言った。

「あれはメガネで、お前らは——」

眼鏡の社員をそのままメガネと呼ぶことに決める、そして残る二人をそれぞれ指さすと。

「ブタ男と骨子!!」

にやにやと厭らしい笑みを浮かべながら恰幅の良い男性とスレンダーな女性をそう呼ぶことに決めたようだった。

その言葉を聞いて二人は少し頭にきた。

やや開いていた間合いを詰め、同時に攻撃に移ろうと一瞬目配せを交わし、動こうとする。

だがそれよりも先にツツジが一步前に踏み出していた。

その一步で、踏み込んで攻撃を加えようとしていた二人の間合いが殺される。

迷いに一拍子、間合いの調整に一拍子。

合計二拍子、動きが遅れた。

スレンダーな女性——骨子が霊剣を発現させ、峰を向けながらツツジの首筋へ抜刀術のように一撃を、恰幅のいい男——ブタ男が地面を



薙ぐ様な足払いを放った。

上段と下段を同時に狙う息の合ったコンビネーションであった。だが、遅れた二拍の間を含め、ツツジに誘われたタイミングの攻撃であった。

なんとツツジはその場から吊るされた輪をくぐるサーカスの猫の様に前方に向って飛び込んだ。

上段と下段のその隙間をくぐり、ツツジが二人の間をくぐりぬけ、背後に降り立つ、そしてさらに前に向って踏み込んだ。

その先にいるのはメガネの男。

まだ体勢が整っていないメガネの男を最初からツツジは狙っていたのである。

「く、くそっ！」

メガネは咄嗟に背広の懐からお札を取り出し、目の前にかざした。

同時にメガネの前に靈力で作られた膜のようなものが広がり、ツツジの攻撃を阻もうとする。

印や文言を唱えるような時間はなかったため簡易的なものだが時間稼ぎになる。

メガネはそう思ったらしいがそれは浅はかな考えであった。

「よいしょおー！」

「なっ——」

地面に降り立ったツツジが縮めた身体をバネの様に弾けさせ、弾丸の様に靈力の膜に向って突っ込む。

さながらそれは猫というより獅子を連想させる力強さがあった。

獅子が獲物に食らいつくように、ツツジの右正拳突きが膜に炸裂する。

風船が割れる様に呆気なく膜は破壊され、無防備な状態のメガネが一人、悲壮な表情を浮かべながら立ち尽くす。

「オラオラオラオラアッ!!」

右中段回し蹴り。

肋骨九番完全骨折、八番十番不完全骨折。

左中段貫手。

肋骨八番完全骨折、九番不完全骨折、軽度肝損傷。

右中段正拳突き。

胸骨不完全骨折、三番四番肋軟骨完全骨折。

左上段掌底。

顎関節脱臼、三十番三十一番臼歯欠損、二十九番三十二番臼歯破折。

メガネが唯一幸運だったこと。

それは肋骨が折れた信号が脳に達し、痛みを発するまでの間に意識を失えたことだった。

メガネが地面に伏すよりも早く、ツツジは残る二人、ブタ男と骨子に向き直る。

仲間が一人やられたことには怯まず、まずブタ男がツツジに向かって踏み込んでくる。

様子を間合いを見計らっているのは、ちよつとした動きの機微でツツジにコントロールされてしまうことを理解し、半ば玉砕覚悟で突進した。

ツツジにとっては嬉しくない展開であった。

複数戦の場合先手を取って一人を倒し、包囲を崩して位置を巧みに変えながら一気に攻撃されることを防ぐ必要がある。

いくら優位に戦いを進めていても、少し戦いの流れを掴まれただけで劣勢へと覆ってしまうのが複数戦だ。

そしてブタ男はその流れを玉砕覚悟で今掴もうとしている。さらにその恰幅の良い体に隠れて骨子の動きが見えづらい。

なにかしらの奇襲を受けてしまう可能性が高かった。

「チいッ！ブタが!!」

恰幅の良さに不利を受けたツツジが思わず悪態をつくが、ブタ男は言葉を見せず、体格に似合わない機敏さで両拳を振るう。

「アタタオウ!!」

拳を縦に回すように突きの連打を放ちながら前蹴りを放つ。

ツツジは連打を左右の掌でいなしつつ後退、前蹴りを横に回り込むようにして避けるが、避けたところにブタ男の横蹴りが顔面に向って飛んでくる。

首を反らしながらどうにか回避するがまたしてツツジが後退させられる。

ツツジはこのまま後退すれば壁際に追い詰められてしまうことに危機感を感じながら、姿の見えない骨子を探そうとするが、見つからない。

ブタ男の陰に隠れているのか、それともツツジが目を離した隙にどこかに潜伏したか。

このブタ男と真っ向から勝負しても打ち勝つ自信がツツジにはあるが、その隙に背後から刺されない自信はない。

「ホオアウ!!」

勢いづいたブタ男が追撃を放つ。

蹴りと突きをひたすらに繰り返すブタ男の攻撃を捌きつつ、ツツジは覚悟を決めて後ろに下がった。

壁を背にすれば少なくとも背後から刺される心配はないはずだと考え、思いつきり後ろに飛んで壁際まで下がる。

壁に並んでいた書庫に背を預けながら、鳩尾と正中線を庇うように拳を置き、構える。

その時だった。

不意にツツジの背中爆発のような霊力の波動が巻き起こり、ツツジの全身を強烈な衝撃が襲い掛かる。

「ぐぬあッ!」

霊力は妖怪にとっては毒となりえるが人間にとってはそうではない、しかし無害であろうとも強烈な力の波を受けてしまったことには変わりがない。

ぐらぐらと視界は揺れ、内臓が痙攣する腹は異常事態に中身を吐きだそうと蠢き、耳鳴りが音を奪い去る。

思わず膝を突きそうになるがツツジは必死にこらえた、何故ならば

「チャアアアッ!!!」

ブタ男がふらつくツツジに容赦なく右の前蹴りを放ってきたからだ。

咄嗟に蹴りを捌こうとするが、その手が空を切る。

蹴り足が軌道を変化させ、右の前蹴りから内回し蹴り——通常の回し蹴りとは違い、身体の外からではなく内側から回す蹴りを放った。浅くブタ男の靴底がツツジの頬をこすったが、ツツジは身体を引き首を捻ってどうにか回避。

しかしもう背後に道はなく、壁しかない。

ツツジの背中が壁に触れる。

追い詰められたところにブタ男が姿勢を低くして身体を撓め、力を溜める。

ツツジの肉体が正常であれば力を溜めた隙を利用してその場から逃げて体勢を整えるか、あるいはカウンターを狙えただろう。

しかし今、ツツジの肉体はまだ正常な感覚が戻っていないかった。

「壊破ツツツ!!!」

ブタ男が肘を突き立てたまま、強烈な体当たりをツツジの腹目掛けで放つ。

「がっ——ふあ…ッ!」

巨大な杭打機さながらの圧力をもって放たれた肘がまともにツツジの腹に命中。

ブタ男はそのまま身体を押し付け、ツツジを壁に磔にした。

そしてブタ男の背後から飛び出す影が一つ。

骨子だ。

ツツジが骨子と呼んだ女が、ブタ男の陰から躍り出る。

やはり骨子は細い体格を利用してブタ男の陰に隠れ続けていた。

骨子はブタ男の身体を飛び越える様に跳躍、霊剣の峰を振りかざし、ツツジの頭部へ叩きつけて完全に意識を刈り取ろうとした。

「ああ…くっそ…こんなの。」

微かな声で、ツツジが一人呟く。

それは言葉だけ聞けば諦観の言葉にも、負けを認めたようにも聞こえる言葉だった。

しかし、その声が一人聞こえていたブタ男の肌が粟立ち、きゅつと心臓が冷え切ったかのような感覚を覚える。

あまりにも、あまりにもその声は、今にも笑いだしそうで、愉しうであつたからだ。

「武器、使うしかないじゃん。」

骨子の霊剣の峰が、ツツジの額に届く数センチのところで静止する。

ツツジが、霊剣を抜いて額の前にかざし、止めたのだ。

骨子は飛び込んだ勢いそのままブタ男の広い背に着地し、ツツジを上から圧して制しようとするが、乗っているのは人の背だ。

平らな床と違い不安定な足場により、骨子が身体をぐらつかせた途端にツツジが霊剣を斜めに傾けて骨子の霊剣を受け流す。

骨子はこのままブタ男の背には立ってられないと剣を受け流されたとところで無理をせずに背から飛び退く。

ブタ男も背から骨子が退くと同時に、このままツツジを磔にしていると背に霊剣を突き立てられてしまうことを察して飛び退った。

二人が距離をとったところでようやく磔から解放されたツツジはげげほとせき込みながらも、その顔には愉悦交じりの笑みが浮かんでいた。

「やるじえねえかブタと骨、これは敵の本拠地だつてのに油断したあたしが悪いし、お前らが上手かった、卑怯じゃねえか、卑怯なことできるんだ、妖怪殺して、正義の味方面して、最高だねえ、大好きだ、股がじんじんしてくるよ。」

不意に饒舌になったツツジが笑いながら語る。

そう、社長がああの部屋に罠を仕掛けていたのと同じようにオフィスにも罠が仕掛けられていた。

これは完全にツツジが油断していた。

社長室の罠が偽物の中に本物を混ぜる隠し方をしていたため、見えないように隠すという当たり前の手段が頭の中から抜け落ちていた。

ツツジが壁際まで逃げた際に触れた書庫、そこに霊力を籠めた札が隠されていたのだろう。

それを起爆したのはおそらく巧みにブタ男の陰に隠れていた骨子だ。

骨子が姿を消したことに對する相手の動揺を利用し、ブタ男が圧をかけながら壁際まで誘導する。

相手も背後から襲われる可能性を消すためにその誘導に乗ってしまふ。

そこで罫を起爆させて仕留める。

なんという連携か。

こうなると無造作に置かれた書類の束、段ボールの中にも仕込まれているように思えてしまう。

本来ならばツツジが半ば不意打ち気味に倒したメガネの符術も利用するのだろうか。

そうだとすれば万全ではない組み合わせでよくも自分を追い込んだものだ、ツツジは相手に賞賛と感謝の想いを抱かずにはおけなかった。

あまりにも楽しそうに話すツツジの言葉を聞きながら、戦いの主導権を間違はなく掴んでいたはずの二人の動きは止まっていた。

暴れている獣の相手をして上手く立ち回り、ようやく取り押さえたと思つたら、実は獣は暴れていたわけではなくただじやれていただけだった。

そのことに気づいた時にはもう遅く、獣が白い牙を覗かせた後であつた。

そんな気分であつた。

ツツジが靈劍を構える。

実戦の中で靈劍を握つたのは、久方ぶりであつた。

両手に握つた靈劍を一度、青岸に構える。

真つすぐではなく斜めに劍先を向ける、新陰流独特の正眼の構え。新陰流では正眼の構えを青岸と呼ぶ。

その状態からゆっくりと切っ先を降ろし、下腹部——俗に丹田と呼ばれる部分に手が来るくらいの位置でぴたりと止めた。

新陰流、水月の位。

水面に揺れる月のように、姿は見えども掴むことができない。

笑みを浮かべたままのツツジの佇まいはここが実戦の場だということをおぼえてしまいそうになるほど穏やかで、手を出すことができない。

二人の身体が固まった。

その硬直を察知したかのようにふわりと羽毛が舞うように、ツツジの身体が動く。

まるで床そのものが動いてツツジを運んだかのようにその動きには力みがなく、穏やかな動きだった。

見ていたはずなのに、動きを捉えられない。

ツツジがまず靈剣を持つ骨子の間合いに入った。

間合いに入った途端、骨子は弾みのように靈剣をツツジの左手首に向って振るっていた。

灯に吸い寄せられる虫の様に、本能の様に。

手首に靈剣の刃が触れる——そう思った時、水面の月は骨子の手をすり抜けていった。

消えた。

骨子はそう思った。

そう思った時には手から力が抜け、靈剣を取り落としていた。

ツツジの靈剣の刃が、骨子の左手首の中ほどまで潜り込んでいた。

新陰流、くねり打ち。

相手の手首への打ちに対し、手を上げつつ斜めに足を遣うことで打ちを外し、そのまま膝を落とす力で劍先を相手の手首へと落とし、斬る。

後の先、今風に言うならカウンターの技術に秀でた新陰流において多く用いられる技術だ。

熟練者のくねり打ちは相手からすると透かされたように腕が消え、同時に手首が打たれたように感じるほどに洗練される。

「えっ……？」

骨子はあまりにも呆気なく自分が一本を取られ、劍を握る力を失ったことに微かに声をあげただけで、呆然と鮮血が流れ出した手首を見

つめる。

そのままツツジは前進。

落とした膝を滑らかに戻しながら霊剣をゆっくりと上段に構え、ブタ男に向って歩く。

ブタ男は咄嗟に印が刻まれた布が巻かれた腕で上げ、防御に備えた。

布には霊力が込められており、もとは妖怪に効果的な打撃を与えるためであったが、霊力の刃である霊剣を弾くことも可能なはずだ。

ツツジが前に踏み込む。

ブタ男はツツジが踏み込むと同時に霊剣が振り下ろす、そう思い両腕を交差させて面の前に掲げて備えた。

しかし、ブタ男の視界からツツジが消えた。

陽炎が揺らめくように、景色が宙に溶ける様に、視界から消えた。消えると同時にブタ男の視界が斜めに傾いた。

そして足元が見えるくらい視界が傾いた時、ブタ男は知る。消えたと思つたツツジは姿勢をただ低くしただけであった。

ツツジは正中線を崩さぬまま膝を折って腰を落とすだけで、宙から落下するように姿勢を低くした。

そのせいで消えてしまったように見えただけだったのでだろう。

ブタ男はそう考えた。

そう考えた時には地面に倒れていた。

ツツジの霊剣がブタ男の左足の脛を前から半分ほど、脛骨をほぼ断ち切るくらいまで深く斬っていた。

その時になつて、骨子の高い絶叫が響いた。

一拍間をおいて、ブタ男の悲鳴が喉からあふれだした。

ツツジはその声に対しやかましそうに顔をしかめると霊剣を収め、強烈な肘を受けた腹廻りをさすりながら呼吸し、さらに顔をしかめる。

「あー…肋骨もしかしてヒビいった？息するといつてえんだけど…。」

ぼやきながら近くにあった机に腰掛け、ライダーズのポケットからタバコを取り出し、くわえて灯をとます。



大きく煙を吸ったところで肋骨の痛みから大きくせき込み、それがさらに痛みを倍加させたのくわえていたタバコをいったん口から離して脇腹をさすった。

そして呼吸を整えた後、改めてタバコをくわえて今度はゆつくりと煙を吸い込み、ゆつくりと吐き出しながら味わう。

そうしてタバコを半ばまで吸い終えた頃になって、ブタ音と骨子はスーツやシャツを利用し、足の根元や脇の下を圧迫して簡易的な止血を終えたところであった。

もう二人に戦意はない。

二人ともツツジがその気であれば手首を落とし、足首を断つことができたと分かっている。

そこから命を取られるというのなら二人は文字通り死に物狂いで戦ったかもしれない。

殺されるならばと一人が盾になり、一人が相打ち覚悟で向かうことができたかもしれない。

だがツツジは二人を殺す気ではなかった。

それ故に二人は戦意を失い、懸命に生きるための道を選んだ。

「かわいそうになあ、強かったせいそんな目に遭って。」

ツツジは根元近くまで灰になったタバコを地面に落とし、もう一本新しいタバコを取り出し灯をとす。

大きく煙を吸い込み、またしてもせき込みながらツツジが呟いた。

「良かったなあ、弱かったから死ななくて。」

### 37話 人斬り

社長室では霊剣を構えた社長と、鈴宗が向かい合っていた。

社長は霊剣を八相に構えるが、鈴宗はまだ霊剣を出してすらいない。

だらりと無造作に両手を下げたまま、ただ立っているだけである。それがいつそう不気味であった。

「…何故、霊剣を抜かないのですか？」

「できれば殺さずに済ませたい。」

「人斬り鹿角と呼ばれるわりにお優しいのですね。」

社長の顔に歪んだ笑みが浮かぶ。

社長は明らかに鈴宗を殺す気であった、これは大きなアドバンテージになる。

もし社長が無手の鈴宗を殺す気でないならば、鈴宗が無手であることが有利に働く場合もある。

だが、本気で殺意を抱いた相手が凶器を手にしているならば、無手であることは不利にしかない。

故に社長の顔には余裕がある。

鈴宗はそんな社長の表情を見てつまらなさそうに小さな溜息を吐いた。

「さっきツツジに——あの女に言われたことを忘れたのか？」

「なに…？」

「そんな顔していると、俺を甘く見ていると言っているようなものだぞ、表情に出すぎだ。」

無造作にその場に立ったまま、鈴宗が言う。

「俺は無手だがその分手加減はする必要はない、それに、素手でも人は殺せる。」

「…そんな忠告をわざわざする貴方こそ、甘く見すぎではないですか

この状況を？」

「かもな、ただ、せめて本気で来てもらわんとお前程度ではつまらん。」  
鈴宗の言葉に微かに社長のこめかみが動き、顔がひきつる。

しかしここで挑発に乗って動いてしまえば鈴宗の思うつぼだと、社長は呼吸を整えながらどうにか怒りを抑える。

相手は無手だ、しかし無手の相手に対し何一つ自分から行動することができない。

鈴宗は涼しい顔で立っているというのに社長は心をかき回されている。

格の差がはっきりと両者の間にあらわれていた。

少しでも心を落ち着けるために社長が息を吸い、胸が膨らむ。

それとほぼ同時に鈴宗が一步前に足を踏み出した。

「ぬッ!？」

動き出した鈴宗を社長が袈裟懸けに斬りつけたのは、すでに鈴宗が三步目を踏み出そうとしている時だった。

人間は息を吸っている時は隙ができる。

それでまず動きが遅れた。

さらに鈴宗は一切構えないままに歩みを進めていた。

首でも、胸でも、腹でも、腕でも、足でも、どこでも斬ることができた。

そのせいで生じた迷いが、鈴宗に二歩目の歩みを許してしまった。

そうしてようやく社長が袈裟懸けに鈴宗の肩口を狙って靈剣を振るったのだ。

だが、鈴宗は正面からその一刀を迎え撃つ。

向ってくる社長の靈剣、それを握る右の拳に自分の右拳を放ち、動きを遮った。

「ぐぬっ!？」

ぴきっ、と社長の指から骨の軋む音がするが、指をたたき折るまではいかなかった。

社長は弾かれた腕を戻しつつ首に向って真横から靈剣を振るう。

鈴宗は膝を落として身体を縮め、ボクシングのダッキングの様に身

体を振り、霊剣の下を潜り抜ける。

さらに社長は返す刀を振るおうとするが、鈴宗が前へと踏み込み、左手で社長の腕を抑えて制しつつ右裏拳を放つ。

鞭の様にしなる裏拳が社長の顔面目掛けて襲い掛かるが、社長は寸でのところで頭を反らせて回避。

そのまま飛び退って距離を取ろうとするが、鈴宗がそれを許さない。

ぴったりと張り付くように飛び退る社長の動きに合わせて前に踏み込む。

前に踏み込みながら左の拳を鈴宗が放った。

社長が再度首を反らして避けようとするが、顔に当たる直前、急に拳の先が伸びた。

途中までは拳であった左手が解かれ、指が伸び、槍の穂先の様に鋭く形を作る。

その指先がまず社長の眉間に当たり、そのまま撫でる様に顔の表面を滑り、左目を擦りながら突き抜けた。

「ぎゃッ…!!」

目をえぐるような一撃ではない。

だが隙を作るには軽くこする様に目に触れる、それだけで十分だった。

社長は目を指先で触れられ、反射的に身を縮めて動きを止めてしまった。

動きを止めた社長の頬に、鈴宗の拳が飛ぶ。

回り込むように横にステップしながら右拳をアッパー気味に叩き込んだ。

さらに追撃の左フックを鳩尾目掛けて突き入れる。

二撃とも、まともに入った。

社長は身体をくの字に曲げ、必死に堪えようとしたが、腹の中で何かが巨大なものがのたうち回っているような不快感と痛みに負け、膝を着く。

胃の中身を吐き出すことそなかったが、その場からみつともなく

転がって必死に鈴宗から距離をとり、片膝を着いて霊剣を構えた。そして口から僅かな胃液と白い欠片を吹き出した。

鈴宗の拳によって奥歯を一本折られたのだ。

その欠片を吹き出したのである。

しかしその様子に鈴宗は不満げに表情を曇らせる。

「まだ元氣そうだな。」

「ぐっふっ…う…：皮肉を言っているのですか…!？」

「あの女が相手なら今なのでお前は寝ていただろうからな、やはり掌の方が顎を狙うには効果的かもしれん。」

先ほど社長の顎を狙った拳の軌道で掌底を振りながら、鈴宗が言う。

今は殺し合いをしているはずである。

少なくとも社長はその認識でいる。

だが鈴宗はまるでちよつとした稽古かのように今の状況を思っているように見えた。

「ぐっ…おおああああああ!!!」

その態度が社長を激昂させる。

膝に濁を入れて立ち上がり、怒りの声をあげながら霊剣を脇に構え、突進した。

鈴宗の顎に向って脇から霊剣を斬り上げ、返す刀で逆袈裟に斬り下ろし、下ろした切っ先で喉を突きにかかると。

鈴宗は顎を引き、斜めに回り込み、後退することで全て回避。

どれも数センチ単位で見切って見せた。

突きなど切っ先が喉元に触れる寸前である。

社長の突きの伸びを完全に見切っていた。

なればと社長が咄嗟に両手で握っていた霊剣から右手を離し、左手一本で柄の先——柄頭を握りながら半身になって突きをさらに伸ばした。

激昂して必死に剣を振るう中、考えたわけではなく自然に身体が動いて出た動きだった。

社長の霊剣の切っ先が鈴宗の喉元に触れる。

やったか!?

社長は思った。

しかしその手に肉を穿ち刃が沈む感触を味わうことはなかった。

鈴宗が刃を受け流すように首を捻りながら横に身体を傾け、最小限の動きで避けたのだ。

浅く鈴宗の首に切り傷をつけることはできたが、頸動脈や気管のよ  
うな命にかかわる急所には程遠い。

しかも、浅くとはいえ首を斬られたはずの鈴宗は、微笑んでいた。  
その笑みをどう例えると良いだろうか。

朝、通学路で見かけたツバメの巣にある日雛鳥が孵ったことに気づ  
いたとき。

飼い犬が今までできなかったお手を覚えたとき。

ふと立ち寄った旅先の食事処が思った以上に美味しかったとき。

鈴宗の笑みは、そんなときに浮かべる微笑みに似ていた。

社長はその笑みを目の当たりにし、ほんの一瞬だけ意識を奪われ  
た。

戦いの最中にこんな笑みを浮かべる人間がいるのかと。

鈴宗との間に実力差があることは分かっていた。

だが殺意がない、甘い相手であれば勝てると思っていた。

しかしその微笑みを見て、ようやく社長が考えが甘かったのは自分  
だと悟った。

本物の殺意を前にしてこんなに優しく笑える人間がいるのか。

そんなの最早ヒトじゃない。

鬼だ。

こいつは鬼だ。

そんな思考が脳裏を駆け巡り、身体が恐怖で硬直する。

その時には鈴宗は社長の背中側に回り込んで左手首を捕り、社長の  
脇の下から右手を通して襟を掴んだ。

そして手首を捻りながら背を向ける様に身体を回転させ、右足を後  
ろに向って蹴り上げて社長の足を払い、背負い投げの様に投げた。

通常の背負い投げと大きく違う点は懐に潜り込んで投げるのでは

なく、身体の外側から腕を捻り、関節を極めながら投げているところだ。

綺麗に形に入ってしまったえば相手が堪えてもそのまま腕を折る、腕を折られたくなければ相手はわざと投げられるしかない。

固い床の上に背中からまともに投げ落とされ、社長の意識が一瞬ブラックアウトした。

視界が一瞬で白に染まり、意識が黒く溶け、耳は針でも刺したかのように痛みが走るのみで何も聞こえない。

やがて視界がおぼろげながら形を作り出すと溶けた意識が固まりだし、耳鳴りと共に空気の流れる音が耳に入りだす。

ただ社長は反射的に腕を極められながら飛んだ。

そのおかげで幸いにも頭から地面に落下せずに背中から落ち、意識を完全に失うことはなかった。

しかし半ば意識を失っている間に、鈴宗は社長の霊剣を握っている左手を両手で掴む。

掴んだまま両足で腕を挟み、地面に背から倒れながら一気に引き延ばした。

ぶっん。

音が響いた。

固い布を無理やり引き延ばしてぶち切った時のような、鈍く強い音。

社長の腕が、本来曲がるべき方向とは真逆の方向に曲がっていた。

腕十字逆固め。

有名な関節技である。

ほぼ同じ形で肩の関節を壊すものと肘を壊すものがあるが、鈴宗が用いたのは後者だ。

完全に折れていた。

靱帯を破壊されていた。

常人なら後遺症が残るほど完璧に破壊されていた。

さらに鈴宗は社長の左手の指を握ると力づくで霊剣から引きはがし、手放させる。

霊剣が手から離れ、持ち主の意思で形造られていた霊力が霧散し、消え失せる。

しかも鈴宗は引きはがした指をそのまま握り、一気に手の甲側に折り曲げた。

ぶつぶつぶつぶつ！

鶏の手羽先をねじ切ったような音が連続で響く。

そこまで念入りに左腕を破壊したところで、鈴宗はようやく社長の腕から離れ、立ち上がった。

社長はもう痛みすら感じないほど意識が朦朧としているのか声を上げることもできずに地面に寝転がる。

しかし視界が元に戻り、立ち上がった鈴宗が自分を見下げていることを理解すると恐怖に表情をゆがめ、折れている左腕まで使おうとしながら立って逃げようとする。

上手く動かない左腕に困惑しながら地面を這い、どうにか立ち上がるがすぐに足をもつれさせ、壁に向って倒れこんだ。

壁に置かれた書類棚によりかかるが、そのまま棚の上に置かれた装飾品をなぎ倒すように身体を滑らせ、落下する装飾品と共に床に倒れる。

息を荒くしながら懸命に逃げようとする社長に対し、静かに鈴宗が歩み寄る。

「実力のほどが分かったか？」

静かに鈴宗が問う。

その声に社長が振り向き、鈴宗を見ると顎をがちがちと震えさせ、今にも白目をむきそうなほどに目を見開いていた。

もう社長には鈴宗が人間の退魔師には見えてない。

強大な力を持つ妖怪である鬼。

自身を罰しに来た鬼が、人間の姿をして来た。

そうとしか見えなかった。

「これに懲りたら二度と――」

「ひっ、ひッッ…」

その時、社長の右手にこつんと何かが触れた。



狐を象った置物である。

狐と言えば伝承の上でもっとも強大な力をもつ妖怪だという。そんな狐を象った置物を社長はさすがのように右手で掴んだ。

「ひいあああああああ!!!」

社長が悲鳴を上げながら立ち上がり、狂いながら鈴宗に向って駆け出し、右手に掴んだ置物を突き出した。

その置物に、一気に霊力が流れ込まれていく。

社長は置物の中に霊力を籠めた札を多重に貼り、隠していた。

いざというときに起爆しようと考えていたが機会がなく、無駄にあるかと思われていたが土壇場でそれを利用し、自爆覚悟で突進していた

霊力を注ぎ込まれた置物が淡く光りだす。

もう今の置物は破裂する寸前の風船に空気を流し込み続けているような状態だ。

数秒後には許容量を超えて霊力を注がれた置物は手榴弾の様に破片をまき散らしながら爆発してしまう。

それを至近距離で浴びせられてしまえば――

そう理解した時、すでに鈴宗は霊剣を抜いて社長の身体を断ち切っていた。

柔らかい臓腑が詰まった肋骨と腰骨の間。

その間をすり抜ける様に、霊剣の光が奔る。

弾みであった。

反射的に身体が動いていた。

霊力の供給が途切れた狐の置物は静かに光を収めながら、持ち主の上半身と共に地面に落下した。

その様を、鈴宗は静かに眺めていた。

自分の犯した所業を認めるかのようにもう二度と動くことのない、二つに分かたれた肉の塊を目に焼き付け、血を払うように霊剣を振って本物の刀と同じように納刀動作を行い、身体に収める。

戦いの中で顔に現れた笑みは完全に消え失せ、儼然とした表情で立ち尽くす。

ただほんの微かにその口元は、固く結ばれ、震えていた。

### 38話 過去と今。

鈴宗が社長室から出てきたとき、ツツジは3本目のタバコに火を灯していた。

そして新たに漂ってくる血臭を嗅ぐと、歯を剥いて笑みを浮かべる。

「殺った?」

「ああ。」

ツツジの問いに鈴宗は簡潔に答える。

その答えを聞いたツツジは口笛を吹き、社員二人か顔を蒼白にした。

鈴宗はそれ以上は何も言わないままオフィスを後にして階段を下つていき、ツツジが後に続く。

そして屋台が並ぶ通りにさしかかると、まばらに人がいる通りに入る前にツツジが問う。

「後始末はいらねえのか?」

「それは俺の仕事じゃない…。」

「そっか、お疲れ。」

普段から声を張るようなことはない鈴宗であったが、今夜はより一層声が低い。

流石にツツジもからかうような言葉遣いを自重し、少しばかりの劳いの言葉をかける。

そして屋台通りに入ると、ツツジは方々から漂ってくる香りに心奪われ、やがて焼鳥屋の屋台に目を付けて親指で指さした。

「おい、寄ってかねえか、奢るぜ?」

「いらん。」

「そう言うなよ、お前、食わねえと心配されるぜ?」

誰に心配をかけるか、ツツジは言わなかった。

しかし鈴宗は意味を理解したらしく、渋々といった様子で頷いた。鈴宗が頷くと、ツツジは早足に暖簾をくぐり、重ねたビールケースにくたびれた座布団を敷いただけの屋台席に座る。

「適当に10本くらい焼いてよおっちゃん、何食っても美味そうだし、あとビール一本、コップも一つね。」

席に座るや否や、ツツジがそう注文する。

考えるのが面倒で言った注文だが、言い方ひとつで相手もあまり悪い気はしないものである。

乱雑な注文にも店主の男は嫌な顔はせずと頷くと、瓶ビールとコップをカウンターに置いた。

未成年の飲酒にも寛大な時代ではあった故、店主は年若い二人に何も言わない。

瓶を掴んだツツジに店主が栓抜きを渡そうとするが、ツツジは首を振った。

「いらねえよ、っと。」

ツツジは左手で瓶の腹を持ち、無造作に右手を振る。

するとピシリと乾いた音が鳴り、一拍の間においてビール瓶の首が落ちた。

ビール瓶のくびれた首の部分が綺麗に折れ、泡が噴き出していた。

しかもツツジは座ったままである。

店主は焼き鳥の準備を一時忘れ唾然とした表情でそれを見ていたが、ツツジはこぼれる泡を気にせずにコップにビールを注ぐ。

鈴宗もツツジならそれくらいはできるだろう、と別に驚きはしない。

ツツジはビールが注いだコップを口に運ぶ前に、鈴宗の方を向いた。

「…もしかして、今夜くらいは飲みたいとか言う気だったかい？」

「飲まん…俺が下戸なのは知っているだろう。」

「いっしっし、わりいわりい、一応な。」

意地の悪い笑みを浮かべながらツツジは乾杯もせず、喉に放り込むようにビールを飲む。

鈴宗はその様子に少し呆れたような表情を浮かべつつも、お冷を店主に頼みタバコに火を灯す。

鈴宗がタバコを一本吸い終えるころにはツツジはもう瓶ビールを空にしており、二本目を店主に頼んでいた。

店主もビールの首をぽきぽきと折られては堪らないのか、栓を開けてから二本目を差し出す。

そしてコップ一杯ビールをあおってからツツジは口を開いた。

「鈴宗、この後は一緒に帰るぜ、あの家によ。」

「…逃がす気は——」

「ない、あの子も寂しがってるからな、口には出さねえけど。」

少しばかり複雑そうに眉をひそめ、ツツジが言う。

鈴宗は諦めの表情を浮かべながらも、ほんの少しばかり落ち着かない様子で片肘をつけてカウンターの奥を眺める。

そうこうしているうちに二人の目の前に焼き鳥が並べられた。

たつぷりとタレがかかったもも、皮、ハツの三本に加え雑多に串に打たれたホルモン串が二本、安っぽい皿の上に置かれて差し出される。

ツツジは待ってましたとばかりにホルモン串を二本まとめて食らいつき、鈴宗は手を合わせてからハツをじっくりと味わう。

ツツジはホルモン串が気に入ったのか追加で五本注文し、同時に三本目のビールも頼む。

鈴宗は触感はやわらかいが歯ごたえがあり、噛む度に肉汁と脂の旨味が感じられるホルモンをゆっくり咀嚼しながら、お冷を飲んでいく。

結局、ツツジはその後追加で食欲のままに食べまくり飲みまくり。

鈴宗はその様子を見て自身の財布の中身を念のため確認し、小さく息をつく。

二十分後、奢ると言いながら案の定会計が足りなかったツツジに鈴宗は紙幣を差し出していた。

それから数十分後。

二人は帝都のある町、秋奈町の住宅街に来ていた。

ツツジはビールを瓶で四本分を短時間で飲んだが特に歩様が乱れている様子もなく、しっかりとした足取りをしていて顔も素面の様だった。

しかし住宅街の中にちらほらと見える京都風の家屋のうちの一軒、その玄関前に立つとまるで酔いが巻き戻ったかのように微かに頬が赤らみ始める。

「ううう、鈴宗え、あたし返り血とかついてねえか？大丈夫？」

「今更何を言う…仮にお前に多少返り血がついていても、その酒臭い息に比べたらどうにも思われん。」

「かあくーマジかよー！ガムでも買つとくんだったぜえ…。」

どうしたものかど頭を掻き、せつかくの綺麗な黒髪を台無しにしながらツツジがぼやく。

それを半ば無視しながら鈴宗は玄関の鍵を開け、家の中へと入っていく。

鈴宗もツツジもこの家の合い鍵を持っていた。

ツツジも慌ててその後につき、ショートブーツを無理やり踵で蹴って脱ぎながら家の中へと入っていく。

家の内側も外と同じく京都風の内装で、扉は障子戸や襖がほとんどだ。

そして二人が家の中に入ると、とたとたと小走りで誰かが駆け寄ってくる音が聞こえる。

障子を開け、姿を現したのは二人と同年齢と思わしき少女だった。

背が平均よりもやや低い、ほっそりとした身体をゆったりとした寝間着で包んでいる。

顔の輪郭も身体と同じくほっそりとしていて肌の色はやや不健康

に見える程白い。

鈴宗の肌は生まれ持つてのもので陶器のような白さがあるが、それとは別種の日に当たっていない白さだった。

黒い髪を肩ほどまでに延ばしているがツツジのような艶やかさはなく、瑞々しさに欠けている。

だが目鼻立ちはスツキリと芯が通った美しさがあり、目は細長いがまつ毛が長く綺麗で、常に微笑みを浮かべているような穏やかな表情をしている。

細い見た目とは裏腹に、不思議と柔らかく、包容力に満ちた少女だった。

少女は先に家に入っていた鈴宗と目を合わせると、より表情を柔らかく変化させ、嬉しそうに笑いながら鈴宗を迎えた。

「おかえりなさい、鈴宗さん。」

「…ただいま、花音。」

少女の名は志島花音。

後に、鹿角鈴宗の妻となる少女だった。

そのやりとりを後ろで眺めていたツツジが不満そうに口をへの字に曲げ、間に割って入る。

「ちよつとくあたしもいるんだけど…。」

「あつ、ごめんね久しぶりに会ったから驚いちゃって…おかえりなさい、ツツジ。」

「たっだいま花音！ たまたまこいつに会ったから連れて来たよ！ グツジヨブでしょあたし！」

「うんうん、ぐつじよぶ！ だね。」

得意げに話すツツジに花音が親指を立てて頷く。

そのまま三人は居間に向い、小さなちゃぶ台を囲みながら他愛もない会話を始めた。

花音もツツジと鈴宗と同一年であり、幼馴染であった。

花音も退魔師の家系に生まれた人間である。

ただ、花音はほっそりした見た目に変わらず幼い頃から身体が弱く、退魔師としての道は早くから閉ざされていた。

いずれ退魔師になる者同士から関係が始まった鈴宗とツツジとは違う。

この三人が友人同時になったのは十年前に起きた事件が発端だった。

花音の両親である退魔師が妖怪との戦いで亡くなってしまったのだ。

そんな中、彼女と接点を持ったのはまずツツジだった。

ツツジも同じく両親がいなかった。

ツツジは生まれて間もなく寺の前に捨てられており、さらに偶然にも妖怪を視る力があつたために退魔師の世界に入った珍しい存在だった。

今の苛烈な性格は生まれ持つてのもの以外に寺の厳しい環境と、両親がいないことによる周囲への反発からによるものも多分に含まれている。

そんな彼女は自分の妹分が欲しかった。

だが下心を抱いて接してきたツツジに対しても花音はその穏やかな姿勢を崩さなかった。

両親が死んで間もないというのに、幼い花音に自身の不幸を呪い続けるような黒さはなかった。

その姿勢にツツジはすっかり骨抜きにされてしまい、同じ退魔師の子供がいるから連れてきてやると花音に紹介したのが鈴宗であった。

鈴宗はツツジと正反対に物静かで落ち着いてはいたが、その実は意地っ張りで頑固な子供らしさを持っていた。

そんな性格は反対ながらも気性自体は激しい二人に、穏やかな性格の花音は凹凸が重なる様に相性が良く、気が付けば三人で集まること当たり前になっていた。

それから十年。

ツツジと鈴宗が退魔師になり、会う機会は減ったものの関係は変わらない。

ただ、鈴宗は退魔師となつてから意図的に花音に会うことを避けている様子だった。



今日はそのこともあり、ツツジが強引に鈴宗を花音の家へと連れて来たのである。

三人で顔を突き合わせて話すのは数か月ぶりであった。

ツツジはちゃぶ台に座ると少しそわそわとした様子で部屋の中を見回し、やがて花音の方を見て口を開いた。

「あく、えつと花音、身体の調子はいい感じなの？」

「うん、最近は大丈夫だよツツジ。」

「そ、そっかあくじやあ、あの…今度の休み！映画見に行かない!?二人で!!」

「映画?」

どこか緊張した面持ちでツツジは花音にそう問いかけ、急な提案に花音が首を傾げる。

「うん!その最近面白い映画がやるって…あ…その…ほら” 諜報員 零零七号” シリーズの新作とか!」

落ち着かない様子で手をわたわたと振りながら話すツツジの言葉に鈴宗が溜息をつく。

「ツツジ…よりによって” 零零七号” はないだろ…。」

「おおん!?!じゃあお前ならどうすんだよ!?!」

「そもそも映画は長いこと座ってしんどいだろ…近くで美味しい甘味処でも探して行って来い。」

「ぐぬぬぬいつぐああツツ…それじゃあお出かけ感がねえだろうがああ!!」

「あはは…別に私は近くの甘味処でも、お出かけ出来たら嬉しいよ?」

「マジ!?!じゃあじゃあ、あたし美味しいと探しとくから!」

はしゃぐツツジをほほえまし気に花音は見つめ、鈴宗は片肘をちゃぶ台につけながらじとーつとした目を向けた。

そして花音はちらりと何か期待するように鈴宗を見た。

鈴宗は気づかない。

否、気づかぬようにした。

否、気づいていないふりをした。

「…。」

それに気づいたのはツツジである。

ツツジは両者の間に流れる空気を感じ取り、悩まし気に頭を掻き、首を振り、腕を組んで眉をひそめてから言った。

「おい鈴宗、こうなったらあたしと勝負だ！」

「…は？」

「お前のアイデアにのるのは癩に障る、だからどっちが良い甘味処見つけるかで勝負！審判は花音、それぞれイチオシの甘味処に連れて行って点数が高い方が勝ち！」

「くだらんことを…。」

鈴宗は腕を組み、ツツジから目を逸らして口をとがらせる。

しかし腕を組んだ指先はどこか落ち着きなさそうに動いており、目も微かに泳いでいる。

まるで何かを見たいが見ないように意識している、その意識の揺れと同じように目が泳いでいた。

そして小さく息を一つ吐くと、ツツジの方に目を向けて言う。

「俺の勝ちが見えている勝負だ、やるだけ無駄だな。」

「鈴宗えく…ぜってえ吠え面かかしてやつからなあ…!!」

鈴宗の言葉にツツジがすさまじい眼圧で睨みかかる。

その眼圧から逃れる様に顔をそむけた鈴宗の視線の先には、花音の顔があった。

「…楽しみにしてるね、鈴宗さん。」

その時、鈴宗の顔を見ていたツツジにはそれがよく見えた。

鈴宗の口の端がほんの少しだけ、高く上がっていることが。

——つとまあ、あたしと鈴宗、それに花音の関係はそんな感じかね

え。」

ツツジは飲みほしたコーヒーカップの持ち手を指でなぞりながら、昔話を終えた。

鈴音はゆつくりと椅子に座り直し、一息ついてツツジの方を見る。「そして、その後に祖父は花音さん…祖母と結婚して父が生まれたと。」

「ああ、しかし坊…あんたの父ちゃんも大変だったねえ、いろいろ。」  
「そうなんですか、父にもなにか事情が…？」

「まあねえ、鈴吉が鈴音にやらかした所業はぶん殴っても許されんが、なんでそうなったのか想像がつく。」

「鈴吉…ああ、そういうえば父の名前がそうでしたね。」

まるで遠い記憶を掘り起こされたかのように、寂しげに口元を歪ませながら鈴音が言った。

その言葉にツツジは目を丸くする。

「鈴音…。」

「物心ついてから父とまともに話した記憶がありませんでしたから、すっかり、忘れてました。」

「…そうかい。」

ツツジと鈴音とマスター。

三人しかいない空間に静寂が訪れる。

マスターも何も言わない。

ただ静かに、もう何度も磨かれたであろうグラスとカップを磨き、カウンターの棚に並べている。

しばらくマスターが布巾を動かす音だけが響いていたが、静かにツツジが口を開いた。

「…才能がなかった。」

「ツツジさん…？」

ツツジはカウンターに両肘をつき、顎を手に乗せながら話す。

「鈴吉はねえ、生まれつき妖怪を視る力もなければ、身体も特別強くなかった。言いたくないが、花音の血が濃かったんだらうね。」

「父は別に身体が弱かったとは——」

「弱くはなかった、でも鈴音、あいつはお前みたいに強くもなかった。」  
「私みたい…に？」

「ああ。」

ツツジの言葉に鈴音は首を傾げた。

鈴音は別段、自分の体が優れてはいないと思っている。

168cmと女性にしては高い身長にくわえ相当に鍛えてはいるが、そもそも鈴音は女性だ。

剣術含め、あらゆることに対する才能も持ち合わせてはいない。

強いて才能があるとすれば、才能をある程度努力で補うという才能があつたくらいであろうと思っていた。

決して怠けてこなかった、それだけは鈴音が誇れることだった。

肉体面に関しては誇れるほどではない、自分より力が強い人間などこの世にごまんといる。

「私は別に身体が強くは——」

「言つとくけどね鈴音、普通の人間がお前みたいな努力をしたら、身体が追い付かなくて先にぶつ壊れちゃうんだよ。」

「壊れる？」

「ああ、鈴吉もそうだった、もつとも、そうなる前に鈴宗が止めたがね。」

そうしてツツジは改めて鈴音に目を向ける。

オーバーワーク。

基本的に筋肉は傷つき、回復することで強くなるが、過剰なトレーニングで筋肉を傷つけ続けると回復が間に合わずに筋力が落ちてしまう。

場合によっては筋肉のみならず関節や靭帯を痛め、時には一生痛みを抱えたり動きに不自由することになってしまう。

それがオーバーワークだ。

だが時にそれを凌駕する才能を持つ人間が稀に存在する。

いくらトレーニングしても身体に不調が出ない。

トレーニングで痛めた足が一晩寝れば治っていた。

腕を痛めたのに気にせず、普段と変わらないトレーニングをしてい

でも治っていた。

そんな人間が時に存在する。

鈴音はまさにその才能を持っていた。

ツツジは鈴音の肉体を眺め、そして少し悩まし気に言った。

「その身体作って、どこ痛めてねえのかい…。」

「ウェイトトレーニングなんかはできませんでしたし…捨てられたブルックとか石なんかは使ってましたが。」

時には自分より重い重量を持ち上げることもある高負荷のウェイトトレーニングは筋力向上への効果的な手段ではあるが、怪我のリスクが大きい。

鈴音にそんなトレーニング施設を使わせてもらえるような機会はなかった。

それが幸いしただけだと鈴音は話すが、ツツジは首を振る。

「鈴音はまだ16歳だろう？まだ身体が完全に出来上がってる訳じゃない、いくら自重トレーニングしてたって、やりすぎりや壊れる。」

「…そう、ですか。」

「悲しいがね、努力するにも才能がいるんだ、そして鈴吉にはそれすらなかった。」

鈴音の父に話を戻し、ツツジが続ける。

「鈴宗はそれを察した、だから自分の仕事を——鹿角流の技術は継がせても退魔師としての仕事は継がせないことに決めた。」

「…そして祖父は父を——家族を完全に退魔師の世界から遠ざけるため、現天皇”安倍晴明”と組んで姿を消した。」

「ああ、ただ鈴吉はやっぱり鈴宗には及ばなかった、名目上は鹿角流を継いだとしても本人は納得してなかっただろよ。」

「だからツツジさんは父に関して想像がつく、と。」

「…鈴宗を越えたかったんだらうね、たとえそれが自分の血を分けた子供であろうともよかった、そんなとこだらう。」

「それなら、父の気持ちも分かります、花鈴——妹は才能の塊でしたから。」

「鈴吉のバカもその才能に狂っちゃったってことかい…はあ…鈴音に

はつくづくすまないことしたねえ…私ら退魔師の都合で…。」

「気にしないでください、今は妹とも仲良くしてますから…一緒に住んでいる皆も良くしてくれていて、困っていることもないですし。」

苦い顔をしてツツジが小さく頭を下げるが、鈴音はそう答える。

もう、鹿角の家のことは鈴音にとって過去のことだった。

まだぬぐい切れない過去への不安感はあるが、少なくとも今に不満はない。

しかしこの時、鈴音は今少し困っていることがあったような、とふと思い、その原因を思い出す。

「あつ…。」

「ん、どうしたんだい鈴音?」

「いや、別に今までの話とまったく関係ないんですが…少し困っていることはあつたな…と。」

「なんだいなんだい!なんでもこのあたしに話してみな!」

「くだらないことなんです…文化祭で出し物をやらされることになって…それで悩んで…。」

「文化祭か、いいねえ青春だ…そうだねあたしなら——」

そういえば文化祭のことで悩んでいたことを鈴音は思い出し、唐突に話が変わってしまうがよい機会だと相談する。

その相談にツツジは楽し気に言葉を弾ませた。

ツツジにとっては孫同然である鈴音が初めて年相応らしい悩みを話したのである、それが嬉しいようだった。

そしてツツジはしばらく腕を組んで悩んだ後、口を開いた。

「うー…うーん…あつ!あれだよ!護身術講座とか流行ってんじゃないか!?!」

「護身術講座ですか…たしかに良いかもしれませんがね。」

「…ところで鈴音よ、護身術ってどこまでやっていいんだい?」

「…知りませんが、襲われてる前提ですし殺さなければよいのでは?」  
「おう、それならいくらでもやり方があるねえ。」

「…いやお二人とも…そりやダメだろ。」

今までずっと無言で会話に水を差さなかったマスターが、ここで

割って入った。

家族に関するプライベートな話題に割り込む気は毛頭なかったが、日常の話題となれば話は別だった。

だがマスターの言葉を聞いて二人は首を傾げる。

「ダメなのかい!？」

「いや俺も知らねえけど…やりすぎたら過剰防衛とかあるだろ…？」

「かじよう…ぼうえい…そうか、考えたことなかったですね。」

「…この婆さんはやばいって知ってたけど、君も相当危ない子だって今よく分かったよ。」

鈴音の反応を見たマスターが肩をすくめる。

どうやら護身術講座は難しそうだ二人は考え、再び頭を悩ませる。

「しやあないねえ、じゃあ試し割でもやるかい。」

「試し割というと、ビール瓶を切ったり瓦を割るアレですか？」

「ああ、しかし簡単すぎてつまんねえんだよなあアレ…地味だし。手品だなんだとか言う面倒な奴もいるからねえ。」

「となると…派手なものを壊す必要がありますね。」

「…よし、鈴音、不良にバイク乗ってるやつとかいるだろ、それぶっ壊しちまえ。テレビゲームでそんなん見たことあるし盛り上がるぜきつと。」

「いやツツジさん、それはできません——」

あんまりなツツジの提案に対し、首を振る鈴音にそりやそうだろうとマスターが頷く。

「もう不良のバイクは一度壊してしまったので、二度目は流石に。」

「ちよ、ちよちよちよつと君…何言ってるのかな…?」

肩を落とす鈴音の言葉に目を丸くしながらマスターがツツコミを入れるが、ツツジはケタケタと子供の様に笑っている。

「あっはっはっは!!もうやってたのかい、そりや面食らったねえ!」

「昔、不良が妹を狙おうとしていたので…止めようとしたときに喧嘩になって…つい…。」

「くツくくく…それでそれで?」

「二人がバイクに乗って」お前を轢くぞ！」と脅してきたので：脅しが本気になる前にバイクを蹴り飛ばしたらタイヤの当たりが曲がったんです…。」

「…君の逆鱗に触れた不良に同情するよ。」

半ば呆れたようにマスターが言う。

そのまま他愛もない会話を三人は楽しんでいたが、鈴音が店内に掛けられた時計の時間を見て席を立つ。

「すみませんツツジさん、もう家に帰らないと…。」

「もうそんな時間かい、ババアの長話に付き合わせてすまなかったね。」

「いえ、楽しかったです…ではまた。」

そう言つて財布を出す鈴音の手をツツジが制し、今夜は奢りだと伝える。

素直にその好意を受け取つた鈴音はツツジとマスターの二人に頭を下げ、帰路についた。

マスターは空席になったカウンターからカップを下げながら、ポツリと呟く。

「…いい子だね、あの子は。」

「ああ、私にとっては可愛い孫みたいなものさ。」

「ただ少し心配なところもある。」

カップを洗いながらマスターは独り言の様に言葉を続ける。

「俺は親父の背中を見て育つた、それが憧れで目指すべきもんだつた…けど、あの子は何を見て育つたんだろうな。」

「…。」

「はあ、こんなこと気になつちまう自分が嫌になるね、すっかりおじさんの仲間入りだ。」

「そうだねえ…。」

マスターの言葉に、ツツジはすぐに答えることができなかった。

鈴音が目指した場所。

それは才覚に満ちた妹を越えることか、それともどこにでもある家族の幸せを掴むことか、あるいは――



分からない。

ただ一つ、彼女は今でも求め続けているもの、唯一揺るぎない一つの絶対的な価値。

それだけはツツジも理解していた。

「強さ。」

「…婆さん。」

「あの子にとって最も大切なものはそれだろうさ、自分が強ければ妹を守れたのに、強ければ普通の家族として生きることができたのに、何故自分は弱いんだ…多分そう思っただけでひたすらに強くなった。」

「普通の人間にはできない生き方だな、そりゃ、いつかどこかで限界が来るのが普通だぜ。」

「でもあの子にはできちゃった、そして今は強くなければ死が待っている退魔師の世界に足を踏み入れてる。」

「…大丈夫なのか、あの子は？」

「分からん、ただ強いからあの子は優しい、そりゃたしかだ…少しばかりやんちゃなところもあるけどね。」

「ふっ、そのやんちゃさも婆さんに比べたら可愛いもんか。」

「おうその通り——って何言わしてんだい！」

二人だけの店内にツツジの怒号が飛ぶ。

本日の黒猫が閉店までに迎え入れた客数は、二人を含めて六人。

今日も今日とてマスターは明日が不安なまま、黒猫は店を閉めた。

### 39話 自由

「すみません、帰りが遅くなりました。」

もう二十時を回ろうかという時間に鈴音は八咫総合事務所に帰宅した。

夕飯はもう先に皆済ませたらしく、机の上には文字通り山の様に盛り付けられた炒飯と唐揚げにボウル一つ分のサラダがラップをして置かれている。

「あゝおかえり鈴音ちゃん。」

「おかえんにやさ——くあツ、盥洗のやつ沈みやがった…もつと鞭打って鍛えとくべきだったわね…!」

事務所には仕事を終えたユリカの姿は既になく、狂骨はソファに寝ころびながら余った唐揚げをつまみにビールを飲んでおり、化け猫はゲームに夢中だ。

姿が見えない蠟螂坂はおそらく朝食と弁当の仕込みのために、キッチンに籠っているであろう。

手を洗うために洗面所に行きがてらキッチンを覗くと、案の定そこには蠟螂坂がいた。

「おかえり鈴音…料理、温めようか?」

「いえ、大丈夫です。お腹も減ってるのでそのままいただきます。」

料理は既に冷めてしまっているだろうが蠟螂坂の料理は冷めても美味しい、毎日弁当を詰めてもらっている鈴音はそれをよく理解しているため、手を洗うとすぐに机へと向かった。

炒飯は僅かに醤油と塩コショウで味付けしただけのシンプルなものであつたが、逆に唐揚げは味が濃いめに漬けこまれており、それがよくマッチしている。

おそらくは明日の弁当に詰めることと狂骨が酒のつまみにすることを考えて唐揚げを濃いめに作り、それにあわせる形で炒飯を作つたのだろう。

この組み合わせなら無限に食べられてしまうのではないだろうか。鈴音はそんなことを大真面目に思いながら手を合わせて食事を始める。

山の様だった唐揚げはまたたくまに量を減らし、それに比例するように炒飯も鈴音の井の中へと消えていく。

付け合わせにしては量が多すぎるサラダはいつの間にか消えていた。

あつという間に料理が半分ほどになったところで一息ついた鈴音は誰に尋ねるでもなく、口を開いた。

「花鈴は、どこへ出かけてるんですか？」

「んんん？ たしか鈴音ちゃんが帰って来なさそうだしってトレーニングに行くって言ったよ。」

ビールを一気に飲み干しながら狂骨が答えた。

「そうですか、ありがとうございます。」

「あれ、てつきり鈴音ちゃんなら私もトレーニングに付き合いに行つてきます、って言うかと思つたのに。」

「まだ食事中ですし…それに、花鈴のトレーニングは多分私には無理です。」

「えっ!? 鈴音ちゃんができないトレーニングなんてあるの!？」

「そりやありますよ…何も筋トレだけがトレーニングじゃないですし、花鈴は天才ですから。」

驚く狂骨に対し鈴音が言う。

そしてここにはいない妹を想いながらそつと窓の外に視線を向けた。

「ふう…ふう…ふう…よっし、ここまで走って特に息切れも無し、体調問題な

し。」

花鈴は黒いインナーの上から白いゆつたりとしたシャツと同じく白い短パン、足には愛用の白スニーカーを合わせた服装で秋奈町の繁華街の大通りまで来ていた。

アップと体調確認を兼ねたランニングをして来たが、問題はない。そして軽く肩を回しながら花鈴は大通りの入り口に立った。

二十時というまだ夜が始まったばかりの時間ということもあり、通りには多種多様な人間たちで溢れかえっていた。

もうかなり酔っているらしき千鳥足の学生たち、水商売風の格好をした男女、こんな時間だというのに携帯片手に忙しく歩いているサラリーマン、店前で呼び込みをしている飲み屋の店員。

あらゆる人間たちがこの通りに集まり、各々の目的のために動いている。

花鈴はそんな人波を眺めながら、何かタイミングを見計らうように軽く地面を跳ねていた。

「……………ッし。」

そして大きく息を吸うと、膝を曲げて腰を落とし、一気に人波へ向かって駆け出した。

「きやッ!?!」

「なんだあ!?!」

人波へ向かって、花鈴は全力で走りながら急に突っ込んだのだ。

突然の出来事に周囲にいた人々が小さく声を上げた。

しかし、花鈴はそのまま人波の中へ入りこむ。

何をしているのだ!?!

理解ができないというような目で人々が花鈴の後姿を見る。

人がごったがえす大通りの中に全力で走って行くなど正気の沙汰とは思えない。

きっと人にぶつかって大変なことになる。

そう人々は思っていた、が、そうはならなかった。

花鈴は行き交う大量の人々、それらを全て避けていたのである。

花鈴は障害となる人々の目線、体格、性別、身に纏う雰囲気、持つ

ているもの、人数——あらゆる要素から目の前の人波がどう動くかを全て察知し、避けていたのだ。

時には横に大きく動き、時には自らの目線で相手を誘導し、時には相手が自ら避けることを見抜き、避け切った。

その間、止まることはない。

普通ならばあり得ない速度で花鈴は人波の間をすり抜け、あつという間に大通りを駆け抜けてしまった。

花鈴を見た人々は人ではなく、目の錯覚か幽霊とでも思ったかもしれない。

それほどまでに花鈴の動きに無駄はなく、鮮やかだった。

これが花鈴のトレーニングである。

無数の人々の動きを全て読み切ることでも人波を駆け抜ける。

まさしく天才たる花鈴にしかできないトレーニングであった。

仮に鈴音が同じ速度でこの通りを駆け抜けようとするならば目の前の人間すべてを力づくで押しつけるしかないであろう。

鈴音のパワーがあればそれは可能かもしれない。

それを花鈴は自身の持つ読みの鋭さで誰にも触れることなく成し遂げたのだ。

通りを駆け抜けた花鈴は足を止め、軽く息を整えながら肩を回す。

「ふうーっ……ま、こんなもんかな。」

これが花鈴なりのトレーニングであった。

花鈴は喧嘩であろうと任務であろうと、戦いの本質は読みであると考えている。

相手の動きを事前に読み切つてさえしまえば何も怖くはない。

そう考えてのものだった。

そして花鈴は辺りを見回すと人影がない薄暗く、細い裏通りへと向かっていく。

ビルとビルの間にある狭い小道で、壁にはいたるところに配管が通り、通気口や窓による凹凸があった。

花鈴はその壁を一通り眺めながら小道を歩き、やがて一点に辿り着くと何かに納得したように頷いた。

「よっし、ここなら行ける…。」

誰もいない薄暗い小道で一人花鈴は呟くと、その場から駆け出し、壁に向って飛んだ。

壁を走る様に数歩走り、そこから飛んでビルの二階にあった通気口の出っ張りに両手をかける。

飛んだ勢いを利用してながら両手を使って身体を引き上げ、鉄製の配管に足を置き、身体を安定させる。

そこからまたしても別の凹凸に向って飛び、どんどんとビルの壁面を登って行った。

そうしてビルの屋上の鉄柵に手をかけ、最後は両腕に渾身の力を籠めて身体を持ち上げる。

そのまま無人の屋上へと登り切った花鈴は流石に疲れたと地面に腰を降ろした。

「はあ…はあ…んんー!! 久々に筋肉使ったって感じ。」

大きく伸びをしながら花鈴が言う。

これも花鈴なりのトレーニングだ。

壁の状態から登れそうな場所を探し、自身の筋力とスタミナから登れるルートを読みきってただのビルの壁を登る。

もしルートを読み間違えれば悲惨なことになってしまうが、花鈴にはルートを読むことができた。

花鈴とて鈴音ほどではないが、自分の身体を両腕で支え持ち上げられる程に筋力はあった。

さらに単純な重いものを持ち上げる筋力のみではなく僅かな足場で身体を支えるバランス感覚、凹凸に飛びつくための跳躍力。

あらゆる動くための筋力をまんべんなく鍛えられる、自身にとって最良の筋力トレーニングだと花鈴は思っていた。

花鈴は立ち上がり、屋上の鉄柵によりかかりながら繁華街のネオンを見つめる。

そしてなにやら臭いでも嗅ぐように微かに鼻を引くつかせると、にやりと笑みを浮かべた。

「やっぱいるっばいよ、このあたりに。」

一人呟く、ではなく、まるでここにいない誰かに話しかけるかのよう  
に花鈴は言った。

言いながらそつと自分の胸に手を当てる。

手を当てた胸元から赤い光が突如としてあふれ出し、花鈴が手を離  
すとその身に宿った妖刀”姫斬り”が姿を見せた。

花鈴は握った姫斬りを逆手に握り、自分の隣、コンクリートの地面  
の上にその刃を突き立てた。

スルツ、とその刃がコンクリートに突き刺さる。

まるで豆腐に包丁を入れたかのように音がでなかった。

『…あまり私の身体を乱暴に扱わないでいただけませんか。』

突如、花鈴以外誰もいないはずの屋上に声が響いた。

まだ幼さを残す少女の声色だ。

しかしどこか声色に品がある、幼いながらも高い身分を感じさせる  
声であった。

「いいじゃないの”小りん”、そんな身体してるんだから今は。」

小りん、そう花鈴は言った。

その名はかつて姫斬りが見せた幻影、その誕生の経緯を映した過去  
の記憶に現れた、鈴鹿御前の娘の名であった。

彼女は姫斬りの覚醒と共に意識を目覚めさせ、その主である花鈴に  
のみ声を聞かせているのである。

『こんな身体をしているからこそですわ、まったく何故こんな人が私  
を目覚めさせてしまったのでしょうか。』

「はいはい、ごめんごめん…いい獲物の臭いを見つけたからさ、それで  
許してよ。」

『獲物…:というと、妖怪ですか…?』

「うん、今は弱い…けど、臭いの感じが違うね、多分弱ってるだけで相  
当に強い。」

『ほう、それは楽しみですわ…。』

微かに、姫斬りから放たれる小りんの声が弾む。

今度は品のある声とは裏腹に無邪気な子供のような明るさと、素直  
さから現れる微かな残酷さが滲み出た声。

その声色を聞き、花鈴は笑みを浮かべる。

『うふふふ…その妖怪を喰らえばきつと、彼女の目覚めも近くなる…この身体に宿っているはずのあの子も。』

「あの一緒に封印された子でしょう？ま、私はどうでもいいや、妖怪を殺してあんたの力がより強くなれば、私はそれでいい。」

『ええ、あの子を目覚めさせてくれるならこの身の刃…いくらでも好きにしてくれて構いませんわよ。』

「オツケー、その間に八咫鳥の他の連中が手を出さないでくれればいいけど…私みたいに鼻の利くやつもいるかもしれないし。」

『…八咫鳥、といえば、あ奴らはどういたしますの？』

「…ああ。」

小りんが八咫鳥という言葉に反応し、花鈴に問う。

その言葉に花鈴は微かに顔を曇らせ、笑顔を消した。

『螻蛄坂、化け猫、狂骨——あ奴らは強い妖力を秘めていますわ、それに…。』

「…強い怨みの声が聞こえる、人間への…でしよ？」

花鈴が小りんの言葉に頷く。

小りんもまるで自身が領いたことを伝える様に、刀となった身体から放たれる赤い光を強く輝かせて答えた。

「あいつら、八咫鳥に来る前の記憶がないって言ってたし、鹿角家の過去に関しても八咫鳥のトップ…安倍晴明が絡んでるだろうって、すーちゃんが話してた。」

『はい、このまま八咫鳥に身を置いては危ないかもしれませんが、その前にあの三匹を狩って糧とし——』

「それは無理。」

『何故？』

「流石に情が湧きすぎた。」

花鈴が素直に小りに答える。

八咫鳥という組織は胡散臭い、事務所の仲間の“三人”もおそらく安倍晴明によってなにかしらの細工が施され、彼に隷従している妖怪だ。



それも人に怨みを持った妖怪であろう。

しかし数か月彼女たちと過ごすことでさすがの花鈴にも情が湧いた。

花鈴にとって鈴音が唯一の家族であり、最も優先すべき存在であるかけがえのない存在である。

その気持ちは変わらないが、殺したくない程度には大事にしたいという感情がああ三人——そしてユリカに対しても花鈴には芽生えていた。

「ごめん小りん、あんたもあの子に会いたって気持ちは分かるけど、待って欲しい。」

『…分かりましたわ、貴女が私の力を求めていることだけは信頼していますし、待ちましよう。』

「サンキュ、まっ、さつき話した大物はなんとしても狩ってやるから、そこは期待しといて。」

花鈴が姫斬りに——小りんに対して笑みを浮かべると、小りんはその身をまたしても赤く輝かせて答える。

その返事を感じ取った花鈴は地面に突き立てていた姫斬りを掴み、己を鞘とするようにその身にしまった。

そしてまたしても独りとなった屋上で一人、繁華街の輝きを浴びながらたたずむ。

きらめき一つ一つに人々の欲望が詰まったかのような輝き、その輝きに身を晒しながら自嘲するように花鈴は笑う。

「…ま、八咫鳥がやばいところだなんて言ってるけど、妖怪が力をつけるってことは、人間が犠牲になるってことなんだよね。」

輝きが花鈴の背に、深く、暗い影を落とす。

その影に文字通り背を向けながら花鈴は呟いた。

「地獄送りは勘弁してよね神様、今まであんたが私に自由をくれたらんなら、こんなことにはならなかったんだから。」

花鈴が夜景を眺めていた頃から約六時間後の繁華街。

その路地裏で艶やかなドレスの上からサマーコートを羽織った少女が独り、うずくまって嘔吐していた。

森崎日向子——花鈴と鈴音が通う高校の生徒会長でもあるヒナであった。

ヒナは胃の中を全て吐き切り、それでもええきながら胃液を吐き出すと、コートの袖口で口元を拭って立ち上がった。

その足元がおぼつかない。

視界が揺れ、景色が全て歪んでいるかのように朧げになり、妙な高揚感とそれ以上の嫌悪感が心を満たし、思わず倒れそうになり壁にもたれかかる。

日に日に、酒を飲まされる量が増えていた。

ヒナは入学費を稼ぐためにキャバクラで働いているだけで、目標を達成すれば辞める気であるがそれでもある程度の期間働いていると常連が付く。

常連の存在はお金のことを考えるとありがたかった。

店是比较的高級なキャバクラということもあり、客層はそこそこ品のある客が多いが、酒が入れば飾りのように身に着けた品格など脆く崩れ去る。

学費のために未成年ながら働いているというヒナに同情的な目に向けている客も、酒が入れば秘めていた欲望がさらけ出される。

別に、ヒナも自分に同情してくれる気持ちが嘘だとは思っていない、ただ同時に自分の身体に対して向けられる欲望も本当だと理解していた。

それに自分のことを気遣う気持ちしかないのなら、酒を飲ませようなどと思わないだろう。

仕方ないのだ。

それも含めて女子高生には到底稼げないであろう、相応の金額を店からはもらっている。

でも、そのお金も全て母が浪費してしまっていた。

最初は出前や酒を自堕落に買うだけだった。

次第にそれはエスカレートし、化粧品、装飾品、衣服——あらゆるものにヒナが稼いだ金を使い、着飾るようになった。

もともと、母は社長夫人だ。

一度上がった生活水準を下げることは難しいと聞く。

分かっている、分かっている、分かっているのに。

「なんで…なんで私だけ…ツツ!!」

口の端から黄色い胃液を垂らしながら、ヒナが声を震わせる。

ヒナとて本当なら買いたいものはたくさんあった、やりたいことがたくさんあった。

こんなドレスじゃない。

秋らしい新作のスカートとカーディガンを買って、それに似合う帽子とカバンにブーツを買って、恋人——風紀委員長である久保寺純と映画や遊園地のチケットを買って。

「うう…うツ…あー」

涙は、こぼれない。

涙より、怒り。

怒りがその身にこみあげる。

しかしヒナにはどうすることもできなかった。

恋人に、久保寺純に今の自分のことを伝えることはできない。

社長令嬢であった自分が今では小さなマンションに住まい、共に行くと決めた大学の入学費すらも払えない有様だなどと、言えるわけがなかった。

吐き気をこらえ、路地の壁に肩をこすらせるようにして歩く。

その時だった。

『見つけたあ…あの子がマーキングしてくれた獲物が…。』

不意に声が聞こえた。

ヒナは咄嗟に振り帰るが背後には誰もいない。

再び前を見ても誰もいない。

誰もいない、路地裏だ。

それでもたしかにヒナは何者かの声を聞いた。

「だ、誰……？」

壁に背を張り付ける様にしながら路地を見渡す。

いない、誰もいない、ならあの声は――

『……つち……。』

顎にするりと、冷たい感触が触れる。

細長い、木の枝が組み合ったような細く微かに凹凸のあるものが顎を這う。

手だ。

これは指、おそらくは細く女性の、骨ばった肉のない指。

「え……？」

後ろは、壁だ。

後ろから人が手を回せるはずがない。

それでもこれは、この感触はたしかに人の指だった。

そしてヒナは信じられない一つの可能性に気づく。

気づいたときには自然とヒナは顎を上げ、頭上を見上げていた。

『こんばんは。』

女性の顔がそこにあった。

肌がひび割れ、蒼白で血の気がなく、ぼさぼさの黒い髪。

まるで死者のような相貌でありながら眼だけは怪しく、爛々と煌めき生の気を放っている。

その顔の先には異形の身体があった。

いや、首から肩、胸、腰までは普通の人間とそう変わらない形をしていた。

問題はその先だ。

蜘蛛だ。

蜘蛛の腹がそこにはあった。

ぶつくりと膨らみ、歪んだひし形のような形をした腹。

その腹と上半身の間から生えた足が壁に張り付き、腹の先から出た蜘蛛糸が壁面を伝うように垂れ下がっている。

咄嗟に声が出なかった。

あり得ない光景にただ茫然と頭上の蜘蛛女をヒナは見つめていた。あり得ない光景が現実であると気づき、声を発しようとした時にはすでに蜘蛛女の指がヒナの口を塞ぎ、腕が身体に絡まり、脚の二本に強く囚われていた。

『いいわあ貴女：美味しそうな憎悪と怒り：私の子が狙った意味がよおしく分かるわあ：。』

「むぐツ…ん…んんツ!!?」

ヒナは懸命に身体を動かして蜘蛛女から逃れようとするが、まるで鉄で固められているかのように身体がびくとも動かない。

蜘蛛女はそんなヒナを眺めながらペロりと舌を出した。

その舌の上にはいたのは、一匹の子蜘蛛だった。

しかし、その口の奥から子蜘蛛が二匹、三匹と這い出る様に舌先に集まっていく。

『貴女なら、この子たちの良い苗床になりそう。』

路地裏で気を失ったヒナが目が覚めたのは午前三時を回ろうとしていたころだった。

ヒナは自分が人気のない路地裏で座り込んで気を失っていたことに気づくと青ざめた顔で自分の身体と荷物を確かめるが、特に誰かに何かされた痕跡や失った所持品はない。

自身の幸運に安堵しながら酒のせいで痛む頭を押さえつつ、立ち上がる。

どうやら酒のせいで道端で眠ってしまったのだらうと結論付け、ヒナは多少はマシになったがまだふらつく足取りで歩き出す。

何かとんでもない悪夢を見た気がするが、ヒナにはそれが思い出せ

なかった。

きつと疲れとストレスのせいであろう、明日は学校が休みだ。

勉強はしなければいけないが最低限に済ませ、それ以外の時間は眠ろう。

そう決めてヒナは帰路へとついた。

『良い子を見つけてよかったわあ…。』

『大きく育つよ…。あの子の中で。』

## 40話 便利屋

文化祭の準備で学内が賑わい始める放課後、鹿角鈴音は困ったように教室の隅に立ち尽くしていた。

鈴音は未だに文化祭でやることが決まっていない、そもそも力仕事を手伝う程度の裏方に回ろうとしていたのに、流れで表に立つことになってしまったのだ。

皆がそれぞれやりたいことに熱中する中、一人取り残されていた鈴音であったが不意に教室の扉が勢いよく開かれた。

「すーちゃああああああん!!お願い、ちよつと来て!!!」

「花鈴…!?どうしたんだ一体…!?」

大声を上げて鈴音を呼ぶ声が教室に響く。

声の主は花鈴であった。

急な来訪者にクラスメイト全員が目を向けるが、花鈴はそれを意に介さずスタスタと鈴音の傍まで歩くと、手首を握って有無を言わせず鈴音を引っ張る。

「ごめーん、すーちゃん借りていきまーす!」

「待て花鈴、先に事情を話——合気を使うな!」

鈴音が抵抗しようとして腕に力を入れた途端、花鈴が僅かな動きで鈴音の重心を崩し、身体をよろけさせた瞬間に力づくで引っ張っていく。

まるでなにかに躓いたかのようにバランスを崩しながら花鈴に連れ去られていく鈴音を、クラスメイト達はただただ眺めていることしかできなかつた。

「…で、これはなんだ?花鈴。」

「何って、文化祭でやるメイド喫茶特別メニュー」メイドの愛情ペタ

マックスオムライス”だけど。チャレンジ4000円、20分以内に完食でタダ&メイドと記念撮影。」

「それがなぜ私と関係あるんだ？」

鈴音が連れ去られた先は学校の家庭科室、そこには男女入り混じった花鈴のクラスメイト達数人と、山の様に盛られたオムライスがあった。

3キロはありそうなチキンライスがたっぷりの卵によって包まれているオムライスにはホワイトソースとデミグラスソースがかけられており、山の頂にはイラストが描かれた旗がちよこんと立っている。

その山の大きさと云ったら子供が砂場で一生懸命作った山と遜色ない大きさだ。

山を前に怪訝な表情を浮かべる鈴音に花鈴が言う。

「いや〜ただのメイド喫茶ってだけじゃなくて、こういう要素を付け足したら話題作りにもなるし、客足も増えるんだよね。」

「そうか…それは分かったが…。」

「でもでもでも〜こういうのって食べられるって思わせるのが大事なの、というわけですーちゃん、今から完食動画撮影させてもらうねー!」

「つまり、食べられる人間がいる証拠のために私を使うということか…勝手な…。」

「頼むよすーちゃん!うちのクラスにこの量食べられる人いないから!お願い!」

「はあ〜…一度だけだぞ…。」

「流石すーちゃん!愛してる!」

溜息をつきながらも鈴音は花鈴の頼みを承諾した。

かなり強引な手段ではあったが、鈴音としても花鈴に頼られると悪い気はしないというのが本音だ。

花鈴が携帯機器を取り出して三脚に載せ撮影準備を始めると、その背後にいるクラスメイト達は”本当に食べるのか…?”というような顔をしている。

ライスが3キロ使われたこのオムライス。



一般的なオムライス一人前のライスの量が150グラム。

つまりこの量はおおよそ20人前ということになる、クラスメイトたちが信じられないと思うのも無理はない。

だが鈴音はそんな彼らの表情とは裏腹に涼しい顔で、右手を上げて言った。

「スプーンを持ってこい。」

10分後。

山が、消えていた。

3キロのチキンライスも、それを覆うために20個は使われた卵も、あいがけにされた2種類のソースも。

綺麗に鈴音の胃の中に消えてしまっていた。

「うちそうさま。」

制限時間に10分の余裕を残しての、完食である。

皿の上はソースの跡と山頂に立てられていた旗が寂し気に転がるのみで、米粒一つ残っていない。

唾然とするクラスメイトと、時間ギリギリはかかると踏んでいた花鈴も言葉を失う。

鈴音以外の全員が驚きに何も言えない中で、口元をハンカチで拭う鈴音の顔にはまだ余裕があるようにさえ見えた。

「流石に3キロはきついな…。」

それは当たり前だろうと皆が頷くが、鈴音はなにやら少し困ったように首を傾げる。

「かなり美味しいオムライスだが、3キロだと味に飽きが来る…もう1種類ソースが欲しいところだ。」

「きついって…量じゃなくてそっちなんだね…すーちゃん…。」

「そうだな…ソース代わりに唐揚げとかトッピングしてもいいんじゃないや

ないか、花鈴？」

「そんなの食えるわけないですよすーちゃん!？」

量より飽きが来ることの方が辛かったと語りだし、悪魔のようなトッピングを考える鈴音に花鈴のツツコミが飛んだ。

そうして花鈴は携帯機器の録画を切り、簡単にチエックを始める。

「うん：最後のポケとツツコミまで入ってるけど、ちゃんと録れてるっぽい、ありがとすーちゃん!」

「そうか、じゃあ私はお役御免だな…。」

「本当助かったよ！持つべきものは頼れるお姉ちゃんだなあ——んえ…?」

調子よく鈴音を褒める花鈴であったが、不意に手にしていた携帯機器がぶるぶると震える。

そして画面をちらりとみて怪訝な表情を浮かべた。

「げえ…久保寺あ…。」

「む、風紀委員長がどうしたんだ?」

「生徒会サボってんのこいつにバレたっぽい…さては会長がチクったなあ…!」

「…それはサボってる花鈴が悪いだけだろう。」

呆れたように溜息をつきながら鈴音が肩を落とす。

やはり自分は花鈴を少々甘やかしすぎだろうか、そんな気持ちが鈴音の中に湧き出てくる。

しかし文化祭の準備に生き活きと取り組む花鈴を見てみると、そんな湧き出る気持ちを押さえつけるかのように甘い心があふれ出してしまうのだ。

「花鈴。」

「なに、すーちゃん?」

「私が生徒会に行つてくるから、花鈴はめいど喫茶とやらの準備を進めておけ。」

「…すーちゃん、マジ愛してる。」

鈴音の言葉に花鈴は無表情で歩みを進め、思い切り抱きしめながらキスをしようとしますが、人前はよせと鈴音が力づくで腕を引きはが

す。

残念そうに唇を尖らせる花鈴であったが、鈴音が軽く頭を撫でてやるとすぐに機嫌を直して顔を綻ばせた。

「よっしやあ野郎どもーこの鹿角花鈴が本気でプロデュースするメイド喫茶：気合入れていくぞお!!」

花鈴の大声が家庭科室に響きわたる、その声に気圧され、呑まれたクラスメイト達が小さいながらも「お、おおく…」と声を返して手を上げる。

そんな彼らに“声が小さい!”と檄を飛ばす花鈴を尻目に、鈴音は生徒会室へと向かった。

「で、変わりに君が来たというわけかい、鈴音くん？」

「あはは…花鈴さんらしいですね…。」

花鈴の代わりに生徒会室に来た鈴音が久保寺とヒナに事情を説明すると、久保寺は呆れ、ヒナは苦笑いを浮かべる。

「まったく、妹も妹だが甘やかす君もどうかと思うね…。」

「…それに関しては耳が痛いです。」

「まあいい、彼女の代わりということならせいせい働いてもらおう…ヒナ、彼女にできそうな仕事はあるかい？」

「そうですね、いくつか文化祭に関して相談事がまわって来て——」  
「そう言いながら席を立ったヒナの足が不意にもつれ、転びそうになる。

咄嗟に傍にいた久保寺が支えたことで転ぶことはなかったが、危ないところであった。

「おっと、大丈夫かいヒナ？」

「す、すみません久保寺さん…少しくらっとしてしまって…。」

どうにか笑顔を作りながらヒナは久保寺にそう言うが、その顔色は少し悪い。

どうやら体調がよくない様子だ。

ヒナの事情を知る鈴音としてはその理由に察しはつくが、言うわけにはいかない。

「…会長、受験もありますし疲れが溜まっているんじゃないですか？」

「あつ——はい、そうかも、しれませんが。」

「そうかヒナ：君が頑張り屋なのは知っているが無理は良くないな。」

「ごめんなさい久保寺さん、でも会長としてこの文化祭は最後の仕事になるでしょうし、やり遂げたくて…。」

それとなく鈴音が助け舟を出した。

受験勉強と会長としての仕事にくわえ文化祭準備、そして夜にはキャバクラで仕事など、身体に無理が来て当たり前だ。

鈴音は少し考える様に腕を組み、そして一つ決意して口を開く。

「会長、生徒会への悩み相談が溜まっているんですよね。」

「はい…文化祭があるから色んな所から相談が来ていて…。」

「それ、私が全部引き受けます。」

鈴音がそう言い切ると、ヒナも久保寺も驚き目を見開いた。

「…本気かい、鈴音君？」

「会長には妹がお世話になっている恩がありますから、返せる恩は返しておきたい性分なので。」

「で、でもそんな…。」

「ヒナ、彼女は本気の様だよ。」

鈴音の目を見た久保寺がやれやれと肩をすくめる。

しかし本気だということを察した久保寺は生徒会用のパソコンの前まで歩くと、小さく手招きして鈴音を呼ぶ。

「鈴音くん、このメールフォルダに私が相談事のメールをまとめておく、メール以外での相談も私がここに送っておくよ。」

「分かりました、小まめにここにチェックしに来ます。」

「そんな…鈴音さんだけじゃなくて久保寺さんまでそんな仕事を…。」

「可愛い彼女のためさ、私のことを想うなら少しでも休んでまた元気な顔を見せてくれればいい。」

久保寺が整った顔立ちで綺麗なウィンクをヒナに向けて披露する

と、顔色が悪かったヒナの顔に赤みが増した。

その様子を見た鈴音は、とりあえず久保寺がいればヒナの心の負担もマシになりそうだと安心する。

すると久保寺は何か思い出したように指を弾くと、鈴音の方を向いた。

「そうだ鈴音くん、メールをまとめておくからその間、是非とも君にやってほしい相談事を思い出した。」

「…なにか嫌な予感がしますが、なんですか？」

「いつも部室棟の裏に溜まっている不良たちがいるだろう？どうやら彼らが文化祭に非協力的みたいでね、君に”説得”してきてもらいたいんだ。」

「はあ…それで私に、ですか。」

思わずため息をつく鈴音に対し面白そうに久保寺は笑いながら付け加える。

「間違っても病院送りなんてことにはしなさいでくれよ？泣く子も黙る番長なら話せば分かってくれるだろうさ。」

「残念ながら私は番長じゃありませんから…それに、何かあっても病院送りにはしませんよ。」

まだ自分のことを番長呼ばわりする久保寺に鈴音は冷たい視線を送りながらも、言った以上はと生徒会室の扉に手をかけて部室棟へと向かおうとする。

「…準備ができる程度に加減はします。」

ぼつりとそう言い残して鈴音は生徒会室を出た。

部室棟の裏には相も変わらずスナック菓子の油っこい臭いや様々な整髪料の香りが混じりあった独特の空気が流れていた。

その中心でなにやら談笑している様子の不良グループたちに、鈴音は足音を立てずに猫の様にすると近寄る。

少し見知った顔の不良たちと、見かけない顔の不良が三人。顔立ちやグループでの振る舞いを見る限りではどうやら後輩らしい。

鈴音が不良たちと最後に会ったのは五月、つまりそれ以降にこのグループに入ったのだろう、顔を知らなくて当たり前である。

この時代に頭をリーゼントに固めた男とでっぴりと太った男に小柄な男、その三人が後輩の特徴だった。

鈴音が彼らの傍らに立ち声をかけようとしたところでそのうちの一人、小柄な男が鈴音に気づき、視線を向ける。

小柄な男の視線に気づいた他の不良たちがその先に目を向け、ようやく鈴音がいることに気づいて各々声を上げた。

「げえッ!? 鹿角姉!?!」

「ななな、なんだよお前!? 俺たち何もしてねえぞ!?!」

「げえとはご挨拶だな…生徒会の代わりに来た、お前ら文化祭の準備をサボってるそうじゃないか。」

「うっそだろお…生徒会つてこたあどうせあの妹絡みじゃねえか…最悪だ。」

鈴音の言葉を聞くや否や早々に不良たちはスナック菓子のゴミを袋にまとめて片付け始める。

その様子を見た後輩——リーゼントと太つちよの二人が困惑しながら声を上げた。

「ちよちよちよ先輩たちい!?! なんスかこの女!?! といひかなんて言うこと聞いてんスか!?!」

「そうだよお! 俺ら文化祭の準備とかしたくねえよお!」

「はあ〜〜〜別にお前らがこいつの言うこと聞かなくても止めねえから勝手にしろや。」

「先輩たちそれでも不良ツスカあ!?!」

「ゴリラに人間は勝てねえんだよボケ!!!」

「誰がゴリラだ…。」

じろりと鈴音が自身をゴリラ呼ばわりした不良を睨むと、慌てて口をふさぐ。

しかし勝手にしろと言われたリーゼントと太った男は逆らう気満々なようだ。

ペキペキと拳を鳴らしながら鈴音の前に立つ。

「へっ、いいツスよ先輩、俺がいつちよ追い返してやりますよ！」

「…結局こうなるのか、怪我させたくないんだが。」

「今更なに言ってるんだオラァ！」

つまらなさそうにリーゼントに言う鈴音であったが、リーゼントは問答無用で右のパンチを放ってきた。

ギュー！と拳を握って。

グイ！と腕を引いて。

ブーン！と腕を振る。

そんなパンチは鈴音にとってあまりにも遅すぎた。

「ぐッ…ゲッ…ぐえっ！…えッッ——ヴえ…ッ!!」

リーゼントのパンチが鈴音の顔面に届くより早く、リーゼントの首を鈴音の左手が掴んでいた。

リーゼントは鈴音の左手を剥がそうと、その腕を叩き、殴り、じたばたと暴れるがびくともしない。

どんどんと締まっていく首と呼吸ができなくなっていく恐怖にリーゼントは必死だ、本気で暴れている。

暴れているはずなのに、まるで大人と子供のように何の抵抗にもならない。

もう意識が飛ぶ——そうリーゼントが思った瞬間、鈴音は左手を離し、リーゼントを解放した。

「ゲふあッ！ウえ…げッゲっぐ…ぬ…ぶえッ…はあ…はあ…はあ…はああゝゝゝ…。」

「次抵抗したら、気絶させてクラスに放り込む…いいな？」

「わっ、わっ、分かった！分かった！分かったからよ！」

リーゼントは首を抑えながら必死で頷く。

それを見た太っちは少し怯みながらも、このままではだめだと鈴

音の前に立った。

「つ、次は俺だあ！あいつみてえにはいかねえぞお〜！」

「はあ…お前もか。」

またしてもつまらなそうに溜息をつき、鈴音は自然体で立つ。

太つちよはぐぐつと腰を落として力を溜めると、そのまま力を解放し、相撲のぶちかましの様に頭から鈴音に突っ込んだ。

太つたその身体には90キロ近い重さがありそうだ、その肉の塊が勢いよくぶつかってくる衝撃は並ではない。

常人ならまともなぶつかれば交通事故の様に地面を突き飛ばされ、転がってしまうだろう

常人、ならば。

「やめてえ〜！やめてよお!!俺死んじまうよお〜ツツツ!!!」

鈴音は太つちよの体当たりを両腕であっさりを受け止めていた。

それどころか完全に勢いを殺した後、太つちよの首を左脇に抱えてズボンのベルトを右手で引っ掴み、思い切り引っ張り上げた。

90キロの巨体が、ふわりと宙に浮かぶ。

最初はじたばたと暴れていた太つちよであったが、やがて視界が完全に逆さになっていることに気づくと暴れるのをやめ、必死に命乞いを始めた。

当たり前だ、屋外の地面に頭から垂直に落とされてしまったら本当に命にかかわる。

本当に殺されるとは思っていない、思っていないが生殺与奪の権利を他人にもたれている状況で冷静でいられるはずがない。

命乞いを聞いたところで鈴音は太つちよをゆっくり地面に降ろしてやった。

「次は落とす。」

「ひいいツツ!!!」

地面にへたりこみながら太つちよは悲鳴を上げた。

これでおとなしくいいうことを聞くだろう、こうして二人を無傷で？



説得することに成功した鈴音は、最後に残っていた小柄な後輩に視線を向けた。

「…。」

「…。」

小柄な後輩は何も言わない。

それどころかその場にしゃがみ、自分の周囲にまだ残っていたゴミを片付け始めた。

「ふむ…。」

その様子を見て鈴音は、思わず微笑みを浮かべた。

いや、おそらく鈴音本人も気づいていない、自然に浮かんでしまった笑みだった。

鈴音はその場から背を向け、立ち去ろうとする。

不良たちはようやくこの場から鈴音が去ってくれることに安堵し、ホッと胸を撫でおろした。

しかし、背を向けたはずの鈴音が突然振り向き、同時に高速の回し蹴りを放った。

空気が割れた。

そう錯覚するほどの蹴り。

突如放たれた刃物を思わせる切れ味を持つその蹴りを見て肝を冷やす不良たちの中、その蹴りを眼前で見た男が一人いた。

「…ッ。」

「来てくれると思ったよ…。」

いつの間にか鈴音の背後に、腰を落とした小柄な後輩が迫っていた。

彼は戦う気はないと見せかけ、背後から鈴音を襲う気であったのだが、それを読んでいた鈴音が気配を察し回し蹴りを放ったのである。

「やめろハットリ！」

「お前でも勝てねえよお〜！」

リーゼントと太っちょがハットリと呼ばれた小柄な後輩を止めようとする。

しかしハットリは不意打ちが見透かされていても戦意が萎えたよ

うには見えない、むしろ戦意が増したようにさえ見える。

身長は160センチを少し超える程度、体重は見たところ60キロ前後。

規格外の力を持つとはいえ一応は女である鈴音の方が体格が良いくらいだが、その身から発せられる圧力は周りの不良の比ではない。顔立ちはでこが大きく見える広い額に少し尖ったくちばしのような口元、ぎらついた獣のような目が特徴的だった。

何かに例えるとするならば河童に似ているだろうか。

ハットリの構えは腰を深く落として両手を開いた形だ。

一見すれば相撲か組技を重視した柔術、または帝都の東欧地方——今は復興中であるロシア発祥のサンボのように思える。

だが重心の置き方が鈴音にはどこか不自然に見えた。

鈴音も構える。

やや腰を落として膝を曲げ、眼前を両手でカバーする。

ボクシングの様に膝でリズムはとらない。

リズムをとるのは呼吸だ。

そしてその呼吸を隠す。

一見するとただ立っているように見えるが、鈴音は体内で呼吸のリズムを作り、いつでも身体を動かせるように体勢を整えていた。

「……!!」

ハットリが動く。

姿勢を低くしたまま鈴音の下半身目掛けて組み付きに来る、そう見える動きであつたが不意にハットリは身体を回転させた。

「ほう……い」

ハットリは低い姿勢のまま後ろ回し蹴りを鈴音の側頭部目掛けて放った。

組むと見せかけた奇襲の一撃であつたが、鈴音が身体を軽く身を引いて避ける。

以前ツツジとの組手で鈴音は似たような奇襲技を放ち避けられた、今回は鈴音がツツジの動きに倣い蹴りを避けたのである。

鈴音は蹴り終わりの隙を見て反射的にハットリに蹴りを放とうと

したが、生徒会の仕事でここに来ていることを思い出し、動きを止める。

極力怪我をさせたくない故に、打撃を使いたくはなかった。

それにハットリも蹴り終わりを狙われることを見越して顔面をしつかりと腕でカバーしつつ、素早くその場から飛び退っていた。

小柄な身体に違わず動きに小回りが利き身のこなしも軽い、そして小柄故の威力の軽さを補うための奇襲技とダイナミックな動き。

面白いタイプだった。

またしても低い姿勢からハットリが飛び込んでくる。

今度は組み付いてくるか、同じく蹴ってくるか——鈴音が身構えた途端、ハットリは急に方向を変え、横に飛ぶ。

飛びながら地面につき、側転の様に身体を回転させながら蹴りを放った。

それは避けた、その蹴りは避けたがハットリは回転の勢いを殺すことなくさらに回転、地を薙ぐ様な足払いを繋げてくる。

それも鈴音は飛び退って避けた。

また回転に任せて蹴りが来るか!?

不意に蹴りが上段に放たれてもおかしくない、そう思い鈴音が両手を眼前まで上げたとき、ハットリの回転が急停止した。

停止したハットリの身体は四足の獣の様に手足を地面に着き、身体を撓めさせた。

「ぬ…!?!」

ハットリの身体がその場から槍の様に伸び、予想外の距離から鈴音の左足に両手で組み付いた。

そして鈴音の左足を持ち上げ、身体を押し込んで倒そうとするが鈴音の強靱な足腰がそれを防いだ。

このまま力づくで引きはがす。

鈴音はそう考えた、先ほどの太つちよが90キロ近くあったのに対しハットリの体重はおおよそ60キロ前後、三分の二だ、鈴音にとっては軽い。

しかし——

「ぐッ!？」

鈴音の額に不意に、硬い衝撃が走った。突如襲い掛かってきた痛みにも身体が一瞬無防備になり視界が揺れる。

鈴音が見たものは、ハットリの靴の踵だった。

サソリ蹴り。

前傾した状態から後方に足を振り上げ、サソリが尾を持ち上げ突き刺すように蹴りを放つ技。

魅せるための技の様だが、ポイント制の格闘技の試合などでは実際に使用されることもある、魅せ技と断じきれない技である。

それをハットリは使った。

鈴音の足に組み付いた状態から恐るべき柔軟性を駆使し、踵を鈴音の額に突き刺したのだ。

鈴音の意識が蹴られたことへと向かった隙に、ハットリは地面に背を着きながら鈴音の左足に自身の両足を絡め、同時に足首の関節を脇に捕らえて倒す。

マズい。

鈴音は学校の上履きではあるが靴を履いている。

足関節は素肌だと汗の滑りや摩擦の無さから簡単には極まらないが、靴を履いていると摩擦が効き足首が抜きにくくなるせいで極まり易くなる。

鈴音は倒されながらも咄嗟に右足を使い、踵で自分の左足を抱えているハットリの右肩の付け根を蹴った。

するとハットリの腕から一瞬力が抜ける。

その隙を利用して鈴音は倒れると同時に強引に左足を引き抜いた。そしてその場から後退し、すぐさまハットリから距離をとりつつ立ち上がった。

「…。」

「その部分にツボがあると、教えられてな。」

なにやら不満げな顔をするハットリに鈴音はそう言った。

肩の付け根の部分には突かれると一瞬腕が痺れて力が入らなくな

るツボがあり、そこに靴の踵で蹴りを入れれば足関節への有効な脱出法となる。

これはツツジから教えてもらった脱出法だ。

ツツジは鈴音の祖父と素手喧嘩をした際に靴でこのツボを突かれ足を抜かれたことを覚えており、鈴音にそのことを公園での練習がてら伝えていたのである。

「ハットリ、と呼ばれていたな…ただの名前かと思っていたが、ニンジャみたいだからハットリか…その名に違わず強いな、君は。」

ハットリといえば高名な忍者の名であり、忍者らしい名前を考えればまず思い浮かぶ名前の一つであろう。

そう何気ない話をしながら、ゆるり、と鈴音が掌を前にかざし構える。

距離をとる様に左掌を前に伸ばし、右掌で顔面をカバーする。

左足の爪先を軽く立てるように上げ、重心の比重を右足にやや大きく掛ける。

重心が高く、足幅が狭い。

いかにも蹴りを放つといった構えだった。

そして先ほどまでは呼吸でとっていたリズムを、つま先でとるよう左足を上下させる。

とん、とん、とん、とん、と。

先ほどと打って変わって隠していた身体のリズムをハットリに伝える様に、動かす。

急に動きを変えた鈴音に対し、ハットリが微かに動揺した様子を見せた。

「だから、当てさせてもらう。」

「……ッ!!」

鈴音の言葉にハットリは思わずぐっと身体を締めこませ、防御に意識を向けた。

鈴音の身から発する圧力に対し、心がほぼ無意識に防御姿勢をとっていた。

そんなハットリの姿を見て安心したように鈴音は息を吸い、左足を

一歩前に動かす。

「右中段。」

ぼつりと、鈴音が言った。

そう言つてから、鈴音が右足を上げた。

言葉通りの蹴り。

右中段回し蹴り。

ハツトリは分かっていた。

鈴音が言つたとおりの蹴りなのだから。

だから完全に受けの姿勢を作つた。

寸でのところで衝撃を逃すように右へ動きもした。

なのに。

ハツトリの身体が軽く浮いた。

蹴りの一撃で身体が浮き、吹き飛ばされた。

受けた腕が折れたかのような衝撃だった。

「左下段。」

ハツトリの左内腿に、鉈が振るわれたかのような衝撃が入つた。

鉈を振るわれたことなんてもちろんない、しかしこの感覚を——筋肉の繊維を断ち切られたかのような感覚を表現するならば、そうなた。

「右上段。」

バットをフルスイングで打たれたら、こんな感覚なのかもしれない。

なにしろ防御していたはずなのに一瞬視界が白くなったのだ。

防御が意味をなさないと、初めてだった。

きつとフルスイングされたバットを受けると同じ感じになるんだ  
ろうなあ——

「左中段——」

受ける。

今度こそ受ける。

もう覚えた。

もういい。

防御しても意味がないのだ。

だから身体で受ける。

受けて、肋骨が折れてもいい。

胃液を口からぶちまけてもいい。

その代わりに足を捕らえる。

捕らえて一気に折る。

もういい。

意地だ。

来いよ。

お前が誰だか知らねえが、化け物ってことは分かった。

人間の先輩方が従うわけだよ。

でも俺だって同じだ。

骨折れてもいいからお前をぶっ倒せりゃいいんだ。

折る。

捕らえて。

折る。

折る。

折る。

折る。

折る――

なんで

来ない？

来な――

「悪いな…君が強いから…最後は嘘をつかせてもらった。」

鈴音は左中段を蹴る。

そう言っておきながらフェイントを使い、蹴ると見せかけて素早く前に踏み込んで擦り抜ける様にハットリの背に回り、首に腕を回していた。

裸締め。

裸でも相手を締めることができ、なおかつ入れば脱出不可能と言われるシンプルにして究極とさえ呼んでよい締め技。

的確に首の頸動脈を圧迫すれば10秒かからずに相手を失神させることができる。

今回の場合は7秒だった。

ハットリが鈴音の真意に気づき抵抗を始めるその前に、ハットリは意識を失っていた。

鈴音は意識を失ったハットリの首から手を離すと、その場に崩れ落ちる身体を支え、ゆっくりと地面に座らせた。

そして微かに靴跡の残る額に手をやり、軽くさすりながらリーゼントと太っちょ、ハットリと同級生らしき後輩二人の方を向く。

「…すまないが、あとは頼む。」

「お、おう…いや、はい…。」

思わず敬語を使うリーゼントの言葉を聞き、今の勝負を息をのんで見守っていた不良たちが道を開ける中を堂々と歩きながら、生徒会室へ戻ろうとする。

そして溜まり場である部室棟の裏から出ようとしたとき、不意に何かを思い出したかのように鈴音が立ち止まり、振り向きながら口を開いた。

「それと、その後輩…ハットリが起きたら伝えてくれ。」

その口元はほんの、ほんの微かに上がっていた。



「真面目に文化祭を手伝ったら、今度は初めから本気で遊んでやっても良いと、な。」

「というわけで、仕事を終わらせてきました。」

「ふむ、ご苦労様だったね。こういう事態になると私が出向くことになるから助かったよ、おかげでメールが纏められた。」

額に小さな傷をつけて帰ってきた鈴音を久保寺が出迎える。

ヒナは体調が優れないこともあってお茶を飲みながら一服しており、慌てて鈴音を出迎えようとするところを久保寺が制止した。

鈴音も小さく頭を下げて大丈夫だとヒナに伝える。

「ありがとうございます…。風紀委員長が出向くつもりだったということは…やはり、なにかやられてるんですか？」

「まあ、それなりにね、当ててみるかい？」

「そうですね…。」

久保寺の言葉に対し、その身体の特徴を改めて見直す。

分かりやすい外見の特徴としては髪の間隙から見える耳の形が少しだけ変わっていること、指の節々が少しばかり膨らんでいること。

これを鑑みると柔道か、組みを重視する柔術に思える。

どうしても道着を掴んで投げるとい性質上、指の節々が擦れて硬くなつてタコができたり、常人より明らかに大きく発達することもある。

耳もそうだ、寝技の訓練や基礎的な練習の中で耳が変形し、俗に柔道耳と呼ばれる形に変わっていく。

とはいえ目で見てはつきり分かるほどになるには相当な年月と重

いトレーニングが必要だ。

少しとは言えその変化が目に見えるということはかなりトレーニングを積んでいるということが分かる。

しかし、どこか違和感があった。

外見の特徴というだけなら答えは見えてくるが、鈴音の直感がそれだけではないと告げていた。

「柔道…だけじゃなくて打撃、ボクシングですか？」

「ほう、よくわかったね、それとも実は元から知っていたとか？」

「ほぼ直感ですよ、失礼ですが風紀委員長のことは存じてませんでしたし。」

「ふふッ、そうだったね、一応柔道とボクシングでは首都大会で上位入賞しているんだ。」

もつとも喧嘩の方では君の方が経験豊富だろうがね、と久保寺はつけくわえた。

その言葉に少しばかり鈴音がむすつと顔をしかめると、久保寺は笑みをこぼした。

「すまない鈴音くん、君の反応が面白いからついからかってしまった。」

「…まあいいです、とりあえず仕事はこなしますから、今日からよろしくお願いします。」

それからは文化祭が始まりまでの間、鈴音には多忙な日々が続いた。

放課後にはまず生徒会室へ向かい、メールをチェックして様々な生徒の依頼をこなす。

それは鈴音向きの力仕事からてんで向いていない細かい作業の手伝いまで。

ただ、そうした仕事を続ける中で学内での鈴音に対する印象が”無口な怖い番長”から”意外と天然な番長さん”へと変わってきた。

それほどまでに鈴音は生徒会の便利屋仕事に熱心に取り組んだのである。

そしてその仕事の中にはなんといくつか、妖怪が絡むものもあつ

た。

## 41話 巫女

八咫鳥の存在が一般に秘匿されているため窓のない訓練施設、そのうちの一つである板張りの稽古場。

そこに黒い袴姿の老人——鹿角鈴宗と、巫女装束の上からプラスチック製の面と革張りの籠手を身に着けた少女が一人いた。

鈴宗は涼しい顔で袋竹刀と呼ばれる、竹の束を革で包んだ柔らかい竹刀を右手に持ち、片手で正眼に構える。

巫女服の少女は鈴宗と対照的に疲れが見える顔をしているが、しっかりとした目で老人を見据え、木刀を正眼に構えている。

巫女は木刀の切っ先を微かに揺らしながら鈴宗の視線を誘うが、鈴宗の視線は揺らがない。

前に踏み込む機を少女は掴めなかった。

体力は問題ない、疲れてはいるがこのまま1時間でも正眼の構えを維持することは可能だ。

それができるようになるまで目の前に立っている鈴宗に少女は鍛えられたのだ。

同時に目の前のもう七十歳前後になる老人がいかにも怪物かということも思い知らされている。

そう思うと少女はまだ間合いの外であることを利用し、一步後ろに後退した。

鈴宗がその分距離を詰めようとするが、すぐに足を止める。

少女が突如として正眼に構えていた木刀を左の腰に据え、俗に居合と呼ばれる形で構えたからだ。

居合というものは本来奇襲、または奇襲に対し素早く抜刀するため  
の構えだ。

だが少女の居合の構えにはそれとは別の試みがあった。

「師匠、使ってもいいですか？」

「…カマイタチか…構わん、見せてみる。」

鈴宗の答えに少女は腰に据えた刀に意識を集中させる。

カマイタチ。

かつて少女が同名の妖怪に重傷を負わされた後に、安倍晴明によって授けられた力。

妖力によって真空の刃を作り出し放つ技は、斬りあいにおいて重要な要素である間合という概念をなくす切り札になる。

放つ際に妖力を練るため相手の不意をつける技ではない、実際に少女が以前ツツジに放った際は妖力の流れと単純な軌道を読まれ難なく避けられてしまっている。

故に少女はこの居合構えをカマイタチを放つ構えに選んだ。

理由の一つは構え自体が刀を収めているせいか妖力を練るという行為が比較的容易だということ。

もう一つは相手の攻撃を誘い剣の間合いの外からカウンターの力マイタチを放つためだ。

先手を打った奇襲には使えないとしても、相手が自分に攻撃を仕掛けようとする中で間合いの外から不意に放たれる真空の一撃ならば避けることは難しくなる。

あえて鈴宗がその誘いに乗った。

鈴宗がするすると間合いを詰めてくる中、落ち着いて少女が妖力を練る。

そして本来ならば居合の一刀が届くには三寸遠い距離で抜刀する。

「ハッッ!!」

真空の刃が三寸の距離を埋め、鈴宗に襲い掛かる。

「ふん…ッー」

鈴宗が正眼に構えていた袋竹刀を立て、霊力を使って真空波を弾き飛ばした。

完全に霊力で打ち消したことにより袋竹刀はおろか袴にさえ傷一つない。

しかし、それでも間合いから僅か三寸の距離で出鼻をくじけたことは駆け引きにおいて大きい。

抜刀から木刀を両手で持ちつつ上段に振り上げ、左足で踏み込みながら左上から右下——逆袈裟に振り下ろす。

当たらない。

袋竹刀で木刀を叩かれ軌道を反らされる。

半ば受け流すような動きだった。

当たった相手が怪我をせぬように柔らかく作られている袋竹刀で木刀相手にこのような真似ができるとは、怪物である。

しかしそれでも今、主導権を握っているのは少女だ。

振り下ろした木刀を間髪入れずに鈴宗の顎に向って斬り上げる。

後退しつつ顎を引いて木刀を避けた鈴宗に対し、さらに横薙ぎに木刀を振るい、首を狙った。

獲った——そう思えた横薙ぎの一刀を鈴宗が頭を低くして避ける。

鈴宗の頭上を木刀が髪の毛を撫でる様にすり抜けていく。

獲れる寸前だった——否、あえて鈴宗がギリギリまで引き付けて木刀を避けたのだ。

そして鈴宗が少女の胴目掛けて袋竹刀を振るう。

木刀の刃で受けようとしても間に合わない——

「くうッ!!」

「ほう…。」

少女は咄嗟に木刀の柄で袋竹刀を受けた。

柔らかい袋竹刀は柄で止まることなく大きくしなり、刀身を曲げながら振りぬかれたが、間違いなく少女は柄で一刀を受け止めていた。

受けた手が痺れる、が心地よい痺れだ。

指先の感覚ははつきりしている、そのまま鈴宗の首筋に木刀を振るった。

だが鈴宗はその場から引くことなく逆に少女に向って肩から突っ込んだ。

「ぐあッ!?!」

少女の木刀が鈴宗の首筋を打ち据えるより早く、少女の身体が突き飛ばされた。

どうにか倒れないようにバランスをとり、よろめいてたたらを踏み

ながらもこらえる。

その隙を逃すことなく鈴宗が少女に向って踏み込んだ。

少女は苦し紛れに木刀を振り下ろすが、その手目掛けて鈴宗が袋竹刀を斬り上げた。

「ばいいん！と、弾性に富んだ袋竹刀が独特の音を発しながら少女の手を打つと、木刀がその手から弾け飛んだ。

「ま、まいりました、師匠！」

「カマイタチの使い方と途中の柄受けは及第点だな、あの発想と感覚を忘れるな…今日はこれまで。」

鈴宗が袋竹刀を下げ、少女は木刀を拾うと互いに一礼する。

そして少女は防具を外すと一気に呼吸を荒くさせながらその場にしゃがみこんだ。

「ぜえ…ぜえ…あ、ありがとうございます。」

「ふん…だいぶ体力がついた様だが、その様子だとまだまだだな。」

「し、師匠が凄すぎるんですよ…。」

今日は基礎的な構えや素振りから始まり、施設のトレーニング器具を用いての筋力トレーニングを行い、最後に自由な打ち合いをやって稽古が終わった。

少女はそもそも霊力で身体を強化できる中で筋力トレーニングなど必要なのかと疑問視していたが、肉体の土台が強くなることは決して無駄ではなかった。

そもそも体力があれば集中力が持続し、霊力や妖力を練りながら戦う持続時間も増えることに繋がる。

考えれば単純な話だが、固定観念があれば気づかないものだ。

それでいて筋力の疲労回復にあてる日にはしっかりと禅を組み、霊力と妖力を練る訓練をさせてくるものだから心休まる日がない。

ただ内容に変わらず強くなっていることが実感できるので、少女は鈴宗のことを相変わらず師匠と慕っていた。

「…もう外は暗くなっている時間だ、さっさと帰れ、学校に寝坊するぞ。」

「だ、大丈夫ですよ！最近はそのなりに寝坊してませんから！」

「はあ…馬鹿なことを言ってる暇があるなら帰る支度をしろ、俺は自分の稽古をして帰る。」

思わずため息をつく鈴宗を見ながら恥ずかしそうに少女が俯く。

しかしそこで何かを思い出したように顔を上げ、視線を泳がせながらもごもごと口を動かし始める。

「あ、あの…し、師匠…。」

「なんだ…？」

「お願いしたいことが一つあるんですけど…えっと…。」

「…言いたいことがあるならとつとと話せ。」

「は、はい！実は10月に学校で文化祭があつて、それに来てくれないかな…つて。」

「…何故だ？」

唐突な自称弟子の願いごちに鈴宗が眉をひそめる。

「そういうのは親や友達を呼ぶものだろう…？」

「親は…いなくて…今は妖怪の女の子と二人で暮らしてますから。」

「…俺たちと同じということか。」

思わず鈴宗がため息を吐く。

鈴宗も少女と同じ歳のころにはもう両親を亡くしていた、そしてそれが縁で友人になったのが妻の花音と悪友のツツジである。

少しばかり奇妙な縁を感じないこともなかったが、鈴宗としてはそんなものに付き合う気にはなれなかった。

しかし、目の前の少女は考えてみれば一度も会ったことのない孫と同年齢くらいだろうか。

ツツジから孫の話聞いたせいとか、そこでほんの少しだけ迷いが生じた。

迷いが生じたということは、相手に隙を与えることに他ならない。

「私のクラス…メイド喫茶をするんですけど、見に来てくれる人がいないと寂しいです。」

「め…めいど喫茶…か…。」

「退魔師の仕事のせいで友達もいなくて、一緒に住んでる妖怪の子が一人だけ来てくれるつて言ってくれましたけど…一人だけですよ。」



「お前…なあ…。」

「師匠が来てくれたら嬉しいんですけどやっぱりダメですよね…そうですね…。」

鈴宗はまた一つ溜息をついた。

全てが演技というわけではないだろうが、明らかに迷いが生じた鈴宗の甘さにつけこもうとしている。

わざとらしく俯いて言葉をこぼしながらちらちらと向けられる少女の視線に、思わず鈴宗は目を逸らした。

こうなったら負けたも同然である。

「…何日だ？」

「…師匠!!」

「気が向いたら行く、学校の名前と日程を教えろ。」

帝京歴784年10月上旬。

下旬に控えた文化祭の準備に忙しく人々が動く放課後、鈴音はいつも通り生徒会室を訪れた。

生徒会室には普段通りヒナと久保寺がおり、後は数名の生徒会役員が各々の仕事をしている。

ヒナはパソコンの前で各クラスや部活から送られてくる予算追加に対する要望に対しいくつかの案をまとめてデータを作っており、久保寺は出し物や屋台に対して風紀的に問題がないかチェックしている。

「失礼します。」

鈴音が生徒会室に入ってあいさつするとヒナと久保寺はもちろん、数名の役員たちも小さく声を掛ける。

それくらいにはあるが、鈴音は役員たちから信頼されるようになっていた。

「やあ鈴音くん、毎日ご苦労様だね。おかげで私もヒナも助かっているよ。」

「はい、久保寺さんが言う通り本当助かっています。」

朗らかに笑みを浮かべながらヒナが言った。

まだ顔色が良いとは言い切れないが、それでも意識してみなければ分からない程度だ。

鈴音も少しではあるが力になれていることを実感し、安心する。

「そもそもは花鈴の代わりですから…。」

「はあ…そうだったね、そして君の妹の花鈴くんなんだが——」

鈴音が妹である花鈴の名を口にするのと、不意に久保寺が小さく肩を落とした。

それと同時に久保寺の携帯機器から着信音が鳴り響く。

久保寺は相手の名前を確認するとため息をつき、鈴音に自身の携帯機器の画面を見せた。

そこに映し出された文字は“鹿角 花鈴”の四文字。

「…鈴音くん、一度出てみてくれないか？」

「わ、私ですか…？」

困惑しながらも鈴音は携帯機器を受け取って通話に出る。

すると鈴音がもしもという間もなく、大きな花鈴の声が携帯機器から鳴り響いた。

「もしも——」

『おいコラア!!!久保寺あ!!!!あんた?うちのメイド喫茶が風紀に反して  
るって…どこが悪いってんのよ!!!』

思わず鈴音は携帯機器から耳を離れた。

それほどの怒声であり、耳を離してなお声がしつかりと聞き取れる。

「あ、おい花り——」

『ごちとら苦渋の決断でフレンチメイドの衣装仕入れたつてのにスカートが短いっただどういこう』とよ!!!ギリギリ校則に引つかからない程度の丈でしようがああああ!!!』  
『花鈴!!!私だ!!!落ちてけ!!!』  
!!!

思わず鈴音が声を荒げるとぴたりと花鈴の声が止んだ。

『え…あ…す、すーちゃん!?!』

「はあ…落ち着きなさい花鈴、そうでないと風紀委員長も話ができな  
いだろう?」

『…うん、わかった…』

「うん、いい子だな花鈴は。」

とてもいい子とは思えない叫び声を上げていた妹に対し、甘い対応をする鈴音に生徒会室にいた全員がなんともいえない苦笑いを浮かべる。

そして鈴音が久保寺に携帯機器を返すと、ようやく落ち着いた声で花鈴が会話を始めた。

『…で、久保寺、うちのメイド喫茶の衣装がダメってどういうこと?』

「ああ…君の言う通りスカート丈はギリギリ校則以内だ、私も君を敵に回すと面倒だから許可したいんだが…生徒会の方に見過ぎせない相談が来てね。」

『はあ?』

「なんでも、君のクラスで無理やりスカート丈が短いメイド服を着せられそうになっているということだね…最も君はロングスカートの衣装も用意すると聞いていたから、私も不思議に思ったんだが。」

『ああ、そういうことね…分かった、それはこっちでどうにかすつから後は——』

「ちよつと待つてください。」

電話の内容を傍で聞いていた鈴音が会話に割って入る。

「生徒会の相談事なんですよね、ならまず私が出向きます。」

『…なんか嫌な予感がするんだけど、すーちゃんが何か言ってる?』

電話の向こうで鈴音の声は聞き取れないが、なんとなく姉の気配を察した花鈴が不安そうな声を出す。

久保寺はそんな二人を見て笑いを堪えながら花鈴の問いに答えた。「くくく…喜べ、君の大好きなお姉さんが相談の解決に行ってくれるそうだ。」

『は!?うそでしょ!?ちよ、止めて久保寺——』

規模寺は無慈悲に電話を切ると、鈴音に一通の手紙を差し出した。古風にもその相談事は紙の手紙で届いたらしく、内容を見てみると先ほど久保寺が話していたあらかた同じであった。

花鈴のクラスでメイドとして働くことになったが、短いスカートのメイド服しか着させてもらえなくなったのでどうにかして欲しい。

そんな内容だが、鈴音は首を傾げた。

以前メイドのスカートは長い方がよいと言っていた花鈴が、短いスカートを無理やり着せるとは思えなかった。

それに”着させてもらえなくなった”ということは何かしらの事情がありそうだ。

鈴音が首を傾げていると、久保寺が同意するようにうなずいた。

「なにかしら事情がありそうだからね、できれば事情を聞いてきてもらえると風紀委員長としてもありがたいんだ、君が行ってくれると助かる。」

「はい、では、行ってきます。」

そう言って手にしている手紙の差出人を確認する。

「名前は西野空…か。」

「失礼します。」

「うう、すーちゃんマジで来たんだ…。」

花鈴のクラスまでやって来た鈴音を、花鈴が苦い顔で出迎えた。

「仕事だからな、それで西野さんというのはどの子なんだ？」

「あれだよ、あれ。」

ぐつと親指で背後を花鈴が指さす、その先には椅子にビニールひもで無理やり縛り付けられた同級生がいた。

セミロングの黒髪をぱつぱんに切りそろえた、中肉中背の可愛らしい女の子である。

おそらく彼女が相談主の西野空だろう。

「は、話してください鹿角さん、逃げませんから！」

「ああん？私がないことこで好き勝手話されちゃたまんないし、こつから逃がす訳ないじゃん。」

「そんなあ…。」

「ま、まあまあ花鈴…それで、何があつたんだ？」

怒り心頭な様子の花鈴をなだめながら、鈴音は西野の前に立った。

「どうも…生徒会から来ました、花鈴の姉の鈴音です。」

「あ、どうも…相談を送らせていただいた西野です…よろしくお願いします。」

そう言ってお辞儀しようとした途端、縛られているため椅子ががたと揺れる。

さらに反動で椅子が後ろに傾き、あろうことかそのまま後ろに倒れていきそうになる。

「きゃあ!？」

「危な…ッ!!」

咄嗟に鈴音が椅子を抑えたため事なきを得たが、このまま縛られた状態で転倒していたら下手すれば怪我をしていた。

鈴音と西野は二人してほっとしながら椅子を直すと、その様子を見て花鈴が呆れたように大きなため息をつく。

「はあ…すーちゃん、今回の原因はこれなんだよ、このドジやらかすところ。」

「…ドジがメイド服のスカートとどう関係あるんだ？」

花鈴の言葉に困惑しながら鈴音が問うと、目の前にいる西野が縛ら

れながらがつくりとうなだれる。

「すーちゃん、まあ、こんな感じのできごとがあつたのよ。」

『鹿角さん！私メイドやりたいです！お世話になつてる人が見に来てくれることになつて！』

『メイド服が二種類あるんですか…は、恥ずかしいので私は長いスカートの方でお願いします…。』

『ど、どうですかメイド服、似合ってますか？えへへ——きやあ！スカートが足に——むぎや！』

『も、もう裾を踏んで転んだりしませんから、足元に気を付けて…ひやあ！スカートが引つかかつて——』

『み、短いスカートなんて無理ですよ…恥ずかしいし…破ったスカートの分は弁償しますからあ…。』

『メイドやめるか短い方着るかの二択!?そ、それはどうかご勘弁を…。』

「…つてな感じだよ、おかげで参考に私が買ってきたメイド服、スカートびりっびりだよ。」

「そうか…それで生徒会に相談を送つたと。」

「うう…その通りです、藁にも縋る思いで…それがまさか風紀委員長さんの目に留まるなんて。」

「マジでどう責任とつてくれんのさ、あんただけこのびりびりのスカートで接客させてもいいんだけど?」

相変わらず椅子に縛り付けられたままの西野が怯えた表情を見せる。

またしても鈴音は花鈴のことをなだめながら、西野の相談について考え始めた。

「うーむ…しかし、西野さん、気の毒ですがあなたに短い方のメイド服を着てもらうしかない気がします。」

「そんなあ！なんでですか!？」

「まず貴女がドジを克服したとして、それが事実でも花鈴は納得しないでしょう、きつと長いスカートを履かせてもらえませんか。」

「た、たしかに…。」

「だとすると、貴女自身が変わるしかない…短いスカートのメイド服を着ても大丈夫な様になるしかないんです。」

「でもそんなのどうすればいいんですかあ!？」

「…荒療治ですが簡単な方法がありますよ。」

西野と会話しながら、間に入りそうな花鈴を撫でておとなしくさせつつ鈴音は一つの方法を考える。

「簡単な…方法？」

「はい、西野さん——」

「慣れましょう。」

鈴音が西野と対面してからわずか30分後。

鈴音はメイド服姿の西野を引き連れて秋奈町の商店街へやって来ていた。

「本当にこの格好で商店街を歩くんですか鈴音さあん…。」  
「当然です、ここを歩くことに慣れれば人目も気にならなくなるでしょう。」

懇願するような目を向ける西野に対し鈴音はそう言い切った。

鈴音の作戦は言葉通り人目に慣れるため、メイド服姿で商店街を歩こうというものであった。

西野はスカート丈をしきりに気にしながら恥ずかしそうに周囲を見ているが、そのスカートは別段短すぎるものでもない。

膝こぞうは丸見えだが、スカートの裾に可愛らしいフリルが盛られていることで太ももの露出は少ない。

ふんわりと広がる構造になっているせいで激しく動けばスカートの中身が露になってしまいかもしれないが、よほど激しく動かなければ問題ないだろう。

少なくとも普通に立つて歩く程度なら確実に問題はない。

校則に違反しない程度の長さだが、ひらひらと微かに上下するスカートの裾に心くすぐられる人も多いかもしれない。

流石は花鈴のチョイスだと鈴音は思う。

「恥ずかしいかもしれませんが…せっかく似合ってるんですから、頑張りましょう。」

「に、似合ってますかこの衣装が…。」

鈴音が思わず口にした言葉だったが、その言葉に西野は頬に手を当てて俯く。

鈴音はそれを見て慌てて自分の言葉を撤回、いや、言いなおそうとした。

たしかに彼女自身が恥ずかしいと思っている服が似合っていると言われても複雑だろう。

俯いてしまうのも無理はないと思ったからだが――

「えへへえ…似合ってるんだあ…最近袴ばかり着てるけど可愛い服も着てみよっかなあ…んふふ。」

「…ああ、はい…いいんじゃないでしょうか…。」

よく見れば西野は鈴音の言葉に滅茶苦茶喜んでいた。

西野は中肉中背だがスポーティで綺麗な身体をしており、フリルがたっぷりのメイド服も普通に着ているだけなのに綺麗に着こなしているように見える。

セミロングの黒髪も癖がなく、顔立ちも小動物らしい愛らしいものなのでお世辞抜きで似合っていた。

この分なら思ったより慣れるのも早そうだと鈴音は若干呆れながら思う。

「じゃあ私は後ろで見えますから西野さんは歩いてみて――む？」



鈴音はそう言ったとき、不意に風の流れを感じた。

風が吹くくらい別になんでもないことだ、しかし、鈴音の勘が何かを告げた。

この風の流れ方を鈴音は知っていた、この風は――

「カマイタチ…」

鈴音は思わずそう呟き、咄嗟に身構えていた。

この風の流れは間違いなくかつて妖怪カマイタチと対峙した時のものと同じであった。

「え、鈴音さん何を言ってる――きゃあッ!!」

西野が鈴音の呟きに顔を上げると、急な突風が下から上へと吹き上げて来た。

これはただの風だ。

風を操り放たれる真空の刃ではなく、その証拠に鈴音の制服が大きくはためいたが傷は一切ない

下から吹き上げる風、砂塵で目を潰す気だったか――？

油断せずにスカートの上の腰に差している大通しに鈴音が手を伸ばす。

その時”二人”の耳に声が響いた。

『きひひーもらったよ！メイドの姉ちゃんの水色!!』

やんちゃな子供のような声色だった。

まったく敵意を感じないその声に鈴音が顔の表情を緩め、周囲を見渡すと一匹の小動物が商店街へと走って行く姿が見えた。

おそらくはカマイタチだ。

以前、八咫鳥の仕事で出会った普通のカマイタチと遠目から見ても姿が一致している。

かつて人を傷つけたいたずらを繰り返した報いに大量に狩られ、今は人を傷つけないいたずらを行っていると聞いたが、今の風がいたずらなのだろうか。

しかし”水色”とは？

鈴音がカマイタチの言葉の意味が分からず顎に手を当てて考える、

その時だった――

「ふふ…ふふふふふふ…」

どこからともなく――ではなく鈴音は背後から強烈な敵意をほらんだ笑い声と、妖力が満ちていく波動を感じて振り返った。

「え…あの…西野さん…?」

「あのイタチ野郎お…私をあんな目に遭わせたうえに今度は乙女の秘密を…許せません…許せませんよお…。」

西野の目が完全に据わっていた。

西野は怒りに満ちた笑みを浮かべながら拳を強く握りしめる。

その頭からはメイド服のフリルカチューシャを押しつける様にイタチのような耳が生えていた。

「すみません鈴音さん…急用を思い出したので失礼させていただきます!!!」

「ちよっと、待って――」

西野はブオン!と握りしめた拳から光の刃、霊剣を発現させると、鈴音が止める間もなくカマイタチが逃げていった商店街へ向かって全力で駆け出していた。

その背を咄嗟に鈴音が追いかけたとき、鈴音は先ほどのカマイタチの言葉を理解した。

西野の着ているメイド服のスカートは緩く広がる形になっている、普通に動く程度には問題ない、しかし激しく動いてしまうとその構造のせいで裾がめくれやすく――

「そういうことか…水色!!」

カマイタチの人を傷つけないはずら、それは”スカートめくり”。

走ることで大きく上下にはためくスカートを目にした鈴音は思わず声に出していた。

## 42話 追走

「このおおおおお!!!待ちなさいイタチ野郎おおおおお!!!」

『うつるさいなあ、待っていいなら逃げないっての!!』

商店街の物陰の隙間を縫うように駆け抜けるカマイタチを西野が全力で追いかける。

平日の夕方の商店街はそこそこの人通りがあり、少なくとも全力疾走している場所ではない。

鈴音はこのままだと西野のドジ気質も相まって大変なことになると思い、懸命にその後を追う。

そして案の定、商店街を見渡せばいくつか嫌な予感がする人影がいくつも見えた。

「ふふん、どうよ留美子!まだ10月なのに原稿の下描き半分も終わらせたわ!」

「油断大敵、ここでトラブルに巻き込まれるのがあまてるちゃんだから。」

「そんな漫画の主人公じゃないんだから。」

あれは…なにか紙の束を大事そうに抱えている女子大生!

その向こうには――

「つたく…商店街の爺さん共、暇だと思ってコーヒー出前しろなんて言いやがって…まあ暇だけだよ。」

お盆にステンレスらしきポットとカップを乗せて歩く黒猫のマスター!

そしてさらに――

「ねえねえお母さん!抹茶味一口ちよーだい!」

「ふふ、いいわよ、その代わり秋子のバナナも一口ちようだいね。」

仲睦まじくソフトクリームを食べ歩く母娘がいる!

西野がぶつかりでもしたら大惨事になりそうな人々だ。

嫌な予感がする、そう思った鈴音の勘は的中した。

「ツ！あまてるちゃん危ない。」

「ちよ、なにすんの留美子!？」

「待てええええええええええ!!！」

まず怒りで周りが見えていない西野が紙を抱えた女子大生に危うくぶつかりそうになる。

後ろにいた友人が咄嗟に肩を引いて避けたが、大事そうに抱えていた紙が宙に舞い――

「おお…水色…ってああ!?!私の原稿があ!!！」

「くうツ、間に合え…!！」

どうにか原稿が宙に舞っている間に駆け付けた鈴音が、地面に滑りこみながら原稿が落ちて汚れる前に全てキャッチする。

そして呆気にとられたように目を丸くしている女子大生にキャッチした原稿の束を渡す。

「すみません…お怪我は？」

「う、うん、私は大丈夫だけど…。」

「良かった…では失礼します。」

鈴音は女子大生の答えに安心すると、間が開いてしまった西野の後ろを再び追いかけるために駆け出した。

「…ねえ留美子、メイドと女子高生のドタバタコメディネタが思い浮かんだんだけど。」

「あまてるちゃん…だめ、絶対やめた方がいい、締め切りは待ってくれない。」

「コピー本にすれば間に合うわきつと!さつそくかえってネームしなきゃ!!！」

なにやら背後で威勢の良い声が聞こえるが、鈴音はもうそんなものに構っていられなかった。

何故なら西野が黒猫のマスターの近くまでもう迫っていたからだ。

しかも運悪くカマイタチがゆっくり歩くマスターの足元をするすると潜り抜けていく。

「おおツ?なんだ今のちっこい生きもんは。」

「このおおお!!いい加減観念しなさいいいいい!!！」

!!!!!!

「えッ——うわあ?!」

急に現れた謎のメイドに驚きながらも、マスターはその場から飛び退いて西野を避ける。

しかしその手にあつたお盆からはポットとカップが大きく飛び出して宙を舞った。

「あく、やつちまッ…つて!? えっ、君!? たしか鈴音ちゃん!」

「…どうも、マスターさん。」

鈴音はカップとポットを先ほどの紙と同じようにキャッチした。

しかしポットは空中を舞う中で蓋が外れ、中身を盛大にぶちまけていた——キャッチした鈴音に向つて頭から。

「すみません、ごぼしたコーヒー代と説教は今度お店に行ったときにお願いします。」

「いやそれよりも鈴音ちゃん、君は大丈夫なのか!」

「鍛えてますから、失礼します。」

それ理由にならないから…とマスターは鈴音から空になったポットとカップを受け取りながら小さくツツコミを入れ、西野を追いかける鈴音を見送った。

鈴音は自分の身体から放たれる強烈なコーヒーの香りに顔をしかめながらも走る。

次はあの母娘だ。

よりもよつて母娘そろつて美人なうえ、スカートを履いているせいでカマイタチが吸い込まれるように母娘二人に向つていく。

もちろん、カマイタチを追っている西野も二人に向つて走つていった。

『うつひよお! あれはめくりたくなくなるスカートだあ!!』

『させませえええん!!!』

『くそおお! しつけえなあ!!』

西野が地面を走るカマイタチに靈剣を投げつけた。

ガキン! と地面に靈剣が突き刺さり、持ち主の手から離れたことによつて宙へと消えていく。

カマイタチは流石のすばしっこさでそれを避けるものの、タガが外

れているせいかな本気で自分を殺しに来ている西野に肝を冷やして動きを止めてしまう。

『ひい!?まじで殺す気じゃねえかよう!!?』

「動くなあああああ!!」

動きを止めたカマイタチに西野が飛び掛かる。

しかしカマイタチは寸でのところで我に返り、西野の手に掴まる寸前にその場から飛び退き、逃げていく。

『あぶねえ!!』

「くう!まだまだ——あつ、とツ、トオつ!」

すぐさま後を追おうとする西野だが、何かにつまずいたのか大きく体勢をくずしてしまう。

その足元には先ほど西野が霊剣を投げつけたせいで地面にできてしまった小さな隙間があった。

西野の靴のつま先は、綺麗にその隙間へと引っかかっていた。

「あわ、あわわわわ!!むぎゃッ!!」

どうにかしてバランスを取ろうとするものの、それも虚しく西野は地面へと倒れていく。

しかも勢いがついていたせいそのまま地面を転がり、母娘の足元に転がり込むように倒れこんだ。

「お母さん!危ない!」

「おっとお!なにごとかしら。」

ぴよん、と母娘二人が道を開けるようにその場から退いたことで西野が二人を巻き込むことはなかったが、一歩間違えたら三人そろつてもみくちやになって倒れているところだ。

地面に転がる西野を娘が怒り心頭といった感じで覗き込み、母親は心配そうな目で眺めている。

「あんたねえ!いきなりどーしたのよ!危ないじゃない!」

「いたたたた…って…ああ!すすす、すみません!!ごめんなさい!!」

「まあまあ秋子、落ち着いて。あなたは大丈夫なのメイドさん?」

「は、はい、私は大丈夫です…本当にごめんなさい!」

盛大に転んだことで幾分か頭の冷えた西野が今の状況をようやく

理解し、叱られた犬の様にうなだれながら必死に母娘二人に謝る。

「まったくもお、せっかくお母さんと二人でアイス食べてたの…に…あれ、私のバニラアイスがない!!?」

「あらら私の抹茶も、さつきこのメイドさんを避けたときに飛んでちやつたのかな。」

二人が手にしていたソフトクリームがカップの部分だけを残して綺麗になくなっていった。

どこにいったのか、と三人が思わず辺りを見回したとき、背後から声がかかった。

「すみません、お二人のアイスは弁償しますので…許していただけないでしょうか。」

「あつ鈴音さん!?着いてきてくれて…たん…で…すか…。」

その声の主は鈴音だ。

西野は聞き覚えのある声にサツと振り向いてその姿を見ると、一気に顔色が青白く変化して血の気が引いていく。

鈴音の頭部からはまるで鬼の角の様に突起が二本——カップから離れたソフトクリームが頭にのつていた。

しかもセーラー服はコーヒーにまみれて茶色く変色し、スカートは地面に滑り込んだせいで汚れ放題である。

これには西野だけでなく、母娘二人も何があつたのかと目を丸くしていた。

「あ…あ…あの…鈴音さん…。」

「気にしてませんから、早く代わりのアイスを買ってきてください。」

「えっ…えつと…。」

「はやく」

「はい!!行ってまいります!!!」

「まったく、昨日は大変だった…。」

翌日の放課後、生徒会室への道を歩きながら鈴音は溜息をついていた。

自分のアイデアがもとはいえまさか商店街でちよつとした妖怪騒ぎに出くわすとは思わなかった。

あの後には二人で母娘に謝り倒し、その後はお互い家に帰ることになった。

幸いにもあの母娘は鈴音の姿を見て、アイスはいいから早く帰ってシャワーを浴びた方がよいと優しく対応してくれた。

鈴音は昨日のことを思い出すだけでコーヒールと甘いアイスの匂いが混ざり合った独特の香りが漂ってくる気がする。

やや重い気分で歩いていると、不意に声をかけられた。

「あ、あの！鈴音さん！昨日はすみませんでした！」

「ん？ああ…西野さんですか…もういいですよ、発端は私の慣れろつてアイデアが元でしたし。」

声の主は肩をすぼめて申し訳なさそうにしている西野だった。

「でも昨日のおかげで少しあのメイド服に慣れた気がします！」

「それなら私としても良かったです。」

「はい！だから今から生徒会に悩みは解決したとお伝えしに行くところだったんです！」

先ほどの表情から一転、朗らかな笑みを浮かべながら西野は言う。

鈴音としてもいつまでも暗い表情をされると気分が良くなかったので、この切り替わりの早い性格は不快ではなかった。

そのまま二人並んで生徒会室への道を進む。

鈴音は隣で歩く西野の頭をちらりと見て、そこに獣の耳のようなものがないかたしかめる。

今、そこに耳はない。

たしかに昨日は頭上に獣の耳があり、あろうことかこの西野という



同級生は霊剣まで発現させて見せた。

そして妖怪カマイタチに対して異常といってよい程まで敵意をむき出しにし、昨日の騒動に繋がった。

はたして退魔師か、それとも妖怪か、念のため注意しておく必要がありそうだ。

「昨日家に帰ってメイド姿を見せたら同居してる子も可愛いって褒めてくれたんですよおへへえへえ…。」

「そ、そうですか。」

だらしなく顔を緩ませる西野から目を逸らしながら鈴音が頷く。

その表情を見ると彼女を注意しておこうと思った自分が馬鹿らしく感じてしまった。

とにかく、悩みを一応は一つ解決したのだから気分を切り替えようと鈴音は思った。

まさかこのような特殊な悩み相談が次も来るはずはない、そう自分に言い聞かせながら生徒会室のある廊下までたどり着いた時だった。

「…誰だ、あれは？」

生徒会室に見慣れない人影が一つあり、鈴音はまずその人影を見て驚いた。

生徒である、それは間違いない。

セーラー服に身を包んだその姿でこの学校にいるならばこの学校の生徒のはずだ、鈴音が驚いたのはその背丈だ。

190センチ、いや、200センチに近い長身であったからだ。

背丈というものは戦いにおいて重要な要素になり、その要素を喧嘩慣れしている鈴音が見誤ることはまずない。

その生徒に後ろから近寄っていくとなにやら小声で何かを呟いていた。

「ぽ…ぽぼ…失礼しますバンチョーさ——鹿角鈴音さんはいらっしやいますか…失礼します鹿角鈴音さんはいらっしやいますか…。」

「はあ…。」

鈴音は思わずため息をつく。

どうやらこの一目見ただけで普通ではない生徒は鈴音のことがお目当てらしい。

つまり、おそらくは悩み相談の相手ということだ。

よほど緊張しているのかうわ言の様に生徒会室に入る言葉の練習をしている女生徒に、鈴音が声を掛けた。

「私に何か用ですか？」

「ひいいッ!?すすすすすみません覗き見とかする気はなかったんですううう!!」

「いや、その…落ち着いてください——」

「すみませんすみませんごめんなさいいいいい!!!」

生徒会室前で大声を上げる女生徒をどうにかなだめようと鈴音が取り付く島がない。

困ったように鈴音が腕を組むと、隣にいた西野が同じように腕を組んで言った。

「まったく、こんなに声を荒げて…平常心が足りませんね!」

「貴女がそれを言いますか…。」

絶叫しながら商店街を駆け抜けた西野の思わぬ言葉に、鈴音は眉間に手をやりながらツツコミを入れた。

## 43話 演劇

「お見苦しいところを見せてごめんなさいい…私は演劇部の八村咲つて言います。」

「どうも、私が生徒会の悩み相談を引き受けてます、鹿角鈴音です。」  
鈴音は彼女が落ち着いたところでどうにか生徒会室に入ってもらい、ようやく八村という名前を聞くことができた。

彼女は驚く程高い背丈に反して気は小さいようで、大きい体を縮こませながら生徒会室の椅子に座っていた。

目元も気弱な性格に倣うようにタレ気味で、おっとりとした顔立ちをしており、髪はショートカットにしているが前髪だけは目元を覆い隠すように長い。

しかし演劇部とはどういうことだろうか、鈴音は演技をした経験は一切ない。

「それで、八村さんはどういったご用件で？」

「あ、あのお…私今度の文化祭の演劇で…主役のお、王子様を演じることになったんです…。」

「王子様？…ああ、男性の役を演じるということですか。」

「はい、それでえ——」

男性の役を演じるということは殺陣の悩みだろうか、と鈴音は思った。

演劇の殺陣にリアリティを出すために剣術や格闘技に通じる鈴音に相談に来たのだろう、そう考えたのだが八村の答えは予想外のものだった。

「バンチョ——鈴音さんに男らしさを教えていただきたいんです！」

「そういうことな………は？」

男らしさ？

八村の答えに鈴音は思わず言葉を詰まらせた。

「あの八村さん……。」

「はい?」

「私は女です。」

「はい。」

「……いやその、だから、私は女なんですが。」

鈴音は女だ。

多少、いや多分に、世に言う普通の女性とはかけ離れた日々を過ごしているが女性だ。

改めてそれを確認するように八村に問うが、八村はそれがなにか?とでも言いたげに表情を変えない。

「なら男子に聞いてください、以上で相談は終わりです。」

「えええええ!? そんなあ酷いですよお!!」

「酷いのはどちらですか: 私は女です、男らしさがどうだの言われてもわかりません。」

「でもでもでも、鈴音さんはこの学校のバンチョーって聞きました!バンチョーって一番喧嘩が強くて男らしいんじゃないんですかあ!?!」

「ちがいます。そもそも周りが勝手に話してるだけで私は番長じゃありません。」

なにやら勘違いしているらしき八村に鈴音がきつぱりと言い放つ。

これで諦めるかと思いきや、なんと八村は文字通り鈴音に泣きついて来た。

「お願いですううううう! 私女の子一家で育ったから男の子とか苦手なんですううう!! 貴女だけが頼りなんですよおお!!」

「や、やめてください——ぬう!?!」

鈴音の胴体に思い切り抱きついて逃さない姿勢を見せる八村であったが、その力が予想以上に強い。

まるでプレス機のように思い切り鈴音の身体を締め付けており、普通の人間ならこの力に耐えきれず気絶してしまうのではないかとさえ

思えた。

ぐぎゅううううう、と強烈な力で大きな八村の身体に飲み込まれそうになる感覚に、思わず鈴音の顔に笑みが浮かぶ。

上等だ。

胴に巻き付いた八村の両腕を鈴音の両手が掴む、そして渾身の力を籠めて八村の腕を引きはがしにかかった。

「え、え、ええ〜!？」

「何が”ええ?”ですか…こっちが困惑してるくらいなんですよ…?」

そう言いながら鈴音が口元を緩ませ、にい、と笑みを浮かべる。

それとほぼ同時に八村の腕が完全に鈴音の胴体から離れた。

八村は気弱な性格とは裏腹によほど自分の力には自信があったのか、呆気にとられた表情を浮かべて身体から力を抜き、その場へたりこんだ。

「…勘弁してください八村さん、貴女に怪我させたくないのです。」

八村の腕から手を離しながら鈴音が言った。

鈴音でさえ少しばかりてこずる程の力であった、下手をすれば怪我をさせてしまう。

鈴音はこれで八村も頭が冷えて諦めるかと思った、しかし――

「かっ……」

「…か?」

「かっこいい…!!」

「…嘘だろ。」

八村は頭が冷えるどころか、爛々と目を輝かせながら鈴音のことを見つめていた。

そしてその場からバツと勢い良く立ち上がり、今度は強引に鈴音の手を握ると思い切り顔を近づけて来た。

「やっぱり貴女がいいですう!これから劇の稽古をやるので私に何が足りないか見て欲しいんですよ!!」

「あ、あの…ですか…!」

「男らしさっていうのは私が間違っていましたあ!鈴音さんらしさです!バンチョー!貴女の見解が欲しいんですよ!!」

「…はあ…分かりました、あくまで私らしさ…という意見で良いならお手伝いしますよ。」

あまりの熱意にとうとう鈴音が根負けした。

それに”男らしさ”については答えられないが”鈴音らしさ”というならあくまで自分の意見として答えることができる。

しかし自分に何ができるだろうかと一抹の不安を抱きながら、鈴音は八村に連れられて演劇部の練習場所へと向かった。

演劇部が練習に使っていたのは、放課後に使われていない空き教室だった。

八村と鈴音が来た時にはもう部員が準備を始めている頃で、各々台本の確認や声出しの練習をしたり、複数人で打ち合わせをしている。

「では鈴音さん、私は準備がありますのでここで待っていてください。」

「分かりました、邪魔しないように待ってますよ。」

鈴音は八村の言葉に頷き、教室の隅まで邪魔にならぬように移動する。

文化祭の劇とはいえ、部員たちのやる気は見るだけで分かるほどに満ちていた。

ちらちらと部外者である鈴音のことを見ることはあれど、すぐに自分の作業へと戻っていく。

そんな中、一人だけ鈴音の元へ歩いてくる部員がいた。

黒縁眼鏡をかけた、小柄な女性部員だ。

八村とは対照的に目元が少し吊り上がった鋭い目つきをしており、遊ばせるように伸ばした髪を前髪だけ縛って纏めている。

その手には付箋だらけの劇の台本らしきものがあった。

軽く鈴音が彼女に会釈をすると、彼女は軽く手を上げてそれに答えた。

「ども、えーつと…鹿角さんだっけ、やっつんが呼んだ。」

「やっつん?—ああ、八村さんのことですか。はい、私が鹿角です。」  
やっつん、とは八村のあだ名のようなものであろう。

その通りだと女性部員は頷き、そしてどこか安心したようにほっと息を吐いた。

「いんやあ、やっつんの無茶に付き合わせて悪いね。私は台本の伊藤だよ。」

「伊藤さんですね、まあこれも相談役の仕事ですから…まさか男らしさを教えてくれと言われるなんて思いませんでした。」

「ほんとごめんねえ、やっつん、演技は上手いんだけど納得いかない大変なスイッチは入っからさくなんかラストに納得いかないって。」

「そうなんですか…簡単に劇の内容を教えてもらっても?」

「いいよお、帝都の首都じゃなくて東欧地方を舞台にしてるんだ。」

伊藤が語るあらすじはこうだ。

ある国の王子と隣国の姫が許嫁の関係にあつたが、王子が愛していたのは自分の従者の少女だった。

王子は許嫁との結婚式が近づく中、従者と添い遂げるべく、隣国との関係を良く思わない大臣と共謀し駆け落ち計画を企てる。

しかし計画実行の日、本当は王子自身を抹殺したかった大臣が裏切り、誰の助けも得られぬまま王子と従者は城を飛び出す。

最後は追い詰められた二人が心中するという悲しき結末を迎える話だった。

「…なるほど、分かりました、そして八村さんはこの最後に納得がいていないと?」

「本人は違うって言ってるけど、そうだろうね、どうせ役の王子に入り込みすぎてハッピーエンドにしたいとか思ってたんでしょ。」

伊藤はもとから鋭い目つきをさらに鋭くしながら吐き捨てる様にした。  
言った。

なるほど、台本担当からすれば自分の話を否定されたような気分

なるのだろうか。

そして八村もどうしてよいか分からず、藁にもすがる思いで鈴音に泣きついて来たのかもしれない。

しかし伊藤も言う通り二人の意見は食い違っている。

八村は”男らしさ”を教えて欲しい、つまり役になりきれないから納得がいかないと言い。

伊藤は役に入り込みすぎて台本を否定しているだけだと決めつけている。

「まあ、八村さんが納得できるまで私も付き合いますよ。」

「ふうくん、なんていうか鹿角さん、相当なお人よしだねえ。」

「別に、仕事ですから。」

意外そうな顔で伊藤が鈴音を覗き込み、鈴音が目を逸らす。

こういうときに愛想笑いの一つでも返せればよいのかもしれないが、残念ながら鈴音はこういうときには笑うことができなかった。

そうこうしているうちに八村の準備も終わり、練習が開始できるようになったらしい。

とてとてと大柄な体に似合わない小さな歩幅で八村が鈴音の方に向かってきた。

その顔には薄く劇用のメイクがされており、おっとりした目元にアイラインが引かれ、一気に力強さを感じさせるものになっていた。

普段は目元を覆い隠す前髪も自然な形で後ろに撫でつけられ、気弱な印象を覚える顔立ちが一変している。

思わずその技術に見入ってしまう鈴音であったが、八村はいつも通りおっとりとした笑みを浮かべていた。

「お待たせしましたあく、今から練習始めるので、見ててくださいいねー鈴音さん！」

「しっかりと見ておきますから、頑張ってください。」

小さく手を振って八村を送り出すと、さっそく練習が始まった。

練習しているのは物語のラストに近いシーン。

信頼していた大臣に裏切られ、城から逃げ出す決意をするシーンだ。



『王子、君がもう少し利口であれば好きになれたものを。』

『大臣!? 貴様あ!!!』

『感情の制御できない人間などゴミ同然なのだよ!!』

『そのゴミを利用した貴様が何を!!』

王子を演ずる八村が声を張り上げて演技を行う。

その姿は先ほどまでの八村とはまさしく別人の様だった。

素人目に見ても八村の演技は上手いことが分かる、普段は縮こまっ  
てみせていた高い身長をまんべんなく使い、身体でも感情を表現して  
いた。

そのまま大きなトラブルもなく練習は続き、台本担当の伊藤や他の  
部員も違和感を感じて止めるようなこともない。

練習だけあって時折細かな修正や指導は入るものの、八村に対して  
はそういったものはほぼなかった。

それほどまでに八村が演じる王子は違和感がなく、自然なものであ  
り、鈴音も八村が何故自分を頼ったのか分からないほどであった。

ただ台本担当の伊藤だけ、八村の一举一動全てに注視している。  
おそらく八村が感じている違和感の正体を必死に探ろうとしてい  
るのだろう。

しかし八村が演技に違和感を感じているような挙動、仕草、表情は  
見えず、そのまま練習が進んでいく。

そしてラストシーン。

『嗚呼、我が愛しの君…私と共に永遠を受け入れてくれるかい?』

『王子…私と永遠を誓ってくれるのですか!?!』

『そうだ、共に…永遠に…なろう。』

王子がそう言って従者を抱きしめると教室の電気が消され、スピー  
カーから何かが水に落下する音が響く。

これが舞台上であれば照明が消され、二人が落水して心中したよう  
に演出されるのだろう。

「むう…。」

そのラストシーンを見て鈴音は小さく首を傾げた。

最後の王子を演じる八村のセリフ、そこだけが少し歯切れが悪いよ

うに感じた。

素人の鈴音からしても意識していれば気づける違和感だ、演劇部の皆がそれを見逃すはずはない。

実際に鈴音の隣にいた伊藤はあからさまに顔をしかめて不機嫌そうな表情を浮かべている。

「たしかに、最後の演技だけおかしかったですね。」

「ね、分かるっしょ？ やつつんもバッドエンドが嫌なら言えばいいのに、そーじゃないそーじゃないって…チツ。」

「まあまあ…その、落ち着きましよう…。」

「別に落ち着いてるよ私は…。」

大きな舌打ちまでしておいてそれはないだろうと、鈴音は伊藤の言葉に少しばかり呆れたように眉をひそめた。

そうこうしているうちに演技を終えた八村がととと二人の元にやって来る。

大きな身体とは対照的な小動物のような動き、先ほどまで大きな仕事で身体全体を使って演技していた八村とは別人の様だった。

「どうでしたかあく鈴音さん！ 私の演技はあく？」

「やつつんラストが全然ダメ、鹿角さんも変だつてさ。」

「ええ〜！ イトーちゃん相変わらず厳しいなあ…。」

鈴音が答える間もなく伊藤が八村に答え、八村が大きく肩を落とすた。

「いや、その…素晴らしい演技でしたよ、本当に八村さんとは別人みたくいで。」

「ほんとにいい!? 嬉しいですう!!」

「だからこそ最後の演技に違和感がありました…素直に感想を言うところですよ。」

「はあく…やっぱりわかっちゃうんだあ…どうしよおイトーちゃんん!?」

「どうしよって…あんたがラストに納得いってないんでしよ!? やつつんが納得しなきゃどうしよもないし!!」

「違ふよ〜ラストはあれでいいと思うんだけど…うう〜ん…そのな

んだろう…セリフなのかなあ…違和感があつて…。」

歯切れの悪い言葉を並べる八村を見て伊藤のこめかみがぴくぴくと動く。

これはもう爆発すると見た鈴音がその間に割って入った。

「改めて話は分かりました、私もその違和感が分かる様に協力しますから、少し時間をください。」

「時間って…もう文化祭は迫つてんのよ…。」

「無理は承知です、ですが八村さんも無関係な私にすぎるくらいには本気でこの劇に向かい合っています、なら私はそれに応えたい。」

「…まあやつつんが本気なのは私も分かっているけど…あくももう！分かった、じゃあ鹿角さんにもできなかつたらやつつんは大人しく私の脚本を受け入れる！それでOK!？」

びしつと八村を指さして伊藤が言った。

その言葉に八村は大きく胸を弾ませ、鈴音も安心したようにほっと息をつく。

「やったあく！じゃあ頑張りましたよう鈴音さん！」

「はい、しかし頑張ると言っても何をすればいいか分かりませんが…。」

「鈴音さんはいつも通りの生活をしてください！それを見て私が勝手に演技の糧にしますから…！」

「分かりまし…え…ということはまさか…八村さんしばらく私の生活に同行するということですか…?」

「はいいその通りです!!お泊りセットはしつかり準備してきましたので！よろしくお願いしますう…!!」

「はあ…本気ですか…。」

まさかの展開に鈴音は思わず溜息をついた。

しかし八村の勢いは止まりそうもない、そう判断した鈴音は大人しく携帯機器を取り出し、八咫総合事務所の電話番号を入力する。

どうやらこんばんは一人分の食事が増えることになりそうだ。

思えば少々特殊ではあるが、鈴音にとっては初めての友人を家に招くという行為になる。

自分も変わったものだど鈴音は一人思いながら、電話口から聞こえるもう聞き馴染んだ家族の声に安心感を覚えていた。

「ただいま帰りました。」

「お、お邪魔しますう…。」

鈴音と八村が八咫総合事務のドアをくぐる。

花鈴はまだ文化祭の準備で忙しいらしく、まだ学校に残るとのこと。今日は一緒に下校することはなかった。

ドアを開けた途端、事務所からはそれはそれは香ばしい料理の匂いが漂ってきた。

どうやら蠋螂坂が鈴音の友人が来るということで相当気合を入れたらしく、まだ日が沈み切っていない時間だというのにテーブルの上には既にいくつか料理が並んでいた。

綺麗に刻まれたレタスにパプリカ、玉ねぎの上にマリネされたトマトを乗せた色とりどりのサラダ。

トーストされた小さなバケットの上にツナサラダが載せられたブルスケッタ。

この二つが大きな皿に綺麗に盛り付けられていた。

「す、すごいですう！お宿のご飯みたいじゃないですかあ〜！」

八村がキラキラした目で料理を見つめる。

鈴音もその気合の入りように少し驚いていると、キッチンの陰からスツと蠋螂坂が顔をのぞかせた。

「おかえり、鈴音…こんには…鈴音の友達。」

「ひゃッ!?こ、こ、こ、こんには！や、八村咲って言いますう。」

「蠋螂坂さん、わざわざすみません、気合入れて料理してもらったみたいで。」

「僕が作りたかっただけ…だから…八村は…嫌いなもの…ある?。」

「な、なななんでも食べますよ！人間の——じゃなくって、私お料理

大好きですから!!」

ぐつと拳を握って蠍螂坂の質問に答える八村。

その答えに小さくうなずいて蠍螂坂がキツチンに引つ込むと、背後から階段を上ってくる音が聞こえた。

「いや、鈴音ちゃんが友達呼ぶなんてびっくりだよね、おかげでゴミ捨て大変だったけど。」

「マジそれ、狂骨サン、酒瓶と缶溜めすぎ。」

「ほんつとそうよ、にやんでゴミ袋三つ分も溜め込むのよ!!」

「二人だつてタバコの吸い殻テキトーに袋にまとめてそのままだったじゃないか!!人のこと言えないもんね!!」

「どうやら狂骨、化け猫、ユリカの3人が慌ててゴミを処理してくれていたらしい。」

鈴音はその気遣いがありがたいような、普段からゴミは纏めておいてくれと言いたいような、複雑な気分だった。

「たっだいま…つてうわ!!君が鈴音ちゃんの友達!？」

「ど、どうもお八村と言います…今日はお世話になりますう。」

「うーん…まさかこんな子を連れて来るとは思わなかつたわねえ…。」

「鈴音の学校、どうなつてんのよ一体。」

「この中だと一番背が高い狂骨でさえ少し見上げる程の八村の身長だ。」

特に背の小さい化け猫など頭が胸元に届きそうもなく、二人が向かい合うといつそう八村の背の高さが際立つ。

しかし背が高いだけでそこまで言わなくてもよいと思うが。

「まあまあとにかく歓迎するよ八村ちゃん!鈴音ちゃんは今からトレーニングでしょ?その間は私たちが相手しておくからさ。」

「え、えつとお私はトレーニングにお付き合いですかあ鈴音さん?」

「いえ、別に私は同行しても構いませんが——」

「お嬢ちゃん、悪いこと言わないからやめときにやさい…。」

「鈴音のトレーニングとか付き合ったら死ぬから、マジで。」

「どんなトレーニングしてるんですかあ鈴音さん!？」

鈴音に密着するという目的でやって来た八村がトレーニングへの同行を求めるが、事務所のメンバーが引き留める。

鈴音としては問題ないのだが、客観的に見てそう判断されるなら事務所の皆が正しいのだろう。

「…そうですね、八村さんは事務所の皆さんとお話しててください、面白い方たちですから何か演技の参考になるかもしれません。」

事務所のメンバーは個性的な性格をしている、彼女たちとの会話がなにかしらのきっかけになるかもしれないと鈴音は判断した。

「わ…わかりました！ではトレーニング、頑張ってきてください！鈴音さん！」

「はい、では皆さん、八村さんをお願いします。」

2時間後、すっかり日が落ち街灯が光を灯す時間帯に鈴音は事務所に帰って来た。

普段の鈴音はより長い時間トレーニングをしているが、今日は八村のことを考え2時間で終わらせた。

しかしただ時間を短くしただけでなくいかに2時間で限界まで身体を追い込めるかを意識してのトレーニングを行った。

階段ダッシュに片足スクワットや片手懸垂など高負荷の自重トレーニングを重ね、筋肉を徹底的に疲労させた状態で鹿角流の型稽古を繰り返した。

良い刺激になったと鈴音は思う。

今までとにかく長い時間トレーニングをしていたが、少し考えを改めた方がよいかもれない。

そんなことを考えながら事務所の前に到着すると、そこにはようや

く学校から帰ったのであろう、制服姿の花鈴がいた。

花鈴は事務所の前で何やらげんなりした表情をしており、ドアに手を掛けることをためらっている様子だ。

「おかえり花鈴、どうしたんだ？」

「あー、ただいますーちゃん…いや、中が凄いいことになってさ…。」

「…どういことだ？」

「見てみれば分かるよ…てかあの妖怪は一体誰の友達なんだよ…。」

首を傾げる花鈴を見て鈴音は不思議に思いながらも事務所のドアを開ける。

その瞬間、むわつと事務所の中から強烈なアルコール臭が外へと流れ出て来た。

思わず鈴音が眉をひそめるが、事務所の中を見てその光景に目を丸くする。

「よおっし!!狂骨さん隠してた一升瓶開けちゃうよおくん!!」

「狂骨サあ〜ン?また経費からくすねて買ってんじゃねえかあそれえ?」

「違うもん!!ちゃんとお給料から買ったもん!!狂骨もう反省したもん!!」

ゴミを片付けたはずの事務所の床にはすでにおびただしい数の酒瓶が転がり、狂骨とユリカの二人が真っ赤な顔で大騒ぎしている。

テーブルには綺麗にたいらげられた大皿がいくつも並んでいるのに、キッチンでは螻蛄坂が片手でフライパンを振るいながらも片手で鍋の灰汁取りをしていた。

とにかく自分の料理を食べてもらえるのが嬉しくて仕方がないらしい。

「それで、お姉さん今フリーにやんだけどお…八村ちゃんはどうにやのよお〜?」

「はあ…化け猫さん、何をしてるんで…す…か?」

そしてソファのある方向からは化け猫の声が聞こえてくる。

「どうやらキャバクラの時のような悪い癖が出て、八村を口説いてるらしい。」

それは止めなければと鈴音がソファに目を向けると、思わず鈴音は声を失った。

「ええ〜どうしましょうかあ〜妖怪さんに口説かれるの初めてでえわかんないでしゅう〜。」

八村の声だ。

普段の間延びした声をさらに緩ませてはいたが八村の声だ。

その前に中身が半分ほどなくなったワインが一瓶置かれており、その手にはグラスがある。

飲んでいる、酒を。

しかし何よりも鈴音が驚いたのはその外見だ。

八村は下校してそのまま事務所まで来たために制服姿であったはずだが、何故か今はゆったりとした白いワンピースに身を包んでいた。

さらに肌の色も石灰を連想させる白色に変わり、血を連想させるワインを嗜む姿はまるで人とは思えなかった。

いや、これは最早――

「あゝ鈴音ちゃんおかえんにやさあゝい！」

「あ…はい…ただいま化け猫さん…あの…」

「いやあ鈴音ちゃんもやるじゃにやいの！まさか友達って妖怪連れて来るにやんてねえ!!」

「…え？」

化け猫の言葉に鈴音は思わずぽかんと口を開けてしまった。

困惑する鈴音が八村に視線を向けると、八村はグラスに残っていたワインを飲み干し、目元をとろんと緩ませながらにっこりと笑みを浮かべる。

「どもおもお〜鈴音さん改めましてえ！八尺様のお〜八村でえ〜す!!」

「……………」



「はあ…!?」

## 44話 悲劇

「つうまありい、私はあくもう地元がいやれえ！一人で人間の社会に飛び込んできたわけなんれすよお！」

「ああ…はい。」

八尺様、もとい八村がグラスからワインを煽りつつ大きな声で言い放つ。

鈴音はその隣でもそもそと夕飯を食べながら、八村の言葉に適当に相槌を打っていた。

この話を聞くのは今夜でもう三回目だった。

向かいのソファに座っている——もとい避難している花鈴は口への字に曲げながらその光景を見ていた。

八村はそんな二人をまったく意に介することなくグラスにさらにワインを注ぎ、話を続ける。

「地元みんなは八尺どころか！七尺もない！わらしを！馬鹿にするしいー！」

「はあ…。」

「らから人間の世界で頑張ってみようかと思ったらあ…今度はおつきいおつきいってえ…もう嫌なんれすよお!!」

たしかに八村は人間の女性だとしたら規格外の長身を誇るが、彼女が八尺様という妖怪の一人だとすると小さい部類になるのだろう。

八尺という長さを現代帝都で主流になっているメートルを使って表せば、おおよそ2.4メートル。

八村の身長は2メートルに届くかどうかといったところだ、頭一分以上小さいことになる。

「電車に乗れば頭はぶつけるしい…可愛い服はせくくんぶサイズがな  
いんれすよお!!分かりますかあ!!?鈴音しやん!!」

「分かっていますよ…さつき聞きましたから…。」

八村がバンバンと鈴音の背を叩く。

もし隣に座っていたのが鈴音でなければ叩かれた勢いでテーブル  
に頭をぶつけていたかもしれない。

鈴音でもてこずるほどの怪力は単純に身体が大きいからではなく、  
妖怪由来の身体の強さが原因だったようだ。

そうであれば人間であるはずの鈴音が自分の力を上回ったことに  
困惑していたのも納得である

もつとも、鈴音の身体は鬼の力を得た花鈴の血が少し入り混じって  
いるのみで、ほとんど人間の肉体と変わらないのであるが。

「…で、八村さん、大事なことを忘れてませんか?」

「ふえ?」

「…劇のこと、すっかり忘れてません?」

鈴音がそもそも彼女がここに来た理由について口にする。

すると八村は酒で血色がよくなっていた肌を見る見る間に青白く  
させ、グラスを持っていない手で頭を抱えた。

「ああ〜ツツ!!?楽しすぎて忘れてましたあ〜!!!」

「そんなことだろうと思いましたがよ…。」

「お酒が久しぶりに呑めたのが嬉しくてえ…。」

うう…と涙目になりながら八村がグラスに残っていたワインを飲  
みほした。

ちなみに彼女をここまで酔わせた悪い妖怪たちは酒が切れたと言  
い出し、買い出しに行っていた。

蠅螂坂も今夜の酒盛りでかなりの食材や作り置きのを料理を消耗し  
たらしく、それに同行している。

「つぶはあ!!?って言ってもおろおすればいいんれすかわらしはあ!!?」

「いや、それが分からないから二人で悩んでいるんじゃないですか  
…。」

「わらしも頑張りたいたいんですよお!?!特に今回の脚本はイトーちゃんれ

すからあ…あの子のためにも絶対良いのにしたいんれす!」

「伊藤さん…あの私と練習を見ていた方ですね?」

「そう!!あの子が人間からおつきー!おつきー!って言われるだけだった私を”君にいつか私の舞台に立って欲しい”って演劇部にスカウトしてくれたんれす!!」

これは今夜鈴音も初めて聞く話だった。

しかし再び自身の過去に関する話に戻ったせいも八村はまたしてもワインの瓶に手を伸ばし、あろうことかグラスに注ぐことなくそのまま口に運んだ。

「しよれから!演劇がしゆきに!なったんれしゆ!!普段は気の弱いダメな女れすける!劇なりやお姫様にも王子様にもなれる!!」

「はあ…つまり自分とは別の存在になれるから好きになつたと。」

「しよのとおりれす!!」

この酔った惨状をみてどこが気弱なのかと思うが、普段の八村は慣れない生徒会室に入ることには怯える程に気弱ではある。

しかしこの話は収穫であると鈴音は思った。

彼女が演じることを好む理由は劇に抱える違和感に繋がるかもしれないと感じたからだ。

すると二人をじつと傍観していただけであつた花鈴が何か考える様に腕を組む。

「ふうくん、まあ話聞いててほしいの事情は分かつたけどさ。」

「ふえ?」

「花鈴、何か考えが?」

「まあね、やっぱその八尺女、役にのめりこんでラストに納得いつてないと思うよ。」

花鈴がそう言い放つと、八村は酒とはまた別の理由で顔を赤くさせ、眉を吊り上げた。

「そんなことないですう!!イトーちゃんの脚本は間違つてなんかありません!!私の演技が悪いんですう!!」

「その演技が悪くなつてんのは脚本のせいじゃない、認めなさいよめんどくさい。」

「う…う…。」

花鈴の言葉に八村が大きく肩を落として俯く。

しかし何か意を決したようにゆっくりと顔を上げた。

「たしかに…王子を演じていてこの終わり方は違うと思ってました…。」

「八村さん…。」

「うう…でも私は別に…ハッピーエンドにしたいとなんか思っていないんです…これは本心なんです。」

「やっぱね、他人になれるのが好きだから役にのめりこんじやうタイプだよこの子。」

「ああ、そのことは脚本の伊藤さんも話していた、ただ八村さん自身がそのことを認めたくなかつたんだな…。」

それが花鈴の言葉と酒のせいであついに本心を認めたのだろう。

またしても八村が俯くが、花鈴はその姿に肩をすくめた。

「だったら答えは簡単じゃん、あんたは——王子はそこでどうするか考えればいいじゃない？」

「そんなの…分からないですよお…。」

「まあそうだろうねえ、でも案外あんたはその問いに答えられる人にとどり着いてるかもよ、八尺女。」

「だ、誰ですかそれは!？」

「はい、じゃあすーちゃん、答えてあげて。」

花鈴は八村から鈴音に視線を移し、そう言った。

鈴音は思わぬ言葉に首を傾げる。

「私が、答えを?。」

「ま、それは正直わかんないけどさ、ここで可能性があるとするればこの女自身が助けを求めたすーちゃんしかいないよ?。」

「たしかに…そうかもじゃないが…。」

「さあすーちゃん!目の前には何人いるかも分からない追手、後ろにいるのは守らなきゃいけない従者さん、絶対絶命の状況ですーちゃんが王子ならどうするの?。」

「そんなもの——」

花鈴が分かりやすく鈴音に答えに至る道筋を示してくれる。  
たしかにそうなれば、鈴音が答える道は一つしかなかった。

「戦うにきまっている。」

「へ…王子が、ですか？」

「私なら、ですよ八村さん。」

すう、と息を吸い、鈴音は答えの続きを話す。

「たしかに絶体絶命ですが、二人で生き残る可能性があるならそれしかない。」

「で、でもそんなの——」

「それでも私には諦めて道を閉ざす選択肢はありません、ならば戦います。」

当然とでも言うように鈴音は言い切った。

幾度も死に聞きに瀕し、戦ってきた鈴音が言った言葉だ。

ただの理想を語る言葉ではない、本当に絶望的な状況でも抗い、生き残った者の言葉である。

その言葉に、何かが目覚めたように八村が顔を輝かせた。

「うん…うん、うん!! そうだよ!! 王子は——私はある状況で諦めない!! そうだ! 私はある程度で愛する者との幸せを諦めない!!」

八村が立ち上がり、大仰に腕を開いて高らかに言葉を発する。

どうやら鈴音の答えは八村にとっては正解の道筋だったようだ。

「自らの身分も考えずに従者を愛し!! 政略結婚などどこ吹く風!! 自分の愛のためなら怪しい大臣にも手を貸す!! それが私だ!!!」

「え…?」

なにやら不穏な言葉に、思わず鈴音が眉をひそめる。

「そんな!! 私が!! 幸せを諦め!! 共に死ぬなどありえない!! ふははははは!! そうですよ!! これはイトーちゃんに脚本を変えてもらわねばあゝ!!!」

「いや、あの…八村さん…!」

「たっだいま〜! 八村ちゃんワイン買ってきた——なにになに!? なにして遊んでるの!? 私も混ぜてよお〜!」

八村が盛り上がったその時、買い出しに行ってきた他の皆が帰って

来た。

手には大量の酒瓶に箱で買われたビールの山。

普段ならこんな無駄使いはユリカが止めるのだが、そのユリカも酔ってしまった今、誰も止める者はいなかった。

さらなる惨状を予感させえるその光景に、鈴音と花鈴は溜息をつくしかなかった。

事務所でもどんちき騒ぎから三日後。

鈴音は放課後、八村によって演劇部に呼び出されていた。

あの後結局朝まで皆で飲んでいたらしいが、八村は夜中にも関わらず伊藤に自分の考えを連絡していた様子だった。

端から少し様子を見ていたが、八村の表情は明るかった。

それから先に眠った鈴音は翌朝、事務所の掃除と二日酔いに苦しむ皆の世話で四苦八苦させられたのだが…。

「どうも、こんにちは。」

「あ、どもども鹿角さん。うちの部活のためにいろいろありがとうね。」

練習に使われている空き教室の扉を潜ると、脚本の伊藤が真っ先に声をかけてきた。

教室を見渡すと八村は他の部員と打ち合わせらしく、鈴音に気づいても軽く会釈をするだけですぐに視線を戻した。

伊藤の表情は明るい。

言葉も柔らかく、気の強そうな目つきも三日前に張り詰めた雰囲気比べて和らいでいる。

代わりに目元には大きな隈が浮き出ていたが。

「ごめんね。やつつん、自分が言い出して脚本変えることになったからって張り切ってた。」





『お主はあの魔女にたぶらかされていたのだ…もう大丈夫、魔女の呪いは直に消え去る。』

『魔女?…何を?…父上?』

『もうあの魔女は火に炙って殺した、二度と王子の前には現れぬ。』

王の言葉に王子の目から光が消える。

魔女——王子をたぶらかしたという女——そう王が言う存在と言えば心当たりは一人しかない。

絶望する王子に対し、王は拳を振るって声を荒げる。

『あの従者め!やはり魔女であつたらしい!三日三晩拷問にかけてようやく白状しおつた!!』

『叩き!蹴り!焼き!潰し!ようやくだ!これでお主の罪は無いと皆に宣言できる!!』

『さあ王子よ!我が愛する息子よ!呪いは解けたと言つてくれ!!』

王の言葉を、王子は呆然と聞くしかなかった。

熱弁で猛り、狂つたような瞳のまま、王は王子の言葉を引き出そうとする。

王子はただ俯く。

俯き、言葉を発することもなく、ただただ王の言葉を聞くしかない。

抗つた果てに王子は、最も大切なものだけを失つた。

『はは…はははは!はははは!!』

王子が突如として笑い出した。

王が座する広い部屋、その部屋に反響するほど大きな声で。

『はい!父上!私は呪われていました!目が覚めました!』

『おお!やはりか!皆!!王子はこのとおり目が覚めた!!隣国の姫との婚姻は予定通り行うぞ!!』

王も王子と同じく盛大に声を上げて笑いだす。

王子の瞳が自身より濃い狂気に染まっているとも知らずに。

そして婚姻式の当日。

城は火に包まれていた。

あちこちから黒煙が上がり、幸せな声に包まれるはずだった式典会場は阿鼻叫喚に包まれた。

さらにどこからともなく現れた盗賊が城に侵入、血が飛び交い、炎と血で全てが赤く染まっっていく。

ただ王子だけがその光景を恍惚とした表情で眺め、静かに炎の中で佇んでいた。

『さようなら……この世界は私にとって残酷すぎた……。』

「どうでしたかあ〜！イトーちゃん私の演技は!？」

「いや最高だよ、必死に脚本練り直した甲斐があったってもんさ〜！」

「本当にそうですう〜イトーちゃんの脚本は最高だって私知ってますから〜！」

練習を終え、八村と伊藤は互いに抱きしめ合い、讚えあう。

他の部員たちも劇の出来栄えに好感触を得たらしく、各々が表情を明るくしながらもすぐさま演出や演技に関し話し合っていた。

かくして演劇部は一丸となり、来る文化祭に向けて新たな脚本と共に突き進むのであった。

鈴音はそんな皆を一步引いた位置からやりきれない気持ちで眺めていた。

己の答えを八村に——王子に示した結果、みんな死んでしまった。王も大臣も隣国の姫も、劇の登場人物とは言え、鈴音のせいだ。……。」

「私は一体……どんな気持ちでこの劇を見ればいいんだ……。」